F.L. 6-6-67

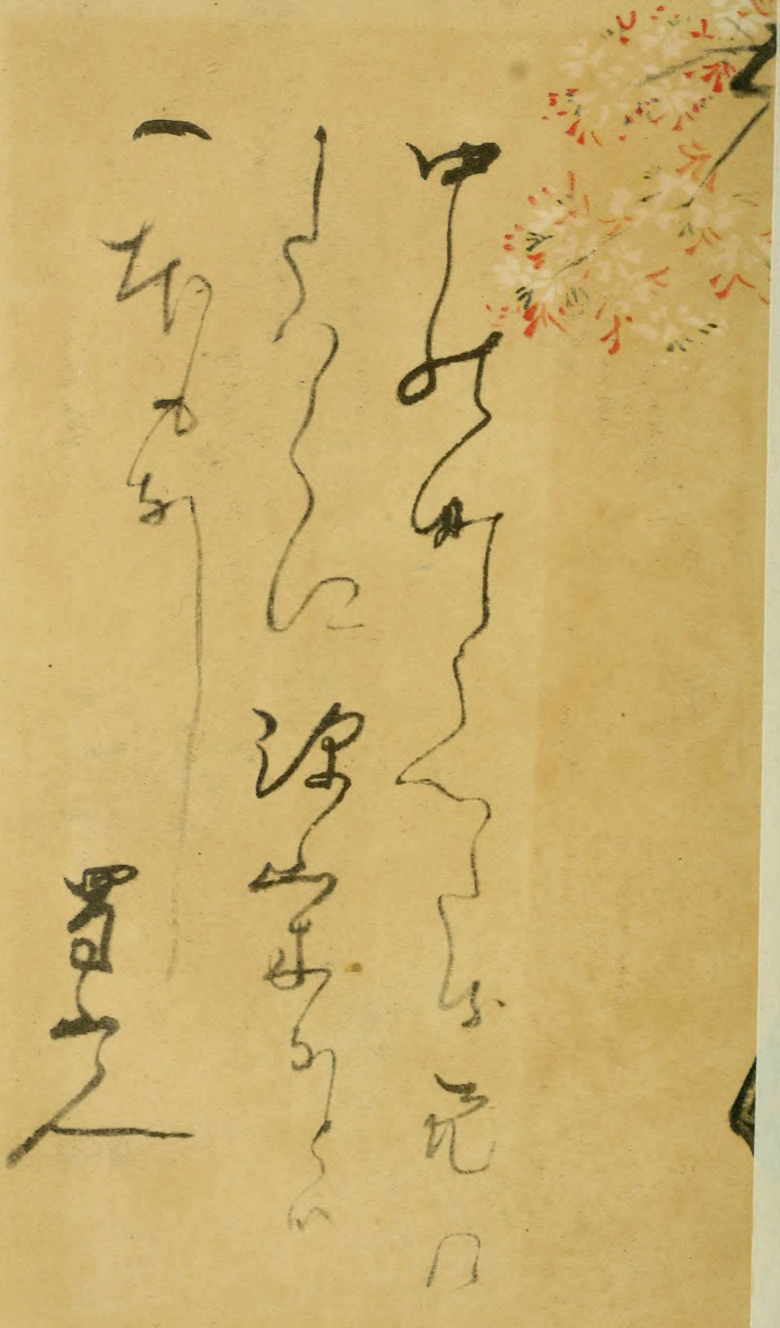
PL
777
.5
T3
v.4

Takagi, Kōji
Sharehon taikei

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



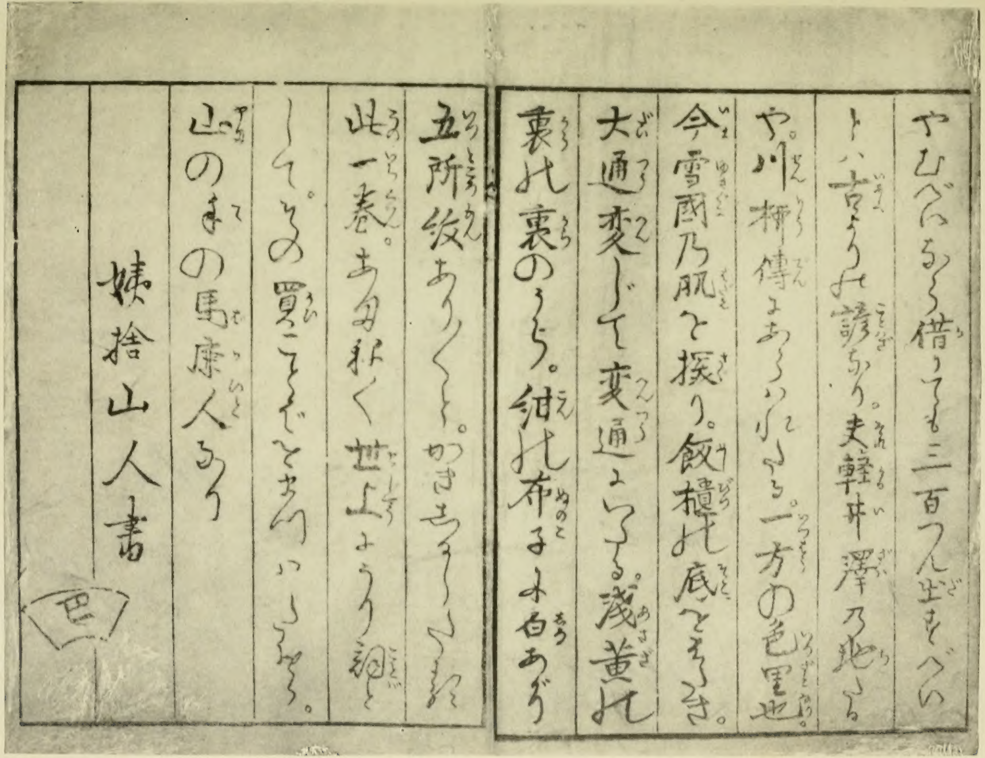
洒落本大系

第四巻

PL
777
.5
T3
V.4

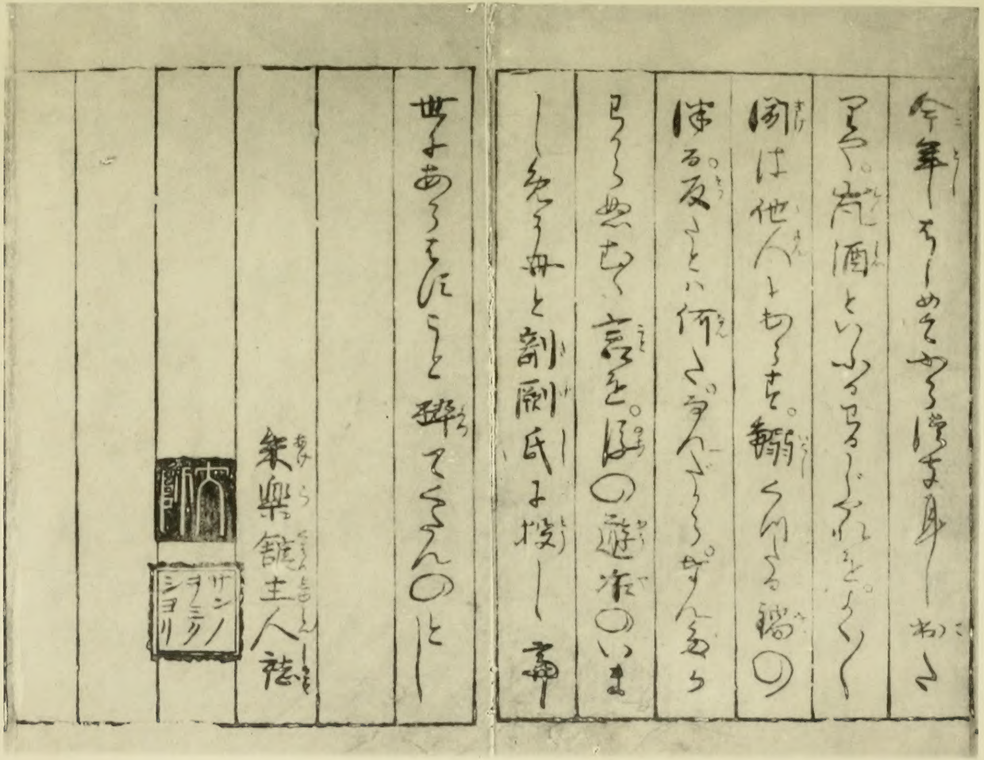
LIBRARY
SEP 2? 1966
UNIVERSITY OF TORONTO

1128118



やむべにあるら借りても三百づん出をべい
ト八古より諺あり。夫軽井澤乃地たる
や。川柳傳よあらはれる一方の色里也。
今雪國乃肌を探り。飯櫃れ底をさらき。
大通変じて変通となる。浅黄れ
裏れ裏のうら。紺れ布子ホ白あり
五所紋ありく。かきちらしてしれ
此一巻あらわく世上よう詞と
しての買こそぞとおれいるるぞ。
山のての馬鹿人なり
姨捨山人書
巴

（本版初）文序　話茶井輕通變



變通輕井茶話　序文（後摺本）

洒落本大系第四卷目次

	解題	本文
解題	一—八四	
大通俗一騎夜行	一	一
多荷論	三	七五
多佳餘宇辭	六	八九
玉菊燈籠辨	八	一一三
根柄異軒之傳	一〇	一三一
芳深交話	一四	一四七
風俗砂拂傳	一六	一六七
風流仙婦傳	一八	一八三

初葉南志……二一……二〇九
遊婦里會談……二四……二五七
金枕遊女相談……二六……二七九
きつねの藻……二九……三〇九
咲分論……三一……三三三
粋町甲閨……三四……三四五
世説新語茶……三六……三七三
大通多奈於路志……三九……四〇七
太平樂卷物……四二……四二一
驛舍三友……四五……四四五
變通輕井茶話……四八……四六七

通志選……………………………………五一……四九一
里靍風語……………………………………五四……五一五
舌講油通汚……………………………………五七……五二九
起原情語……………………………………六〇……五五一
傾城異見之規矩……………………………………六三……五六七
公大無多言……………………………………六六……五八五
眞女意題……………………………………六八……六〇九
當世繁榮通寳……………………………………七〇……六三三
通人枕言葉……………………………………七三……六五一
突當富之魂短……………………………………七五……六七五
にやんの事だ……………………………………七八……六九三

三都假名話……………七九………七〇七
無陀物語……………八一………七二一

目次終

解題

山崎麓

▲大通俗一騎夜行　原本　縦八寸 横五寸一分

志水燕十作　安永九年刊

本書は之を洒落本に納む可きか疑問の多い作品である。典型的の小本でなく美濃本則大本の體裁であり、内容も五卷に分たれ全く讀本に類似して居る。蓋當時讀本の怪異小説が全盛を極めた際であつたから、此流行を眞似たのであらう、現に仲間の朋誠堂喜三二に黄表紙風の讀本「古朽木」(安永九年)が同年に發表された有様なのである。されば本書を洒落本中に納めるのは多少躊躇されたのであるが、其構想に至つては全く變格的洒落本であつて、此種に屬するものに風來山人の「里鶴風語」田螺金魚の「多荷論」などがあり、本の體裁と云ひ立派に洒落本として認められて居るのであるから、茲に採錄したのである。

書名は本篇自序にある如く、作者の畫の師匠鳥山石燕に「百鬼夜行」と稱する異類物の繪本あるをもぢつたのである。「大通俗」は大通と俗物の義で、現代語の大なる通俗の意味ではない。作者志水燕十は、通稱鈴木庄之助、根津清水町に住む。御家人であつたらしい。志水燕十、志水つばくら、志水裡町齋、子津奈蒔野馬乎人等の號があり、臺閣西の隱士、鳳城北根津隱士などと稱して居る　志水は住所の清水町を採つたのであり、燕十は恐らく畫の師鳥山石燕の號に因んだのであらう、現に師石燕作「畫圖勢勇談」には彼が小引を綴つて居る位である、

彼は一面に狂歌師であり諸種の狂歌集に其名が見えて居る、隨つて當時の狂歌師の重なる者とは交際があつたらしく、現に歸橋作「愚人贅漢居續借金」（天明三年）には四方赤良（蜀山）朱樂菅江、雲樂齋、歸橋と共に深川遊びをする事が、描かれて居る、「作者部類」に據れば唐來三和と親交があつた由記してある。又同書に「しかるに此燕十は他事によりて罪を蒙りて終る處を知らず」とある。之は事實らしく洒落本に「山下珍作」（天明二年）「評判酒美選」（天明三年）、黃表紙に「噓多雁取帳」（天明三年）を發表した以後、全く文壇から影をひそめてしまつた。前出の「居續借金」から云つても未だ老年で病歿する年齡とは考へられない。

本篇は百鬼夜行のもぢりであるだけ、諸種の怪物が現はれ、或は半可通を諷し或は粹自慢を

罵ると云ふ筋であるが、彼の處女作だけ、八文字屋風の文章に教訓的意識が含まれて居り、序文に「空言なる昔語を彼是十種取集て、教訓の助にもやなりなんと世にあらはし侍りき」と云へる如く、實は、靜觀房好阿の教訓的滑稽本「當世下手談義」（寶暦二年）伊藤單朴の「錢湯新話」（寶暦四年）等のねらつた所を目的にしたものらしい、唯彼の生活が夫だけでは留められず、多量のナンセンスとエロチシズムとを含ましめたのであらう、其点は喜三二の「古朽木」も同じ傾向をたどつたのであるが、後者は黄表紙の方へ傾いた點に差異がある。

▲多　荷　論

原本　縦五寸一分　横三分七分

茶にし金魚作　安永九年刊

書名は流行語「大きにお世話、お茶でもあがれ」から採つたのであり、當時流行したお世話節の當込である。作者茶にし金魚は田螺金魚と同一人で、之も前の流行語から茶にする、馬鹿にする意で茶にしと洒落れたのである。京の粋人茶斗飴屋（ちやけい）と身を變じ吉原に入り込み四方を見廻るうち、遊び心を起し上方の通人風俗と服裝を改め登樓せんとしたが、松の内の事とて馴染ならぬ客は斷られ、九郎介稲荷社の拜殿で一夜を明すうち、稲荷の神々が集會し色里の噂を

するのを間くと云ふ趣向で、やはり一種の異類物に屬し、本卷所載の「風流仙婦傳」に似た構想である。唯其内容は各自稻荷が其名稱に依つて酒落のめす所に、作者の興味の中心が存する。茶の木稻荷は「萬事茶にして遊ぶがよい」と云ひ、高稻荷は「夫より高くとまつて遊ぶがよい」と云ひ、愛敬稻荷は「そう高く出ると兎角憎みがつきたがる、夫より愛嬌が肝心」と論じて居る類である。稻荷達の風俗態度も皆洒落からなつて居る、茶の木稻荷は

つゞいて茶らしい茶の木いなり、髮は茶せんに小袖は茶じゆす、茶うの上下、茶づかの大小、茶もうやく〳〵しく茶く座なす。

の類である。當時江戸中の稻荷の信仰が流行し黃表紙にも伊庭可笑作の「扨化狐通人」（安永九年）があり同じく稻荷を當て込んで居る。

要するに稻荷の詞をかり洒落の裡に當時の自稱通人を罵倒して居るのである、作者は十八大通の一人、藏前の富豪大口屋文魚の取卷であつたらしいので、自身も大通を氣取つて居たから、當時の自稱通人を傍痛く考へたのである。

今時の女郎かい、鏡にむかつてうす化粧、或は爪紅口紅や、せいたいなど粧なし、かざわをぬぐいふりそろへ、女にひとしき事なせるは、これおゝきにおせわな事

と罵倒して居る、一面に之が當時の青年の風俗であつた事が知られて面白い、現今のモダンボーイが鏡の前に女以上に數種のポマード、化粧水の瓶を並べるのを悪くは言へない、何れの時代にもかゝる尖端を切る若人が存在するのである。

文中「おせわあめ」とあるは當時下り飴と稱して上方から下つたと稱する飴を賣る行商人が居た、其一種であるらしいが他に所見が無い、元文元年の頃江戸の人氣を集めたと云ふお駒が飴、或は文化以後流行したお萬が飴の類に似て居るが、實は、大きにお世話を洒落れて飴の名稱としたのであらう　おせわ風とあるのも同様であらう。主人公の名を茶斗（ちやけい）としたのは、茶に縁ある語を用ゐたのであり、茶傾（散茶に傾城）に因んだと見られる。

目次の下に

けいせいの五臓大通の六腑、見すかしたびいどろのきん魚

とあるのは、びいどろ（硝子瓶）に因んだのであらうが、作者金魚の自讃の意も含まれて居るらしい、夫に拘らず洒落に興味の中心があつて、遊客遊女の穿ちは淺薄なものである。

▲貧幸先生多佳餘宇辭　原本　縦五寸一分　横三寸六分

不埒散人作　安永九年刊

書名は高楊枝の萬葉ぶりであつて、俗諺の「武士は喰はねど高楊枝」を採つたのである。作者不埒散人は匿名であるから斷言は出來ぬが、或は戀川春町ではないかと思はれるのである。彼の狂號を酒上不埒と稱するから、夫を採つたのではないかと考へる、彼は身分柄を顧慮したのか、酒落本には雅號を明に出してゐない。「無頼通說法」(安永八年)にも僅に「春町坊空言杜選大和尚」とあるので彼の作と悟る位のものだ。挿繪も落款は無いが、彼自身の畫であらう。

本篇は貧乏儒者と貧乏な町人とが品川へ初買ひと酒落れる笑止味を描いたものであるが、金はなくとも享樂に耽り度い心持は、現代で言へばプチブルの態度である、しかし全く生活はプロレタリヤ其まゝである、其處に此作の珍しさと價値とが存する。

最初酒屋の丁稚が現金でなければ酒を渡さぬ笑止味、儒者を先生さんと呼ぶのも、式亭三馬の「浮世床」で孔糞と云ふ田舍儒者を「先生といふては、なめげにきこゆるとて、先生さんと樣をつけていふなり」と註してあるのが思ひ合はされる。偕同氣相求むる庄六と品川行きと決

しても、着て行く着物が無い、地主に依頼し出入の邸からの講義の招待と僞つて借着をし、燈油を頭に塗つて髪を結ひ、愈出かけたが高輪の茶屋に休んでも茶代が置けぬ有樣、相棒の庄六も旦那寺で金を借りて來、同樣な貧的松と同伴して出かける痛快さ。然かも雪が降つて來て、居續けとでも云ひ出されては錢もなし、大雪に借着をよごしてはならず、三人表面では太平樂を並べても、心中絶えず不安に襲はれて居る滑稽、漸く松が相方里の入れ智慧で、向ふの茶屋が馴染であるやうに見せかけ、遊女の一件で腹立てたやうに惡態をつき、「こんな湯灌場へ初めて來た」「玉ぞろひ、惡ぞろひだ」などとてれ隱しを云ひつゝ出て行く姿、むざんにも笑止しい描寫である。

儒者が遊里でむづかしい漢語を用ゐて冷遇される構想は酒落本には珍しくない、京傳作一案々千話（寛政二年）の馬骨、犬悦（之等は學者ぶる半可通であるが、やかましい漢語を用ゐる點は同じである）の如きも同じ例である。しかし本篇に現はれる貧幸先生は、「閨怨の曲といふ場だよ」「さすが夷狄の地だ」などとやかましい口癖は出すものの、一癸で高慢を出しちやアねつからはえない」と云ふ位、よく遊里の機微には通じて居る可愛げのある男である。金さへあれば相應に面白く遊べさうに書いてある。本篇は高輪の大木戸、牛町あたりから品川へ行く道

中に、多少鄕土的特色がほの見えるだけで、品川の穿ちは描いてない。作者の興味が貧乏人の遊女買ひと云ふ點に存し、彼點に存しないからである、洒落本初期中の作品である事をよく示して居る。

▲玉菊燈籠辨　原本　縦五寸一分 横三寸六分

南陀伽紫蘭（なんだかしらん）作　安永九年刊

玉菊燈籠の由來を說き、更に遊女玉菊の亡靈現はれて現今の吉原を罵倒する筋である。作者南陀伽紫蘭は畫家として知られた尙左堂俊滿の匿名である。通稱窪田易兵衛、又安兵衛と云ふ、窪田春滿、俊滿、黄山堂等の號がある。狂號を一筋千杖、川柳に塵幸坊と稱した。本所、神田富澤町、小傳馬町と轉住した。畫を楫取魚彥（かとりなひこ）、北尾重政に學び、狂歌をつむり光に學んだ。文政三年九月廿日歿、享年六十四。淺草正覺寺に葬る。本篇が洒落本の處女作で、其他「油通汚」(天明元年)「浮世の四時（よつ）」(天明四年)の作がある、其他黄表紙の作が多い。

玉菊燈籠は吉原年中行事の一で、毎年七月一日から仲之町引手茶屋の軒に毎戸燈籠を點じ、十五日に再び新しく製り改めて卅日に終るのである、其起原は角町中万字屋勘兵衛抱への名妓

玉菊の追善のため行ひ、夫が毎年の例になつたのであると云ひ傳へて居る。玉菊が大酒のため廿五歲で死んだのは享保十一年三月廿九日で、本篇に說ける如く氣前のよい遊女であつたので郭中の人氣もあり、翌十二年の盂蘭盆に追善として燈籠が始められた如く言はれて居るが、之は喜多村信節撰の「嬉遊笑覽」に說ける如く、盂蘭盆に世俗通り茶屋で燈籠を點じて居たのを、玉菊の追善の如く附會したと見るが正しいやうである。然かし本篇に說ける玉菊追善三回忌に十寸見蘭洲が岩本乾什（本篇の江戸太夫何丈）作の「水調子」を唄つた事は實說と思はれるし、追善の「袖草子」と云ふ小册子が出たりして居り、玉菊が郭の名妓で評判の高かつた事は推測し得る、尙玉菊硏究には山東京傳の「近世奇跡考」山崎美成の「遊女玉菊考」等がある　玉菊が大和郡山の大工彌吉と契りを結び夫婦約束をなし、年季が明くと道中の危難を避けるため女乞食となつて尋ね行き、母親之を厭ひ彌吉は死んだと僞る、玉菊は其墓と敎へられし新墓に回向して自殺する筋は全く架空な講釋種で、女乞食に扮する所は講談「野狐三次」の中にも採用されて居るのである。

　本篇に出て居る「大通舞ひ」は云ふ迄もなく「大黑舞ひ」の「一に俵をふんまえて、二ににつこり笑うて」云々とあるのもぢりで、當時の大通が浪費して凋落したのを諷したのであら

う、夫から十餘年後の大口屋文魚の零落をも想ひ合はされるのである。

玉菊の亡靈が出て語る郭の惡口は、當時の樂屋落で今日から推知し難いが、眞芝屋の瓦川と云つて居るのは、明に松葉屋瀬川が、高利貸鳥山檢校に身請けされた事を指すのである、此事既に田螺金魚作「契情買虎之卷」（安永七年）に描かれて居る「いかに金がほしいとて限のない客に逢ひとをす、それもたて引かなんぞと金氣のうすい砂糖なら、張もいきぢも有て靑樓の傾城ならんに、何んぼ女郎がこすくなつても、遊女中間のつらよごし、こんにやくのよごしが、はるかまし」とは痛快な冷罵で、作者には餘程癪に觸つたものと見える。

最後の地獄の郭話は、地獄遍歷小說の系統をひけるもので、明治時代三遊亭圓遊の落語「地獄めぐり」を想ひ合はされ、作者の黃表紙風な茶氣が溢れ出た所が笑止しい。中間の眞劍な罵倒を野暮と考へて緩和したのであらう。

▲根柄異軒之傳（ねからいけん）　原本　縱五寸二分 橫三寸七分

著々羅山人作　安永九年刊

書名はねつからいけぬの洒落、何々之傳と云へるは、風來山人の「風流志道軒傳」（寶暦十三

年）「痿陰隠逸傳」（明和五年）「力婦傳」（安永五年）等に倣つたものであらう、洒落本にも「放蕩虚誕傳」（安永三年）がある。

著々羅山人は何人の匿名か未詳、明誠堂喜三二にも著々羅館の別號があるが、同一人と俄に斷じ得ない、ちよく／＼らとは安永時代の流行語で、おべんちやら、おひやらかしなどと同意味を有し、見え透いたお世辭いゝ加減な事を云ふ意義である、衆人が用ゐて居るのであるから、皆同一人と見做すには躊躇せざるを得ない、此外「山下新談」（安永六年）の作者樗々羅山人、「魂膽胡蝶枕」（享和二年）の作者著々樂齋廣長の如き、其關係は今後の研究を俟たねばならない。

本篇は前にあげた「放蕩虚誕傳」と何等かの交渉があるやうに認められる。同書の卷末廣告に

放蕩虚誕傳　　出板

同　　後篇　　近刻

此本ハ地色ノ仕様或ハおどり子と
しやれよふ色／＼おもしろき本也

と出て居る、又巻末に「虚誕堂　變手古山人著」とある、本篇の作者も著々羅山人であるし、然

かも內容を見ると、色事傳授の項に描いてあるのは、娘卽地女の口說きやうである、之が前の廣告文と關係があると見れば見られる、卽本篇は「虛誕傳」の後篇と推測されるのである、洒落本に地色の仕樣を綴るなどは特殊のものに屬するから、此推測は先づ誤でないと信ずる、但し本篇には彼廣告文にある踊子とのしやれやうは少しも書いて無い。

偖本篇は根柄異軒と云ふやせ浪人に、大黑天と大通神との靈が夢に現はれ、色事及金持の傳授をなすと云ふ梗概であり、其構想は前に「契國策」(安永五年)あり同時代には「風流仙婦傳」「多荷論」があり、後には「吉原楊枝」(天明八年)が存する。一面に於て色事の傳授物の系統をひいて居るのである。特に金持になる傳授は、一種の諷刺を含んで居るやうで、前出「虛誕傳」に「眞色男と言者ハ、唯金銀をつかわずして、女郎をじゆう自在にするを眞の色男といふ者なり」と說いて金を遣はぬ傾城買の祕傳を說いてあるのと照應があると認められる。(此點も本書が「虛誕傳」の後編と推定せられる一證である)一方で色事を指南し、一方では金持になる方を敎へ「向ふからよき女が來ると氣を取られる所をうかとせず、往還のすきまを見、大道をがんばつて、かな釘一本でも落て居る物を拾ふ、時によると大にこ〳〵がある」と道破して居るなど、可なり矛盾した笑止味を帶びて見られる。洒落本に金持になる祕傳を說くのは明

に浮世草子の影響で、井原西鶴の「日本永代藏」（元祿元年）卷之三「煎じやう常とはかはる問藥」の條、北條團水の「日本新永代藏」（正德三年）卷之三「正直は一端の木綿商ひ」の條などが想ひ合はされ、更に江島屋其磧の「渡世身持談義」（享保二十年）卷之三に

　兎角町人は親より讓りの家業を勵み、主親方の影なる商ひを油斷なく、其家慥に繁昌させて世間を息子に渡し、浮世暇になつて六十過て年月の氣晴しに女郎狂ひはする者

とあるのを想起せしめる、然かし本篇のは遊女買ひに金を遣はぬやう苦心する矛盾を嘲罵する意を含ませたのであつて、決して浮世草子中に存する如き眞の教訓的態度は無い事勿論である。色事傳授の項の最後に

　先是迄が色事の御傳授、扨又此上一ッの極祕傳が御ざります、めつたには申されませぬ、皆樣ぐつと近ふお寄なされませと小聲になり、是でいかずばしやうことがねェハイ。

と落して拍子拔けを喰はせてある點など、奈何にも江戸子らしい、黄表紙の趣味を帶びた酒落ナンセンスである。

▲芳深交話　原本　縦五寸三分　横三寸七分

穴好作　安永九年刊

大坂版の洒落本「男倡新宗玄々經」と相俟つて、洒落本中男色を取扱つた特殊の作品である。書名は芳町と深川とを題材にした事を示して居り、支那雜纂の書名に模したのである。作者穴好は卜部兼好のもぢりであるが、全くの匿名で誰ともわからぬ、内容が内容であるから本名を發表するのを憚つたのであらう、或は一粋僧の戯作かと想像せられる

梗概は芳町の陰間を買ひに行つた坊主客、陰間にねだられて深川に遊女買ひに出かける筋である。當時男娼は、湯島天神附近、芝神明附近、及び此芳町にあつた。芳町のは、當時の芝居町であつた葺屋町堺町の裏通りであり、多くの子供屋（男娼を抱へて置く家）と之を招聘する揚屋とがあつたのである、寛政年中二丁町の地圖に櫻屋、龜屋の二軒が揚屋として記してある。

篇中に色子とあるのは男娼の名稱である、元來男娼は野郎歌舞伎の若女方若衆方等の美少年が色を賣つたのに始り、有名な大坂の狂歌師油煙齋鯛屋貞柳の如きも此方面に趣味をもつたと

見え、彼の狂歌集「家土産」（享保十四年）に數首之に關する歌が見えて居る。かゝる舞臺に出演する少年を色子と云ひ、まだ舞臺に出ぬ少年を陰間（影間とも書く）と稱したのである、要するに俳優が多くの美少年を抱へて藝を仕込んだのを、斯く二種に區別して呼んだのである、夫がいつか男娼方面のみの名稱となつて殘つた、篇中の美少年を色子と呼んで居るが、之は當人達を美しく呼んだので、裏面では陰間と稱せられたのだ、又事實彼等は舞臺に出づ可き少年俳優ではなく、男娼專門なのであるから、當然である。

陰間は上方殊に京生れの美少年を主として抱へたと云ふ事である　容貌態度が女性に近く物柔かで最歡迎せられたからである、篇中「下りさま、御名は「二おあひ方も下りさまの事なれば」などとあるは上方下り或は京下りの美少年を指す「ァノおまへの若衆は、きついきやんだねえ」とある綱介は珍しく江戸生れの少年らしく態度も荒く江戸言葉である、他の一人瀧藏のやさしい京訛と對稱せしめてあるのだ

本篇では綱介が自分の一の客甚幸に連れられ深川に赴き、甚幸の馴染遊女おまきと戀に陷ち、此口も亦穴好に連れられて行きおまきと逢ふのを、他の遊女達が妬むと云ふ趣向になつて居る、綱介が「其のうへが神明か湯島へ左遷の身とならにやァならぬ」と言つて居るのもかゝ

る禁を破つて居るからである。

要するに陰間を同伴しての遊女買ひは、婦人に興味の無い變態性の老通人のす可き事であつたらう、篇中の町人定七も「まづ一體が若衆を連れて女郎買といふが、さえぬやつさ、ハテ男さへほれる若衆を、美しい女郎との取合はせは」と道破して居るのだ。

卷末に「綱介甚幸いざこざの段は後編に御覽に入れます」とあるのは、綱介の不義が露見する筋を描くつもりであつたらしいが、續編は出版されなかつたらしい。

要するに本書は酒落本中に男娼を取扱つた珍しい題材の作品と稱す可く、資料に乏しい陰間生活の一面を見せて呉れた稀書と云ふ可きである。

▲風俗砂拂傳

原本　縱五寸一分　橫三寸六分

隨松子作　安永九年刊

岡場所の一、蒟蒻島を題材としたものに、本書より先に「寸南破良意」(安永四年)が存する此書の題目と云ひ、本篇の砂拂と稱する事と云ひ共に蒟蒻を意味する、俗諺に「蒟蒻は男の或部分の砂を拂ふ」とあるに依つて斯く言ふのである。蒟蒻島は現今の日本橋區靈岸島を稱する

該島は明和三年埋立てて出來た新築地で、安永頃から岡場所として盛るに至つたのである。

作者隨松子は傳未詳であるが、落款に分銅と一片と刻つてある點から見て、「一寸南破良意」の作者南鐐堂一片と同一人たる事が推測される。卽「一寸南破良意」で此地に遊ぶ客を分つて描寫し、本篇で更に首尾一貫せる作として、同じ場所を描いたのである。

本篇の主要な人物粂の馴染の遊女をおむめとしたのは近松巢林子作の「心中萬年草」（寶永五年）の主人公お梅粂之助を採つたので、洒落本の慣用手段で珍しくないが、最初此遊里に出かける仕事師を、長と六として置きながら、卷末に再び現はれる時には八と六としてあるのは、作者の輕卒と云はざるを得ない、前に六を誘ふ長が「おらアこんにやくのお初がとけへ」と云ひながら、卷末には「八があいかたお初一とあり、しかも其連は六なのだから同一人物を點出したつもりに違ひ無いのである。

篇中に現はれる田舍武士武左の露骨濃厚な態度は、洒落本の典型的な一人物で、別に奇警な描寫も見出せぬ。お梅と粂との對話は、互に末を約束して置きながら、客は相手を流れの身と見て外によい客がありはしまいかと疑ひ、女は客が其まゝ捨てゝ來なくなりはしまいかと不安を感ずる、互に信賴しつゝも絕えぬ惱みが湧き出るのである、特にお梅の眞劍な態度が比較的

よく描かれて小篇ながら情趣がある。之を「角雞卵」(天明四年)の主人公が同じお梅粂之助でありながら、粂之助が女をだまして金を取るのに比較すれば、遙に異なつて居る。

本篇も「寸南破良意」も蒟蒻島の郷土的特色が描き出されて居ないのは、作者の手腕にもよるであらうが、一面に於て蒟蒻島其自身があまり特色を有たぬ爲であらうと考へられる。唯此岡場所に引手茶屋があつた事は、本篇にも「寸南破良意」にも見えて居りかゝる場所としては異色があると感じられる。

本篇の題材中珍しいのは火事を點出した事で、其ため武左客も、仕事師も周章てて歸る樣が寫してあるが、之は他の洒落本に見えぬ面白い趣向と云ふ可く、何となく一脈の江戸情調が漂ふやうに感ずるのは、單に私だけではあるまい 要するに洒落本中傑出した作品ではないが、背景に依つて活きて居る書の一である。

▲風流仙婦傳　原本　縦五寸二分 横三寸七分

時雨庵主人作　安永九年刊

作者時雨庵主人の傳記は、本大系第三卷「百安楚飛」の項を參照あり度い。本書は俳諧の祖

と稱せらるゝ山崎宗鑑の娘が仙女となり、傾城買ひの祕傳を說くと云ふ筋で、一面では異類物であり、一面では傾城買傳授物であり、本格の洒落本に屬しない、變格洒落本の一種である。

仙人其他の異類が講釋する構想は、前に「契國策」(安永五年)があり、半可通を紀文仙人、奈良茂仙人が案內し遊里の內情を敎示する筋になつて居る。傾城買指南の書には、「間似合早粹」(明和六年)「傾城買指南所」(一名「十八大通百手枕」安永七年)「無賴通說法」(安永八年)等が出て居る、本書は兩者の系統を承けて綜合した構想である。

二人の通人が飛鳥山に赴き、婦人の草庵を訪れる所は、井原西鶴の「好色一代女」(貞享三年)の卷頭に似通つて居るし、支那小說「痴婆子傳」の趣向にも似て居るが、之は恐らく單なる暗合で、飜案と目す可き程のものではあるまい。

篇中山崎宗鑑が天狗となりし說話があるが、之は榎本其角編の「雜談集」に出でた、此說話は俳人仲間には興味を惹いたと見え、遲月庵空阿作の「俳諧水滸傳」にも出て居る。本篇の宗鑑作「のまんとすれば夏の澤水」の脇句の出來事も皆「雜談集」に據つたらしい。

前半は明に當時の大通に反感をもつ作者の思想である。

江戶節の所々、めりやす長唄の片はしは、猪牙に乘時と女郎の床へ來までの道具と覺え、

茶の湯俳諧も知らぬといふてはやぼと心得、一句も出來ぬ內からことゝゝしき俳名をつき、云々

など冷罵骨に徹する概があるではないか。田螺金魚作「淫女皮肉論」(安永七年)に「大通とはなんの事だへ、通の利たは五六年あとの事さ」とあるによく照應して居るのだ、大通を氣取る作者等にもあまりに通人氣取りの似た山半可通の輩出に憤りを發したのであらう。「世の末、雨國にて座頭をあつめて角力とらせしまでは見候へども此後は何にか角力とらせ侍ん、おぼつかなし」と仙女の口をかりて作者は歎じて居るが、文化文政度に至り盲人と女角力の取組が興行さるゝに至つたのから見ると、此豫言が當つたのであるから笑止しい。後半に至つて傾城の心裡を穿つた觀察は流石に精細銳利で、金魚の諸作の概括的な疎雜な描寫とは撰を異にして居る、之に比較す可きは京傳の洒落本と云はねばならない「亦地婦のたま〳〵父母の相談にて緣を結び見もせぬ男と夫婦になり、又いたづら事にて忍び逢ふ中とても、たまさかな事なれば、男珍しさに命をかけて思ひ侍れとも是等はしやう事なしの誠にして、女郎のあまた逢ひし男の中にてはじめより末かけてと思ひつきし誠とは遙劣りなるべし」と云ふ一節は遊女の爲に氣焰をあげて居る所で、當時の遊客の齊しく懷ける感想を代表せるものである　此意見の當否は玆に論

す可きではないが、尠くとも當時の遊女禮讃者は、かゝる意見を確信し、奈何にして遊女の愛を獲得せんかと悶えたのである、本篇の最後の結論も作者は意識しなかつたやうであるが畢竟之を論じたのである。

▲初葉南志（はつはなし）　原本　縱五寸二分 横三寸八分

南濱人魚京作　安永九年刊

書名は其卷末に「初咄し」とある如く、其萬葉ぶりなのである。作者は序にある如く靈岸島に住める町人と云ふ外、傳記未詳であるが、篇中の主人公靑木榮三郎は或は自己の面影を見せて居るのかと思はれる。

本篇は序に「遊里の風流を假求（かりもとめ）て四品に分ち末に至りて勸善懲惡を說（とき）、已上（いじやう）五章に綴るもの也」とある如く、吉原・深川、品川、堺町、四箇所の勸樂場を背景にして描き、最後に刀屋半衞門の諷諫に悟つて酒色兩道を止めると云ふ構想である。同じく序に

我住庵の北に當てひとつの喜見城あり、地名を中洲といひ、また三俣（みつまた）とも呼ぶ、されば過つる歲、新に川を埋、肆鄽（まちや）甍を並べしにより年々日々の賑ひ、商買數詹の繁華と成りぬ、

予此華美を賛し、當所の記を書せん事を想ふに、才なく文華密ならず（中略）予は當時の流行方言を知らず、男女の嘯語さゑも譯り難く、不通の冊子なればと、世に披露を憚りて

久しく机上に書捨置しが云々

とある如く、中洲の賑かさに刺戟されて洒落本を書く氣になつたのであらう。中洲の最繁榮を極めたのは安永五六年以後であつたらしい、其繁昌を描いたものに「中洲雀」（安永六年）「大抵御覽」（安永八年）がある、されば本書は安永五六年頃の稿らしく見えるが、最後の芝居の噂で安永七年脱稿したと見るのが妥當である、素人の作品とて自己も言つて居る如く、文華密ならず筆致が奈何にもたど／＼しいので世に發表する勇氣も無かつたのを、洒落本流行の世とて出版する運びとなつたものと想像される　前に述べし如く筆つきが奈何にも冗長で素人くさい、所謂洒落本作者の如く輕快洒脱な點に乏しい、然かし其半面に奈何にも丹念緻密な描寫が忠實に綴つてあり、其處に無限の興味がある、讀者をして實在感を起さしむるに充分な努力が見える、其處に他の玄人くさい洒落本に見出せない價値が存する。當時の流行方言を知らず、しやれさへもわかり難くと告白して居る如く、作者は所謂口舌で通人を氣取る人ではなく、享樂の實際家で、默々として趣味ある遊びを樂んだらしい。

大阪の商人を案内して深川の二軒茶屋に遊び、何時の間にか用意した重箱と樽に馳走と酒が充實して居て大阪人を驚かした趣向、兩國橋を永代橋と僞り、宿へ歸ると見せて吉原へ連れ込む惡戲、主人公の榮三郎仲々の茶目である。深川の稻鶴屋に出かけては、初めての振りして冷遇させ、よい機會に二階の馴染紀文に呼び込ませたり、おたきお花の姉妹娘に酒を強ひて醉ひつぶさせたり仲々考へた惡戲をやつて居るのである　品川では青樓の番頭長兵衛が、榮三郎をだしに遣つて三人の侍客から小判一枚の祝儀にありつく魂膽が精細に描いてある、堺町の芝居を見に行つては、舞臺子をあげて遊び、大坂とあだ名のある大坂自慢の男を凹ます仕方など、口ではあまり酒落のめしたりしないが、仲々の通人と云はねばならぬ。終末の話の如く作者は可なり遊んで或時全く止めて仕舞つた人では無いかと想像される。

文中「榮三樣ごひいきの三升が大當で鐵之助場が大評判でござります」とあるのは、安永七年中村座秋狂言をさす、卽「伊達競阿國劇場（かぶき）」市川團十郎荒獅子男之助と細川勝元の二役であつた。「榮三樣、棧敷勘三では出來ませぬ、羽左衞門になされ」とあるのは言ふ迄もなく中村座に棧敷が明いて居ぬから、市村座になさいと云ふのである。此狂言に依り脫稿の年月が略推定されるのである。

▲遊婦里會談（ゆふりくわいだん）　原本　縦五寸一分 横三寸六分

蓬萊山人歸橋作　安永九年刊

書名は遊里怪談をもぢつたのである、卷末の廣告には東西南北と角書がある通り、東は深川、西は新宿、南は品川、北は吉原の珍談を四通人が作者歸橋の許に集つて語る構想で、會談其まゝの意味も含まれて居るが、品川及新宿の話などは明に怪談めかしてある。同年刊行の「鄰壁夜話」の如きは全く吉原の怪談を輯めたものである

作者蓬萊山人歸橋の傳記は、本大系第二卷所載「婦美車紫鹿」の項を參照あり度い、彼の自序に「東都龍の腮に住」とあるは辰巳の入口と云ふ意に推測される、彼の雅號の蓬萊山人は、富岡八幡宮の正面に當る大島川に架した蓬萊橋に因んだものなのであるからである。

四人の通人の俳名は各其語る遊里に因んだもので、深川は紫臥、新宿は馬遊、品川は隣波、吉原は郭子と云ふ類である　篇中に作者自身を現はすのは歸橋の作には珍しくない、「龍虎問答」（安永八年）には貴橋として出て居るし、「愚人贅漢居續借金」（天明三年）には歸橋として出て居る。偖隣波の品川の話中に出て來る一米屋の吉が新田の歸りに、品川へ行つて秋しのが妹女

郎」云々とある新川は云ふ迄もなく、矢口渡附近にある新田義興をまつる新田神社の事で、風來山人が戯曲「神靈矢口渡」(明和七年)を書いて以來、江戸人の信仰厚き社となり、其歸途品川へ廻ると云ふ趣向が川柳に多く見えて居る。茲でも同じ行動をとつたのである、秋しのと云ふ遊女は品川で名妓であつたらしく、金魚作の「十八大通百手枕」(安永七年)(一名「傾城買指南所」)に「品川ではさどやの秋しのさ、しかしあいつもつらがおゝきひ」と出て居る。本篇でも秋しのは可なり權高い女性として描かれて居る所を見ると、一體に無愛想な遊女だつたと見える、隣波が之に振られ、幽靈に扮して遊女買ひに赴く趣向は、當時吉原で評判であつた市川八百藏の幽靈が、花荻の許に通つたと云ふ噂を採つたものであらう、(前述「十八大通百手枕」參照)床の中に樒の枝のみ殘して幽靈が通つたと思はせる筋は、「契情實の巻」(刊年未詳)に採つてある。

郭子の話に「此頃逢木屋の金扇が身うけの沙汰を聞なせへしたか」とあるは、當時の名妓江戸町一丁目扇屋花扇の事と推測される。「八人の新造がついた事、「まことに高尾このかたの傾城だといふ事　などある點から見て當時の全盛であつたらしい。春町作の黄表紙「無益委記」(安永八年)にも「あれが大木屋の鼻大きかの」と洒落れて居るし「玉菊燈籠辨」にも「引ッぱり

見世の哉扇とは、おほしこうで氣の毒」などとよく引き合ひに出されて居るのである。

馬遊の話は新宿の遊女の枕さがしであるが、「こゐつ品川ならっ猫だが、この土地じやァ馬か知らぬ」と云つて居る所を見れば、當時、品川の遊里で怪猫の噂があつたと見える。「一想山著聞奇集」（嘉永三年）に品川の遊女が客の寢息を窺つて、燈油をなめる説話が出て居る。兎角少し格の落ちる店では、こんな事實が絶えなかつたのであらう。しかし馬遊が枕さがしの上前をはねて花生けに隱してあつた金を盜み去つたのは、「膝栗毛」の彌次喜多か、「滑稽和合人」の茶目吉矢場七等の行爲である。主人歸橋が「そんなにはめた事でもねへ」と一蹴し去つたのは當然である。

要するに本篇の如く通人が相集つて遊里の噂をするのは、變格洒落本の一分類に屬す可きもので、之より以後には、山東京傳作「古契三娼」（天明七年）鹽屋色主作「南門鼠」（寛政十二年）等が同系統の書である。

▲金枕遊女相談　原本　縱五寸二分　横三寸八分

無署名作　安永年間刊

書名は何か藥方の書にもぢつたのではないかと考へるが、未だ發見しない、金枕は卷末に記

してある枕を泰山の安きに置く意、遊女相談は遊女の參考書、手引の意。序にある如く、萬事藥劑調合法の書に擬して、遊女の心得を說いたもので、作者の名も記してなく、刊年も無いが内容に依つて安永年刊の部に入れたのである。

洒落本中、傾城買指南の書は、一間似合早粹（明和六年）を始めとし「放蕩虛誕傳」（安永四年）傾城買指南所（一名十八大通百手百手枕、安永七年）以下數種あり、本卷にも數部輯めてある、しかし遊女の心得を說いたものは本書と、「傾城異見之規矩(かね)」（天明元年）位のもので誠に尠い、此點で珍本と見做す可き書と言はねばならぬ

本書の如く藥の處方に擬した戲作は既に元祿時代から存する、井原西鶴作「日本永代藏」（元祿元年）卷三煎じやう常とはかはる閒藥(ひくすり)の項に

長者丸といへる妙藥の方組傳へ申すべし△朝起五兩△家職貳拾兩△夜詰八兩△始末拾兩△達者七兩、此五十兩を細にして、胸算用秤目の違ひなきやうに手合念を入、是を朝込からは、長者にならざるといふ事なし。然れ共是に大事は毒斷あり。（美食淫亂絹物を不斷内）儀を乘物奎盛娘に琴歌がるた云々

とある。本書も構想に於てかゝるものの系統をひいて居るのである。

先づ初會客に對する心得、樣々の客に對する心得、馴染客に對する心得、工面の病起りし時の心得、禁物、懇丹丸之傳授、其藥方の加減と分類し、奇警ではないが周到な心くばりがほの見える。禁物の中に、假名の符牒めきしものが書いてあるのは、果して意味があるのか未詳である。遊女の間の符牒は既に「金々先生榮花夢」に見え、或は唐音と名づけた挾み言葉もあり現存するものでは落語に殘つて居る「キンチヤキンジウロウ」云々と云ふのがある、然かし本書のものは果して之等と同じ實用のものか疑はしい。或古老の說に俗謠の囃し詞として用ゐたものが存在するとの事である。「江戶叢書」卷八に納められた「江戶風俗惣まくり」に

賣行の賣藥の古き昔は朝鮮の幸慶子にもとづき、一角圓の舶來の船人めかせし麴町にしばらく名をうり、金看板には是より上の藥も、奇を好むの世の中に立んを思ふ、近年蘭學行はれ、賣藥片假名のみ多くなりぬ

とある、本書の此片假名も或は和蘭の藥名に擬して附けたのでは無いかと思ふ。隱語專門の研究家の敎示を得たいと考へる次第である。

本文中「浮氣本田銀きせるなどは座敷も面白くいきに洒落などいひのめし、ちよく〳〵らにのせられ、なじみも深くならば、もふせんの下ぢ」とある所など、安永時代の洒落本の用語で

ある、もふせんは毛氈をかぶる、失敗するしくじる意の流行語である。かゝる點で刊年代は略推測し得ると思ふ。

▲狐の藻　原本　縱五寸二分　横三寸八分

無署名作　安永年間刊

狐は人に化する時藻を頭にかぶると云ふ俗說に依つた書名である。作者は署名してないが、書中の人物に金錦先生が現はれる點から見て、朋誠堂喜三二の匿名の作か之に模した人の作で刊年も安永四年前後かと推定される。

內容は金錦先生、新五左、樂み好き、誹人、石部金吉、女郎贔負、春江等一堂に相集つて遊里の噂話に耽り、やがて一同打連れて出かけると云ふ筋である　其書き方が古い「役者評判記」などの趣を見せて居る、洒落本中にも遊里の噂話をするものには、旣に本卷に「遊婦里會談」が納めてあるが、恐らく本書の方が早いのであらうと想像される。

樂み好きの言に、

さて遊ばぬ人はつきのなきもの、萬にいみじくとも色好まざらん男は玉の盃底なき心地ぞ

するといふ通り、すべて郭は世事の修行場にて遊びし人は遊ごし程の働もいでき、武士町人に至る迄、つとめ先きに依つては此所の出會にて主人の用向きもととのへ、何にかぎらずむづかしき事、故なく濟めば忠をたち功も立商賣筋のぢらせよいともなれば遣ひし金も損にはならず

とあるは、遊里に對する當時の常識であつたのだ、否今日に於ても政治上、商賣上の相談が料理屋待合に於て行はれるのは、之と同じ考へなのであらう。

女郎贔負の言に、

女郎とて人情を知らぬ事はあるまじ、皆親兄弟のためにこそかゝる流のみともなれ、生れながらの女郎あらんや、その源を尋ぬるに、或は女房又は娘、尊き有、卑しきあり、その時人情を知つて今女郎となればとて忘べき筈もなし、いかに務めの身じやとてさりとてはむごひ云やうなり、云その人こそあさはかなれ、萬事杖とも柱ともする人にはつらひ勤めの其中にいちゐを脫ぎてもあぐるぞかし

と云つて居るのは、遊女に同情ある言で、所謂眞の通人の常識なのである。續いて、

女郎の誠と玉子の四角あれば晦日に月が出るとの雜談、りつぱに口には大言のはけども、

心に惚れられたと思へばこそ來人多し

と道破して居るのは可なり鋭い語と見られる。

本書は前述の如く「評判記」に模したもので、贔負、見切者には、金錦先生、樂み好き、女郎贔負等が居り、惡口には石部金吉が居る、頭取役には春江が居る、此春江は突如として現はれ本書で奈何なる地位を占むる人かわからぬが、或は「當世爰かしこ」(安永五年)の作者御無事庵春江と何等かの關係あり、隨つて本書の作者ではないかと思はれる疑ひがあるが、何等の傍證が無く斷定が下せない。

▲咲(さき)分(わけ)論(ろん)　原本　縦五寸三分 横三寸八分

竹窓作　安永年間刊

書名は序にある如く、藝者とめくり骨牌との優劣が判じ難いので、引分けの意で命名されたのである。刊年は明記して無いが、後に記すめくり骨牌の考證に依つて、安永八九年頃かと推定する、作者竹窓は全く傳記未詳である。

本書の主題になつて居るめくり骨牌は既に明和の末年安永の初年には行はれたと見え、洒落

本「辰巳の園」（明和七年）の船頭の詞に「早くしまつたらめくりをうたふ」とあり、富川雪吟畫作の黑本「運附太郎左衛門」（安永元年）に「コリヤめくりでもおしへてやろうか、此すべた野良奴」などと言つて居る。然かし非常に流行したのは安永の末年らしく、日張堂作（一說京傳の匿名）の黃表紙「開帳利益札遊合」（安永七年）があり同じく黃表紙、市場通笑作の「近頃島めぐり」（安永九年）に、「朝夷が行し時分はよみといふ物流行、近年は又めくりとやらいふ事が流行」と見えて居る。近年と云つても流行が久しければ、流行の尖端を切らうと云ふ黃表紙作者が材料にする筈はない。本書には

　去ルころよりめくり合といふ事東武に專ら時行、是をもてあそびとなし、京の舟にも藝者杯はかしましと是を除き

と說いてある。此點から見て本書は安永八九年頃の刊行と推定されるのである。

めくり骨牌は和蘭陀人舶來の外國骨牌が日本化したうんすん骨牌を更に簡略にしたものである、卽五種各十五枚總數七十五枚あつたのを、四種各十二枚總數四十八枚に減じ、現今の花合せと同じ方法で戰ふのである。最初よみカルタと稱し、後めくりカルタと稱するに至つた事は、前出「近頃島めぐり」の詞に依つてもわかる。本書に

立登る煙りのうちより怪しき姿現れたり、よく〳〵是を見れば甲冑を帯し、青き馬に打乘たり、大將かと見れば續く勢もなく雜兵かと見れば青二のひたたれを着したり

とあるのは、「平家物語」卷七實盛最後の章、「源平盛衰記」卷三十實盛討たるゝ事の條にある「侍かと見れば錦の直垂き服たり、大將軍かと思へば續く者なし」をもぢつたのであるが、青き馬、青二の直垂とあるのはめくり骨牌中の最優等の札たる青札をさしたのであり、一をあざ二を青二と稱し共に五十點に數へられる札である。青馬は十一番目の札で同じく五十點である

めくり札の靈が現はれて、藝者の風儀亂れし事を罵る趣向は、例の如き異類物に入る可き構想であるが、作者の主意は、單にめくりの流行の爲藝者の繁昌しなくなつた時代の推移に興味をもつて綴つたらしく見える。藝者の風儀が正しくなつたからとて、めくりの流行を左右する譯には行くまい、可なり曖昧な論旨である。要するに狂文であり唯かかる新流行を穿つたまでの事であらう。最初の一節は中洲の繁榮を叙したもので、之と同じき題材をとつたものには「大抵御覽」(安永八年)がある、之も本書の刊行年代を示す傍證となるであらう。

粹町甲閨（すいちやうかふけい）　原本　縦五寸三分　横三寸六分

山手の馬鹿人作　安永年間刊

粹町甲閨は翠帳紅閨のもぢり、此語は古く「和漢朗詠集」大江以言作の遊女詩に「翠帳紅閨、萬事之禮法雖レ異、舟中浪上、一生之歡會是同」と見え、謠曲「江口」には之に據つて「翠帳紅閨に枕ならべし妹背も、いつの間にかは隔つらん」同じく謠曲「班女」に「翠帳紅閨に枕ならぶる床の上、なれし衾の夜すがらも、同穴の跡夢もなし」と見えて居る、之等の謠曲が遊里では自然女の聯想から謠はれ、當時の一種流行語になつたらしい、「鄙舍三友」の中にも此句が見えて居るのである。又噺本「いかのぼり」(天明元年)に次の如き笑話が出て居る。

去る娘世渡りにせひなく琴の師をしながらさげ重に歩行を重忠のやしきへとられ吟味せられければ【娘】私は一つ向さやうな事は御ざりませぬ只琴の指南をいたします【重忠】そんならいよ／＼琴の師匠に違ひ無くば彈ひて聞かせい【娘】ハイと琴に向ひ「翠帳紅閨にまくらならべし床のうち」【重】モウ彈かすといい、そいつしばれ

翠帳紅閨をもぢつて洒落本の書名とする事の偶然でない事がわかると思ふのである、甲閨に甲

州街道を匂はせ新宿を含ませてあるのだ。

本篇は序に依つてわかる如く「甲驛新話」(安永四年)の續編である。刊年は不明であるが序文を見てもあまり時を隔てて居らぬ如く見えるから、思ふに安永六七年頃の刊行かと推定される。作者山手の馬鹿人は、大田蜀山の一匿名である。「世說新語茶」「變通輕井茶話」等皆此號を用ゐてある。

本書は半可通淺車が通人を氣取つて、相方瀧川を淸く他の客に出しながら、以後全く顏を出さぬのに怒り出し、通の馬脚を現はす笑止味、色客喜太は馴染松野の來やうが遲いとすねて、口說の種を蒔かんとして、實は松野の留守中朋輩吉彌と戲れた種をあげられ却つて凹む笑止味座頭客二人の盲人らしい精細な描寫、長々と仙臺淨瑠璃を語る面白味等が雜然として綴られて居る。

本書には新宿の郷土的特色は餘り描いてない、蓋前編「甲驛新話」で其方面に力が注いであるから、本書には變つた人物の點出に苦心した痕が見える、盲人客の描寫は可なり珍と云はざるを得ぬ、勝川春章の口繪と相俟つて怪奇趣味(グロテスク)な滑稽が紙面に溢れて居る、仙臺淨瑠璃は當時漸く江戸に行はれたらしく、之を題材としたのは作者最得意とする點であらう、式亭三馬作

「浮世風呂」に盲人が同じく浄瑠璃を語つて喝采を博する筋があるが、恐らく本書などの影響を受けたのであらう、彼が洒落本の所藏家であつた事は、好事家の周知する所である。本篇に現はれる遊女の一人折江は盲人客の相方となつて居るが、同人は既に「甲驛新話」中に現はれて居る、其處に作者が兩書に一脈の連絡をつけた、用意周到さが窺はれる。

本書で通人らしく見えた淀車が意外に冷遇され、朴訥な國侍が瀧川に厚遇され、盲人客二人も案外淡白であると遊女達に喜ばれて居るのは、典型的な描寫を嫌つた作者の創意が見える、然かし江戸御家人の半可を嫌忌し、國侍にあまり反感を抱かぬのは、江戸の通人を以て自負する作者大田蜀山の性癖の現れとも見られ、彼の作「世説新語茶」に於ても田舎侍傳五右衛門はあまり嫌がられず、御家人らしい源六はひどく振られて居る、本書の淀車と同樣である。作者が御家人だけかゝる傾向を無意識の裡にもつやうに至つたのであらう。

▲世説新語茶（せつせつしんごさ）　原本　縱五寸三分　横三寸七分

山手の馬鹿人　安永年間刊

書名は宋の劉義慶編の雜纂「世説新語」のもぢりで、新語茶は新五左（しんござ）卽當時行はれた田舎武

士の罵倒語にかけたのだ。刊年は明記して無いが、變語の項に、

【い】ヲヤぬしの紋は門之助だね【傳】ナニサ門之助はねへけれども、お人の少い時にや

ア、使番の助があたるよ

とある、門之助は當時二代目市川門之助で紋は丸一であるが、安永六年三升の紋に改めた、作者が此事に關し穿ちを言つて居ない點から見て、本書は安永六年以前の作たる事を推定し得ると思ふのである。作者は大田蜀山の變名で、既に「變通輕井茶話」にも用ゐて居る。

本書は變語、粹事、坊客、笑止の四項に分ち變語で上野山下の岡場所、粹事で深川の遊里、坊客で谷中のいろは茶屋、笑止で音羽の岡場所を描いた。變語は變つた詞の意で、奥州侍傳五右衛門の東北辯と、上方商人長次郎の上方詞を對稱せしめた笑止味である。傳五右衛門が長々と一の谷玉おひ姫の講釋するのは、仙臺淨瑠璃の一節らしく、同作者の「粹町甲閨」で盲人客に仙臺淨瑠璃を語らしめたと似た構想である。本文中「三日とけふはお客が多いからどうもせわしくつて惡ふおぜんす」とあるのは、三日と十八日とをさす、共に上野兩大師の命日で參詣人多く、上野山下も繁昌するのである、卽三日は慈眼大師、十八日は元三大師の命日である。變語に現はるる田舍侍も上方商人も別に作者の筆に依つて冷罵されて居ない、洒落本の典型に

據れば前者は露骨な性の要求で、後者は金遣ひの細いので輕蔑的に描かれるのが常であるが、本書では左樣なつて居ない、作者が江戸の武家階級だけ、笑止に現はれる源六の如き半可通には反感をもつが、質朴な武士を滑稽化こそすれ、餘り反感はもたなかつたらしい。

いろは茶屋は谷中天王寺（天保四年以前は長耀山尊重院感應寺と云ふ）門前の横町茶屋町にあつた岡場所、昔四十七軒あつたから名づけられたと云ふ說と、いろはと書いた暖簾をかけた茶屋が四五軒あつた故といふ說と二つある。主として坊主客を取つたのである、其坊主客が寺の隱語を用ゐて居るのは、現存の落語にもあるが、當時としては新しい穿ちであつたらう。其中に鯛を紫と云ふのは、背が紫色して居るからで、奥女中などの用語におむらとあるは、紫を略したのである。

音羽は現今小石川音羽七丁目八丁目にあつた岡場所、但し本通りではなく護國寺に向つて左側の裏通り、九丁目まで延びて居たが、皆天保年間に取拂はれた。青柳櫻木こきまぜてとあるは、古今集素性法師の歌「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」を採つたのであるが、青柳櫻木共に音羽の町名で前者は護國寺の前通り、後者は九丁目に續く町である。客の源六は半可通で、穴を知つて言はぬを通の本旨とするに拘らず、一々笑止しくけなして氣取つて

居る、之では冷遇されるも無理は無い「どふも何も喰へそふな物ァねへ」など天晴れ食通を氣取るなど悪い癖である。「婦美車紫野」（安永三年）に此里の遊女を評して「はり強く顔で人切る風」があると云はれて居るのであるから、一層ひどく振りつけられたのであらう。

いゝにくい事でござんすが、事とすべによつちやア、此土地をはき地にしてすもう取草にぺんぺん草、ばつたこうろぎ、きりぎりすを鳴かせる法も知つて居やす

と嚇して居るのは公許されぬ岡場所だから、とり拂ひ地にして見せると云ふ意で、源六が御家人らしい身分である事がわかる。其口吻全く「粹町甲閨」中に現はるる淀車と同じである。

要するに本篇は簡潔にしてよく土地の特徴、遊客の各種が描き分けてあるし然かも珍しい岡場所を題材にしたなど、蜀山の代表的作品と稱し得る、各短篇の劈頭と結末に流暢な謠曲句調の用ゐてあるのも此作者の常套手段であるが、垢ぬけがして居る。

▲大通多名於路志　原本　縦五寸三分 横三寸六分

聞言樂山人作　安永年間刊

書名は大通棚下しの萬葉ぶりである。大通を氣取る者多かつた時代、之に反感をもつ人の攻

撃の洒落本が多く出たが、之も其一つである。刊年は明記してないが本文中に

四五日頭痛をわづらはした所、朝鮮の弘慶子が藥でなかつたとき

とある。朝鮮の弘慶子は藥賣りで「半日閑話」に次の如く見えて居る

安永五年、朝鮮の弘慶子といへる藥を賣る者あり、其樣すぼき竹の笠を着て、壺を二ッ肩にかけ行く、去年より流行すともいふ

又「續飛鳥川」には、

朝鮮の弘慶子安永のはじめ（此所細長き籠の圖）如レ此笠をかぶり、壺をあみへ入、煎餅の樣の菓子を入、朝鮮のこうけいし、はつか／＼といひながら、うなづき／＼歩行、三四年にて止(やむ)

と見えて居る、後者は多少の記憶誤りがあるやうに見えるし、藥が本職か、菓子が本職か今日では判斷がつかぬが、滑稽本「當世杜選商(こじつけあきない)」（安永六年）の作者名に長川幸慶子とあり、落款にも弘慶子の笠と壺とが用ゐてある。之に據ると際物は陳套を排すると前提し前書の年代の方が確實のやうである。隨つて本書も先づ安永六七年前後の刊と見るのが妥當と信ずるのである作者の閑言樂(むだらく)山人は何人の匿名とも斷じ難いが、勿論普陀落のもぢりであり、或は雲樂山人と

同一人ではないかと考へられるのである。確證はないが、雲樂山人作の「無陀物語」の書名も内容にも何となく本書の作者と似通つて居る點が見える。殊に彼書の序の落款に無陀とあるなど、勿論「無陀物語」の書名から來たとは思ふが、本書の匿名と一脈の通ずる點あるやう感ずる。雲樂山人の傳記は本卷所載「無陀物語」の項を參照あり度い。

本書劈頭を謠曲に綴り音符まで附した凝り方である。偶偏傳(おでこでん)と云へる者、日本の洒落を試みんと遂に渡來し、長崎で遊興し錢無しとなり困つて居たのを魚釣の翁に救はれ、唐へ一時に吹返して貰つた、其翁は住吉大明神の末社であつたと云ふ話は、謠曲「白樂天」を採つたのである。唐では詩を作ると云へば、日本では歌を作ると問答する所なぞも全く「白樂天」から脱化して居る。

一篇の梗概は、意氣の國より出たる通丁と云ふ通人、色里にも遊び倦きて唐土へ渡らうと決心した時、向島で唐人陳芬漢に逢ひ、唐に行く事を止められ、大通の講釋を聽くと云ふ筋である本文中に、

我身をつめつて人の痛さを知れとは通のこと葉、野夫(やぼ)〳〵と口ぎたなくおろし、跡のつゞかねへみへなど云事は、通人のせざる所、どんな通達(つうたつ)でも二口(ふたくち)でも、はじめは皆ゝな野夫(やぼ)、

生れながら通人は千人に一人も有るか無し、通は通でとおり、野夫は野夫でもてる事サ、
筋のいゝ野夫は悪洒落さんよりかわいゝトサ。

とあるは、生れながら通人であつたやうな顔をして居る自稱大通の痛い所をちくりと刺して居るのである。髪や服裝で通人ぶるのは、出たての信濃者にも出來る事と道破し、

手前から通などとは思はぬ事／＼、人が付た通の字でなければ、変りなしの通とは云はぬ

と斷じた所など、平凡ではあるが當時の自稱大通には痛棒であつた事と察せられる。全篇輕く洒落のめしてあるが、内容には可なり眞剣な作者の不滿がほの見えるのである。

▲太平樂卷物　原本　縱五寸二分　横三寸六分

天竺老人作　安永年間刊

太平樂は支那周隋時代の遺音と稱せられ、又唐明皇の作る樂曲と云はれる、夫が日本の雅樂の一種として採用されて居る、夫が民間には轉用せられ、好き放題、口から勝手な事を言ふのを「太平樂を並べる」と云ふやうになつた、本篇の書名は此兩方にかけて用ゐたのである。本篇内題には「太平樂卷物　阿千代之傳」とある如く當時有名であつた船まんぢうお千代の氣焰

をあげる事を描いたものである。
作者天竺老人は即一世天竺老人（二世は森羅亭萬象）平賀源内である。同人の傳記は本大系第二卷所載「里の苧環評」の項に入れてあるから參照あり度い。
刊年は明記してないが、彼の入獄が安永八年十一月であるから、尠くとも夫以前のものでなければならぬ。然かも風來山人の滑稽本に最脂の乘つたのは安永七年以前であつたから、本篇もやはり其頃であらうと推定される。本篇は後「風來六々部集」に編入された。
本書序に「彼泥朗が得がてにしたる跖婦傳の趣にもをさ／＼劣るまじ」云々とあり、本文中にも「入江町に居さんしたお跖さんが三浦屋の高尾さんにいはんした通り」云々とあるのは、有名な山岡明阿彌泥朗子作の「跖婦人傳（せきふじんでん）」（寶暦三年）（本大系第一卷參照）をさすのである。本書は全く此書の影響を受け、本所入江町の夜鷹お跖が吉原一流の遊女高尾に向つて、商賣に上下の區別の無い事を道破し氣焰を揚げて居るのに、風來山人が共鳴し、船饅頭お千代が橋町の町藝者に向つて太平樂を吐くと云ふ構想である。船饅頭は船中で春を賣る私娼である、「守貞漫稿」に泊船に饅頭を賣ると云ふ口實で賣色した故であらうと云ふ説が肯定される。お千代は實在の人物で、本書に「ぼちや／＼の阿千代といふ船饅頭の品者あり、お千代だァなァ、こう

よつていきねェなァ、こうと呼びかける鼻聲もどうやら味に可愛らしく」とある如き態度で客を呼んだのだ。ぼちや〳〵の阿千代と呼ばれたのは、言ふまでもなく豐滿な肉體美の所有者であつたからである、之に種々な意義をつける人があるが此江戸語の眞義を解せぬからである，お千代が有名であつたので遂にはお千代舟の名稱まで出來るやうになつた。明和二年の川柳點に「お千代舟沖までこぐは馴染なり」後に至り紙張子の苫舟に人形を立たせたのを腰につけ、お千代舟と稱した乞食まで現はるるに至つたのである。

お千代の氣焔の中に「おもてをはる無駄がなければ、紋日物日のとんぢやくなし、錢がほしいと思はねば、客衆をたらすいつはりなく、ちよんの間のことなれは、色男ぢやとてうれしくもなし、ぶ男ぢやとていやでもなし（中略）いやなれば來す、客にうそなければ此方に手くだなし」と云ひ、藝者を罵つて「うはべばかりは娘の命でも、御本地は正はちまん、賣女からつりをとるとは、おめへがたの身の上ぢやぞえ」と極言して居る。要するに世に用ゐられずして不平滿々たる作者が、一種の階級意識のために揭げた放語なのである。本書にも作者が江戸生れならぬ上方訛が散見する、彼には狂文的洒落本は書けたであらうが、江戸詞を活寫する本格的洒落本は綴れたか疑はしい。

▲驛舍三友　原本　縱五寸三分 横三寸七分

秩都紀南子作　安永八年刊歟

書名は「論語」季氏第十六に「益者三友、損者三友」とある夫をもぢつたので、驛舍は新宿をさす、刊年は明記して無いから不明であるが、書中に「金龍山の織殿などといふ洒落がございましたらう」と云ふ對話がある、之は朱樂館主人作「大抵御覽」(安永八年)に紹介してあり同書に新に出來しものの如く記してある、又本書に　結城座で矢口の後日をした時、逢た儘だとつて、それから大のみさ」とある、之は福内鬼外(風來山人)の「神靈矢口渡」(明和七年興行)の後日として出來た「荒御靈新田神德」(安永八年結城座興行)をさす、又「矢口の作は平木辨内とやらの作だと申ますが、とんだ智惠者さうで御ざりますね」とあるのは、明に平賀源内をさすのである、彼が獄に故あつて入れられたのは、安永八年十一月廿日であるから、奈何に洒落本と雖、疑獄中の人物を題材とする事は當時に於ては遠慮されるであらう、之等から考證して本書は安永八年夏頃の刊行かと推定されるのである。

本書は後、外惚子序の「紀南子驛舍三友を著して」とあるを「馬糞夜話を著して」と四字を

改め入木し「馬嚢夜話」と云ふ書名で再版、更に又「穴學もん」の四字を改め入木し、書名をすべて「穴學もん」として三版を刊行した。之には新宿と角書が附してある、皆書肆のさかしらであらうが、刊年は明記して無い。

作者秩都紀南子はちつと來なんしの洒落で、狂歌師平秩東作の戯號である。平秩東作は狂號で、姓は立松、名は懐之、俗稱を稻毛屋金右衛門、號を東蒙山人と云ふ、元尾張の人、江戸四谷内藤新宿に住み、馬宿の株を有し、煙草屋を營んだ、寛政元年七月七日歿、年六十四。本書中に「稻野や林右衛門はこつちにゐるかの」とあるのは、稻毛屋金右衛門即作者自身をさして居り、こつちにゐるかは、新宿住居なる事を云つて居るのである。

本書は無有、雷尾、露時雨の三友が新宿に遊んだ描寫であるが、通人を氣取る雷尾、無有共に冷遇され、おとなしい露時雨ひとり厚遇されると云ふ、脚色は洒落本典型的のものである。露時雨の名は既に田螺金魚作「妓者呼子鳥」(安永六年)中の主人公たる色男として出て居る、恐らく暗合ではあるまい、何かモデルがあつて採つたと推測される。本書の前に新宿を題材とせるものに朱樂館主人作「賣花新驛」(安永六年)がある、本書は明に之を脱化して用ゐて居るのである。

さて丹公きいてくりやれ、せんど正燈寺の紅葉見に行つたれば、藏前の仙漁にあつた、去屋敷の客人が中近の半婦がとこへござるから、おれにもいつてくれろとか何とかいふから、ちよつと顏を出したが最期の助、仙漁もおれを片腕とおもつて放さねへ（「賣花新驛」）

聞てくりやれ、此中も本所の仙栗がとこで難波町の玉柳に逢た所が、今から藏前の山魚が所へ河東ぶしの稽古にいくと云から、（中略）それから行たがさいごの助、サアはなさばこそ（「驛舍三友」）

全く同じ口吻である、其他にも二三散見する、此藏前の仙漁又は山魚とあるは、例の十八大通の一人大口屋文魚をさすのである。

本篇の價値は、平賀源内、作者自身の噂などする點に存し、鄕土的特色は餘り描かれて居ない、其點は「賣花新驛」の方がすぐれて居る、中に現はるゝ新五左、武左も典型的で新味に乏しい。

▲變通輕井茶話（へんつうかるゐさは）　原本　縱五寸二分　橫三寸七分

山手の馬鹿人作　安永年間刊

變通は江戸の四宿岡場所ならぬ土地の通を述べて居るから變てこな通の義、輕井茶話は輕井澤のもぢりである。內題には「輕井茶話道中粹語錄」とある、道中雙六のもぢりである、道中雙六は柳亭種彥の「還魂紙料」に淨土雙六が最古く地獄極樂を步くやうになつて居る、之より轉じて出來たものであらうと云つて居る說が信ぜられる

本書の再版本は「黃花新驛」の序文一丁、同挿繪一丁を原板二丁を除いて挿入してある。其ため原本の序にある「山手の馬鹿人なり」の原文も娵捨山人書及蜀山の扇に巴の落款も除かれ、「朱樂館主人誌」が挿入され、一見朱樂菅江作の如く見えるが、全く前述の如き始末なのである、（本卷に揭載せる口繪を參照されたい）刊年は明記してないし未詳であるが、安永は下るまいと推定される。作者山手の馬鹿人は「粹町甲閨」の項に云へる如く大田蜀山である。

本書は序にある如く、當時の川柳點に輕井澤の飯盛を題材としたものが多い、例へば、

　　門守の折節通ふ輕井澤

苧をうんで居るのをと云ふ輕井澤

きぬ／＼に手綱かいくる輕井澤

馬を買ふ程でうけ出す輕井澤

江戸衆は數がいけぬと輕井澤

等である。洒落本で吉原、品川、深川、新宿、其他の岡場所も漸く描き盡して趣向に窮するに至つた、殊に新宿の描寫に先鞭をつけた作者は、更に地方の宿場女郎の描寫に先驅を成したのである　以後「田舍芝居」（天明七年）の芝居小屋の逢ひ引きの笑止味、「田舍談義」（寛政二年）の村出合の滑稽、更に「面美多勤身（おもひたつみ）」（寛政年間）の東海道宿屋飯盛の穿ちと展開して行つたのである、更に又一九の「膝栗毛」中の飯盛の描寫となつたのである、此點から見て本書は注目す可き作品と云はねばならず、同時に作者が奈何に新しい題材を採擇するに機敏、努力して居るかゞ了解出來よう。

本書は江戸の町人を連れた上方の商人が、中仙道を江戸に入る可く輕井澤に來て、飯盛を買ひ、風俗方言の異なる笑止味を描いたもので、上方商人の言葉は既に同作者の「世說新語茶」中變語の項に寫して居ると同型である、以後滑稽本殊に三馬、一九の作に同種の上方人が屢滑

稽化して用ゐてある。

書中に、

何さお江戸衆なんだァ信濃者とつて大喰のするやうにいはつしやりますけれども、私どもハそんだァじやござりましねへ、此位のぼた餅だら十七八もくへば澤山だもし

とあるは、川柳に信濃者は大食家として取材されて居る、例へば「一喰ひぬいて來ようと信濃國を立ち」「脾胃虚さと藪醫見立てる信濃者」（柳樽第五編）の類の如きを作品に誇張して示したのである。言語の通じぬ滑稽には、とんちきを寒竹と間違へ、正眞の卵と云へば玉子に精進なァござりねと答へる

【嘉】とんときさかなの無い所ぢやの、よう何所でも出すもんじやが、アノうづわとやらも無いかな【かる】アイうづわも少へげだで、高遠の御殿様が此前も廿兩とやらで買つしやりましけ

之は滿輪鰹を尋ねたのを、鶉と間違へたのである、高遠の殿様は上伊那郡高遠の領主内藤駿河守（三萬三千石）をさすのである。

百姓吝嗇五左衛門と馴染の遊女田毎との口說も可なり面白笑止しく郷土的情調が出されて居

る、此點は同作者の「甲驛新話」(安永四年)中に出て來る新田の孫右衞門とよく似て居るのである、一體に滑稽味に富み、勿論寫實ではあるまいけれど、實在感に滿ちた酒落本の異色として珍重す可きものである。

◆通志選　原本　縱五寸三分 横三寸八分

世滿里南鐐作　刊年未詳

見返しに北郭先生訂定、里于隣通志選とある、勿論李于鱗撰と稱せられる唐詩選のもぢりである、北郭先生は服部南郭が校訂出版したのを酒落れたのである、元來「唐詩選」は李于鱗の原撰でない事は古人既に說があるが、日本では李于鱗で通つて來て居る、漢學初步の者にでも常識となつて居る、夫を里于隣と訓んだので酒落にもならぬ、當字は故意に變へたものであらうが、于を干と讀んだのでは作者の無識さが察せられるのである。作者世滿里南鐐は、唐詩選に記してある撰者、濟南李攀龍(山東濟南府の李攀龍の義、于鱗は其字である)のもぢりである、南鐐は安永二年鑄造の二朱銀の名稱であるが、作者の傳記全く不詳である、次の如き理由で故意に匿名としたのであるからわかる筈がない。刊年も不明であるが、原本が安永六年の

刊行であるから、假に安永年間として茲に採錄したのである。

本書は「當世穴知鳥」（安永六年）の一部を改作し大部分を原板のまゝで襲用したものである、恐らく其出板元、神田鍛冶町二丁目池田屋傳兵衛から板木を求めた一書肆が、新版の洒落本に見せかけんとした窮策であらう。殊更に嚴しい見返しを附し、序文、作者名を變更し、更に本文まで改刪を施して居るのである。今其本文に就いて云へば、「穴知鳥」の十丁目から卅一丁目迄を採り、一丁目から九丁目までを改作した文で繼ぎ合せてある。今卷頭を對稱せしむれば、次の通りである、

花のもとに歸らん事を忘るるは美景によれり、樽の前に醉を勸じては、薫りくる春の風も山ぶき色の光りあらざれば、黄金の肌をさぐる事あたわず云々。（「穴知鳥」）

大道直如髪なる通町のほとりに淸助といへるものあり、十有五にして學にこころざしある人に問ふていわく云々。（「通志選」）

前者が和漢朗詠集春興部の「花下忘ㇾ歸因ニ美景一、樽前勸ㇾ醉是春風」を引用して居るのに、後者が「唐詩選」中儲光義の「大道直如髪、春日佳氣多」の一句を採つたのは、「通志選」の書名に意義あらしめんとしたのであらうが、夫きりで一向榮えないのである。同一の筋を綴つて少し

づゝ異なつて居る箇所を引用して見よう。

二十軒の湊屋の床几に腰をかけお六さん久しいのと茶を飲ながらも往來の女の貌を詠(ながめ)てゐる所へ長谷川町邊にて質商賣をする大和屋の手代喜し觀音堂の方へ行をちらと見付て大喜〳〵と呼かければ【喜七】「ハァ是は清助さま此間はすきとお目に懸りませぬと小腰をかゞむれば（「穴知鳥」）

兩國の茶みせに腰をかけ、おきやうほう久しいチと茶をのみながら往來の女の貌をながめ居る所へ油町の大和屋の手代喜兵衛といふものゝ通るをちらと見付て大喜〳〵と呼ければ【喜兵衛】へハァ是は清助此間はすきとお目に懸りませぬ（と小腰をかゞむればの句無し）

（「通志選」）

滑稽な事には主人公清助の俳名を清幸と呼ぶ事に「穴知鳥」ではなつて居るのを、本書では之も變へて清考として居る、然るに十丁目以下の原板を用ゐてある箇所になると依然清幸と呼ばれて居る事である。其所を入木する迄の用意は無かつたらしい。結末は原本三十一丁目の裏五行目で切り、原本卅九丁目表の最後の句を改刪して添加してある、卽「通志選」は卅一丁で終つて居るに拘らず、原本「穴知鳥」は卅九丁迄あるのである。

かゝる不德義な改版剽竊は、人情本噺本には珍しくないが、洒落本には餘り多く無い、此外では「一向不通替善運」(天明八年)を改版剽竊せる「相合傘」があるが、之は古板本を改版したと斷つてあるだけしをらしい。「面美多勤身」の作者名だけを改刪入木した「金の和良路」も同樣不德義であるが、原本に手の入れて無いだけ恕す可き點がある。本書の内容は本大系第二卷「一穴知鳥」の項で說いてあるから參照あり度い、茲には書史の一參考資料ともならうと考へ、本書の出來た理由だけを說く可く特に重複を知りつゝ採錄した次第である。

里靏風語　原本　縱五寸三分 横三寸八分

風來散人作　安永年間刊歟

書名の里靏は序文にある如く、吉原丁子屋雛鶴の俳名を採つたのである。雛と鄙と訓音相通じ鄙を更に里と轉じたのだ、風語は諷刺の語の義。風來散人は風來山人と同じで平賀鳩溪の別號である、刊年は明記してないが、「太平樂卷物」の項に說いたやうに、彼が牢獄に下つたのは、安永八年であるから尠くとも夫以前である。しかし最後の大悟和尙の詩に出て居る流行語から考へて見ると、かゝるものは古くなつたものを用ゐる筈がないから、本書は恐らく明和七八年

刊と考へられるが、便宜上茲に入れて置いたのである。

本書は中に説明してある如く、幡随院良行と松葉屋瀬川と法問答した説話に依つたのである。幡随院を萬随意院としたのは故意の變名であらう。此松葉屋瀬川は享保年間の名妓で、本名を大森たかと云ふ、源八と云ふ輕輩の武士に戀せられはねつけたので、父通仙無實の罪に陥れられ、奈良から京都、大阪と流浪し、狂歌師鯛屋貞柳の紹介で城代内藤侯の家士小野久之進に嫁したが、良人は旅で殺された、たかは母と共に江戸にあつたが決心して吉原松葉屋に身を賣り名妓となつた、享保七年四月三人の客があつた其一人は彼源八であり所持する佩刀は亡夫の所持品である。そこで瀬川は刀で斬りつけた、主人や同僚の武士に留められたが奉行所に訴へ、彼等の舊惡露顯し處刑せられた。瀬川は尼になり幡随院に入り剃髪し淺草に小庵を營み餘生を送つた。庵の壁に一首の和歌を貼りつけて置いたと云ふ。

池水に夜な〳〵かげは映れども
　水も濁らず月も汚れず

此説話は「野史」「積翠閑話」等に出て居つて有名である。本書に出て居る和歌は故意に之を變へたのらしい、特に瀬川の歌に至つては露骨な風來山人臭い詠と言はざるを得ぬ。幡随院は俠

客長兵衛で有名であるが、神田山新知恩寺と稱し淨土宗十八檀林の一、下谷稻荷町の裏に在る寺領五十石を受けた名刹である。

偖本書は丁子屋雛鶴が、淺草の庵室に住む大悟和尚を訪れ、法問答を試み、禪宗の所謂枯木寒巖流の生悟りなる事を說き、色道に遊ばん事を勸めた筋であるが、實は作者の最力を籠めて書いたのは前半で、雛鶴が現今の佛敎僧侶を罵倒した點であらう。

金襴の袈裟が掛たい乘物で七五三ふませたいと願はんす出世　も談義說法にいろ／＼軍(いくさ)ばなしして、役者の聲色つかふていき込がよいの、愁歎が能(よい)のと評判取てござんさんば、さん達にどら打たせ、鬮出して佛さんの押賣さんすも元は寺建立の爲、となりよりこちの門が大きい此處の須彌檀は能光ると人にひけらかして尊い寺は門からとたとへのふしに仕たいばかり

などと當り散らして居る、作者自身が世に容れられず社會的に用ゐられぬ不平を、僧侶の罵倒で僅に慰めたのであらう。後半の色道の講釋に至つては常識的淺薄さで、到底京傳などの深酷さに及ばない。大悟和尚の狂詩の中に「土平土平滂渚勢」とあるは、明和頃から來た土平飴の事であり「一道」「鐵瓜唐紫幹」は當時の流行語「道理でかぼちやが唐なすだ」を採つたのであり

一傾兮茶釜化藥鑵」は同じく明和年間に流行した「飛んだ茶釜が藥鑵にばけた」の語を譯したのである、其最後のものは、本大系第一卷「辰巳之園」（明和七年）に說明が出て居る。かゝる材料から云つて本書は可なり早い時代の洒落本である事がわかる。

▲舌講油通汚　原本　縱五寸二分 横三寸七分

南陀伽紫蘭作　天明元年刊

舌講は講釋の義、油通汚は油覺えの當字である。刊年は序に「安永十かのとうし」とある卽天明元年辛丑刊である。作者南陀伽紫蘭は浮世畫家窪田俊滿（或は春滿）の別號、其傳記は本卷「玉菊燈籠辨」の項を參照あり度い。

本書は大通の講釋から進んで傾城買ひの通を說けるもので、所謂傾城買指南の一種に屬する劈頭に、

七雨おどしの鎧を流し、丸角にて拵へたるかぶと頭巾を猪首に着なし、赤銅鍔に金ふくりんかけたるお太刀をはき名のつて出たるはしほやのこんのう、借金あまた引具して、ドウ〳〵と一ッ時に聲を上げ、洒落ころばす事日本堤も崩るが如し

とあるは、舌講と云つて居るだけ講釋の修羅場を眞似ねたのであり、中に丸角とあるは、本町二丁目袋物商丸角屋を利かせ、しほやのこんのうは鹽屋と源義朝の臣澁谷金王をもぢつた洒落である。又本文中、

したが、春町坊こたく山むだあん寺にて、いかん通說法をいたされた時も、か樣申てでござつたが、大通山入などと申書を見ますれば表德が大分書てござります

とあるのは杜選和尙（戀川春町の匿名）作の「無穎通說法」（安永八年）をさすのである「大通山入」と云ふ書は未見で果して存在するか否か、不明である　恐らく「大通傳」（安永六年）をさすのでは無いかと想像される。

本書に現はれた通の講釋は、一見通を敎へるやうに見えるが、實は當時の自稱通人の氣障さに反感をもつて之を罵倒して居るのである、「大通多名於路志」などと同じ傾向の作品なのである，本文中、

大ていは髮の毛より額を二分程ぬき上け、じゆばんの半ゑりをまとひ付て、茶の袖口に只紋を付けまして、帶はとび色なゝ子、親和織、大名筋、又は黑茶丸などしつかりいたして上品でござります。懷はかますに小菊をはさみ、おのしのは拾匁で出來たか、おれがのは

何の屋で壹分だよなどと、壹匁なりとも人聞を高く云ひ、

などとあるのに當時のモダンボーイの風釆髣髴として眼前に現はれる心地がするではないか。途中にあふみ屋花あふみの扇を抽籤で賣りつけるが、之は當時の名妓扇屋花扇と想像される。後座に於て客を分類し、客、半可、吉原好、色客とし、各其特徴を説明して居るが可なり鋭利な觀察であり、作者の纖細な感覺が人情の機微に奈何に動いて居るかを示すものである。山東京傳の「吉原楊枝」(天明八年)に吉原の遊客を六種に分類し精細に説明して居るのは、實は本書に暗示を得て更に一歩進んだものである事は、兩書を比較對照すればよくわかるのである。

かやう申せば戀の情にはうすかるべけれど、眞ッ實に惚れられたより、勤めに惚れられた方が、けつく面白く、ハテ眞實に惚れられたとて、女房にしやうでは有るまひし、よるべ定めぬ川竹の流れの身なれば、何れえ舟が着かふも知れず、さすれば、其一夜の情さへ深ければ、同じ事、それ共女房になさるおもいれなら御勝手次第

とあるなど、京傳に言はせると「一通り慰みに行く客」の分類に入れさうであるが、遊び共ものを興がる中年の淡白な江戸子らしい諦めである。天明元年は作者俊滿廿三歳の時である。果して之迄に悟れて居たらえらい、しかし當時の通人はかく執着をもたぬを通の極意と考へて居

たのである事は事實であらう。

▲記原情語（きげんじやうご）　原本　縱五寸一分　橫三寸六分

蓬蕩作　天明元年刊

記原情語は機嫌上戸のもぢりであるが、一面に起原を記す意味を含ませたのである、記原は起原の當字である。序に安永十年うしの春とあるが、同年は改元して天明元年辛丑である。作者は序文に依れば淺草の行過となつて居るが、勿論烏有の人物で、序文を書いた、牖村の通人忍堂のあるじ、蓬蕩が作者であると認定される。但し其傳記は未詳であるが、口繪の船繫松と云ひ、文中に日ぐらし邊に庵をつくつた事と云ひ、篇中の主人公洛水は蓋し作者の經歷を語つて居るのでは無いかと想像される。船繫松は大田蜀山作「世說新語茶」に「烏がかあ〳〵はやほの〴〵と朝霧の、島がくれゆく船繫松」とある夫で、道灌山上青雲禪寺にあつた老松である作者或は日暮里之隱士と稱した一竹齋達竹（黃表紙「金々金平」の作者、安永九年刊）と關係がありはしないかと想像するが、依然確實ではない。

本書の梗概は酉年生れで吐雞幸次郎と云ふ者、京都で放蕩し盡し江戸に來て日暮の里近く庵

室を構へ洛水と號し閑居する折柄、淺草の十八大通の一人行過（ゆきすぎ者の意を採つた）尋ね來り、遊里に關する諸事物の起原を質問する。洛水盛にこじつけの說明する、續いて近所の氣強五郎（きやんは俠の唐音で、氣負ひの義である）も來り賭博に關するこじつけを聞いて感心すると云ふ筋である

本田髷を譽田の皇子が結ひ始められたと云ひ、八丈は城木屋手代丈八が貰つて喜びの餘りひつくり返つたので八丈と稱するに至つたの類、皆黃表紙的なナンセンスの笑止味である　本書中の名詞で當時行はれたものに就いてわかつて居るのを說明すれば、くらまへ本田は藏前の札差連の大通が喜んで結つた髷風である。「葛西太郎といふ故にこいを賣ますといわれて洛水へらすロ、なるほどこいをとる故孫四郎とも申ます、しかしこういふむさしやな嘶は外へは御沙汰なし」とある葛西太郎は向島牛島弘福寺に近くあつた川魚料理屋、中田屋の主人の名、鯉と肥料との洒落、むさしやな嘶は武藏屋とむさいとをかけた、武藏屋は同じく牛島に在つた川魚料理屋武藏屋權三郎である。「今專世に時行めくり」とあるは既に本卷「咲分論」に於て說いた。金吾とあるはめくり骨牌の札から十一、十二を除き、四種四十枚を以てするもので、順に札をめくり十五の數に近い程勝つやり方である、

越後の韓信は千人のまたをくぐり、六孫王經基は米をふみながら書物をよみ、太閤はすぐなる針にて釣をたれて天下の主となり、或は佐藤兵衛則清と云ふ北面の侍最明法師となりて不二山を詠めて名をのこし、ひげの利久は吉原にて茶をたて

謙信と韓信、六孫王と陸佃、太閤と太公望西行と最明寺時頼、利休と鬚の意休の混同、奈何にも江戸つ子の喜びさうなノンセンスである。梅亭金鵞の「妙竹林話七偏人」(安政四年)に

鬼の蝨だから鳴かねえとも言はれめえ、既に刀鍛冶の名に鬼の蝨鳴きやすといふのが有るぢやァねえか」そりや波平行安といふのだァ「ハヽァ少しの間違だ、全體先の辻番で教へ様が悪いからサ「道理は虎は雪隠へ逃げ込んだのを、和藤内は大門をはひつて、仲の町の方へ追駈けて往つたつけ「夫れをサ、猿が花さき老父の握飯と取りかへた柿の實をとるとつて、かち〳〵山の土船で見物して居て、下足をとられたとヨ「フヽムゥ其の時だ、築地に火事が無くつて萩畑で野猪が寐ぼけたら、芋虫が灸をするようとして、阿彌陀さまの背中へ線香の灰を落したもんだから、番太郎で拍子木をたゝく様になつたのは「何でも犬がもう〳〵とないたから、是は鳥鳴きの悪いことだと思ふと、銚子の濱で東埔塞がとれたといふ評判、夫れを思ふと地獄の汰沙も金次第で、何も日輪さまが東から西へ綱わたりをし

て見せようといつて、世界々々を土間に仕切つたといふ譯ぢやァ有るめえし、彌次喜太八が階子を買つたのを怒つて、曾我五郎十郎が義太夫をならふにも及ぶめえサ

とあるのと同じやうなナンセンス振りで、時代は遙に七十餘年も隔てて居るが、何時も變らぬのは、江戸人の輕快な無駄と云はざるを得ない。

▲傾城異見之規矩　原本　縦五寸三分 横三寸七分

堪忍菴呉綾軒作　天明元年刊

傾城異見之規矩は、紀海音作「傾城無間鐘」（享保八年七月豐竹座上演）のもぢりであるが、自序に「傳え聞く無間の鐘はその價、三百兩とかや」とあるに依つて見れば、竹田出雲、文耕堂等合作の　ひらがな盛衰記」（元文四年四月竹本座上演）に現はるる傾城千歳屋梅ヶ枝が手水鉢を鐘に擬して打つ說話をとつたのである，二番目狂言として「無間の鐘」で上演せられるからである。例へば安永四年春、市村座に於ける瀨川菊之丞所演の如き是である，作者呉綾軒は有名な「柳樽」の編者と同音であるが、彼は呉陵軒可有であるし、之は呉綾軒である、跋に依れば五兩と呼んだのを替へたのである、勿論洒落であらうから眞面目には考へられないが、此

兩者は同時代の人であつて同音異人と斷ずるのを妥當と考へる、而して吳綾軒の傳記は全く未詳である。

本書の內容は遊女に對する心得であつて「金枕遊女相談」の項に云へる如く此種の作品は尠く珍しいのである。だから本書の始めにも、

按するに今迄、勸通懲野之書、數多有りといへとも、娼婦の心得を書たるは餘り不レ見故今爰に記す、素(もとより)娼婦に異見するは、諸客自ら共意を悟れとの誨なるか

と自讃し注意して居るのである。かゝる書を發表したのも眞に遊女に見せる目的よりは、かゝる遊女の態度であるから諸客も心せよと、男性に注意を促したのである「諸客自ら共意を悟れとの誨なるか」と云ふ點に無限の味がある。之は「金枕遊女相談」も同様の趣旨と考へられる本文中に

むかしより全盛の娼婦も金持の大盡に馴染は、もしやゐりもとにつく歟といやしめられんと思ふにや、多くは爲になる客に不他する事あり

とはいみじくも道破した遊女の弱點である、金故束縛されて居ると絶えず壓迫を感ずる遊女達の心裡をよく見て居る語であらう。

何と歎いひし本にも有る通り、内に居る親方朋輩の目にさへかけぬ色事を、たま〳〵行ものに知らせやう筈がなしと有り

とある此事は、本卷に納めてある「舌講油通汚」(天明元年)にも

傾城の心を見分けると申す事は、めつたには參りませぬ、ハテ同じうちの朋輩遣手の目にさへ見えぬ色事をなんぞたまさか參る客の目に見せてつまるものでござりましよふか

とある、之は既に「啓蒙通人講釋」(安永九年)に、女郎の心と申ますものは、金を出して買う客には、どふいたして知れるものではござりません

と說いて居る。奈何にして遊女の本心を知らうか、夫があらゆる遊客を通じての眞劍な悶えであつたに違ひない。

本書は先づ最初に遊女の心得を述べ、最後に客妓雜話の項を置き、遊女と客との關係を說いて居る體裁がよく、纏つて居る。「推は粹也、當時の大通也」と喝破し、

互に一ッ心の眞(まこと)をもつて交る時は、何ぞ證據に及ばんや、そのわけはいかほど疑はしき迚、我が女房に指切れ、髮切れとも云はれまじ、けつく其女房にうしろくらき事まゝあり、とかく色道はかんにん第一にして、少し疑しき事有りともこなたさへまことを盡さば、おの

づと先の志もしるゝ也

と說いて居る。作者は誠にわけ知りの伯父さんとも云ふ可き人柄であつた。

▲公大無多言　原本　縱五寸　横三寸六分

行成山房大公人作　天明元年刊

書名は廣大な無駄言と云ふ義であらう。作者行成山房大公人とあるが序の落欵に山蝶とあるから「青樓樂種」(安永四年)の作者雲中庵山蝶の事である。彼の傳記は同書所載、本大系第二卷を參照あり度い、彼の狂號を諸事行成と云ふから、行成山房と稱したのである。

本書は吾妻庵通雷が大通人講談并傾城買秘事一子相傳の札をかゝげ講釋する所へ、豆本田の似田山、西國武士、若息子と聽講に來るのを、通雷は食客平樂といろ〳〵勝手な講義を聞かせる筋であるが、通雷が第一怪しげな大通の上、平樂に至つては自稱通人の氣障男であるから、言ふ事が、出鱈目である、作者の目的は大通を氣取つて居る者に眞の通人なしとの斷案を下す心持であらうと考へられる、

文中親和流と云ふのは、深川油堀附近に住んだ富豪深川親和、本姓三井孫兵衛、有名な書家

である、其流義の書風。「おめへの御國ちかくのとう人のつうじとは大きにちがひ」とあるは、肥前長崎の支那人相手の通譯を通事（又通辭とも書く大小通事がある）と云ふのと通人とを此西國武士が混同して居るからである。洒落本に現れた通事には、「和唐珍解」（天明五年）がある「木場の親仁を親玉〳〵といふ樣なもの」とあるのは、四世市川團十郎（俳號五粒）が深川木場の夜雨庵に住居したから云ふのである。俳優を親方と云ふは彼からだと稱せられる。文中

　たとへ盃のさばきやせじが惡くひたひが小さくても、まつすぐにとおりを行がほの通ョ、

　それをいまは惡く考へて、始終は辨魚鬼洞を見るよふにいきをしねェけりやァならねェ。

とある辨魚は文魚で、例の藏前の大口屋治兵衛といふ十八大通の一人をさすのであらう。鬼洞は日本橋西河岸の材木商山城屋太郎次、俳號を十曉と云ふ男ではないかと考へる。同じく十八大通の一人。文魚が晩年零落した事は、山東京山の「蜘蛛の糸卷」に出て居るが、何年頃であるか明記してないから、斷言は出來ない。

　何にも知らぬ田舍武士に通人になり度くば先づ封祿を捨てる氣でかゝれと敎へ、若息子には「馬鹿をいゝなさんな、おやじがやかましくば勘當受けたがゐゝ、やぼらしゐこの道にはまつて勘當をこはがつてたまるものか」などとけしかけて居るのは、確に作者の諷刺と考へられる。

通雷の云ふ事だけは流石に筋は徹つて居るが、平樂などを相手にしてお山の大將然と構へて居るやうでは、大したものでもない。一　に明確な捉へ所のない議論ばかりで、一向に通人になる可き奇警な穿ちも見出せぬ、而して鹽屋ばかり竝べられては、半可通の豆本田ならずとも愁り出すのは當然である。作者がそこを描いて無多言と云つたのならよく當つて居るけれど、もう少し深刻な穿ち、讀者の腹をえぐるだけの材料があつてほしい。例へば金魚作の一十八大通百手枕」（一名一傾城買指南所」）中に竝べられた遊女の數々の如き苦心である。本書には何等そんなものが見出せぬ、抽象的な獨よがり許りである。

▲眞女意題　原本　縱五寸二分 横三寸六分

森羅萬象作　天明元年刊

眞女意題は神明臺の萬葉ぶり、芝神宮の境内をさす。芝神明は俗に飯倉神明宮と云ひ、飯倉から神明町に移轉した　其處の岡場所を題材としたからの命名である、作者森羅萬象は、森島甫齋、又中原中良と云ふ、字は虞臣、通稱萬藏、桂林、森羅萬象、森羅亭萬象、萬象亭、二世天竺老人、二世風來山人、源平藤橘、築地善好、月池老人等の號があり、狂名を竹杖爲輕と云

ふ。江戸の人、平賀鳩溪の門人、森羅萬象の號も實は師匠のものを貰つたのである、學は和漢蘭に渉つた 寳暦四年生、文化五年歿、年五十五歳、本書は洒落本としての彼の處女作である。作者も初作だけ可なり努力したらしく、珍しい芝神明を題材とし、序文の落欵には神明名物の日つかち生姜と、ちぎ筥を用ゐたなぞ、仲々の凝り方である。本書の中心は云ふ迄もなく、東北の武家陸野奥右衛門の登場である、詳細な東北辯の註釋を加へ、自由に方言を喋べらせ、性の要求に鐵面皮な新五左の面目躍如たるものがある。本文中、

「ヱ、おもひ付でもねへ、そのくれへなら、あすこのかげま茶屋へ行なんしな

とあるは客が變な要求をしたので、此境内の陰間茶屋へ行けと云つたのである、之も當時湯島、芳町と相竝んで有名なのであつた。此田舍侍の描寫は、

大田蜀山作「世説新語茶」の傳五衛門、同じく「甲驛新話」の新田の孫右衛門等から脱化したものであらう。方言研究としても有益な好資料である。

忠七おかのの情話に至つては情痴纏綿、素人時代の初戀で互に忘れ難くも今迄再會し得なかつたのである 忠七の主人芝口の鼻紙袋屋の娘がしかける戀にも目もくれぬ有樣・ 契情買虎之卷」(安永七年)と相俟つて人情本發祥の素地が現はれて居るのである。

雲海とお市の話は、場所柄增上寺末寺の坊主客らしく、神明の情調を表現するには肝要な場面と云はねばならぬ。

【市】ヲヤ氣味のわりい、おめへすつぽんを喰なさるか【雲】ウ、サ橋池のすつぽんはみんな腹へ葬ァ、またおこしや落雁でそだつたから精進物も同前さ

大方辨天池のすつぽんを退治たのであらう。勿論誇張もあらうが、當時の坊主の風俗が想見される、一人の圍者を二三人で共同で持つなど、明治以後も珍しくは無いが、坊主だと思ふと呆然たるものがある。

劈頭芝神明の祭禮の叙景。今では境内が非常に狹められたが、圍んで居るのは岡場所に似た藝者町で、生姜、ちり木筥の昔のやうに出るのも懷しく此文の光景と似て居る。祭禮は九月十一日から廿一日、俗に生姜祭、或はだら〳〵祭と云つて居る。

▲當世繁榮通寳　原本　縱五寸二分 横三寸六分

隨雜齊（齋の誤）作　天明元年刊

書名の繁榮通寳は寛永通寳のもぢり、序に「四海波錢しづかにて」とあるは此ためである。

作者隨雜齋は傳記未詳。

本書は未だ天明三年の關東大飢饉同六年江戸の水火災等に遭遇しない時代とて、劈頭に不景氣の吹き初めたのを、各人の態度よろしからざるためと誡め、轉じて江戸の繁昌を描き太平の餘澤を樂む市民の心持を表現したのであるが、中に當時の流行、風俗等を描いてある一種の繁昌記で、洒落本變格に屬する狂文である。

本文中、

天正(めくり)は天地の利をひやうし、まづ持たる札はこれ則天なり、めくるは地也、合てとるは陰陽和合、黑札にまくはこんとんいまだわからざるかたちなり、二人(さし)でうつは夫婦にたとへ、手に持つてめくるは陰をわかつ、三人にうつは天地人三才なり、七まいづつまくは七ようはぐん、場札六まいは六氣をわかつ

はめくり骨牌の流行に因んだのであらうが、其口吻は全く本卷所載「唉分論」を採つたのである。次に、

近年は大ぶん田舍が横着になり、地頭へ年貢を納るときは風が吹て損毛いたしたの、いやうへつけに水がなく不作つかまつたりと針ほどな事を棒にいゝなして、始終は年貢をまけ

てもらい、そのうへ百姓不相應なおごりをきわめ、仲間の出合に座席をあらそひ、士民と呼るゝをいやがりて帯刀をのぞむやからまゝあり

は階級制度儼然たりし江戸時代に於ても、無意識的な階級意識の擡頭を見る事が出來る、一部の人の言ふ如く現代の農民達のみが、階級意識に目覺めたのでない事がわかる。作者が次に「百姓は百姓ほどな果あり、外をのぞむべからず」と云つて居るのは當時としては當然の口吻であるが、今日から見ると大地主、資本家らしい態度が笑止しい。農民がかゝる態度をとるのも田沼時代の下役の執政振りに依つたのであらう。

漸進んで江戸の繁昌記となつて居る、日本橋の魚市、新川の酒藏、上野飛鳥山の花と轉じて居る。本文に「らかんじに螺堂たかく」とあるのは、本所五つ目に在る天恩山五百大阿羅漢禪寺の蠑螺堂をさす、安永九年の再建であるから、際物の尖端をきつた所である。願人坊主、八文の雛助、鶴吉、松井、井上、けし之介等皆大道藝人或は門附乞食の類で安永頃流行せるものである。

最後に大通の話になつて居るが之も強ひて大通の講釋をする態度ではなく、流行物の一とし取扱つて居るのである。本書は全く江戸を讃美し太平を謳歌する心持であるらしい、「別して

御江戸のありがたさは一ッとして不足なく」と云ひ、最後に「太平の御代にうまるゝ事ありがたきしたいなり」と語つて居るのは衷心からの作者の心持であらう。

▲通仁枕言葉　原本 縱五寸二分 横三寸六分

蓬萊山人歸橋作　天明元年刊

書名は通人の常套語と云ふ程の意であらう。作者得意の深川を背景とせる書で、序に「櫓仲町、裾土橋、大通不通、家暮いろま、屋舖衆息子集りて、みなそれ〳〵の樂しみを、同らぬ筆にて著わせども」とある、各自の趣味の樂を描くと云ふ點に、創作の中心がある、比較寫實の手法の著しく現はれてる作品だ。

書中の人物が一擧、二指、三爪、四開、十合などと命名されて居るは拳の術語を其まゝ用ゐたからである、今「拳獨稽古」（文政十三年）に據つて記すと、

一いい、いつけん、二りやん、りやんこう、三さん、さんこう、四すむい、すう、五ごう、ごうさい、六りう、りうさい、七ちゑ、ちゑさい、八ぱま、九くわい、きう、十とうらい、とい

洒落本黄表紙の作者唐來三和は此拳の十と三の數をとつたのである。生花が流行した事を描いたのは際物の穿ちであらう、倂彼等息子株が噂して居る遊女おなんの話、男藝者佐名太夫の話、乘太夫が座敷見臺を貰つた話等皆事實談と思はれる、新聞雜誌の無い時代に、かゝる花柳界、演藝界のゴシップは喜ばれたに違ひないも、かゝる事の見聞が廣く新しいのは通人の一資格として作者の得意とする所であつたらう。

倂轉じて舞臺は山本の座舖となるが、四開が故意に居ない男藝者の名をあげるのも、深川通ならでは出來ぬ所である、四開はおたよに眞劍の戀をして居る、夫が久保非と云ふ客に出て居る事に付き嫉妬と焦慮を感じ、切れるか切らすか最後の手段に出でんと決心する所、平常茶ばかり言つて居る通人の態度から一轉して、人間らしい若者の心になり切つて居るのである。

本篇に現はれる山本、梅本、尾花屋は云ふ迄もなく深川門前町(當時の仲町)に在り鼎立した大きな茶屋である。「コレ仙丁、深川拜見といふほんを拵へよふとおもふ」とあるのは「富賀川拜見」(天明二年)を同作者が發表した其腹案を宣傳して居るのである。「此あんかといふは小き箱に入し火はち也、俗呼んで辻ばんと云」とあるのは現存の安火で、わざ〳〵說明してあるのが笑止しい位であるが、之に依つて安火の起原が略推定されるのも興味深い。

「升屋の普請能く出來た」とあるは、深川洲崎にあつた升屋祝阿彌の料理茶屋で、雲州侯の隱居南海等が隱れ遊びし有名な家である、明和頃から在つたのだが、此頃更に新築が出來たものと推測される。

本書の脚色はあまり纏つて居ないのは、最新の事實ばかりを選んで綴つた爲であらう、最後に作者の名が現はれて居るのは、同作者の作物によくある手段である。

▲東西南北突當富魂短（つきあたとみのたん）　原本　縱五寸二分 横三寸六分

西奴（せいど）作　天明元年刊

當時流行した富鬮の當り番號に擬して、第一番札を吉原、二番品川、三番新宿、四番深川、として其遊里の魂膽を描き書名としたのである、刊年は序に安永辛丑とある、即安永十年改元して天明元年である。作者は西奴とのみあり、傳記未詳、唯南陀伽紫蘭（黄山堂、窪田俊滿の別號）の序があるので、同人の友人と想像されるだけである。

當時富鬮の流行した事は諸書に見えて居る、江戶で最古いのは谷中感應寺の富鬮で、享保二十年に始められた、其他湯島天神、芝神明等でも催されたのであつて、多く寺社修理の費用に

當てると號し官許を得たのである、大は千兩當り、小は百兩當りの鬮であり、其抽籤法は、發行した札數だけの番號札を桐箱に納め、小孔をあけて錐で突き上るのである、本書名に突當てたとあるは之を意味するのだ、一枚の富札は一朱內外で賣買され、發行札は千枚以上數萬に達したのである、其最流行した時代には、

富流行よりして、三芝居其外遊所淋敷なり、只食物の結構なる事と、賣れる事、今より增ることとよも有まじ

と「續鳥飛川」（文化年間）に記してあるので窺知されるであらう。本書序に

此頃世上一統の札買（かう）七千五百枚三匁で金百兩とは、海老で鯛とか帶で松魚を食つたかと中ゝたとへる事も有まい

とあるを見れば、此富札は一枚四百八十文で百兩當りの鬮で餘り大規模の物ではない。口繪の富札は、實は各遊里の遊女の相場を記したものであるが、當時の細見に依れば、大籬の太夫は九十匁即一兩二分であるから、茲に記してあるのは勿論小見世の最低額を示したのである。

本書中にある「拾番目の節のあたりこんな事なるべし取ても何の足（たし）にもならず」「花位の事なるべし」「一チ富の袖のあたりはこんな事なるべし」「い貳の富のあたりこんな事なるべし」な

どとあるのは、皆富闔用ゐる術語で、節の當りとは、一番の當り番號から以下五番目毎の當り札、又十番目毎の當り札、五十番、百番之が總計廿一ある、之を節と稱する、中で大金の取れるのは、一番、五十番、百番の三札で、他は若干の金が貰へるだけである、であるから十番目の節のあたりは取つて何のたしにもならぬと言つたのである。花とは花闔で、當らぬものゝ慰めに番號に或規約を設けて若干の金を與へる事をさす、一チ富の袖とは、兩袖附とも云ひ、一番の當り番號の前後の番號に若干の金を與へる規約を稱するのである。い貳の富の當りとは、千兩富の如き多數の札を發行する時は、番號數の大きくなるを防ぐため、最初から札を松竹梅、春夏秋冬、いろは等に分けて發行する、其いの貳番當りの義である。最後に「五十目の突留」とあるのは、此富闔は序にある如く百兩當りの小規模のものであるから、五十番目が最後の當りで、鍵の突き仕舞ひと云ふ事である、

　本書は此際物の富闔の穿ちを遊里に用ゐた所に作者の興味が存するのであつて、遊里の描寫は、客も遊女も概念的な觀察しかしてない、些の深みも鋭さも見出せない。

▲にやんの事だ　原本　縦五寸二分 横三寸六分

止動堂馬呑作　天明元年刊

書名は何の事だを猫の啼聲に利かせたのである、向兩國附近の岡場所の遊女を金猫、銀猫などと云ふからである。作者止動堂馬呑は此書の外に、伊勢古市を題材とした「惠世物語」(天明二年)があるが傳記未詳である。

本書の題材は序文にある如く本所一つ目の岡場所をとつたのである。一つ目の岡場所は兩國橋の川下、立川の一の橋際にある辨天社境内の南側に在り、俗に八郎兵衛屋敷と云ふ、通人は之を辨天とも云ひ、序に「人を呼ぶに手を叩かすに疊をたゝく風有り」とある如く、手を叩かす二階の疊を叩いて知らせる風俗のあつた所である、現今の本所區千歳町に當る。黄表紙の「通鳧寝子の美女」(安永七年)も亦此邊の遊女を題材としたものである。本文中「此あつちらにおたびといふ女郎屋がござり升がね、いつか角力の時めへりやしたがきたねへ所でござり升、」とあるのは、隣接した深川御船藏前町にあつた岡場所、最初安宅とも云ひ後御旅とも稱した、深川八幡神輿の御旅所だからである。

本書は自稱通人の凉風、取卷きの髮結傳六、息子幸次郎の三人が遊びに行き、各床に入る所までて何等の脚色もない。卷末の口上に、之から先きの趣向は讀者が各自考へて呉れと云つて逃げて居る。誠に狡猾な手段で、讀者の方でにやんの事だと言はざるを得ない。特に辨天の特色も描かれて居ず、一向つまらぬ駄作である。かゝる小冊子をも刊行するに至つたのは、洒落本が一部に非常に歡迎された故と考へられる。之に比較すれば、內新好作「一目土堤」（天明八年）の方が遙にすぐれて居る。同じ一つ目辨天の描寫であるが可なり精細に書いてある。一體此地はあまり特徵も無さ相であるから描くに困難とは考へられるが、本書の如きは餘りに飽氣ない。唯卷頭兩國橋の夏の夜の描寫は巧でも無いが、大江戶の面影がほの見えて懷しい。

▲三都八名話　原本　縱五寸三分 横三寸八分

闇連坊作　天明元年刊

三都假名話は三金輪で三鼎と同義、三方相對立する意、市村座の二番目狂言が、三都に背景をもつものを三日替りに上演せしめたのをさす、三都は共意を含むのだ。作者闇連坊は傳記未詳であるが當時の劇通であるらしいから、烏亭焉馬等の仲間であらう。

本書の題材は葺屋町堺町の大火を採つたのである、安永十年辛丑春（四月十三日改元、天明元年となる）此兩芝居町は火災にかゝり殘らず類燒してしまつた、間もなく再建し、中村座は「色里通小町曾我」切狂言「在原系圖」市川團十郎、澤村宗十郎、中村仲藏、尾上松助等の一座であつた。市村座は此本文にある如く四月廿五日開場「戯場花萬代曾我」二番目狂言は、江戸、京、大阪の三ヶ津に取組ました二日替りの狂言、「お夏清十郎、道行比翼の菊蝶」「お千代半兵衞、道行垣根の結綿」「お半長右衞門、道行瀨川の仇浪」で、お夏、お千代、お半三役が三代目瀨川菊之丞（路考）、清十郎が市川門之助、半兵衞が阪東三津五郎、長右衞門が松本幸四郎であつた　本書で盛に噂して居るのは此狂言なのである。

錦考丈とあるは四世松本幸四郎（高麗屋錦江又は錦考）、是業とあるのは、二世阪東三津五郎、秀鶴は中村仲藏、新車は二世市川門之助の皆俳號である。此友とあるは一世大谷友右衞門の俳號である

本書は最初から「評判記」風に書いて行き、書中に現はる奥女中の役者贔負の爭論から、いつか塲の老女岩瀨の小言と轉じて居るのである。武家育ちの岩瀨の頭はまるで江島屋其磧作「世間娘氣質」（正德六年）に出て來る浪人の娘が、

お言葉を反くは不禮ながら、常々親共の申付けしは、月雪花の眺めは格別、其外の見物事は四座の能の外は女の見る物にあらず、殊更當世の歌舞伎狂言、いたづら事を第一にたてて不作法なる行跡をして見すれば、人たるものの娘の見る事は勿論、又咄に聞く物でなし

と堅き誡、是ばかりは御免あれ

と叫んで町人の亭主半四郎を凹ますのによく似た堅人である、與家左根森通太夫の辯解は少々苦しいが、作者は之で立派に理窟がついたと考へて居たのであらう。本文中「風來先生が飛んだ噂の評」とあるのは安永七年單行本に刊行され、又「風來六々部集」に出て居る狂文で、五代市川團十郎が二世市川八百藏の寡婦と通じた事を記したものである。「白石噺じやないが」とあるは烏亭焉馬等作の「碁太平記白石噺」をさす。

本書卷末に八月中旬とある、彼狂言の終つたのは、六月三日であるから、其間二ケ月半に過ぎない、本書が際物をねらつた作品たる事が推測される。但し本書は演劇に關する滑稽本の一種に入る可き內容をしか有しないから、嚴密な意味で洒落本には編入出來ぬものであるが、其他に「田舍芝居」（天明七年）「田舍談義」（寛政二年）等もあり、外形で洒落本の體裁をなして居るから變格物として入れて置くのである。

▲無陀物語　原本　縦五寸四分　横三寸九分

雲樂山人作　天明元年刊

書名の無陀は無駄、徒の如き字を當てるが、江戸語では役にも立たぬ語を發する意で、洒落本滑稽本では閑言、空言等の字が當ててある、今日で云へば言語上のナンセンスなのである。但し茲では序文に「予また此書をあむ是も　の御茶湯にもならず、元よりむだなればこの書の題號に困つてむだ物語としるすもおかし」とあるから本來の語意によつて命名されたのである、しかし内容から見ると後者の語意の方が當つて居るから、笑止しい。

作者雲樂山人は、狂歌師雲樂齋と同人と推定される、通稱朝倉源之助、江戸牛込逢坂に住む幕臣、「愚人贅漢居續借金」（天明三年）に依ると大田蜀山、蓬萊山人歸橋、朱樂菅江、志水燕等と親交があり、然かも一番年少者であつた事がわかる。「徳和歌後萬載集」卷八及卷九に

奴僕戀　　雲樂齋

いつとなくよい中ぬきもあしざまに
踏みつけられてうき草履取

寄燈心歌

筆にさへかきたてられぬ燈心の

戀にこがれて身もやせ男

などの狂歌が散見する。

本書は秋草庵で僧と山伏と論爭し、僧の勢强く見えたが、似田山（半可通）にやり込められる時、醫者現はれ、其效能書きを並べる、末座から占者現はれ醫者をそしり玆に兩人の爭ひとなつたが、神道家は占者と共謀して金銀を貪ると云はれたのに立腹し神道の有難さを說く、すると遊女現れ神職が自分をだましたと恨を述べる、神道家辯解すると、儒者之を嘲る、遂に儒神の爭ひとなり似田山亦口を出す、大通先生が之を公平にさばくと見たのは一場の夢であつたと云ふ筋である。

作者の主意は次の一節に存するのである。

穴を知るを通と心得、下卑をいふを栖（洒の誤字）落と覺つて太平の卷物を並べる、大通は穴を知ておどかす、似田山は知らぬ穴を知つた顏（中略）そこに御座る儒者殿もこの似田山にひとし日本に生ながら我國を嘲て夢にも見ぬ毛唐人の國を稱し君子國に生れたる

忝事を忘れ

要するに一道に生悟り、不徹底な癖に高慢なのを攻撃したのである。

本文中當時の江戸人には常識で、現代人にはわからなくなつた語が多く見える、例へば「鹽屋噺し」は自惚れのろけ話の義、「鼠木戸のなき切落しのごとし」の鼠木戸は芝居の入口、切落しは芝居小屋の平土間の一部で最安價な座席「紅葉山の鳥のことし」の紅葉山は江戸城内の庭園の一部、獵をしないから鳥が群集するのに喩へたのである。醫者の言に「後制家も古法家も」とあるは古方家後世家の誤で、古來の漢法醫家と、金元時代に起つた新しい漢法醫家の事である。

本書は大通と半可通とを論ぜんとして少しく脱線の氣味があり、風來山人の狂文に似てあれ程鋭くない作品である「大通多名於路志」の項に說ける如く、彼書と本書とには何となく一脈の連絡があるやうに感じられるが、文だけで見れば彼書は柔く圓轉滑脫で、此書は文中の人物のせいかごつ／＼と硬い感じがする。

大通俗一騎夜行

大通俗一騎夜行序

四時行百物生天何言との言葉實むべなり造物化する其例多し世に行るゝ怪異の說は細雨の夕ア雷の暮〻白妙にあらハれ出る言草のこなり斯戸ざゝぬ御代靜なれハ怪異の有べきことにしもあらず予筆に言ゝもて行ハ各〻世に行ふなまめかしきこと亦は名聞くるしき言葉つき〴〵しきを拾ひ集て我師　鳥山翁の畫給ひにし百鬼夜行の標題にもとづきて一騎夜行と表す初に優にやさしき男と心も猛きいとさう〴〵しき人玉の盃底なき霞吸分て世の名聞を問答なし次に見越入道の古る事ハ藝術も人の上こに立んことを戒めあやしの狐火に突打者のひ

かりかすかな物語は幽霊の話に妓女小鬟の慎ミを書つとひ羽を伸天狗に定めなき世は槿花の栄を思ひ合せ姑獲女の世話に処女が糸竹の音色の乱るゝを妬み皿屋しきの数ハ女の罪業深きを悟す狒ゝの猿智恵はいぶせき名利の心の花の香ひを留鬼の空言ハ但一口に空言なる昔語を彼是十種取集て教訓の助にもやなりなんと世にあらハし侍りき僭踰の罪ゆるしてよかしと其初に筆を染る事とはなりぬ

鳳城北根津隠士

裡弖齋

志水ゑん十自序

安永九子初春

大通俗一騎夜行巻之一

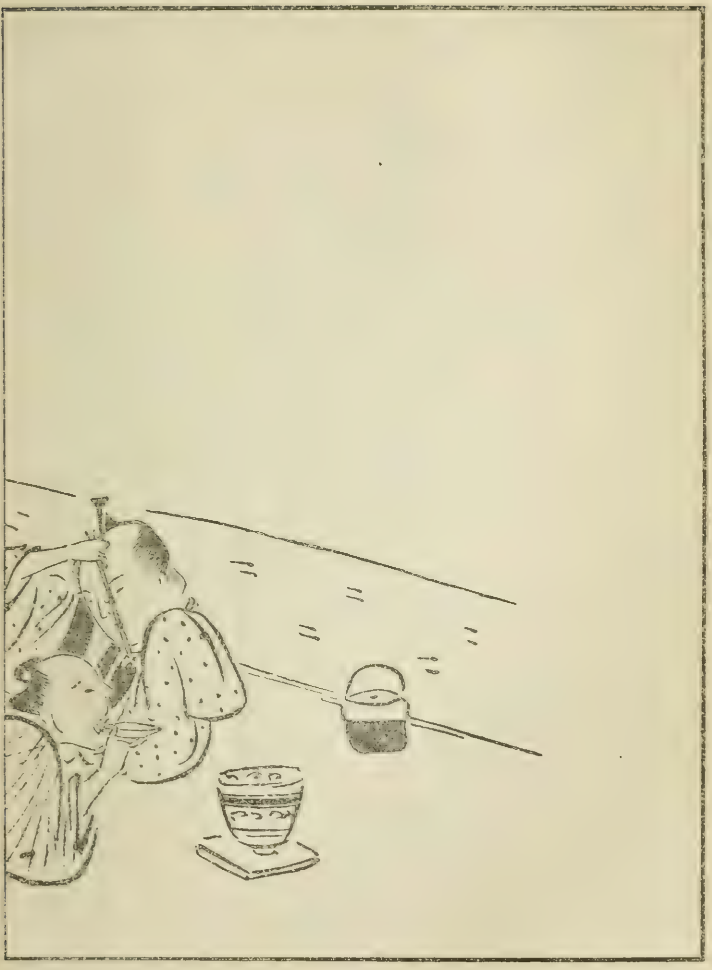
志水燕十述

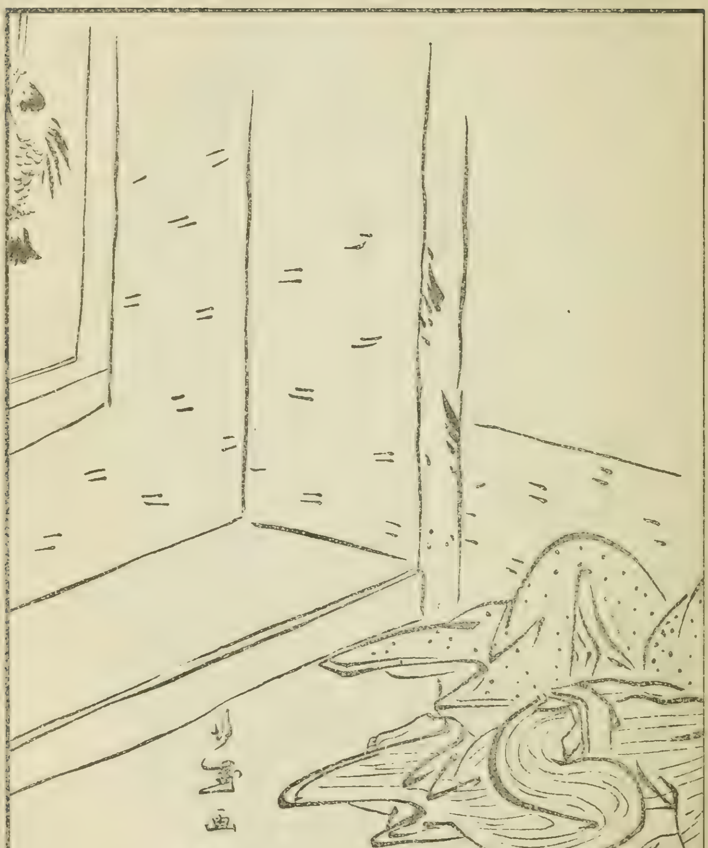
大通俗を謗て樽を枕とす

いつわりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからましと詠ぜられぬるも断なる哉天眼通をしらずして芦の管を持て青空を覗けば天の川のちゝくり合有り地に地廻りのちよんのまあり後世可レ畏とれかゝることをや言ならん斯太平の御代靜に諫の鼓枇謗の木久かたの雨あらかねの土萬里の外の國までも五風十雨豊なれは抑くるめて大通にいたらんことを思ふ然るに通に至らんと心ざす息子株は諸藝を少しつゝ覺へて人を眼下に見るをもつて我心通なりとす爰に同し流れのゝらくらものあり所ハおたんす町引出し横丁に鍵屋錠右衛門と言金物や親父は例の銀ぎせる銀の様だと誉るくらひのあたじけなき生れゆへ身上何不足なく暮しけるに花も一度ハ散り月も晦日ハくらやミの如く此世を十萬億土へ店替へするが否や御惣領の野良藏跡をふまへ手習の師匠ゟて覺へた學文を鼻に懸詩哥連誹香茶湯生花盆石の會に催主補助となる儘たれも野良藏様と言人なく馬鹿様〳〵と誹名が通り名になり段〻通の魔道へ引摺り込れ丁山は物ごし

かやれらか花扇は口元がじんぜう抔と知つたぶりがからくりのはじまり先うらの空地の鞠場を崩して別莊を建らひ知つた自慢の普請の造作鼠壁に丸窓三角床に爐を切開き三枚折の屛風五分縁の疊椽頬には蒲莚を敷詰床脇左には雪花堂の彫刻せし鳥山先生百鬼夜行の青表帋くり返し貴人高位の御居間と同じき結構なり馬鹿は毎日家職には構わず十露盤ハ開平以上でなければ術にあらずと高ぶり伴頭任せの丈やりさんぼう夜遊びがこうじて朝鉢坊主が中飯喰ひに歸る頃目をこすり／＼起て唐机によりかゝり古句を以手柄をせん事を考へ夫に輪を懸て唐詩選で絶句が一二句も切拔が出來て來るゆへ文徵明風の石摺を廣げ立て書ちらしうぬぼれ流の讀かねる手となりけらしまたその頃茅場丁邊より引越たる浪人に笠野衛守とて眼は蛇の目の如く奥歯に小骨のはさまつたる樣に人中で恥をかひても貞に紅葉抔とれむかしの事とて白張のやうなる短才文盲ぶ骨の生れ付なりしが馬鹿が高慢咄し達くぢりかん事を思ひまた今日も尋ね來れは馬鹿ハ叮嚀にもてなし酒肴を出して饗應す時に衛守馬鹿に問て曰昔しよりちと古文眞寶と言人をば野夫と名つけ廓の穴とやらを知るものを粹とやら通とやらと言るがその野夫は身を持おふせ粹は身を喰ふ事眼前なり如此今ハ代もおだやかなれば武は下方を專らにし町人は貴樣の樣に文徵明が筆跡古法眼の懸もの利休の茶杓と奢り日／＼に增長せり此趣意ハいかに／＼と寳曆時代に流行

し眞鍮の櫻張で疊を晦日掃除程扣て問懸れバ馬鹿ハ手杵張のやに下り扇ばちぐ〳〵にて綿〻然として笑て曰夫ハ非學者論に不負との諺なりおさへも昔しは武家方なれハ黑ひ米の食を喰ふたお方なれと先武家ハ禮樂射御書數の六藝を專らにいたすべきを遊興の皷太皷にうつゝをぬかすとの問はから一がいの論成刀は鞘を出ざるを以尊む鎧は神輿先拂に法師武者を見て初て鎧たる飾立を知る如此なるあいた今は鎧ひ飾り様を劍術師の傳授口傳と成るむかし保元平治より軍初り大相入道廿四年が間穩にして壽永文治の兵亂又は南北朝の時分に鎧を着るを傳授せばよき金儲けなるにその時分ハ今の賀州簑を雪見に着るよりこゝろ安かりしと見ゑたり世の靜に隨て禮は小笠原と窮屈がり樂は千部の笙觱篥を吹立るを樂と覺へ其上を一段やハらげて紫檀の細掉下方皷がむかしの胡德樂河南浦の洗ひ鯉の肴で呑倒れと成馬ハどんな客でも鬼影のやうによせつけざるふつて〳〵ふりぬく妓女を乘しづめ弓を引ことも能登殿ハ五人張に十五束鎌倉の權五郎ハ眼の矢を拔ずして鳥海に返矢を射かけしとハ昔しの力强の沙汰今ハ五間間口に裏へ七間燈籠鬢を尾目に懸て揚弓の樂み矢ハ一箱の內で五本か三本位どんと言ハ處女に氣をとられて的にかゝハらず誠に鹿を追ふ獵師は山を見ず枕草帋は言葉を不讀の譬也書ことは四角な文字ハ知らずともらく〳〵を上手ににじくり獨り寢の行燈にうつかりと枕淋しき郭公抔と切字もな





ご發句を書樣調されし手ハ可愛らしうありんすと言へば姉娼のみの上書を頼れ白切の鼻帋で封じてかよふ神をさら／＼とながれべこんど行と喰ごものでも有ふかと眞實らしく大恩寺前を人魂の飛やうに段ゝに禮に來てどふやらぬしをこふ言てハ御てうし申やうでありんすがせんどれ御みの上書を大きに御世話でありんしたと言れる數の道ハ十露盤にはづれたるをもつて太平の寶とす胸算用で大がいなことをずい流しにす世の人の奢りも如レ斯我等をはじめ分限に應じて此樣に別莊杯を建たと思ハるゝか夫の不了簡先家を建るにもどこぞの物數奇な家のこわしを買て夫に手を入れ隨分と金安に仕立内造作其外諸道具も皆おつかぶせものを最上とすそこを穴知りとも通りものとも言氣也お前も兩腰さして歩行すと細身一本落しさし何か讀ぬ字の書ひて有扇はちノ＼になり給へ大通になりて夜行する時は百鬼も眼にさへぎらず鬼も一口に喰ふ昔男の色狂ひ近き事は白河□祇園の社の巽の御所に忍ひ車の夜の御幸にあやしの光りもの飛行なしたるを北面忠盛青狩衣に上潜り下に萠黄の腹卷して細身作の太刀を帶て此化物を生どりけるに社頭の油つぐ七十斗りの法師なりけるよし是も白河□の大通にて忠盛が萠黄仕立の一肌ぬけた金綿の出立なれハ人を殺さす育てゝやりし大通心と言べし夫はお先眞闇な五月雨の物語今ハなをさら箱樣からこつちに野夫と化物は珍らしく雪團から尊き佛の開帳のとし鬼娘の生取りを

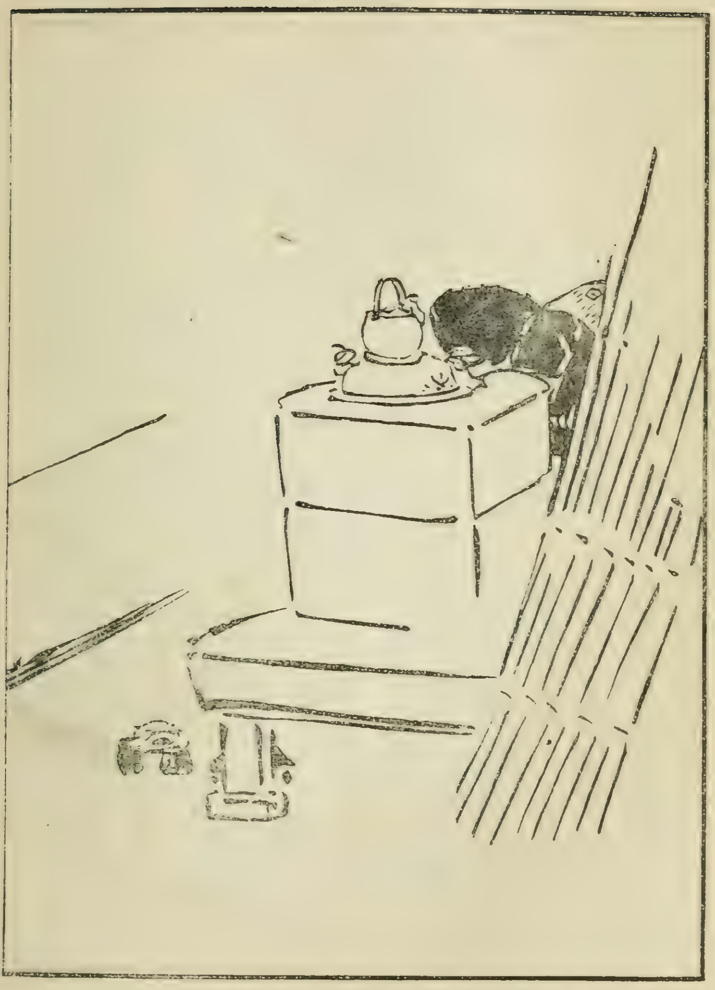
見せて朝參りぬる燈灯見物の歸りも是がためにゝ牛頭馬頭の樣な婆ゝ樣も巾着錢を六道錢に一割を懸て見物の擊修羅の如くなりしが又上の段を思ひつく奴か出來て似せ鬼娘の簪へ玉を橋向ふに拵へて終に正眞の鬼娘ははめにつきし發明な世の中なれはおまへの樣に一本さして燈灯は不用心と嘲り夜道をすれは百鬼夜行が若あらば出そふなものと云疑か胸に出來る是迷ひの壹つとなりて襦袢の干たか幽靈に見へを玉杓子が見越入道に成る鳥山翁の書にし百鬼前後の扁も初めに松の老木の夫婦か千とせを經る通の昔し物語より書出して生靈死靈の墨の濃き薄きをあらはして後集に遣ひ仕舞て衣〳〵の夜明方あほふ烏の啼渡る頃影も幽な言葉のゐんをとりて今年もまた拾遺の化物あり必〳〵いかいことある物と思ひ給ふな漢帝の反魂香も色事の一炷なれは通の難有されヌ格別なりなんでも今夜は内を出たが俗鏡だから根岸通りをちつとも急ひて敵めかこううけたらこうかけてと一身不亂に思ひつめて行から誠に鼻の先へ幽靈が出ても其人の面陰てはないかと思ふまゝ皆女の樣に見ゆるそかしと言れて衞守も此返答に行暮てとむから〳〵のせりふそう言給へば皆尤たが壹人夜道を貴公の樣に思ふてする社百鬼の夜行ではなく一騎夜行の馬鹿ものなりサァうちくつろひて一獻汲ふと呑をれさすれはさしをれ呑はと二ッ巴に定九郎が親指のせりふやゝ盃盤狼藉して二人ともに入子枕の組合せも貳人り漕出す白川夜船莊子か小

蝶の夢ならで鳥山翁か筆の跡恨を世に傳ふるをこの草稿の發端とはなしぬ

人界に因る見越入道

去る程に貳人りなから高骭の枕元にあやしき物音して喘し聲有兩人ゝ目を閉てうつゝ心に聞ぬるに初にゆるき出たるゝ大童子格子に紫の丸ぐけを前て結び一座を白眼し其光りあたかも姿見の鏡の如くさて各我を化物の隨一見越入道と號して怪異の正座を穢す阿呼殘念成は末世の凡夫から一通りに我のミを見越入道と覺へて己〳〵が背の上に見越入道の有事を知らず如何となれバ闇の夜に古木の杖を突せんせうらしく人の後から見越ゆへに名とすと聞我是を聞て腹の皮をでんぐり返して笑ふたりまたちと利口らしき奴は靑鷺が帶の上へ泊ると見越さるゝと云馬鹿もの有何ぞ今時そのやうなまだるい事で人が化さるゝものにあらずむかし大宮人も臥猪の床を恐ろしがりし猪を吸物になし白鷺も振袖の鹽梅よしとなる花に歸る雁金水に住泥龜何れか鍋へ這入ざらんやと書しもむへ也今時靑鷺位の化物人をたぶらかす事なるべきや我曇る心よりして見越〳〵と呼れ庭の松の木に混じて甚迷惑なり我身つめりて人のいたさを知り己か身の臭きを知らざるぞかなしけれ先今の業界をつら〳〵をもん見るに家業を脇にして遊ひを專一となし其

上子ノ曰でもちつと斗り讀かぢるがさいご物を知らぬ人をは風塵の客と見やしミ晋朝風の卓犖不羈か面白ミが厚しと號して放蕩の友は誠の朋友にあらず學者ハ學者のやうながよしと飽魚肆不知嗅段ミそれがこうして老子をちと讀習ふと知惠出有ニ大僞と言文を聞はつり知惠ハ僞りの始りとのろまの玉子燒と成て牛の刀を用ひられざる憂を去りしと身ハ隱逸を表に飾りまた人が見下したくなり哥學を少し耳にはさミ今は哥道も手に於葉かむづかしく諸人と言つらぬることかならず貫之が古今集に別勅を蒙りて千首といへとも千九拾九首あり其中に糸くすの哥と難すれども紫式部か總角卷には貫之が此世ながらのワかれをだに心ぼそきと引用ひたりと言聞せまた連哥は格別いたしよひものにて一躰やハらかに仕立をおもといたすと高ぶる是はまた人柄も能く聞ゆるが此下に今流行兒へ通とて誹諧に評持の名をおも入れに書せ代物は手放すにをそく座席に居ぬ人の句を難じあれは古句遣ひで武玉川斗りを買ひこんで置の一枝還も聞が違て來たの誰れが通り句ハむかしの童の的にありくと有とむせうに我斗リ上手の樣に口をしやべり二句言か三句言の誹席で句を書付執筆に渡し前の宜ところへ御加入と筆太に右と言字の不屆さうぬもやつはり刀の錆は刀より出るとやらにて古句遣ひなるべしとり分て此道は人を誹を手柄の樣に覺へて發句ハお下手古句ハ上手て例の本から拔さしの十七字擂く風雅の面白み



を失ふり銀ぎせるやに下りに至ては着物のごとき羽織を着し細身の大小いかつげにさしこれらし弐三人連て三日は大師八日は薬師と日を定めて地蔵娘へ腰を懸てハ若六道能化の導も有ふかと皃を見詰て茶をがふ／＼と呑ながらそろ／＼遊町先生歸りませうと言が二時ぐらひその時兼平ではないが娘こゝろに思ふは箒木か目立ずは建たきくらいなるべし斯茶やに長居をする輩同し面長な片足上へ上て居る奴旅は道連世は情一河の流れも他生の縁なればとも／＼に芝居咄でもするかと思へば左にハあらずあいつ斗あの娘か先度ハおかたしけと言たからは何をやつたかがてんが行す互にをかしな眼付そしてきせるの毛彫も藤の丸こいつ少し嗅奴と感を付て疑がへハこちらの二才もやつはりその通り多葉粉が無とて貰らつて呑んだか多葉粉箱の比翼紋の片ワれハあの男が羽織の紋所と敵を尋ねるやうな注文にて皆行過故物をも言す娘のそばに草ぞうしを讀んで膝へても手を遣る事を見へとすそれがこうじて後には地藏の證文も高利の催促に辛き目に逢へども世間知りの味噌咄し山下の唉玉やハ少と色が白かろふものならどうもいへぬの地藏娘がもちつと太ると閻浮檀金よりうつくしいと世話にもならぬよまひ事夫を商ふ娘何ぞこいつ鼻毛な奴と思ハざらんや人になぶらるゝを商賣として情を賣らずして人をたらす夫に鼻の下の童子格子を染出して茶屋知り自慢の高咄し是等もやつはり中見越入道と言へき仕打の

その中にまた三味線を彈き身振りを覺へちと細長い聲でさゞす啼くでも唄ふ奴は西川風は昔しの手で面白くなし六三郎位なものはござらぬ我等も杵屋を此頃貰ましたと先祖より傳わりし苗字をば明渡しとやら除き渡しとやらに仕て竹格子の浮住居末は藝者と成りて拳番の居候が茶屋の聟となりついに粋自慢の船底で落て誰れ引き上る碇綱もなく一生身振聲色で喰ふと思ふとも年が古くなるに隨ひ人か用ひぬからまたふりつけ師と化て家主の娘を放蕩ものにし地主の妹も船著者と成る六段目の切に店を追れて末は土場の夜淨瑠理か祇薗囃子の合の杭か彈ひて渡世とするもじたい人中で彈れぬ藝に年が寄るに隨ひ引摺り女房に米を仕懸てあてがふゆへ手か強く成て米櫃を嚙ると評判されて短冊紙が御酒の口を賣るやうになるも初士の時朋輩の外を克付逢へバ勤まれとも此扶持切米か無ればをれハ立派に暮すと言高慢から起て斯のごとし始にもいふ通り少し儒の端を覺えるとからすてつへんに佛法を誹る是非學の始也其謂は佛法も□□□□□□時の大連と大いざこざを出かして取立給ふ程のことなれハむせうに惡くゆふと違勅の罪とおなじやうなもの也夫を惡く言も經文論記のことを言すむせうに末世の坊主圍ひ者をするのやれ盤若湯を呑むの天蓋碁石袋足袋を常の喰物に仕て山兔と言 論 取り羽織を着て醫者化る事は惡く言と何ぞ法を謗や已に妻子珍寶及王位臨命終時不隨者との佛の金言を思ひ合せて見よど

んなあたじけない奴か死んでも金魂と人魂か道行を仕ながらも飛す此世で位三公に連なりし御方もやつはり御供なしの獨り旅二世も三世もと書た起請を當事に添た女房ハ夫の死んだ當座ハ人見せに涙ハ手拭をぬらしてふけども相應な男をこしらへて牛に馬を乘替へました前の亭主ハ喰物好ミ勝負好酒の上が六ヶ敷ひと八百八品程難癖を付て此世にしやあ／＼まじ／＼と仕て居れど起請の神の御罸もないと思ふか當違ひ末は置き去りにされて人のすゝき洗濯をして浮世を暮しかねせうことなしのでも坊主となる是則神罸の顯然たる所也相對死を仕たれはとて末來て半座を分て貳人でふらつく蓮の葉の上に九尺貳間の店を持て誰が店請に成たやら極樂の十七屋から飛脚が來ぬからほんの當仕舞やミの夜の鐵炮也誠や空に入て空に歸る愛別離苦は高ひも低ひも同し掟夢幻泡影の消る所ハ電光石火の如しとは有がたき事なるべきを空即是色も五十餘帖の色事の大序と見破り黄金不レ多交不レ深とむせうにちらんふんかんを専として樂を極めて命長きに及すとやたらに呑喰ひ聖人の心ざしを茶に仕て始皇帝もときに自由にならば不老不死の藥でもとりに遣り度こゝろでしかつべらしく孔子も顔回ハ早夭せしを惜けふむべなる哉聖と呼れても回の如く四十の花の盛を見す盜跖は壽長して八十の雲轉べしを見るとまた口もへらずに四角な咄しこそ論語讀の論語知らず是もやつはり後から帯へ泊る靑鷺の見越入道人を見下す長咄

し諺に言ことく鳥なき里の蝙蝠も破れ扇を見てもその面影に見ゆる情人眼中に西施をいたす
の言葉思ひ合せてことわり哉とて多葉粉輪に吹太羅宇の煙幽に消へ失せけり

大通俗一騎夜行卷之二

志水燕十述

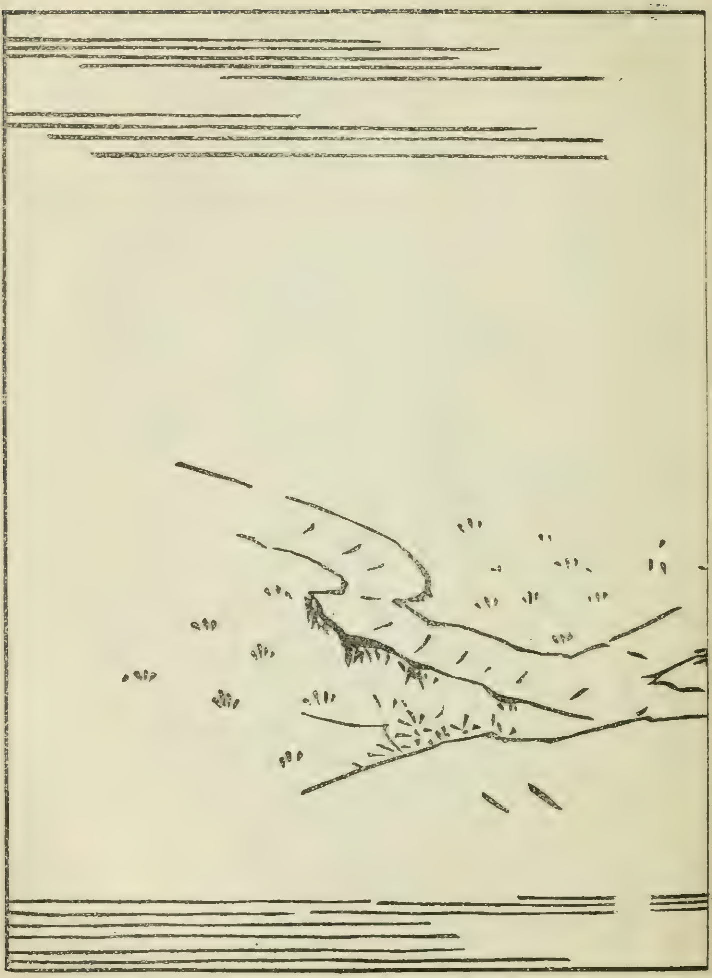
勝負を競ふ狐火

其跡より座中照りかゝやきし有様誠に日中のごとくなりしがたちまち一疋の狐座席につきて曰識見越入道の恨は尤也我〳〵も其卒を言れんとて手に握りし鼠の油揚げを喰ひながら語るを聞は火は元木より生じて水に形を失ふ火より生ぜし土は木に其疾氣を奪れる夫ゆへに三百八十四爻六拾四卦にも木生火火生土水尅火木尅土皆相生相尅する謂なり檜を強くこすれバ火を生し火の盛にして消て殘る所は灰と成是土にあらずや此論を知らずめつたむせうに細雨降り物淋しく風靜なる夜に灯りを見付ると夜の殿の御迎燈灯狐火也とのゝしる愚知なる哉我〳〵が其火を點んするに茶毘場から骨を喰へて來てそれに小便を仕懸口に喰へて歩行とは淺はかとや云べき勿論文育愚昧の婦女の說とは云とつれなき論也夫ハ御飼でも仕て有狐にて食物にとぼしくないゆへにそんな慰みもなきんや食物も喰ずに八ッ下りに机の上へ乘られた手習子を見るやうになんの面白ひこともあらん是も人界の私を知らざる事よりして如在人間萬事塞翁が馬する事なす

二一

事左前富をつけたら當らうかと三匁七分五厘上野の清水の舞臺から菅笠冠つて飛んだ氣になり取らぬ先から仕案を極め三拾兩て家作を仕て跡六拾兩程を拾五兩一分抔と山も見へぬ物よろこび出竃の札を行て見る共貝付千四五百番當が違ひァ、運が來ぬと言つゝ夫から博奕の大三重やぶれかぶれの高張り出ては取られ〳〵夜更に歸るうすぐらき小燈灯に鐵火蠟燭とやらをこしらへて灯し多葉粉入の錢を員へ小雨の降るに下馬の繻伴一枚で歸りの鼻唄には明日の米と懸る日なしに行暮て跡ゑも先ゑも參りがたくて心に思へど寒さにたへかね口へ出すサァ夫を一町程先からみて色〳〵に考を付けアレが狐火でこざるしかも大キな白ひ狐もふ榎を百度程飛越した奴で有ふとの噂から起り翌日は夫に尾に尾を付て咄すゆへ實尤とうなづき狐仲間の化道具となり替り形は繻伴ゆへに白く蠟燭でないものに火を灯すから火の色も一入幽なるゆへ尤の言也天不言人を以言とはかゝることを言べきぞよく〳〵我論する所を聞給へ親は爪へ火を灯し骨から油を出して家職を大切に勤らるゝ息子をそゝなかしてはよい青首が有の雄鳥が懸つたとなぐさんで引たくる是を先に云人の骨に小便を仕懸るの利に當らんや又人柄の能に至つては內會とやらをはじめ壹匁逃何本突出し仲赤の突ぬけ團十郎海老抔とあらゆる彌陀の四拾八願も皆能聞は忌詞の讀くせを知らす物を逃る程拙なき事はあらず武ならは敵に後を見せたりと笑ふ女は逃れ

石英画



はちゝくり逢の轉ひ寢に親れお仕着施の勘當なるべし何に突出しも此趣意也人を獨りチマアヲゥにしててらして見ろ突出しものとなるむかしよりして志津か嶽の七本突出しれ手柄者と譽れと今の突出しは蜜夫の緣切に本亭の額を出した女房も細堀程な流れの身となるも此釋迦如來の御導道より起る仲赤團十海老も如レ此戲場の狂言で譽らるゝこそ嬉しかるべきに人のなぐさみものとなり厄と呼れて人にいやがられ三十三か四十貳かと思へは左はなくして小娘裏姥の張箱の隅に押込れ末は化粧をはかれて哥がるたとなりむへ山風と言大嵐になる哀れなる哉小倉百首は二條家和哥の祖定家卿世〳〵の哥集より勝れしを百首撰んで山庄の詠とせられしをいつの世よりか哥かるたとなりて雲の上人地下の婚禮の飾り道具となりしを今は横竪月雪花の褒美を付て勝負の論となる俗の内で寺を建立し眞菰にあらぬ蒲胡座を敷或は箱を入て札左廻りに揃ふ物左廻りにならぬうち思ひ切こそ過改勿憚の本文有けふは誰が寺翌日はこれか寺と夜更るまで灯の光るをこそ誠に墓の火とも名付くべきかその下品に至ては内で拵らへるとゆたぶりが來ると號して艤を借り切り夏は人も行ぬ尾久や綾瀬の芦の中にて夜を更しぬるを筑紫の浦の知らぬ火と詠しに相當せんや夫かこうじて口論となり互に丸はだか相光院の大喧嘩鍋釜棚梁をたゝきこわして大平の卷物廣けても丑滿頃のさわきゆへ人は眼が覺ても知らぬふりじた

んたを踏んで誰も留めてもなく尤の付てか無ひゆへ手刄庖丁を研すましひらめかすこそむかしれ知らぬ武士のこととふ人も無き古戰場の火にひとしからん斯不人柄になる人も振り歸りてつばきをはきかけず親類縁者皆胡瓜を切り茄子賣も店請を斷る女房は蜜夫をこしらへちゝくり逢ゆへ中宿を付て歩行何でもつらまへると一仕事と仕案れ克れど向ふも蜜夫をする程の男ゆへとらまるやうな仕打を働らかすどうぞしてつらまへやう〳〵と氣をもむ是を名付て胸の火と號す内へは日なし米や眞木やの催促れ火の車より廻りか早く阿鼻地獄も眼の邊り是をこそ化物とも妖怪とも言べきを雨夜に燈す狐火とは餘り情なき事也日照雨が降ると狐の嫁入と結納もやらぬ先の押推量戀しくば尋ね來て見よと讀しは我等が仲間のこしやく者の娘忠信に化た千年經た夜の殿は義經公の言葉下さる眉毛につばきをつけて我〳〵に化されんことをはかるより眼前人に化さるゝことなかれと火の光り幽に消失けり

文の手に葉を飾る幽靈

アヽラ闇浮戀し渠界の夕を待夏の蟬の春秋を知らぬも人間有爲の業界ぞかしとて出たるは腰より下の無き白小袖幽靈ならめと貳人の者は空恐しく怖ひ時の佛頼ミこそをかしけれ件の女細くゐ

んにやさしき聲にてこめんなんしと言ながら我をさなき時より聞はつりたるに枝垂柳の下に髪を亂し白無垢一點にて腰より下のなきを幽靈と言ワたくしも迷土から笑ふてをりました皆〳〵のをつしやる通り皆我身の上に有化物を知らず我〳〵が幽靈もその趣意有りワたくしも元やんごとなき御方に宮仕へをなして侍りきに兩親のまつしきをすくわんと身は河竹の浮節繁業となりて一夜流れの梶枕哀れ人情の拙きを物語んと長きせる取出し多葉粉輪に吹ながら語るを聞はむかし管仲が女閭七百を開きしより後見ぬもろこし果吉備の末筑波の山の陰までも情を商準繩とはなりけらし半點朱唇萬客嘗との七句誠美意とや言ん我〳〵が好き好んで此道に入るにあらす親兄夫弟の爲に此骸を賣て人參代となり又は前の亭主の緣切を勤む孝に賣し骸に綾羅綿繡をまとひ呉葉綾葉も我〳〵が夜着蒲團に價をいとわす斯二ッ並ふる木地を隱せし塗枕孝に貢しそのかたわれわ親の目を盜ミ或は親方の眼を掠し不孝の人に枕を並ふ啌は表向の商賣道具ちよ〳〵らは其人に因て病ひの積痞を起すぬしはおうちさんかありんせうねと言懸て末は女房よ我妻よと唄ワせ七尋程有みは皆うそのぜいたくする〳〵までも御身捨なくと板行に起した樣に讀めぬ手て書ちらしそれを鼻毛が釣付けられるを不レ知人目を忍ひ中宿をこしらへ或は髪結床で讀ぬ癖にふしをつけ何たか用が有とて晩ほとせひ〳〵御かよひ下されかやうまち〳〵と言に

をとろき質屋を拝む様に言て工面十面で身貌を拵へいきせき來て見ると何のさしたることもなき御用の筋今夜はぬしにも言れまいと思ふて七種を仕舞て貰ふ客人が來んしたからとふそ名代も取にくかろふから歸てくんなんしそして外へ行なんすなよもし行なんすと待ぶせをと半分聞て何だ七種をれたそう言へば言にどうども仕てやらうものをとうぬが質屋から上ヶ下ヶ仕た事をば店へ上ヶてぜいたくの巻物サァその言葉が難有なり七種をおれに仕舞れせぬ所がよつほどあいつき印とうぬが方から道理をつけるぞ客の習らひならめ今は襟元の世の中にて寝巻でも立派な女郎は立引が有ふとて來る客多しまた我仲間では指を切るが何兩瓜を放すが何匁髪を切がいくらと呉服やの引札の様に直段付を仕て酢を煮立起請は書出し間違ひみ売れ高田の新富士を張抜に仕ても餘る位也間夫のみは人目を隠すみ枕と變ず外面似菩薩と龍猛大士の法の教空恐ろし少しも酒は呑んせんと言奴が脇の座敷では煮抜玉子を大口に頬張り蚫のふくら煮を笄で喰ふ其上にて澗醒しの茶碗酒こん夜の客ハ新五左だから遲く寝る工面の手くだに半切を繼いで硯箱に揃へて座敷へ持て遣入行燈の灯を笄でかき建るがさいご長ひてに於葉の始り草も木も寝に傾城郭公の啼渡る時分客に大いざこざを起させて猛き武士の疳積強隣座敷の二上りの忍び駒に流れの苦界はてしなくいとしとのごのしつほりは誰さん今宵はさぞをしげりでありんせうと

言れるゝもたゞ一盛其人に末を頼んと思へば足の遠ざかるに隨ひまた流れ來るぶら〳〵ものにさそふ水あらば行んとぞ思ふ替りやすき心は情を商ふものにして誠の情を賣らすおいらんのことれひし隱しに我氣に食ぬ傍輩の難癖を言ふらす心の鏡の曇るこそかなしけれ上レ馬啼ニ紅頰ー今日ハ漢宮ノ人明朝ハ胡地ノ妾ト平仄せし照君もこゝろの曇霞なく金銀にかゝはらず畫工の拙き心から万代の末まで名を四筋の糸に思ひ出さるゝ大眞美人も木蓮枝を好香を留て我骸の惡き匂ひを止め甚太り肉の立臼に菰を卷た位いの女なりしも世に馬塊が原の愁眉ともてはやし玉の笄を置土產にして使の方士はあんけらこんけらと言身で玄宗皇帝に勅答なしけり我〳〵が末も祇園の梶は及ずながら三十字餘り一ト文字をつらねて今の世も之を賞美とす三國小女郎は大の立引もの高尾は紅葉に錦の浮名を世に包む勝山は髮の風に毛筋の匂ひを殘し上卷は江戶紫の玉川に人のこゝろも調布の狂言せりふには中車が事を言ひ出してお屋形女中の淚の種となりけらし玉菊が爲には七月中のとうろうには闇の夜は吉原斗り月夜哉と言句もかゝることをや言ならん女も名を末代に殘して同し一夜の妻衣に重〳〵し言の葉を結ぶゐにしが深くなると惡ひさんたんをして亂りな三味線の糸にかゝり或は思ふ中を引き分られて乞食の身となり以近き頃まで誰とやらは八橋の十三筋を芦簀張で調しありさま外見を知らぬ面の皮千枚の上迄を

張拔しと見へたり共末に至てはいつぞや下の日待の夜旦那さん方藝者衆多〻の中でこなさんかと言文句のふして頰冠り格子の先の合言葉たばこをのむるものゝ手拭もさらす垣根の垣間見ハ地廻り株の色事師誰は幾人持つて居る己は何人と言奴に間夫は勤のうさはらしと道理をつけて誠の誠をつくし内は人目の關をいとひ禿か口留ハ花簪の袖の下を遣つて當名も知れしゐまいるこがるゝよりの上書もミすの封の破れ安く終に朋輩にとくつかれ髮結アやには居たゝまれずせうことなしの部屋住ひ惣じて主人の天窓の上を草履を履ひて勤める商賣だから簪て楊枝を遣ひながら籠の鳥だから仕方が無ひとあきらめる能ひも惡ひも一時の榮花にて新造がとふに立と鐵漿初めをこわがつて客の少ひも一夜檢校半日乞食段〻と客が落るに隨ひ身上賣喰同前なり共時よふこそ間夫が構ふへきや入替への壹ッも引く時は見せの鼻へも來たれともこつちのからだが白無垢壹枚で現世の幽靈と云身だから恐ろ敷ひことと寄付くものもなしサア此時に成ると人の目に付ひて艶かな髮を亂し貞も靑〻見へ一しほに化物の緣によるぞかし女は母の仕付がらにて幼少よりしてきびしからんものならは抔か色地獄へ落ざらんや貞女兩夫ニ不見と言を一雙玉手千人枕と呼れしハ千人のひらつたく言へバなぶりもの也斯のごとくならば傾情に誠なしと言をから一槪に覺へて言ならんと見ん人もあらんか傾城に誠が有らば運のつき此一句をこゝろへて

大通俗一騎夜行

二八

勤る身も買身も嘘ハ嘘は誠と言うちにも我に誠をつくせば外の客にも誠有らんなればやつれり蒟蒻やのこんにやくなり定家卿式子内親王と契らせられ中絶にし時なげくとも戀ふともあはん道やなき君かつらきの峯の白雲と詠ぜられぬるを父五條三位夫迄ハ世の憚りもありとつよく諫られけるを此哥を御覧じてとても止まるまじとてうち捨をかれけるよし哥は戀の中立となりまた俊成卿のをぼしめしも甚感するに絶へたり浮世の拵き今は女か強く成娘は茶見世揚弓場奈良茶やにも女多く錦の織物もひいどろの手水鉢に金魚のをよぐのを菓子を喰ひながら見て來てハ咄しにならず十貳文で唐鳥を見ては孔雀の羽根を廣げるを見ず中洲の四季茬を錢なしの光りものは腮を長くして覗き込こあたじけない姑婆ゝも七月中頃施我鬼船の遊山は跡の嫁は大船に乘た心なるべし人に幽靈あり佛に化物あり佛も木地てはありがたみかうすいから金銀の箔に化粧道具の紺青緑青是皆我〳〵かをしろいにひとしからん人の心は木地にして田夫な者ハ田夫に粋な奴は粋是を神國の正直と言れんに今の世は金銀の上化粧に野夫も粋となり是がなければ二本棒で町送りになる六塵の樂欲皆厭離しつべし其中にたゞやめがたき迷ひの一ッには老たるも若きも知有も愚なるもと書し兼好法師が筆の號思ひ合すてうれしければ女は操を守るを專一といへども常盤御前は破りながら源家再興の操をあらハす巴御前が力自慢は行末がつまらぬもの

傾情もその通りかの賤しき人に枕かれして末は夫婦となりし誠は此道に多き女の操を明にする手本ならんや夫も皆こふいふ意氣地が有と思ふと大了簡違ひ毛氈の初開き男は此所を考へてよく勘辨有べき也伯叔が首陽て蕨を喰すの行だをれも賢人仲間のやぶれかぶれ楠公中將が湊川の討死は芳野ゝ□□（大裡）へ面當と思ふ一途な物には論は無益也紅閨樓の妓女に限らす高きも賤しきも戀は思案の外と思ひ給ふと裸地獄の幽靈仲間に成り給ふまゝ娘は嫁入先で持參金を鼻にかけす傾情上りは糠味噌へ手を入れた事が無ひと言給ふなドロ〱ヒウ〱と消へに懸れは見越入道が聲でなぜ逆樣にドロ〱ヒウと言拍子だと咎めければ是は幽靈の出端にはヒウトロ〱とひしぎの笛で間に合へども引込ミぎはだから逆樣にドロ〱ヒウ〱と無そう多葉粉箱の中へ消へ失侍りぬ

大通俗一騎夜行巻之三

志水燕十述

殺生を戒しむる河童

其次に出たるは雛店の禿人形の如きもの座中を白眼んで大胡座をかき水は直にして東流し人の心ハ曲れるよりして其形の寫りがたきを恨むと言ながら我も河童と號して一方の化物大將にして水中へ人を引摺り込とハ言へど目前に河童有り如何となれハ第一野夫な息子の紫服紗に子ノ曰を包んで後生大事と師匠樣へ行奴を石ア金吉て惡ひといつしか長哥の大とら本又は紅葉集も人柄がよすぎるとて義太夫の拔本は大坂やが板行が克ひとて終にとんぶりの鼻紙袋を丸角へ誂へさせ大坂雪駄變じてかやわた黑に履替へ夫がこふじて踊り子を鰌と覺える船の遊びが面白すでに艘船を浮て汾河を渡ると漢の親玉も言しとて帶の化物を見るやうな光る奴と霞を汲めば時ならぬ茂字喜久も盛りにして大橋の梅裡か身振を詠むサァその仕舞は表裏の櫓番も勤仕舞裾つぎは千種色で醒よふが早ひと佃田の新四間へ飛ぶ皆水邊よりして水際の能所を引摺り廻るこれを河童とも河嘘とも言ハん段〳〵水煉上達して喜奴太夫が淨瑠理ハ荒御靈を語た程有て面

白ひの和重はどふ仕てもうれものと言ことを覺へて向ふ嶋河西太郎に洒落て生洲の鯉には彼通力を得し仙人を素足しにし錦作りの差身でハ頑回が瓢單酒を底をはたかせ頂上へ登り詰て終に七生の勘當に後生の道にも入らず乳母が在所の居候となりて一生の遊興を考へ初て河童に引摺りこまるゝことを知るまた小娘や後家の類も此化衆に逢こと有その初りは先芝居を進め込ミ今日は東の三迄貸リ切リ翌日は人の日をこする時分からうづらでの見物むせうに笄の紋や娘か誹名を付きたがる様になると歸りには吉町へこける是我〳〵が仲間は前後をねらふてくすぐると言は此所也已に唐にても楚の范增は項羽に引摺り込れて張良が計策に落入る范增も楚ハ天下を取るましきを知れどもやせ我慢は貧から起り一度約束仕たからせう事がないとあきらめる今時何ぞそのやうな野夫なことを言んや娘を片付るとも姑の少ひ所抔と己が方から姑に不孝をさせるさんだん先頃軽く約束は仕たがあつちは小舅が多ふこざると變替へをなすうちに仲人かこねると閻魔様に舌を抜るゝ商賣なれば早速間出して千兩屋敷が拾五ヶ所兩替見世に酒見せ向ふの呉服見せも番頭の後見抔と面白く言かけ持來金か百兩と言れて親父やる氣になり妙義の神佗大師の御鬮とさわぎ立十貳文のをひねりで箸をくり返させいつこも同し言ぶんなれは吉日を撰んで向ふへやつた所か兩替やハ隣の内向ふの木綿店も其通りこつちのうちハかけだを

れのいざこざ商賣の賣酒や娘は色盛の過る時分まであまやかして育てそして振袖も似合ぬと言所の嫁入なれば爰を大事と貞女兩夫不レ見と言事を力彌か下歯の樣にあきらめ仲人に引摺り込れたもつけの幸ひ是河童の惣元〆とも名付べし是に限らず無益の殺生を好ミ巣立の鳥を取り張網を張て其親鳥を〆殺しないし高はごを懸て連る鳥を待ふせをなす何ぞ物を知る人のすることにあらん燒野ゝ雉子夜るの鶴子を思ハぬはなきぞかし況や物言ぬ鳥類を籠に入置て其苦しミいかならんや雲井遙に飛行なしけるを狹ひ籠の中に三光の夜飼ハ油火の費を厭ハす人柄ぶる者は釣を好ミ網を引きて樂ミとす朝早く霧霞を受て疾氣を受立釣を仕ては其骸の冷ることを知らず大公望か釣は周の助けとなる是ハ思案の有ことならんが今の世は夫を家職にする者ハ鳥を取とも魚を釣とも鱣やか鱠を裂に同じからんや慰に無益の殺生をして短じかき脇差ハ小尻が兀ても構ハねと釣竿ハ黒く仕て夕日に輝き飾さ箱の金物ハ靏龜の有持佛ゟと光る夫がちと止めになると狆を飼て子を取り或は鼠を色〳〵な色にして賣買す鼠は昔しより鼠色なるを以て通り名となりしを立派な箱に入て是を賣て慰みの元手とすなんぞ蟻の思ひも天へ上らは其罸を蒙らんや中頃までは新造ゟ外に鼠をば飼ぬものゝやうてありしを松風の閨の飾り道具と成り石見銀山も是が爲にお冷飯を喰ふ國に盗人家に鼠と譬しを箱に入れて買て置くは盗人をとらへ

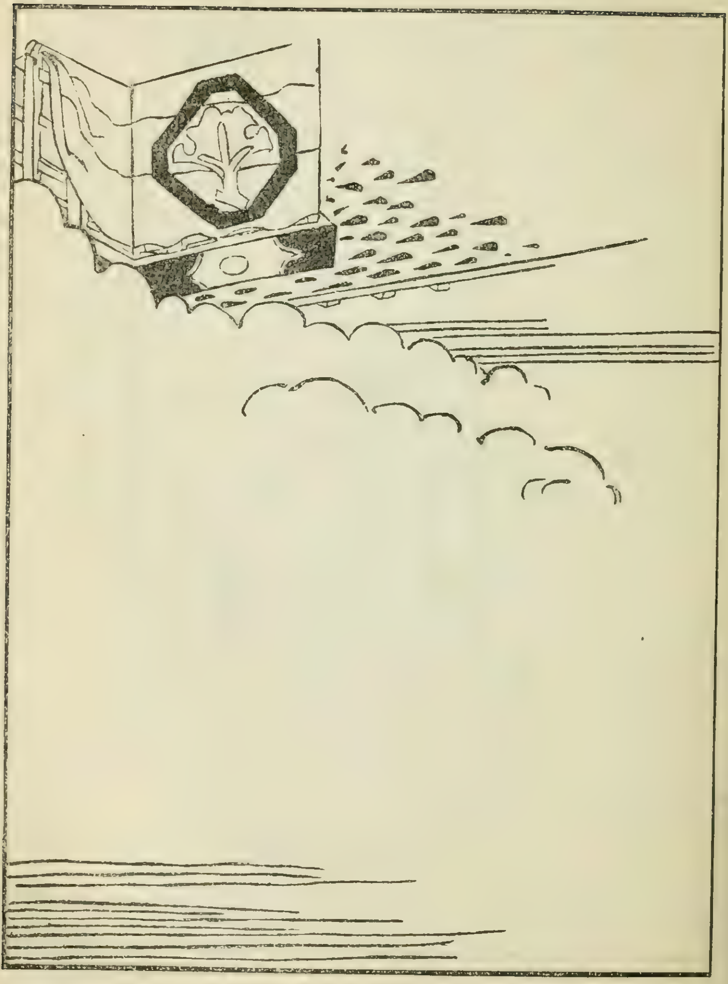
て見れば我子也との言の葉あらん孔子厩焼たるに馬を問ずして人に怪我ゝなかりしやと問ひし人情の程論語の端ても読し者は一入慎しむべし鳩に三枝の有レ禮烏に反哺有レ孝鷹の山に住時足のつめたきを厭んとぬくめ鳥をなし朝其鳥を中空へ飛出て放すに其鳥東へ飛べば其方へ三日つゝ行ずと聞また猛き狼も喰ひ殺せし獣を中秋に祭と聞物言ぬ鳥類獣類さへ如レ比人間なんぞ無益の殺生を仕て鳥魚を苦しむそんなら鰻を買ても喰ぬか鯉鮒の味を知るまいと云ならんか錢を出して向ふの取た物を買へば是は咎にならず親の日に精進すると云も左の如し一がいに肴を喰ふたとて由良之助か言し如く判官殿が蛸に成まいし位いで佛の邪魔にもなるまいか夫を免すと今の生た物を殺したがる無益の殺生をなす故也慈悲有人は鳥を放し鰻を放す其川下に待ぶせして網を張る是を人界の河啌とも言んか佛法にも殺生偸盗と戒しめられたり釣すれども網せすと言よりして釣は能ひとこゝろざせども呂平卿の親玉も慰ミに是をとりて遊べと教しや斯見破ぶると大道廢有仁義を悪く聞そこなふに同しからん畜生を飼て畜生道へ導れ釣網を垂れて三途の川を游んより武ならば文武兩道を心ざし夫相想の遊び有べし又博奕を打ッより殺生の方が増しならんかとゆるしたら迯口上だと云ふが兩様ともに眼前河流れゝ河で果る諺も有ぞかし泥龜に拝まれた晩に夜着のいらぬことも無し玉子酒を仕て呑んだとてその様に違ひもなし主

命親兒の藥喰抔ならバ格別法外の樂をすることなかれ皆了簡違ひから起ものなり其所以は七月のお寺から棚經が來るとやれ御膳の御布施とさわぎ立陀阿の御通りに宿屋をするやうにのゝめけともあれハ若公の御法度の宗門が有ふかと言事を改に來る勘辨を知らず又頭痛のするにも百万扁をくつて若者は横鉢卷婆ゞ樣立も上着を脱で大汗に成つて南無阿彌陀佛を高聲にせり立少ときめ細かな小娘には大きなる珠數の總の廻つて來るのをぶつ付て少し斗の千話をなすを音頭の坊主も責念佛に成ると札をくり返す手の閙がしさ三段めの切りが引き入る樣な所で落をとる役に立たぬものだから是を名付て河童の鹽漬と言と笑ひながら消失せけり

威猛に當る天狗

皆言るゝ通り人間に化先生多しと言ながら出たるは手に羽扇を持顔赤く木の葉の衣に兩の翅生じ鼻高しと見ゆるは御神輿の先ばらいをする猿田彦とも言つべし是正敷天狗ならめと思ひしに違ハず皆〳〵の論に生して我も天狗の中ひらきを致さん先浮世に俠と言ぶ人柄者生じて人を苦しむ其有樣を見るに夏冬かけて藍返しの三重染茶返しの廣袖に細き丸ぐけをメめ横の廣き口の多く有下げ多葉粉入下駄ハ黑塗にして鏡の家と光るを履て何か片言交りの卷舌で。とほふとて

つもなひ。なんのこつたへ。をいらに借すめへ、コレへ。夜盗の上前。嗅か下前を糠袋にも仕て遣ふ男じやねへぞ。コレ權八よしやれ。つがもねへ。此酒やか此競の。吉水是又の。陳太鞁樣に借ねへと言ちやァ、咄しを畫に書て張付ヶあげたやうなこつたが、いごかねへと言つちやァ。お宗旨の高祖日ねん僉がごさつたら格別念佛無間禪天魔草履隱じやァ有めいし、居ごかねへとつちやァ。市谷の河岸端に有る大キナ黒石が。池のはたに羽根を切られて思案も無く殘た白鳥か。晉我のぎようろう時ぶねが前へ。へいつた貧乏神かとほうもねへ狂言の樣だが伊達が陽が五人どりを仕たやうなもんだぞ。をいらはナ強ひ事といつちやァ鐵炮玉のじやき／＼汁は。もふ饌かはへて喰へねへから、武朱銀の香の物にあぶりこの付燒鉄棒を二ツに引つ裂ひて蒲燒に仕て喰た男だぞ是見ろこちらの腕に堀て有が女の首こちらの方は七字御名號脊中を見ろ七本卒都婆に天靈だぞつねにうぬらが一刀三禮仕たとつて御開張れならねへ克おがミやァがれと言うち、同氣相求むる奴等が來て連て行きつまる所が酒屋から伴頭のふ調法で酒三升に鰹が弐本サァその酒を喰らいあバれ騷ぐ有樣大神人共が集りて正月二日に興行する天狗酒盛とも言ん酒が廻つて來ると父喧嘩の口開きと成先なり形を見よ晒の手拭は小人島の褌より長く拾遺集に玉川にさらす手作りさら／＼にむかしの人の戀しきやなぞ。と詠にしさらしを勿躰なくも頰冠



になし髪は水髪にかた。いてう。とて銀杏でも茬れば魔除に成れど則此者は魔道の根本ならめ法を背キ人にいやがられ湯を忠度て這入廻り髪結のちと才三　もどきに色男か廻りに成ると利鬼て見たがる廻りも鬢盥へ疵でも付られるが損だから髪の壹ッも結て遣るとサァをれはあいつを利鬼て髪を結せたと力む酒や質屋ハ元より無盡の裏屋を尋ねて防ぎと號して是を賊る終には天の責に辛き目に逢天の狗と成る能思ひ合せて見よ身體髮膚受ニ父母不敢毀傷孝の始と教へられしにその體を煙管でさへ捨た毛彫を彫り貴人高位が能きものから召べきに大廣袖を着し夫でも芝居でする清盛ハ大廣袖を着ると言だ有ふが夫は作者の心持にて場を廣く見せる趣意を知らす下ゝなるもの塗下駄を履き高官の御方の下駄は金箔でも置んや評判記では無ひが【悪口言】沓を見ろ中を錦て張ではないかと言ならんが是は令義解と云書ニ委く有かく讀べし神事には大和錦佛事には河内錦と生駒山を隔て織是陰陽の道理にして職原抄等のむづかしきことなれば筆にもらす丸ぐけは女より外にメまじきを是も夕ア畠の女がのを無利に取つて來たと力むやつは り逢對の盜人也是此世だから濟が未來でならぬ身持だから我〳〵か仲間是を戒めんが爲四條院の御宇南都の家〳〵に未來不の三字を書相撲入道を踊らせたるも佛法最初の御寺より菊水の出るを知らせん爲也人間の天狗となりてをれ程强ひ者ハ無ひと言と其鼻を捻りて兩の翅を羽階メに

逢扠彼等が仲間で大キナ聲で何んぞ出來ると洗垢離を始ミ大天狗小天狗と呼るゝ迷惑靜に口の中で言ても神も納受なさるべきを大キナ聲で鳴り騒き末は水懸論を仕て聲の枯れる程騒く奢奴豆腐で酒を喰ひつまる所が湯やのけんひきと成るこいつらが脊中に彫りし天靈の如く天窓を本多に根をてつへんへ上ケて結ふた色男も燈籠鬢結綿嶋田で多くの人に惚られた女も髮を天窓へ噛り付やうな風の男も表は坊主で醫者の眞似を仕て女郎買に歩行摺子木も皆天靈と成ると同し事是が色男是が色取り娘と分りもせねど俠となりて彼彫物を仕た男は人も行ぬ原へ骸を捨られて跡方もなく強い犬の餌食と成る酒を呑んで酒に呑れ酒のさの字ハ酒屋のさの字と唄ふ誠に氣違ひ水の渡し守となる女の茶碗酒を呑少し人の肩に懸り帶も解て二布のちら〳〵見ゆる樣何と是をどんな虫の能ひ久米の仙人に見せても通を失ふべきや男ハくだらぬ事を言留りて樽拾ひの調市に箒木を立られ或ハ草臺に三升屋の功能を見せしむ坊主の喰らひ倒は輪袈裟に衣を裡盤に仕て首へ懸てしや枯れたお經聲で歸るとハ婚禮の忌詞でござりますとゝ爲の御手づから子安の守りを下されし初孫の良見せるのが孝行とをつしやつたのをよふ覺へてをりますると如意輪觀音の樣な有樣生キ如來のお宗旨でも有難ミが薄からん秋風の吹に付ても穴め〳〵と言し提重の小町を見よ薄や茅の中の行倒れずいぶん俠天狗とならぬうちに裏店又は奕打者の子も瞽瞍が

子に舜有るまゝ斯身持不埒の親を持ば其子としてハあの人の子には能ひ人柄と譽られ給へ孔明去て姜□有れば其父の業界を受繼んと思ふは天靈となりても行方なく人が腰を縮めるとをれが強ひからと思ふと大の了簡違ひなりと羽扇に乗じて雲井遥かに行方を見失ひぬ

大通俗一騎夜行巻之四

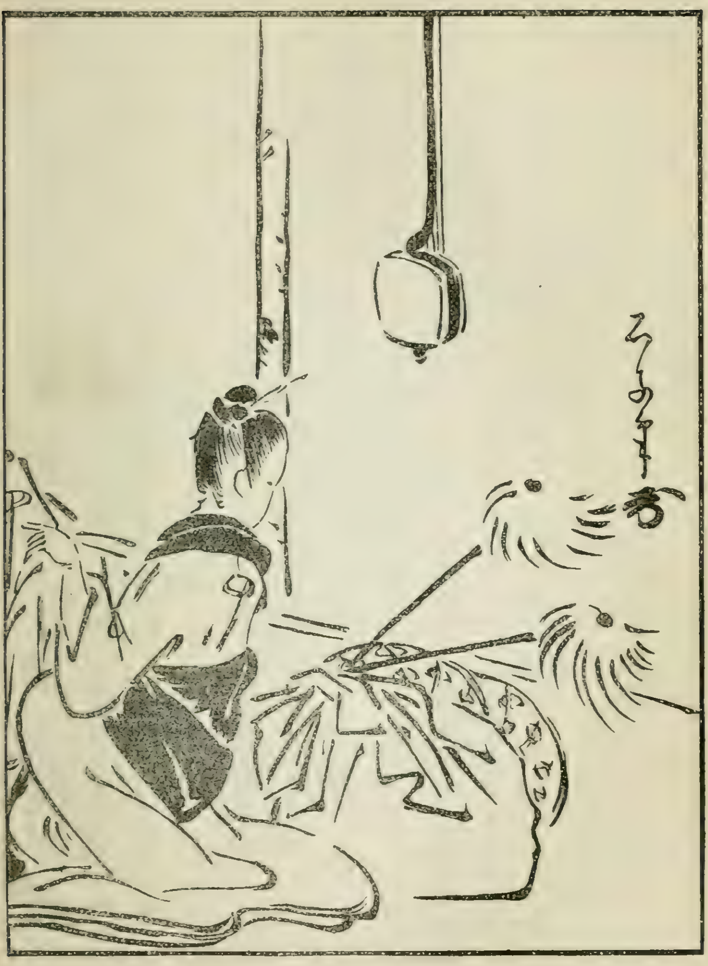
志水燕十述

遊藝を閨の花にする姑獲鳥

嵐にむせびし松も千とせをまたで薪にくだかれ古き塚はすかれて田となりぬ其形ちだになくなりぬるかなしさよと言ながら懐より乳吞子を出して脊中に笈ひてをくれの髪を撫上ヶながら我も現世の人の口の葉にかゝる產婦とて雨夜のつれ／＼に嬰子を抱ひて人に其子を抱ひて下されと頼かけて涙交りのくどきごとを言ながら消へ失せるよし我も是を聞ひて世の人を笑ふ事甚し跡にて其殘れたる人抱ひたる子を見れば石佛の杯を持せたりと語れども是より近き世に有化物共我子を人に抱せんと工夫する輩多くあるてかし其家業を藝者と言又踊り子と呼必／＼鱠ハ吸物の類に混ずる事なかれまづ花の盛にハ上野飛鳥の空に知られぬ雪を踏んで女のあるまじき紋付の羽織を着し五枚裏三枚裏の寄せ緒の草履を履ひて地口を言ながら多葉この間た長ひきせるの雁首を笄で堀りながら行姿男を茶にした身のとり廻し歩行拍子に紅のはつちと淺黃縮緬の下帯が竹馬の古着賣が冷風に見世を出すやうにひらり／＼と見へ樣樺の三味線ハ菊㒵か

高き價ひをいとハす撥のさい尻の紋所ハ金泥の光を増し根尾の金物は飾り師の細工細やか也糸ハ座糸をもつて最上とし箱の中ハ哥の本と菓子を包んだ紙か混雜をなす夏は樓舟の二日醉ひ秋ハ二夜の月にかゝ棧の袷の表をねだり出し冬ハ雪見年忘れにちと身を嗜む〵の喰ぬ腹を喰ふ姿は女にして心は男也此遊藝の始りは漢家にハ虞氏揚貴妃王昭君吾朝には鳥羽帝の嶋の千歳若の前より男舞と言事始りけり後に水干に袴斗り着て舞ふ是を女舞と名付共流れを汲む踊り子は形は女心は男とハ先親〳〵の氣立に相違なること有り女は母親の育からといふ諺の通り幼少の時よりいかに賤しき生れなりとも心はなどか賢きより賢にもうつさばうつらざらんと言本文の如く手習讀物針仕事を専一と敎ゆべきをァノ師匠ハ手がかたくつて女のには悪ひそして天神構が高ひと言觸らし讀物も女庭訓より外に無ひ物と心得師匠から歸るとャレ秋の彼岸から中食に歸らぬ(原本ニ丁缺)語て聞せれば大勢が物の入ぬことだかゝをしひものだから春から座敷を勤たが克ひと言れて兩親なからその氣に成是からが藝者の發端で座敷へ出てをも〳〵しくどなたも御免なさりましとにじくり出て三味線箱の蓋を明ヶて袂から紅麻の手拭を出して糸をふいて上駒には鼻帋を寄て拵へ立て調子を合て法樂はあら面白の春氣色から彈出して花のあたりハよぎて吹から魚と水とへ飛越し京鹿子ハ色をふくみし櫻花さわらば落ん風情なりけりと三味線を下に置キ

めり安を好まれて本調子の一ヶを少し低くして二上りを彈出す拳酒に至てめつたに人に手をさげす馬鹿らしひ客を見付て金十郎と名を付て人をさミし少しひけそふな息子にはめりやすを教へて我内へ引キ込ミお袋に目くばせをすると仕廻ひ湯へ出て行くどふやらこふやら此息子から仕送りをするやうになると親〳〵の了簡ではとふぞ娘が酔いものを好ムやうに神佛へ祈るそをかしけれ朝は人に持チ起されて飯を喰つて浴衣を持て湯へ行て戻ると髪を結ひ仕舞へハヒッ下りに成る兩親は已れがすごすと言皃が表にあらハれやれ油は家橘がゐんがん香でなければ髪がねまるの下村が舞臺香の替りに五十嵐が雪月花も皃になづミが克ひと号し綻壹ッ縫ふことハならず笄で茶漬ても喰ふことを仕習ひ猫や鼠を飼ひたがりこはくの帶は塵が付と見やしミ風通ハ圍ひ者の樣で克く無ひの黑繻子はメりが悪ひとのよまいごと三段めの切には廣袖仕立の放蕩ものと轉び合終に腹合せの兄さんの有る藝者と成りその末が天滴程な流れの身となる是こそ親〳〵が金の有る人に抱せたがるより起るぞかし始にも言通り幼き時より袋のいらぬやうに繼ものでもさせるが女の道なるべきを後には悔ても益なく親に不孝と呼るもをかしけれ佛も昔しハ凡夫なり我等も終には佛なりと唄ひし祇王祇女が母親ハ大相國の氣にさからハず嵯峨の奥に常樂我淨の觀を凝して佛御前が善知識を招く人の親としては慈に止ると書れしを少しは耳に狹



ミ山庄太夫猿嶋惣太と名を後代に人買と殘す今ハ娘に遊藝を習ハせて子捨藪には山吹の色を增す唐大宗ハ鄭仁基が女を元花殿に入んと仕給ひしを魏徵大臣彼女には他夫有りと言しかば殿に入るゝことを止給ひしと聞ものを襟元に付ひて誰にも彼にも面白をかしき言葉付は藝を賣にあらず情を賣にあらず己が心ざしを市のせりものにする道理ならずや藝が身を助て孔明が樓上て琴を調て仲達を退け張子房が笙の音色の秋風に響しハ上への藝にあらず心の調への深きよりと知るべし村上帝の彈じ給ふ琵琶の音色に廉承武天下りて上玄石象を傳へしは音色の德にこそ因ならん小督が有り家を尋ね當りし彈正少弼仲國もりきんで寮の御馬に乘て出てハ見たか尋ね出さぬと大笑ひになる所をうぬが笛を吹御影て想夫戀の爪音を知つた自慢に連て來て清閑寺で尼に仕た時今の世の口へらすの女ならば大キに御世話ィ、所だねと言ふ所を言ぬが古代のをとなしき仕打一ツにハ御父櫻町中納言重範の仕付の宜ゆへ也因幡の國の入道の娘とんだ美しひもので有つたが米の飯が嫌ひで栗を喰いけるゆへ嫁入りをさせさるを吉田法師が譽けるぞ有りがたけれ隨分女子を育るなら我〳〵が如く人に子を抱せたがることなかれ見るも見ざるも產婦〳〵產後の名を穢す攝津守賴光が美濃守の任なりける時平季武同國渡りと言所にて逢ひしと宇治亞相の物語に書れけるよりして女の罪の深き事を人口に止む名利の二字の外に疑がひと言胸の火を

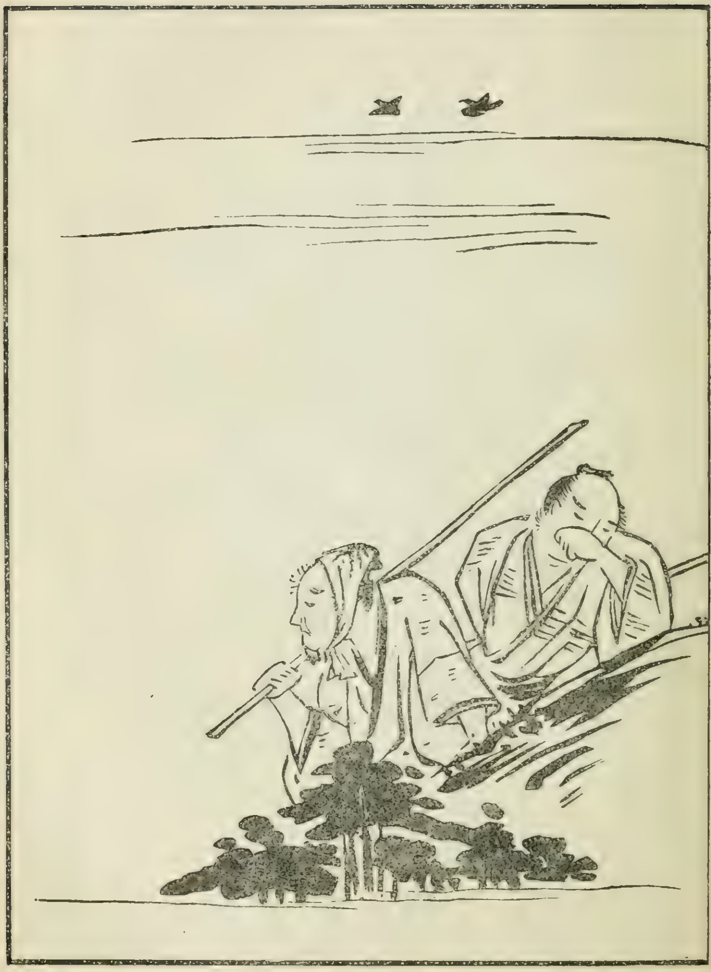
焚付嫉妬の燃ら盛んとなるまだ段〳〵咄して聞せまをせふと言うち嬰子が泣キ出しけるゆへしばらく此子を寢せ付るうち待給へ

十露盤の桁をはづるゝ皿屋敷

彼姑穫鳥片膝立て懐に入れし乳呑子をねん〳〵ころ〳〵翌日はとふから御ひんなれ小豆の飯にとゝ添てと寄合辻番の條鼻に乳母の集て言やうな聲根にてゆすり上〳〵幼子を寢せつけて言けるハ右にも言ごとく女の罪ほどをそろしきものハなし皆〳〵よく〳〵聞給ひて後の世の物語にし給へとて咄しけるは今は昔の事なるが播州に須磨の入道と言へる武士の雜掌に一二三與五六左ヱ門とてふ骨剛勢の人にしてかりにもにやけた事を好まず明暮反魂丹の受太刀の如く武術の稽古専一とこゝろざしけり此與五六左ヱ門の家に主人の御先祖より傳いたる皿十枚有り名付て宇治の皿と呼ぶその故ハ巨勢金岡が下繪にて源氏物語宇治十帖を畫き大唐須金錢國へ渡して驊楽の燒餠と一所に燒上たる皿也殿の大客又ハ在國の振舞其外にあらざれば寶藏を出す然に近年は與五六左ヱ門劔術を好み例の道具味噌から毎日〳〵遣ひければ煤掃の田作鱠まで是れへ盛りける間さのミ下〳〵ハ寶ものとも思ハずやりばなしに遣ひちらかしけるに今年古須磨農入

道隱居となられ子息明石之助へ家督相續有りければ例年の儀式にて件の皿を召れける儘與五六左ヱ門勝手働きのおきくと言女を呼んで皿箱を渡し宇治の皿を揃へよと言付しが日頃彼女麁相成生れ付ゆへ少し欠た位ひは早繼キ石漆にて間に合せて見たれども二ツ三ツにくだけ或は底を拔抔仕ければ其儘に流シの下に投込んで置けるが今日皿を揃へよと言れて段〳〵尋ねしにさし引殘る破れざる皿一枚より外なかりければ與五六左ヱ門大キに怒り今度殿の御跡目御相續の御祝義に差出す饗應の膳具損じたる不屆我家へ疵を付るのミならす再千金を積んでも買事を得ざると言事ハ兼而聞及ん御家の御家風相背せ中間敷候與請人人主から牡丹餅程な印形を取て置けば我勝手なりとて高手小手に縛り上ヶ臺所の大黒柱に縊し付家來に言付番をさせ我は公用繁し明日罪に行ふべしとて殿の御殿へ上りければお喜久はたゞ泣より外の事ぞなく胸の中では日頃信ずる大師樣觀音樣腰より下の病ひでなければ淡嶋樣も祈られず縛られた事なればと千手觀音を再拜し口のうちにて祈りけるは我勿躰なくも下着の襦袢に煮湯を懸るとき多葉粉の莖と一ツにして千手觀音を皆殺しにいたしましておまへの御名を穢しましたまつひら御めんくださりまし何卒此繩目を御解キなされて下さりましと祈りければ若侍ども番に草臥酒に喰醉て神鳴が落ても知らぬ高鼾仕濟したりと荒繩を喰切りそろり〳〵と門トの戸を明ヶて逃出せは夜はし

のゝめの明近き頃表門の貫の木をそつと明ヶて雲を霞と逃たりけるを門番扉の明く音を聞付お喜久が前垂を落して有りしハ逃たるに疑ひなしと訴しまゝ若侍ども鎗よ棒よとひしめき追懸けるがお喜久が姿も見へずいかゞせんと言うちにアレ向ふの松原通りに後ろ姿が見ゆるとひしめけばお喜久ハ暫く松原の地藏堂に腰を懸てゆる〳〵と支度を仕て逃出しければ齋藤別當が富士川にてをどろきたる水鳥の立が如くに追懸ければお喜久ハ詮方なく村はづれの桶屋に井戸がわの拵て表に出して有りければ天の與へと悦び彼中へ隠れければ追手の侍そこよこゝよと尋れど未だ夜のほの〳〵明にて薄霜に足跡の有を知べに此井戸がわの中こそ心元なしとて手鎗を突込ミければむざんやなおきくが胸骨をさし通したゞ一鎗にて仕留ければアット言聲にをどろき井戸がわを引キくり返し半死半生なる骸を手鎗五六本一ッにして逆様に釣し上差荷ひに屋敷へかつぎ込ミければァ、殘念や我此思ひ晴さで置べきかと言を此世の暇乞にて事切れければ與五六左衛門も詮方なく受人に死骸を渡して野邊のけふりとなしけるが盛なる時はせいしおとろふる時はせいせらるるとやら薩摩守の一言の如く與五六左衛門春の末よりぶら〳〵病氣付ければ醫藥専に匕を加減すれどもはかどらざりけり折から櫻も散て卯の花くだし降りつゞき折知り貌の郭公夜を寝ぬ音も有ものと短か夜と言へど病ひの床の起臥にまじり〳〵と夜の明るを



與五六左ヱ門待侘て居たりけるに花橘の袖の香に昔しの人の目のあたり勝手の方にておきくが聲のほの聞へければ與五六左ヱ門不思義に思ひ耳をそばだて聞取れば何やら瀬戸物の砕けたる音して細く哀れに物凄く軒に傳ふる天滴の音に交りし物越は一枚二枚三枚四枚五枚六枚七枚八枚九枚ㇳかぞへ終りて我砕し皿の數都合九枚と言ながらまた元へくり返し九枚八枚七枚六枚五枚四枚三枚二枚一枚と跡から讀んでも九枚の數初而からかぞへても九枚の皿はれ殘念や我ハ地獄の浮責によもや九枚は砕きはせしと焰王の御前にて爭ひしを見る目嗅ぐ鼻あらけなく汝九枚損ぜしに違ひなしと言れしを女心の淺はかに魂中途に迷ひ來て砕し皿を改むるやつはり同じ土くれの寶を損ぜし咎とて恐ろしき劍の責己ㇾ與五六左ヱ門思ひ知らさで置べきかとアット泣聲耳に入り空物凄き恨の一言日頃の勇氣も出ばこそ震ひ／＼念佛申て居たりしが夜も明方に勝手の方を詮義すれどもさしたる變ることもなしの夜雨の人靜なる折柄ハ毎度如ㇾ此なりければ主の病氣日／＼に重く見へければ親類緣者寄集り祈禱の護摩のさゝばたきとのゝめきければ日頃與五左ヱ門方へ百萬扁の音頭に來る元都深草に住ける錦手和尚入來り例のお喜久が物語を聞ひて幸今宵雨も降ば我其亡魂と問答して死靈をなだめんとて宵より檀を構へ孔明が東南の風を祈た樣な身振りで大般若轉讀を初めける已に其夜も丑滿頃大般若五百卷轉讀して跡白卷に

懸らんとなす時無常の風をまぼろしのあだしのゝ露鳥ア山の煙たちさらで住はつる生死流轉の世のためし更に終りなく初めなきためしなれど人を殺さバましかハわずか寶にもせよ皿を破りしに我命を取れたるこそ恨めしけれとて例の通九枚迄數へければ錦手和尚仕濟したりと合掌し引キ入る樣な聲根にて定者必滅會者定離とハ佛の金言己女ながらも能く聞け形チ有物ハ必亡との譬也前世の約束なればこそ何ぞ歎くにたらん常〳〵三世相を見ざるや天帝より汝にハ米二合五勺二度の御仕着施なること明白タリ南無阿彌陀佛〳〵と十念を九念さづければ烏の啼渡るに連てお菊が姿も消失ければ錦手和尚檀上より下りて今晩よりハ白雨の晴れたる如くならん昔し弘法守敏ハいさ知らず今時我如き法力者あらんや其昔惠亮碎レ腦で維仁御位につき給ひ尊意振レ劍て承平の將門亡フ哀レ某其時生れ合なば杯か彼に負んやと廣言吐て申けるハ大般若五百卷轉讀に當る時彼か亡魂の出けるも誠に奈落に一段落ると言へども五百生が間皿を破し咎にて手なき者に生るゝこと疑ひなし又十念を九念さづけしも一念他生無量劫佛の誓ひ有がたやと前へ出ぬ後ロ面ト言經文の心也としかつがましく咄して今宵の樣子を伺ひける日も西山に落寂滅爲樂の鍾の音もすミ渡り初夜も過て後夜に移んとする時雨の足靜にして又前夜の通りに皿の數を改ム錦手和尚手持不沙汰の大しくじり與五六左ヱ門大キに腹を立チ憎き鴉入坊主夜も明ケ

なば扣キ出せと言つけけり東雲の頃裏門より扣キ放しにお定の割竹其時錦手和尚手拭一ト筋盗人に追錢と思ふてくれ給へせめて㒵をば隱したしと言ければ下ア古キ蒲鉾でん中の管笠を遣りければ誠に大般若五百卷讀んで百卷残せし御ふ施に笠一盞に有付けるゆへ末の世までも百卷の形に笠一盞と申なり夫より諸親類相談して今宵は安居院の法印を請じて營をなしける其夜例の刻限にお菊が聲として皿の數を取る時に法印きくに言て曰汝前に知識來て引導す再來ること如何と言へばおきく答テ言ハ前の和尚大般若も讀果さず其上へ十念を一念殘されしハ禮奉公の樣で氣に懸る儘又今宵受狀の心で出たると言へハ法印何やら口のうちで唱へ汝が破し皿の數は九枚なれば九品の臺の數に合ひ模樣は源氏十帖にして小乘乳酢の法を兼一枚破れ殘りしハ一佛一躰の道理有一念禮奉公と思ハば中年八年出入十念にして中年の八年は八軸法花の女人成佛を得んこと疑ひなし南無阿彌陀佛〳〵と唱へられて兩方の手を出して子供の暇乞をする樣なことをせられしかばお菊は兩方の手を出し親指一本折て暇乞の躰をなす時に法印冠りを振り又暇乞をせられけれバァラ嬉しやと言てかきけす如く消けり與五六左ヱ門法印に向ひ仕廻ひに暇乞をされしハ何の法と聞バ兩方の手を出し陰陽合躰し又去て十枚の數調ひしといつわりし法辯也おきく女の疑ハしき心から親指を折て九本指を出せしは九枚破りましたと言事なり夫でも十

枚の數合たりと某が暇乞をせしハをさらバさらバと言もやつはり皿の緣ぞかしと言れて一座の面〳〵感心しけり斷や此法印ハ紫式アが五十余帖を書キにし源氏供養の導師なれバ宇治十帖の皿を破りしに安居院の法印に成佛させしハ道理なることなりけり爰を以女の罪の深き事を考へて愼ミ給ふべしと件の本の中へ消失けり

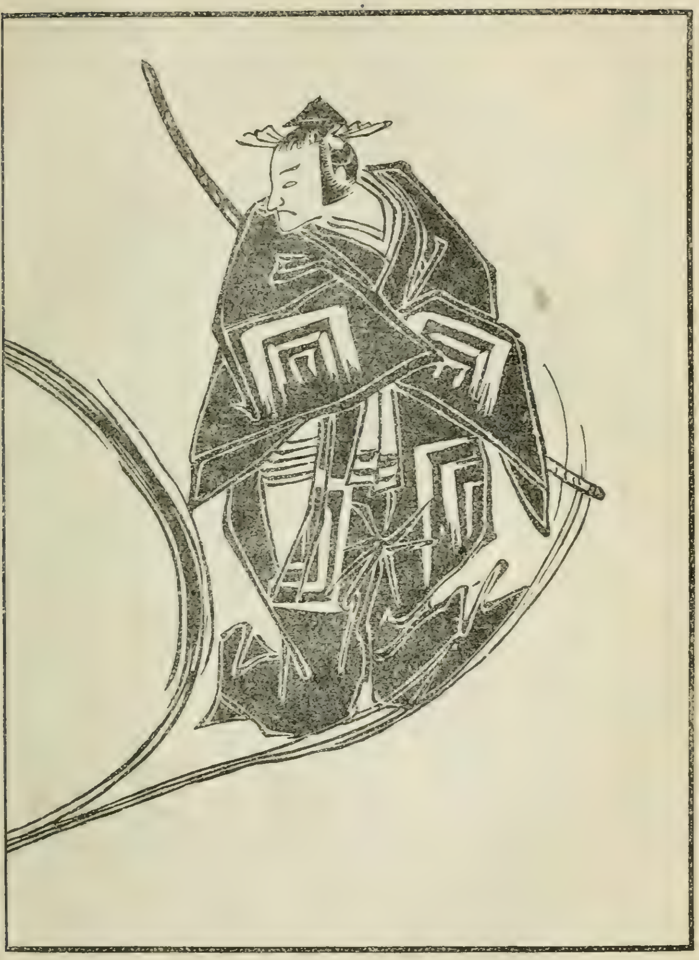
大通俗一騎夜行巻之五

志水燕十述

狒々現世の樂を悟す

扨その跡より一疋の大猿座席につらなりて段〳〵と各の論を聞くに皆恨ミのみ多人を導く爲にあらず我もその昔はまさる日出度と門口からほふり込れてお時宜を仕て壹文づゝ貰ふて歩行しが今は數年の星霜積りて狒々と言一名笑ひとも名付世俗狒々に成んとするには骸へ松脂を摺り付て砂をまぶると噺す然する事有とも心の猿の利口より仕て奉公人の口入を仕て末は山師仲間にならんより山奥に居をしめて獵人の浮目を助るが宜しからん先我〳〵が骸へ砂をまぶるより人間萬事南京返し黒仕立紺の半沓八ワた黒白ひ所は菌と帶のはかた嶋斗りにて腹に月の輪の有る熊の如くはつち尻はしよりと言事が初り呉服やも裾廻しの切を横に付て四度に遣ふ口傳を教ゆ晦日屋と言雜巾賣歩行ハ朔日丸と書ひた女醫者の看板有誠や飛鳥川の淵瀬替る世にしあらねばとやらにて人〳〵の樂ミつきることなきも萬歳の代の印なるへし正直の頭に宿る太々構の仕舞ハ二文四文の取遣りと成り御法談の歸りは姿々の立チの嫁を誹る中立と聞へ開帳場の上ヶ

物の札は年賦金を見るやうに一割増しに書付奉納の燈灯の名は隨分大文字なるを以てよしとす是所謂世間の見へを仕て信〳〵は口斗りなり第一藝に遊ぶもの其藝の生覺へに成ると茶道ならば袖口の出來上り程帛沙捌きがちつと音が能く成ると風呂先キには枕屏風の二枚折と混雜せぬやうに工夫をこらし咎をば我にをひにけらしなと言茶碗の趣向サア是からが四疊半のにじり込裏店の無ひ路次懸りが出來ると中立後座の百持て御膳に付ひたやうになんでもかても殘らず喰ふが禮義だと言客を呼集め末は茶座敷の別莊を建て捨金と言物を出して誹諧の口まめには吳竹の圓レと呼ぶ表向は重キ手代の名にして內證ハ皆御物入也誠やみの上書に何之何右衞門樣初汐浦右衞門抔と書て中はミすの封のかよふ神こがるゝ身初からと仕組んだ長口上を見るやうなもの又生花も昔しは名有人立チの心の樂しミにせられてさのミ人に是見よかしの慰ミにあらす夫を今は三日十八日抔と何ぞ神佛の緣日を心懸て茶屋を借切リ誰社中生花會御見物九ツ時分とちやらくら流の大文字を松板一ぱいに紙を張て書付當日になれば二階下へ幕打廻し毛氈を敷詰各〳〵考こらして獅子口に牡丹ハ富貴の人の生たると覺へ釣舟に杜若の一色ハ堀の亭主の趣向釣瓶にハ枝垂柳に夏ぎくの留メハ番町邊の御屋敷方で勝手役人の趣向かぞへる花の面白ミいふもさらなり見物の輩に鼻の先キへ札を張ッてをれが生ケたと言ぬ斗りに當の札よりちと格好



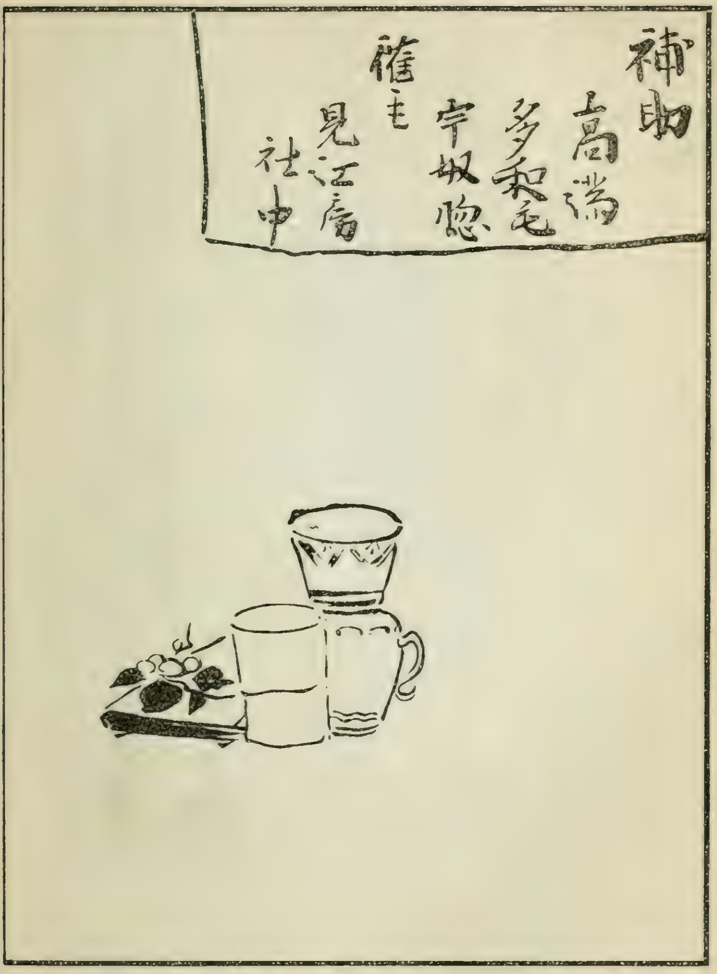
の大キナ紙へ文粋花廓抔と烏石風を眞似た手で書ひて張付ヶ正面の床の間に置キ花生ヶに河骨の一もと是は名も張付ヶず外より随分寂た生ヶやう水際立チて一座の先生と見ゆるぞかし是皆花の會にあらず器物の會也古代は物にかゝわらず器物に寄嫌ひなく生たるまゝに投入と呼今ハ此花瓶ハ閻浮檀金だのいや釣瓶の木ハ赤栴檀の香木抔と羅漢達が寄合て極樂で花の會をするやうに大そふな器物也是花ハ表向一通りにて我道具を人に見て貰ひたかるより起るきのふ迄佛器のお前花を生ヶた花賣もけふは酒ヶ苦齋と号して立花の師匠と成る俗が匕を以て藥を盛る樣に小石を並へ敦盛の石塔へ手向る樣にして樂しむ是等の人上ハへ斗りの付ヶ燒刄で心は皆見へ通の類也花を生んよりハ心の花の香ひ深きを専らとし給へ其外に商人も見世の椽鼻て將棊をさし碁を打或は漢楚軍談三國志の類を大黒柱に寄りかゝつて讀んで居る輩中以下の商人見世にあるものなりやつはり見への人目いぶせしあの亭主ハ身上を能するはづだあのやうなむづかしい字を克讀と二タ月も利足を負けて貰ふた奴が譽るやうに仕かけて目利自慢がこうじて似せ政宗の胡摩鯖の來るものを質に取つてどつちへ參りませうと言族皆七ッ目と言ものを信向して我らがやうな猿に冠をかぶせ犬に烏帽子を着せて其位に至らんと言天運循還を不レ知よりして無利なる願ひことをするぞをかしけれ一段下の下品に至ては鷲大明神ハ運の神と名付てむせうに朝

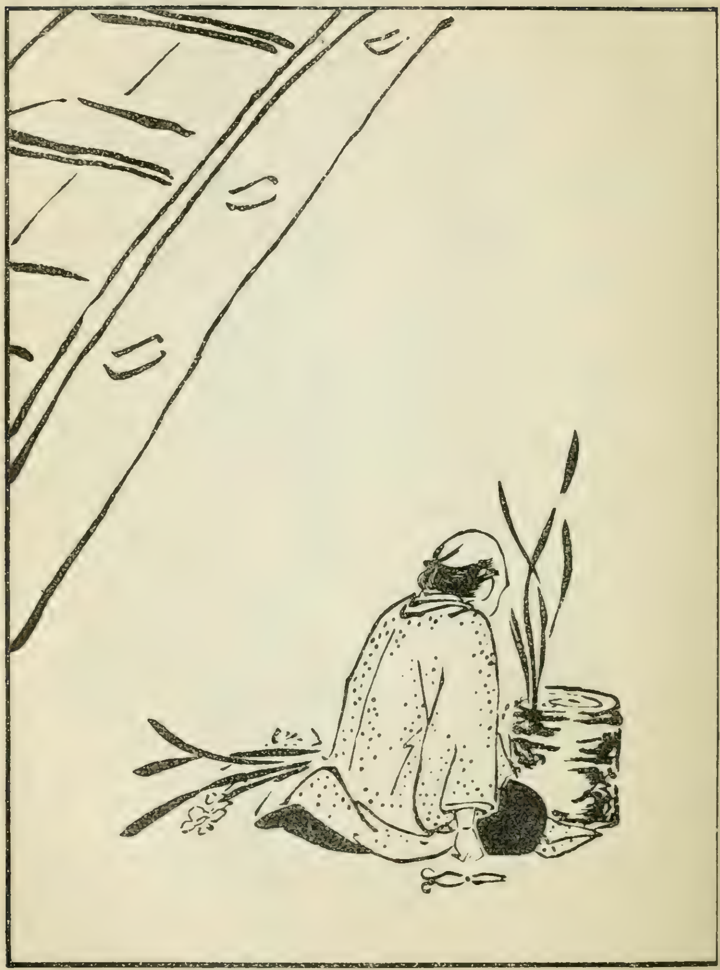
夜霧を拂つて出て行運の神だから強そうなものだか歸りには皆胴取の方へむまミをとられ侘言してうけつことやらを仕て漸〻芋の頭を竹を輪にして釣リ下ケひだるそうな顏色て歸〳〵明キ店へ道具を運ぶ様に夜食を喰ふ此等の人淺草の市て大黒を盗むと仕合が能ひと言ふ輩にて夜は長い燈灯に何町若者講中と書ひて有るを燈して御詠哥和讃念佛を申て歩行さらしの手拭を頰冠りの様に仕て口に喰へ塗下駄を履て音八が突ッかゝる様な聲根て歸命頂禮地藏尊と言出すと同音に釋迦の心を憶念しと唱れハ障子を細目に明ケて上ケやせうと此頃色氣付ひた娘がをひねりを出すと手を握るやうにして受取る是を名付ケて世帶佛法腹念佛と云彼等が毎晩歩行て溜た錢で寺の建たを見ず佛の箔代よりハ人の箔をはがして漸〻出來る所が双鐘二タから是もまた唱哥ノ分らぬ念佛を申も譬へよしんばよしやよしかしの樂ミならめ兎角迷ひの雲は晴れぬから何に遊ぶとも深入をせぬやうに跡先キ考へて我〳〵ハ人間に毛が三本足らぬと呼れても龍宮で生肝をとらるゝからき目をのがれ蟹にしぶ柹を喰せて腹を立タせて慰ミ桃太郎の御供には日本一の黍團子を喰けるまゝ各〻人間と生れてハ猿知恵をかハるゝことなく毛の三本多ひ替りに呼子鳥を猿と思ひ給ふなと言傳て所作事の仕舞では無ひが元の座にこそ直りけり

猛き心を和らぐる鬼の兼言

皆〻の長物語りにつけて我か親父も参るはづでござりますが去年は大晦日が豆蒔でとこへか迯て参られました其節ワたしに一通り申あげよと言付ましたをはづかしいと言ながら出た所が青黛の眉の渡り丹花の口付キ愛々しく桃李の粧ひ芙蓉の眸　緑の釵　雪の肌へ毛嬙西施ハ四百余州の沙汰盛り過タル妖桃の春をいためる百の媚ハ小野小町か櫻姫といふ様なぼつとりもの鼻紙で手をふき〱下へ居り御免なさりまし私ハ口不調法でと言ながらしやべり出すまづ皆人が邪けんなるものは鬼よ蛇よと言給へども心の鬼に身をせめられて虎の皮の下帶をする替りには緋縮緬の湯具をメめ牛頭馬頭の姿を引かへて五分月代に人につらの皮を千枚張と譬へられて牛のづう〱と仕た心ざしに馬の皮の様に厚き皃の言分をする奴こそ鬼なるべし人の子を賣り又は養子娘を仕て妾奉公を勤させ人ハのめつうか死ふか不構是等の類を皆人鬼の女房に鬼神が成ると言へとも鬼神も鬼も一ッ事なり昔し渡アの綱が羅生門の金札の仕打も我慢心のなす所伯母に化て來た鬼は物眞似の上手な茶返し色の鬼にて孟掌君が函谷關て鶏の聲色を遣つた馮驩と言者地獄へ落て鬼に出世した奴ならんかし拾遺集に平兼盛があだちが原の黒塚と詠しは源重

之が妹のことと聞及ぶ鬼に鐵棒とはぶう〳〵を言て金冠紫紐と太平樂を言奴を町送りにする時の諺にて鬼の目にも涙とは其日を喰ひ兼て己レが子を捨て人に拾ふて貰ふを脇目から見て居る時の空涙なり近年は仲赤の厄が出來て我〳〵が親も眞赤な鬼の目をぬくり出して六百六十の數を合せしも今は七八九の青物店に秀鶴の大立物には皆はめに付けられ子供の鬼事には天魔有てひまをとる我が留守に洗濯を仕て又鬼と成るもをかしくかしましゝ瓦の形チには浮名を屋根に止メ古くなりてハ石菖を植て鯖を飼ハ書判を看板に仕て著くり返す者は官鬼の爻には待人來らずと占ふたま〳〵師走の空の辛き目をのがれて春に至らんとすれば鬼は外福ハ内と明キの方から外へ入れたまゝで蒔散らし漸〳〵疱瘡神の法施宿をする内で外り戸を明ケて眞木で拵へた神棚に赤い紙を敷いて茶に福が這入たと囃しを仕て居る内へ逃込んで一夜を明す豆ぐらいで鬼は逃そふもないものだと言ふがそこが鬼神に横道なし兎角人間にハその横道が有るから能〳〵愼ミ給へ已に永暦の春の頃都に藍婆鬼と言鬼出て十歳以下の子供をとりければ大裡に青陽の初子の日の御會なかりけるとかや草も木も我大君の國なればいつこか鬼の住家なるらんときくから人面獸心の心をひる返して心の鬼に身を罪することなく横道の無き樣に仕給へと初手の見趣入道から萬八千三ッの噓囃しを世の人の春の笑ひに備ふると言て二人の夢を覺させる所だが





マア夫レはよしにもしやせうと言ば青表紙の百鬼夜行の本の中から大勢の聲でソリヤア何の事ダ聲替りも仕ねひ小女の癖にそのやうに可愛そふに貳人ながら野良の人身御供を見るやうに寢かして斗り置れるものかと言ばワたしも親に似ぬ子は鬼子でも鬼薊ほどは人中も見やしたから一通り二人を寢かして置趣向をお聞なされましと云ば又大勢の聲で言やうが惡ひと引キ立て兩國橋て見せ物の裏を替へすと言へは此娘鬼籠る町と聞ひたる江戸の花吉原時斗を見たかいんやそれは爰て入らぬこと貳人を起すか起さぬかサア〳〵と言所へ切戸口の方て木屋の聲として暫〳〵貳人にしたゝか鼾をかゝせて後扁間違論は春長〳〵とホヽ敬白

後篇
大通問違論　五冊
近刻

化物の罷出たる雪の道　燕十

安永九年
子の春
東都書林　雪花堂

多荷論

多荷論序

諺にいふ大におせわハ。大に禮の辞なるを人をそらす言とハなりけり。人をそらすを茶とかやいへバ。これに答てお茶でもあがれと。茶もこふじてハ茶わいもなく。茶屋が茶るのハ茶れでもあらふが。客を茶らかすけいせいハ。それ見給へや能茶を引。人を茶ぶつて遊ぶ茶る松。われも茶ハゝのちやん太郎。茶ゝみつ茶でもうぬぼれ一ぱい。あるいハむ茶く茶すゞりぶた。茶づるとしやれるも又げびなり。されバにや異邦の陸羽も。茶を茶ゝなしてあらハす茶毀經。しかるにむかしひなし山。この茶を好てお茶わけあるより。われも〳〵と茶らくさい。大に

おせわなにた山新板。あゝつがむねへこの一くわん。しる人ぞしる當世の。茶で茶にあらぬ茶の穴を。只一くちにのミこんだ。眞の雅書のおや玉へ。あゝ茶れならん茶れならん

茶にし金魚述

安永九子のとし

孟春

七九

○九郎助の傳

おせわのほんたい當世のやりくり
さぐりあてたあなりのいなり

○鏡の妙でん

けいせいの五臟大つうの六腑
見すかしたびいどろのきん魚

○おせわ風の傳

たちかゝるおかづりのおせわ風
ふきまくる羽ごろものこんたん

○おせわあめの傳

おやにかわつてしんミの御いけん
あめをしやぶつてさとるどふらく

ふるに八ッの譯
もてるに十九のひじの事

多荷論　三

多荷論

よし原も。けさ松原やかど松に。朱欒せんぞゆづりはの。親の家とくも打いれし。ミやこの遊ひ興盞て。此よし原を茶にせんと。おせわあめと身をやつし。はる〳〵きたる此くるわ。けふ三元のしよて若の禮。家〻の諸遊くん。ひつこきまぜし梅柳。見とれて手うつ宇治の茶斗。なんぼよし原なれバとて。いかで祇おん島原に。およぶべきやと思しに。威あつて猛きかれらが道中。なか〳〵こちなぞ歯もたつまひ。さるにてもたれあらふ。われも大つう茶斗なり。かの島原ニ名にしあふ。おゝきミといふ茶〻らもの。祇おんニ名高き白じんおせわ。その外なわて。石かけの。四十八鷹たかの爪。山吹はつね初むかし。きせんおりたかなどゝいふ。酢や酒しほでもいかぬやつらを。茶にして遊しわれなれバ。此よし原やなん人ぞ。たとへふるとも投るとも。わが家につたわる名茶のかず〳〵。七十八條の手ごとをつくし。かれらを茶にしてくれんずと。あめうりすがたを脫すてゝ。上がたふうの客じたて。するがやがもとにいたり。わしや上かたのものなるが。誰遊してたもらぬかに。あるじのおみとりあへず。これハおやすいことながら。松

の内ハそうじまい。その上茶屋のならひにて。おなじミならねばお客ハいたさず。ほかをおたのミなさりいせ。おいとしさまとあいさつす。此へんとふに行くれて。五丁の内を堅よこに。まごつくうちに早ひけ四ッ。とある社のはいでんおしあけ。一夜をこゝに肱まくら。まどろまんとせしおりから。あまたの狐火とりゐをとびこへ。内じんさしてはしり入る。狐にのりくる異形の人ゝ。くちをそろへてものもう〳〵。どふれのこへに扉ひらけバ。まちもふけたるしゆじんのありさ。あたりてうどもくろびかり。色まつくろく黒じたてハ。九郎助いなりとしられたり。御慶といふも高でうし。せいも高ひかはなたか〳〵。高のはこもんの上下ためつけ。高をくびッて高ざにすわるハ。高いなりとぞミへにける。次ハにこ〳〵あいきよういなり。あい茶かへしのあい着の上に。あいミる茶のうわぎを着し。あいじまの上下にて。さもあいらしくすハりける。つゞいて茶らしひ茶の木いなり。髪ハ茶せんに小袖は茶じゆす。茶うの上下茶づかの大小。茶もうや〳〵しく茶く座なす。いつちばつざハ茶の木のおくがた。女ながらもいけふざけた。ろくにいやすとお六いなり。六ようのそめだし紋。六三こもんに花いろうら。六せうものとハミへざりき。皆いろさとのつういなり。おさへつさいつこん〳〵九こん。又こん〳〵とせきばらひ。ていしゆ九郎助一ざにむかつて。さて此ころおせわ風。いづれもお引なさつたな。わたくしも又

へくつさめ。此風につき一大じ　ひそかにてんじゆする事ありと。高さ一丈ばかりなる。大のかゞみにふたをなし。きようだいにかけおいて。いずれもこれはなになるぞに。一座のめん〳〵首たれて。三ッ子もしれるあのかゞミを。しかつべらしくなぞかけし。心はいまだしら露の。氷むすんでとけかねつ。しばらく時をうつしける。九郎助だんしよく正して。これこそおゝきミおせは。お茶でものほんたひなり。およそ人情の大悟。けいせいの奥儀。又はけいせい表裏の本心。大つうの一心三観。その玄その妙こゝにつくせり。各これをはんじ給へわれは此まに内用ありと。ざしきをたつておくにいる。ひげなでながら茶木いなり。吾があんじをいわふなら。今ときの女郎かい。かゞみにむかつてうすけしやう。或は爪べに口べにや。せいたいなど粧なし。かざわをぬぐいふりそろへ。女にひとしき事なせるは。これおゝきにおせわな事。眞のつうはかゞミのうら。その身そのまゝつくられぬ。地がねのまゝといふ事か。裏につけたるなんてんは。實は茶の木茶の實也。かのこけめられたゞちにころゆへ。はては身を打家そこなふ。そこを茶にして遊ぶなら。持たとてはまりもせず。ふられたとてはらもたゝず。只茶しつかりうそ半分。とかく茶の木のいなりがかんじん【高いなり】さにあらず〳〵。そふじてかゞみはあらゆるかげ。千べん万化きわまらず。大つういたればこれをうつし。やぼにはやぼのきゞ

まち／＼。只けいせいはこつちしだい。かねはしゆもくのあたりがらの。おしへのなぞとしらすして。茶の木どのゝ御平ぜい。茶がはなさきへぶら／＼もの。こつちが茶なればあつちはなを茶、たとへうらべは茶なりとも。それは表へミせぬ事。それで茶の木はうらにあり。たゞおゝやうに氣を高く。此の高いなりがいふとおり。高くとまつて遊が大つう【あいきやう】そう高くうぬからでると。とかくにくミがつきたがる。にくまれるよりあいきやういなり。しんぞうなどをつかふにも。おゝきにおせわのあいきやうありたし。ことにかゝみは鑑にて。まづけいせいの氣をかんがミ。こいつはうはきか。高まんか。ひけるやつとひけぬやつ。よくそのほどをかんがミるが。けいせいかいの大じ也【お六いなり】とのたちの御ひやうぎに。女のですぎた事ながら。おまへがた三人の。わるひ所をいわふなら。あいきやうさんはあんまりにこ／＼。もちつとにがミにしたいもの。こちの人はめつたに茶すぎる。高さんはあんまりやにさ。ミんなを一ッにしてほしい。そしてァノかゞみといふ字は。かねへんに竟とかく。金を盡して遊ねば。いかぬやつではなひかいな。金をつかい窮時は。茶臺のおゝきにおせわゆへ。それでおせわと茶のいわれ。あらかたとけたかゞみのほんたい。どれおがまんと茶の木あいきやう。くだんのかゞミのふたひつたくれば。中はからにてかゞみはなし。ミな／＼のめつてふき

いだし。九郎助殿のざしきのてい。定もんつきのたんす長持。りつはな蒔ゑのかゝみのいへ。から物とハ思れなんだ。あの長持には忍妻。たんすの内もかんがらす。ふゆ物にこたつやぐら。なつ物にハさらさうちハか。見かけによらぬハ内しよのやりくり。これでハしんしやう九郎助殿と。噂なかばへ九郎助たち出。われ一間にて今の評。悉くきゝしつたり。先いわふなら身共がいぬ内。かゞみのふたをとるなどゝハ。ちうさんかいになき所。かゝるわるじやれめさるゝゆへ。そこで女郎にふられるやつさ。ふるに八ッのわけありて。持るに十九の秘じあれど。これハかさねて傳べし。先かのでんじゆをなすべきなり。それ今はやるおゝきにとハ。おゝきミといふ梵語。こつちでいへバかゝみ也。アイウエヲ一五に通バ。あせわハやつはりおせわにて。天竺にてハ影の事。則かゞみにかげさす也。もとより鏡のならいといふハ。神の靈佛の妙しん。又人〻の心とや。されバ佛せん神ぜんニも。かゞみをかけてかげうつすに。なけバなくかげ笑バわらい。怒すがたのはづかしく。此神鏡に向つゝ。人〻心を澄しむゆへ。大圓鏡智といふとかや。今けいせいもかゞみのごとく。夜ごとにうつす客のかげ。そのかげされバ又のかげ。ゆふべしのふと契も。こよいの客にうつり氣の。そのとき〳〵のかげのミにて。でんかふ石火によくのれると。諸客の悟こゝにあり。これがかゞみの表の傳。さてこれからがかゞミのう

ら。これけいせいのほんしん也。表ハさやけくミゆれども。うらの地かねのあかゞねハ。かれらが性のやぼにかたどる。こゝに茶のきのちやうをいなすハ。女郎ハせうとくやぼにして。ミんな茶なりといふ事也。又各がかゞみのいへの。ふたある内ハかゞみあらんと。互に爭ひふたあけて。初てないとしるあさはか。けいせいのミか世の人も。少しハ實もあらんかと。あけてくやしきうら島が。只からはこの世のなかを。悟給へやかた〳〵と。聞てミな〳〵頓首なす。中に茶の木ハにじりより。いかに先からだまつて聞とて。そふ茶をそしつたものでもごさらぬ。それ朝おきると先あさ茶。やれ茶とふせい佛だん神だな。神にとつてハ茶のきのこんぴら。佛でいわゞあ茶く茶くわんおん。二十けんの茶の香にハ。老も若もはなげをひたし。一杯〳〵又一杯。茶にハ茶ぐわしのおもひつき。おせわあめとてうりあるけバ。稻麻の子ども竹葦のうば。こゝやかしこに屯なし。かれらが踊にうかれてハ。ぢゞも手をだししやぶるあめ。おばゝ茶一ッたもらぬかに。おらゝも一ッとばゞめが茶がま。そこで古へくわつきよとやらへ。天惠しも此茶釜。なんでもミなんし。茶の事かひ【九郎助】ヒャお茶ッたり茶のき殿。いかに身びいきするとても。又してもたわいもない。さるにても近來。江戸中るふしてうりあるく。おせわあめこそ惡きやつ。あめハもとより甘して。甘に毒のたとへをいわゞ。親の甘ハ子がわがまゝ。其あまきより

病つきハ・輕してかんとふうけ・おもる時にハしんるいゑんじや・丁所までたけんぎのすそわけ・その身もはてハ木のうらにて・眼をからすにむしんせらる・むべなるかな神のミすへの・人をさへたぶらかす・つうりきじざいのしのだのきやつめ・鼠の油あげにハ・化顯してつりきつね・人と言猩々小ぞうも・かの酒かめには亂をまく・されバ（原本丁数十五、十六、十七、缺）にや昔より・あめなめさせて茶をのませ欺るゝ事を一杯くうと・いふよりおもへハ周の幽王の。犬戎に國を失ひ・殷紂の三族たいらぎ・呉王ふさの姑蘇城をおとされ・玄宗の蜀へかけおちも・かのあめの甘毒にあたれるなるべし・かく思ハお茶でもあがれも・茶ぐわしまいれも・御はつめいも・おまへならでも・どふやら甘そふなとりつきにて・のミこミすぎると・あとかむつかしく・一抔酒のんてから・ひかれぬぎりのけんくわもあり・ミな魚のゑさをふくむにたれバ・かの大石のあをのりて・大々講とのたとへくさ・實にのませる茶てさへも・ゆたんハならぬ世の中に・くちさきばかりでお茶でもあがれハ・あんまり人を茶にした言・かく茶にされてもおせわといわりよと・世にせわすきといわれるやつの・せわせでならぬ事ハせわせず・せわにもならぬおかづりの・后からせわやくやつや・ついぞしらぬくるま引の・橋や坂など手つだいハ・まだしもの事なれど・ヤレあの聟ハ大な鼻の・となりの娘ハほふがあかいを・娘きゝつけ大におせわ・お茶でもあが

八七

れがいつとふに。かゝる茶な事るふなせバ。伊せの親王秦も。あめのミやに命じてハ。あめうりめらをなやませよ。風のミやに令してハ。おせわ風ぞはやらせらると。聞より茶斗身にこたへ。おぼへずぞつとさむけたち。くつさめ一ッなすおとに。神ハかきけす如なり。茶けいつく〳〵思やう。かの樂天が日本のちゑを。はからんとしてきたりしを。すミよし顯れ歌をよミ。おいかへされしためしもあり。われあめうりと身をやつすも。たん切ならぬちやゝらの水あめ。一本づゝ先しやぶらせ。甘ミになづませ思のまゝ。引のめしたうへ茶にせんと。斗しゆへにくるわのしゆごじん。かゝるたくせんなしつるか。たゞし父けいせいハ。實なきものゆへほうらつを。改めよとあるおしへなるか。何にもせよ畏しの。おせわ風でもひかぬ内。そう〳〵こきやうへかへらんと。社を辞て新丁万。中の丁へふミ出す。おりから艶く女の聲にて。まづまちなんしとおつとめて

あとハ二はんめ

多佳餘字辭

序

賢哉回。一簞食。一瓢飲。在陋巷。人。不堪其憂。回也。不改其樂。賢哉。回哉。能し〳〵。能く覺た〳〵。サテ次を遣ろうか。イヤけふハ。あとを遣らずに。此講釋をして聞かせませう。此一ッ章ハ。顏子の貧乏を苦になされず。おたのしみなされたを。聖人のお譽遊した處じや。トいふて。貧乏を樂しむといふでハ無ひ。貧乏ハびんぼう。樂はたのしみ。貧乏がたのしみの。邪魔させねバ。それが樂しみ。鯛の味噌漬が。まぐろの味噌漬。その程〳〵に樂しんで見れバ。たる事をするといふもの。爰にむだ書が有る。是見たまへ。外題は則多佳餘字辭

安永九子初春

不埒散人誌

貧幸先生 多佳餘宇辭

疏飯を喰らひ水をのミ。肱をまげて。枕書の新ンもの。ながめ入ッたる貧幸先生。貧乏樽を唐机に直し。壹ッ斗詩百編。百錢の宵越なく。囊中おのづから。錢なしのすかんぴん。花の旦月の夕。ちつと有れば靑樓の遊宴多年の仕まひもぎち／＼また改る鶯の聲も松過になれど初買の趣向も出來ず今三拾貳銅用ンと欲する所へ酒屋の長吉【先生】ヱ、所へ來たモゥ二合ついで來ひドゥモワが所の酒も此所ハ呑めないスつぎ人が替ッたか借りの有るせいかちつと氣をつけてくれろよコリヤァこれ現金と錢をすく【長吉】ナニわるひはづハございへしない。且那も番頭も。おまへの弟子だから。先生様ハ口がむつかしい。キ壹ッぽんをつゐで上ヶろと。賣場の酒ハつぎやせない。それが何わるくッてたまるものか。モシ先生ゐ。晩ハ帳とぢの祝義に寶引を引やす。おまへも御出なさへし。【先】錢さへかしてくれるなら。いつでも行氣だ。【長】むだをいわすと。おいでなさへョ。【先】おれに何ンの味ミが有つて呼たがる【長】おまへが。もし勝なさつたら。わつちが立替へて置た。貸を取ふと思つて。【先】ソリヤァマア。ヱ、智惠だ

おれも商賣が學者だから。分別して見てから行ふ。マア酒をはやく持ッて來う。つゐでに燗もして來てくれろ。たのむぞ。【長】能ふ上手に人をば遣うぞ（と長吉ハ出て行入かわりに）【庄六】先生さんどうだ。【先】フゥ庄ぼうなんとおもつて。【庄】インヱわつちも此春ハ。ねつからいかなひのさ。先生さん聞てくんなんせ。冬おつ詰にね。手にとつたやうな金ハ間違ふ。子かたのやつハ大げんくわする。居候ハまた壹ト人ふゑる。かゝァハ小產をしていごけェず。餅米ハ買はぐる。屎を味噌にした仕廻よ春になつても。身ハ出來ず。ちやんころハなし。夕ア店受が來て身ぐるみぬいで。貳分かしてくれたでマア親方への禮とは出たがね。どふも氣が腐てならないから。はらァ立テなんすな。おまへも隨分。ひんこうだが。學者といふものハ。どふ氣取をするか。うてないもんだ。物知りのお前に聞て。氣のくされぬ仕かたを。聞かふとおもふが。先生ゐン。その利かたをいつてくんなんせ【先】尤だ〳〵。おのしやァ形りに似合ねへもんだ。いろはのいの字もしらないで。氣もちを學者にならハふといふ。その場が奇特だ。アヽおれも商賣だが。ちんぷんかんハきつゐ嫌だ。が。云て聞かそふ。論語といふ書物に。死生命有り富貴天と。イヤこういつちやァ馬の耳に風た。碎ていへバこふだハ。おのしや。おゐらハ。錢をもたぬ役者に。アレアノてんとうゐが。役割をして措たから。モゥいくらもがひても。錢ハもたせ

ぬ。持つ時にやァ天道から。いやだといつても。持たせてくれる。サア飲殘りを壹ッ指そふ。とびんほう樽へ手をかける【庄】コリヤァとんだこつた。有りがたひ。夜の明たよふに氣がさへたよ。モシエ學文といふものハ。いきまにこしらへたもんだねェ。壹ッはい飲で。あとをわつちがつぎやしよう。といふところへ【長】アイこりやァ口をかへて。ちつとから口にしやした【庄】あにィ。コリヤァいくらがつゐだ【長】二合さ【庄】モウ五ッ合持つて來う【長】この口をかへ【庄】マアまて飲ンで。見ようと利て見て【庄】コリヤァのめない。もうちつと急ゝのを持つてこう。サア先生ハ。なんぞ肴ハねへか【先】嚙かつほのあたまが壹ッ。【庄】そゐつせんばにしやうか。【先】しやうにも眞木がなしだ【庄】コリヤ又あんまりだ。コウいふひんこうも。また無ひもんだイッツごふはらだ。先生ハ小南へ初買とは。【先】氣ハ有るけれど。コリヤこんなものか無ひ【庄】ソリヤァどふでも。壹本ばかりハ。くめんして見らァさ【先】きらといふ場ハどうしてくれる。【庄】エヽいまく\しい。おいらと違つて。木綿ものなら引キずも出來るが。ムンニャ。コウしやしやう。地主のいせ屋ハ。おまへの弟子じやァないかへ。どうぞおまへかりずハ出來なひか【先】こゐつハ智惠だ。一ト筆見しらせようと硯引よせさらく\【先】レこりよ持つて地主へ出してくりや。しかし屋しきからの。迎といふ身にしてくれにやァ。狂言が書けない。コレこ

のさうらいしをさして。ちよつといつてくれろ【庄】おまへおりよヲ折助にするのか【先】そうせにやァ。はじまらない。【庄】大のへんとこたが。ドレよこしない（とこしにほつこミ）【庄】へ、よく似合つたかね。はじめて壹ッ本きめて見たが。あたまが是しやァ【先】そのくらゐハしやうことが無ひ（と庄六ハ出て行）【先】此べらぼうハまだ居るか。用ハ無ひはやくいけよ【長】それでも今の人が酒の錢を【先】酒をもつて來ずとゐゝよ。かへれ／＼【長】女郎かいだね。【先】地ぬしの若ひものに。かならずいふなよ。【長】口ふさぎに。ふかし立とは【先】ふてェやつだ（と長吉ハ出て行地主の手代ふろしきづゝみを持くる）【手代】先生ゟ。たゞ今ハ御手紙【先】コレハようこそ。よんどころなき御無心。出入やしきより俄にかうしやくの義申まゐり。やむ事を得ず【手代】イヤもう。おやすゐ御用。何ン時によらず。おさしつかへのせつハ【先】近ころ。イヤ拙者も舊臘甚の不仕まい。よつて年禮等も。今もつて勤めませぬ。御心易さのまゝ【手代】イヤモウ御遠慮なく。仰下されませ。左樣なら御いとま【先】千万。是ハ慮外ながら宜ふ（と手代ハかへる）【庄】トウゞもし。よくいきやしたの【先】此ひやうしから口が直ろう。【庄】おまへッレさんばらびんた。どねへにでも結つてあぎやう【先】そんならたばねてくりや。ソレ油。【庄】コリャ見あげたごまの油だ。エ、おたしなミだの【先】それもタア。とぼしあぶら五勺買ふ錢がたらないで。八文

が胡麻のあぶらかつてとぼした【庄】テモひどひもんだね。扨生男の髪すきだ。モシヱ冬年も五もじ付に。シケといふ題に。鍵をほどきとれよくしたねヱ【先】かわり錢とれ能〻案じた【庄】サァきん〱もんだ【先】ドレ着もの　とつき袖しながら　どうだ〱【庄】そう光られちやァ。おれがはめだ。是も新しくゐゝのさ。きやんとこの連に學者とは【先】しやれ本ンにも無ひナア。扨元〆の仕入はどふだ【庄】案じなんすな。とうでもするよ【先】するよとつても見にやア落つかぬ。【庄】ヱ、きつゐかんしやくだ。コレ爰に大錢が壹本半。貳百ばかり借りるにやア。當か有りだ。マァいざなしにずつと出るのさ【先】近所のうちハ別〻に行かふ【庄】おりよヲバ穢多のよふにすらァ。　と二三町も行く　【先】サァたらずまいをくめんせぬか【庄】ヱ、せハしなひ何ンのこつた。マァもつとあゆびない。いさらご臺へ行くと。おらがたんな寺が有らァ。納所ぼうすを。くといて貳百かりる氣だ【先】そりやァあんまりだ。ざへ。まだ年禮にも行くまいし。寺の錢で女郎買とハ【庄】論語よミの論語しらずとやらァぬしのこつた。坊主がもつてもつて居ても。女郎を買ふ錢だ。大やぼのへんちきだぞ。　と。かれこれいふうち田町ゟ過て大木戸　【庄】サァ先生さんおらァ此臺の寺へ行て。貳百をかりてくるから。おまへ行て。石橋の天道ぼしに。まつて居ねへ【先】ひどくまたせるなよ【庄】ナニ一トツはしりさ。　と。しりをはしよりかけ出す先生ハふらり〱牛町を過石橋一力のまへ　【茶や女】

お休なんし。「先」ドゥダ姉ェかわる事もねへか「女」久しくお見へなさんねへネ「先」にぎやか敷どうた。「女」十五日前ハどうでも淋しひのさ「先」女郎買もふけいきだから。松のうちやァたいがい仕廻干だろう「女」ムンにェそうでも無ひのさ「かごの者」旦那。宿へもどりだ。めしやしないか「先」おりよゥベ。むごくひんこうに見立たな。乘れハ江戸から。乘つて來らア。見へぼうにばかり乘る客に。「かご」ソリヤァきつゐ廻り氣さおまへ「女」どこまで行しつた早かつたの「かご」新橋へよ「先」店ものか「かこ」左やうでござります「先」能今じふん歸るよなァ。丁ど客の來る時分に。ソシテ朝から來るか。ナニサおまへ。屋敷勤といふちよんの間だから。一ト時とは遊びませぬ とやかふいふ内すたすたくるので「庄」フゥ茶壹ッはいくりや。先生さん。さぞまちかねなつたろう「先」早かつたく。サテ出來たか「庄」出來ないでどふするもんだ納所が留主を遣やがつたから。和尚に直がりと出た「先」まづよしく「庄」サァあゆびねェ「先」茶の錢を置てくりや「庄」おめへ茶の錢も持つて來ねへか とたはこ人をさがし「庄」ェ、壹文も無ひ。姉ェ歸りに寄ろう。かしてくりや ふせうふせうに「女」アイよふごぜへす 二人ハ出て行「かご」おてうどんどふた「女」いまくしる。 二人ハ中町を過南丁へかゝる所で「庄」先生さん。おまへこゝらにしつたものハ無へか「先」ナニあるもんだ「庄」ェ、かつこうの悪ひ。大錢壹本半の所へ小錢で貳百とハ勤遣る時に形り

が悪ひ。二本棒にして行くと。大キにかつこうがゑゝに。ア、どうしやうす といふ所へうしろから【松】庄坊く とよぶふりかへつて【庄】ヲ、松かとこへ行く【松】どこへ行くといつて。爰へ來るにとこへ行くもんだ。手めへ春に成つてくめんかゑゝな【庄】ゑゝ事ハちつとも無ひ。あんまりだからくされ抜に今夜初買よ。それに聞てくりや。ぬしや新道の。じしやさんよ。なんとどうだ。こうまんだろうが。學者の附合だ。チツト凄かろうが。【松】ソリヤァとんだ連だな【庄】モシ先生さん。コリヤァわつちが友達でござへす。名は松と云ひやす。近付になつて遣りなんせ【先】じやうふだん湯屋しやァ見かける【松】アイ心やすくしてくんなんせ【庄】イヤ松ぼう手前爰らに近付ハ無へか【松】勤てもたらないか。おれも錢けといつちやァ。勤のぜにが壹ツ本ン有るばかり。がん首錢が壹文ない。春に成てふまハりといふものァ手前よりャひどいよ。【庄】手まへもいき過るもんだ。勤のたらないじや無ひ。二人前の勤を。大錢と小錢ンと交て來たから。どうも形リが悪ひ。此小錢を取かへたひから。【松】ちへの無ひもんだ。なりヲ能くしてやろう。小錢ハいくら有る【庄】貳百よ【松】ドレよこしや と爰で酒屋を見かけ内へは入【松】コレばんとうさん此錢を貳百大錢にかへてくんねへ でつちせにの小かずをよむ【でつち】アイ貳百【松】お世話てござへした と門を出【松】夫で大錢貳本。形リハ能かろうが【庄】アリヤァ手前近付か【松】何ンでもないよ【庄】

おしのつゑゝもんだ。と。八ツ山より坂新宿を過本宿「庄」むかふへ行かふか。「松」なんぼ小見世でも春早々。下ヶ錢といふ面じやァ橋手前ハさへない「庄」ナンデモ先生様ン。おめへの氣にむいた所へ上りねェ。なァまつ「松」ナンデモゑゝのさ「先」いつそ爰へあがろう。と三人見せへ上る若者先へ立見通しへ「若者」おなじミでも「三人」なし〳〵「若者」左様ならお見立「先」そらァ正面をはつて居た北角を「若」ハイおふたりさま。「二人」おゐらァ見立ようと手ぬぐいひとちよいかぶり若者先へ立かけ見せへかゝり「松」能くそろつた「庄」うさァねェ。アノみを踏て居るのを「松」おらァはしらから三番めを「若」さとさん。求馬さん。おしまいなさんせ。二人ハ見せしへかへる小ぜよく茶を持てくる「先」マァ下に居ないか「松」やたいぽねハェゝが「庄」玉ァくそだ「先」今ン夜も物日だから「若」アヽお寒ふござります。と火ばちを持来りあなた。お腰のもの「先」それと渡ス「松」コレ小ぞう爰へ来う「子共」何ンてありイス「松」アやもち菜が有るか「子」ござりイすハ「松」いくたり有る「子」ふたりござへすといふうち二人の相かた「二人」能御出なんした「若」サお壹ッ「庄」サァ先生様「先」マヅ「二人」サァおまへ「先」そんならとちよつとうけのこりふたりを盃すむ「庄」サァそねへに位どらずと火鉢ざわへよりない「松」お前壹ッあげェせう「ぬい」おをさへ申ィしやう「松」おめへおりよげェだが「先」お相か「松」モシそりやァ何ンだェ。ナゼあがりィしない。「庄」此酒ハおらものめない。「ぬい」ゑゝのを取りに遣りなん

せ【松】ナニおらなんでもやミくもだ【子】求馬爺ちよつとお出なんせ（求馬ハつへと立て行）【庄】コレヤィ小僧へ。なしミの客でも來たか【子】わつちやァ知りィしない。【庄】かくさずにいへ【子】それでもわつちやァ。【松】庄。じよさいハあんまいが遣るなよ【庄】初會だろうが。はんくわいたろうが。角が十六ほん生て居ようが。おいらが買つた女郎を。遣るの廻させるのといふかふハなしの木だ（おづ／＼もミ手をして）【若】ハイ千万巾かねましたが。求馬爺を【庄】くれろといふ事か【若】近ころ【庄】おきやァがれェ面白くもねへ。初買そう／＼に。はつ／＼しく。壹年ン巾の口が落らァゐ。靜海浪を九十六文。ちやァふうにさせるのか。【若】イエサモウ御もつともでござりますが。ぬしも今ンばんハ。おこゝろまちと。おつしやつて。ござりましたを。私がとんとワすれまして。思ひ出しました所へ。客人が見へまして。アノ子にハ。しかられます。どふぞ御見立かへに。おつれさまがた。おたのン申上ます。【松】庄坊初會だけのふしやうだかわゐそうに遣つて。仕まつて見立かへろヱ。【庄】ナニヨ云ィなんす。そんな人がからだの茶がらだのと。いふ風じやごさへしねへ。何ンでもァノあまァぞびつて來う。品によつたら。壹人寐もせまいもんじやァない【松】コレ手まへがいつちやァ。きまりが付かない。女郎衆にくぜらせろ（といふ所へ求馬出て來巾こへニ成）【求馬】どうも。お氣のとくでありィすがね。聞キねんす通りさ。冬と

しから。きげんの悪ひ客人を。連て來なんした連衆へどうも立ィせぬから。どうぞおくんなんし。あしくはいたしィすまい。どうぞおくんなんし。【松】そうおまへが事を分て云やァ。庄どうする。【庄】久しひ注文だが。万八が似つこらしい。おとなしく遣るべいが。あしくすると。らんがさハぎだぞ。【若】その所ハ私が御受合。【庄】そんなら行てお勤なさい【求】中なをりをしていきィしやう と盃をさす 【庄】はやくいきねへよ。【松】マァざつと初會から色仕立だ。先生さんきまつたもんだね【先】どうでも女郎買ハつよく買がるゝそうだ【庄】まけかちとせにやァ小じれッたい かれ是いふ内せんたも出ス二人ハ着かへに立 【求】そんならいきィすによ と立て行 【子】サァおあがりなんし。【松】ム、ぬるひ汁だ【庄】もりかへて來う。【先】さすが夷狄の地だ【庄】先生さん何ンのこつたェ【先】へんどたといふ事よ。【松】おらもちんぷんかんハ。ちつとおぼへたひ。ナンダ平の切リミハ黒鯛か【先】コレやい。茶づるから茶をもつて來ひ。【子】爰にありィすと湯桶のたつぎかゝる【先】ムンニャその茶はごめんだ。とこぞに茶びんの來た女郎衆に。ちつとばかり。貰つて呉れろ【子】そんなむしのゐゝ事ハ。なりィしない【庄】はぢしめるもんだな【松】こゐつが面も。十五年貳分といふ役者だ。安目でも呼バざァ買人の無へ面た【子】大きにお世話さ【先】お茶でも掛やう。コリャァ仕まつた とかり着へざんぶり 【子】おゆるしなんし【松】ドレマア上

着を。まくりねェ【庄】何ンとやらの煮る粥だ【先】氣が引ケて居るから。意地わるく。こりやァしミに成ろうす【子】モシィおはりさんに知れると。大きくしめられやす。どうぞおゆるしなんし【先】あやまつて改るにだ【庄】ぬしか學者だから。すんだ物よ。おゐらにでも。こんな事をすりやァ。おはりより直に。部屋へ云ッ付るに【松】サァ膳を下ケろ。【子】おきよどん。こつちへも來て下さい。膳を下ケるよ（引と子どもへ勝手へ行）【若】サァちつとあれへお出なされませ【松】小べん所へ【若】ソレ子供連中ていきや（と三人らうかたぐわたく）【子】サァお床へ爰でござへす。【庄】三人割床もおらひとり淋しいす【松】モシ先生さん。お前商賣もんだから。ちつと高慢に買つてくんなせ。たのミいす【先】所〳〵だへサ。爰で高慢を出しちやァ。ねつからはへない【庄】デモおゐらァ。折介より安くするようだ。おまへを今夜のしんにして。遊ぶのだ。おぶつて置て。しんにするとへ。上ケ下ケじやァ。大キな出入だ【先】それも遊だ。ゐゝようにしやうよ。サァめい〳〵床へ這入ないか【松】勤壹ッに遣つてくりや。（ところり一本三人床へは入）【若】へおつとめ【庄】ソレ【若】ハイ明朝おかへりへ【庄】風呂焚の起る時分よ【若】サョなら御機嫌よふ【松】（はなうた）おふくの中になさんの【庄】物知りの□の仕うちを□□□□□聞てやろう。（しばらくあって）【縫】おまへあちらへ□なんし【先】わつちかね勝手さ【縫】エヽモウ勝手がわるふ有イ

すよ。（トワリひざにかしこまりたばこ吸つけ）モシあがりいし【先】エ、しんぞうくさひ多葉こだ。コリヤァ小まつとやらだの【縫】そんならコレを飲ンで見なんし【先】コリヤとんた事ッた。こくだな【縫】見くひりなんすな。わつちだといつて【先】閉口〳〵【縫】おまへ先生さんといふが名かへ【先】アイ名さ【縫】よう人をてうしなんす。アノ先生とやらいふ名ハ。アダ名ァミるやうな。もんじやァねへかェ。ほんの名ハ何ンと云イすへ。【先】やつぱり先生さ【縫】おきなんせ馬鹿らしい【里】モシねなんしたかへ【松】ナニ寐るもんだ。大ぶ。てめへハ。大めし喰らひだそふだ。【里】なせ。なんでそふ云ねんす【松】あちらの女郎衆ハ。さつきから來て。むつ事の最中だ野郎か安ィとおもつて。今まで引キずつたか。但しハアノ子より。めしの五六ばゐも。せうに。喰つたかといふ事よ【里】フゥお前女郎の夜食じふん。知つて居ねんすか。【松】ナニおらァしらないからさ【里】此きせるハ大キながん首だね【松】茶の飲たひ時にやァ。ひしやくにもするのさ【里】そふてありィしよ【松】モシエわつちがやうな。すべた客に。取あたりなんした時ハ。さぞいやだろうね【里】どふかしりィせねへ。（屏風ごしに）【先】松ぼうイザハまたはやかろう【庄】エ、モゥ兩方で。いきちよんを云イのめさァ。ほされてゐるものヽ。手まへもあらァ。ア、おらも仕合かしれた。はつ買そう〳〵。からびんぞろから。拂ものヽ木魚をそる

〔先〕閨怨の曲といふ場だよ〔庄〕先生さん・ソリやうに・チット起て・たばことでも出よう〔庄〕唐ヤァおれをよくいふのか・わるくいふのか〔縫〕ヲヤすかない・さつきから。ぬしやァ・唐言ばつかり云ィねんす・氣のしれない〔里〕ぬいさん・おらが客衆のとほうも無ィ・このほりものを來て見な〔松〕錢ハ戻り〳〵。（ちうかた子どもか）（子どもきよ）おてうどん・ヲヤ・雪がふつて來たよ・〔子供〕ホンニなア・あしたまた・兎を大きく拵よう（といふを先生障子ごしに聞て）〔先〕手をちよん〳〵〔子〕アイ〔縫〕子どもや・へんじばかりせずと來やナ・エヽするひ子どもだ〔子〕何ンでござりィすェ・〔先〕なんだ雪が降る〔子〕アイ眞ッ白に降ィすハ。〔先〕アノ天氣が敗〔庄〕大のへこだ・目のよる所へ玉がよると・星だらけなてんきが・雪になるとハ。ホンニあきれが禮に來る仕だ〔松〕あんまりで・おかしくなつたよ。宵に先生奇の・茶ふつかけなぞといふやつがよつぽとなおかしミで有つたが・今ン夜また・雪と出て來る場などハ・コゥいふひやうしも無ひもんだ・らつぴらんぐわい・屁の中うちといふ世界だ・〔先〕天ワれをくるしむるのだ・〔縫〕居續さ・（先生をはじめふたりのきやんとこも翌の朝のくだけをあんじしあんとり〳〵）〔庄〕なんだか多葉こに醉ッたようだ・此まだ引ッさかれハどふしやァかるのだ・ナンダおもしろおかしく・色ミからミに・コケが追目を追ふやうに・よもやに掛られて・モゥ七ッだ・壹チ度・面アもつて來ねへが・もゝに首といふおあしを・た

ゝりにしやァがるかへ。ゐつためとふしやァがるやい引（と大どた）【松】そうだ〳〵しめろ〳〵。ヨウイしめてにならしやんしよ【庄】おもしろく無ひ。しやれるなイ【先】コレ庄ぼう。手めへでも無い。夜がふけた。おとなしくも無。【庄】いかにおめへ達が。おさへだといつて。たつたひとり出ものに。しばつてたゝかれた。おれヲ。見ころしに潰すのかへ。（ぬい・里も床を出て來）【里】マアそう。せづこますと聞なんし。求馬るンだといつて。立引も横引も。しらん子でもござへしねヱ。おりがわるけりやァ。おそひ事もありイさァ。【縫】おまへもしんぼうよわひ。何ンのこつたな。【庄】ム、それよ。しんぼうが聞イて。びんぼうがあきれらァ（と手をはた〳〵）【縫】お前。だりよヲ。お呼ねんす。子どもハモウミんな寐んしたわな。【庄】廻しかた呼んでくんねヱ。ナンダ呼べれない。うしやァがらにやァ。こうすらァ（とてうしたはこぼんをふとこちらすところへ何くわぬ顔で）【求】ヲヤそう〳〵しる。なにヨヲさわぎなんす【縫】【里】おまへの廻しよふが。おそひといつてよ【求】つゐぞねへのう。コレおまへも。初會だによ。連衆の前も有るもんだ。ナン　だゞッ子を見るやうに。あきれへすにヱ【庄】ツノ連が有るから。なをさわくのだヱ引。四里四方の岡場所を。十七のとしから此年迄。【求】サァお前のがもつともだヨ。今夜マァきげんよくねて。此雪じやァどうせ逗留さ。あした晝。ゆつくりと云イなんしナ。今ンや夜ハ夜がふけたから。誰れも聞くもの

がないわな。雪と聞く度げんきかしやく〳〵とおちて【松】庄ぼうゐゝくらひに寐ないか。手前に女郎揚られたでゝ。おれも先生さんも。ひとり寐だ【縫】【里】ホンニお休ミなんし□とふたりへはいる【求】サア□なんし【庄】フウモウ七分つッきつたサアおらァ歸るよ。【松】まだあんまり早ひ。ヨウ嘘をいふもんだ。【先】マアちつとねて。氣を休ミや。時に雪ハどうだ。と床を出れんじの戸を明サア〳〵わたぼうしと來た。松もあとよりつゞいて來て【松】モシアノ舟まぐろハまゝだが。この雪はマアどふせうねヱ【先】どふと云て初會そう〳〵。女郎ハ引かれまいし。傘一ッ本ン買ふしがくハなし。居ずくまりと云ふのだ。【松】ぬぎずとでも出さァ。それもこれもアノやろうが太平をぶちあげたから相談が。アレ〳〵モウ明るくなるやうだ【先】ナニサアリヤア。雪あかりだ。マアおれが女郎を。壹ッ當つてミやう【松】わつちも壹ッ遣ッて見やう。とふたりハ又床へかへり【先】コレ〳〵能く寐るもんだの【縫】ア、なんだナ。モウ何時だへモウ歸りなんすか。【先】ドウ歸られるもんだ。大雪よ。そこで手前に。壹ッそうだんがあらァ。何ンだよ。コレ。〳〵ヱ、。能くねる女郎だ。コレ〳〵【縫】なんだナ。もふどふも。ねむたく〳〵ッてなりイしねヱ。ねかしておくんなんせ。ゴウ〳〵【松】コレ〳〵ちつと起ねへ。【里】ヱ、つけのあらい【松】ムンニヤそふいふけびしやァ無ひ。モットけちなそうだんだ。コレ目をさましてくんな。【里】フウおもしろい夢を見て居たものを。

何ンのそうだんだへ。【松】ソウ四角に出られちやァ・トウモ咄し悪い・ナニこふだれ・この雪で三人ながら歸られねヱといふやつよ【里】そんなら居なんせな【松】サァその居續のれいこくが・三人ながら無だから・どふぞ無心たが・若者に通くつして・おゐらが雜もつをたのんで・くめんといふやつ・おがむ働てくれないか【里】ソリヤァへんだね・トウモ爰の内れ・部屋がかたくるしいから・ソンナ事れ・出來ィせねへ・こまつたもんたねヱ【松】ソウいつてくれちやァ・三人ながら・笠ももたねヱこじきた・ヱ、いま〳〵しゐ雪だぞ【里】マァ能くつもつて見なんしよ・初會から質を置て・居續しなんした所が・おもしろく無ひ仕うちさ・どうらくもんだとやらいつて・そこをとる女郎衆も・有りもしやんしやうけれど・若ひものゝ前が・どう思ひなんす・マァけさァとうしても・歸りなんすがよかろうと・わつちやァおもひやすよ【松】ヱ、むだァいふ女郎だ・歸りてへれ・首ッたけだが・爰のうちを出る・【里】サァその所れ。わつちがいふやうにしなんせ。【松】どうする【里】此下の向ふがわにね・うへ田屋といふ・茶屋が有るから・そこのかミさんへわつちが・みをそへて・遣るから・おまへのなじミの茶屋のつらに・爰をば云ッて・傘はき物で・若ィ衆におくられて・行なんして・なじミのつらに。ものを云ひなんすりやァ・合せかねるかミさんじやァ・ござへしねヱ・それから

にしなんし。爰を出る時キャア。求馬さんのいざこざを。立にして。おまへたちのゐてものゝあくたいのまきもので出なんし。是より外へどうもしやうが〔松〕とんだちゑだ〔先〕〔庄〕コリヤアちゑだ（と手をうつ）〔先〕アレ雀がちう／＼だ〔庄〕サア歸るべい（と三人つれ立出ル里手ばやく一トふで）〔里〕ソレ〔松〕よし。（ぬいと求馬へ目をすり／＼）〔縫〕長助どんおこしのものを〔若〕おかへり遊しますか〔松〕大きなのろまだ。この雪にいられるもんか。アヽ一夜やつとあかした。〔庄〕こんな湯かん場へはじめて來た〔先〕玉ぞろひ。惡ぞろいだ〔松〕アノ向ふの上田屋まで。傘と下駄かしてくれろ。〔若〕ハイ。（と三人まへ）〔松〕付てあゆべ。人がわるひぞ〔若〕今取りにまいりまする〔三人〕おさらばア引（と出て行）〔縫〕〔里〕〔求〕ムヽすべらしひ〔若〕モウ一ッぺん塩華。

玉堂燭說稿

自序

或人問て曰吉原の事を青樓とハ何故をもつて名附るや予くつと承知して曰先吉原にすゝまんと思ふ時の其勢い中ゝ弓鐵炮から干戈を遣ふしかるといへとも翌朝に至つては夜通シのつかれに且ハ親仁のにがい顔を案しげんきはなハだおとろゆる故勢を老すると云事也又問然者太夫の事をおいらんとハいかに予私等とハ傾城に逢て若き者のもてるは云ずとしれし情を賣るの契情なれバ老たるも若きも意氣地にて生るの死のとさわぐしかしはした女郎においてハいまだこうなき故さ程に情を賣ゑず能女郎に成年増に至てはしぜんとしたるおつりきに老たる者も亂ち

きに成故名附て老乱と呼ぶ又問契情の言葉すべて申んすのいきんすのおがこんすのと下をはねるはいかにと尋られ是にハ少しへきゑきなれどこゝを云ぬも殘念とまけおしみにこしつけてすべて女房にしておくんなんしの死んすのうれしうおざんすのと云共皆茶なりんハ無きと云文字なれハ傾城に眞事なし皆無シ〳〵といふ事にて下をんとはねる也又問吉原色々の格式有先初春の年始から櫻も散りて早苗取よもぎあやめに夕すゝこ軒の燈籠二度の月菊のせつくや初雪と年中の紋日ハ何としてはしまりしや共內にもワきて燈籠三十日の內ハ大物日殊に當時の燈籠評判すさましけれハ此おこりより聞たいと去ル御方の御

所望にまかせ目くら蛇におぢずすつほん月の光をわきまへすして中万字や玉菊燈籠のしだいをきいた風に辨する而已

安永九子みひろけ月

めて度日

玉菊燈籠辨

ちきれ〳〵の裏見ればゆふべ寐ぬ身のとけしなやと傾城の身の上を案しれバ案しるほどほうずがなくなるほどきみように能くくり廻すもの一夜明たる丈長のとし玉から餅つきの仕着せ迄いづれか身の油ならざるもなく油元結紅粉白粉調度の道具ハいふもさらなり茶屋船宿への附ヶ屆ヶ妓夫や遣人の心づけ女衒のむたいに親里のかなしき會名弘メの摺リ物も面役に貰ふハうとしとおもへハほんにむねがいつはいになり是からふつ〳〵カクのブチコロスのといふ句を止メにしよふと我身で我身がはづかしく同し穴の狐どもによくいふて過の去ルよふに仕てくれんとおもふおりふしおもての戸をほと〳〵とたゝいて來るハるつもの友達イヤ先生是ハたつた獨で何かつく〳〵とあんじすがた時に此間はしばらく御意得やせんがマァおかわりも中の町かイヤ其中の丁のとうろうハいかゞさだめししげ〴〵の御來りんであらふなるほど三日の夜ちよつといつて見て來やしたが何かにきやかかわりのとうろうもやう〳〵廿日に見やしたそれハまたきついおとをどふしい事子ェなんとことしのしゆかふハどふでありやしやうしごくの上ミさきるによ

つてやたらに人が出るハテノワたしらがりやうけんにやァおちやせん先〻の相生獅子のやたい
でさへ風の神をおくれだとおもつたにかいつたらいよ〳〵風の神相生獅子に風の神の人形がな
いから十六日からその人形を出したのか今歳のはなんでもあをむかねバ見へやせん全躰とうろ
ふのおこりといふは先生も御存なれど正德年中角町中万字屋に玉菊とて全盛の女郎共氣どりと
いふ物ハ今の哉扇を十人一ッにした程つねに出る茶屋はもちろん共外の茶屋〳〵へも付届ヶ中
の町でぬいだ小袖をついにまた着た事のない女郎すぐに共茶屋へくれる萬じミなこれに准ずる
から茶屋中こぞつて玉菊をもてはやさぬハひとりもなし時にある夏ふとワづらひ附たがいかな
る因縁やら共七月の初ついにむなしくなると吉原中の泪で日本堤がきれたといふ事共時田中の
百性ハミなおたすけに出たと聞やしたそこで盆に茶屋中が云合せて玉菊さんのにゐぼんたとて
吉原の事なれば只の白張灯ちんも燈されめへから赤いと墨とでだんだら筋を引てとほしたれバ
何が見物が出たとおぼしめせそこで明くる享保元年にハまた嶋のきりことうろうを軒毎に燈し
た所に去ル御やしきの破笠といふ人からくりとうろうを工夫してなじミの茶屋へおくつた所が
めづらしいとてとんだ見物が出たそれからして例になつて今にとほす共玉菊が三回忌のついぜ
んに江戸太夫何丈が水でうしといふ淨留理を作ッてかたつたとある事元祖河東秘曲をつる蔦屋

庄次郎にゆづり表號を蘭洲といつて今の世までも通家のふんは河東ぶしをうならねバならず玉菊身まかりし時年貳十五歳なりとぞと先生のお出しなされた古今青樓咄之書有多にも書ておきなさつたでハないかそふいふくわんくわつな玉菊がついぜんとてはじまつたとうろうが三味せん箱のつミ金で明りもとほさぬ人形がなんの手向な事も風雅な事も少しもないかとおもふィャくもふいいなさんななるほどお前ェのいふのはもつともなようだがよくかんがへて見なさいなんても諸人に氣に入るやうにして獨も客のおほひが手がらといふものハテ櫻を仕舞と燈籠のくふうするはとうろうだけの事があるからその元はといへバ玉菊がはじまりすれバどんな事をしても客の出るのが玉菊へ何よりの手向あんまりしつた顔にそのやうに何かをわるくいひなさんな此ごろはやる大通舞をきゝなさい一チにすそをふんまいて二ににつこともわらハずして三に盃あさから出し四ッ世の人下目に見て五ッいつでも下ッか出來六ッむしやうにめくりかけ七ッなんでもしつたふり八ッやしきを家質に入九ッ小藏もうりしろなし十とのつまりハ居候大通仕舞を見さいな〳〵とミな此くらゐなものまことの大通なら人のよいといふ事はなんでもよいといふがよしさと咄すうち鐘は上野か淺草かまだ初秋のみしか夜にひやうし木がかち〳〵とうつてくるをかぞへてミれバもふ九ッ今夜ハよほど涼しいからおもいのほかいながばなし明日お目

にかゝりやしやうと云二人をおくつておもてのかきかねをひつかけうちへはいつて又なんぞ姉双帋のたねにもならんと宵からのはなしをほつり／＼とかんがへるとおもへハいつか筆もすゞりもうつちやつて机へあたまをこすり附ヶしばしとろ／＼とまどろむとおもひしにふしぎや五十嵐の炷合せ花したミ岩戸香といふ風吹とひとしくおもてのかたでもし／＼ちつとあけておくんなんしといふ共聲のやさしくしほらしさがふつとみゝへ入何事やらん今じぶんがてんのゆかぬとおもひしがいや／＼箱根からこつちなればきづかひもあるまじとおもてを明ヶて見し所にこわいかに今をさかりの八重櫻芙蓉もなとかおよりこちのたつきもしらぬ我庵へ夜更ヶてたづね來給ひてそもまつ君の御姿ハそと八文字おふようにはんこん香のきへそこないか八朔にはまだはやし心中にハ相手が見へず何と申御方やとあつけにとられてたつぬれバ彼の女こたへて御ふしんハ御もつともでありんすけれど何もそうあんじなんすものではおざんせんワ、ちこそ宵におはなしなんしたすミ町中万字やの抱にて玉菊と申んす遊女でおざんすといわれてびつくり是ハマア女郎の泣売が來るといふハどうりでおらがお袋がいもがらを干されたがせつかくのおいでに何もちそうがなくて氣のどくしかし手製にしたにつけとうがらしのからいのと甘露梅のすいと役味なしに煮たざぜんまめ中のあいて居る卷せんべい藁でいわひた山屋とうふつぶしあんの

大通焼もなかの月ハ家のすき間からさしますから何かなしとマア／＼こちへとうちへいれさためてしさいあつての御出ならんかいかなる事や咄し給ハれといひければ玉菊ハさもうれしげにかたりたきことの候ひて是迄あらわれ参りたり我正徳五乙未七月此世を去りてより今ン安永九庚子の年迄星霜六十六年をふるといへとも其時よりかわる事なく日々吉原繁榮にして殊更秋毎にワれへ手向の燈籠もおこたりなくゑこうせられしくりきにより極樂の中坐に直り蓮のうてなの毛せんをしき輪ごくわうの長柄をさしかけくわんをんせいしの二人リ禿迄付られたり共うれしき事帶をしづめて松魚を喰ふとも中／＼不及今ハほさつの數に入きせんなん女にたつとまれる事初雪の鰒あんこうもなどか我身にまさるへき何哉して此禮を里人にのべたき故一冊の草帋となして給れかしみづからが申事のあらまし筆にて留給へまづいにしへよりの名高き傾城に高尾うす雲小むらさき山本屋の勝山秋しの大松屋の松ヶ枝三浦屋の揚卷かつさやの揚卷中あふミやのミやこぢひしやの芙蓉巴屋の高橋ゑひ屋のつしま角山口の香久山是らハ皆それ／＼のふうりう有て今の世までも其かたを殘し置まだ其外いろ／＼あれどしるすにいとまあらず引つゞきて今に名高きけいせい是ハ申たてずと皆々がよく御ぞんじしかし此頃のおいらんおゝくハ蛇をなまごろしさるによつてむかしのとちがひ何も此形ハ何屋の何がしが初メしことなどゝいふ事ハ當時聞

カすまだも此末迄も沙汰の殘らんハ眞芝屋の屁川なりいかに金がほしいとて眼のない客に逢ひとをすそれもたて引かなんぞと金氣のうすい砂糖なら張もいきぢも有で青樓の傾城ならんに何ンぼ女郎がこすくなつても遊女中間のつらよごしこんにやくのよごしがはるかましお名をバ申されやせんが二丁目邊の名高い內役者でいわゞゑび藏かめくりなら仲藏むべ山ならバ文屋のやすひてといふ人だが氣のどくな事酒を呑とたらふく孫左衛門廊下へでも坐敷へでも行あたりばつたと共に艸枕廻しになぶられるやら茶屋のおとこがいじるやらいやはや言語にのべがたしまた女郎やの旦那さんがたにも茶屋のごてさんがたにもさりとハつまらぬのがおざんすむかし逸志といふ人前のイ山にみを付しにもとされしを色をせぬ女郎なりとて中の町にてワるくいひしなどはなハだもつてふらちなるにこれらをもつともらしくおもふ里人も有り此頃露屋の露の緒さんと何かわからぬ事が有てよつぽど金をゆすられた御てさんも有り何か客人も此人達と付合ねバ大通でハないよふに心得るたちの似た山がおゝくてうつとしい初會からぶちころしたの何ンのと女郎にかんじんよりでもかけハしまいし大名筋の藍錆も親和染のちりめんも安らうそくより早く流れ開取ぼうもんの河東ぶしゥゥくうなつてあつまるものハ蚊斗り。蚊斗ッな巾ぶんだが近年のハ大通でハなくて大づうさほんにしミ〴〵すきんせん。すきんせんが求あらバふしミ

町の勤にでもなりんすに形ﾘ斗りいきまで紙入がふくれても中にハ下ﾘの書ｷ出しとてうちん紋盡しの小本紐を付てくびへかけたら頭陀袋にハしごくなれど廻り合セをワるく死ぬと六道錢もてこする共むれもまゝある故近頃ゑんま王極樂へ相談に來なんして地獄でも新見世をこしらへ藝者の內をほつき歩行く者を張ﾘの山といふへ登らせ喰た事もなくて樽ミふだの枕流てのと洒落るやつハしつほく臺の上へのせ孔雀の羽音と片手にどんぶりへ水を一ッぱい入てもたせる血の池の出見せに池洲が出來るとうしんで筆の根も古るいから着巾を下たせうづかの婆ミァにいろ事の根をほらせる共外いろ〳〵なせめ道具黑ぬりのさみせん箇鍋の子の存中に松か生へほうわうの板〆が毛せんへ乘る札いさがつたせいろふが飛で歩行赤鬼や黑鬼へもそれ〳〵に仕着せをして一百三十六地獄にひまがなしやう〳〵うん上すると極樂へ通しあミだ如來のくりきをもつて眞ンの通ﾘ者と成ﾘ釋尊のおしへにしたがひ身にハふんそうゑをまとひても心さへ通ゥなればいつでも人が下にハおかず天上天下ゆいがとくそんと少し塩屋をいふもよけれど人のいふ事ハよかろふがわるかろふが何ンてもィヽ〳〵と調子を合せる事をごくぢうあく人むだほうべんと釋尊もおつしやりんした鉢卷をわすれた助六を見るやうな佛さまが大ぶん出來て蓮池にもせきがなくて仕合なものハ五百人の羅漢達ﾁ割込をしてやるで近年にない錢もふけちゝぶと

さいこくとばん東の藝者か一所へあつまつて御詠哥をうたふやらあわび堂といふ遊山所をこしらへ極樂の本店迄ゆかずと札もうたれてお勤錢もしめこのうさぎといふこれも釋師のおぼしめしなんとけつこうな御りやうけんでおざんしやうがいかに世界が通ゥなとて地獄極樂まで通に仕立る共中でわつちに手向る燈籠におとゝしの十露盤とはさりとハつれないどふよくな引手あまたのよし原でもつらいしよふじやないかいなワたしが手向ハさておゐてほんのとうじのぜにもうけそれも大じハおざんせん宵にぬしのおつしやりんした通りワたしの手向からはじまつた燈籠にて秋も一しほにぎやかに客もおゝく出るといふハ何よりのうれしさ共出る客が大門の這入口に十露盤があつてハむなふくびやうお先まつくらにやミと遣ひかけ向ふに黑羽重仕立の客が居れバこつちもまけず八丈仕立連が一歩の女郎買へバ付廻しを買ふ氣になる人か晝三の喘しをすれバ呼出し散茶の喘しをするとち万石取の殿樣でも店ちんの通をもつたおかたでも買ふ女郎に二色ハなし先が蔦屋の糸町ならこつちハあふミやのいつうら引ッぱり見せの帯扇とハ物ほしそうで氣のどく貳朱の女郎ハ相應に貳朱らしい名を付たがあけすけで同しかつても心もちがいゝとまけぬ所がァヽお江戸壹兩御前ッ貳歩旦那只の壹分ハ不相しらいとたとへにもいふよし原それを二一天作二進ヶ一十で遊バゝ中〳〵四百の女郎でも土用寒ハ通されず青籠へ入たさと

いもや昆布巻漬茶の見舞物も貰ッてたかくつくのハ合点たつた一晩まてバ八文でミる役者附を宵に見た斗ッか壹歩こふいふ所がすい戸の水がら大門をくゞらぬがまことのすいと高尾さんの言なんしたもすいの口から酢のすぎたそふいふまことのすい斗ッあらバ女郎の干物が大ぶん出來てもろあじや眞鯵の付合もせすハなるまじ相應に遊びの付合もしつて人の咄に調子も合せ心の内にハ見ン一むしんしやつ金もせず二四八に八チたして十六兵衛にもならずむねに十露盤をはじいておもてへ出さぬがまことの粋とや云なるべししからバかさねて大門の上へ十露盤のやうな御しゆかうハごめんどうぞ今歳のとうろうも水戸尻から大門迄人形を引たらよかろうに角町から火の見やぐら迄の客ハ手もなくてんま町貳丁目天王身の御かりやのうしろに居るやうな心もちかやうな事ハ氣をお付燈籠なら燈籠の章雅をなくさぬやうがかんじん吾妻玉菊傳とかんばんを出しても玉菊か揚卷か小やくやでハすミんせぬ揚卷にハ總角の寛濶有リワたしハわたしが意氣地あり客同士のたて引ならとんな事でもなさろうか不男でも親仁でも名さして來れハ其夜の夫ト逢ふと逢ぬハ心一ッ何ンぼ手前の氣にいらぬ客だとてあたまへ下駄を上るなとゝいふよふな無法なワたしてもないものをさりとハ聞へぬ露光さんお前の親玉王子の稲荷様へ七年あとの初午に青樓中の風雅人か催ふしてわたしが云しへ初午や田の道習ふ鳥の跡の一章を巻

頭にすへ存義宗匠の軸にて奉納せし額有り〽川竹のうきふししげき中にも風流のミちに心をよせて俳諧するものから唯初登山の童に比經て此社にさゝけ奉る而已と前書せられしハしごくこゝろゆきてたま〳〵後世にしらるゝものハ和哥のミちと古今の序を思ひいてのべたきお禮ハこればかりと云かとおもへハきぬ〳〵のにくやからすがなくわひなと隣の師匠の朝けいこに目かさめてさてハ梦かと〽燈籠になき玉菊か來る夜哉

安永九かのへ子年

秋み月

根柄畧軒傳

自序

大きにお世話。お茶でもあがれと無多言を。咄たれ酒嘔。ひつたれゆる不潔。とるて方角生酔の。ねから分ちも無智恵の底を震つて有つたけ書つらねたるふと印。ほんに烏か鵜の似れつがも名代の芙蓉峰と高田の似山ちくだ嶋だいだ法師と背競。ぢだんだ踏てもいかぬ事。よしに品川釣合ず。寳船に葛西船。くさい物身しらずに。遠慮會釋もなら團扇ほね折損した其果ハ。紙屑籠に埋て。名をなす事もなか〳〵に。喰ふやくわずに浪人の。小うたひならぬこぢつけか若や當ろと推量で。百兩富の第一番。取たひやろと舞納ひとり騒ぐとホヽヽ敬序ス

時に

安永九のとし

のらつく春

著〻羅山人

芳可斎誌

根柄異軒之傳

鬼は外福は内へとさらい込。一夜明くれは氣ものび〳〵と。春を迎し松かざり。めでたい〳〵と。家毎に壽賑ふ其中に。見る目いぶせき破れ家の。何かあやしの竹格子。根柄異軒と筆太に書てかけたる宿札は。浪人のやせ世帯。くわす貧楽のみなれば。世の正月を目の正月。けふは送れど翌の日は。當ども長の月〳〵の。家賃日なしの催促に。ふんどしまでもぶち殺し。骸の外に有物は。鼠のふんと蜘の巣の。掛らふしまもあらされば。仕様事なしの得手勝手とかく果報は寝て待てと。あんし入りたる肘枕。しばしまどろむ折からに。ふしぎや俄に異香薫し。引窓のあたりより。芝居の大詰を見る様に。ふたつの神靈顯れ給ひ。善哉〳〵我〻は。當時はやりの大黒天。おなじく大通神なり汝かいたく貧乏にして。しかも其上いくぢなく。箸にもかゝらぬいけず者。なれども性得律儀にて。嘘を飾て人を迷し。錢金をぶつたくる。當世のよき風儀をしらず我〻これをあわれみ。且は衆生濟度のため。爾に一言をしめすなり凡我〻を信する衆生を見るに。後生願ふは稀にして。皆色欲のふたつ也。どこの娘をぶつしめたい。やれ金持

餅十画

に成やうにと。世上一同此事なれば。汝色事金持の指南をして。多くの人を救あげ。その禮物に溫り。からき此世を安樂にくらすべし。猶一卷を授る間。とくといさゐを呑込べし。ゆめ〱疑事なかれ。さらバ〱と御聲斗。ミかけれきへて一卷れ。枕元にあり〱と。異軒夢覺大に悅ひ。二神の告に隨て。早そく色事金持の。傳授所の引札をしてひろめぬ

色事金持 指南所

神田の八丁堀　根柄異軒

乍憚口上書を以奉申上候

益御機嫌能被爲遊御座奉恐悅候隨而私儀年來御蔭を以渡世仕誠以難有仕合冥加至極奉存候

今度

何茂樣方御重寶ニ相成候儀を仕出シ奉入御覽度工夫仕候處此度不思議ニ成就仕候間早速御披露申上候近比憚多儀ニ御座候得共色事金持之近道少ニ而茂無多無之御用ひ被遊候得は其印忽相見へ申候尤御謝禮之儀は格別大下直ニ仕世上廣御指南申上度大願望ニ御座候隨分仕入嚴敷吟味仕御都合宜御德用向を第一與澤山ニ考急度御目ニ留候樣無類大趣向仕候御贔屓厚御賑ゝ敷御來臨被成下候樣偏ニ奉願上候以上

かくのことくに觸廻せり。見る人腹の皮をより。扨もおかしな安賣哉咄しの種にせん物と。春の日永のつれ〳〵に。諸人群集をなしにけり

色事傳授

是ハ〳〵何茂様。やう社御出下されました。早速色事から御傳授致ましやう。是を御用ひ被成るれば權門(けんもん)と云藥よりきゝ目が能い。よつて前錢をいたゞきます。御當人前四拾八銅。さて次ハ金持になる傳授代百銅。たつたワづかお出しなされて。旨(うま)い事を兩手に握(にぎ)る。是ほど安い物ハなしまだ艶文(いろぶミ)の出來合か御座ります。御用なら御求なさい。と云て片手に艶書の出來合をいく枚も重て持片手に三方を持ていろぶミの出來合紙代十六銅ツゝお求なさいと呼たから廣〳〵に前錢を取て二廻りしたゝかしこためにこ〳〵物にて座に返る

是さへいたゝきますれば最早御傳授申ましやうエヘン〳〵夫色に入るの門さま〳〵にして。其仕懸。てにはこまかにあけてかそへかたし。目付顔付もしくハちよ〳〵ら。手がさハり足があたり夫がゐにしの端となる。是等ハ一体上出來にて相ぼれの大ぎまり。又ハ金の光のたす所傳授へちまも入らずして。自然とやらかす仕打也。夫にハあらで不得心どふもこふもゆかぬのをこぢ付る所

が御傳授。口傳に曰く窈窕タル娘を見て手に入んと欲る時ハ。必先衣紋姿を作り。ずいふん身をしてしな／＼歩ミ。あじにいろ目をして。情一はいうぬ惚をなす。而后きやつ氣味合ハずんばぶら／＼と跡に引下りきやつが内へ歸る迄付ヶて行。落付所をとつくりと見屆。親の名迄を聞出し。そこで一思案。工夫しても付ヶ込手懸一向なくんバ。用もないのに其門前を度ミ通り。家來抔をあやなし。近付に成つて鼻薬をかい。委細の事を呑込セ。娘の親抔か堀の内か新田又ハ目黒。何れへ成とも遊山がてら行支を前日に聞出し。我も同しく出立て。あとになり先になりする内、不圖道連になる。所で面白く色／＼咄をしかけ放蕩者と見へぬ様に。そしていかにも柔和に見セかけ。ぐつと下からいんぎんに何かおふり合をむしやうに云。氣に入様に輙誑し。知らぬ顔て御姓名ハ何と貴宅ハいづれ、已後ハとんとお心やすくお出會申たい。俳諧なとハいかゞお好ならたと私宅へもお咄ながら御出下さりませなんぞと言と。先からも是ハ近比忝い其内お尋申で御座ろふ。お序の節ニは拙宅へもと。愛相にいふ所を。すぐに付込ミて。是ハ千万有がたい。しからバ幾日に參上と逃さねバ。假さきハ不承知でも。義理にかゝつて引れもセず何日と直に約束極る。扨急度詞をつがへ。其日にならば。二度も三度も湯に這入氣根かぎり情かぎり。思ふ儘に磨き上。薄白粉も御勝手次第。髪の恰好。衣服の工風。腰の物の拵。はな紙袋、

紙夾。きせる。たばこ入。胴乱。扇子。足袋草り。其外種々のさる引通具。一際目立思ひ付。夫を仕立る金なくば。損料でかりるとも。友達の皮をきてなりともお差圖申迄もなく。大通世界の事なれば。御如在りよも有まじ。いきちよんに彼内へ通り。余りいやらしく氣色取り。また扇子ぱちく\卻て惡し。少も億せず打さばけ。挨拶に間ぬけなく。笑交りに面白く。脇から聞てもさへた様に。たとへばしらぬ事にても。亭主が勸ばいやといわず夫りよかろふとかなんとか言。習ながらも間を合せ。とかくきげんにさかられず。お伽心を專とし。懇意にて勝手へ通り。不斷入ひたつて居やうに。おつをよくつばなかし。酒盃等に至ても。此塩梅にやりのめし。酌の下女へもしほらしく詞をかけ。歸た跡り寄たかり。評判される其時に、あなたりどふも雅しくて。そして飛ッた大通だとほめらるゝ様に心懸。勿論洒落地口なんどを咄出し。ほろ醉の機嫌に乗し。ふつゝかながら三味せんを。お笑草にお聞なさいと。三弦をかり膝の先。落そうにちよいとのせ。功者な聲で流行唄きれるに少し彈かける。すると娘り最前から。衝立の間から覗てゐる。こつちも夫と推量し。態といやミな所を唄ふ。うたの文句で直になぞ。是り唐土の司馬相如おぶんといへるよい娘を。詢落した吉例なれば。甚あじわへる所也。亭主勝手へ入たる間に兼て所持するふみを出し酌の女をあやなしてとふぞお娘へとゞけてくんなと随分

あぢにこぢ付べし。きやつめもぐつと呑込だ。様子に見へたらサァうまい。彼是する内夜も更る。離がたきを辛ぼうし寶の山へ入なから手を空しくし暇ごひ。歸り際に尻目て烏渡後の方。少し娘へ氣とるべし。先大抵の色變ハ此位でやり付る也。扨右之通にして。とんといけぬ敵あれば。全くいちやつく奴が有て。投られたると心得。此上の手段にハ戀病と云身也。百日かつらで痩た様に見セ顔に少し青ミをこしらへ。所て彼家へ親父の留守を見込ンて行。ちよつとお目に懸度用事有て罷越。若お他行なら重て參るも氣六ヶ敷お歸迄お待申ゥと坐敷へ通る。定てかの下女が茶たばこを持て來る。是から先が勝ぶのかんもん。さもよわり果たる聲を出しいやミからミのセりふ。誠しやかに歎たり。又くどいたり恨だり。祕術を盡した其上で。これ程に申かられ。是非にお返事聞ねハならぬ。もし又お嫌ひ成るゝならバ迚もこがれて死覺悟。南無阿彌陀佛とすつば抜。笑ハぬ様に眞貞に成。自害をすると見セたなら。女斗の內なれば娘も是非なく走り出。コレノゥ待て下さんセと。云と夫からこつちのもの。かくのことくに心を盡し。狂言を書ならハ。人の女房後家比丘尼。いかなかた藏貞女でもする〳〵べつたり〳〵とすべつて轉ぶ如くにて。□□□□□□□□。先是迄が色事の御傳授。扨又此上一ッの極祕傳が御さります。めつたにハ申されませぬ皆様ぐつと近ふお寄なされませと小聲になり。是て

いかずハしやうことがねェハイ

金持の御傳授

さらバ是からミな様を。うん〳〵うなる大金持のきん〳〵にして差上ます。少ト古けれとも京かのこの文句に。かねにうらミが數〳〵ござるとうたふから。迯いけぬ物と心得て孔子の異見に付がよし。扨其異見と言ハ。皆様御存のしやれ本ニ曰ク。以レ約失レ之者ハ鮮矣云〻。儉約をすれハ金をなくすものハないと云事。其けんやくの仕様といつぱ。年中焼塩で湯漬を喰塩味噌ハ大禁物。其外常に一切喰ず。炭薪ハワたり物の如く大切に遣ふへし。餘り何ぞ喰たくてならぬ時ハ。先肴賣か來たならバ呼込て其平目ハいくらと問へし。貳百三十貳文てこぜんすといわゝ。高い〳〵先よそふと言て皈し。錢をなめて平目を喰たと堪納し。其錢ハ拂た心て別にして置。ソリヤ餘慶に延るハ。扨たばこハ一日十ふくとか定め。髮月代五日に一遍。せん湯ハ十日に一度。夜ハ行燈とぼさず。六ッを打と直に寢て。客か來ても明日お出なさいト斷て歸し。扨空地があらば畑を拵へ。時〳〵の物を作り。夫も手前物にしてめつたには喰べからず。催した客か佛の日歟又土用寒ンの見廻。手作〳〵としんセつごかしにすべし。紙屑隨分しまつして溜。多くの

屑買にあたつて高直に賣べし。大小便迄心にかけ。他所へ出てハたれる事なく、糞取も吟味をとげ。惡く云れても隨分からく仕切べし。外から何ぞ到來すとも且てくわず。肴ならハ肴屋へ渡し。此方にて無據入用の時。其代を取て遣ふ。若客が有てもどふもこふも是非何ぞ出さねバならぬ手詰の時ハ。らくがんはるていす抔出す。しゐてお取なされと決て云べからず。喰ぬ時ハ仕廻て置。いつ迄も惡くならず隙な節ハ親類友達の家を見廻、菓子が出たら土産と云立て、飯が出たらバ時宜なしにしたゝか喰ひ込、久しくこたへる樣に底をいれ。道を急くハ惡し。草履がたまらず裾のいた事、尤よき形りをせず。いつもきたなき物を着れば金持と思ハれず。有德の人ハ着古しをくれる事も有。其樣な人にハ物の入ぬ事なれば。巧諛をして用を足し。おふり合第一也。いつくの神社佛閣に參詣しても何卒富貴滿福長者金のたんと出來ます樣にと、大そうな願をかけ。ワづか三文ヤ十二銅上たとて御嬉しくも有まいから。一向素拜がよし。むかふからよき女か來ると氣を取られる。所をうかとせず往還のすきまを見。大道をがんばつて。かな釘一本でも落て居る物を拾ふ。時によると大にこ〳〵がある。隨分ほし見せをぶら付堀出し物をして直賣をし。多くはらハしものを取次。少宛のかすりをせしめ。よく〳〵隙なときハ小細工。扨又分限の居た跡の藏地あるひハ賣家あらハ手を廻して買取て土を堀て見るへし。ひよつ

と金のある盤鋼でも金の釜でも出やうもしれず。縁談の世話身に引かけて穿さくし。たとひ先から頼ますとも。年恰好是〳〵と見繕。うそを云ても熟讀させ。世話やき代をたくるべし。武藝遊藝なまりわでも。万八を以人におしへ。是又謝禮をしてやる也。取れさへする事ならば。間男でも密通でもさのミくるしからず。　通を守時ハ金持に成事至て速也。万〳〵一遊たらバ命の後篇をこしらへて　追剥夜盗氣遣いなし是偏に僞ならず。授所の一巻にしるし給へる儘なれバ。色吏も金持も。成るかならぬハためした上の御評判

芳溪文話

芳深交話序

龍とならば。雲とならむとは。さすがに若衆らしき誓の詞。驪山宮のさゝめごと。比翼連理のせりふよりいやらしこが無ふて。去とは好たと。滅多むしやうに。片意地學もん。衛の靈公が秘藏若しゆ。孟東野がかた藏ねんじや。我朝には高野大師傳來の此こち。誠に僧徒の樂しこなれやと。衆道菴の穴好和尚。毫を机上にふるつて。鬼畜人天。皆是びらしやらと。したるき色に。門戸を閉し一ッ向專念の野郎ぼうし。偈を読て白て言。

安永九子の初春

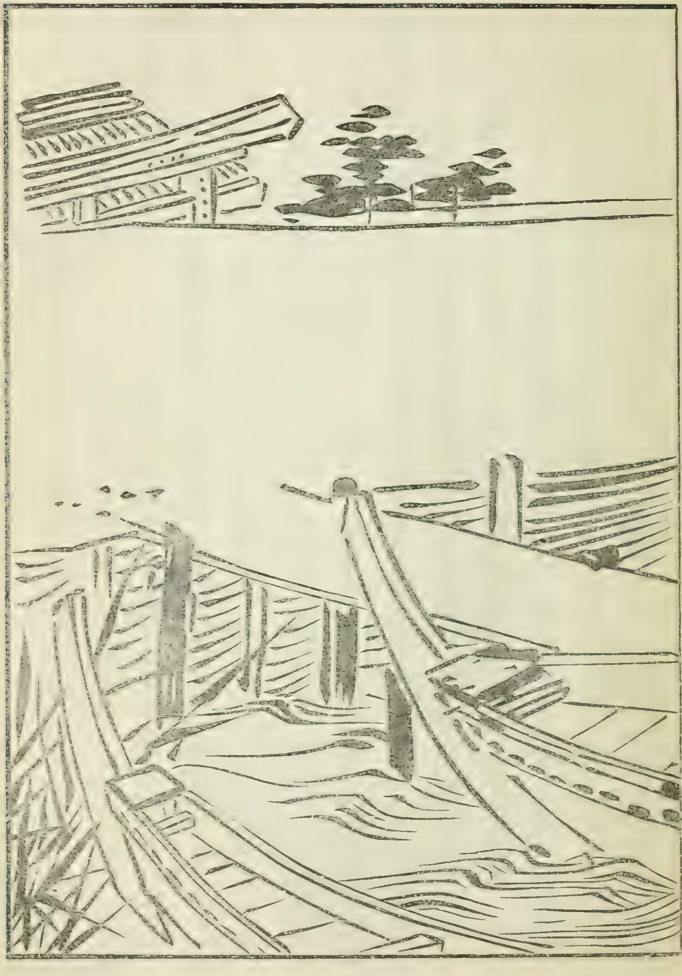
囮好述

八雲たつ出雲の神垣より。荒神樣が今宵おかへりと。清かに注連打はへ。燈心のふとしきたつて。膀を照らし。爰貳丁町のわたくし節季。春迎に少しも違へぬ。顔見せの夜の群くる人脚潮の涌くが如き。和泉町の辻を。よし町へさして【穴好】テモじゆつなや〳〵。ナニ智辨丈。ナントきつゐ。賑ひではごさらぬか【智辨】イヤけしからぬ群集。田舍もの丶私などへ。氣のぼせがいたし。目まいがいたしまする【好】さぞ〳〵。扨アノかざり物は。顔見世三ッ日のうちごされど今宵見いでへ。このけしきがござらぬ。また今宵七ッ過から。積ものといふて。ひいき〳〵の役者へ。進物を町中へかざります。イヤこの定七へ。此方どもをさがしまへるで有ろふ。しかしきやつも通人。大方新道のれいこくに。待つて居るでござろう。【辨】アノ定七とやら申男へ。何者でござりまへす【好】アレハ本町の呉服屋の手代でござるが。わしが心安ふする。屋敷の婚禮用を。わしが世話で。言イ付ヶさせました。まへどから飲友達。貴僧なども若ひが。當世へ僧俗とも。抹香くさひ事はかりではゆかぬ。ちよ〳〵らやうを交て書ねば。通用がワからぬ。慮外ながら御異見【辨】有がたひ御しめし。といふ内よし町のなじミの茶や【好】目出たふ今年もかへらず來ました 見世へあがる 茶や女房 コレハ〳〵好さま。相かへらずありがたふござります。お連さまお上がり遊しませ。定さまも先ほどから。といふうちはしごから【定七】ヤレ〳〵。おはぐれ申て先刻から。

まちにまつておりました。サア〳〵まづ二階へ。【好】さこそ〳〵。イヤ心ばかり嘉例の御祝儀。
【女房】有がたふござります。（三人ハ二かいへ上ル）【若者長八】きつゐ御見かぎりさ。【好】イヤモうらみハもへ
とも。定州などゝ違つて。今の寺へ入院してから。旦用はしげし。道ハ遠し。【定】イヤ中あな
たさまハ。【好】最前から。お引合せ申さふとぞんじたが。途中の事ゆへ。コリヤわしが法類也。
肉縁なり。一ッ躰分身の和尚。此間当地へ初出。あたまのまるひ。下りでござる。【定】新子
さまのお盃を。ちよつと。【好】智辨主。おさしなさい。【辨】イヤ慮外で。【定】ハテ埒も無ひ。
是までハ右のせりふ。是からハ辨さまツゥ出なされては。モウとんとはじまりませぬ。【長】
サアおひとつ。（はしごの中段から）【下女はつ】長八どん綱さまハ只今。瀧蔵どンもそつとせねべ。跡がきか
れぬと【長】ソリヤァへんたの【定】よし〳〵綱どンさへまめなら能ひぞ。【好】デモきさま。
久しふハ遊バれまい。【定】是ハまたいかにわたしが店ものしやてゝ。ソゥ見くびりなされたも
のでもござりませぬ。今夜ハおまへさまを干瓢にして。見世の首尾ハ【好】それで安堵〳〵。
（といふうち見せ先キへ）【綱公下り】おやかましう（と言すてはしごをぐわた〳〵）【綱】ム、、久しぶりで。めづらしい蛸がとれたのう
長八どん【好】とれるはづさ芋のさかりだ【定】きつゐ御さかん【綱】アイしつくいが聞てあき
れやんす【好】いつも〳〵。口ハ憎ひが面ハ美しひぞ【綱】おきやァがれ。気が違つたそうだ

芳深交話

圖



【定】下りさま御名ハ。富吉と申ます。おたのん申やす。【長】サアお盃を【辨】壹ッ上ヶやしやう。ヲト、、、【定】是〳〵どふでござります。【好】道〳〵も說ひた談義。何ンと聞かれた。色酒ハのまねバすまぬ。ア、埒も無ひ。【辨】デモ私ハ無調法。といへどなく〳〵【辨】是ハ御むり【富】すけて上ヶやんしよ。【好】ム、味方見ぐるしひ。【定】サア御吸もの。【好】コリヤなんぢや。魚では無ひかよ。【長】まつ茸でござります。【好】コウ老眼でハ。イヤ此瀧藏が跡ハどふする。顔見せの夜の追かけ迎ひ。【長】ホンニどふするノウ。おはつどん。瀧さんの跡ハ。【はつ】今又聞にやりイした。モシエ三味せんの常藏さまが今見世へ。【好】來て居るか呼〳〵。はつ下へおり【はつ】常藏さん。好さンがお出なんせと。【常藏】ヤレお久しや好さま御機嫌よふ【好】夏あふたまゝじや。壹ッさしましよう。【常】定さまおめづらしう。【定】久しふ承らぬ。お彈語りを【長】瀧さまの跡をうけました。【好】ソレ御ほうび【長】有がたふござります。此内常藏ハてうしを合ミやうがの松のけい事【長】瀧藏さまの御出。ドウダ瀧ぼう。【瀧藏】是ハまたお久しぶり。【定】きつゐくこもつたい。【瀧】顔見せだけさ。【定】ム、酒くさひそつちへよれ。【綱】好さまわしが所の下りさん。呼んでくだんせ。【好】マアよしにもいたしやしよ。【綱】ム、久しひしわ身だ。ゆづる子も有まひに。【好】有るとき〳〵。大こくがひり出した子鼠を。するぶん

御所持さ。〔定〕モシ好さまの若衆にむかつてひり出したハ。ちと禁句でござりますぞへ。〔綱〕呼に遣る〳〵。おれが呼にやるぞ坊主。〔長〕御ふたりさまのお迎ひ。〔好〕ひどいハ〳〵。いかにかほみせでも。三人ともに詰じやそれをきく事か。〔長〕あやまりました。〔瀧〕好さまァノ夜が更てすきになつたら。かざり物ミせに御出なんせや。〔綱〕それからすぐに貝しやくしと願ますする。〔好〕あきれてものがいわれぬ。〔長〕汐時も丁どよし町。〔好〕こいつまでが同し様に。〔定〕是ハワたくしもおねがひ。おかげで私も出番このかたのはれ遊び。爰にぐぢ〳〵致しておろより。〔好〕扨〳〵是ハ。むごひ目に逢ふ事かな。ワしハとも有れ智辨和尚ハ。はしめての若衆遊び。〔定〕ハアテあなたハやはり爰もとで。お遊び。お逢方も下リさまの事なれば。まだいとけなきホン〴〵の色子。〔綱〕〔瀧〕そんならわしらハ鬼色子といふのかへ引。〔定〕あんまり違ひハ有るまいわへ。〔長〕イヨ丸屋〔好〕ア、附合とやらハせつないもんじや。我おもしろの人かしましやじや。〔綱〕どこひ〳〵。大こくにひり出させた。そのいゝわけハ。なんと〳〵〔長〕おつしやるほどおまけ〳〵〔好〕そんならどこへ行く。やぐらか裾つぎか。中貳朱も今ハ無そうだ〔長〕是ハまたきつい目ぜゝり〔好〕せめて小花たけをかする氣だ〔定〕きやうとひもんじや〔好〕辿も行なら。ちつともはやく〔定〕四ッ明の正面へ。

とミハ〳〵支度して【好】智印お聞キの通り。義理詰に進ふて此しだら。形ばかりを穢しにまいる。ゆるりつとおしげり。常蔵もお伽に殘す。太夫呼んで能かろふやうに。常ぼうおたのミ申【常】かしこまりました。ミな〳〵二かいをとうり、下る【女房】さやうなら御機嫌よふ。と門を出幸左ヱ門がかいしやくし店へ【長】ヲイたのんます。【舟宿亭主清吉】おいくたりでござりやす【好】ム、一ィ二ッ三ィ上下七人ッじや【定】小屋かたにせずハなるまい【清】左様さ。八や川吉をこしらへろ【舟頭八】アイごめんなさんせ。とこしかけているきやくのまへを通りかしへ出て行【好】エ、イ宵からの酔がいま出て来る【舟宿女ぼう】サアお茶を堂ッ【清】サアめしやせ【定】モゥよしかな。とミな〳〵さんばしへかゝる【清】モシ〳〵。あぶなふござへす。【定】せうち〳〵。好さまお手を引キませうか【好】そういふきさまもエ、こゝろなきげん【綱】きやくだけのよしミじや。ドレわしが手を引てやろ。とミな〳〵ふねへのる【瀧】ア、また川ハ寒ひなァ【清】八よ雨はうの戸ハよく立ッたか【八】立やした【定】ドレそのだんご。爰へよこさんせ【廻し若者】ハイ〳〵。はゞかりながら。【長】わたしがいたしやす。【定】エ、それあぶなひ。蠟そくがころんだ。【長】ヲットどこいな。ヲットよしな。ころんでハすまぬ。はおりかぶだ。【定】能くいふもんだの。【長】何さ涌くが如しさ、【好】明りの悪い蠟そく〳〵だ。【女ぼう】ハイ御きげんよふ。とふねをおし出ス【清】どこへ遣りやすね、【定】客人かたのお望の所へ。【瀧】土橋の稲川屋へ。【好】モゥ爰

ゝどこだ。【清】モウ乘切でござりやす。【瀧】猪牙と違つて、おそひ事じや、【長】テモきつゐせつこみさ。【定】今少し〳〵。（かれ是いふ内稲川やのさんばし）【清】稲川や〳〵。【稲川や下女】ヲ、イ息子さん、とほうもなく寒ひノウ【好】サア〳〵上がれ、（とも〴〵陸へ上り）【好】アイタ〳〵〳〵、【定】どふなされました。【好】道に木の根が突ッ有、（とうちつれざしきへ來り）【おまつ】よふお出なんした。おきよどんお火鉢を持て來ねへ。【よ】【定】ヤレ寒かつた〳〵。【まつ】さぞお寒かつたで、ござイしつろ【好】ヤレ〳〵ふるひあがつたぞ。【まつ】綱さんきつゐもんだねヱ。【綱】まわりあし〳〵【瀧】こなたくしも御同前。（育しまいと見へてふたりの江かたすつとざしきへ）【まき】綱さんタアハ。きつゐほしよふだの。【くら】云合てむごひしやうさ。【好】とんだ事ッた【定】ふたりながら身をうかされしよだへ。おたしなミ【くら】ソリヤマア大きなおせわ、【まき】お茶でもあがれ、【好】おらが同行衆はどふしてくれる。【まつ】モウ今おいでなんす。【好】イヤコレアノ長やに廻しな【定】まつもとや【清】かしこまりました。【きよ】おきこさま。おつてさま只今。【好】四ッ明の只今は氣が無イす。【まつ】そんな事おつせんすな。お子ぶりは受合さ。【くら】おきこさんは來ないやァよ。【まき】何かまふもんだノウ。綱さん、【綱】しれし事さ【好】京〳〵だいぶいおつかとやらハどふだ。【まつ】ヱ、子さ。能く出なんす。（とはなしのうち）【きミ】【つこ】どなたも能ふ御出なんし

た。【きミ】綱さん此間ハ【綱】御慮外申やした。【きミ】おたがひさ【まつ】サァお壹ッ【好】まづ先生から【定】まづおまへから。しからば年役。ア、氣のどくやおふたりながら。おれにさゝるゝハさぞつらからふ。色子ふたりに。色男壹人といふ客づらへ。老耄した辨慶といふきやくがら。眼をねぶつてさしてやろう。【綱】きつゐあやまりやうさ。【つて】あなたへ上ヶェしよ。【定】サァきまつた【長】さつきから咽がぐび〳〵。【きミ】お前あげェしよ。【長】ちよつと【きミ】アレサわつちやァ。たべェしねェものを。【好】久しいもんだおあい【まつ】おきよどんおてうし【長】かわりめをもふお壹ッ【好】ェ、何ンのこつた。酒ばつかり、ひゐきをすらァ。【きミ】綱さまおまへハよ【綱】そのはなしハずつとおながし。【好】月が切たか【まき】こつちも譯が有るのさ【きミ】有ㇼそうなもんさ【好】かハりめを御ろうじろ【まつ】マァ是をお吸なんして【好】松本屋が淋しひ。こゐつを壹ッ【清】わつちやァ。ねつから　たべェしね【定】おふくろが若ひからか【清】うさァねへのさ【まつ】ム、おまへ呑なんだのう。【清】よそ〳〵しい【まつ】アィぬしやァのまぬかハりあびなんす。【清】よしかうそでごぜへす。【まつ】おまへほんに煩つたそふだの。久しふりだ【清】アィっ　たにび〳〵やろうにやァ。おことづけ　お禮も申やせぬ。秋の開帳のじふん　來たまんまさ【まつ】

ホンニそんなこつたねへ。【好】病氣大方下かんそうどく。【清】よくお當なんした。アノよだれ薬といふものハ。せつないもので。ごさりやすよ。醫者さんを替へたら大きくしかりやしたソンナりやうぢをするとひゐがだいなしになる氣ながにりやうぢをしろといつてやう〳〵とよくなりやしたりやうぢを仕抜たから瘡の根ハ抜たとさ【定】サア盃ハどふする【清】ホンニなアサア上ヶ巾やしやう【つて】まつもとやさんせんとの返事ハまだとつてくれないか【清】アイサわつちにしよさいは無ィがね　何をいふも。ぬしかかふつて居ねェすから。おとゝゐも逢やしたが。きつく仕にくひようすさ。【つて】いかん事ッたす。（といふ内膳が出る）【まつ】サアおあがりなんせ。【好】おれハ茶づらふ。【まつ】是ハしたり。ぬしやァしやうじんによ。【好】何〳〵たへる〳〵。【定】爰でハおまへも【好】すつきりかまハねへ事さ。しかし一ト色ハたしなんでもゐゝのさ。【定】その所が有がたい。【好】ムンにやありがたがるまい。けんばの割までも。しつて居るぼうすだ。【長】すごひ〳〵。【定】いかふ夜が更た。【好】夜ハ長ィさナ。宵のよし町ハワすれた。【まつ】サアちつとお休。お着かへなんせ。（と四人ハ立ツて行）【好】小へん所ハどこだ。【まつ】それおきよどん。連申て行かつしやい（とはら〴〵と立）【きよ】おまへさんのお床ハ。爰でごさりやす【定】とんだェ、所だちんまりと暖で有ろう【好】おれが床ハどこだ

【きよ】おまへさんか。今のざしきさ【好】コリヤだれだ【きよ】コリヤ瀧さん【好】瀧ぼうや後にしのぶぞ　【瀧】綱さんに告るよ【好】アノ調市に構ふ物か。おきよ。長八を呼んでくれろ【長】好さま御用か【好】勤を遣つてくりや【長】いま定さまから【好】そんならよし〱。ナニ長八明六ッてすい立よ。寐こんだら。おこしてくれろよ。ア、うさんな物だ【長】どふか雨氣づきやした。もし降たらバおするけさ。【好】もつたい無ひ事。鑓が降ても【長】夫までか御機嫌能ふと　長八ハ出て行【つて】ヲャけしからねへ。ぬしやァかしこまつてさ。もし〱なぜだまつて居なんす。ヱ、ついぞねへノゥ。氣のしれない。【好】ム、、、。やれしまつた。【つて】ソリヤァまあ何ンのまねだヱ。【好】これか。コリヤァ。座ぜんといふものだ【つて】氣のつきなもんだねへ。□□□□□□□□□□　【好】□□□□□□□□□□□□□□　【つて】ばからしひ【好】それでも【つて】ヱ、おきなんせ【好】ム、力の有る女郎だ【つて】わつちや大力さ【好】小芝居へ出ねへか【つて】おまへ出してくれな【好】ちからもちもかゞがたかつた【つて】アノおまへの若衆か。きつゐきやんだねへ【好】白井權八といふ。人形の身だナア。【つて】うさァねへ。【好】そのうへに下リで無ひから。一トしほきやんとこだ。【つて】若衆買かマァ。どふおもしろいねヱ。【好】どふ面白ひとつて。おゐらが喰物【つて】インヱソリヤ

むかしのことさ。今は入違ひに。「好」うさァねへ「つて」おまきさんが。おまへの若衆に。
きつゐもんで。追かけに呼ぶそうだ。タアもおくらさんと壹ッに。地腹を□汗されたとさ。「好」
若衆には何が成る。「つて」うらやましいかおまへ「好」ナニサ。おゐらも。若ひ時ハして來
たのさ。「つて」もしへ。アノ若ひうつくしひ坊さんハ。若衆よりハ好くものが有るよ。「好」
手まへもほうずが好か「つて」アイワつちも好キさ「好」きつい茶人だ。きやくを茶事に勤る
な。「つて」アレモウじッだ。ねなんせ「好」七ッが人を喰やァせまいし「つて」それでもわ
つちやァねむたい「好」ヤレじれつくな。勤ハ是ぎり。おらハ本ンにかたひほうずだ。氣遣な
しにげしなれ〳〵。おとなふこがらしも身ニしむ八曉告る二番とりの頃はひ「まき」おまへ。おらいさんを。切れてしまつたとい
つて置て。にぶひ事をいふの「綱」エ、やぼなもんだ。手まへが外のもんなら。かまいハ無は
さ。カノへしりが割れると。かミさんのはなねぢりだ。其うへが。神明か湯嶋へ。左近の身と
ならにやァならぬ　ソリヤァ手まへも同し事たハさ「まき」アノおきミさんを見ねへ。ナンノ
事ッたのすかない。どふ小意地のわるひ梶原だよ。さつきも座しきで。おまへの客人のまへ
でいやミをいつて。人をいやからせる。どふも口まめな子だから。氣にかゝるよ「綱」そふい
ふ役者にやァ猶よくして。あやながかんじんた。手まへハどふも附合のきどりが悪ひよ。「ま

き】何悪ひもんだ。アノ子もまへど。丁どかふいふ世界の。大色事をして。モウすんでにくらがへといふ場を。おれとおミちさまとふたりで。よう〳〵と内へ知れないように。はたらいて遣つた。其時ァ手を合ておがんで禮をいつたに。モウそりヨウワすれて。【綱】その色客はァノ何で有ろう。富吉へ來た色こ才の。新車によく似た客じや無ひか【まき】ム、それよ。それからァノ子をも切れて。今ァ品川へいくそうだが。一二度付合つて見たが。いきな客よ、アノ子にやァ過ものだよ。【綱】くわしい事を。能く堀つて御そんじだな。【まき】久しいやきもちだ。何ンぞといふとおかしな事を云なんす。屋敷ものか何ンそのように【綱】ム、ヨ手まへァ通なもんだからそうだろうが。おらァ生れ付た里人だから。ツイ何やかに氣が廻るのさ。今もいふとおり。此色事が甚幸さまへ通ると。臺坐後光仕まふといふ大天非だ。安く無ひ色事たからきめて見るのさ。有るやつだよ。物あきのはやい人にやァ【まき】手まへの氣に引くらべて。能くおまへそんな事をいふの。むりげんくわをしかけて。またおらいさまへかへる氣だの。わつちだといつて。此色事が甚幸旦ンへ知れると。此土地にやァ居られやせん。おまへおれをちよびと。遊ひにしたの【綱】氣に引くらへてとァわが事ッたァ。フウどふやら今になつてァ。甚旦ンに怖ミか増して。むりくせつに切たひのだな。コレヱ怖もてを勤るこんじやうですナ。おる

らと色事ハならないハ。手まへおりよヲ花代なしに。お買なさつたな。ナンダおまへおむづかるか。なくと人が名を立るよ。御もつともだ〳〵。いかなお前の辯口でも、此返答にやァ雪ミぞれだ。そうだ。アレ〳〵。（ト裏ざしきのめりやすにしんと夜ハふけ定が床のまへをたれか人足）【きミ】おつてゐンか【つて】おきミさん行てもよしかへ【定】ゑゝのわるひのとハおつてさんおはいり【つて】おゆるしなんし（きミたばこ吸付て出す）【定】法師ハ何ンとしたへ【つて】とんだかたい和尚さんだねヱ、いつそしやれてふざけねんすから。ほんの事かとおもやァ。眞になつて云なんすハ。おらァ附合はかりの女郎買だ。あすハまた法事が有るから、少と寐にやァ勤らぬと。わつちを嫌ひなんしてかしらぬが。きつとした堅藏さ【定】吉原へも連になつたが。やつぱりそうさ【きミ】おつてさん聞ねへ。アノおまきさんハ。とんだ子だのう【つて】何ンの事かさつき座しきで。おかしな事を、おまへにいつたがその事か【定】アノきやん若衆が色事。始終の狂言ハ。おれが若衆めが書たと見へる【きミ】おくらさんもおくらゐン　何ンぼ連衆の付合だといつて。アノねおまきさんハの、綱さんの客。甚幸さんの名じミだハな、いく度か綱さんを連て來なんすたんびに。きり組だ趣向さ、おらいんさんも目ハ付けて居るけれど、崩れるとくだけが大事。證據をつらまへるまでハと、馬鹿に成つて居るのよ。何ンとおもひなる。ふてへ子だノウ。【つて】ヲヽおらがやうな

おくびやうなものね。どんな色若衆でも、ヲ、こわ。コリヤァお邪魔いたしいした【きミ】もつとはなしねへ【つて】あなたお休ミなんし。【定】是ハおそう〳〵。つては出て行【きミ】サアちつと□□□□。【定】□□□□□□□□□【きミ】モシエおまへのなじミの女郎衆が。あんな事が有つたら。おまへハマァどうしなんすへ【定】ソリヨウ聞なさるハおまへもする氣か。【きミ】ェ、すきィしない【定】それでも【きミ】おきなんせ【定】まづ臺つ躰が。若衆を連て女郎買といふが。さへ〻やつさ【きミ】ナゼさへねェへ【定】ハテ男さへほれる若衆を。うつくしい女郎との取合ハ【きミ】云ィなんすな。女郎ばつかりハ【定】地と違ふて。そんな若輩な事ハ。無といふのかへ【きミ】さようさ【定】そんなら美しい若衆が。分限者の子で。いき人で。いき過いで。おむくで、むかふからほれられたら。どふしなんす【きミ】どうしやんしよヲやら【定】それ〳〵もふむかつて來た【きミ】色若衆で金持で。通な息子がほれたといつたら。色事もするのさ【定】介六といふ所を捨てね【きミ】むつかしゐ事をきめなんすの【定】色子ハ嫌ひ【きミ】アイ何あんなものに【定】そんなら少しゑりといふ場【きミ】襟のくらゐコウいふくるしい所を出て。瘦世帶とハ。氣がなしこがなし【定】地口ハきつゐ。そんなら錢なしになると。理非なしめ色男でも。髭なでの意休にするのか。【きミ】ナントそれも當世じやァ

有るまいかね。【定】やにさがりも吸口が黒くならにやァ。【きミ】信仰がうすいようさ【定】呼ぶうちハよんで【きミ】長棹の時ハ長棹【定】中賣のにしめをミるやうな女郎だ【きミ】おまへのような通なおきやくに【定】一チ河の流【きミ】さぞおつもりも【定】ナニサなしさ。なしづくしの。すいた所なし【きミ】じよさいなしのおまへに【定】モシ皮をばのこしてくんなんせっ いかにおれがやうな青なしだといつて【きミ】初會からがく座を明て。【定】勤なしの一ッぱい【きミ】うれしがりそうなふうさっ 永代寺の明のかねこん〳〵【好】サァ〳〵 定ぼう愚僧ハかへるぞ【清】定さまモゥ明やすぞへ【定】合点〳〵【好】若衆めらをおこせ〳〵【まつ】熱燗をお壹ッ【好】アラ有がたの。あつがらすた【綱】【瀧】わしらにも壹ッぱいヅヽ【長】おあまりヲ是へと茶わんでぐつと呑【きミ】【つて】お近ィに【好】おきミぼうおさらバ【定】おきミさまこの間に。扨また今夜の咄しハ。しやれにでも書て出しやんしよ【きミ】勝ッ手にしなんせ【綱】【瀧】口那のお立【長】チンツヽヽ〳〵。チヨン〳〵。東西〳〵。綱介甚幸いざこざの段ハ。後篇ニ御覽に入れます。先ッ今日はドン〳〵〳〵

風没砂拂湾

序

夫邊地いまだ開けざる時蒟ゝ蒻ゝとして何首烏の如く唐芋のごとしかろく浮べるものは船に乗りおもく歩行ものは陸を行く此時に誘引〳〵の息子達靈がんばしのうへにて彼籠の鳥の□□□□□□を見て曰我に南鐐の餘れるあり公の錢の不足に□□□□□□□□□そのしたゝれ一ッの島物語となりぬ

風俗砂拂傳序

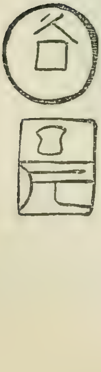
銘曰以南鐐八片換小判一兩以其一片交易するをひつぱりと言盛なる哉北樓の遊閑時行かな岡場所の遊婦擧て數へがたし有が中に東川南海西山の繁榮いふもさらなり爰に近來蒟蒻島あり然して多の妹女を把て諸客の砂を拂此ゆへに遊屋日にまし夜に盛なる事近國に憖す就中若人爲是現をぬかし寸尊のまじわり度重り終居續の無分別闇雲に奢りても遊の中に遊あり金を遣ふていやがられ適ゝ行ても大事にされ同じ金を遣ふにもぬかるゝに水何ぼ人參が利ばとて盆壬の藥にならずかたき佛の教へにも世間底て無陀號一切少年來賣女と示し給ふ歌に

百兩も壹分も同し船の中貳朱でも衆生濟度し給ふ

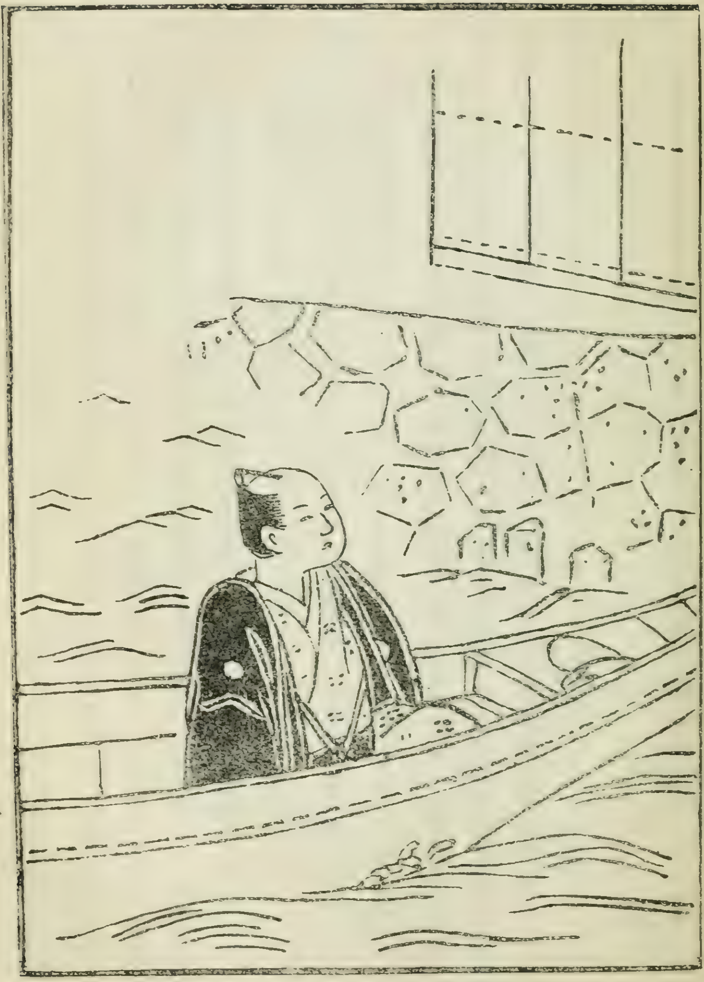
粋は粋だけ面白かり鈍漢ハやたらに嬉しがる勝手次第の衆生濟度頻に通へバ遠ざかる三度行のも一度にすれバつがもなひ事鬼に鉄棒やたらに行バ肩に棒上句のはてハこんにやくのおでん／＼

安永九子短き冬の日

随雲子誌



四



戀と言共ミなもとをたづぬればばりくそ穴の二ッ也けりそれ此道をや人間大小貴賤高下の差別
なく覺へ安く忘れかたし誠に其身分によつてたつた一時か二時を喜見城の樂しミ上なき武士の
遊より年季野良が女郎かいも高ィひくいのちがい斗落れば同し谷川の水共行所ハひとつ也年頃
廿七八と見へ脊ィ高からずひくからず半通とも言べき色ニさや丁川岸方船にのりからだ半分猪
牙の中(うち)【船頭】モシ旦那ィゝ月よでごせェやすね【条】ソゥサ能はれたの此頃ハどふだいそが
しいか【船頭】ナニねつから客船ハ出やせん段ミしもがれになるからひまになりやす○久米此間たは
こを呑むからから猪牙船かくる【船頭】ヲゝィ取かぢ／＼もつとつつはれと言のに大きなとんちきじやァねへかも
し旦那手をお出シなんすな【条】コレどふするひつくり返すのか【船頭】あんなやつァ込所じァ
おめへしかられて斗りいるのさ【条】そふたろふよト上るリわたしがとゝ樣ンかゝ樣ンハ京の六
條じゆずや町トうたいながら行此間しばらく【橋ノ上】勝手なァ事を願にかけ大師さんの御ミくじを仕事し【長八】
コレ六藏どけへいく【六】タレダ長公か手めへハ【長】おらァこんにやくのお初がとけへ【六】
ナニお初がとけへ使にいくのか【長】おきやァがれ遊びにさ【六】ほんにかぬしやァでへぶく
めんがいゝな【長】おとてへも徃て大の持てさコレほんのこつたがちつとちがうよそりやァそ
ふと今夜おれと一所ニ徃かねへか【六】いきやァいかふがくめんか出來ねへ【長】そりやァ付

合だからとふでもするわな【六】そんなら行かう トほうかむりにつれぶし【兩人】まけてはだかている時わじゆばんわミじかし夜は永し トうたいながら急で行【船頭】モゥ來やしたどけへ付やス【粂】早かつたのコゥ

トあの橋のわきがよかろふ【船頭】こりやきたとつこいメたぞ ト船を付枚ごをかける 旦那御機げんよふ【粂】御太儀〳〵 ト言ながら上着のしわをのし引手茶や迄急で行【粂】引手茶やの内をのぞき おたつさんにぎやかだの 引手茶屋の娘おたつ其姿ハ白粉べつたり庇椽の市子八丈の帶をメひわ茶の前かけ火鉢に當て居る【引手娘】粂さんよふお出なんしたのサァ御上りなんしコゥお松どん御茶を上てくんな

【粂】おばさんわ留主か【引手娘】アイ川があつて出やした【粂】喜助どん此間のうら付ぞふりわあつたか【喜介】方〳〵尋ましたが一向しれませぬ【粂】そいつァ又壹本のたをれだ【引手娘】もしお梅さんわね此頃わ初會計りお出なんしてなしミの客にやァさつはり出なんせん

【粂】それでもおれが來たと言てやつてくんな【引手娘】何ンでもまァ向ふへ御出なんし喜介どんぞふりを直しな【粂】そんならあつちらで一盃いたそうか ト連立九閣へ行【引手娘】若衆粂さんが來なんしたよ ト言ながらとや〳〵二かいへ上る【粂】見通シにしよふ【引手娘】ナニ見通しわ今からわさむふ御座りやすこゝにしなんし ト客の有となり座敷のせうじをひつしやりと立切たはこぼんを居る コレおせんどん茶を持て來な【女】あい 茶を持てくる 粂さん此頃はねつから御出なんせんね【粂】大きにおせわ【女】御世話でもよしさ 此間てうし盃出る此客若老料理はん抔ニ時ゞ氣を付ル故方言氣を付て出ス【女郎むめ】其姿ハ古岸島の小袖下着ハ茶返し小紋あたらしい風通もふるの帶をメつんとした姿で手にきせるを持ながら よふ來なんしたの ト粂かそばへひつたり【粂】何ンた

かきついごもつたいたの【梅】何さそふじやァござりやせんが【粂】盃を取梅にさス ちつと呑ねェか【梅】
盃を持呑まねをして粂にさス【粂】ナセ呑ながら一ッ呑ねェか【梅】わたしや此間からきん酒さ【粂】そんなら
名代に是で致そふ ト茶わんへつぐ所をひつたくる【梅】おめへもよしなんしせう〳〵じやァあるめへしはからし
い【女】モシ御茶づけをお上りなんし トぜんを持てくる【粂】うまくもねェいやだ【梅】それても酒斗
しやァわるいわな一せんたべなんし トもりかへて出ス【粂】ヲットよし 粂はくふ此内床をまわす【引手娘】モシちと御
休なんし たはこぼんてうし硯ふたをはこふ もし吉さンも此頃ねつから御出なんせんね【粂】吉ハ此頃ハ向ふへ行は
な【引手娘】あつちやァ大キニにぎやかだそふだね【粂】そして吉か行とかァ大きないゝ内よ
【梅】大方おめェも行たろふ【粂】何行もんだ【梅】それでもいかねェでいゝ内かわるい内かし
れるもんか【粂】ナニサ吉が居つゞけのときむけへにいつたのさほんにおたつさん待どふだろ
ふ ト動を出してやる此取引の内ハ女郎もはづす物なれどふかきなしと故かまわずいる【引手娘】左様ならおゆるりとお遊なんし ト行【粂】おばさん
がけへつたならよく言てくんな 久米ハ床の上にこよりをよりきせるを通しながら △長歌 立田川でハチン〳〵紅葉をなかす【梅】
ホンニ枕を忘れた ト取に行ス直ニかへる 久しいもんだモウねなんしたかそして此まくらと取けェてねゝェ
ト枕へ紙をあてゝやる モシたばこを上んせうか【粂】ソレハ有がたふござります【梅】ヱ、モウばからしい
上段言なんすな【粂】かしこまりました トだまる梅ハ一ぷく呑つきかへてすい付てやる【梅】そりやァそふとせんど言たこ

たァとふしてくんなんす【粂】何を【梅】何をじやァごぜへせんわたしハあれほとまて言のにあんまりだ何そお氣にいらねへ事が有なら言なんしな【粂】おれも此間言通り外にしばられた身しやァなし手めへさへしんじつならどふでもする氣だがどふかうわきらしい【梅】なる程おうたぐりハ御尤さしかしこふいふいやしい勤をすればとて心に二ッハござりやせん【粂】夫ても幸助にきせふだのせいしだのと取かわしたきつとした證こが有夫しやァひつきよふお先ヶになるのだ【梅】めへかた幸さんにそふいふ事がござりやしたがそりやァとふに切てしめへやしたそしておめへもきのふやけふの事じやァ有めェし譯ハ随分しつていなんしてうたぐり斗云なんす幸のへ逹だとつてそふさわつちがほうになんの氣もねェけれ共おめへか何のかのときにしなんすからさつはりつき出してしまいやした此頃ハ外聞ひわるい程初會斗取ていやすハな何のあんな丈なしやろふに【粂】そりや手めへか言こつたがさつはり切たかつき出したかおらァしりやァせずうたくるめへもんてもねェわさ【梅】そんな事斗言なんすなせんどよこしなんしたみの返事も兄さんにも見せやすしそしておめへのとこへ行といふのハミなさんがしつていなんすマァよくつもつて見なんしおめへが一通りの客衆ならこふ言も致やせんがおめへの氣も知ているしわたしも一生の事だから大じでござりやす一通りの客衆でねェとおもへハ猶氣がもめてな

りやせんこふかたまつているから一日でもおめへとそわねゑけりやァなりやせん トなミだぐミうつむきながらかん
ざしてあたまをかく ○ 久米も手もちなく 【粂】モゥうたぐりハはれたよもふ其よふになかねェがいゝ人が見れハわる
い ト言所へ引手茶やのかゝよそを歸り手ニしんちうのやくわんをさげせうじの外を 【引手かゝ】おむめさん明てもよしかへ【梅】たれだおばさんか
は入りねェ【引手かゝ】あいトはいる今夜ハでへふさむいね粂さんよふ來なんしたお梅さんに
はなを持て來やしたお上りなんし【粂】夫ハ有がてへの【引手かゝ】茶わんハ有かね【梅】イン
ニねゑハな【引手かゝ】そんなら呼やセふ ト手をうつ女あいと返事してくる 【女】何ンでごぜへやす【引手かゝ】お
めへ茶わんを二ッ斗持て來てくんな 女あいと持てくるかゝついでやる 【粂】おばさんも何ン時だの【引手かゝ】ァ
イまた五ッ半さ【粂】よつほど夜ハ永くなつたの ○ 引手かゝ茶をつき足シやくわんを持てたつ 【かゝ】粂さんおゆるりと
お遊なんし歸りにやおよりなんしお梅さんおさらハよ【梅】モゥいきなんすかそんなら休ねェ
引手かゝ歸ル是を床の内ひつそりとこんたん有りしはらく大しけり △奥座敷ハ奥大名の家中らしく年頃四十斗の青ひげづら物言少シはな
にかゝりようかん色の郡内ニ萌黄うらの付た小袖を着しかつべらしく床の上【女】おついでに
勤をいたゞいて參りやセう【武左】 三徳を小判一兩取出し 是を手前に渡スほとにたんざくを三分殘ハ南鐐に
かへてくれ【女】おや〱ついぞねェたんざくとハ何のこつて御せへやす【武左】はてさて小粒
のこつちやハへ身共が國でハかく言ハへ扨〻どんな女子ちやてや ○ 女わらいながら下へ行取かへて持てくる 【武左】コ

りャ女子てきれとふじや先程から待ている早ふ呼で來てくれい【女】今下でまんまをたべていなんすからおし付御出なんせふ【武左】ウタイ辨才天な女躰ニて【女郎み】（其姿ハ薄げせうにべつかうのくし銀の笄二三本ねまきのまゝつんとしたいきあるふう）モウねなんしたか【武左】イヤまたねれいたさぬ先程から大キニ待かね山直ニね給へ（此客新ござのくせ大のびつ）ね給わずれ我等にたばこを一ッふく吸付て給われヲツトふき給れずと共まゝ〳〵（みハびつと思ひながら共まゝ出ス）○（み枕の引出しよりみた取出しあんとうに向ひ武左を後にしてよきながらたゝきざん）【武左】何をしたもふモウね給わぬか【み】ヲ、せわしねヱ待なんし（ト酒を一吞茶わんであをりせうじひつしやり出て行）【み】（粂か座敷へ行せうじの外から）お梅さんねたか【梅】ウンニヤまだ〳〵おみさんはいりねヱ【み】はいちやァわるい一寸こゝへかほを出してくんねヱ咄が有から【梅】何だ（トおきて來行「おみが客ハ新ござのくせ大びつゆへ粂を頼て揚てもらい武左にハ名代を出そふと言はらせ）【文】粂さんハねたか【梅】ムンニヤまだ【み】外のこつちやァねヱが粂どンニむしんか有よ【梅】何を【み】マァ聞てくんねヱ今夜の客ハの新ござのくせに大のびつさ先のたばこを吸付てくれと言たから吸付てやつたらのふかづによこせの何のとしつこくてならねヱから粂さんにそふ言て揚てもらつてくんねヱな【梅】そふ言て見よふマァは入りねへな【み】わつちがいちやァわるい下へ行て來るから頼よト行【粂】今のハたれだ【梅】おふミさんさ【粂】おみたァどの子のこつた【梅】ソレいつか一座の時連衆が揚た子よ夫ハいゝがあの子の客ハ武左だからおめへに頼でどふゾ今夜揚てくれろとさ【粂】ソレハ大さにおせ

れさ金持を伯父に持ちやァしめェしそふいふとこれねェ所さ【梅】そりやァわたしが工面するからあげてやんねェな 女郎に出させるもしじうハうぬかつまりさ此位の立引ハ随分此島にさ有事也 【粂】そんなら呼で來や【梅】何今くるハな ト言所へみくる お梅さん明てもよしかへ【梅】おみさんへェりねェ おみは入ル【粂】モットこつちへよりねェチットト酒をにらんか【み】ソリヤよふ御ぜいやせふお梅さん聞てくんねェ今夜ハ酒もろくに呑ねェハな 粂詞ておみにさス ○ 梅ついでやる 【み】是ハはゞかりだね【梅】何ぞくいねェな【粂】たべちらし斗で肴が有めへかばやきでもそふ言ねェ【み】何さ是でいゝハな トいへハ言ほど取にやる此間しハらく酒宴有り ○ 武左ハ大ふけにふけてやたらに手をうつ
【女】アイ何で御せいやス【武左】おのしでハならぬ程に若者を呼てくれ トきかぬ氣に也大キニさハぐ ○ 下ゟ間付若者くる
【若者】何の御用で御ざります【武左】何だでハない女郎のこつちやハへ先宵にもおそく來る夫から又出て今に見へず初て來た客をそまつにしてもよい物か殊ニ金を出してあげたなれば今宵一夜ハ身が女房も同前也我等が様な者なれハこそ用捨しておれ六ヶ敷者なれバ只ハすむまいがそふでハないか【若者】なるほど左様で御ざります皆あなた様のが御尤で御座ります中〳〵六ヶ敷お客でハ御用捨ハござりませんコレお松どんおかんを直シて來な【女】ちいと直シてくる【若者】モシ一ッこん召上られまし外に氣取のよさそふな子供衆かわりに上ませう【武左】何でもきかぬ〳〵 ト立上るをさま〴〵なだめかわりの女郎を出す是ゟ此座敷しづか也なだめるも若者の氣取也 △向座敷の二人リハ思の外見懸によらぬ大のもて床

の内ひつそりと割床なれハさのミおもしろミもなし【八】コレ六や起ているか【六】ムウ何だ
【八】インニヤヨ向じやァでへぶそふ〲しいな【六】ウヽ武左だそふだたま〱くるくせに
一ツはい斗言やァがる大きなとんちきじやァねェか外に客もねェよふに【八】あんな客ハ女郎
やでも大ニそんが有のふ 八おあいか たおはつ そりやァちがうのさ夫でもことしの若衆ハあんな事が上手だ
のふおミちさん 六かあいか たおミち アヽそしてそれも氣取がいゝのふ【八】モウ何時だろふ【初】コウト
モウ九ツ半さ【八】ごふきに夜ハ長ェの【初】モウだまつてねゝへな【ミち】お初さんでへふ
半鐘がなるよふだの【初】ナニ半しやふじや有めへ【ミち】そんならだまつて聞ていねェな
【三人】ほんなァ【初】おめへ若衆に聞て來ねェな ミちおきて行若者 源兵衛をおこス コウ源兵衛どん火事があるそ
ふで半せふがなるよ上て見ねェコレ〱源兵衛どん トおこす源兵衛 目をさまし 何火事か有へ【ミち】ウヽ早く
見て來ねェな 源兵衛火ノ見へ上 りいそいでくる 【ミち】見ゑるかどこだ【源】てへふ大きう御ぜいやす東の方で火
手が見へやす【ミち】大きくつて火が見えるとさ【二人】それしやァけェらざァなるめへしかも
今夜ハ出番だ ト兩人ハしたくもそこ〱 にしりひつからげ急行 【武左】目をさまし何火じが有方がくれどちらじや【源】ァ
イ東の方でござります【武左】それなれバ身が屋敷もあふない歸らずハ成まい扨〻今夜ハ無仕
合な事じやてや トつぶやきながら 殘多げに出て行 ▲条ハ人のさハぎも白河夜舟しばらく過てめをさまさせバ夜明ケを

つぐる島のこへ共きぬ〳〵のわかれぎハ【条】來る時ハいゝが歸ッにやァつれへのふ【梅】何ても今日ハ歸し申やせん【条】それでもいちやァつまらねェ事が【梅】ヱ、モゥそりやァわつちが方でどふでもするから【条】そんなら居てもいゝか【梅】アィよふ御ぜへすよ【条】あんどふハきへるし火ハ有めへの【梅】まだ下てもおきねェハなたばこを呑すとマァねゝェな【条】此すゝ上みや　もっとこっちへよ、へちへしちまへなニかいけりっこりとむかいに結ぶ床っ
□□□□□【梅】□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□夢
ゆめ見ぬ夢ハ覺にけり

跋

文才の淺きを不顧猥に筆を採るハ井中の蛙大海をしらず夏の虫氷を笑ならん歟然ニ其一ッ臼より備あれバ熨斗餅有亦搔餅あれバ霰有元分身なれども名と形ハ異なり牡丹餅も山枡餅も喰ッた人の舌によらんあられも無ひ言よこし散し後の大通大わらひの謗あらんと硯に蓋さし置ぬ

風流仙婦傳

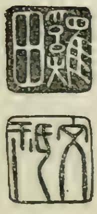
富は人の好所貧ハ人の悪處生ハたのしみ死ハ怖也。貧ものハ富を羨願ふといへとも其身安して苦少し富る者は榮花心の儘なりといへども其身重ふして苦多し。亦死を怖の人欲十倍也。是何を是としいづれをか非とせん。月日ハ行川の流にひとしくとゝまる事なくすこやかなり。其中に時〳〵の人氣かわりて。もの事の時行と捨れると有ハ天地の變化也。其變化に遊といへども人生わづかにして。無常の來る事手のうらを返すよりも早し。身の幸もよどみにうかぶうたかたのごとくねがふに足らず。唯仙人といふものありて生死のさかゐを知らず。富を羨煩なけれは貧を悔るかなしこもなし。彼仙人こそうらやまし

けれど常に思ひて。春の日のなか〳〵しきを机にかゝりてとろ〳〵眠れは心におもゐし儘を梦の中にたどる。よつて其ことの葉を書とゝめて。ふうりう仙婦傳と題し初春のわらゐの種となしぬ

安永九子のとし

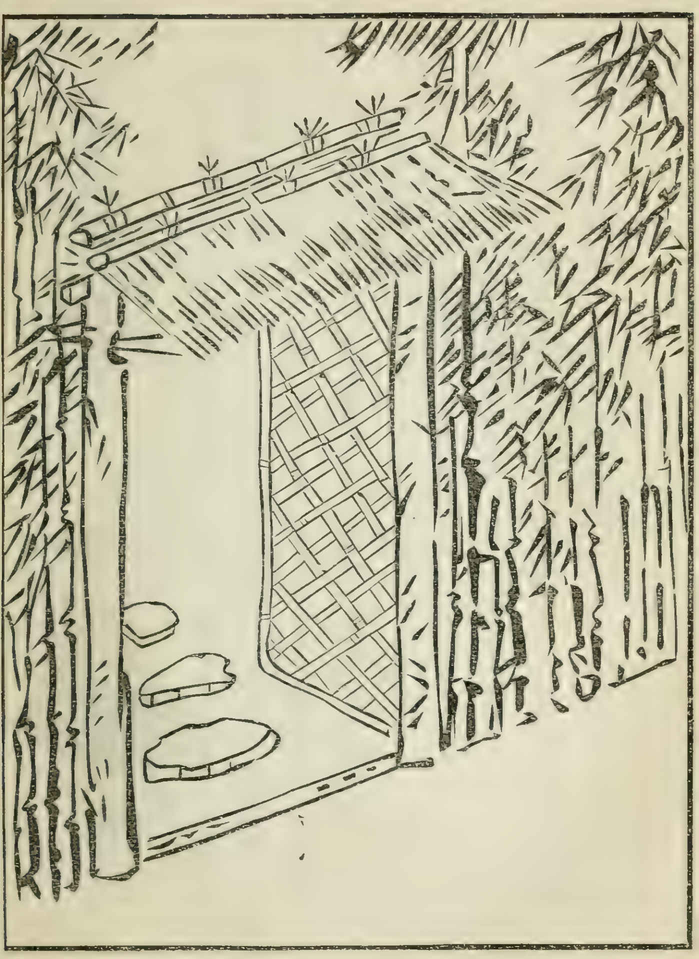
はつ春の日

時雨庵主人戯述



風流仙婦傳

ころハやよひのなかば陽氣天地に滿。人の心も麗に。よい年したる爺婆ゝも寺まいりかこつけに。孫子の手を引ハ世上への云わけ。よめ菜つくしの道艸に。長日の暮るをおしむハ人情のならい。まして若き人の花にうかれ月にさそワるゝハことわりなり。爰に年の頃二十五六にて。白色く丈ハ高からすひくからす、髮ハ當世風のよし原本田。黑羽二重の小袖。替り八丈の下着。なゝこのもふる小紋に　細かげの紋所つけたる袷羽織。ひハ茶色の帶をしめ。鮫さやの細ごしらへの脇ざし。南京さらさの紙入。住吉屋か張たるぞうがんのきセる。やわた黑のうらつけをはき。何一ッ云分のなき大通仕立のむすこ株。何所といふ當所もなく。うか／＼と出て見れハ烏ハからす雀ハすゝめの友ありて。年のころ三十ばかりなる。色あさ黑く鬢大そうにふくらかしたる撫付。醫者にもあらす。又茶人とも誹諧師ともつかぬ。浮世にまよふはんかのぶらつきもの。やげん堀邊にて行合。是ハ色男何方へ御出夕アも公のおうわさたら／＼町から今かへりました。けふハ藏前の森里か所へも茶の湯の約束。よし原にも手づめの誹諧かあれども此天氣



門

にてハ茶の湯や誹諧ハふさぎのむし。よつてけふハ野邊へぶらつかふと思ふか公ハなんと氣ハなかばしか。なるほど拙も其心さ。しかし向嶋も近付に逢てうるさゐから。いつそ飛鳥山へ花見に行。山の手者の女を見よふと。一ッ心の魚と水鼻唄ながらにしやれちらし。飛鳥山の茶臺のセうきに片足あげて腰をかけ。なんと先生ワれ／＼青樓中にからまつて居てもふだんになれはうつ氣味。こふしたしやれハ咄かあつてめつらし山ときにアノ半けんふくハすごい物の。けふ中の二十五点た地婦にしてハきれい事。サア是からあの女の跡につゐて瀧の川の辨天へ行ふと野道にかゝり。螢火打とり出したばこすは／＼。ゐげた遊ひも春の興と二人リハ四方をうちながめ居る所に俄に一ト村雲たちて。見る内に青天墨をながせるかことく。雨は車軸をながし降けるに一寸先も見へわかねハあきれ果たるはかり也。しばらくして雨少しやはらぎ晴るにハなけれとも。闇き中より松吹風の音に心つき。一ト村たちし木の下陰を尋。やう／＼にたとりつきしばし息をつきて。今や晴間の見ゆるかと。小袖の雨をしぼり／＼待處に。東西ハワかねとも四五町先とおぼしき所に。焚火のかげかともし火か。木の間かくれにちら／＼と見ゆるにぞ。とてもいつまて待たりとて中／＼晴るけしきもなし。かゝる野中にて日の暮なば。このうへいかなるうき目にあをふもしれす。火の影の見ゆれは人住里のありと見ゆれ。いざやたつねて一夜

を明さんと。火影を目當にいそき行て見れは。一トかまへしけりたる大竹の藪あり。其中に一ツの茅門あり内へ入て見れは。ミかけ根布川の飛石つたい玄關ともなき入口あり。二人りハ雨に濡鷺の寐ぐらにまとひし心地にて。かた〳〵ふるい歯も合すこわ〳〵なから案内を乞ふ。内よりこたへ立出るハ十二三ばかりの切禿のゑもいはれぬうつくしきが。何方より御出にて何の御用とたつぬれハ。二人りのものハ言葉をそろへ。われ〳〵ハ今日飛鳥山へゆさんに出しものなるか。俄雨にあいなんぎいたしやう〳〵是までまいりしなり。おなさけにてしはし雨舍いたしたく候へは。御ゆるし下されかしと云入る。禿ハ内へ入る跡にたゝほうぜんとたゝすむうち。おく深く琴のしらへ聞ゆるハ。いかなる人の隱家ぞとやうすゆかしく。耳をすまして聞居たり。以前のわらハ立出てこなたへおとをりなされましと案内につれて行に。居間とおぼしき坐敷へ通す。其物好風流さ目をおどろかし言葉にのべつくしかたく。先床に墨跡の一軸二重切の花入に牡若のなげ入。青貝の唐机に孔雀の尾風にひるがえり。其外文臺香道具。哥書物語の双紙ども。かたえの方にハ爐に釜懸て折しり良にたぎる音。琴三絃胡弓鼓笛太鼓まで。遊ひ道具殘る方なくそれ〳〵にかざり付。坪庭にハ物好の植ごミもありそふな所されなくて。細き流に牡若をうへて。まだ春ながら今をさかりに咲ミだれたる其風情。ふしきとやいわん筆にも言葉

にもつくしがたく。日本の內にも此やうな世界もあるものかと。夢ともうつゝとも物もおぼへぬ折から。以前の禿どもたはこ盆茶なともち出て。しばしありてさつとかほりしそらたき。年の程二十に過ぬ女の柳の姿ふよふのかんばせ共うるワしき粧もろこしの楊貴妃日本の小町と云ふとも。むかし風にて中／＼あたりへよりつく事もかなわす。白むくがさねの下着に黑き小袖わさとならぬうちかけ姿の。目立ぬふうそくに心のしやれはあらわれし。二人りをじろりと打まもりにつことわらい。ふしぎな御ゑんと申なから。思ひかけなきおめもじいかはかりかおうれしさ。うけ給りますれは道にて雨におあいなされしよし。さそ／＼御なんぎなされしとお氣のどくにぞんじまする。見ぐるしきわび住居には候へとも。外に御ゑんりよもなく候へはゆる／＼とおやすミなされませ。ミづからは譯ありて此所に獨住。親兄弟も夫もなき身一ツの世捨人。かやうにおたつね下されしもひとかたならぬ他生のゑん。見まいらすれはお二人りさま當世の大通ふとやら申お方と見うけますれば。花のミやこのおもしろきお物語もうけたまわりミづからが心もなくさめ。又山里のひなびたるおはなしもいたしたらはおなくさミにもなり候はんなれは。お心おきなく三日も四日も御とふりう下されかし。さりなからかくおく深き山里に女の身の獨住と申たらは。もしや狐狸のしわざかともおうたがひあらんなれと。さら／＼さや

うのものにあらす。我身のうへもうちあかしおはなし申候へし。先風呂へなど御入なされ道のつかれをおやすめあれと。ワらハに湯殿へ案内さす。扨二人りハ貌を見合てゐならぬ薫に心もそら。あるしの姿口もとにうつゝぬかして言葉もなく唯ほうせんとなかめ居る。わらハか案内につれて椽がハつたいに行は。入口にさらさの暖簾をかけて内ハ二間四方の板の間。湯風呂より涌出る湯は清水のことく。箱根有馬の温泉も是にハいかでまさるへし。浴しまへは衣服も上下着かへさせ元のざしきへもとりて見れハ。はやさま〲のもてなし盃も数かさなりあるじハ酒もなる風情さいつおさゐつにくからぬもてなしに。おもはす二人りハ能いきけんになりて晝のなんきハわすれはて此所に千年も居たき心になり。いかなれハ婦人の御身にてかくまて物事行届し風流の御世わたり。われ〲も世の中にあるほとのたのしミハ大かたにしつくしたりとおもひしかとも。中〲かやうの風雅なる御身のうへ我一生にハおほへぬ事なり迚の事に御身の上明させて下されかしと云けれは。あるしの云かくまて心おきなきお目もしにつゝミまふさふやうもなし。ミづからか親は御きゝもおよびたまはん支那彌三郎と申者。若かりし時京嶋原の遊女になじミ。たがひに深き中となり常ならぬ身となりて産おとせしハミつから也。母ハ間もなく身まかりぬ。扨其頃父の彌三郎ハ世の中をうとミ生涯をかろんし。頭を剃て名を宗鑑

と改山崎の桑の門に引籠居たりしに。ある日近衛卿宇治へ逍遥のころ。去法師しれる者なりと彼草の戸へたづねいらせ玉ゐけるに。やせつかれたる老法師ひとり庭艸とりなどして、其程の池のたゝへに水鏡にうつりけるさまを

宗鑑かすかたを見よやかきつはた　と仰下されしにとりあへす

のまんとすれは夏の澤水　とつかふまつりけるよし。元政上人隱逸傳に宗鑑か傳も入らるへきを。此澤水の腸凡俗にかえりたる本心ありとてのぞかれ侍ることを本ゐなくおもひ。山崎の艸庵ハ古吞と法衣を殘し行方しれすなりけるか。程過て八幡山へのほりいかなる事やらん。通力自在の身となり折〳〵都の方へも出たるよし。扨ミつからハ年頃にもなりしかは聞ておどろく我身のうへ。ことに父のかたミと殘したる守袋と一句の短册

かし夜着の袖をや霜にはし姫御

見るに一しほ戀しさの。何とぞ父に逢たい願いのらぬ神もなき中に。初瀨のお山へこもりくの觀音の道引にてふしきに親にめくり合。彼短册をしるしにて親子のたいめんなせし事ひとへに初瀨の御りしやうなり。其後父の申セしハ山崎の草庵を出しより八幡山へのぼり。多年の念願しやうじゆして通力自在の身となりたり。その方今までやしなはれたる父母にいとまを乞山

崎の草庵に二度住居いたすへし。我通力の徳によりその方女なからも自在の身となし。いつまても命いきのひて世の中を心のまゝにすくさせん。さりなから煩悩の心さしあれはたちまち通力をうしなひもとの人間となるへし。久米の仙人さへ女のはきの白を見て。煩悩の心おこり通をうしなひ下界へ落したためしもあり。ゆめ〳〵つゝしミおこたるなとくわしくおしへわかれける。夫より山崎の艸庵にたづね行父と一所に住ゐ。通力自在をうけつゐて今又爰に住居なし。年とる事もおほへねハいく年過ても此面影。世の中に昔今あるとあらゆるおもしろい事めづらしい事見ること聞事心のまゝに候へハ、何につけても不足なき世わたりも父かつたへし通力の徳。庭前の杜若ハ父か愛セし物ゆへ四季をわかたす此とをりに咲セしも。父にま見ゆる心さしおはつかしなからミつからか身のうへかくのとをりと物かたれハ。二人りハ横手はたとうち扨ハ傳へ聞たる宗鑑子の御息女とや。ありかたき御身のうへお目にかゝるもわれ〳〵か身のさいわゐ。とてもの事に此上むかし今の世の中のめつらしきおものかたり。うけたまハり度候と言葉を揃云けれは。女の身にてかやうに申さハさがない口とおさけしミもはつかしけれと。それもひとつハおなくさミおゆるしなされ下さるへし。扨お二人りさまを見まするに髪かたちならお心なら。申ぶんのなき當世の大通ふと申御風俗。むかしハ粋と申又とをりものとも申ましたそれ

を今の世ハつふと申ます。其むかしのとおりものと申ハ諸藝にたつし。男女の中のいきはりに譯よく遊ひの道にくわしく。其友とましわりしたしく。かりにもいやしき心を見せす。髪かたち風俗の目にたゝぬ物好を第一にして。つれ〳〵の法師の花ハさかりに月ハくまなきをのミ見るものかハといへる。風流の心を常にして。いたる所ハ切はなれよく。又ハ品によりていやしき筋をもひたすらしらすかほにもあらす。よい程に物事のわかるを粹ともとおりものとも世の人もてはやし侍りし也。當世の大通ふと申人ハ髪かたちのこしらへ一ト風かわり。藝ハこれぞと云ふ事一ツもなく。手習した㕝もなくて唐紙の半切に唐よふめかしたなぐり書。手前てさへよめぬ事あれは人ハなをさらよめぬゆへさしあたりて用事かたりかね。江戸ぶしの所〳〵めりやす長唄の片はしハ。猪牙に乗時と女郎の床へ來までの道具とおほへ。茶の湯はゐかいもしらぬといふてハやぼと心へ。一句も出來ぬ内からこと〳〵しき誹名をつき。あそこの評物㕝の万句。あるひハ上るり長唄の會にも名をうりたがり。又ハ素人狂言茶番の趣向に金銀をつるやし。かりそめにいふ事もいき過にて外へ通ゼぬ㕝を云ふを今の大通ふと申まするか。むかしのとおりものハきつゐ遊とおりものハ風雅を元とする也。詩哥連誹ハ風雅の道具也。今の世ハ詩人ハかたくてくハれすあるひハ毛唐人なりと笑ひ。哥人ハ古風也連哥師ハやぼ也とて。當世は

唯誹諧のミを風雅と心へ。遊女野郎飯もりまてか諧名をつかねハすまぬよふになりました。ミつからか親宗鑑ハ連哥師よりのち誹諧に心をうつしましたゆへミつからもはゐかいの片はしをうけ給りましたか。元誹諧は連哥にひとしきすかたなれとも哥道より出たるものにてはゐかい哥と云ふものあり連哥よりおこりしものにあらす。又もろこしの滑稽と申ハ興宴のたハむれ事にて今の世のしやれぢくちのやうなるもの也。日本のはゐかいにひとしきと申候へともさにあらす。此道いにしへ伊勢の守武よりはしまり。花の本を貞徳老人より貞室にゆする。其頃かたしけなくも時の御門の叡慮に聞へ奉りし事ありて。さすかに一體を得たりと御感のあまり。畫工探幽法印のかける曙の御掛物を貞室に下したまハる其時の句に

明ほのゝ叡慮かしこし春の山　と吟す夫よりして天下是を花の本宗匠とおふぎ尊ぶ。中頃芭蕉庵桃青出て西行上人の跡をしたひ。諸國行脚して風雅のまことを明らめ。世もつて正風躰の翁と稱す今世にもてあそへるはゐかいも翁のなかれ也。しかるをいつの頃よりかはゐかい評物といふ事はしまり。繁花の茶屋に幕打まハし毛氈しきならへて。貴賤をあつめさわきのゝしり侍るハ。誹諧のたのもし無盡にして此のたハ三匁かけにて百兩とり千兩取のはいかゐも出來候へし。其上角力會といふ事ありて西東とわかれ勝負付取組のと板行におこしひろめ侍也。角

力ハ力士の名にしていにしへより詩哥連誹に無盡の沙汰と角力とらせし事を聞候ハす。世の末兩國にて坐頭をあつめて角力とらせしまてハ見候へとも此後ハ何にか角力とらせ侍んおほつかなし。風流ハもと武を捨家をわすれ。春秋の哀をおもひ月雪に心をあそへるを云ふ名なり。誹諧の本意ハ一卷の輕重をわきまへ三句のわたりをかんかへ一句の付方心〱にかハりたるをあしわゐ一坐一卷をとゝのへ。其友貴賤のへたてなくしたしく交りをむすふ道具也。さあるを面をあかめ眼に角を立山川とあらそふハ夜軍の合言葉にひとしく。又筆句を二三句も四五句も我儘にしてはらミ句を入。たま〱まぐれあたりに高点をとりたるとてはいかゐ上手とハ申かたし。又誰の点には何か好也かれハ何か道具也と云ふことあり。當世誹諧をこのむ人旅にやつれ風雲に身をまかする桑門をわすれ。綾羅錦繡を身にまとゐ口に珍味をあしわいて。遊所へ行てハたゐこまつしやの頭取とならるゝハいかなる心やらんしらす•是を醫道にたとへ申侍ハ片田舎の藥種屋あきないのあるかなしかに妻子を過しおやね。はゐどく散しやうき散の買藥に匕かげんをおぼえ。ふとおもひつゐてより家主の異見をも聞入す俄に頭をまろめ。きのふまての新右衞門を新庵と名をかへ。耳くじり腰にはさミ雪駄ちやら〱いそかしぶりの早足にて。脈の引やうハしらすなから小首をかたけ産婦に癲癇の藥疱瘡に疝氣の藥用ても。藥毒のてきめんに

見へざるゝ時の仕合にして活るはつの病人はおのつからからき命たすかり。南鐐の藥代にワれをわすれミつから名醫也とおもひ侍る。本草と云ふ名ハ忠臣藏にておぼえしやうかん論ハまくら草紙の外題なりと心得。夫さへ今の世ハぶきやうな事か貴人のお氣に入素人狂言の幕引をつとめ口上の云そこないかお伽の藝の第一となり。扶持方にありつくとはや白むくの衣紋をつくろい乘物にのるされは。當世は療治に骨を折よりハあぶなけなしにはやまハりなり。今の世の誹諧も是におなしかく申侍は正風躰のミを申に似たれともさにハあらす。元正風点取とニタやうにわかりたる事にあらす哥道に点さくありて又はゐかいに点とりあるにてしりたまふべし。一卷の內前後と〻のふたる秀逸の句に褒美するを点さくと申也。當世の人はゐかいのミなもとをもしらすして芭蕉忌の會を催し。あるひハ和哥の神へ奉納の誹諧。又は翁の發句に穢たる脇を付て一卷をととのふハ和哥三神の御とかめもおそろしく。あるひハ刄をもつて翁に敵とふにひとし。うつり行世の中の人の心も物毎もむかしにかわるありさまおはなし申侍る也となミたましりに云けれは。二人ッのものハかんるひきもにめいし胸に釘をうたるゝことく。わかあやまりをおもひしりまことにまよひをはらし夢のさめたることく也。此うへハとてもの事に色道のわけ御かたり。われ〳〵かまよひをいよ〳〵はらし下さるへしとひたすらに願けれは。あるしの婦人申け

るハむかしより男女の中女郎のこんたんいろ／＼申つくしおき候へは。今さらあたらしき筋もなく候へとも色道とても昔今のたかひも候也。いにしへより傾城のまことと玉子の四角ハないものゝたとへに申ともさにあらす。男女ハ天地の陰陽なり故に鳥類畜類までも男女のワかちありて其道おのづからしり侍るなり。なんぞ女郎なりとて此道にたがひ申さんや。殊に夜毎にかわるうき枕心にまかせぬ男にも逢ふ事なれは。あまたの男の中にわか心にかないたる男なくてかなわす。是陰陽しぜんの道理也。其我心にかなひ眞實をつくしてあふこそきつするのまことと云へき也。亦地婦のたま／＼父母の相談にて縁をむすひ見もせぬ男と夫婦になり。又ハいたつら事にてしのひ逢中とてもたまさかの事なれは。男めつらしさに命をかけておもひ侍れとも是られしやう事なしのまことにして。女郎のあまた逢し男の中にてはしめよりすへかけてとおもひつきしまこととハはるかおとりなるへし。亦はし／＼遊女あまたありてあけてかぞへかたし。其風俗心さま所／＼の違侍れともおつれハおなしなかれの身。つまる所はむかしも今もまことといつわりの二ツ也　都ハ男女ともに人氣にうれにしていきはりもなく。はしめて逢見し人も百年もなしミしやうに見ゆれともまことすくなし。江戸ハ人の氣性あらはにて女のうへにもいきはりつよく其中におのづからまことハある也。遊女の品上中下侍る中に一國の風俗さたまり

たるハ江戸新吉原也。それさへ世につれてかわりめありたとへ千金万金をつミて心をつくしても。すかぬ客をはりとおしこゝろのまゝにしたかハす。貧な客にまことをつくして逢しをくがいの中のミさほとハ申セし也。今ハいきはりあるうちにも大方ハ金づくにてすかぬ客も金さへつかへは大切にして女郎の心にもおのつから逢たきやうになり。又すゐたとおもふ客にても金遣ハす。すへき事もなかし〳〵すれは女郎の心にも何となく愛相かつきる也さるによつていろにて逢ふ客もミな〳〵金事也。むかしハいろにてあふ客ハ遣り手わかるものも氣をつけ内證からもセくやうにし侍とも。今の色客ハ内證にても合点づくにてあわせる事にてけつく大切に取あつかふなり。客もむかしハ人か千金をつかへは万金をつかふてはり合ふをせんせいの大しんと申侍るを。今ハ是をこけと名付金遣わぬ事を第一の通ふとし侍るゆへ、三會目の床花の時より客の方からはや泣事を云ふて五両やるへき所を三両にねきる、女郎も客の泣事云ふハはやり物のやうにおほへ。女郎の方からも馴染もなき内に云にくゐむしんをも云なれは。五分〳〵にして泣事いわぬ方かはるかましなるへし。田舎の人ハむかしの風俗を聞おぼへたま〳〵江戸へ出て女郎を買てもそこ〳〵に氣をつけて。さのミきたなひれた事いわぬやうにたしなむゆへ旅人客といへは女郎も茶屋舟宿も殊の外大切にする也。是今の世の通ふをしらす古風を用るゆへ

也。亦女郎のお出なんしばからしうありんすと云語音にても。眞實よひたい客とさもないとハつゐしれ侍る也。おか目八もくにて外からハよくわかれとも其客の身にしてハ虚實わかりかねる也。床の内にてどうやら物のあるやうなしかた。あるいハわれより連によくするハ氣をもたセて實ハ我をよびたかるゆへならん。云にくゐ事をもうち明して云ふからハ實のないとハおもいかたしと。女郎の方にてハ何の氣もつかぬ事をいろ／＼に理屈をつけて見るハ女郎にほれて居る客のミなまよひなり。眞實から惚れた客をよびたいとおもふはものいひにてもしかたにてもつゐしれる事にて。まわり遠ひりやうけんハ少しもない事としり玉ふへし。亦客の方より女郎に惚て初會にてふられたら三會目となじミて見てもはしめよりすかぬ客なれは。なじミのかさなりてもおもしろからぬ女郎にハ客ハいきはりつくにて。今宵のしかたハとふするか。あすハなんと云ふかと兎角行てよふすを見たくなるなり。女郎の方にハすかぬ客ゆへ。ほうばい女郎ともあしくうわさを云なす事なれは。にわかに能もならす。客ハなましゐになしミかゝりて其儘にやめてハ外聞もわるく心もすまぬゆへ夜毎に行て見る也。女郎も後にハなしミかさなるにしたかひ何となく心易なりて。其客の十日もこねはしんしつから戀しゐとハおもはねとも。何そにつけておもい出しゆかしくなりて其時になり今まてつれなくしたる事を悔かさねて來た

らは能セんとおもふ心つく也。扨程過て其客の來たる時うつてかわつて今までになくよくする也。客ハあしくされたるうちハはりあいつくにて心も闇やミになり金遣ふてかよいたれとも。女郎の心とけて見れはうれしくハなくて。今までつれなくしたる事ともをおもひ出しはしめてにくゝおほへる也。又女郎の方より客に心ありて茶屋をたのミたいこもちに内證をこしらへ。やう／＼逢ふやうになれは其客も譯もある事なれはおのつから女郎にはまるなり。女郎の方にてハはしめ逢たいとおもひしときハ何もかもいきなやうに見へたるか。なしミのかさなるにしたかひさしていきな事もなくしたいにいやミな事はかり出る也。そのゆへハ女郎の方よりこしらへて逢し事なれは。客のほうにうぬほれの心ありて日ましにあいそうのつきるやうになる也。さりなからはしめよりの譯もあれは今さらつき出されもセす義理はかりにて逢ふやうになる也。是ハはしめからあしくしたよりはるかおとりなるへし。亦うわ氣にて女郎の惚るやうにもなき實躰なる客の。はしめよりよくもあしくもなくまことにつとめ一通にて逢。足も遠からすちかからす能ほとに來り。はなやかなるあそひもセすいき過た事もなく女郎のあしきあなをも見ぬふりにて。むしんいわぬ先からよい程に心つけをしもの日も我相應にしまひ。心の合し連一人り二人りつれ立其間ハ一人のミ來りてわるしやれの連たいこ持を大セいつれす随分しつかに遊

ふやうにすれは。女郎ハまことにたのミなきつとめの身なれは客をのミ力とするゆへ。この客に實をあかし一生の身のおさまりも此人ならてハとおもふやうになる事也。其客の少しほとたへ遠さかれはしんしつなつかしくおもひ。あるひハやり手わかゐものなど此事あの事ハこの客人をたのめと云。又内證にても久しきなしミの事なれは新そう出しの事寢道具の事なと此客に相談しろといふても。女郎の心に此客に世話をかけくろうかける事をおのつからいとふ心になる也。後にハまことの夫か兄弟のやうにおもい。万一此客にわかるれは命もすつるやうになるハうその中より出たるたミのまことなるへし。うわ氣いきはりは當分のあそひにしてすへとけすたかいに命をもすつる程の中となるハ此所なり。よく／＼此さかひをたつぬれはすいふん女郎のまことハある事にて。心一ッハむかし今とてもかわり侍らす客のしかたあしきゆへ女郎もあしくなる也。又なしミもうすきうちハおそく行てはやくかえるヤうに心をつけたまふへし。女郎とても女の情にたかふ事なし身こしらへもろく／＼にせぬうちから行。夜明て日の出る時分かえれは寢良を見らるゝをはつる也。年頃なしミたる夫婦の中にてもたしなミて化粧しよそおふハ女の常なり。又逢方の女郎ハ勿論外の女郎のあらをかりにもいわぬやうに心をつけ。しつた自慢に外の家の女郎の善惡の評判したまふべからす何れも女郎にこゝろを見らるゝ禁物也。

あるひハ遊ひのおとなし過たるハ初心におもはれんとて。見ること聞事につけしやれのミにてしこなセはたゐこ持の所へおつる也。むりに事たくミこしらへてあそふハ却て初心のする所也。事をあらためすわか内の心にて遊ふやうに心をつけ玉ふへし。此さかいをよく〱さとり候へハとのやうな女郎にもまことのないと云ふ事ハなきもの也。故に傾城にまことなしといひ傳へしハむかしの人のあやまり也。久しくなしミたる女郎のすこしはかり心ゆかぬ事ありとて。氣ミしかに愛相をつかしつら當にとてあるひハむかふの女郎屋へあかりふミつけにした事をするハ。ひつきやう今まて逢し女郎に客のこゝろの殘るゆへ也。今又逢しむかふの女郎もしんしつ惚て來るにあらすいぜんの女郎へのつら當に來たりとしるゆへさのミうれしき客ともおもはす。又いぜんの女郎もさしたる事もなきにふミつけにされ。外聞もあしけれハ氣かたつゆへに兩方ともにとりうしなふ也。もし眞實愛相のつきし客なれは向ふの女郎に逢などして氣をもたセても。女郎ハ何ともおもはすとんじやくもセぬ也共時ハ客の大な恥なるへし。女郎ハつとめの身十人に十人惚るものにあらす。わか心にかないたる女郎ならは少しはかりの間違ハありうちと心得ふしやうしてすいふん氣長に逢玉ふへし後にハおのつからまことにて逢ふやうになる事也。たとへ女郎の方より惚たりとて我心にかなわぬ女郎になしむハ益なき事也。客の方より上手を

つくして金遣わぬやうに立まわりても一國の風あれは入程はいつても入也。それにはしめより泣事云ふてかゝれは女郎の氣もわるくなりておもしろからす第一損也としり給ふへし。女郎にまことあれはおのつから金のいらぬやうにしてくれる事なり。又かすならぬまわり女郎にあひたりとて必いやしめあなとり玉ふへからす。その身つたなき女郎は心にひかミあるゆへ一しほ客にあたりあしく。亦名高き女郎に逢たる時は少しもおくれす下目に見る心にて遊ひたまふへし。よき女郎は茶屋舟宿たいこ持まてかとりはやすゆへ心高ぶり客をあなとる也。それをしこなしてあそべは女郎もおくゆかしく思ふてそまつにセぬ物也。是をあそひのかんやうとしり玉ふへし。第一に人をにくますあなとらす人の心にさからわす。大一坐の時には盃もまわらすてれたる人もあるへし。其座敷のやうすを見はからいて久しくまわらぬ所へさかつきをまはしてれたる人へ物を云かけ。人興にのつてはなしすれは興にのつてこたへ。しづめて咄する時はしとやかにあゐさつし。亦ふだんのつき合にも人來て茶道の物語する時は其道の我おぼへし儘をこたへ。又琴三絃の物語する人には夫相應に其品を答るを遊ひの上手とい申也。是を人そしりて合鏡ともまろめるとも申侍ともさにあらす。其人の好道を物語すれは其人ゐつに入樂なり人のよろこぶは則わか遊ひ也。へつらゐ合るにあらす其人〳〵の好所にしたかひて

其一日を面白くたのしむを遊ひの第一とし事をたくミ催したる遊ひもおもひの外に不興なる㕝まゝある也。唯常を遊ふを遊ひとハ申也。人に逢對するに三ツ手拍子あり。物におどろいて打手ありよろこひてうつ手有かなしミてうつ手あり。是三ツの氣取しせんにありといふ事古人訥子の祕傳なり。此三ツの手の氣取萬事にわたり侍るなり。よつてむかしの通りものと申ハ諸藝に心かけなくてハなりかたしと。昔今の物語水をなかせることく辯舌のさわやかさ人間わざとハおもわれすまことに仙女のおしへぞと感にたへて聞居るうち。さつと吹來る杉の嵐にありつる家居ハ消うセて。野中に二人りぼうセんと立たるハふしぎのうへの不思儀也

古今野鉄炮　全部五卷　近刻

江戸名物史　近刻

板元

江戸橋四日市
竹川藤助

本所柳原五丁目
半田屋源三郎

初葉家志

序

我住庵の北に當て。ひとつの喜見城あり。地名を中洲といひ。また三俣とも呼ぶ。されば過つる歳。新に川を埋。肆鄽甍を並べしにより。年〻日〻の賑ひ。商賈數倍の繁華と成りぬ。予此華美を賛し。當所の記を書せん事を想ふに。才なく文華密ならず。よつて遊里の風流を。假求て四品に分ち。末に至りて勸善懲惡を說。已上五章に綴るもの也。しかし予は當時の流行方言を知らず。男女の嘯語さゑも譯り難く。不通の冊子なればと。世に披露を憚りて。久しく机上に書捨置しが。書林何某の需に諾し。今とし安永子の歳海月も骨に青葉の春。はつ葉南志と題

して櫻木にちりばむ
事しかり。

安永子の初春

東都靈島南濱人魚京戲書

初葉南志

永き代のためしを爰に岩橋や永代橋と大橋の中を流るゝミつ瀬川汐三又の新地こそ春ハ花見の舟催ひ上野飛鳥も葉となれハ樓船のメを切リ初て陸もよしのゝよしず茶屋にハ田樂の團扇より扇のいらぬ夕凉ミ早秋ながら三ッ伏の暑サのさめぬ夏川にともに花火の賑ひハ紅葉を流す錦川降りミふらずミ時雨する冬も賑ふ中洲町富永丁の眞中に庭も心も奧深き壁ハ鼠のへい構へ見越しの松を目印しハ永代島に名も高き青木榮三郎が別莊と云ハねど夫としられけり此別莊へ入リひたるけふも源次がお見廻ひと腰をかゞめて小玄關よりにじり上れハ榮三郎きせる片手にたばこ盆提て源次に出迎ひヲヽ源次此頃ハ霜枯近くなり此邊も淋しき故かすきとお出がないと尋れハ源次頭を疊につけ是ハ迷惑なお詞タッタ二日參じませぬにモフ其樣におつしやります私も昨日ハお前も御存の紀文なか茶番にお當リなされ料理かたにお賴ミ故ご勝手を手つだひに參りました夫に付キよいほり出しを聞出しました世ハ案じた物でハござりませぬ此頃江戸丁へ突出しが出ます所に祕事ハまつ毛でござりますやはり御本宅の御近所の石切リの娘じやげなが殊の外

角トのとれし者にて元祖高尾も恥るほどのきりやう故御定りの付ケまわしに新造をつけ以上格子とかくを合はセ共はやることあたかも泥中のはちすのごとしけふはおつれなきこそ幸是よりナントお供申ませうか成る程こなたの申す通り出物買はこつそりがよし例の友へもさたなしに抜買と出ようか夫がよふござりましよまづ川部やへ参りましやうコレお内義堀の本ン店迄舟をやつてもらひたひアイ畏りましたがちよきはのこらず出拂ひましたやね舟になされませなるほどそうもしようが源次と二人りでは舟が廣過やう亭主は留守か一寸すミやへはしりナンヅ呑る肴を取てお出併素男はかりではつまらぬものおかねでも呼んでござれと其詞いまだおわらざるにハヤたばこやおかね参り榮三様久しうお目にかゝりませぬ今日はおつれもなくどつちへのご趣向でござりますイヤどつちと聞くは不粹也此あげ汐に南風は北國サ時に淋しいちと引給へ三弦かへイヤかなほうをさ又わる口をといゝながら盃を源次へおくりはうた二ッ三ッ謳ふかと思ふにハヤ今戸をくゞり舟のともに聲あつて岸本やと呼ふ岸本與兵衛早くも見付ケ旦那お早ふござりますと草履を直セば亭主又來ましたと云捨土手へ上りすぐに中の町はついねやへゆけバ内義出てコレハ榮三様おひとりはお珍らしい此頃は長崎屋のおなじミことにて六様や太郎様いつも〱大勢様故お咄も出來ませぬコレおよね榮三様がお出なされた早ふ來てお目に掛りやとい

へハァィと答て娘よね銚子盃もち出ョゥお出なされましたお一ッ上りまセゥシテ角へ申て上ヶ

ましやうかと申セバ榮三盃をとりながらごていしゆモゥ志賀浦ハよしにして田ことやのさらし

なが買たい聞にやつて下されといへバ源次聞て榮三ゟ夫ハおやくそくが違ひました私が申上ヶ

しヵノ格子もどきの突出しハどふなされますゥヽ是ハ栁橋先生誤り入ッましたそんなら夫にセ

うかとあれハ内義聞ァィ浦ゟもはや七十五匁の御祝義もすミますれハ又外へお觸れなさるもよ

うござりませうッレハさうと此間お出なされし上ミ方のお客ゟ方ハどふなされましたナゼおつ

れだちなされませぬ但し先日ハ大見せすぎておなぐさミになりませなんだかヲヽ夫にハ大ぶん咄

しあること源次聞給へ其日ハ始終大笑ひサ先ゥ大阪大和やと申スとヽる馬喰町の藤屋方に逗留

故われら見廻に參りけふハ何かたへぞお供申さんと申セバ客藤九郎申スにハけふハ五百羅漢へ

誘ハれましたと雨しようぞくわらじ取ッ出し道中連五六人さもきやう／＼しき出立也我ら申ス

にハいかに旅なればとて雨用意わらぢハぎやうさんに候持ハお嫌かと申セハ奥に六十ばかりの

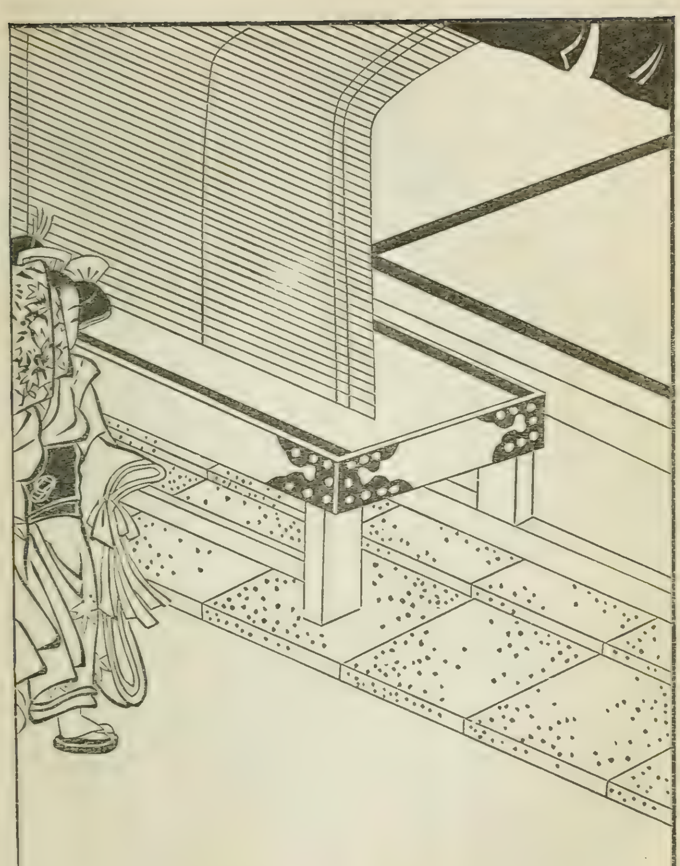
高慢らしき客はしりいで拙者ハ布屋庄兵衛と申スもので候が今ン日は飛鳥山の石碑を寫しに參

らんと存しひとり殘ッ申さんと存ぜしが舟とハおうら山しい榮三郎ゟお出ならバお供申たいと

申スに付キ夫ゟ川べやへゆき舟を云付ヶやくわんと重箱ばかり入レ何か俄ごとなれバ竈もなし

にこぎ出し大川へ出深川二けん茶屋松本へ上り一寸おなごに立ながら今から羅漢へ行から舟の重箱を頼むと云ながらヵノ大坂人五六人と亭坐敷へどや〱と上れハヵノ高慢客ハヤちんの額を見てキツサキソハンライとよミくだし此額ハ何人の筆と申スに依て我ら思恭の筆と答へるに源内よりも見事也と同し人を二人とおもひ物知顔に申スに依て腹を抱へました時にさかづき数へん廻りハヤ御立といそぎ富が岡を一寸おがませ段〱日がたけます羅漢へ乗リ廻しましよと立川通りをこがせ二ッ目邊りにて大坂の供に其重箱を出さしやれと云へハ供の男申スにハ此道具ハやくれんも樽も皆からでござりませうと申す我ら申スにハイヤさうでハないはつマツやくわんをミやしやれと云へハ供覺束なくも茶わんへつぎミればチト冷てハあれど煑ばなに違ひなし是ハふしぎと樽を傾むくれハ酒あり奇妙〱と又重ばこをあくれハ四重ながら一ッかとの手際物皆〱奇異の思ひをなすうち布庄ハツト感じ扱榮三郎も今ン日の御趣向驚き入リましたまづ二けん茶やへ上れバ何も仰付ヶのなきに色〱御ちそう出是をさへ奇妙〱と申べきに此重箱のお手づまごと大坂ほど手早い事ハ有ルまいと存じましたが誠に井のうちの蛙でござる是ハ一ッ興〱と悦び咄スうち龜井戸へ上り天神ゟ羅漢を見せ又舟にのり藤九郎もごたいくつかと申せバさきほどより布庄どのゝ申ス通りお手早な事驚き入リましたあれハマア〱どふお申付ヶ

なされしものやとんと不審がはれませぬと申スによりわれら申スにはなんのむづかしき事もなし山の松本へ上がる時舟の重箱を羅漢へ行やうにせいと女子へ申たばかりと申セバ夫で少しハよめましたと申スうち布庄いはく榮三郎ゟ迚ものごさうにドウヅ吉原を見せて下されとある我ら申スには布庄ゟハ本ン町ハいづくらのお客と承れバ呉服店の若手御案内がよふござりましよ譬われらお供申ス共モウ今ン日ハ遲ふござりますと實ハ爰へ來る氣で船頭へ内イセうを吹こミ堀の方へかぢを廻せはハヤ兩國也ときに布庄いはく此橋ハ何橋でござりますと聞くわれらワさと永代橋と申セハ乘合のうち一人ン申スにハ今ン朝舟より深川へ乘いだし候節ハ永代橋ハ右リ也今歸帆に及び左リに見なすべきに右の方ハ心へすと申す是にて少ししらけし所をわれら申にハなるほと貴君仰のとおり兩國にてハ候がごとうりうを承ハれハ近ゝに御出立との仰よつて江戸の風景を少しも多くおめにかけたく廻りハ廻りなれど比川筋を參れバ馬喰町の御旅宿迄舟にて戻られ候に付キ斗らひましたと申セバ布庄藤九郎兩人なから何から何迄お氣のつきやうが面白ひと言て兩國ばしの人通りを見上ケ布庄曰ナント藤九郎殿此橋の通りハ大坂の天滿橋の夜宮の人ほどござらふか何さ〳〵及びもない事さなるほど名にしおふ兩ごく橋武藏下總へわたり長蛇の伏たる形一チ名ハ臥龍橋とも申したしと獨感心して何か詩文杯を吟じとやかくするうち船



新吉原

頭どす樣にて旦那三園の表華が見へますが川がこごりで堀迄はおされませぬ奥の所からお上がりなされませゥ、、夫でまよいが兩方のよしのあいだは近りそうなものナニとんだ事斗リでよきではあるまいしといふうち舟が着とやノヽと上がり皆土手へ出れは布庄曰是は何共合点の行ぬものかなマッ旅宿邊に土手の有しさたを聞ず又やねに天水桶のあるをミづさつする所ヵノ吉原ならめとつぶやくうちわれらさきへまわり皆々ヵゥお出と中の町へ入リし頃は火とぼし時。サなにが醉醒の欠びに肌寒くどふもたまらぬ所をまづ鼻をはぢくほどのあつ燗のごちそう鄽の出る間をざつと給て皆々御懐中御用心なされと申し打つれ二丁目くだりを見物させどこぞへ上ヶようとおもふに日頃の邪見こゝに顯はれ大鄽の分はのこらずふさがりサ夫を客人たちは夢にも知ろうはづはなし此内あの内と覗くを氣の付ぬふりにてかしへぬけ。ふと心に浮ミしは今の半太夫は我らしらぬから是くつきやうの家と甲斐がねやにイミ次郎に座敷持が揃ふかと聞かせければ白妙々と二の鷹々とはよふござりますと申スをしほに二階へ上がり大坂人トへむかい皆々吉原をよふごらふじましたかと申せは布庄いはく今ン日船中で吉原一ッ見をお願ひ申セどお許しなき故力が落ました所を此ごとくお振廻ナニヵ夢のやうでござりますノゥ藤九郎殿なるほど貴君の申さるゝ通り榮三々のおだましは少し憎ふござりますか是は道すがら退屈の出ぬやうと

のごしゆこうてがなござりませうと挨拶とり〳〵の折から鎰を手に持た禿が用箪笥のたばこを出すかと見る内二の鷹をはなぼうにして五人しどやかに居りければ二郎進ミ出テまつお盃をお濟しなされませと盃臺を直す故われらはじめ新造からさしそめドウツ藤九郎殿へ二の鷹か白たへの當るやうにと祈りしに都合よく二の鷹ハ藤九郎白たへハ布庄其外銘〳〵盃事すんでひとりの新造が禿に三弦とりよせあいさうにしのびごまで糸かき鳴らせハ布庄いはく御當地ハその八ふしハいかゞでござる御存しならハ一ツ曲御所望が申たいと申せハ新造たちハおかしかり三弦を置て吹出セは内しようより臺の物出る此時布庄扇を手にもち用文章の畫の身で立膝になりつく〳〵詠めサツテモ見事うけ流し小心とうにいたる迄あつぱれの御出來也と誠の立花と思ひ盡す故座のしらけぬうちとおもひ二郎に呑込すれバ二郎廻しに向ひ皆〻一ト歸りになさるゝから其おしたくと申セバさやうならハ御膳ハ後ほどゝ云捨手ばやくしてこゝハ二の鷹〻こゝハ白たへ〻と段〳〵案内させ濟んで先よしとわれらもホツト息をつき新造を待〳〵一ト寐入リセしとおもへハハヤ二郎結かけお迎ひにまいりましたとある。なん時じやととへバおしつけ夜があけますと申す夫ならバ戻るかよい皆起して廻れと云付ケて白たへが座敷を覗けハ布庄いはく榮三〻お顏ハいかゞお洗ひなされたか拙者ハ手廻し致し廊下の鉢で洗ひましたと申セバ白たへハ聞ぬ振り

にてわれらへ向ひ今ン日わたくしハ髪を洗ひました故か頭痛がいたしますと申すからわれら思ふハ布庄宵より叢されしによつてきやつふりおつたと思ふた故イヤ髪ばかり洗ひハなされまい定て灸などなされたでござらふ灸にハ必背中がきゝますと申たれバさすがの白たへも氣の毒な顔□□へたしかし何にもセよ此榮三か連立し客をつらくセしハ憎さハ憎ひさ・したがどうか貰やうによつて面白ミのありさうな事源次折をもつておとりもちが頼ミたいと申セバ源次いはくなるほど面白いおはなしでハござりますが此ように座敷をおふさぎなされてハ中の町ハミじんでござりますモウ浦ゟへも突出しへも遅ふござりますこつそりと玉屋などの部やもちにもなされませナニサ〳〵われらにハ部やも奢り今の甲斐がねやの格に新造にもしましやうノウ米女ゟと申セハ内義出榮三ゟとある此はついねやの一チ番客がまさかさうもなりますまい部やもちの女郎ゟがたになされませソシテモウ新造衆ハおさむうござりましよ（相談いろ〳〵ありて面白き仕打也）　○けふハ榮三郎も宿に有けるが頻りに淋しくなりコウ陰氣になりてハモシ労咳でも病出し今死んだ時ハ一ッ生の損一ッぱいセばやと思ひしがともかくも敷居踏出しての思案とぶら〳〵川べやへ出かけ内義けふはおらが友ハだれも來ぬかアイどなたもお出なされぬが紀文ゟがなにかよいごきげんでタッタ今お出なされちよつと出直して深川へ行からたばこやとかまぼこを呼んでおけとお言ひ

付ヶなされたゆへ二人リながら一人を遣ハしましたコレ又どのモウ紀文様がお出なされよう舟を拵らへさつしやれなイヤ榮三様お前も深川ハお久しぶり御一ッ所になされませウ、わしも行たいが紀文は深川ハどこへ行くなじミでもあるかのアイ仲町の稻雀やへお出なされます又どの此頃ハ誰をお呼び、さるのナニサだれのかれのといふ事ハない紀文様ハざっさ榮三様もお珍らしくちとお出なさい深川じやとて罰もあたりますまいなるほどわれらも一ッ所に行かふが紀文ハ來さうな頃かのモウお出なされましよと云つてコレハシタリ忘れた事があるとズイト立佛壇へかゝる榮三コレお内義時ならぬ看經を初めずと酒でも呑セなさい紀文がよい機嫌がわしが足にもならぬナニサけしからぬ今看經をいたしましよう。やはりお前の御用でとみを出セべけふハよし原に喰合なし此みハお前に預ける榮三様ハいつでもおみをごらふした事がない情のないお客様じやといふうちおかねおぎん來る榮三コレハおふたりの先生よふお出たのサア是は味ひものじや。かまぼこを給て酒を呑ふが鐵棒を引ながらたぼこを吸ふとじゆうじやそなた衆ハ重寶な藝者衆しや江戸一チ番じやといへハナニサわたしらハ三弦ハろくに引もせずナニ重寶な事があらふノウおかね様イヤ何藝がなしとも重寶じやナゼといわしやれいつ呼びにやつても留守といつた事がないと、さからうている所へ紀文來り舟ハ出來たかコレハ榮三どの此頃ハ間違ひお

めにかゝらぬけふはどつちへお出なさる榮三どつちへといふ事はない先生のお供申す氣何さ此みでは深川は氣があるまいと取り上ヶければ二人の藝者トレお見せなされとみの〆きりそれは何の事もなし此榮三ゐの浦ゐはどふしたお氣かいつにても同じ事斗書てあるコレ浦ゐへお出なされたらお書なさるもむづかしくは版行になされといふておやりなされなるほど左樣申しましようと榮三は立て舟へのりければ紀文イヤ此人は人に舟を言付ヶさせてよいしかたと言ながら皆〳〵舟へ乘移ると又大川へこぎ出しいつもの通り摩理支天へつけますかと言てこんどから油堀になされませナゼ此堀は埋つて牡売斗おまへがたに乘られては舟もたまるものではないと仇口いふ間に程なく舟が着くとサア摩理支天お上がりなされと歩木をかければ榮三いはく此稲荷屋といふはまへかど山崎と言し内かアイかの名たい娘のお瀧お花がある内サそんならけふはお花に近付になる日じやの二人の藝者ナニサ又どの構はしやるなぬしはよく知てるながらと言へは紀文咄しはいつでもなるサア榮三との上がらふとさきへたてば榮三わしは實山崎と言し時のまゝじやによつて女共は見知るまいチヨツト立花へ用がある跡から行ふおれが趣向があるから紀文殿知らぬふりしてお出と榮三は立花へ立寄うち三人は稲荷やへ行榮三はモウよい時分とおもひ稲荷やは爰か座敷があるかと少し生際の振にてよろ〳〵して聞ば女子共は出迎ひお連ゐがご

ざりますか舟宿衆ハとれでござりますと申セハナニサ連も船頭もござらぬわれらひとりじやといへば折角稲雀やと名ざしてお出下されましたかけふハ伊勢講を請とりまして上も下も塞がつてござりまする氣のどくながら外へお出下されませと口を揃へて言へハ榮三ツンナラけふハ外の客を上げぬ日かアイよく嘘をいふのナンノ嘘を申ましよおちよどのほんじやものといゝながら顔を横にして笑ふと榮三少し聲高になりタツタ今藝者二人リ連てふとつた客が二階へ上がつたを見たがあれが伊勢講の人か聞たいなるほど夫れごらふしましたらうがアノお客衆ハ今朝からお出なされて藝者衆をつれて山へお出今お歸りなされたのでござりますとまぎらかせハ榮三ツンナラ宮本ハまりしてんへ越しましたかコレハ新らしい事をはじめて聞ますといわれ女子共こまる所を奥の間より内義見てコレおちよ折角あなたも稲雀やと尋てお出なされしものけふハお斷申す共又重てが大事じや伊勢講のかたのお出も今少し間も有らふのに御酒にても上ケましてご機嫌よくお歸し申セといつてアレおなご共でハ埒が明ぬお花盃を出しやいのといふうち二階より紀文覗きながら階子を下りかゝりコレお花榮三どのを知らぬかアイどふか見申したやうでござりますと間を合す榮三とれもかれも顔ハ美しいが嘘が上手で情のないのにハこまるといへバ紀文コレ上總木綿の情なし女子衆榮三とのを案内いたセといふしほに女子共おまへもよいかげ

んになされと二階へ連上がる續びてお瀧お花上がりサァ榮三樣へもどなたぞ呼びに遣しませう紀文樣榮三樣のおなじミれどなたでござりますといへバ紀文ァ、だれにせうのおりつにせうかおりつハ酒呑で能らふァィ御酒のお相手にホンニよふござりませう外へ出ぬうちきゝに遣しませうとお瀧ハ下へおりると紀文此藝者衆ハ三弦ハきらいか笄ハ頭をかく物かと思ひしにハァ硯ぶたの箸にもなりますのと云ハれ皆/\ついそないといふて盃をとりひとりの藝者あなた上ヶませうと榮三へさす榮三いかさま一ッと呑紀文へ廻すと紀文ゟおかねおぎんと段/\盃めぐる時おりつ來り皆樣よふお出といふて暫してミへず紀文此おりつハ來とミへぬがどふしたコレおちよ呼んでこいといへバ女子次の間よりお花樣/\と招くナンジャと立てハ氣のどくなァノ榮三樣にハおりつ樣がさしがあるといわしつてさがりなされたといへバ榮三きゝつけナンシャコレ藝者衆が客にさしがあるとかおれハまた女郎衆にばかり客にさしがあるとおもふたとふりて豐後太夫に石と云ハれし惣領殿が惚て欠落をして見たり狐が娘の黒髪をきりたがると云へバお花が身の上にあたり色に出さねども機嫌わるく立て廊下へ出ると行ちがふて姉おたき來ル榮三今少し早くハお瀧どのによい事をお聞せ申スにといへバ藝者達へ向ひ此榮三樣がわたしか事をなんとぞいゝなされたかといへバあまりわるい事故皆一同にィ、ヱなんともいゝハなされませ

ぬといへば紀文フト思ひつきイヤ榮三殿が云るゝハ貴公が酒を呑ならバおも入呑して見たいと云ハれたからわれらお瀧より此お花がよく給へますといふたれハ夫をこハがつて今お花か下へおりたと口から出まかセに云へハおたきァィ私は呑へまセぬがお花ハすこし給べますといへバ榮三そんならハお花とのに呑してミたいかうしまセうハお花どのが見へたならけどられぬやうにマッお前へ盃をやるハ夫をお花どのへまわるやうにくめんしなされ皆藝者衆だまつて居まセうぞといへバ紀文此小盃では行つくまいコップでも持てこいと云へハわるいお慰といゝながらおたきハお花に呑す斗とおもいてコップをとりにたつと下よりお花來て榮三を憎ひとハおもへ共紀文が大事のお客故笑ひながら座敷へ出てサァ呑て騒がふでハないかと盃をとれハ榮三ワざと貴公ハ酒ハならぬさうなどふか姉これ呑そふなといへバァィおたき公ハ姉公たけでよく呑ミなされますといへバ榮三そんなら姉公に進ぜて見たいから今にあね公が見へてはり合がついてあね公より此なかへ廻つて來たら誰が方へ來てもいつでもおさへるハ其時お前合をしてとかくあねごの前に盃のたへぬやうにしませうそといへば藝者なるほど是は面白からふと皆〳〵お花を構ふふりしていへば一ッぱいくふて点頭所へ今のコツフを持ておたき出ルと紀文サァわしから初めよふといつて一ッ呑おたきへさすとおたきからお花へうつるお花おたきへおさへるとド

レお合いたそうと榮三出るおたきからお花へおさへると紀文合をいたし夫方だん〳〵藝者私も私もと深川五六人におかれおぎん入り替〳〵とかく二人へ盃まわるやうにするによつてまんまと兄弟ながら盛潰されおたきハ床ぶち枕にして大鼾おはなれ廊下に肌ぬきながら醉伏と是をミて皆はゞに紀文様も榮三様もわるひお遊びおたき様をもお花様をもたわいなくなされわたしらもゑんかうぼうのやうになされたといへば榮三そなた衆ハめつたにゑんかうぼう〳〵といふてじやかそのゑんこうぼうのわけを知たかアイ、エ存しませぬが只あれわ赤ふなつた事を申スと存じますと申せバ何さゑんこう猿斗が赤ふハあるまいし常の猿も赤ふござるハアレハノ咄して聞さふか角のミどりやの下座敷にゑんこう猿の手を延して川へ移りしお月様をとりたがる掛ものが有た所に猿藝者のうちに川またぎになつたものか有て其藝者をついゑんかう〳〵と云てなふつた其わけハ川水ハ月に水ナンホゑんこうが手を延してミても水の月じやからとる事がならぬといふからの事さ夫をいつかしやれてゑんこうぼう〳〵と淨土宗の祖師様のやうに皆いふから元をうしない今ハ女郎の客をふる道具となつて込るわしらもけふハおりつどのにきついてらされやうさと咄す半へかつ手より川べやの又來り榮三様お宿方のお手帋とさし出せハトレト披見れハ屋敷納めの爲替狀が着ましたとの事紀文も夫で思ひ出したわれらも晩にハ用が有る

マッ今ンロハ是切ッと皆〳〵宿所へ歸りける〇或とき榮三郎心におもふよう去にても某程おかしからぬものハなし遊び抔も年を積ほど上手になるべきを段〳〵ばかになり此頃の稲雀やなどれさん〴〵あのやうな惡功者な事してハモゥ行たとて深川ものの相手にもいたすまいさゝバ氣をかへて品川通ひといたそふかとひとりつぶやきてさしあたるつれもなければ僕を相手に宿を立も見れハ今おはじめぬ事ながら江戸の夕暮ハ別なものはんの用事か知らぬが足を空にして西へ走り東へかけり共なかに品川と心ざし出し故かとりわけ南へ行て人多きやうにて行共なしに信樂が店を見付け一ッふくするうちに高輪石橋迄駕を雇ひ乘ハ乘りけれども品川ハ不案内その石橋かたもちか付にないから駕の者に聲かけコレ僕の案石橋より宿迄行も太義じやからそなた衆らかつきが有るならそのうちへ行かふと相談すれば駕の者旦那さやうならバ濱屋やと申すになされませ三五郎と申ス名代ものがござりますツンナラ夫と云すてゝ駕のうちにてすや〳〵するかとおもふうちサァ旦那まいりましたと駕を卸セハヲヽ早かつたと玄關へ上りそこら見廻セバ男まかり出ヨゥお出なされましたとハ云へと知らぬ顔故少し器付かわるひを僕いもの見てとり氣轉めぐらしコレ若衆此旦那ハ京いせやのお客じやがこなたがひいきじやから道すがらお進め申し連まして來たどふぞ三五郎を賴ミますと申セハ男ハ駕の者か近付さうでヲヽ合點おセわ

ご太義といふて旦那ともかくもまづおくへお通り下されませと案内して見通しへ落付かせ今ン ばんはいかうお寒うござりますサテ京いせやへお出なされましてはどなたへお出なされますと 申せバ榮三申すにはわれら誠は品がわきつい不案内宜しく頼ミ申すといへば男左様ならば私に お任セ下さりませ今鶴の樂の申セし三五様は私方の立物でござりますからどふぞおめにかけた いが今ンばんは西国かたの去おやしき衆お三人ご一座で夫故どうも貰はれますまい致しますが 三五様におとらぬまだ槇野様と申すかござります幸三五様い隣座敷でござります是に遊ばして 折よくば隣の事也三五様にもお近付キにいたしましよ其時わたくしがお座なりを申すか申さぬか 後ほと槇の様と三五様を見くらべなされませと云へバ榮三が心にこよいはちとおとなしくして 遊ひましよとおもひなんでもそなたしだいじや宜しく頼む時にそなたの名はァイ長兵衛と申し ます是よりお見知下されませ先早く槇の様をおめにかけませうと勝手へたつ所を榮三心に思ふ はイャおとなしくセうと斗したらあまり甘く見ようも知れずと思ひコレ長兵衛聞たひ事がある 今そなたの云通り三五どのに今宵出合もし三五どのがわしが氣に入リし時今宵はなるまいなれ 共重て來てから槇のどのをよしにして三五殿に替る事がなるかァイ〱ヱなんぼおか場所と思 し召てもさやうなじゆうな事はなりませぬと申セバ榮三郎おれは又今の移りではどふかそふな

る事と思ふたによつて聞て見るといわれ長兵衛もめつたな事のいわれぬ客と思ひナニサ譯はよくご存しながらお嬲りなされますと言〳〵立て行ほどなく銚子さかなを持出只今是へ槇のゐお出なされますといふを合圖に槇のは榮三かわきへしどやかに座に付キ盃事すミて槇のあなたはどの邊のお方とゝふ榮三出まかせに尾張丁邊といへは嘘らしいといふ重三ミぢん僞りは申さぬ現金掛直なしといへバさやうならバ夷屋のごきん所かとゝふ榮三なるほど其隣の大こくやと申せバ槇の私は存じませぬが店のお方も余ほどおちか付なが大こくやとの仰にてはとんと知れませぬといへバ榮三此色の黑きにてよくご推了ありそふな物との咄し半へ長兵衛來りコレハお二人りゐお淋しうござりましよお初會のお咄しはお部やがよふござりましよ下タをこしらへましたあれへお出遊ばしませといふうち槇の立て行榮三なるほど爰は見通しほどあつていかう寒ひと言〳〵長兵衛に連られて下タへおり槇のがざしきへ行見れはそこらうちかゝはゆくなにか金具だらけの齒磨やの箱をミるやうな簞笥もあり是も隨分よけれ共此二人子供の木綿振袖には榮三もホットすると獨無常を觀じ居る所へ夜食が濟しと見へて槇の來りモウお休ミなされましたかお隣の騒ぎが嘸おやかましくござりましよア、なにか賑かな事となたのお座敷しやのと尋ねればアレハ三五ゐと申スてござりますといふ所へ長兵衛來りて旦那お隣のさわがしさてはとふ

もなりますまいチトあなたもお慰さミながらあれへお出なれますまいかよいたち藝がござりますと申セバ榮三なるほど參りたいがお侍さうなのアイかの宵に申セしお園衆お三人方のお遊びでござります只今こなたへ參りがけに横の方のお客ハ町人方でござりますがお初會でお淋しうお出なされます此たち藝がおめにかけたいと申ましたなれハ此方ハ苦しふないお出なさるやうに申セとおつしやつてござりますお出なされませさといへハ横のコレ長兵衛殿わしが心も知らずめつたにお客方を隣ノ〵とお進め申し連まする工面をさつしやるのこなたハきこへぬ人じやと言ハれ長兵衛ハ手もちわるく謀り入リし所を榮三郎横のに向ひ横の方おつしやる所ハ一ト通りご尤ながちよと隣へ參るも一ツ興でござらうと申セバ横の私も立藝も見ましたいがお初のお前故お心をかねましてご遠慮申しましたさやうならサアお出なされませと横のさきへたち三五が入リ口ののれんを上ケどなたもお許と挨拶申し入レけれバ榮三も御免なさせられと共には入リ座に付ケハ長兵衛進ミ出お侍にいはくとなたにゝ只今申上ケました榮三方と申ス大事なお客でござりますと申セバ三人のお侍コレハ〱よふこそお出とかくかやうな場所でハお心安ひが第一マヅさつそくながら上ケませふと盃をさセハ三五ゝ勝手ハ存じませぬがお寒うござりますにお一ツ上かりませと申セバ榮三郎推參いたすに於てハ有難く是ハ戴きませうとさかづきをうけ取藝

者の立藝を見るふりして三五が顔をつく〴〵詠め心に思ふようハ宵に長兵衛が申ス通リ槇のとさのミ器量にハ替りし事もないが。よほど大鳥と見へる惜ひ物をお侍に預けるもの哉是も約束事かと酒一ッ呑ミあなた方見ぬふりをなされませおちひざしに致しますと三五へさせハ三五ハ嬉しさふな顔して盃を頂き私かへお人たがへではないかといふて榮三郎を見上ヶ心に思ふようハ下町の町人衆ハ山の手と違ふて人がらもよくいやミを言ず槇の分ハ嘸面白からふと思ひ槇のへさせバ槇のより梅の花木と段〱盃も數めぐれバ長兵衛心に思ふようどふか氣の廻りかハ知らぬが榮三分と三五分ハ只のやうでない外の女郎衆もお圍衆方面白ひさうでとかく盃か片よるやうじや是でハひよつと座かしらけやうもしれず夫も氣遣ひ殊に宵方の一ト工夫も遲くもならふしとかく立せますまいと思ひ槇のに向ひ槇の様モウ夜も更ませう榮三分へお暇をお進めなされと申せバ榮三郎誠に皆分の御退屈も顧ミず面白さのまゝ長居を致しましたと一チ禮のべて槇のが座敷へ戻れば長兵衛ハ宵より工し事ありてモウ斗略を廻らす時こそ來たれと思ひ榮三が前へ手を突てナント旦那お隣ハお慰ミになりましたかと申せハイヤモウきつい面白ひ事と云て彼ぬ花を貰ひに來たと思ひ壹分はづめバ長兵衛是ハお肴も出しませぬに有難ひと悦び旦那に先を越されまして今更不通らしく臺の物も上ヶ悪ふござりますナントかふいたしませうかおよ

つと致したお肴を拵へ私お隣の客方へ持出榮三郎申ます只今ハよい慰ミをいたしました右のお禮に此肴上ますとの御口上にてお遣し遊ばしませ。よいはねでござりませうといへば槇の側よりナニサ長兵衛殿夫にも及ぶまい三五郎のお客ハ元より梅の屋のお客も花木屋のお客もお心安ひから榮三郎のお引のないように私より申スが角がなうてよからふと申セバ榮三郎なるほど夫がおとなしく大やうめいてよかろふがお國樂と有れバ江戸じたてのお侍とちがふていづれも偏屈で堅からふなんぼ丁寧なやうでも町人といふものハ自他樂なものじや人の座敷のちそうを請て返禮もセぬとさげすミに逢ふてハ面目ない長兵衛もわれらを客と思ひひいきする心より起りし事是か縁となつて又アノお侍がたにどこでどふ出合ふまいものでもない其時の爲に隨分長兵衛を遣ハすがよからふ長兵衛そんならそなたよきようにして進ぜてたもれといへバ長兵衛畏りましたさやうならアノおきハぎのうちがようござりましよと勝手へ行大どんぶりへ九年ンぼを輪切にして大白の砂糖を小澤山にどんぶりの深さの見へぬほとにして持來り旦那ごらふじませと出セバあまり輕微でハあるまいかのナニサ皆お醉なされてござりますといつて隣持行三人の侍衆に向ひ慇懃にお隣槇の屋のお客榮三郎より只今ハはじめておめにかゝりいろ〳〵ごちそうに預り殊に珍らしき御趣向のお遊ひ拜見致しありがたふござります是ハいかめしくハござります

が御酒の興を添ますためお目にかけますとあつて獻ぜられますと口上を延ければ三人の侍一チ同にコレハ何共痛ミ入さしたるちさうも致さぬに一種の心遣ひ致され殊に念の入ッし口上其われら國元にての噂に三ッかの津と申スうち江戸表ハ諸國の入ッ込にて氣か廣過さゝへな事ハ打捨置武士にてもお留守居抔使者先で遊里の咄し出來町人は猶更と承りしが見ると聞とハ相違致す物と申さるれバ長兵衛申スにハ私めハ御當地者でござりますが廿年ッも立ますれバ何もかも違ひます此頃ハお寺ゟのお客が初孫が出來た祝へとて私へ雛をおねだりなされ俗のお客がやゝともすれハ精進汁て生蕎麥をお望ミなされますサアどなたも此肴て一ッ獻ッ、召上られ下さりまセと申セバ三人のお侍何か囁き點頭合て三五が客申出すに今見やる通り三人相談セしハ侍か町人たちに氣を付られて後ばセなやうながとふも返禮がなくハなるまいによつて少し夜も更て支度も出悪ふハあらふが町人の客一人リに侍三人寄て見苦しき物もなるまいとふぞ嶋臺共云さふな隨分と立派な臺の物を云付てくりやれ偏にたのむとあれバ長兵衛なんぼ氣の強ひ客達でも町人衆と侍のお客なればゼひセきが出てカウ出さうなものと宵より思ひ儲し事なれバ勝手に其用意ハ拵置しがわざと眞顔になりお安ひ御用と申上ましたいが恥を申さねバ理が分ませぬ此品川と申ハ吉原抔どいやうにきつと致したきの字やと申スもなくさやうおつしやる臺の物ハ三日

も前から誂らへませねハ間も合ませず殊に今ンはんれハヤ八ッでもござりませうとふ働らきましても急にハ手際なものハ出來ますまいし又外になんぞと申バット致たお肴も出來かねますモッ榮三郎ハおひとりの事也お休ミなされますよきやうにお返事を申ませうに是ハ是に遊ばして重ねてなんぞよい御趣向がござりませうと何氣なく申スほどお侍たちハせきが來て初會とあれば重ねて逢ふハほどが知れぬひらに頼むと三人ながら誠に武士の恥辱とおもひつのりて申さるるを長兵衛マヅお靜になされませ其やうに聲高に仰しやつてハ謀がお隣へ漏ますまいものでもないまづ小聲になされませと防ぎながらようござりますよいことを思ひ出しました宵に花萩郎の大一座へ出しました結構な臺の物がござります是を下ゲまして少し手を入レ拵へましたなら一ッかどの臺の物になりましよまづ手早く致しておめにかけませうと急キ勝手へ行キ暫し長兵衛ハ鎮守の番と二人リ持にしてサモきやう〳〵敷臺の物をかきこミ三人の前へ居へ一ッ生の智恵を出しまして漸〳〵働きましたナントようござりませうと申せば三人つく〳〵見てよし〳〵物の染し所もなく手垢もなし盛替物とハミへぬ天晴〳〵是をこそ返禮なりと悦び口上ハ長兵衛御當地風によきやうにと申さるれば畏りました少しも早いがはねませうと槇のが座敷へかきこミ咳拂二ッ斗すれば槇の屏風のうちより長兵衛殿かと問ふ長兵衛アイ大事が出來ました榮三郎を起

しましてと申せハ葉三何事じやと起直りにじり出れバ槇の衣桁の打かけ寐卷の上へ引掛行燈の灯をかきたて立出れハ長兵衛葉三様今の九年ぼが大キにはねましてお三人様より此臺の物を進ぜられましたと申セバコレハ却て御苦勞をかけ氣の毒此心盡しを無下にするでもあるまい宵の酒が過たやうなが一ツ盃せうかといへハ長兵衛ようござりませうと立チ銚子と燭臺を持チ出畏れハ槇の用簞笥から嗜のコップを出しサア葉三様是で一ツと申せバいかさまよかろうと一ツ呑葉三よりまづ長兵衛へさしこなたぢよつと給てお侍たちへお禮を申てくりやれと有レハ御意に隨ひませうと一ツ給コレハ槇の様へと送り左やうならお三人様お休なされぬうちちよつと御挨拶を申ましよと立て隣へ行キ三人へ向ひ只今の臺の物葉三様へおめにかけましたなればお侍様の仕打は格別なものコレハ肝が潰れるとお悦びなされ殊外御吹聽でござりますと詞を飾て申セバさもこそ／＼夫てこそ武士道も立と三人悦び三五が容懷中より小判壹兩當座の褒美と出せハ長兵衛ハ是ハ有難い近頃ハ南鐐斗に出合ひますに久しぶりで小判様のお顔を拜しますと押頂きて追從輕薄を言ひ／＼直に槇のが座敷へ來り葉三様御覽ませ此壹兩に有付ふと思ひまして宵より大分ン骨を折ましたと悦びおたばこの火ハござりますかと火入レを探屛風引キ廻して駕の參る迄ちとお休なされませサア葉三ハ宿の徒然をたはこの烟にふき晴しつく／＼心に思ふやうハ此間

品川の遊びハ面白いやうなれ共退て鑑れバ宵より朝迄皆男長兵衛めがお國衆三人をせかすやうにして己が錢儲にせし共くさびになつたやうなものいかいたわけな事をした究竟一ト人リなればこそまだすめあれに連のひとりもあつて見たがよいよき笑ひものであらふけふハ誠に此頃にないあたゝかそうな、何ンのいらざるふようが出て深川じやの品川しやのと經廻るから悪からふ。やはり中の町へ行て内義やおよねに咄させて和扇でも呼んで遊ぶがよからふサテハ朝觀音と出よふかと思ひ居る所へ刀屋半ヱ門お見廻申すと來たり旦那春中仰付られしお脇差漸〳〵出來まして持參致しましたと袋より取出しサア御覧じませと出せバ榮三郎手に受取ホンニソレコ誂らへし當座ハ度〳〵催促せしがあまり埒が明ぬによつてトント忘て居たが隙のとれしほどあつてかつこうがよく出きた幸けふハ淺草の方角へ行かふと思ふた貴公も手透ならバ行ぬかアイ随分お供申てもよふござりますが淺草より勘三になされませぬかカノ仙臺萩がイコウよふござりまして殊に此お腰の物にも仰付られし御ひいきの親玉が松前鐵之助場が大評判でこざります淺草ハ氣かこさりませぬ堺丁ならバ用をかきましても參じますと申せバ榮三郎なる程勘三も團十郎もひいきじやがわしハトント當リ狂言の時ハ見に行ぬといへハ半ヱ門ソリヤどふいふおぼし召でござります人とハ風が替りますのと申せバ榮三郎申スハ狂言當りなればわれら行ず共

大分ン見人があるによつてよいと申セバ半ヱ門ツンナラいつごらうじますわれらか。われらハ大はづれで入リのないとき見に行く其時ハ棧敷一ツ間にても賑かにしてやりたいからさナントかういふ眞實なひいきが有らふかツレハそふじやがモウおし付顔見世か來るナンボ當り狂言じやとて夷講までもせまいさ觀音の罰が當るか知らぬが折角お年寄の思ひ付を無下にもなるまいカウ行風か立ッてハどこと申ス事ハない行ねバ氣が濟ぬサアどふじやといわれ半ヱ門淺艸が芝居になるハ牡丹見に吉野ニ人が出るやうなものしやドレお供申ましよと榮三郎に引添ふて行茶やハ雛形やになされますかイヤ根芹やかたに致さう雛形やハ吉原者でも來て居れハ面倒な行德がしから一寸フキンミやへ立寄リ根芹やへ行榮三見物に參つた狂言ハどちらかよいのといへバ亭主罷出コレハお珍らしい榮三樣狂言ハこちらと申上たいが今度ハ隣にメられました仙臺萩がよふござりますヲ、さう聞た棧敷があらふかのモウちツと遲ふござりませうそれ共聞にやらしやれトキニともかくも一ツ盃セねバ寒サが凌がれぬ二階ハ透てあるかのアイお上かりなされませサア半右どのお出と連立上かれバ内義盃を持出榮三樣ごひいきの三升が大當で鉄之助場が大評判でござりますイヤわしハ夫よりせんぎの場が見たいと咄す所へ男戻リ榮三樣棧敷勘三でハ出來ませぬ羽左ヱ門になされませぬかと申セハイヤこちらハ氣がないノウ半右殿アイ私も勘三が出來

ねバ力が落ましたといへバ内義榮三㐂ハ今ゝ日にも限りますまい御酒がよふござりましよお連㐂ハ私がよいやうに致しましやう　幸　問屋衆のお桟敷がござります榮三㐂のお客と申せバ合点でござりますといへバ榮三問屋ハ誰じやよし川かィ、ヱ町川の賣人衆でござりますそんならバ大事ない半右殿お出なされさやうなら御意に隨ひ參んじましようと下へおりければおとこお供申ましようと半ヱ門を連立行跡ハ榮三ひとりになれバ内義此頃菊五郎が弟子に大坂より下ッ子がござりますよく舞を致しますお肴にお呼びなされませ。なるほど夫も呼ぶじやが梅がえ哥松の大若衆もよからふといへバァィ其二人ハ地引によふござりますかおなじミの松之丞ハぜひなければなりますまいと手を拍けバおとこ來りお燗を直しますかと聞くィャ榮三㐂か大坂子の舞を御覽るとおつしやるかゝ松様はじめ跡三人も早く聞てござれァィ畏りましたとかけ下て聞もなく皆〳〵來り旦那此頃ハスキト堺丁ハお見限りでござりますといへば榮三笑ひながら榮三もよほどりこをになつて貴㐂方のやうな御用の辨ぜぬにハおめにも掛らぬが松之丞ハ今ゝ月に入ッても度〳〵じやといへバァィ榮三㐂ハ度〳〵お尋なさるさうなか此お内義㐂が悪かして私も二月ぶりでおめに掛りますといへバ哥松梅がえ口を揃へィャ夫ハ松㐂がお出をお隱しなさるであらふ榮三㐂いおつしやるがほんまであらふ今ゝ月もハャ三日斗たつからとつちつまの合ぬを

おしかり皆〳〵笑へハ榮三われらを各達ハ打寄て上ヶたりおろしたり煤掃の番頭を見るやうにするのといへバ皆〳〵煤掃のお番頭とは出來ましたサア番頭さまに一ッ上ヶませうと梅かえ一ッ給榮三へ廻せハ榮三呑て松之丞へさすとハャ梅かえ哥松三弦おつとり三年ハ後に須磨の浦と引かくれバ下子源之助行平汐汲を舞出し惣浮れに浮れ酒も入レ亂れ大軍となりし所へ勝手より煮ばなをして男持來る此男を大坂〳〵と呼ぶ由來を尋るに元座广あたりの小役者にて有しが大夫元の女房と蜜通いたし其咎に依て役者一ッ統を構ハれ大坂の彳ミならず江戸へ下リ此二丁町よりよし町を旦那として根芹屋かたに斗もハャ三ン年ンも居り御當地をひいきセねハならぬ身を持ながら古郷忘し難き場かして何に付ても大坂を光らかしてとかく能申すによつてマタ大坂が出たッリャ大坂と人ト〳〵言立てッイ大坂が本名のやうにハなりにけり此大坂がフト床の間に有脇差か目に付キコレハ榮三さまのお腰の物でござりましようチト拜見と乞請柄本よりうち身迄ためつすがめつミて申すハナンボごひいきでもあなたのお好ミ共存じませぬマヅ鍔に團十郎が似顔ハきつい下卑蔵でござります外に仰付なされやうが有リさうな物と申セば榮三申すにコレ大坂こなたハ江戸の引出しを見るやうな窮屈な大坂より下り江戸の腹中も呑込すにお江戸〳〵と皆が申しても大坂ほどの所ハない日本の米の相場ハ北濱に立時行芝居ハ三ン年ンもすると言

やるが其米の大坂へ入りこむ越年米が何ン百何ン十何ン萬石四合五勺まで知れて手柄さうに江戸迄恥を晒に米屋共が狀に書ておこすがおかしい江戸はノ是淺草お藏前をはじめとして貳百八十大名にお籏元八萬騎の御扶持方米束はゑぞ松前西國は薩摩ぼうの津に至る迄御當地へ入り込ぬ舟もなし誠に商人の算盤にのる米は萬ン石に對しての二三ン粒ても有ふか又淨瑠理の事は大坂は三年ンもする筈江戸の春狂言の曾我はそなたも知通り御入國已來より今に三ン芝居共に曾我を仕組はないかと申セバ大坂眞顏になり榮三ゟ今おつしやる共曾我狂言に十郎が助六やら五郎が吉三やら朝から晩迄見てもすきと譯か知れませぬカノごひいきの團十郎殿はじめ相人廣右エ門にはかまはず大切の御見物ゟ方を何が不足で白眼やらめつたむセうに白眼廻し大太刀をスラリト拔と切もセぬ首か六ツも七ツも轉げる大坂は夫とは雲泥の違ひ抑〳〵序幕から致して大詰迄舞臺が詰らねバトントト見人がこさりませぬといへば榮三郎サア夫が大坂のせばひ心から見るからさ江戸は其理屈に飽てけふは芝居でも見やうかと言ツイ出て行ナンノ理屈を聞たけりや袴でもいる所へ行ますは其心では錢湯で武家方か長哥や豐後節をかたりやしやるがおかしからふコレアレハ毎日〳〵上ミ下モやお袴でのお出合故錢湯へお氣を轉じにお越しなさるによつて土佐節や謠ではお慰にならぬ故ア、埒もなき節になさるはカウ何ニもかも了簡が違ふにより

今羽左ヱ門かまへど登りし時平野屋德兵衛になれバ德兵衛ハ大坂者夫に江戸詞の德兵衛ハ詰らぬといふたげないかゐたわけどふしたとて高の知れた狂言じやもの御公邊へ掛らぬ事さへとり組バよいマヅ其そなたの氣に入らぬわしが脇差を見やれ鍔ハ團十郎が柿の素袍か目貫か日本橋絲が鶴かき頭が衣紋坂の体裕の青貝が中の町のけしき細工ハ皆家替の彫もの是でも拵にハ過分も掛らぬが脇差ハ男の魂一ツ生肌を離さぬ道具夫を此やうにじやけらに拵へ人中へさして出らるゝ物かコレハこなたのやうに悪く思ふ人へハやられぬがどこそへ行一ト度の晴さへすめバきミよく一ツ盃呑だ神達へとられて仕廻ふ氣じや譬ヘ三百兩の拵への脇差でも一ツ生嗜めバ安ひものわづか五拾兩の拵へでも一チ度切て捨る時ハ高ひものサアこんな仕打が大坂者が出來るかといわれ大坂もあきれはて私も大坂でこそあれお城のお太鞁をおめ覺にして霜避の椀で喰初をし錦のしとねに居りきしやごはじきをすれバお乳や傅がぼん多お手か浮雲といわれたものを此やうに言込なさると述懐を言/\下へ逃て行バ下より又男來りお連ハ年寄ハ少し見のこしても人多のおセわにならぬがよいとて今お歸りなされました旦那にお目にかゝらふがわしハ下戸でお相人にもならずヰシお尋があるならよいやうに申上てとお申置なされましたソシテ子共衆のお迎ひが參りました詰に申て遣ハしませふかと申セバ榮三申にハわれらも少し用事がある

歸らねばならぬ皆様御苦勞でござつたお戻なされといへば皆〱申すには榮三様の御用は其お腕差の晴をなさりに吉原と判しました相談どしより夫がようござりませうといふて松之丞はじめ皆〱お暇を申せば榮三郎も身繕ひする所へ内義出町清様が芝居よりお戻なされ只今是へお出なされますと申せば町清は連客一兩人と二階へ上かりコレハ榮三様此ほどの間違ひおめにもかゝりませぬ今朝お出のやうすは爰のおとこ共に承りしがどふも棧敷が明悪ふござりまして漸〱只今おめにかゝりますと申せは誠に今日は拙者同道の老人をおせわお頼ミ申し忝のふござりますお連のお客方にも嘸御窮屈にござりましつらんと客人たちへも一チ禮延れば旅人二人ながらイヤ棧敷も爰ふもござりませずまそつと御見物なされと申せしがどふでも御老人だけ御用心深く打出しには階子が浮雲との仰せられで先刻お戻なされましたなるほどさやう申ス事でござりましたなにゝ付ても老人は氣が付まして間違ひはござりませぬが遊びの座にては散〱な物咄しが裏に落ましていつ共なしに異見になりますと挨拶取り〱の半へ内義手を突切榮三様はじめ皆〱様へ私がお願がござります追付兩芝居が果でござりませうが今ン日小石川筋の去お屋敷の奥女中方のお棧敷を取り損ひまして散〱御機嫌が悪ふござりますアノお腹立ではお出入りが上がらふも知れませぬドノお客様も大事でござりますが取り分ケ此お屋敷はお目を下

さりまして代々私方のお出入りにて木挽町のお棧敷迄もおせわ申すほどの大切のお得意樣で御機嫌わるふお戻申してハどふもなりませぬがト申たとて輕薄ハお嫌也致し方もござりませぬがフトあるじ加茂二郎が思ひ付ましてあなた方にハ十町がごひゐきでお出なさるから十町でもお棧敷へ出すがよからふと申て其十町ハ先刻賴ミおきましたがドフモ出はに込りますナント近頃お願でござりますがコゥ遊して下さりませぬかあなたがた十町がお近付てお呼ひなされお座敷へ出ましたやうに見せお屋敷衆へお借り申して出します趣向に致しとふござりますと伺へバ榮三申すにハ町清殿拙者ハ十町に近付にないから幸ひなこと十町を招き一ッ盃いたすも一ッ興でござらふと申セバ町清完示〳〵しながら榮三ゟもわしもよいおとこしやからモシ十町と見違へられてハ迷惑なものしやが折角かミゟのお賴さうもなされませさと言へハ内義なるほどお二人りゟながらお色白でよい御器量じやによつてヒヨットお屋敷衆が見入レたらこまつた物でござりませうと笑ひながら左やうならお屋敷方を此表座敷に致しあなた方を奥座敷に移しまして中のふすまを中開に致しお前方の酒もりが遠く見ゆるやうにいたしませうマツ十町を呼びに遣ハしませうと下へおりながら八兵衛を呼びコレ八や此お盃道具を奇麗にして奥座敷へ持行御酒のお燗を溫く直し上ヶませよと言付おりると八兵衛サア旦那方御苦勞ながら奥座敷へお出下さり

ませと申セバ榮三コレハ煤掃もどき見世引の押詰客をとるやうに座を追廻すの。八やそなたハいつ墨屋になつたと言ながらサァお二人リのお方にも町清殿にもコゥお出と皆〳〵奥座敷へ居直れバ十町ハ黒羽二重に黄八丈の羽織着て座敷へ出ければ内義も引添て出十町ゟあなた方へ御酒上ヶましして下され今兩芝居の打出て聞しいお顔と申ますと言下へおりければ十町おかみゟ爰ハ不調法ながら私がお取リ持致お燗なさるなと申シ扨あなた方にハ始めてお目に掛ります此上ながらごひいきをお願申ますマッお馴染の爲一ッ戴ませうと有レハ町清サァ榮三ゟおさしなされと言へバ榮三郎左樣なら慮外致さんと一ッ呑十町へさセバ十町戴夫より町清から旅人衆へ廻り吸物一ッ二ッ出掛るうちカノ屋敷衆と見へてドヤ〳〵と表座敷へ上がりければハヤ膳を持かけ御酒よおたばこ盆よとこね返す所へ亭主出て一チ禮延て引ッこむと暫して内義盃を持出今ン日ハお桟敷が遠ふござりましてお氣の毒ゟでござります是から小石川迄ハよほどのお道法でござりますどなたゟにもお過し下さりませと申セバ付添來しお侍申さるゝハヨゥモけふハ不調を働たなと申さるれば内義夫をおつしやつてハ一チ言もござりませぬマッお一ッ召上られ下されと手を突バ年がましきお女中コレお内義けふハ濟だ事じやが重ねてハ氣を付たがよいモゥ酒も桟敷で大分ン過たがこゝを一ッも食ずに立たならハお内義も氣の毒て有ふサァわしが

年役に始まセうと老女一ッ呑內義にさせバ內義おしいたゞき有がたふござりますと申し憚ながらあなた上ヶまセうとさして中にハ奥へ指さしァノ通りおくに町人衆が十町を呼んでお出なされますだいじござりまセずハチョットお相人に呼びまセうと伺へバナニがひいきの十町なれバ夫がなる事ならハ賴むと皆〳〵口を揃へ申さるゝに付キ內義榮三が座敷へ行手を突屋敷衆へ聞へるやうに少し聲を高くして皆〳〵ゐ近頃御無心にござりますが丸屋ゐを一寸おかし下さりまセぬかァノお屋敷ゐからよつとお借申たいとお仰しやります少し御機嫌が惡い折からにござりますれバさやう仰なき共十町ゐを出しましたい場でござりますと申セハ榮三申すハ大事の十町殿じやがお客の御機嫌直しとあれバ進セましたい町淸殿どう致しまセうなるほどけふハ棧敷が間違ひ內義も迷惑を致したけな夫だけ爰か淋しくハなりまセうが遣ハされましさと申セバ內義有難ふござりますサァさやうならバ十町ゐァレヱお出と申セバ十町ハ旦那方少しの間お暇を下さりまセと內義連立屋敷衆へ出ければおはしたハそつと立て合の襖を引たつると十町で皆〳〵御機嫌も直ッたそうで笑の聲〳〵聞へける榮三郎ハ陰間共の推察の通り脇差を見セに行に遲わるとおもひサァ町淸殿又重ねての參會に致して西東とおわかれ申さうかと言ハ町淸もトゥカ此風てハ入リ舟の有さうな晩でござります私も戻まセうサァお若方もお立なされいと下へおりけ

れバ榮三ハ駕を言付て北國さして落行けり〇昨日と暮けふも翌日に移り安き光陰の矢よりも早き年月をあけくれの遊興にのミ心を春木榮三郎友待顔の在宿につく〳〵年ッ月のうつり行身の咎を思ふに今年もハャ三ッ冬も暮て春も近きに至れ共帳面一ッだに覗もやらず皆手代任セに致しけふハ芝居あすハよし原品川と所を替品を替東南西北へかけ巡りひとへに江戸見物の遠國人同然人こそ知られ我ハ此家を踏へべきものにあらず兩親晩年に及べ共一ッ子なきを悔ミある夜門前に捨子ありしを人知らず拾ハセ世上へハ實子と言觸しわれを拂ッ子にして此身代を譲られければ實子の世嗣よりも猶大切に致べき所兩親身罷りてよりいつとなく放とうになり金銀を石瓦の如く遣ひ捨し事天命恐るべし〳〵と獨先非を悔て居る所へ刀屋半ヱ門殿お出也と取次ものありて申セバ案内に付て半ヱ門入ッ來る榮三郎出迎ひコレハ〳〵ようこそお出此頃ハ時分柄故かして御光來もなくお噂斗て打過ましたなるほど仰の通り春近きにより武家方より急の細工物斗請取ッ渡世にかまけまして久しうおめにかゝりまセぬマヅいつも御安泰で何よりでござります時に御愛妾お蘭ゐハとふなされましたお留守かしてお見へなさらぬと尋れバ榮三郎申にハお尋の蘭事ハ少しふつつかな事がごさつて此頃暇を遣しました居付た者が居りまセればバ朝夕にこまりますと申セハなるほどさやうな物サッお込りなされまセう夫に付ッノおつしやるお蘭ど

のかござらすれ幸ひ蜜談に申上る事もありマタ今ン日ハチトお目にかけ度物をフト見出しまして態と持參致しましたと懷中より一ッ小冊を取出しコレハ四十瀬近き頃身の過を書集ました艸稿でござります是をあなたへ持參致ます心ははゞかりながらあなたにも近頃ハ御遊興か過ます噂是と申も早く御兩親にお別なされ古老の手代も皆古人となり御自由過しより起りし事御遊興ハいつ迄なされましても是を贍納と申事ハなきものにござりますモゥあなたも三十共申ませうか御遊興事ハ止になされて御家內のお取リメにお掛リなさりますがようござりますマッ第一ハ私風情の身輕者でも妻子を持を孝の終と心へ居りますに此大家をお納なされながら御本妻と申すハなく妾斗になさるが大きな御了簡違ひ其妾と申ス物が御愛憐のお蔭どのを始性賤しき者にて奢に生れけれ共身貧しき親を持てバ綾羅錦繡の望も叶わず是非なく奉公に出る者故主人の氣に入ル事斗申てとかく御遊興を進め留守勝に致スやうに工夫巡らす物故ツイニハ身代の破滅となるもの也殊にいまた御世嗣の御一ッ子もなければハヤ相濟ぬお年頃也今ン日にもマッ思し召立て御本妻のお心掛なさるが肝心でござります御本妻にハ夫婦別ありの場がござつて御遠慮が出來いつとなく御遊興も止ミ申ス物てこさります私も今こそハ利口に申セ若氣のふ了簡で一ッ生を誤りました私ハ元來伊勢庄野邊の產にて十一の時去問屋職の家へ奉公に下りしが十五から

して酒を呑出し三十にしてどらとなり是非なく古郷へ立歸しか伊丹池田の上酒に腹ふくれし故在所の濁酒ハ呑れずいかゞせんと思ひしが御當地ハ伊勢者多キ故少しの知己を求めまして又下りハ下リしが何が問屋職に奉公せし者なれバ小賣やハいや也マタ参りたいとて先でも問屋を勤し者ハ大きひ事斗見て此方共の小まかしき事ハ知らず隨分年頃もよいがドフモ賴れぬとあじな事か奉公の障りとなり一日〳〵と日を送るうち若い時小道具を好しか是となりいつ共なしに目利が出來夫を便りにして今ハ少し人がましく成刀や半ヱ門と申せバあなたのお家を始どなたにもお相人になさるにより貴人の交もなります故有難ふござりますと涙をこぼして永々敷事を老人の癖なればおめず後せず申すな榮三郎もカノ根芹屋時分ならバ出入の者の分として此榮三に向ひ慮外を申かける物か抔と立腹いたすべき所を時を得て榮三郎も身の上を自業自得し後悔せし折からなれハ存の外機嫌よく〳〵コレ半右ヱ門殿こなたの異見一ツとして無理がないマヅ身の上ハ誰も包むべきものを身の間違迄も隱さずに申す人かどふして今の浮世にあらふモウ是で榮三も了簡か堅まる先最初の妾狂ひの講尺か第一の尤じや實ハ本妻も持たけれ共御推了の通り吝しよく多が故夫がいやさに一チ日〳〵と後申たが此頃ハためして見るに妾と申ものハとかく牽頭めいて折節光る物を見せねハ旦那にハ致さぬ併コレハ座切でござる外へハお咄し御無用と

申セバ半ヱ門私風情の申す事を早速お聞分下されて誠に深切が届まして難有存じます是迄ため〳〵の御異見故大キに永咄しになりました御家内嘸おうるさふござりませうおいとま申ますと言たい事言て半右ヘわが家へ歸りけり跡に榮三ハ亡然として人ハ見かけと違ふものじやァノ半右ハ無佛世界とおもひしがけふの詰開きハ中〳〵貴心の有ル者誠に是にて榮三も本心に立歸りおとなしくならすハいつと申す限りが有ルまいハテよい遊興の止汐が有た物かなと獨身の上を歸りミテイヤ半エ門が作と有て小冊を殘し置しがどのやうな事を認めし物ぞドレ一ツ見致さうかと披見れハ表題に愚艸と有て。見よや人口がえならぬ華の香を折捨らるゝ野路の梅が枝。愚也とて不足なき身を持徒に朽る事本意なしマツ東都ハ喜見の娯少ナからずと聞けバ東武へ趣に他なしと緣を求めよき所へ仕しがいまだ奉公氣に移らず親の光ハいづく迄もとおもひ在所でハどふでのかふでのとこなたより位をとり素性を鼻にかくれバまだ垢か拔ぬ田舍の客ハ馬喰町と錢湯斗と打込れ物毎鼻に掛し報にや卽時に鼻であしらハれ幅の利ぬよすが子を持ぬ先親の恩有リがたきを知り須彌山猶ひくしと仰で天を拜セバ靑ミたる事古鄕の空に遊ハず頃ハ秋の夕暮なれハ一入あぢきなく我身にハ物うけれど繁花の事なれバ淋しき事更になく蟲の音とてハ辻賣の外聞へず入リ合を知らず鐘も同し町家へ響かず結句日脚の短きに晝數沙魚に釣らるゝ屋敷の

非番呉服店の宿下り其外馳違ふ人馬の音ス八百万ン騎の強敵かと眼を驚セしも此頃のやうなれと夢の覺るハ一ッ時にて國染の裾模樣青梅と替り在所なまりも拔左樣且又にて得意先をさばき上役の出世に隨ひ役がら直るゆへ人も用ひ商の當る時ハわれ一ト人にて儲しごとく思ひ下を廻る者ハ三分五リンと見下し親方の榮花も皆こなたよりと金が金儲るにハ心付さる事いすかの觜に似たり誠に子飼より幾の恩に預り闇の牛角の見ゆるに隨ひ商ひも心儘に許さるゝ故折〳〵高利もあり末長く勤なハ主從三ン世の緣金の釜に當らず共われ鍋にもとお蓋の仕合にもなるべしと初ハ其心にて勤る故方ン事仕落なけれと人間七十齡希也命長けれバ恥多し今ハ四海兄弟と思へど他人の笑ひハ怒に轉じ偏に梶原か讒言に逢ふか願ハね共親方の貧我早世も心元なし兎角善ハ急じや醫者と與家老ハ兀るほどよけれど手代の店鼬もたからず物にハ了簡のとりやうにて引負ハあじに罪許さるゝ貯なければ橫道にも立す本心に立チ歸れハ結句仕合に逢ふ譬身全し末に過分の金銀貰とて其頃ハ分別ざかりなれバ遣ふ事叶わす又身ン代に遣わるへし是金持チ金を遣はす鑓持鑓を遣わす辨當持先へ喰さる道理也遙〳〵離れ難き古鄕を去榮翫不足なき土地へ入こミ一ッ生不通の名目ハ無下也若い時苦をし年が寄て樂をするを若い時樂をし年寄て苦をセバ前と後と替る迄の事差引元直也後に囉ふ金を今囉ふと思へバ罪もなし手前の金なれバ商賣

にさへ二の足ふミ小道なる故高利もなし商賣にて吃を得るハ手代の常損徳ハ親方也われほどの氣りやうにて一ト箱二タ箱ハ遣わるべしとハャ心に奢バ遣ふに追付金銀なく蟻の穴から堤の破損隨分道樂に油斷なかりしが下戸にてハ内の事案し面白からず　抑　酒の徳といつぱ主親の恩を忘れ心廣く体ゆたか也いまだ宿酒醒ざるに小宿へふろしきをこかしあわれ二挺たちの猪牙もがなと一ッ醉の間に南劦の岸に着り見渡せバ安房上總迄目の届く東海を引受し品川の亭也花ハ櫻木人ハ武士傾城ハいやがるといへど此里町人ハ物詣ふでの序のミ多故七夕客と号し敢て用ひず只高輪より羽織と化す誹名客續いて侍のきくハ寺といふ字のゐんなるべし價下直なりといへども我家よりハ道法遙に遠し殊更此里の風義移らずかれハ勝手あしく得意廣キ者の来る所にあらず幸眼前に深川と言てはまり安き淵有リ第一身に綺羅いらず八幡山の二軒茶屋ハ舟付よく前に泉水築山を構へ四季の艸木花井飛鳥を欺き太夫三弦思ひ／＼の酒興ハ一ト間／＼にあり廊下ハ酒膳給仕の女子前垂がけにて櫛の歯を曳がごとし實に酒ハ喜怒哀樂いづれ離るゝ事なく少しヅゝ呑ハ大ィに益ありといへど過れハ赤し百兩の張たり笑上戸泣上戸思案分別小笠原前後も知らぬ高鼾顏に紅葉の腹立と宗旨／＼ハ分共同し流の谷川にて水の出端と傾城買止がたし急茶店に入リ四方の絶景眺れバ左リに三十三間堂辨天を賣洲崎誠の噓を佃島春秋共に賑かた椿長屋是

ぞ命ヶをせんたく島堅氣も碎ける石場新地堅石投にのる櫓下めつたにかけたがる土橋舟宿入らずの入り舟丁粹ハ粹を以てし不粹ハ不粹で仕かけ鵜の目鷹の目の仲町に表娘と外題を打長袖を着流し撥音高く三筋の糸を亂し音〆なる藝者と聞しハ春ハ花見夏ハ涼ミの舟玉となり大盡の趣向に任セ自由に飛歩行故躓らず共踊子也風俗娘めけ共大酒に會釋なく辰巳上りの大騷嘔町に等しく隣座敷の連弾こなたの張肘となり小判て面の張るゝなれバ全盛の上もり此道の奥義金遣ふ事是にしかずと随分遊ひ裏に入ルほど人の異見も竹馬の耳に北風なれど止ム時ハ止ムもの酒の上る程はかもたり手近にてハ内の用事足遊びにならずと是方北郭へ志し入リ口　漸金龍山に掛り雲間の彩一ト入の風情見殘し衣紋坂八丁繩手も打チ過キ中の町へ入レハ金銀無垢世界清浄蓮の座を〆貴となく賤となく常に音曲牽頭末社の空笑ひ天地へ響けに一ツ笑に城も角屋敷も傾くなれバ傾城とハ尤也夕陽碍らけば闇を照す紋所挑灯に覆ひ優美の道中たおやかに結れ深き柳腰炎天にしほれず寒氣にひるまず氷を抽素足の駒下駄褄の亂に久米氏を思ひやり夜店のけしきハ花の薗昔男に見せしなバ沖まどわセる菊の花會釋を含むすがゝきに頭を低て筆を持句案を巡らす風情もあり其外部屋持座敷持席を爭ふ其中に燃立やうな氈を敷手際を磨くたばこ盆大へも届く烟吹大行灯を栃にとり敵人今やと待掛しハ此里の目貫親鮫なるべしと是に心を止

れハ茶や舟宿の氣轉よく直に案内の座に付ヶハ臺笥の榮香違ひ棚床にハ掛物琴香爐碁盤双六將碁盤金銀飾る櫛道具禿がセわの對箪笥守を覆ふ夜着蒲團衣桁風を含めバ五色の瀧のごとし漸時移バ新造引供し打掛の座付キ位有ッて猛からずヅニ一ト度の笑價千ン金也中居か次盃初會祝言の學び裏に仕かける臺の物ッ遣り手床花事終れバ寢卷ながら大門ンの見送り馴染に隨ひ娯しミ多く情深し日ゝに通ふ長み手たてとハ知りながら親のみより嬉しく松の内方餅搗の繻伴迄見れハ袖留敷初新造などゝ責道具紋日も早く巡るやうなれど雪の日の居續ハ逃すべからず茶屋が見廻ひの重箱に數盃傾き顏付直す番花雨の宮風の宮ぱつ〳〵とする程あつちの幅ハきけと終にハ兵糧盡果する事なすこと左リまへ親方客の首尾あしく是迄不便の百倍に一ッ生覺ぬ恨ミを請親請人に苦勞を掛おもはぬ人のセわなどにて漸〳〵奴身のやうになり一ト精出さんと心付ヶハ元ト手なしァ、誤たり諸藝不足なき土地へ入こミ藝有レ連ハ初心也と笑ひ酒ばかり習ひし愚さと早く此酒止ずハ酒樽に等しく菰に包まれなんとかく見るハ目の毒聞ぬが佛と再び古郷へ立歸ると讀終り榮三郎心に思ふやう半ヱ門ハひとつなる人柄じやと思ひしがハァ、下戸といふハ聞へた酒ハ斗なしと雖亂に及バず世を大敵と見し故に今一ッ滴も吞ぬ仕打と見へたり是ハ半ヱ門が第一の所じやから酒の異見ハ是非有リそうな所を酒の事を何ンにもいはぬハハァ聞へ

た此愚艸を見て悟れしやなサラハ葉三も是を智識の教とし酒色兩道をさつぱり止是から本ン妻を呼子孫の事を思ふがよいと目出度春を迎ひける

初咄し終

安永九子之初春

四日市　竹川藤助

平松町　本屋喜兵衛

遊歸里念後

序

夫花開在田樂月明在檀子成書無序如有酒無肴如有餅無茶會歸橋子臨箸一小冊予請序予謾諾曰其句承知讀之甚雅馴也意氣慷慨以足施世上之好子今吾謂愚鹵賈一紙而說空口春者御婆々之談儀參之留主事干慰徒然秋者親父干紅葉見與曰虛言之爲一助捧組合点乎ヤツ　サア　コレハ　サアト其書開卷又不田分乎橋子曰大於御世話與逐以爲序者歟

安永九子正月

遊婦里會談

序

春はお婆〻が。氣をのべ〳〵に。談義まゐりに皺を伸す。あとへ娵子が足をのし。少し居眠る。その處へ。本屋が附込新版はこなそれ〳〵の。晒落にして。いま岡場處の多き事。さつまいものふゑたるごとく。中に取分賑ふは。北と東と南なり。鼎のごとくと云ィたきが。次第に西方盛なれは碇のごとく爭ひて。誠にめでたき君が代は。千代に八千代は。舟臥女の通名にて。それ相應のいきまを賣れバ。知つたる顔に筆を采る。作者の零餘子多く有り。とし〳〵彫す。小冊も能ひと惡ひは。見くらべて。ヨヲイ

賣人（うりて）にならしやむせ
安永九ッのとしの春

東都龍の腮に住
蓬萊山人歸橋戯に著

遊婦里會談

夫大通の通言ハ、深川より始る。通矢の能く通るをもつて。通といひ。通らざるを、不通といふ。故に大通不通ハ。冨ケ岡をもつて。根元とやいわん。傾國の通ハ。異名の通にして。吉原通。あるひハ廓通と呼とかや。その通にもあらずして、世を雪隱こうろぎのごとく。ひよい〳〵と。くらせども。かの男の一ッ徳にや。朋友したがつて。南鐐一ッ片遣ふ時ハ、翌日來つていきまをはなす。家暮なる者の聞時ハ。毛唐人の錢相場を立るにひとしく。分らぬを以て。極品とす中にも心安き通人にハ。東方の船臥、西方の馬遊。南方の隣波、北方の廓子。是らハ蓬萊山人の許に。鶴龜松竹とも諭へん今日も來ッて。いきまはじまり〳〵。【船臥】モゥ亭主ハ歸そふな物だ。【馬遊】ぶしやうな人だ床もあげずにさ。【廓子】長湯をするも程か有る。歸に足袋がはまるめへ。【鄰波】煮ばなでも仕て置かねへと。歸ッてきじめ汁を喰せるぜ、（と噂をいふ時へ歸橋ハすんけら來りかたて。黒ぬりこの春をべ[illegible]をさたせ錢湯方かへる）【歸橋】コレハみんなお早ひの。【船】さつきからまちやした。【歸】コゥ揃つての御出ハきのふあたり。イヽ徳場でも有ッたかね。【馬】お目覺のぶ

る〱から。どふも來たくてなりやせん。【歸】わたしもひまだ。今日ハ四人して。ぐつと新しい所をはなしねへ。向ふでわつちが点をしやう。【隣】ちつとハイ、のもありとをしだが。マヅ船さん咄しねへ。【船】何ンでも是ハ丁からがいゝ【廓】丁からするハ定石でわりい。案じの有る隣さんからがいゝ【隣】やかましなしに。口明ケをしやしやう。ミんなだまつて聞たり〱、去年の今ころだつけが。ソレ。おめへたなんぞも。しつて居よふ。米屋の吉が新田の歸りに。品川へ行ッて。秋しのが妹女郎の。荻野とやらに。馴染だ所が。こゐつが又あしくするに。のぼせたと來てハ。お里付の立聞もどきで。おれにいふにやァ、こふ〱だから。どうぞおもしろく。買ハせてくれろと。たのむから　安ひこつた。共くらひな事ハ。どふでもなると。連立つて行やした。まづ荻野が。けし炭の付た。燒ミそでも、喰つたよふな面をして。座敷の案じか、能ねへから。藝なんぞをむだに呼んで。ふりを直して見たけれど。はじまらねへと思ひなせへ。わつちもわるかつた。塩屋で秋しのをあげた。こゐつも。ふけいきな面をしているから。相應にかき廻して。はやく床へ廻つた所が。秋しのハ初會だから。おそく來るも合点だが。荻野も來ねへのさ。ふたりして。伸たり縮んだり。清玄凧の水を掬やうに。して。待つて居たら。よう〱荻野が來て。ミづ点といふ口上で這入ッていふにやァ。ぬしの座しきへナ

ぜ行なんせんといふから。おめへの來ようがおそいから。今まで横を勤めやしたといふと。ぬしも見かけに似ねへ初心だねへ。品川の風を。しんなんせんそうだとぬかしたから。モウいま〳〵敷なつて。コレ此新ハ。大キな口から。大キな事を。いひ出したの。おれをだれだと思ふ。石町の隣さんと云てハちつとけぶつてへ。荒神さまだ。とこの臺所でも。松薪を焚かれた事のねへ男だ。なんだまだ。小切レ賣の化ものを見るやうな。形りをしやァがりながら。大キな燒直しをいゝ出したが。よしにしろ。おきにしろ。そういふ事で。女郎の出世ハできねへぞ。向ふが初心で。鱚長いもの器なら。それ相應に賣て遣るこそ。公界の道のけへどうだ。に。此ごろァノ子の咄で聞ケベ。百番も洗て來た程。おそく來て。勞症をやむ雛子をミるやうに。けん〳〵して。どぶさる所ハ。狼のひいばゞァほど。鼾をかくといふこつた。あの子もあれ程ほれているし。ちつとハそこをなんとかおてらへたのまれて。納豆をかき廻す氣になつて。勤てくれてもいゝ物だと。いつべいに。おろしたを。秋しのも聞たそうで。妹女郎の。おろされるを。おも入れ胸にはり込で。わつちが床へ行と。悪じくしたといつちやァ。なんだ。年ン季のぼたもちの。くさつたように。取あつかわれたけれど。初手に吉が事で。通をいゝ抜たから。まさか亭主を呼ぶの夜ハくれども。晝見へすともうたハれす。てうち

ん持の糞をふんだ面をして。歸りやした。その暮ハだれにも。ぐつと明やしきにして置た所が。惡事二三里を走るとやらで。誰いふとなく。藏まへきつて。隣波が秋しのにふられたの。イヤつき出されたの。洲が出來たのと。ぱつと沙汰になつたと思ひなせへ。そふいふ事を聞くと仕廻のついたかんしやくが。ミけん尺のやうに廻つて來て。なんぞ仕かへしをして遣ろうと。額から火の出る程かんげへた所が。いゝ案しが出て。まい日三ンべへ喰ふめしを。一ッペヘ半くひ。內に斗ッ廿日ほども居やして。日南へとつてハ。土龍の身をなげた程も出やしねへから。ひわ茶の年ン明ヶといふ色になりやした。もふよしと思つて。ひでへくめんをして。三十兩こしらへて。あつちへいつた所が。六ッ時分さ。秋しのか坐しきへ居れると。ものをもいわんか。何も喰れんか。たはこをも呑ますに。おかしく氣のぬけたやうに。秋しのがつらばかり見ていると。秋しのも色ハ靑し。月代ハ長し。何か氣のぬけたやうなつらだと。思つたかして。見て斗ッ居るからそう〳〵にして。床へ廻つた所が。いつもの通り來ねへハさ。おつ付ヶ九ッをもつかふと思ふ時分ンに。來ていふにやア。おめへハ久しく。お出なんせんといふに。アイとばかりいつて居ると。又秋しのがつらばかり見てゐると。おめへハどふぞしなんしたかへと。いふにのりこんで云イやしたハ。おめへの旧にも。わづらつた

と。見へやすかへ。何をかくしやしやう。どういふこつたか。忘れられねェ程。おめへにほれやしたけれど。おぼへも有ろふ。アノ通りあしくしなすつたから。此すへ逢ふ事もなるめへと。思つている内。ふら〳〵と病付やして。たん〳〵能くもなく。きのふまで寐て居やしたが。又是ほどに思ふ。ワたしが心を。一ト通りおめへに。はなしたそのうへで。おつに有らふと。それをいひに來やしたと。泪をこぼしていつたら。わつちが様子を見て。むごひとも思つたかして。それほどのおこゝろざしを。どふしてわるく。思ふもんで。有りんす。と。いふをさいわいに。何ッとかいふ所を。はやく仕まつて。これほどに思つてけふ來やした所が。おめへもそふいふ御心なら。是ほどうれしい。事ハこせへせん。是ハちつとばかりだが。心ざしだとおもつて。なんぞに遣つてくんなせへと。鼻紙ふくろから三十兩を出して。たばこぼんの引出しへざらざらと入れて。見せたら。そふいふ事ではごぜへせんと。そうこふする内。八ッをぼんとつくを聞くと。どふもわつちやァ。歸らねへけりやァ。ならねへと。のこりおし引さうにいふと。まだいゝのなんのと。駕を云付に行ッた留主に。今の三十兩を。樒の葉といれかへて。外にじゆすを一れんと。髪の毛を入れて歸りやした。あした人を廻して聞た所が。わつちが歸ると秋しのが。床へ上つた所が。何か有るといつて。ふとんをまくつて見たれば。念珠と髪の毛。

ヘットいつて倒れた所へ。若ひ者や。勝手から。來て。くすりを尋に引キ出しを明た所が。しきミが有る故。秋し野に氣をつけて。だん／＼のようすを聞て。ざしきのかつこう。幽靈に。ちげへねへといふ沙汰になる。その身も。幽靈に。まくらをかゝれしたと。氣にしてぶら／＼病が出て。日を重る程わるくなりやした。評判が江戸中へしれて。やつとわつちの耻ハ。とり歸したが。そこで壹ッ。かんげへを付やした。コウして置くと。この女郎ハ死から。そこを殺すも大通で有るめへと。人をたのんで實ハかう／＼した事で。ゆうれいになつて。行たのだと。秋しのへしらせたら。肝を潰して。どふぞ其人を。連て來てくれろといふから。行た所が。命の親とか云つて。ほんの色客に成やした。先生こいらハどうだろう。【歸】よし／＼再考十八ぐらゐな物さ。是からハ誰だ／＼【船】さし馬遊さんだあろう。【馬】郭子さんまづ丁が聞てへ。【郭】どうも丁ハ。新しい事もねへが。此頃逢木屋の金扇が。身うけの沙汰を。聞なせへしたか。【歸】金の叓なら古ひぜ／＼【郭】サァその身うけの金の叓にやァ。大ぶ句のある事さ。ぜんてへ。金扇が色客に。里曉といふものが。久しくなじんで行やしたが、去年の暮。逢木屋の亭主が。ァ、いふ客を取つてハ。しどうためになるめへと。不揭た叓を。金あふぎが聞出して。云ふにハ。親方さんでも有りンすめへ。わたしが呼び申ス客人に。どうしてあン

な事が。有んすもんか。そういふ譯なら。わたしやャ。二階へハ上りゝせん。勤もしいせん。したでまゝでも。焚んすといひ出して。あとハも先へもいかねへのさ。そういふしようちになれば。八人の新造も。油げになるから。よう〳〵かたが付やしたほどの事だから。此きやくも。相應に錢ハ有るし。金あふぎがほうから。すけハするし。大がいにしていた所が。こんど旅人の次郎兵衛とやらが。身うけをすると言ひ出して。中之町をも。引かせやした。サァ金扇ハもちろん。里曉が胸がもめ山で。死ふの生ふのと。色〳〵した處が。さすがは三千人に壹人の。金扇程有つて。里曉にいふにハ。ぬし百兩こしらへなんしわたしが百兩こしらへんす、しかしその金も。じきに返りゝすが。能ふ有んすれバ。ぬしのために。いゝ事も有りゝすと。都合。二百兩こしらへて。里曉も身うけをすると。手つけにうたせたハさ。サァ内じやァ。らんちきの山でせるめへ事か。小道具市の。口をよむように。した所が。旅人ハぎり〳〵千二百兩で。身うけしやうといふ。里曉ハ千五百兩で身受しやうと云ふ。亭主も金扇が惚れて居る。里曉が事でハ有るし。千五百兩の方へ遣ろうといふ。中の丁きつても。里曉が方へ行くだらうと思ひの外。金扇がいふにハ。今まで里曉さんを。色客のようにして。身揚りまでして。よび申んしたハ。去年の暮うちで。せきなんしたばつかりの立引て有んす。里曉さんの方へ行ッしては。行

すへかつまりんせん。二度のつとめをしても。するノ＼は次郎兵衛さんの方へ行ッすと。点が違つた故。旅人へその事を通した所が。なる程。こいつは二百や三百は。出すめへ物でもねへが。それでは。金扇を呼んで。くらしやうがねへのなんのと。少し乘地でいふから。なに。もミくちやになるめへ事か。またどうしても。里曉が方へはいやだといふ。内では千五百兩の方へ遣ろうといふ。とうノ＼。身うけは。じやミせんを引ても。出ばこそ。金扇は又の勤をしても。次郎兵衛が方へ行と。四萬六千日の物日から。中の町へはじめて。出やした形りが。古手かへしのひとへもの。白羽二重の下ヶ着。黒なゝ子の帶。髮のさしものも。ぐつとかるくさして。八人の新造はいつもの通り。兒衷にして。その日の客は今の次郎兵衛さ。こゐつが一ッぱいに承知した所を。金扇がいふには。こんどの立引で。とふもくるしくて成りッせん。わけは。新ぞうの形やなんぞを。いつもよりは氣をつけんしたから。二ヶ包ほどの。借金が出來んしてあすから。中の丁へも出られんせんと。泪ぐまれて。なんの。そのくらゐな事で。氣をもむ事はねへと。二百兩よこしたを。里曉が所へ直に遣りやした。手附二百兩はかへるし。つがう四百兩出來たから。里曉が内にやァ。金扇がみと。けんどんやの。はしより外にやァ。ねへ所だから。何やかやをこしらへて。内も相應に仕直しやした。なんとおもひなさる。いゝようにし

て。身うけをやめるのミならず。身代まで。こしらへて遣るといふれ。まことに高尾このかたの。傾城だといふ事だが。先生こいられどうだろう【歸】かんしん〳〵。是かられだれだの

【馬】わつちが賑しい所を咄やしよう。この夏。新宿へ行やしたが。なる程きつい物ッさ。まづずつとざしきへ通つた所か。床の置もの。掛ものゝようす。能しさ。出た玉も。十兩づめぐらいで。座のようすもそうおうにして。床へ廻つた所が。まてどくらせど。來やせんから。少し腹が立つて來て。懐中のはさミを出して。蛔のすそを。だんせんに切ッたり。丸く切ッたりして居たけれども。來やせん。また枕をして居た所へ。だれか來て。から紙をそろ〳〵明ヶる。わつちがおもふには。座頭の客の。門ト違かと見れバ。女郎さ。こいつれ。おかしいとおもつて居たれバ。そろとはいつて。から紙を又そろ〳〵立。ワたしが側へ來て。寐入ッたか。ねいらんかと。尻目にかけて。たバこをおよそ。十夂程のんで。ワつちを少しおこした。能く寐入ッたふりをしていると。能く〳〵見すまして。寐息をかぐ。こいつ品川なら猫だが。この土地じやァ馬か知らぬ。馬なら何を。くふだらうと。考へている。またこきうをかんがへて。烟草をのミ。能く〳〵寐入ッたと見すまして。枕もとのかミ入に手をかけ。だん〳〵中から出して。金入の壹兩貳分を。手につかんだ。サァおきて。つかめへようと。おもひやしたが。もふちつ

とこれへて居たりや。だん〳〵仕まつてゝ。又たはこゝのミ。ずつと立やした。もうつかめへようと思ひやしたが。どうであいつが取つたもんだ。どうしても取り返されると。これへて居たりやァ。床の前へ行て。何かかんがへていやしたが。今の金そ。かけ花生の中へ。さら〳〵と入レやした。よし〳〵。今の金ハあすこに有る。金さへ有りやァ女郎をまくらさがしに。するでもねへと。思つていると。またから紙を明ヶて。下へ行やした。モウこれへられねへから。飛でおきて。花生から手へ明ヶると。中から金や銀が。ざら〳〵と。よつぽど出た。殘らず。つかんで。はな紙袋へ入レ。また寐ていると。女郎が來て。いふにハ。寐なんしたかへと。いわれて。やう〳〵おきた風をして。今おもひ出した。急に歸らねへけりやァならねへ用が有る。駕を云ィ付てくんねへといへば。はやひのなんのといふを。どうも歸りたくて。駕にものらず。そこを出て。かぞへて見たれバ。十三兩貳分貳朱。ふたたびそこへハ。行やせん。先生。ころられ。へんだろう。【歸】そんなにほめた事でもねへ。是からハ。船臥さんの番だ。【船】ミんなのいきまを聞たれバしきりに遊ひに行たくなつた。【隣】おらもなぜか行てへよ。【馬】【廓】かわつたこつたおゐらもさ トミた〳〵。はなしをして居たりしが。ふしぎやつなまくさき東風ふくと。次第にねむけいやまし。終に四人ハ寐入ける【船】サアへゐりねへ。爰だ〳〵 ミな〳〵小松やのくゞりを明はいる【女ぎん】お客だよ。オヤ船さんか。お久しいねへ。サアミなさん。

お上ッなせへし。〔船〕見通しハ明ィているか。〔ぎん〕見通しにハ。客がごせへすおもてざしきへおいでなせへし。四人ハ表ざしきへ行〔馬〕是が四けんとやらか。〔廓〕てへげへなうちだねへ。〔隣〕船さんおなじミは居るかの女ハてうしさかづきお定りの通もち來る〔き〕船さんへ。おくまさんハ。見通シへ出て居なせへす。とふせうねへ。あなた方ハ。だれぞいゝ子を。呼びやしやうね。〔馬〕〔廓〕〔隣〕どふともしてくんねへ。〔船〕そんならおくまに逢たうへで。あいつがうちの子でも呼べふ。でへぶにぎやかだの〔き〕大一チ座さ。藝者衆を六くミ呼んでさ。おくまさんも。あすこにさ。〔船〕見合セて來ひといつてくんねへ〔き〕そう申やしよふと下へ行吸もの肴鉢もち來り今に來なせへす。女郎おらくおきちおいねきたる〔三人〕おきんどん〔き〕はいんねへ。さかつきの段よ古風のとをり〔船〕モシおめへなんぞハ。すミに斗リ居すと。こつちへよんねへ〔三人〕あいとばかり少ひざをよせるまた見通しニて拍子木の音する〔船〕狂言か〔き〕アィこんど幕が明やすと。定九郎場さ。〔馬〕久しいもんだ。どこでも忠臣ぐらをするやつだ。女郎三人ハ下へ行キ少し酒事有〔船〕この酒ハ火がへへつた。料理ばんへそういつて。口をかへて來てくんねへ。〔き〕取リかへやしやうと下へ行。船臥ハおくまが逢ニ來ぬを。むしやくしや。思ひいろに。外の女も女郎も。狂言をミに行。來ぬ故猶よごうをわかす〔隣〕船さんおなじミの所ハ。とんだおつだねへ〔廓〕出し物もいゝが。一ッてへ內の仕うちが。違つたもんだ。船臥ハいよ〳〵せいて手をワれるほどたゝく〔き〕なんでごぜへす。今のおてうしかへ。モゥ出來やす。〔船〕コレわいらハ。こふして置てどふ

するのだ。この日のあたる。せうじの中に。あまぼしじやァあるめへし【き】やかましくならんかセと思ひそはへより

シこふでござへす。見通しの客人が。やかましくつてなりやせんから。ツイ爰が明きやした。そこをばひとつ。くミワけねへ。おめへさんでもござへせん。【船】側へよらずと聞へるわ。こつちの耳からこつちへ通ると。高田の不二の際へ出るわ。そのくミわけるも氣にいらねへ。雪ころがしわ。手がつべてへ。通ころがしじやァそんがたつ【き】イヱサ。アノ。てゑゝが。ひか〳〵を。二ッさす客人で。ツキおそまつに成やした。【船】まだこのあまわ。いやァがる。なんだ。ひか〳〵を二ッさす。合躰の雷でも落わしめへし。二本ンざしがこわければ。いてう屋のかばやきと。居酒屋のでんがくわ。さかさに立ッて喰にやァならねへ。この鉢肴のざまをミろ。かれゐの煮びたかしらねへが。しぶうちわの塩出しを見るやうで。どうして是がくわれるもんだ。【馬】コレてめへか坐しきをまわす女中衆か。能く聞けよ。並らんだやつらの面を見ろ。親ふねの雪隠から。ロッしよくを見る。眼つきをする。中のがつらの長ひと來てわ。堀ぬきの足代に。火の見の繼穗をしたほど有る。その次に居たふんばりわ俄雨に菰を着た背むしのようなふうをする。あれでも女郎で賣れるのか。うぬらも爰へ出されるのか。とやの夜鷹のこんれいに。悪魔ッぱらゐを見るような。われからさして。氣にくわねへ【廓】火入のたど

んもむしがいゝ。らかんのあたまで吸うようだ。【隣】せんたく箸もむねがわりひ（といざこざたいふを聞付おくまへ見通ゟ來）【くま】船さん大キな聲をして何ンたへ。【船】大きな聲をしたがどふする。うぬに逢たそのうへで。新ぞう呼ぶとも呼ぶめへとも。さつきに云ッて遣つたのに。今迄つらも出さねへが。いめへましひあまじやァねへか【くま】（ハすこしむつとして）來ねへハわつちが惡かつたが。あつちハとんだにぎやかだよ。こんな淋しい事じやァねへ。人のいゝ客人さ。武士でやしきで侍さ。あんまり蚰をいゝなさんな。そんなに。あまだの川だのと。かんやの夜うちじやァ有るめへし。【船】なんだ。うぬまでが向へなをる。ぶしがとうする。陳皮がどふだ。甘艸でも本藏でもこうなつちやァ。がつてんしねへ。モゥ是からハ。やぶれかぶれだ。（と鉄看と硯ぶたをけとバしうでまくりをして）この屋てへに。居るやろうハ。耳の穴をせつけへか。しやヽしで堀ツて聞きやァがれ。爰いらの。でへ地にな。かくし賣女をうらせるも。誰がおかげで置くとおもふ。おゐらが壹つどつこいと。ふんどしを引つめれバ。幗釣り艸をしつかりうゑて。いぬ引ころの小屋ァ建て。ぺん／＼艸の住へにやァ。こうふぎの藝しやを置。それに大きなつらをして。硯ぶたと。おらばかりさかづきなんぞか。喰ハれるなら。大門通か中通りか。藤木がうちのねづミになる。こふ云ッちやァてへそうだが。洲先の升屋むかふでハ。孫四郎でも太郎でも。中洲の四季庵。上ハ手でハ。三ン橋亭に甲

子屋。芝居の事なら二文ッ字や。樽三ぶでも。百川でも。寒と土用にや見舞をつかふ。コウいふ。しがねへ。へんちきな。四軒のうちへ來て遣るも。おための御の字が。御で來ルに。つき上りのした内じァねへか。〔歸〕ハ。きんノヽ金平と云。そうしア見て居たりしか。よくねいりし四人の内。わけて船臥がうなさるゆへ。ゆりおこす船臥さん。おきねへ。どうぞしたか。船臥はおきてあせをふく。三人もおきる。〔船〕遊ひに行てへと。おもつたせへか。四軒へ行ッて。いざをいつた夢を見やした。〔廓〕わつちもさ。〔隣〕おれもさ。〔馬〕替たこともあるもんだ。舟さんが頭取で。小松屋のゆめを見た。〔歸〕コレ有るまじき事にもあらず。遊里へきざす四人のこゝろ。四軒へ行しれ。卦のおもて。通なる者を柾といふ。是ぞ則。まのさ夕なりと。

やつぱり梦れ。さめにけり

蓬萊山人歸橋戲作目錄

東西南北　遊婦里會譚　出來
きつるしほや　通仁枕言葉　近刻
見番大改　富賀川拜見　近刻
藝者折紙　新當女意盡　兩面摺　近刻

右追々出來

金枕遊女相談

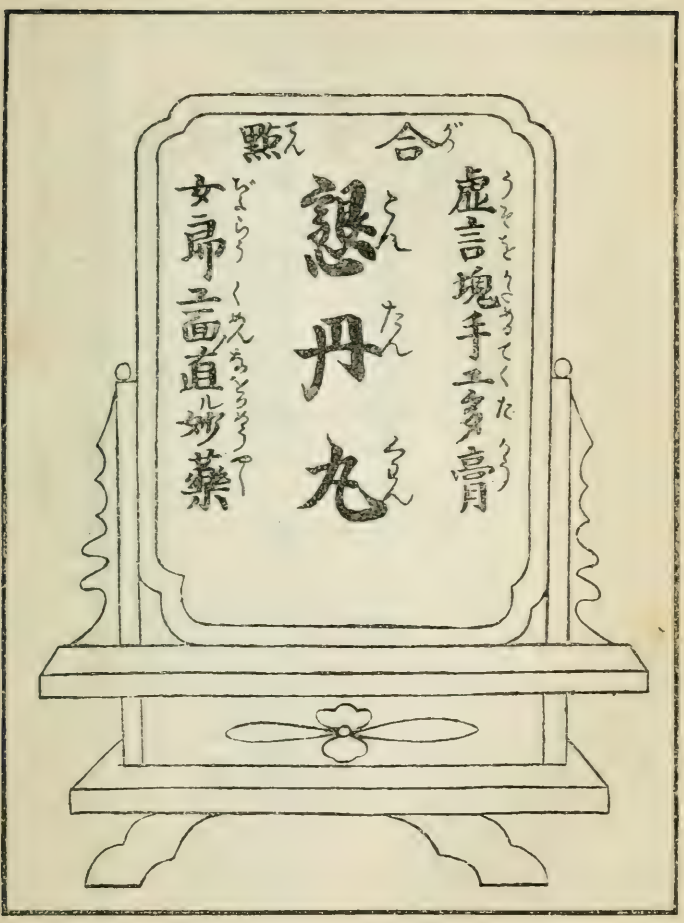
序

夫青樓廓曰漢李延源傾城無實雞卵無四方と諺に言人も乘り心能寶船新造年增さん方も此良薬をもちひたまへ、誠に見板に市をなすこと疑なしと夢中の先後則金枕遊女相談と題號し初笑の一興にもならんや御贔負のこ願ひまいらせ候

調合所　今日登參上通身揚待　間拔安穴製

取次所　會家裏待樣重女　よしなや助兵衛

同　得戶勘當下町　小丸屋大藏


合點
虚言塊手ニ多ク膏
懇丹丸
女郎ニ面直ル妙薬

一第一客の氣を取事專一なり阿堵けなくして座敷をおんぼりととりまハし床に廻りすい付たばこの時しりめにかけてにつこりとわらふ事春のゐびすといふ所彼の人の九十九度よりたつた一どがおもひとなり勘當まではおもひやられたり大のはたらき万に用てよし

一床に廻り暑さ寒さ抔言ながら肩に手をかけ□□などすこしのせるしうちむかしよりありたしようのゐんといふところふるめかしきハかのかいちやうにきまりのれいほうちかふよつて御ゐんむすびのしつぽり物万ニ用てよし

一こちらへ寄なハしよげた客にハ少しさからひてあしゝすいきやくならバ□□のあたりを□□□□といふやうな身にてわが身を□□ながらこちらへ□□なハ戀風のふうりんといふところちん／＼もので一ツきまもよし

一背たゝき喰附捻るハ契話の種成り□□□□□□□の悲じゆつとひとしきとりにてよろこバせるしうちこどもにおミやといふところまつだけしよつたおたふくもとこのひやうばんどうも／＼ハ万に用てよし

一初會推客にハ野暮らしくミせかけしたからでる也くちをあまりきく事あしした〻おとしはなしかうたじやうるりなどをこのミうぬほれをいわせるしうち御ゐいかといふところふしづ

けハくりあげもちあげまたハころがしあげたりさげたりとしまのこうしやしごとのじやうず万に用てよし

一裏に通者ならバ座敷にてすねるやうに少し氣をもたせとこにてしつぽりとするなりまたきやくすねるときハはなうたなどいふことあししざしきにてすねたゆへふらるゝかといきすぎあるべしてくだこうにわらひをもやうしきやくをあやなしすこしふざけなバおもしろさもありなんまたきたときハさしきからそばへよりさゝなどすこしすごしてひよくれんりとゆふところわりとこがおきがゝりしづかに用ひてよし

一みハ裏三會めにハはやくおくるべし二三日はあそびのしゆこうおもひ出しうかれる物なりそのところへみをミせなバやミつきになりそふなことなを又おやしきさてハ町のけんじんばんとうなどがしやれだしてハてまへものとハ心もちがちがひだんなをあんけつにさせるしうちまりのこうそくといふ所あしをちかくあげつめさせつけのぼせハ御ぞんじならんそふするまでハおてがら〳〵ちやくにもちひてよし

一野暮客か房様しんござのしよ會ハしよげるなりそのときどふやらおまへにハ氣おきがなふてあちじやといふやうなことにて□□しめかの□□□をわたさバきやくおちつくなりこれらハ

ときの氣どりと心へべしにこゝりといふ所あぶらこいハゐつぼかへゐんきよさんに用てよし

一大一座ハあしき客に取當るかさてハともの人をきやくにとる時ハしんぼうだい一につとめてらさぬ様にすれバちや屋の氣をさんじじやうづといふゐミやうにておのづから工面のやまひへいゆふすべしほとゝぎすといふ所こいをこがれきく人見る人こんもうならんやおちのきた所万に用ひてよし

一仕舞を附ること物日節句客をあやなしあるひハやわらかにぎりづめにしてたのむこれ女郎のなをうる所にいたりちや屋のよろこびひやうばんよくすればおのづからくめんのなをるミやうやくさうでんのじゆつなりしんそばといふ所もりかへにおとをつけやすよしかへよろしく用てよし

一振舞の一ト切客を直させうとおもふときむかひじぶんしやうきやくとミへる人にけいしやをねだるかさてハざしきをながくしてかの□□□さいちうにむかひうけるやうにはたらくべしていしゆがたのめいわくはのそきからくりといふ所やうだいがかハりやす折ゝ用てよし

一廻使に氣を付客に無理なむしんをいわすなそにかけるなりわが身をさびしてどふぞこのごろ

といふやうな事ハくるしからずはやづきのあわもちといふ所こねどりのしうちにて廻しのくちへはいるなり（ヲマイタチガキヲツケテクンナイデマワシカタツモノカアテコトモナイ）ちよびと用ゆべし

一客をおくりしときの仕打ハおしきせの通りミへる内ハミおくるべしふなやどへゆきてかへりにおり／＼あとをふりむいてミることなごりをおしむしうち蟻の一けつといふ所千丈のつゝミもかのもちまへのあなより也つねに用てよし

一泥酔客ハぎごハなり聞分なし只何となしにかのくすり一りう用がてんか一トあせかゝすればねつさめることミやうなり氣どりたい一にあやなしにばなといふ所またうかされるときハしほちやにて用てよし

一酒にうぶさる人ハ酒亂ににたれどもとふりよしたゞさわがしきのミなりくちをふさぎいろ／＼するゆへにくぜつとへんじてされがししその手くだ膏にハたゞいつまでも／＼とくちをもつてくちを□□□こと氣ながのしうちむごんといふところびぜんすりばちわ□□ぬ内ハ大せつに用ゆべし

一ぼうだら客ハこちらでもゆらの介といふしうちしやう氣をわすれずちやらかんやうなりおさかなといふ所たこのあしよりもつと□□つく所を用ゆべし

一客酒を呑過すときすこししかるも氣どり也もちつとゐなよといつきなんすのかん所ちん〳〵もののうまいものおこのミあらバかいてしんぜるした心あつくなるほどつけこむしうちかねもつゆめといふ所かけさきれだん〳〵とる夜のあけがらすかおふ〳〵がもふせんとなりしほ屋のたねまきおらがわかいときや土平がきいてあきれやすびんのけばかりのこすことぢやくに用てよし

一客を叩音茶屋の女中と船宿に氣をつけること身をおもふなりそのはたらきなくれなをまたきやくのたばこなりとすいつけあいきやうつねに心がけべし大かぐらといふ所ざつきにぢよちうのたいこふなやどのちやんぎりまをあわせとりはやせばきやくもおかぐらにのりかしまおどりのほうねんなりよがらせ用てよし

一馴染の一座あらバ客をよくしいちざをたいせつにあいきやうすべしつれのとりはやしよけれバきやくおのづからのぼせるなりまたきやくにいひにくい事つれにたのむすしもあるべしやうじやうぐひれかつぱばことい所用じんのためきうのまにあふきやくならればかんじんのはこ入大せつに用てよし

一馴染にれ淺ぎにやきかけほうかいりんきなど少しやらかせバ遊びのじやうつよくミへいきな

りふだんさうといふ所ひやうばんにならバやきもち屋からしりがきやせうゑりもとにつきおり〳〵用てよし

一情ハ客俄に病氣の時かいほうかんやうなりもしむかいにてあいてもくちのかゝるまでもかいほうすれバちや屋ふなやどきどくとおもひきやくハ猶よろこびわすれハやらじ後にくめんのミやうやくたち所にまハる事つぢうりのはんごんたんといふ所御用あらバ此間においでのときおこのミのありそうなしゆこうもふるのをびのしめごゝろしつかりものに用ひてよし

一恍惚たかほハおもハせぶりのやうじやうぐひしつこくすれバあだになる客をよくよりほねがらミになりながくほやうするたのしミハこれこんたん丸のミやうやくしめこのうさぎといふ所人なミの上をはしるやうにもつはら用てよし

一虚言ハ常なり何かちよつとちやづけと手水といふしゆこうのあやちハいろ〳〵これらハよりところなくなじミかなんそあい山ハはたらきのことにてつとめのならひなれどもきやくの氣を取氣にさハらぬやうに手くだこうにてすいよせるハぢしやくにてつといふ所きやくにすかれるやうニ用てよし

一口舌は馴染重る時のほせた顔にて手くだをこしらへきやくの氣にもあたらぬやうにおかしくおもしろくするこれ氣どりにてあそびのじやうつよくなりなをのほせてゐツゞけとなるこんたん丸はろせいがゆめといふ所はなミにましたりかんのよい所ゆあがりのちろり一ッ用てよし

一身揚は上客の機嫌を取ちがひしかあしとをきときしんぢうぶりにふなやどまでむかひにゆくこれらは手くだこうのミやうにてあしき所をなをしひつつきあふたらしゆつせのたねなるべしはりこの天ぐといふ所としまのはなをひしぎ氣ミのよい所もちあげ／＼用ひてよし

一無心は言ぬにきしたりたゞ客にすかれるやうにすべしきやくほれては氣をつけるもの也ねむがりのしんぼうつねに心がけ心中ぶりはたぬきねいりをしかりこそぐりおこすしうちたまらぬ／＼やミのよの野ミちといふ所おさきまつくらになるほど用てよし

一名差のないときまはしの懇丹丸はおなじミだけにはたらいてだすことありそのときゝやくのおてもとよりきん／＼せんせいといふしゆこふあいかたがてんかまたしはんぼうきやくにはけんばんにあるともちや屋の女中がのミこミ山にてあいかたのてくだかうにはまはしがほね

をおりやしたなんどゝ心ミにべつたりとやらかしてこハいかほハしよしらぬふりもくるしからずふんまゝいりといふ所まことのことならミな負したをぬかれやせう一くちものにほうやくよりごしやう大じにきやくにばかり用てよし

一客(きやく)に氣(き)をひかれ又客の氣を引いきぢはりあいこれあそびのきよくなりてくだかうのはりつよくやわらぐともよハミをかくしぬけつくゞつゝきやくも名あるやつならバくめんのなをるめうやくとくんずほぐれつお手がらしだいこんたん丸のめうやくにてふうふ中をあざむくしうちてうずばちといふ所かねのわくのハうそであろじつをくらべまことをしらバかねハさておきなんでもかでも氣を□□(やり)ばなしハ万に用てよし

一羽織藝者(はおりげいしや)とかくあしもとを大せつにゆきふりかながあめのあとハおとしのうへならつへでもつきておはこびなさいころばぬやうに用じんたいせつなりはなでもふつたらせうばいにさハりやせうぶりもとにつきでき心なきやうにざしきをつとめおくゆかしきハちやのゆちやわんといふ所あいかたのおてまへきれいことミことにつとめてよし

一抱付振(だきつきぶり)ハ大つうといふしゆこふげいしや役者のミをするしろむくあるひハぢまハりきやくをとるときのはね也うぬぼれきやくに一りう用てくちへらずのしほやきれいごとなんどゝいつ

はいにしやれのめさせるしうち三ミせんと云所つん／＼のまがちがいのりぢにかゝられ足つきの人ぎやうとなるべしまくのうち大じにちよ／＼らを用てよし

一客を振手工夕宵れあやしききやくに用ゆべしゆきミと云所いきなミにうなづきさむさをわすれのちにひへこうたらどんなひどいめにあおふやおゝこれこたつなぞ用へし

一呼出しハ貰わぬ物なれど大じのきやくいさゝかのことにてとをざかるかくぜつのこだわりを取もつかなにかわけあつてちや屋からちや屋へもらるゝことありきやくあいかたをもられれてハやる也とめおいておもしろからずしかしあぢになりいちわになをしているきやくもありてミぢかにせうならもらいにきたをきやくのミゝに入ずして出てゐるちや屋のかミ合をくどきさしきハおやのきうびやうにてひきやくがきたといふやうなことかなんぞへんなことといふてさがるハはたらきならんやたいこもちハかミなりといふところにハかにそらがかハりやすかミさんがたいこたゝききやくのごろつかぬやうにわれもぬれことに氣をきかせみやくをよくとりゐりもとにつきたてつけもちゆべし

一客に出てゐる所へ馴染の客きたとき女中しらせるなりはなにてふうとばかりあいさつすべしきやくきをわるくするものたとへいろきやくたりともさハつかずおちつくべしのちにわけい

ふてあひにゆくこととくるしからずきやくあとのきやくのうハさをとふともはづかしいといふしうちにてたゞよしなよといふよふなことにてよしあしのうハさたしなむべしおかしくあじになるものなりみゝを引といふ所大晦日と元日がならぶやうな物御ことおほいハしんぼう所ちよんの間に用ひてよし

一客何やら腹立ありて外の茶やへゆきよぶことありせんのちや屋へしらせるハおしきせなりせんのちや屋からたかつきといふしゆこふにてむかいにきたらべきやくとならぶことあししわれもはら立ありともそのかほをミせずしてとも〳〵とりもつてかへすやうにはたらくべしくばりもちといふ所もこゝへばかへすよのならひなじミのきやくハふくじゆさうよの中もよしわれもよしあら御目出度や〳〵

右者妙薬の能書　外に指合禁物有り

△工面の病おもりし時の横合

一無心ハ母親をすぐすかさてハはゝといもとあれどもはゝのちやうびやうといふよふなことにて馴染のきやくになんぞのかいまがりになきことといふてきかすまでにてむしんをいわずあさぎにはなしておくその後きたときに一ざありともしかけなしにでゝおやかたへかくし十のじ

をまげておふくろのかたへおくりやしたそれでなじミばかりにでやすなどとはなしかけれバ物になるやつハあいさつがしれるなりいそぎむしんいへバあいさつよくともなをざりにしてにげるもありなんミやくをよくとり用ゆべし

但こんなことにてなじミがつかぬとわか身になんびやうけることありくひあわせの用心大切也

右の妙薬にさし合

一塞ハ懇丹丸の第一にて善悪の二ッなりしたひもまでもとくしうちかるはづミにやらかせバてらされはぢかくことおふしなじミかさなる程きやくのかたよりなんぞといわせ心づかぬかさてハはづかしいといふしゆこうハしらけずおくゆかしくこんもふならんや女のてよりきやくのおび□□ハつね也又ふざけにてうちとけることもありなれどもたしなむなりさし合

一客を振こと氣さんじなれどもくがいをわすれなにをかつとめんなをまたきやくにせんをとられしときはぢといふやまひにさし合

一性悪客ハにくいものなれどもしまいをうけた女郎しゆのぬすミをうるにくらぶれバあしといふのもいかゝ也ちでちをあらふににたりさし合

一床に廻り客に難悲を附てさがることありまたべつのものをだすハ茶やのならひなりなんひを

いわずきしよくがわるいかよく／＼そるにまいど一ぎしたといふやうなことにておとなしくさかるべし客も心へある也きやくにはぢあたゆれハわれもはぢかくの同理にあたりさし合

一床悋ハ商賣を身にしミぬゆへかきやくのとりまハしあしくすればなじミつかぬなりほうばいしゆのうがいミづやたばこのついでにおちやハ氣食ざし合

禁物

一悪智恵ハ鼻紙袋なとほめて客のふところをさぐるハゑりもとのミやくをひく也万一あしききやくにとりあたりなんぞいひかけにあいそんするはぢかくハいかにトウジクキンチウロウ

一初會ハ勿論てうずにゆきてまとるハぶすいなりきやくあじな所へいきすぎある也なをまたねどころのおしごとたばこやすミかしてとこよりいですべたのくせになかまどうしろふかへよりあつまりきせるにてさやうしなどとりながらてんでになじミのうハさよしあしをいふてそゝることかはそせのほうかむりのしうちこれでかへりがありそふなものか山のかミが御たくせんもむりハないヤンマスケシロウ

一無實ハ仕舞をつけた客ハきつときやうけおもしろいしゆこうあるべきはづのところちよんのまをうるハわづかのことにめがくれきやくのきたときまおとこをしたやうにうろたへまハる

そのくせかいばなしかなんぞのやうなきやくにでる物ふな宿か客けとらバおさらバのたね也それよりも物日しまふきやくなら大せつにしてせう／＼おもわせぶりになんぞしんぢうだてしてミせる氣ハなかばしかてまへの田へミづひくハゑてかへヌマカヤツカイ

一執心ハかならずなもの名代にきやくをとられ大のはぢなりそれに何ッそ利口そふにあのこハぎりがわるいとあしくいふわがしうちあしきことをたなへあげて大わらひたなにおいたぼたほうとハちとちがひやすヤンマボレンタレカヤツカイ

一押の強ことハ名代に出とこにつかぬものとやらいへどとうせいハなんでもかでもびろふどのはんゑりよりいせじまのさいふのゑりもとゝいふしうちとしまをまかしいろ／＼のしりわりあらなどいひきかせわがきやくにとりたがるせかい是ハうつとしいそふハとらすキンチヤスケヱムニアガク

一欲ハ仕舞を口說やうやくきやくにとくしんさせ女郎のくせから二一天さくさんやうきかせしまひをへんがいわたしにこうしておくれなんどゝいひやすくあがるとハおかしそれよりなミ風なしにとこはながさえそふなものあじなききやくもあるもの女郎のしうちよくとうしくきやうこめちや屋のひやうばんくめんのやまひおのづとおもるたねとしるスケシロウニマタクロウ

一口滿(うめこぼれ)ハきやくになんぞもらふときハおしきせのとをりちや屋のかミさをたのミ禮(れい)をいふいふくれさしきへきて出きやくにミせるハつねなりそのしるしなきハとりこミしやうぶにてうけかうのはやひきやくといふしうちきやくあちになるものこゝろさしのまちかひハ音八かはなの下武ほんぼうとの御ことか御しよさいのないヲカノシロガスヶエム

一贔屓(ひいき)ハちや屋を替(かへ)る事ありきやくをひくハちや屋のきらひなれともあいかたなにかのぞミあるときひいたきやくハてまへのきやくといふものおなしやうなことにてちや屋からよハれて出たきやくハちや屋の客(きやく)といふやうな氣ミあいありちや屋のためになるか花でも出すきやくなれハちや屋を一ばいにしのめしさしきしのむすめか女中をくどきいろごとのげいしや名(な)ざししてもらふしゆこふのミこみ山にてきやくにけいしやすゝめてわれもあいつちを打直(うちね)をならしおとこげいしやよふときハ名ざしすることあしゝきやくあじにいきすぎあるものつねにこゝろかけべしあいかたハしらぬかほにてかのげいしやなさしさせるきやくのまへにてあだつきいろめづかひハよしなよたゝさけなどすけてもらふハこゝろでおがんでのむわいのふでおもしろくたのしみうたのもんくもあじなところありちよんのまハ御めんよヤカヲセカセ

一皮羽織(かわばおり)ハ相形(あいかた)のしうちをにくミとこにつかぬことありはらたつかほもミせずちよ〳〵らにて

きやくのほうよりたきつきふりにふりのめすなりそのわきまへなく氣霊(きれい)とこゝろへわがくちから人にいひきかすハこゝろへちかへならんやかのいぢきなきハふられたにあらずやきれいとハてまへかつてとおぼへたまへまたやぼきやくハあいかたのてからふらばしらずきれいごとかあるかへしきよくにまよひともだちをまき人めをかくれてしのんでかよふこゝろハかのことをこのむにきまりそのこゝろをしんぼうしてかへるになんのきれいとハまつかいうそつとめてかへされ女郎のミちもたちふかきちきりともならんや氣とりあるべしトセンヤツカイフケル

一立(たて)て引(ひき)ハ有様(あるやう)なれどもすこしいぢばるににたりまことにたてひきあらば客(きやく)の居(ゐ)るちや屋にてミあがりのげいしやかいとでかけわつさりとはなまきちらしきやくのつらふむへきにさにあらずとこぞておろしてやろふといふのミにてまくがとをらすくやしんぼうにまよひてくらやミのはぢをあかるミへ出すことをわきまへずよく／＼かんかへおもひあわせジロクチカヽケニカマス

一浅智恵(あさはぢゑ)ハ欲(よく)にひかれめつたむしやうにむしんをいひ出しきやくにのせられこのごろにもつてきやまなんどゝやすうけあひにちやうされおさらばになることとそれとハしらずかんばんもよ

しとうぐもそふいもふすこしハこりそふな物とミな白おしやんすけれどもあにきとやらいふ
ようなところへおくるにおわれよくどふしいでしらけやすなぞ〳〵ことにいひだしてあいさ
つをきゝやらかすやうにしんぼうし給へシンデンマタシロウカ

一跡先見ずハ心やすだてに人の座敷へゆきふざけまじりになんにもないなどゝいふ事ありくひ
ものたしなミハつねに心がけなをまたなじミのさしきたりともはちさかなにかんざしなど入
るハあたまにはしをおき御ぜんをすへるといふはんじものかつねに心懸たしトンビタツホニ
スケシロウ

一浮氣本田銀きせるなどハ座敷もおもしろくいきにしやれなどいひのめしちよ〳〵らにのせら
れなじミふかくならバもふせんの下おいかんことしんこのかぶとほうばいしゆの氣かねもや
うやくこのごろやすミきやくのなじミもそろ〳〵つくかとおもへばかしもとのするさまたく
らがへもひきしいものいやはやきのどくながらわびこともとなりのかミ白あいそがつきやす
もふかまハぬがはじまらぬうちおたしなみケンシロウニテセイサヲモチリタンヲカヽ

一嗜ハ一座の客に執多附べからずねんころなかをわるくする事ありすけべいのたなおろしハ
としに一どですミそふなもののさげおうのしんもつハはぢいるべしとこにつきじきにてうづに

ゆくことはしたなし少しのうちはなしのまをみあわせおりよくゆけバきやくの氣どりおつにあぢなところありきミあいのしうちしんじつにじやうつよくほかごとならずひくてあまたのそのなかとくちでいわずげいでしらせるおもわせぶりつねにこゝろがけたしキンチヤニボレンワヲルノシロカ

一始末等敷(しまつらしき)ハ叫出女郎衆(よびだしぢよらうしゆ)のきせるもつたとげことなんとやらミたことハなしさしきへ出るとじきにてをたゝきなにかとおもへバきせる壹本かしなハおしきせてをならす三ばさうなりまづはじまりやしたがざしきにてみゝくひはなしあるひハかほミあわせてわらひこちらむいてしたを出すことありきやくいきすぎにてきしきしらけるなり又ハゐてものゝとうじんことばをつかひきやくにあふむかへしにあいめんぼくのはいだわらおさとがしれやすスマガマヽデブンヲカノシ。

一邪見(じやけん)ハ年寄客(どしよりきやく)あいかたの氣にいらずしよけるなりふなやどミかねてぢよちうにいやミからみなどいひしやれのめすきやくハてらされもらひわらひにおちやをにごしはいふきをたゝきあふぎはちノヽにてきしきのまをあわせよふやくとこにまハる所があいかたねもせずまくらもとにてはらさんノヽたばこうちくらひゐるいんきよきやくあきれてちとぎよしんならんかな

どゝかたしやれをいへハヲヤきでもちがつたそふさとゝふやらこうやら氣ちがひにしてふすまごしにこへたかくよびかけいつてもよしかとしやれなどいふとなりさしきのねてゐるところへゆきあだつきながばなしするきやくたぬきねいりも大あくびとなるまでもかへらずてまへばかりかよそのおしげりこいちやのなかへミづさすやうなもの氣のきかぬしうちばからしいヤンマスケシロウシチヘイヤツカイ

一兼帶(けんたい)ふりハ我恍(うぬぼれ)惚なり位(くらゐ)に有附(ありつ)所がしやうにんごうにハいかずしよにんといひ久りつしんしてかんばんたおし夜更(よけ)とへんじかミのうへもしかけもばけるなりなわかけでふちころせ〱はこねよりこちらのちんぶつはぢをはぢとおもふかしグルヤマトハチニカマセル

一自在(わがまゝ)ハ何(なに)やら氣(き)にあたりざしきをつゝとたちしやうじにあたりろうかをふミたて二かいよりとおいでとすゝめとこにまわす女郎ぢよちうにしかられふしやう〲はしごをあしをとつよしたへきてふなやどゝとちぐるふてゐるぢよちうのきどりハきやくのまゐへゆきあつちへちくふミならしとこへきてゝをたゝきたてたばこのひとちやをけたゝましくたのミ御ふせうながらおくれなんどゝすねひとりごとにあんどうのともしびをしかりいま〱しいの千八百もいふことありこれらハくぜつもふることもしらずたゞぢれるハほねなしとミへたりやすいや

つねつからふめやせんうちへしれたらせつかんにあいやしやうコツハリマヤデセビロウ

一無粋ハ床にて外にはなしないかしてためになるきやくのはなし大のふできなり　きやくあいさつにこまる これハよい

きやくたおかしくもおもしろくもない　きやくもちよ／＼らをつかひはたらきものじやとそやしかければおちよふしにのりがきよいかとおもひまたはなし出すちとおぬけさんとみへたりこけのくせにかの一ぎのときだきつくていにてきやくのきるものにてゆびをふくことありきやくそれとしりながらいわゞおはづミかとおもひやりわさとさげすミゐることをしらず大のあんけつかミ壹まいのおしまつハおはづかしコゲンニカマル

一心氣なしハ座敷にてたゝミさんをおきねづミなきをすることありなじミかさてハためになるいろきやくしろねづミのきごろをかんがへると見へたりきやくにミせずうちの二かいにはらさん／＼ねておめざめのときそうばんのぶつちばつちハさとういりまめとひやうしをあわせおもちひなさいなを又てうずにゆくときつれさそふてせんちんのかけあいはなしハさへやせんおさとかやすいレフタロコタレヲセヽル

一浮和の空ハ大じのきやくをしくしりなきつらまなこにてふなやどをくどきようやくもどしてもらひなにかしゆこうのところうれしさのあまりかとこへまハりてもほうづきなどをならし

ながらかの一ぎをやらせうハめづかひでうらいたをにらミふしあなをかぞいるしうちハあまりはかなしおせわのおれいにふなやどまでかぶりやしやうあきれてものがいわれやせんヲカノシロスケヱモンニキンチヤボレン

一座がくいつきつめることちわのたねなれどもごうぎなことハなさけましりにいためるにたり大のわるふざけなりきずをつけそのうへざんそうハ手にとられず氣ミよくおもひて又かへりミ給へ女の仕うちか金たしてきずうけるハかさのりやうじにはなおとすやうなものかたさきのはのあとくちびるのぶとくちあざのとびちらしばんとうにミつけられ膳時につらをむかれあぶらをとられくらの二かいてせめちやうちやくそのときハこうくわいしごくにくしミもあらんやわかミをつめり人のミをしれシンタスケシロウ

一闇思若ハなにやら氣のもめることありてあをきりのぐいのミぼうだらになるハやひなりわれおもしろやゝかしましやとなりざしきからしりがきやしやうあとハきつねつきのはなれきわをミるやうにせう氣をうしなひふんばたかりねてたかいびき客にねごかしにあいまたハあさまハりのといやねいりをとられちや屋のわかいしゆちんぶつのほうねんほうしやものとうたわれきり見世へさけられうよりしやうをつけたいマゴヱモンヲフカスマタタレヲカク

一無躾(ぶしつけ)ハ酒亂(しゆらん)あるひハあらそひ事ものゝねうちさてはムのうハさかんじやうたかきはなしふてきなりきやくのきをうかし心をまよわすあそびのざしきにへんなりなかにミたをしやをミるやうにきやくのきせるたばこ入またハ人のかミのうへくしかうがいのねうちあてゝミしよやすいかたかいかとよしあしをいふてあそびにするのちハひぢりめんのゆもじまでねうちしてうらやむなによりかよりてまへたちのねうちやすくなることをわすれきやくにさげすまれることをしらすヤンママタクロウ

一身揚ハ商賣物をたゞやるなりそれにハなんぞかすりあるべき所ミじやうハうちからせかれ人の目をしのびいろきやくにあひはだかになりあしをつけられにげたところがとりもどされくらがへとなるまたおもいれにゆきてねんもあきふうふといふところがつまらす一ねんすけろがはじまりちのけのあるうちハあぶないものゝあきちやなるまいなどハおふてかへタレヲカク

スケシロウニボレン

一諺(ことハざ)に人の娘(むすめ)あるひハていしゆもちかへりしんざんでいしゆなどハとりくるふあれどもそのあやちをしらす大(だい)のつうさん御そんじか御めん〱

一座敷(ざしき)を明(あけ)るハ大(だい)のぶすいなりちとおたしなミびりすきのやきもちきやくにハこちらからもし

つこくざしきをあけずつとめのしんぼうかんやうなりはなしも・おつに。げいしややくしや・しばゐ・とかくいきをさり・じやうるりぼんの・ぬきばなし。さねもりさんハつよい・たゞのりさんハすいじやの・こひかをなさる・よしつねさんハ・いくつも□□□□・きついおすきの・いくさごとハ・したがる・お人さん・かわはをりの・やうにもない・きやうだいどうしでも□□そうな・おもひきりのよいハ。かるかやさんのやまのだん・二けんぢや屋へすい・いきのきハ・なかばしか・ひさしぶりじやに・ちよんいきのぐいがへり・ちよびとい
ふ所・これからやねぶと・でかけ・　さぶり・めり・などをすこ・きゝの・これいろハ・おすきか・二あがりにつゞミを・いれの・どふなるものと・しらべをバ・しめつゆるめつ・さつさおせの・せんどうしゆう・いきちよん／＼の・たいこもち・くちくせの。てれツク／＼デやらかしのめし・おちをこつちへ・ひつぶるひ・ずうづと・いつはいに・せいとくの・しほやをいゝの。つうとゆふ身て・しやれぬかバ・はかないものの・あつくなつたと・しなだれかゝり・ずつとのぼせてきたならバ・そうれとらんと・はぢきかけ・またおちよふしか・おきにしなとれいふものゝ・こんたんハ・てくだをつくし・ふわりとのらバこゝなかして・大ミつのませ・そんなあんけつ・はづませよ・いたちのミちきり・こり／＼させよ・まいて・

やろふか・つき出してやれ・八分するとハゐてに・ほのじ・きやくハいづミと・わき出るものよ・日でりのやうじんあめやうた・してやんしてどふしたのふへこ〲ぺんあいのふあゝいのふ

右の能書差合禁物能ミ愼たまハゞ斷なれども氏なふて玉の輿といへり同氣相求の道理に當り善を以善に近付惡を以惡をなし情を以情を加ゆ是智人のしる所戀を以戀する時ハ如何成貴人大祿のへたてなく緣を求寵愛せられ出世の種ならんや果報ハ客と寢てまてとやらなをまた此やくほうをしらせ遊女相談に會する者也

一懇丹丸之傳授

薬方

一船宿
一茶屋の娘
一相形色身
一口舌

一虚　言

一床

右六味地廻丸之調合
此薬方に加減

一船宿がとがめきしよくをちがひづつうつよくむねわるにならバかわばをりのつうといふところぢよちうのかしもとをくわへやうだいをうかこふべし

一茶屋のむすめにてげんきおとろいなにやらものおもふかほにてうつら〳〵とめばかりひかるならバむしんをでつかくもりかけはをりを一ト切くわへべし

一相形のいろ身を用ひのぼせつよくしげ〳〵あげるならバちや屋をさがりふむしたおとしるべしそのときハいろミをせいほうしけんたいぶりのつん〳〵ものをだいにくわへべし

一口舌があたりねつをふきうハことをいひふたけるときハくぜつをさりしつぶかをくわへねかして一トあせとりかけるなり

一虚言ハすこしさしつかいあるべしいひかゝりになりくちをとぢられあいさつにしたのまハらぬときハちやかぼこにぼうだらをくわへべし

一□味ハ強してかたはら□しいたミふらつくことありこれハすこしもおどろくへからすべつにおけがらすとほの〳〵をせんじのますればあさなをしになをる也

但シ

ミやくの取ちがひハ落断之學者曰

但

さぢをいたゞくといふ所あやまりました

△こひハたきのぼりやなんといふてのぼると云よ

我が戀ハ玉門□□のたけ
　身をいれて
登りなれにしだんばしごかな

初花尋之人給者言吏也綿蠻黄鳥止于丘隅といへり故に枕を泰山の安きに置てこそ神心の養ひ八百十丈の氣血を順す然りといへども八万四千の欲心日夜隙なく夢にだに能業の来れかしと枕に敷し寶船の一枚繪ミなめさめの古歌一首并に鷹三茄子思ふ業ハ必ず夢に見る物と古人のおしへにたがわず其裏模様染出しの五寸三寸ハまた上り地黒羽二重江戸ハ紫鹿子染鶉縮緬

八丈も皆友裏やかくし裏當世本多風流も戀そつもりてふちとなりけりろせいか夢の榮花をつらね千年世を延る一時の樂是ならんやおしいかな早寺〻の鐘のこへ耳にひゞき目れさめてむッおきする渡世のこんたんぐわんにしくとく九九算用五分と壹割夢の樂丸もふけかいへいかいりつ龜井算相場割の安賣夢物語奉御覽入候相叶大笑〱

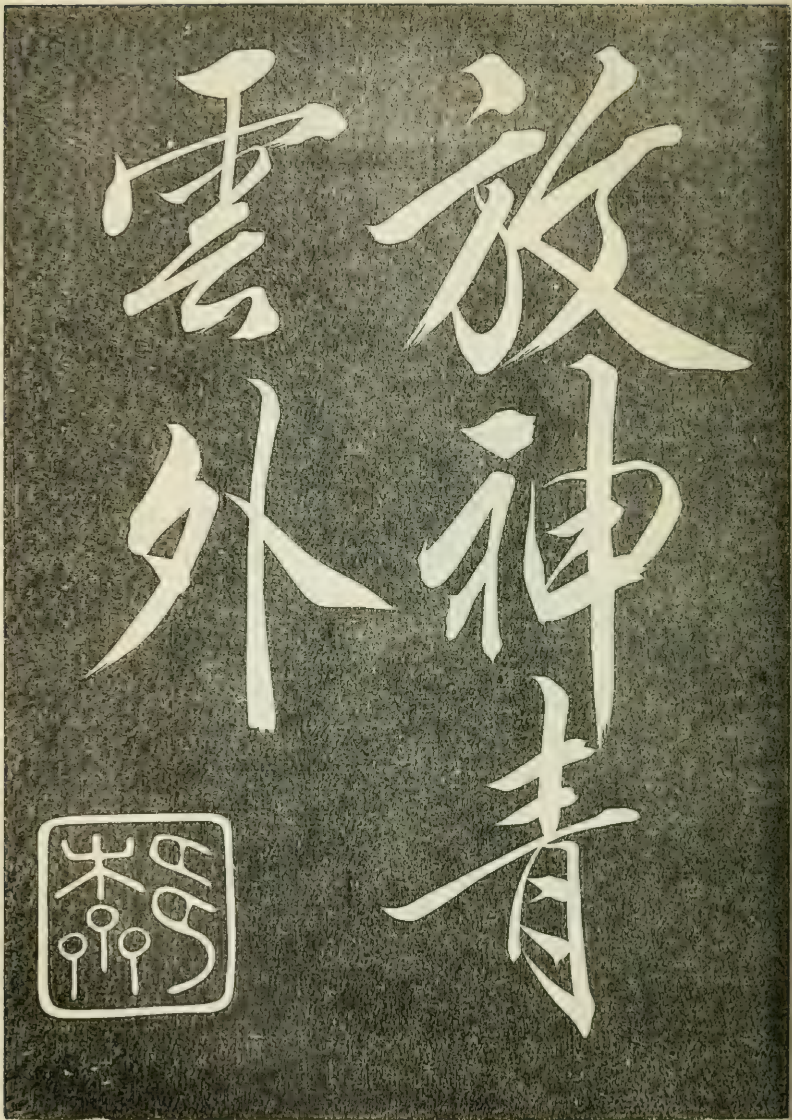
狐の葉

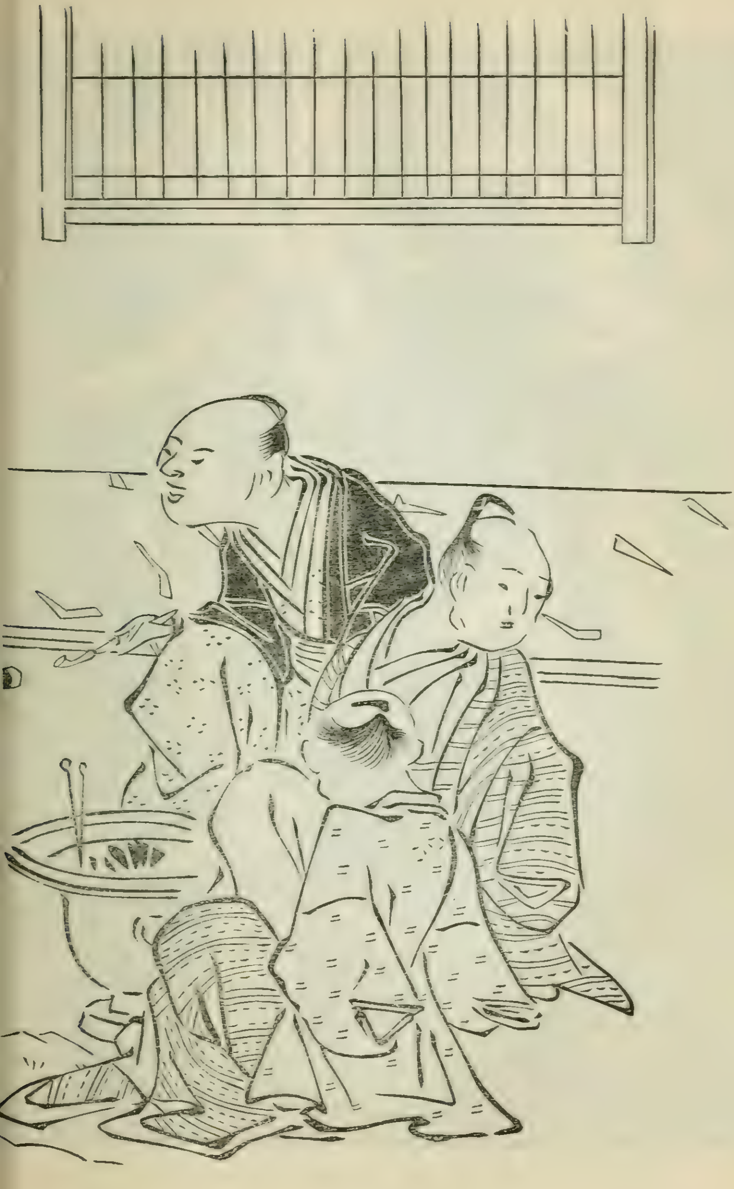
叙

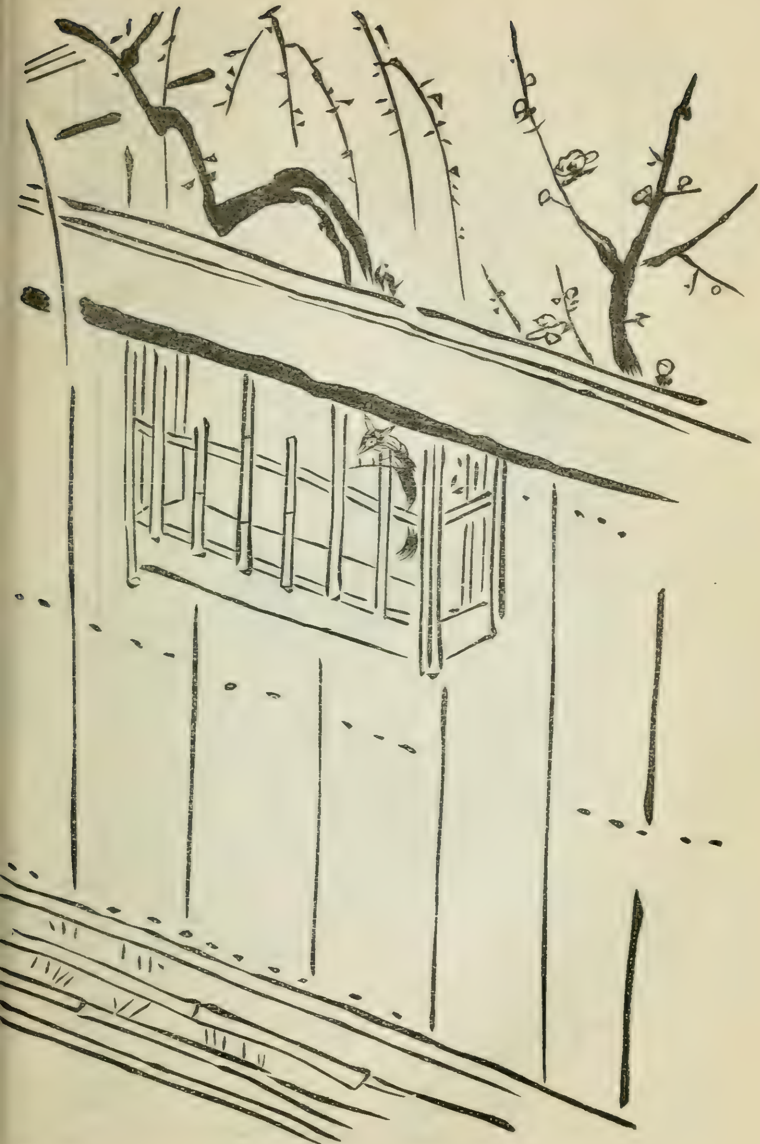
狐藻を把て躊躇す人ゝ是を見て狐を欺嗚乎虚實爰に有哉

依てきつねのもと號く長ゐはひれ尾の出ぬうち草をかき

わけ露を滴て筆をすゝきぬ


夜神清
雲外





人品に佛有ハ衆生あり衆生あれハ山師もありいろ〳〵のきしつさま〳〵の人このもかのもとはなしけるそのなかにはしらかくしをつく〳〵とうちまもりあれハいかなる人の繪姿づくるわの事ハしらねどもかゝる美人のよにあるべきやと亭主にむかつて申ければあれハわれらなじみの女郎なるをあるひとたわむれにかゝせおくれりまだ〳〵最上ハこのやうな事でハなしときいて新五左とびたつばかりこれさへあるにさいせうとはいにしへよりのびじんかすもかぎらぬそのうちにきたならぶへきかたもなし西施かきなじり小町がまゆようきひがくちびるかくや姫がはなすしこゑんがこしつき衣通姫がいせうへきこなしてんにんの天くだりたるといへともいきゝよりとふきか蘭の香なりたかくハすぎし露香がおもかげともいハんげにここん無双のそのすがたこよのふあてやかなるになにとやらんこゝろうき奴といへは　金鷄先生笑味をふくみされハこそめあき千人つうをうしのふねんぶつ巾いたつらにいろをねごふのじようありおやじハ老後のおもひ出ありききかけしたるそうしまいすいてうこうのねやのうちはこうきんぜうやうらんじやたいとめ木のかおりよもすからいつゞけや〳〵そく大一座おつききまもすつほんもかたなならふるくるわの中かむりハきねとたいじんのはなをふらせるとき風になびかぬくさ木もなかりけんこひとなきけたの中の町うちそはかしきもののことにうかごふ女郎しのふきやくむつことといろ事さ

ゝめ事手びやうし三味せんことのおとぢくちけんさけしやうこのこへさいつおさへつくみあか
しよるひるとなきはんゑいの靑樓のほかにまた有べきにもあらずすいどぢりまでこみ大門おし
わすられぬ人くんじゆのまことに錐をたつるの地なしとさもおもしろくものかたるそれより　樂
みすきの日　ゑようにもゑいくわにもこのうへのなしたれしも遣れんとおもひ　いなんとそおもふ
はづきをてんじせいをやしなふもいろさとなりめくらさへあそふもの多しさてあそれぬ人のつ
きのなきものよろずにいみしくともいろこのまさらん男の玉のさかつきそこなきこゝちぞする
といふとおりすへてくるわは世事のしゆぎやうの場にてあそひし人のあそひしほとのはたらき
もいてき武士町人にいたるまでつとめさきによつては此所の出會にてしゆじんの用むきもとゝ
のへなんにかきらずむづかしきも事ゆへなくすめばちうもたちこうも立せうばいすしのちよせ
いともなれはつかひし金もそんにはならずまかぬたねのはゆへきなしそれに此樣なところもみ
すにきつてばかりいるものもあれどもひよつとそのやうな事にていくまいものでもなしその時
ひげくいそらしてすみに目をもつたるもどんなもの人中を見せ度愛子にたびとの親心はこゝの
事又いつたやつのものになれどこでもこゝても持てはやされ藝の身をたすくるの道利いやしき
もたつときに交り詩を賦しうたをゑいしてもてあそはるゝ中に喰て糞してねておきてめつたに

金をほしがりてためたうへにもためたがるなんにするかわしらねども禮にも時のよきにしたがへと聞しわきも事によつたもの酒呑す肴くわずにごとりねて白までいきてなんのゐきなしとゐいぜしもかゝるハをや云ハんゆく水のながれてかへらざるがことし何ぞ存命のよろこび日ゝ樂まざらんやまた男女のみちハ人のすてかたきものにて老たるも若も智有もおろかなるもかわるところなし世に生れたるものいつれ此心なからんほとけも此種よりぞ出給ふ男ばかりにても世は渡がたかるべし人ゝ物心をしりてより定る妻もなきうちハとかく彼(か)の迷(まひ)のひとつにうきなをながせとも遊ふ人ハそのうれいなしぶら／＼やまひの根をたつハはやり神より御りせうありたゞ女を無用の物といふはあやし男女の道ハ人りんのことわりなりとものしりがほにいへハハきより

評人の曰　江戸見物の二日目は猪牙(ちよき)との人もあるにわき目もふらすりよくにまどふ人の淺ましきかねもらハかね持たけのもちまいもありまたぎりとふんどしもせずにハ居られまいうき世にすめはこそ金もいれ月雪花に引かへてかんなんしんくのものすきハ此人にして此やまひ人間わづか五十年とハ云へ老少不常のよのならひ金のかしてハさかせばあり命のかしかりハ出來すみのをきふしハ金の番心からとわ云ながら金もち金を遣ハすけつく金につかわるゝの道利かくかねにむねを痛(いた)め切金(きりかね)に足をはこび余りの事にやいつそひんならこふしたうき目ハせまいとのこ

うくわいもおかしこれをおもんみれハひんぷくとわかわれどもしんろうはひとつなり　人ハおもふほどの世はへるぞかしたとへいくら金をもつにもせよつかわれぬものならバ人のものもおなじ事ためてじやまなもの石瓦におなし置てせんなし遣てこうあり金のいきほひを見て尊をしり人のはたらきを見て智をこゝろみ女郎の仕方を見て眞をさとるとべんにまかせて申けるしりについて　女郎贔屓　けいせいに眞なしと云ふたのハむかしふられし人のくちおしさのゆいごんぞ哥にもこひせづは人ハ心もなかるまじ物のあわれも是よりぞ知ると何にもせようわさを聞て諸事に行たらぬ人のことばなり女郎とて人情をしらぬ事はあるまじ皆親兄弟のためにこそかゝる流のみともなれうまれながらの女郎あらんやそのもとをたづぬるに或ハにようぼまたハむすめたつとき有いやしきありそのとき人情を知て今女郎となれハとて忘べきはつもなしいかにつとめのみしやとてもさりとハむこひ云やうなり云その人こそあさはかなれ萬事つへともはしらともする人にハつらひつとめの其中にいちゐをぬきてもおくるぞかし頼もしつくはさもありたし女郎にしよさいハなけれともあたし男の人心ふつつりはつたりいたちの道されとも女郎のかたにてはけふかあすかのこゝろまちたよりのなきハきがゝりとおくるちつかの玉章(たまつさ)ハ紙くす買(かい)そなかめいるけにいろさとのことわざにふゆにけて泰立かへるその客ハころもかへとてまたに

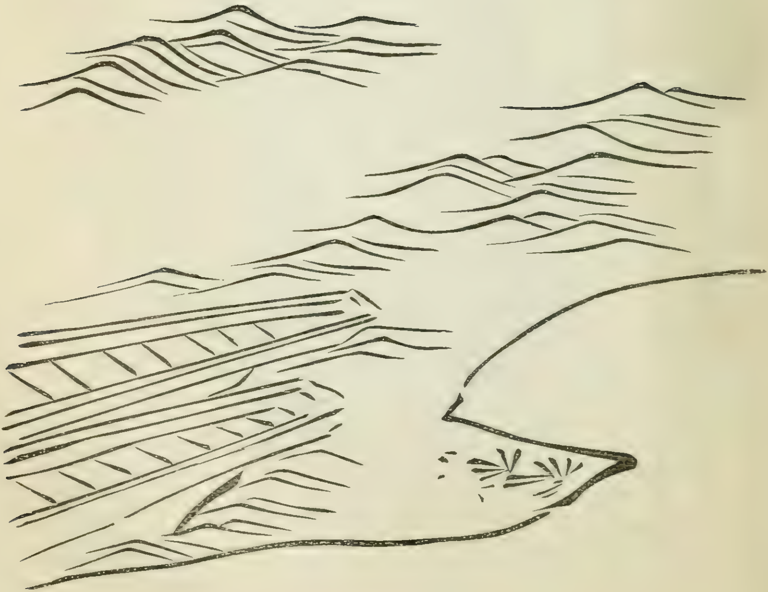
けにけりとやらんもおしはかられてきのとくなり女郎の客にむしんハよくに貰ふのにはあらすやむ事なきわけなりされハ女郎に金持たるはなし女郎のまことなきよりも客のまことなきか多しとかくわさわゝハ下からとやら女郎もたび／＼こりたるものなり初會うらもに夜中ねすによくつとめた女郎へぢつゆきたけれとも三會目はいた事とはづしうらのとき若者へ遣つたしう儀かおふきな事うらをつけれはぎりハすむとかくうら迄かきれいなとゝこんじやうのきたなきをたなへあけきれいこかしのふとゞきさよしはらに遊ふ事かならす法有たてひきあり來人鼻のきづかいなく至る處しらみのやつかいなしさて法をやふれハかみを切れはちをさらすと云へとも人ゝ皆不實をせしゆへなれハうつたへたるためしもなくゆするへき力もなしくるわのおきてもさる事也女郎の習にて余多の人に逢事なれハ逸ゝ實をつくしかたし然といへとも誠成人に何そあたをむくうやう有へき此さとのおこなひハ酒をもりいろをこび人ゝのうつしんを晴し百のうれいをわすらしめ月雪花の相手となりて悦しむるものなりされとも金て女郎ハしゆうに成なとゝハ聞ても腹の立そうしたこゝろさしゆへ女郎も誠しからす遊ハとかくしんていつくすへて又こふ有たしすてにいつひんいつふすなハちこうたいをしり一貴いつせん交情乃見とむへなる哉時めく人にハなひき安したつときとなりいやしきとならねハ人の親疎ハしれぬものたゝあさ

ましき人心也あわれけいせいハ男のよしあしによらすこうひひんふのゑりもとにつかす其外實事心中事ミな人ミのしるところそれに何やちかころハやしきものハもてぬなとゝめつたむしやうにかたちをやつして來ル人ありなるほと見た所ハ町人にて手の舞あしのふむところ諸事心をつくすと云へとも思ひうちに有ハいろ外かにあらわるゝとやら武士はさむらいのきしついやといわれぬものなり是等は屋しきの町人となん云なるへしもしうたかわしくば町人を武士にこしらへてミてもしれる事うたての人の心やた人ハみめより唯心何武士町人によるへからす誠有ここそたのもしけれすへて彼らかなりゆきハかむろのおさなきより女郎となりてくるわをはなるるまて千辛萬苦のやむときなしされハ口によつてはつとめも出來不出來も有あへて客をそまつにするにてハなけれとも其日に行當りし人の不仕合人　あいゑん奇緣も有物大一座なとにハいろ〳〵ありおをひ女郎のうちには氣に叶心におうするも有物也かならす捨へきにあらすしかしくるわの習成はこそとこの馬のほねかも知らぬ人にあわれはだをふる女郎の身をもおもひやりてあわれみまつ紋日の一ト廻りもかひて事の實否をこゝろむへしミな女郎のまことゝ玉子の四角あれハ晦日に月が出るとの雜談りつはに口にハたいけんのはけともこゝろにほれられたと思へハこそ來人多しかならすまことなきにあらす目をねむつてもかへる吉原逢ハどふしてこふし

でとのあんじなんそ一日も此處なくハ有へからすと廣言拂て云出すを石部金吉たまりかねてすゝみいて扨ゝおもしろき御咄しを承候物哉それかしハ何にも不存候得とも些つたなき事御咄し申さんと云ハていしゆを初一段可然とハいへともいかなる事をかいゝたさんと目引鼻引しける所へ金吉しかつへらしく出もせぬせきはらいなとして扇をはちつかせなから夫しんたいハつふ父母にうくあへてそこないやふらざるハ孝の始也と承るあつたらからだのもみくちやは生れも付かぬ片輪者されとも身ハ是世中のすいとミつからせうし淨瑠璃三味せんそうたいゆふげいをこゝろかけななの下にぬかみそ汁をくいなから我執になき奇語を咄事にたわむれ物にあらそひ分別みたりにてとくひつやむときなしあしたによしわらにあそび暮にしなかわ所さためす惑あるくものはな落る事しんぬ多少そまことににくむにたへたる白癡者なりつみ不孝より大なるわなしあまつさへうつとのむとのなくさみにむた錢をつかひ晦日の闇夜にもこりす紗綾縮緬にくるまり物見遊山をつねとし日待己待にいたつてハたいこ末社のことく或ハけいしやにろいして酒宴ゆうきやうたとへん方なしけに世の諺にすいハ身を喰とハよく云うた物果はくめんもト人までひとりてころんて泣奴かなを淺ましくわか身なりけりも久しい物世の中に藏を見て居る中か人間人の金有ハ猶魚の水有かことしと云しも目の前ひんのぬすミに戀のうた七重のひざを

八重におり千變萬化もしつくせバついにハ毛せんをかむり又ハこもをかむるかなしみこんきう
より甚敷ハなしおもふほとの世をへるとハかたたより遠おもんはかりなき時ハかならすちか
きうれいありほとけもみせものとなり質草と成いわんや凡夫においてをや今の人唯錢のミこれ
をうしなへハまつしく得ハ富錢のおふきもの先に少者後に居るセにのたすくるところあやうき
も安からしむへし死するも活しむへし盲人のこんきやうも金持たるゆへちごくの沙汰も錢しだ
い月ならハ十三夜ななならハ初さくらとうつうかほは見勢ゆきもよつ年わすれまて引くるめて皆
財布の中に有ばたのしみ又其中に有草に風を加をる時ハかならすふすいつ遣ふと好也何大鳳の
こゝろを知らんつら〳〵せそくを伺ふに有てうてんと成のたまくと成これなにゆへと尋るにミ
な色におほれての儘なりきせんしなことなりと云へともくにをかたむけ傾城古よりその
れいあけてかそへかたし先手ハ鼻毛をみぬいたこんたんもぬけたによつてこのことくなかし心
有人ハまゆをぬらす心こそ心まとわす心なれ心に心こゝろゆるすなと聞まして女郎にうき日をや
つすことのおろかとも云にたらすそうじて女郎かほはぼさつのことくこゝろハやしやにひとし
口にもう〳〵の情を云てこゝろに些もしようハなしてんしやう板をそ數けんたとへおもしろき
仕打にもせよ商買つくの事つとめの身なれハ實ならす寐せうと起そうと金に云わせる世の中ハ

くろやきにせすとも小判はほれくすり何てそのやうに氣をもむへきにあらすさてこそおもひをかける女は天人をあさむく様にもうつる事かあるいはべけものくるん坊いくひ獅子はなたなつちり口元になつめは口元に蓼喰むしも好〳〵とは云へとも聞く人はにもと云者なく見る人たちまちきやふをさますほんにおかしき事ともなりとふて女郎もしまごはきやくを頼まねはならぬものうき川竹のなかれの水のあらくてはかゝろうしまはなき物そかしあまりこつちからゝ手を入るものにあらす晦日に月か出るとゆふたとへのことく行人のこけ成されとも夫もおなしきやくをはかりあるひは好なあまさけをきらひといつわりなんその時には主人への心中にきらひな物をなとゝて好な物を呑紋日をおしつけいしやうを頼み外に手前の用のある時は大黒舞か子ともきやうけんかみたいなとゝてそのもの來れはしたを出してはつしきやくには口をあかすそかしきやくも此様ならうちに居たかましとのむねの中も無利ならす女郎の情無は今にはじめぬ事なから引手あまたの身じやとてもすかぬ客しゆと澤山そうにいつかおもひ當るへき卒都婆小町のなれの果をも知らさるや邪見な女郎にみせ度もの也少しは男の氣にもなりてみよ何に大ていな事にあらす出入に人の目をしのひない證のやりくり途中の物入衣類は大なしに成内はふしゆひ勤をかき義利をかきしまいはひだりまいにならぬもなし若くは商のこしを折出世のミちをさまたけ株をしまひ身



をしまふ基にておもひ合せしハ悪處と云ハ能詞遊ひは遊ふにハなくて苦を招くもとひなりさも無ともきのふのはなし今日の催したるにつけ彼に付け打群集ると酒さかなつまる所は借金多と成始終あとはこの痛ミ五十にして四十九年のせんひをしらん又座頭なとの遊ひを好むハ正眞のやみのよに鉄砲をはなすに事ならす傍てしたい事さるれとも何所か風かふくやうにてゆひ差し笑わるゝもきのどくほんに盲人の入らぬ事とかくいろさとに　利を欠きても世間へ義利をかゝぬやうにしたき物遊ひしたけれ[illegible]も出来るなとゝハ片腹いたき事何そ遊所なくハ物の用の調へきにあらすや智者ハゆふしよまでもたくしよ事へんするそかし小人のこさかしさ寔にか／＼敷事也と左右を急変見て申けれハすわ事こそ出て来らんと思ひ春江にこ／＼としとやかに皆様の御見式彼も一時是も一時なりされとももののになハぬハ滿て欠るの道利有いかゝなから過不及なきか專要ならん食ハ命をやしなひ酒ハうれいを拂とも何れ過れハ害をなす孔子はたのしめとも淫せすとのたまふ兎角中をとりたかひの見識相和して用合給へなとか害あらんやと赤月の株をのふれは春江丈ハ又かくべつな物と人ゝ云所へ亭主中直り／＼と酒さかなを諸手にたつさへ来りそれよりさかつきも数獻まわりし頃誰となく今から　切ちよんの間と云出してそゝろうき立人心ミな／＼けにもとありけれハ流石のいしへ金吉もたせいに無勢しかたなく心ならす

もより添を同穴のきつねとも得たりや逢とかしこくも皆打連て出にけり 三三一

咲分論

序

姑射の松化して婥約の美人と顯れ羅浮山の梅は夢に淸麗の佳人となる然らば非情といふとも其靈のなからんや月は華と變じ雪は螢と代り春は秋夏は冬と移り行も皆造花のなす所なり此書ハ藝者とめくりの義論を綴りたるなり此題號を印すに暫らくも筆をとゞめていづれを揚ゲいつれを捨べきとも定がたく花ともみじの詠にひとしければ咲分論と號して机上をかいやりぬ

竹窓述

咲分論 二

爰に東武の賑ひ樂しミ多き其中に春立夏のころはわけて兩國川のはんゑひ涼の樓船或ハ屋根舟中洲より淺艸川に横たわり夕陽に猿廻しの太鼓小女の躍り岐女の謳ひかなづる三弦の音色うろ〳〵舟の團子れんがくの片言遙に聞ゆ傍は懺悔〳〵に石尊不動の御名を唱ふ無縁寺の晩鐘に人心耳を澄せば太鼓坊主のたいこ浪にひゞきひらうど娘の木戸番札は〳〵のしハがれ聲おし氣なく張り上ヶ川端おせんの華香に河岸涼の袖をとゞむ並木茶屋の行燈の畫は華もみぢの一時に咲つらなるかとあやまたる夜に入れば家かたふね屋根舟の提灯幾ッといふかぎりなく誠に白晝のごとく燈し火の花を咲セ玉屋の流星に人感嘆の聲止ず河並の音ばかりにおもわぬ膽を冷し且笑ひを催しぬかゝる納涼のはんゑひは中〳〵華の都四條糺の涼ミなりともおよぶまじ爰に藝者といへるもの有り斯のごとき節には樓家根ぶねに雇れ遊興と成り彼らも故に金銀の坐料を取て世のすぎはひとなす也然るに近來の涼は如何なる故にや藝者躍子の類壹人も見ゑず樓ふねはいふに及ばず家根舟に到ル迄見當らざることの不審なり夏の中は彼らが樂にして毎日雇ひに出すといふ事なく少しにても隙なし然るに此夏ハ舟やとひ一向なくたま〳〵有レば柳橋邊の空くらき茶屋またハ馬喰町邊の料理茶屋のミにしてはか〳〵敷事もなし是を如何なる故と尋るに去ルころよりしてめくり合といふ事東武に専ら時行是を弄となし涼の舟にも藝者杯はかし

ましきと是を除き家根ぶねに簾を下ロし小坊主ひとり酒のかんをさす役に具し或は永代大橋兩國橋の下に懸リこれを專ら樂しミとなして極暑の絕がたきをワするゝが故に藝者などゝいふは舟の側に有てもかしましく繪が付ぬとて是を嫌ひ御船藏前の葭の中又ハ三めぐりの亂杭の際に舫ひ人倫絕たる處を歡ぶが故に藝者の舟雇ひ一向になし此事を藝婦ども聞しより甚だ腹あしくおもひて何ものかかゝる不埒の挊をはじめ藝者のすぎわひを妨げなす事よと一圖にむねんの胸をこがし幸に下部のもて遊ぶふるきめくり札を取出し散〻に打ちらし札にむかつて汝は如何なる故何の爲に世にはびこり人のこゝろを惑ハしよの樣まであしくなし世人取りやりの利欲にふけり四民ともに已が業をわきに成しかゝる惡業に晝夜寢食をワすれ忙然たり第一世を傾るの魔王なりひとつとして其能なく天地の利に叶ハず汝が爲我〳〵がすぎわひまて幽になり今日を送ル事も成りがたき也是汝が罪高大ならすや爰に於て土足にかけふミちらすとも何ソ我に一言の返答あらん汝生有ルものならば早く此國を去て外國に離散すべしとしたゝかに恥かしめ果ハ傍ラなる火鉢の中に打こミ一炎の煙りとなしたり然るに立登る煙りのうちより怪しき姿顯れたりよく〳〵是を見れば甲冑を帶し靑き馬に打乘たり大將かと見れば續く勢もなく雜兵かと見れば靑二のひたゝれを着したりふしぎの餘りたゞ忙然と打ながめ居ければ彼のものは

つたと白眼んで曰ク汝最前より我をはづかしめ剰へ火中に打こミ煙となしたるは非情の我ゆへ口なしとおもふてかゝる事をなしたると見えたり汝らごときの小人にものいふも無益とおもへども此業到て拙く天地の利に叶わぬなどゝ高言を吐く事の憎くければ止事を得ずこれまで顯れ汝に解聞すなりまづ第一其方どもの家業すひびなしたるは我／＼が科などゝワれを恨るがなんぞワが知る處にあらんや今汝がいふ處の四民ともにめぐりに懸り其業にうときなどゝいふが第一其方共が家業にうとく天道に背く故斯のごとく商賣凡卑なしたるなり凡舞女の本意といふは島の千載和歌の前を祖となし今にも桐尾上など此流有るよし美しく謳ひ面白く舞かなでゝ酒宴の坐敷に人の眼をよろこばしめ一ト度ひるかへす袂に鬼神をも感ぜしむるなどゝいへる是を舞女の本意ともすべきか其流れ白拍子とも言又藝者とも呼ぶいづれ語らずとも知る處なりそれに何ッ其業をわきになし雇ひ有ても三弦は三みせむ箱を出す風呂敷に包ミたるまゝにて供の男の寄り懸りとなりぬれば謳ふことも舞ふこともなく客をたらし顔見世の棧敷ねだる胸算用又は紋びらうどの帯をこゝろ懸く一ッとしてワがいとなミを勤す酒宴遊興の坐しきをはづし空くらき處を立廻りてうかれ人にくどかるゝをまつ是全く藝者のこゝろはなくして遊女夜發の身持にひとしたま／＼三弦引ヶば調子かゆく時行歌まだ取らずといひねじめわるく半分ほど謳ふて茶

にして仕舞ふ故感通するなどゝいふ處へは行ず故にいやとふても遊興にならず樓へ連て出ても屋敷がたの腰元に彈まくられ芝居ものに笑るゝが故におのつからやとひ人なし只雇ふにも轉ぶのころばぬのと御法度の宗門を見るやうな合言葉有り晝は門に居て夜に入て若衆の下陰に差むかひのこそ〳〵咄し梧ヶ枝の空くらき本にてしミたる身の上を明し金銀をむさぼらんと計る是何ッ遊興風流のこゝろ有べきか全く身より出せる錆なんぞ人の妨ぐるなるべきか汝らこそ天道に背きたるといふべし天もこれを憎ませ給ひ斯く衰微なしたるとおもひ知るべしそれに何ッ我が悪きをば顧ずして却て人をにくミ謗るは愚の愚たり若きむすこ主懸りの番頭などをたぶらかし果は付登せなどにさするは是邪ヶならずや汝ら社魔王とも言つべし早く此境を去ルべしまた今汝おこがましくも我を恥しめ天地の利に叶わぬなどゝ高言を吐く事片腹いたき事なり凡このめくりに天地の間の事ひとつとして欠ルことなしまづ持たる札は天也下タのめくる札は地なり一人寐二人にて打は陰陽なり合せて取るれ和合なり黒札に蒔くは混沌未分の形ふたりを伊弉諾伊弉冊の兩御神に表し手に持てめくるは是逆鉾を以て大海を捜に等し黒札をめくり下と知り蝿と知るは是國〳〵をわかつにたとへたり三ッになるは天地神の三才なりめくり坐り丸きを用るは一圓相の形七枚ヅヽ三人に蒔き場ともに四七二十八の數は天の二十八宿をかたどれり四ッまきハ、

場とも五七三十五枚親のはじめてめくる一枚をくわへ三拾六枚なり是地の三十六鈇を表したり蒔たる仕舞めくり札十三枚有ルは一年の月の數閏月をくわへたり場を七枚に蒔くは七曜破軍の形也親の點石は高き處に置きばんこと成り坐中の人の眼印となるは是北極星なり相手の點石ハ割返しの中に入て沈んで見ヘざるは是南極星也勝たる人の膝の本トには碁石の須彌山有金札の日輪有り白石の月輪碁石の白墨を用るは晝夜闇明をあらハし四人にて初るハ是東西南北にたとへ四神に表し又四季のこゝろ春夏秋冬ともいふべきか箱を入五人にて打は木火土金水の五行仁義禮智信の五情とも言つべしまづ五行は五四の內をめくり出し木のごとくなるハこれ木なり出ル度負て心意を燃すは火なり書付すして顏色土のごとくなるは土なり夜深更におよび寒夜に手足金のごとくなるは金也取ては取られ勝ては負しべらくもとゞまらず沅湘日夜絕ず流れ込を待は水なり頗る五行にかたどれりまた五情といふはまづ負たる人に割返しを付るは仁なり惡畫をかづき出し三ッにされ全く負ルハ知れたれども寐ぬは義なり出ルに點をかけ合ふは禮なり大引にてよき繪のふうをして引ぱつて流れ込をまつは智なり連中約を變ぜず日ゝ參會なすは信なり何ソ是五情に叶ハずや番子の五十番ハ人間の命數をあらハし又下手上手のなきは是全く賢愚の隔なきにして到て聖直の樂ミといふべし蓋儒佛神の三ッを備りたり第一畫の付さる時は悟り退ひ

て人と替るは儒道なり釋迦をめくり南無阿彌陀佛と稱名を唱へ我が因果を悔るは佛道なりとんだ物をめくり出しよき畫にて負誠に神事天道次第といふは是神道なり青馬の丈なる有青切の鎧物の具をかため五四にむかつて推參抔と戯れるは是士なり負たる人に貸し追〳〵に取るをよひ百性を持たるといふは是農也大引の割廻し或は木どるの箱じやのといふは番匠の言葉にして工なり利欲損徳を業とし負たのよい天秤じやのといへるは町家の言葉にして是商なり則士農工商の四民にも洩レざるかまづ春はしめやかにして降續く雨夜の物語りにめくり札の品定めをなし夏は郭公の初音を待ずして曉の耳に人より早く聞極暑の絶がたきにも家根舟の内にてこれを用ひ橋下の涼風に別世界の樂ミ極りなし秋は月見の舟の内紅葉見の時雨の亭障子引立めくり冬は爐びらきの崩れに客亭主のかた身を打くつろぎぬ全く風流の道にも背けざる也且螢雪の燈し火の下にも此七枚の札に眼をさらし寢食をワする是勤學のまなび有りて學才の人は世にたのもしく詩作るかと疑ふ又蒔ちらす札を歌よむ人は不破の關屋の板庇とも見んよき手かなよミ捨などゝ聞ヶば文道にも達し勝て甲の緒をメ破軍なすともくつセず打て出て勝破をあらそふは是軍慮の駈引に似て武道をも兼たり餅喰〳〵といへば酒きらひかとおもへばむセふに呑ムと聞ヘ下戸にてもなし且十二支の數にもかなふたりまづ「子すに夜の明る迄打つゞけ「丑とおもへ

ど又出て「寅れ「卯き日に逢ひ腹の一辰まゝにつかぬ「巳をうらみ晝のつく時は「午くおぼへ「未やう勝ものにして「申氣なく「酉こみセうぶと我が内に「戌るこゝろもなくいつ迄も「亥ルなり是全く十二支に符合の言葉有斯く天地の利に悉く叶ひたる樂ミなしめくりの徳高大ならずや其方どもが最前にもいひ聞す通り我が業に疎く邪の事に金銀をむさぼらんとなす故に天道これを憎ミ給ひ却て其すぎわひ幽に成たるなり必ずともに此後藝者ならば藝者のやうに美しく謳ひ面白く舞ひかなでゝ坐敷ばかりを奇麗に勤めて付て來たる男をどの付にして上ヶごかしとやらセずに雨が降ても合羽の下にふり袖を着て出べし着替に鳶八丈の留袖黑繻子の半襟は決して無用なり内に居る時ハずひぶん三弦を藝古して感處ねじめをよくおぼへたがよし此うへワすれても料理茶屋の雇ひまたは小ぎくの鼻帋に到て呼びに來たなどへは行ぬがよしこれは親達も如在は有まじ甚だ評判あしきなり下地子を持し衆はよく〳〵言教へ置べし尤遲くとも歸り先に泊るは無用なり湯の行歸りに道寄りもセぬがよし此通り用るならばまねかずして福來り賴まづして雇ひ有てむかしのごとくはんじやうすべし夢〳〵疑ふ事なかれといふかと見れば姿は消て失にけり〳〵

粹町甲閨

粋町甲閨自序

鳶とろゝと鳴は天氣と知。烏かあ〳〵と啼ば。揚場へ米がこぼれたと悟る。爰といへは向所。安けらといふとこんけらと。先走ル通の世の中。洒落とはあつかま敷島の。哥人ならぬむだ人ハ。居ながら飯をくふ〳〵寂〳〵。じやくも肴交の作者只。がをとの外題を持ながら又モ後偏あるべきにと。進られたる此一册。甲驛新話の其あとへ。まくら並べし。粋丁甲閨。久しいものと笑れじ否

山手の馬鹿人

小便桶のうらの

灰小屋ニ序ス

粹町甲閨序

大士さんの御鬮に曰。驛は變驛なり。あたるもふしぎ。あたらぬも亦ふしぎなる哉。こゝに山手馬鹿人が甲驛新話の一卷。ふしぎのあたりをとりしより。書林文屋安雄なるもの。好い味を〆てになりて。床の內にひめ置たる。粹町甲閨の文枕。世に並べ行れんとし。來て例の序をせがむ。　予書林の爲に序をかく事。凡三千三百三十三度。三橋亭と高をあらそひ。新不二山をも張ぬくべし。多くの中でこなさんの。本に度〳〵序する事。義理一片のあだつきならず。そのあだつきのつき〳〵にはやり。日にゝ何度沽らめや〳〵。

梓町甲閏

四

粋町甲閨

魚田の火の影は寒うして何をかやく驛路の鈴の聲ハ夜山の手から下町かけて名にしおふ逢坂ならで大木戸のせきこんだのか昇せたか知もしらぬも通ひ帳てうど〆たる其數は八十軒餘の茶屋大みせ鵜呑にしたる粋な客まだ給つけぬ野暮な奴意氣な人柄いかぬ風ミなそれ〳〵の樂しミに飲めや謳へや一寸先はやミくもにさはぐとなりにしつぽりと【客淀車】手めへ食を喰ねへか【相方瀧川】わつちやァいや【淀車】せつかく大吉がおゐて往たぜへ【瀧川】それでもいやだものをほんに松野さんがのちにくをふといひゝしたつヶ【淀】そんならよびやナ【川】松野さん〳〵【淀】（大きなこゑで）松野さん〳〵【松野】なんでごぜいす名のかどが丸くなりいす（とワらひながら来ル）【川】お前お食を給なんせんか【松】わづちひとりやァいや【川】わつちもたべいす【淀】手めへハいやだといふじやァねへか【川】連があれば喰すのさ【松】わづちやイの付ゐへに子【淀】そうだろうと思つたよ。いつも五六盃くふもの【川】よしなんし。外聞の惡い【淀】それでも噓じやァねへ【川】まだ云なんすよ（と口のはたをつめる）【淀】ヲヽいてへ〳〵。誤まつた〳〵【松】そんな

ら茶を取寄ようの（と手をたゝく）【子供お文】あゐ引【川】お文や〳〵【文】あい引【松】ヱ、もふ此子ァさつきから呼あナ【文】夫でもおア屋の用をして居いした【川】ナゼお針さんハ【文】まだ帰りなんせん【松】そうだらうよ。何かもめる沙汰だつけ【川】（おやゆびを出して）是をばつき出すのかの【松】そうだそうよ。どうてゝこつちのかのが。かのだからの【文】アイ何の御用でおぜんすへ【川】ヱ、せはしねへ子だ。アレあすこにの。薬鑵が有からあれへ茶ァくんできや【文】あい（やくハんを持て下へ）【淀】お針さんとハァノ丈の高へのか【松】ナニサ丈ハひくいハナ【川】ツレ此お前が廊下で呼かけなんしたのさ【淀】ゥ、あの密夫本田か【松】嘘ァねへ【文】アイお茶ァ持てめへりゐした、【松】よくしたく。サァ川さん盛いすよ【川】待なんし。茶碗を出しいせう。モシお前もおあんなんすかへ【淀】喰ねへじやァさ【川】ヲヤ〳〵又かへ【淀】ナニさつきやァちつと外ァ喰ねへものを【川】あれでもちつとかへ。虫のゐへ。サァそんなら箸う上んしよう【松】いつも五六杯とハぬしの事たらう【淀】アイ五六抔たァわつちが事。そろつぺへとハお前の事さッレお□□がみんな見へる（と前を□□□）【松】久しい物さよしなんし（と居□□□）【淀】コレさつきの物を出さねへか【川】ほんにそうだつけの（をだハら名物の小梅づけを出す）【松】ヲヤなんだへ【川】粕に漬た小梅さ【松】わつちやァ又持遊びにしたあまいだの桶かと思ひましたよホ、〳〵【川】こりやあ

子外屋の御亭さんが湯治のミやげさ給て見なんしいつそようおぜんす【松】淀車さん取ておくんなんし【淀】ナニもふねへそうだ糟でもなめなせへ【松】ヱヽ悋らしいの【川】ドレワつちが見て上んせう。コレ是程ある有ものヲ【淀】松野さんにやるれ惜しゐからさ【松】よし〳〵覺へて居なんしよ 此間しバらくひ事あり 【若ィ者伊八】二かいのはしごゟ 瀧川さん〳〵 といへども聞へぬゆへ座しきの口まで來たり少しはらたちごゑにて 瀧川さんサァ〳〵さつきから呼やすれナ一寸と御出なんし【川】どうも隣の騒ぎで聞へねへものを 立てをりる 【淀】誰か來たといふ注文だの【松】氣をもむやつさ本んにとなりは達者に騒ぐのヲ【淀】屋敷ものか【松】ナニサ二人ながらめく〳〵さ【淀】ねぶ一挺といふ奴だのあれが本のめくら騒だ女郎衆は【松】その癖きん〳〵さ清見さん析江介【淀】とんだ事たの馴染か【松】ナニサ引付さ【淀】お前れ【松】わつちやあ色男【淀】又喜太さんか【松】ナァニ喜太さんはもう來やせん【淀】嘘ばつかり【松】本の事さ【新造の聲】奥さしきの方ニて 喜太介へおかゝいすよしなんし松野さんにさういひすよアレヱ松野さんへ〳〵【松】聞つけ口へ袖をあてわらひをかくしてかけ出す 【淀】すそをとらへ ヲット待な〳〵今の喜太様〳〵はなんたへ【松】ありやァ外の喜太さんでごぜいす【淀】まだ隠すか □と□□ 【松】アヽ誤りいしたおかゝいすそんなら正直にいひいせう一咋日の儘さ【淀】それ見なせへほんによくするけなさるの【松】とつさんがなくつてかゝさん斗だからようこぜいすよ【淀】うら山

しいの【川】（ちうかより）何が浦山敷へ【淀】今來た客かさ【川】なぜへ【淀】金まん〱の色男だから【川】ゐへ加減さうに好をいひなんすね【松】誰が來た【川】武さんさ【松】そしてどうした歸しなんしたか【川】ナニサ耳を出しな【松】ウ、、、それじやァの【川】どうもいつそ詰らねへよ（淀車が方を見ながら）ほんにどうしたらよかろうやら【松】どうともゐへようにさし向へで相談しなんしおさらばへ【淀】ナゼいきなさるか【松】又後にめへりやせう【淀】能後に來さうな事た【松】なぜへ【淀】喜太さの〱だもの【松】ゐゝ（と淀車のせなかをたたいて出て行）【淀】なんだか濟ねへ顏色ウしてゐるの【川】（かほをしかめ）じれつてへぞよ引【淀】じれつたかあじれたがゐへ物もいらねへ事た【川】いゝにへチどうせお前にいはねへけりやァ濟ねへ事たがチョあのね【淀】客が來たから貰てへといふ事かきり〱いへべゐへこつちがじれつてへ【川】いゝにへサその客がチ【淀】その客もあの客もいらねゐあつちィ出たがゐへ貰たがる女郎衆を終にやるめへといつた事のねへ男だ【川】そういひなんしちやァどうもあつちィもいかれやせん【淀】ナゼいく氣で言出したものが行れねへ理屈ァねへ【川】ソレそんなにおかしらしくいひなんしちやァいつまでも【淀】大分むづかしいのサァ何もいはねへから行たがゐへ【川】そふしておくんなすかへお前又腹ァ立ちやァしなんせんか【淀】ナニ得心でやるものを【川】そしてお前ひとり居ておくんなんす

かへ【淀】知た事さ【川】そんならわつちやァあつちィ行るすよ大吉や〳〵【子供大吉】あい 引
【川】コレ大吉やゝゑへ子だからの爰の茶碗や何かをかたづけてのそしてあつちのたばこ盆ィよく トそこらかたつける
消ねへやうに火をいけて持て來ての此烟草盆ハあつちィ持て往てくりや【大吉】あい
【川】おめへ茶ァ呑なんせんか【淀】いや〳〵只せへ茶にされた物ヲ【川】又そんな事をいひ
なんすよ と身もだへしてしれる【淀】そんならいふめへ〳〵しかし座敷や床ハやる事ァならねへぜへ【川】
そりやァなあにそんなら往て來いすよ【淀】ウヽいきや〳〵コレ大吉おれと寐ねへか【大】いや
〳〵【川】ホヽヽあいそうのねへいひやうだのヲコレ氣をつけてくりやよ ト出て行【大】あい かたつけしま
てい お休ミなんし【淀】寐ていかねへか【大】しつたかへ とたはこぼんさげておくざしきへ【奥坐鋪】【川】もう寐た
か【大】アイ寐なんすそうでおぜんす【川】よし〳〵【客武太夫 シャレテ 武】そしてあつちハすん
だかの【川】お案じなんすなさつぱりもらひした御亭さんお世話でおぜんした【茶屋新助】ナニ
ワたしハ何も世話な事ハおぜんせんお前大にお骨折でごぜんした手こずりなんしたらう【川】
大きにさいつてもぬしやァ遲くばつかり來なんすからわつちに苦勞かけなんすよ【武】私も早う
來たいけれど門がやかましいでつゐ遲なるじやてそれにけふは又傍輩共の所ィ祝儀事でよばれ
たゆゑ猶遲なつたよ【茶屋】道理でお前いつもより大にお遲うございますマァ〳〵なんてもおめ

でたにお燗を見て上ませう【武】よく飲たがる奴じやの時にだれぞ呼ふかい【川】ナアニもふよしなんし今夜ァ遅ふおぜんす【武】それもそうかいの【茶】旦那あげませう【武】押ようか【茶】マア上りやしサアつぎませう【武】ヲットよし〳〵けふもふらう飲だぞい【茶】御祝義事ハ何でござります【武】役替の祝儀さ【茶】へへ引【大吉】（吸ものを持て）アイ御亭さんちつとこつちィ寄ておくんおくんなんし【茶】ヲットお吸物か爰へよこしやサアお吸なさりまし【若ィ者伊八】旦那今晩ハ遅ふお出なさりました子【武】伊八先生かどうじや〳〵段々涼しくなるのサアひとつ呑給へ【伊】ハイ有難うござります【茶】ドレつがふ【伊】ある是ハお慮外でごぜんすヲト、、、あいこぼれやす〳〵【茶】お肴ハ【伊】アイいゝへ（とのミ懸て下におき）ほんに旦那ハお久しぶりでござりますね【武】その筈じや立歸りに國許へ往たでな【伊】本んにそんなお咄しがござりましたつけ【武】サア肴ァしよう（と鼻紙を一まいやる）【伊】これハ有難うござります（とたゝんでふところへ）【武】どうじやこつちハ賑ふかの【伊】アイ相應に出ます先どおうハ堀の内の千部で大ぶにぎやかでござりました【武】今ではけつく品川よりハにぎはふての【伊】あいさ仕合でござりますほんにお屋敷からも品川の方が近ふこさりませふ【武】大きに近いけれどもとんとあじいなものでおもしろないの【茶】どうでもお馴染ほどよい事ハござりません【伊】そうさ【武】本に開帳

ィでも往たらちと寄給へ【伊】はいありがとうござりまする開帳の繁昌いたしますかね【武】ゥヽ晝過からのいかう人が出おるて【伊】さかづきをほして こりやァとゝさんお前にあげう【茶】ナゼもう一ッよかろう【伊】いゝにへそしてもうお膳を下やせう【武】イヤ／＼食も酒もほしうないよ【伊】それでもちつとお茶漬になさつて【武】いや／＼【伊】ハイそんなら上ますまいとつさん茶漬は【茶】いゝにへお茶漬より是が と手酌でのむ【伊】そんなら氣根に呑なせへドレ銚子を【茶】ナニそれじやァ又すぎる【伊】よしか【茶】丁度さ【伊】左様ならもうお床にいたしませう ト出て行

【武】コレ／＼そつちィ往たら誰ぞに塩茶ァ一盃おくしてたもれ【伊】はいお文や／＼ とよびながらおりる

【茶】ワたし もうおいとまにいたしませう【川】もふ一ぷく呑でいきなんしさあ とすい付て出す【茶】袖引といふ所かねこりやァ又格別ばゝあが吸付たばこより旨ふござんすねい【川】ヲヤ／＼どうせうのォ、ハヽヽヽ【茶】ハイおやにはみんな吸なくしやしたに ときせるをおいて あゝ御きげんよう明日のいつもの通りでござりませう【武】さうさ／＼【茶】川さんおやすみ【川】アイおさらばへ【武】供のやろうをたのむぞや【茶】はい／＼【川】おばさんによくいつておくんなんし【茶】あい【川】おさらばへ【茶】立ていきと またあふまでのさらば【武】いよ市川の【茶】ハヽヽヽヽ 笑ながら出る【川】いつでも若へ氣だね【武】あれでなふちやァいくまいて【文】アイ塩茶でおぜんす と瀧川が前へ【川】お

れじやァねへぬしに上もうしや此子ァねぼけたそうだ【武】可愛そうにねむからうぞい【伊】
床をかゝへて來り さあモゥゐへ往ててねろ〳〵【文】へんじもせず立てゆく【伊】サァお床を【武】何所へぞ行のか
【川】ナニようおぜんすソレそつちの方ィよせてとらつし【伊】あい と□をしき□□もたて □□□が とたづねる
【川】よし〳〵あすこのかもゐにあげてあるよ【伊】夫ならよふごぜんすハィ御きげんよう
【武】ヲイ寐たまへ〳〵【川】も立て行そのるすに【武】かもゐの□□□を取てさきへ□□【川】まもなくきたり 寐なんしたか と行燈をびやうぶのそとへ
出して 是じやァあんまり暗へかへ といひながら□□□□【武】いゝやよし〳〵コレ此□□□ハ違ふたの【川】
ヲヤよく見つけなんしたのあつちの客がまけおしミで床をバ呉いせん【武】□□□□なんでも
よい君きミたれバじや と□□□□【川】うそやお前お國の御新造さんに久しふりでおあひなんしてさぞ
お嬉しうおぜんせう子【武】ナァニもう山の神にハあき果たじや【川】嘘をつきなんし【武】
嘘じやないよ【川】それでもお前御新造さんの御用ハ聞なんせうがわつちが用ハ聞なんすめへ
【武】聞いでハィなんなといふたがよい【川】そんならいひすよ【武】おゝさ【川】アノ子お前わ
つちが用を聞ておくんなんす氣ならどうぞァノいつかもお咄し申いした何をァノ寐道具をして
おくんなんし【武】今までのハどうじやい【川】どうも余りよごれいしたからさ【武】夫どう
なとしようぞい【川】ほんにかへそうしておくんなんすと今までのを回しに遣ひす【武】そし

て何がよいの【川】ふとんハ縮緬夜着ハふうつうでもようおぜんするりをバびろうどにしておくんなんし【武】そんなら翌直に松坂で積らそう【川】ほん引かへワつちやァいつそ嬉うおぜんすよ（□□□□）【武】共かハりに今宵ハ【川】どうだへ【武】今宵ハこよひじや【川】ワァ、イいひゑへねへやつさ【武】□□□□□□□【川】□□□□わつちが（□□□□□□□□□）【武】ァ、御太義／＼□□□□□□□【川】（□□□□□□）□□□□□□□□▫□□□□▫ほんにお前ハさけを呑なんすと埒が明ねへよ【武】今度から呑めへ【川】（吸つけ）お前のミなんせんか【武】たばこは呑でもよかろうかの【川】たばこハわつちが兎しいすぉ、／＼【武】（一ぷくのミ）ちつと□□□か【川】アイわつちやァ此ごろじや ァどうかしたそうでどうもねむくつて成いせんよそれでも氣のしれねへ客人じやァねられいせんがお前のように心やすひ客衆だと氣のおかれねへせへか猶ねむうおぜんすよ【武】それでもあちらへ行じやあろ【川】ナァニ行ずとようおぜんす【武】それじや悪いぞや【川】そんなら□□□□いきゐせうマァちつと□かしておくんなんしよ【武】□忘れよふぞや【川】ナニサお前も□なんしわつちやァ□るすよ（ト云よりはやくごう／＼／＼）【武】（へまじ／＼して居たれと淋しさに同じくとろ／＼）【その隣】【松野】喜太さん／＼コレちつと□□□□□□□【喜太】エ、やかましいだまつて□かして呉ろよ【松】まあ用が有から□□□▫□□□【喜】こうして居ても聞え

るから用があらパいつたがゐへ〔松〕いゝにへ夫じやァはなされいせん是さ〳〵喜太さん〳〵〔喜〕ヱ、小むづかしい何だよとふりむく〔松〕お前まあ何を腹ァ立なすつた〔喜〕何も腹ァたちやァしねへ〔松〕そんならナゼわつちが來るとそつちらァむゐて□□□□〔喜〕そりやァワれがむねに覺が有う〔松〕いゝへ何もわつちがおめへに腹ァたゝせるやうな事ァしいせん〔喜〕そんならナゼ宵から己ひとりねせて置てどけへかいつてわあ〳〵とさわゐでいた〔松〕あの時ァ瀧川さんのざしきでお食をたべて居いした〔喜〕食もこつちでくへバゐへ事よ〔松〕夫でも一昨日から□□ばつかり居てあの子たちが呼にもいかねへじやあ悪ふおぜんさあナ〔喜〕そんなら食をくつたら直にきたがゐへハサ〔松〕わつちも直にくる氣だつけが共うちに武さんが來て瀧川さんが座布に居ねへ物だから勤めて居たものを〔喜〕夫なら又閑に咄でもして居れハゐへワあ〳〵と騒ぐ事ァねへ〔松〕夫もあつちの客衆がお前の事をいつてなぶるからの事さ夫をいをふならお前も吉彌さんをきやつ〳〵といはせなんしたじやアねへかへ〔喜〕ありやァ又とあといひかねる〔松〕ありやァ又なんだへサァいひなんし〳〵と□□□□〔喜〕ハ、〳〵誤た〳〵〔松〕それ見なんし手前の事ァ棚ィ上て置てからにほんにお前ハ余程腹たちつぽいよその様じやァこまつた物だすわつちが往ても喧咙ばつかりして居るだろう〔喜〕ナニ共ときやァ中よくするのさ今しやァ何といつても疑が

有から【松】それが悪ふおぜんすあんな堅へ事までしたものを疑なんす事ァおぜんせん【喜】夫でもうたがふめへ物じやァねへ毎晩かはる枕だものそしてまた相摸女にはゝま鍋とつて尻の早へ＝たとへてあるハサ【松】そりやァはや外の女ァしらねへがなんぼさがミでもそんなじァごぜんせん【喜】ほんに相摸で思ひ出した今年ァまだとつさんが來ねへの【松】アイいつも鮎のとれる時分でなくつちやァ來やせん【喜】來たらかの事を聞て置よコレ□□□□□【松】□□□□□□□□□□□□何所にかいざがあるよ【喜】何所だの【松】ありやァたしか瀧川さんの客衆たよ川さん〳〵瀧川さん〳〵【川】ヱゥ、〳〵【松】瀧川さん〳〵（といふうちに）【伊八】瀧川さ一寸お出なせんし【川】（ねむそうなこゑにて）なんだな【伊】マァ爰へ皃を出しなせんし【川】（おきて出る）どうぞしたか【伊】（小ごゑになり）歸らうといひやす【川】いけねへの【伊】なんでも一寸いきなんし【川】ヱ、いめへましいの【表座敷】【淀車】（支度して羽おりも着）若衆〳〵【川】なんでおぜんすな（と羽おりをぬがせにかゝる）【淀】よしやあがれ羽織がたまらねへハイ【川】お前又なんの事でおぜんす【淀】手前が何の事たかしれねへじれつてへのどうしようのとつて蕗味噌をなめた姑ばゝあをミるやうなつらァしやあがるから不便なこつたと思て何もいわずにあつちィやつたぜへ夫に今迄覗きもしやあがらねへ【川】わつちも來る氣だつけがつる寐た物を【淀】それ見ろ夫ァうぬが氣儘から起た

事たお大名の御前でも殿様お目覺で御座りますと申上ればお起さつしやる夜發でも馴染になるとそこにやァ犬の糞があるとつて手を取て教へるハィそこが人情公界といふもんだなんぼおらがやうなしがねへ客だとつて竹椽の蝸牛を見るやうに潰されてだまつて居る物じやァねへ【川】ナニお前をつぶす物でおぜんす夫だから床をバお貰ひ申いせん【淀】くそをくらへ坪皿が高蒔繪だとつて寐がなくつて調半がくまれる物か【川】夫でもお前ひとりで寐ようとおとなしくいひなんしたじやァおぜんせんか【淀】だれも一人で寐てへ事ァねへけれども凡夫の淺ましさにやァちつとでもよくおもはれてへ思ひつかれてへで安目を責たのだ安目といつたら又雞眼のくすりに食ふ鰻の事たと思ふがそうじやァねへよ【川】それも何の事かぞんじいせんか何を申もワつちが寐忘れたが惡うおぜんすから堪忍しておくんなんし【淀】寐忘れちやァ惡いといふ氣があればたかで寐忘もしねへけれどもいかさま師が綱の伯母に化たやうに口さきでだます事ァ知つても肝心の魂に情がねへのだ今までいやァしねへが立引をしれば今夜だとつても貰れた義理じやァねへハさ【川】夫でもあつちの客人は【淀】それもしつて居るよなんぼ勤の習だとつて襟元に斗かぢり付くが見めでも有めへたかでつきゐへも赤ゐへも知た手合じやァねへ　とまくしかけたら たいへいらくニ　【川】少しはら立　相應に知て居りゐす赤ゐへたァ骨の和な肴でおぜん

す【淀】夫でもつき合ハ知るめへ【川】それも知てをりいす【淀】そんならナゼ宵からつらも出さねへ【川】ねむいから寐たがどうしゐしたへ【淀】ぐつとせき上なんだといゝさまきせるをふり上るゆへ【川】アレ伊八どんやといゝながら立てらうかへにげる【伊】廊下に立ぎゝして居たりしがおきに入かハり是ハどうした事てござります【淀】どうしたじやァねへお身さまにも云た通りだァ宵からひとり寐て居て淋しいから歸らうと云のだ夫に四五とぬかすに依て理害をといて聞せれバ一國ゥいやあがるからの事よ【伊】それだとつてもお前口でおつせんすハ兎も角もひよつとあの子に疵でも付たらどうなせんす【淀】なんざ御大造らしいたかでおれがかぶうをなげようと思へば此屋てへハ塵葉も置やァしねへ【伊】それも又あんまり御短氣で御座りますマァ一寸譯をうけ給りました所がお歸りなさらうとおつせんすのをあの子が何のかのと云なすつたに依てお腹ァお立なすつたのでござりますね【淀】初而ハさうだか夫につゐちやァ【伊】イエまあ憚ながら跡の事ハ申さば枝葉と申もので初にお歸りなさらうとおつせんした時あの子が直にお歸し申なんせバ何のおはらの立事もないと申ものでござりますから爰ハひとつ私がお願ひでござりますまづ今夜ハ御きげんよくお歸りなさりまして又明晩でもお出なすつて下りましその時どのやうにもお腹のいるやうに致しませうせう〳〵お氣にいらぬ事がござりましてもお馴染がひにおとなしく何にもおつしやらずにお歸りなさるものを

何のかのといひなさるゝあの子が悪いのでござりますお前さんのお言葉の立ますように今晩ゝ
お歸り被成ましてあすの晩かならず御出なさりまし憚ながら理非のお聞分がよう御座ますか
ら是ハ私がお願ひでござります　へ、、、〳〵とのぼせをかけハ、、、〳〵でおやなす【淀】初メのかへらうもおぼれへとめられる氣でいひ出した所が拍子に乘て出ろま、のたいへいを言過しおもひの外に
成た所へ伊八が出ての上手ごかしにいゝよ〳〵あじなものに成てぜひなく　そんならお身さまにめんじて何にもいはずに歸るあすの晩迄預るぜ
へ【伊】アイサ明晩ハどうともお負のたつやうに致しませう是ハモウ有がたうござります【淀】
サア歸る【伊】ハイ左樣なら必明晩お出なさりまし御きげんよう【淀】おせわ〳〵　とちうかへ出てあたりかに
ごらと廻し階子をおりる【伊】もつゞるて下り　はるお靜に　といひながらおもてをあけて出し又二かいへあがる【川】はしごの口に待て　ヲ、能して下すつたあすの晩
來たらどうしようの【伊】そりやァその時の事さマァ今夜歸しせへすればゐへハナさあ〳〵行
て寐なんし【川】武さんをこつちィ連て來よう【伊】ナニもうすぐにあつちに寐なんし押付あ
けやす【川】そんならそうしやうかのおかたじけよ　と奥ざしきへはた〳〵【表座敷】【客座頭借都】若へ桒何
時だの【伊】モウおつつけ六ッでござりますお目が覺てならお隣でさぞおやかましうござりま
したらう【借都】何ンだか無性に云ならべたの【伊】アイサどうも人の悪いには困り果ます
【借】ぬしのきめ所ハ感心だぞ【ツレ座頭困彌】ほんに仲間へ入れて催促にあるかせてへの
【借】へ、〳〵手前寐て居ると思つたら【困彌】ナニお前あの騒にどうして寐られる物でごぜ

んす【借】夫でもおらがかミさんなんざァ夜中だ【困】こつちの女郎衆もよく寐てさ【伊】皆起し申なせんし【困】ナニゑへ／＼なんと借さん一杯呑で歸ろうじやァごぜんせんか【借】ウ、是若へ衆一銚子働てくれねへか【伊】アイまだお燗が致しにくうござります【困】ナニサ冷でよし／＼【伊】ハイ左やうなら下に上ませう（とてうし持て下へ）【借】コレ起なせへ／＼【清見】エあいウ、、、／＼まだ早ふおぜんす【借】ナニ早かあねへ【困】（からすのまね）かあ／＼【借】（わらひながら）アレ烏がなく【清】ヲヤそけへ來て鳴いすよ【折江】よしか烏のこれいろでおぜんすねへ【清】ほんにかへわつちやァ又本の烏だと思ひしたよ【困】お前目が覺たか【折】今のからすでさホヽヽ【伊】（てうし持て）さあ御酒ゥ上ませう【借】ヲツト有難／＼【伊】何もお肴ァござりませんから味噌を燒てめへりやした【借】おそろ／＼【伊】左樣なら置てめへります【借】ヲイよし／＼さあ／＼困坊起や／＼【困】（犬のまね）わん／＼【折】おや／＼【清】とんだゑへ子【借】物まねハきつい物さどうだ仙臺淨瑠璃ハ【困】ありやァふくさサ【清】せんだい上るりとハへ【借】仙臺の上るりの事さとんだゑへよ（此間に四人ともおきて出る）【折】さあせんだいとやらせんべへとやらかたりなんし【清】さあ／＼【困】マァ一ッ呑でさ【借】本んに茶碗ハどこだ【清】茶碗でかへアイさあ【折】わつちがつぎいせう【借】ヲツト憚り／＼【折】一盃おぜんすよ【清】ツレこぼれるすハナ【借】

此女郎衆ハ座頭の酌ゥした事がねへさうだ〔折〕〔清〕ホヽ〳〵〔借〕サァ和尚さそふ〔困〕アイどこだ〳〵〔清〕爰でおぜんす〔困〕サァつゐでくんな〔折〕つゐで上んすから上るりヨをかたりなんしよ〔困〕かたるとも〳〵〔清〕味噌を上んせうか〔困〕ちつとくんな〔清〕さあ〔困〕にがいかほをして ヱヽ灰吹〳〵〔清〕なんぞ有たかへどうしやうのサァ灰吹〔困〕はいふきへはき出し ヱヽお前むごひぞ消炭をくはせなすつた〔清〕ヲャ〳〵堪忍しておくんなんしホヽ〳〵さあゐへ所を上んせう〔困〕ゥヽこいつハみそだ〔折〕サァきり〳〵呑でかたりなんし〔困〕はてせわしねへぞ ト茶碗を下におきさミせんをひざにかゝへせきはらひゐへん〳〵〔借〕ちよつと御ことワり申上ます是よりせんだい上るり切りさやうにとうざい〳〵引

扨もその後。相馬の次郎將門殿の謀叛せうぶの荒増のヲ云べへなら。下總の國いわ井の郷に。でかばちない家サァぶつ立。それにハァ有べへ事か。敷居かもへ柱サァへも。丸薬のヲ見る樣に金銀の衣サかけ。そこら中がふかり〳〵と只はあ夜も晝もまぼしいよふだつちう合あんでもおれさあハ王さまだァとつて。白髮に平親王と改名のおしやつて。まだ其時分にやァ。三ッべへに成ル息子殿をバ將軍太郎殿とてんこちもねへ名をつけ。一家一門郎等まで權兵衛彌五右衛門のヲふつちやつて。百官名とやらをくつ付ケひとへにハァ。王位をぶつたくるべへ下心だあといふ事を。公連といふ利發な家老殿ががんづき。あぜハァ昔から謀叛のヲたくらんだ者が勝

を見る事ァ扨おき・じぎりにしたものもおざんねへ・ャレよしめされ〳〵とせちに異見のヲお
しやつたが・なにがハァ性のこわいわろだあに依てあぜう聞入べへ・忠言耳さァに逆ふとやら
で・後にやァその家老殿を押込たあとよ・㊀悪事千里をおつぱしるとたとへのふしにみぢんも
違ひハおざんねへ・朝敵だァの半てきだァのとガラ都へも聞へたとおぼしめせ・ャレはあ討手
をさし向べへとつて大將のヲ撰れた・先一番に六孫王經基殿だもさ・抑此經もと殿の由來をく
わしくたづね申に・ちよぼ一のヲおぶちやる時・とかくにてう目べへ好だあに依て・六ではで
つかく損のヲおしやるゆへ六孫王とハ申とかや・それでも不思儀に勝負づよく・いつもじぎん
で仕廻るから常に元だあといふ心で・經もと殿と申なり此人をはじめとして貞盛秀郷なんどゝ
いふ大將達が討手にはる〳〵下つたァけれとも・何をいふにも將門殿が七人一座でかけ廻り・
それにハァふじ身だといふもんだァから・すべへよふもなかつたとおぼしめせ㊀そのとき貞盛
といふ人ハげへにこミづなァわろで・あんでもきやつハきんたまか米かミのを射べへとおもつ
て・ねらつたあけれども・くらの前輪が邪魔に成・きんたまァ射づれへとつて・米かミッサぐし
やりと射たとおぼしめせ・アニはあたまるべへ馬からさらひ落る所を秀郷が取て押へた・ャレ
よくしたァとつて・きせん上下をしなべて かんせぬものこそなかりけり

【借】やんや〳〵【清折】ホヽヽヽ〳〵【清】とんだ面白へ子【折】もつと何ぞいひなんし【困】又今度〳〵さあ借さんモゥ一ッ【借】まあ重ねや【困】さうしようか子お前がたどうだ【清】わつち共ァ朝ハなを給ゐせん【折】サァつぎいしたよ【困】どれ〳〵（とさぐりまハしぐつとのミ）ア、ゐへサァ借さん【借】モゥよしかそんならおらももう一盃呑うか【清】サァつぎゐせう【借】そんなら半分【清】なぜへ【借】今朝歸つて大分用があるコレ困坊けふハ幡町の拾匁の口が日切だぜへ【困】アィ又延金だらうあすこもおかしな物だヌ【借】いゝにやまた頼もしい事にやァお乾ァ怖がるよいけねへハ小日向のやつさ【困】ありやァはや【折】もうのミなんせんかへ【借】モゥいや〳〵【困】サァいきやせう【借】さあ〳〵【折】まだ竹屋が來ゐせんよ【借】來ずともゐへのさ【清】あい羽織【借】ヲィよし〳〵【折】お前羽折が裏返しだはな（ときせかへる）【困】おれとした事が盲のやうだ【借】手前も又目を明てミれべゐへ【折清】ホヽヽヽ〳〵【困】そこらに手拭があらう見てくんな【折】是かへヲャ馬のやうに鈴か付てゐる子【困】落ても知れるやうにさ【折】おつたね【借】何もわすれハしなんせんかへ【借】いゝにへよし〳〵【困】そんならおさらばよ（と二人とも立て出る）【折】待なんし階子が知れいすめへ（と二人さ立てをりる）【折】どなたも憚り申いした【清】どうぞおちけへ内に【借】アィおさらべ〳〵【折】又今度面白へ事を云なんしよ【困】

まだ色々のしやれが有けれども後扁〳〵【伊】是れお歸なさりますかまだ暗うございます【困】よし〳〵一年中闇に居つけたから【伊】ハヽ〳〵はい左様なら御きげんよう【借】おせわ〳〵【伊】アイおつむりが危うございます【困】ヲツト出た〳〵【伊】見をくりながらア、水が溜つてをりますモゥちつと杖の方ィ【借】ヲイ〳〵おさらば〳〵くゞり戸ぐはら〳〵【折】めくにしちやァ飛だ氣どりがゐへ子【清】目の見へねへのを口ィ出して見へがねへの【折】そしてあんまりひつこくもねへ子【清】わつちなんざあぐい寐にしたよ【折】わつちもさ【清】又寐なんせんか【折】お前の方ィ□□□□□□□と□□□ろより いびきのかけ合　○はや明渡るしのゝめに馬追虫も音を留め表には轡の音勝手の方には居風呂へ水さす音のミ殘らん〳〵

世説新語茶
甲驛新話
粋町甲閨
賣花新驛
深川新話

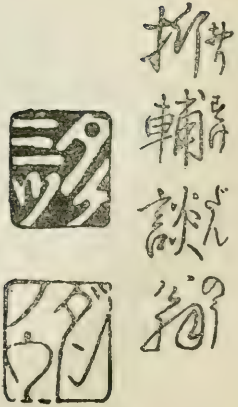
評判茶臼藝
たから合の記

世說新語奈

序

夫花の下の居續ハ美景に因り。樽の前の醉ざめは春風に吹かる。飲や歌へや歌念佛も。極樂淨土へ行時ハ。中〳〵親の異見でも。あまいだ〳〵と說かれたり。雨のふる夜も雪の夜も福輪糖のこりもせで。三國一の霰でも。なんでもかでも與勘平と。膏藥のはりつよき。女郎の誠を見る事ハ。江戸自漫の鼻高き。山吹色の勢なるべし。今山の手の馬鹿人が著す所の一篇ハ。南鐐一片にまされる事遠し。身ハ岡場所の卑に居て。天水桶高きをしり。心ハ淺黄裏のあさきに似て。藍より青き色に染んかしと。書肆何某の數請にまかせて。葦簾の陰にごそ〳〵と序す。

二



變語　山下

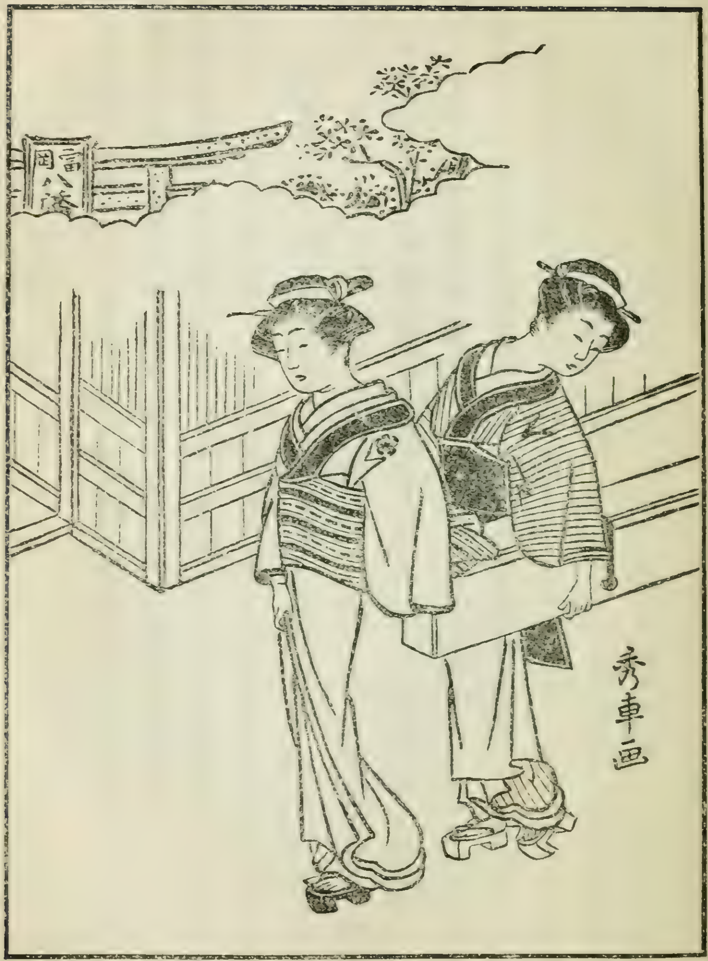
千年の靏吉が品玉に足をとゞめ万代の龜屋が茶飯に腹をつくり廣小路の植木に目をよろこはしめ佛店の蒲焼に鼻をひこつかせて「客傳五右ヱ門」ちくさ色ぐんないに丸一の紋所付た淺黄うらの小袖にちめんなゝ子の帶を〆黒毛どろめんにらへぎかいきのうらを付た袷羽おりうこんもめんのじゆばんを五分長に出しやうかん色の紬づきんに顏をかくし長い大小をくへんぬきにさしおゞゐぼしよりに中ぬきぞうりをはき扇で拍子をとり「山寺のヲと謡ひ來る「としまおミや」モシ／＼およりなんし「しらはおいと」もし／＼「傳五右ヱ門」姉さんちやくと上るべいかの「ミや」アイお上りなせんし「傳」まづお身さまの御假名はあんといひ申す「ミ」ヲヤわつちが名かへ八兵衛とさ「傳」こちらのおむすじようはあんとたの「いと」いとゝ申ます「傳」そのいとよりほそいお姿に頭だけうつ惚たあよ「ミ」ほれたらきり／＼上つておやりなんし「傳」アゼこんたのよふにじやけんに物アいはねへもんだあよコレお糸さんやうらアはあお身さまと契る心だあがあんと可愛がつてくれますへへかの「い」そりやアもふいつそかあいがりいすのさ「傳」そんだら上つても大事おざんねへか「い」よふごぜいすサア二階ィお出なせんし「傳」此はしごをのぼるべへかの「ミ」アイそこさ「い」ナニおはき物かへそふしてお置なせんしなくなるこつちやアございせん「傳」イヤ／＼そふじやアおざんねへうらが國さあじやアから取違ても過科の

ヲつん出すものを とていねいにしまい二階へ 【い】おへねへへんちきだの【ミ】あんながはまると結句よくして
くれる物だよくおやなしな【い】あんなぞうりせへ仕廻てさ【傳】二かいより貞を出し こりやおいとさ
ん早くおざんねへか徒然だもさ【ミ】小ごゑにて あれ色男がよぶゼへ【い】おらァいやよ といひながらかた手にてう
しさかづき臺かた手にお定りの座ぜん豆 盃だいのふちに茶碗をのせきたり 【い】あいお茶ァ上んせふ【傳】歌へよんべの客の□□□□□□□□ レイたあとをろいて
〔ミ〕〔ロ〕〔せ〕〔す〕〔し〕〔し〕ぬゥりまくらこら／＼／＼こりやァ色／＼御馳走でござり申す御酒よりやァはや
く寐なさろ【い】それでもワざとさァ、、、く【傳】マァのミなさろ【い】まあお上りなんし
【傳】はてさていづくのうらでもはあ新枕の盃といふ物ァ女房の方からおつぱじめるもんだあ
よしたがハァ一の谷の玉おび姫の婚禮ばつかりやァ男の方からひつぱじめる事よ【い】なぜへ
【傳】その時に越中の五郎兵衛殿といふ家老どんのおかつさまがァゼはあ 盃 のさしやくが違
つたんべへとつてひでんのヲぶち込かゝつてんだから譯のヲあかすべへとつて何がハァ經もり殿が息
子のあつもりどのを上座ィおつ通してわれたゝやァ巨細のヲしらねへもんだから不審のをぶつ
も 理だァが元敦盛ァ〔子〕〔ム〕の種だァに仍て下ざまの祝言とひとつらにやァいはれねへとつてゑ
ときのをされるから惣／＼がたまげる事よ【い】ちつと語つておきかせなんし【傳】此比に本の
ヲ持て來てかたるべへ【い】ほんにかへ左様ならたべて上んせうあい【傳】そんだら中を切つ

てつるでくれなさろヲト、、【い】なぜもふちつとつぎんせふ【傳】イヤ〳〵の□とハァ□□□
□□□□出來申さねへよ【い】ヲャ〳〵すきな事をおつせんすねサァちつと□□□□□なせんし
し【傳】ァゼもふちつとはなすべへじやァねへか【い】それでもお前はやく□□とおつせんし
たじやァごぜんせんかへそして三日とけふハお客が多いからどふもせわしく〳〵て惡ふおぜんす今
度から外の日においでなせんし【傳】可愛がつてせへ呉べへならくべへとつてサァ□□□【い】
ァィ□ァ上んしよう【傳】まづ羽織ハぬぐべへ【い】ヲャぬしの紋ハ門之助だね【傳】ナニサ
門之介ハねへけれどもお人の少い時にやァ使番の助があたるよ【い】そのこつちやァござるや
せん【傳】そしてあんちう事だ【い】いゝへもふよふおぜんすから□□□□□【傳】□□□
□□ロ□□□□□【い】□□□□□□□□□□□□□（此所へ客來りとなり座敷へとたる）【ミヤ】ヲ
ツトそこハお客でごぜんすよ【客長次郎】又奥かいなとんとモゥ久しいもんじやの【傳】あに
事たの【い】お客でごせんす【傳】まだ座鋪があるか【い】なくツちやァさ【傳】それでも此あ
つちらにやァはあ眞木だあ事の炭俵だあ事のとつて見られべいなりじやァねへぜへ【い】ヲャ
油斷のならねへいつごろうじいしたあすかァ物置でごぜんす□□□□□□□□□□【傳】ァ、□□□□
□□□□□【い】へェにくらしい何のこつておぜんす又此比にお出なんしよ【傳】ちけへ内に

來べへよ泊りに來べへかの【い】泊りハ取やセん【傳】代物ハこけへ置てもよいかの【い】ァィよふおぜんすォ、、、、く【傳】サァいきますべへ【い】ぬしやァたばこハおあんなんセんかへ【傳】酒と莨ハ禁物だあよ【い】そんならお出なんすかおさらばへマァ外へお出なんすまでハはしょらずにお出なんしな【傳】それもそうだあなァ【い】サァさきへお下りなんし【傳】上る時にやァふへがおりるにやァはあ腰の物がつけへてけへに下りつれへハ【い】こつちらァむいておりなんしな【傳】ゥ、是でふへサァおさらバ此比に來べへ【い】お待なんしおはき物を【傳】ィ、ニャよし〳〵【い】そんならおさらバへ（と又二階へ上りそこらとりかたづけとなりざしきをのぞき）ヲャ長次さんかへどふしなんした彥さんハへ【長次郎】おいとさんどふなんしたぞい彥ハいそがしゐさかいけふハこんわいな【い】よくいつておくんなんしァィおゆるりと【ミ】ナニサ直にけへるといひすあナ【い】なぜへ【長】何さけふハ來られん所じやあつたがちよヲつと來たのじや夷講前じやさかゐふろういそがしいハいの【い】ほんにそふでおぜんせふね夫でもけふハよふごぜゐセうちつとの內お出なんし後ほどへ【長】あい【ミ】どふでもけへりなんすかへそんなら又いつ來なんす【長】此比に來よハいの【ミ】ィ、ェ此比と計いひなすつちやァいつまでもけへしやァしやせん日をきやめてけへりなんし【長】そんなら廿五日比に來よハいの【ミ】天神ゐを遣

つてかへ勿躰ねへのそんなら待てるゝすよその時約束の物を待てきてくんなんし【長】ほんに半襟の事ちやゑろうよい天鵞絨をのけて置てとんと忘れて來たハいの【ミ】ほんにかへ今度ァわすれずに持て來てくんなよそして子どんなでもゑへから金入のきれをもちつとくんなんし【長】何になるじやの【ミ】守袋にしやす【長】懸守なら六七寸有たらよかろの【ミ】幅ァ貳寸五分程もあればよふござんす【長】そりやもふ安い事ちや【ミ】廿五日にやァ彦さんもつれてきなんし【長】なぜじややらおいとさんをばいやがるハいな【ミ】子ハゑへけれどもあんまり初心だから面白くねへのさ【長】そんな事で有ぞいそんならモウいこハい【ミ】先ゑへハなモウ一ぷく呑でいきな【長】イヤもふ斯して居るといつ迄もいとふなる思ひ切ていこハいの【ミ】そんなら必よ【長】ハテこいでハいな（とはしごたおりる【ミ】も一所に）【い】どふでもおけへりなんすか【長】歸りやす【ミ】廿五日に彦さんもつれて來るとさ【い】おたのん申んすよ【長】のミこんで居るハいの【ミ】【い】おさらばへかならずよ


秀車画

粋事　深川

東方の色青くして長竿に似たり中央土橋の黄を加えて緑の色の中町に染し裾つぎやぐら下長き日脚もかたふけバさまよ〳〵と歌へどもどうしたといふ人もなし【船頭權次】ァ、大に醉やした【客庄兵衛】ナニけふハいつも程ァ呑ねへぜへ【權次】イ、ニエ給んしたよァノお前仕廻の茶碗でいきつきやしたありやあおめへ四合へへりやすぜへ【庄兵衛】そふハへへるめへ【權】ナニサ随分へへりやすのさ【庄】はてのなんでも手前が呑だといふハ去年の山開の時さ【權】あの時ァおめへ翌の朝おけへりなんすもんだから落着てのみやしたもの此比じやァねつから夜といふハお出なんせんね【庄】どふも夜ハ出られねへよ【權】お前方のよふなお客をバわみ客といゝやすぜへ【床】なぜの【權】晝ハ來れども夜見へすて三輪の引くるけへしだからわみだとさ【庄】ゥ、こいつハ理屈だどふもミんながわミ〳〵といふが知れなんだ【權】それでもけふは宵もお出なんせう【庄】イ、ニャ晝斗だおつつけけへるよ【權】そんならまあちつとおよりやしわつちやァちよつと武藏屋までいつてめへりやすぜへ【庄】又色事か【權】ナニサあつれへ物がごぜんす【庄】みかん【權】あい【庄】ほんに今度のつき出しハうつくしいげなの【權】

ァイなんでも中洲の硝子を逆といふ評判さ【庄】とんだ事たの此比にこそと呼うか【權】そんなむだァおつセんすセお中さんの角が怖ふごぜんす【庄】ナニしれるこつちやァねへ働て呉ねへか【權】いやな事やな御免〳〵そんならいつてめへりやすよ【庄】是さ〳〵【權】いや〳〵【庄】これさ用があるよ【權】アイまあ〳〵いつてめへりやす（とにげておりる）○（しばらく有て上ぞうりの音）ばた〳〵【庄】（ねたふりにて）ごう〳〵【相方お中】（來りたばこ吸つけて）あいサアたばこ【庄】ごう〳〵【お中】又たぬきかへ□□□□□□□【庄】ア、□□□□□□誤た〳〵【中】そんならナゼねたふりをしなんした【庄】ナァニほんにとろ〳〵としたものを【中】まだ嘘をつきなんすよ【庄】そんなら正直にいをふ手前が來ねへ内ァどふしてほつてもねられやァしねへがあんまり來よふが遅いから寐たふりをしたものさ【中】どふもわつちも早く來たくつてならねへけれどもお前の來なんした時ばかり早く來ちやァわるいからおもしろくもねへ咄をしてゐやした【庄】ナァニそふじやァ有めへ表ざしきィ園太夫が來て居るそふだから【中】又そんな事をいゝなんすよ【庄】それでもせんどのみハありやァなんだ【中】ほんにお前もあれほど此ぢうも譯をはなしたものをまだどうたぐりなんのそらほど心元なく思ひなんすなら又よく咄いせふ□□□【庄】いゝにや又はなさすとも此ぢうの譯ハおれも覺て居るよなんぼ手前があいつらに悄まれちやァ客の前ィどんな事

をいおふもしれねへから柳に受てあやなして置のなんのと口ぎれへな事をいつても不斷常住つき合もんだに仍てどんな事をするか知れねへそして又あんなおかしなにへきらねへ返事をやつちやァあつちでも合点して居るもんじやァねへ【中】それだから又一昨日もなんのかのといつてよこしたけれどもやつはりいつまでも同じ返事斗して置いすマァよく思つても見なんしたかであの人と色でもする氣なら何の爲にお前に咄すもんでごぜんす大概つもりにも知れた事を【庄】成ほど此わけをしよてから咄せバおれもかまハねへけれどもせんどのあのみをおれに見付られてしよふ事なしに咄たものだから疑ふめへ物じやァねへハサ【中】サァそれもお前のいゝなんす事でごぜいすけれどもあのみに名でも書て有じやァなし隱す氣ならわつちがのじやァねへ人に賴まれたといつても濟いすハナ【庄】どふして手前の懐にあつた物を人にたのまれたのなんのといつてすむもんだそりやァはや手めへハだます事が上手だから合点するものもあるかしらねへがおいらァまあ合点ハしねへ【中】そんならおめへどふでもうたぐりなんすかへ【庄】しれた事さ【中】わつちやァ又お前もお幸さんの事なんぞも咄なんすもんだから隱しちやァ結句わるかろふと思つて（是より泣聲になり）そして又だますが上手だといひなんすが何がおめへをだました事がごぜんすいかにわつちがよふな者だとつてもそんなにいちめなんす事ァおざるせん【庄】何

も手前をいぢめやァしねへ「中」それでもいつお前をだました事がごぜんしてたますが上戸だのなんのといゝなんす「庄」（少しこまりかんがへて）そんならいおふか夏中手前がいふ事にやァ帷子を着て寐るとしわに成て悪いから浴衣を拵て置てやろうといつたがとふ／＼出來ずに仕廻たじやァねへか「中」それがそんなに腹が立いすかへ下町の客衆が金をくれるはづだつけが夫から來ハセず夫に盆前にもちつとでもお前の方ィ足たからどふも出來ねへもの「庄」盆前の事がそれほど惜くハゑへハサひどひ工面をしてあの金ハけへそふ「中」ナニサそれが惜いのほしいのでそふいふのじやァございセんハナなんでも一言いへばその様に言葉質を取ていぢめなんす（なきながら）お前も又男のよふでもねへそらほどわつちがいやに成なんしたらさつぱりときれてお幸さんでも誰でもよびなんしたがよふごぜんす今迄お心安く致ゐして色／＼な事をも申んしたが嘸お腹も立るセうが堪忍しておくんなんしお前斗ァそふしたおこゝろじやァ有めへとおもつてほんに忽躰ねへ親もうミつけねへからだにまで疵ゥ（とあとハいはず此所にていよ／＼なく）「庄」それほど又おれと切たくハきれてやろうハサ「中」ナニわつちがきれてへ事が有もんでごぜんす「庄」それでもお幸でも誰でもよべといふじやァねへか「中」それもお前が無理ばつかりいゝなんすから切たくつて　事と思ひすからさお前になんしてからこつちィハ客衆ハミんなきれてしまうしお前が來なんセん

段になればわつちやァ生ちやァいられるせん〔庄〕そんならゑへよばかな泣事ァねへ〔中〕それだとつてもあんまりむごい〔庄〕トレ□□□□□□□□□□□〔中〕ナニ□□□□□□□□□□□□〔庄〕是さマァ□□□□□□□□□□□〔中〕あい〔庄〕よサ〔中〕あい〔庄〕何もかもおれが悪かつた誤るから堪忍しや〔中〕ナニかんにするの誤るのといふ中じやアごぜんせんわナ〔庄〕そんならきげんを直しや〔中〕お前もきげんを直しなんし〔庄〕おらアもふとうにきげんが直つた〔中〕ほんにかへ憎らしい人にやァなかせてからに□□□〔庄〕ほんに太夫とのワけれねへか〔中〕アレまだいゝなんすよそんならモゥわつちやァいやよ〔庄〕ア、いふめへ〳〵もふ押付むけへだらう□□□□□□□□□□□□□□

坊客　國字

來るか〳〵と待ときや來いて余所へかれてまゝならぬ夜更て【相方お色】来ルおくにさんさん【名代お國】あい〳〵ゥ、、、、く【坊主客 ヘイ ミヤウ 山花】是〳〵おきな〳〵【お色】お國さん〳〵是さ〳〵ちつと氣をつけなよ【お國】あい〳〵【山花】これさ〳〵【國】モゥおけへりなせんすかへ【色】いゝにやァまだけへりなさるのじやァねへマァちつとあつちィいつてくんな【國】ヲャお色さんかへわつちやァ又お歸りなせんすかとおもひしたよいつそモゥ眠くつて〳〵なりやせん【色】おとよさんの所ィでもいつてねて居な【國】アィそんならいつてめへりやさふ と出て行【色】よく寐る子だねへ と□□□□ら ここへ入【山】なんでも來ると寐たがねげへりもしやァしねへ【色】お前又どふぞしやァしなんせんか【山】ナニ馬鹿な事を【色】それでもお前が不斷可愛らしい〳〵といゝなさるから知れねへものさ【山】そんなきげんじやァねへわき氣がもめて【色】ホ、、、、くほんに宵にやァでへぶ腹ァ立なすつたね【山】腹ァ立ねへでどふするもんだ五日の晩にもあんな仕内をして置て又今夜も名代だもの【色】成ほどこよひの事ァわつちが悪ひけれども五日の晩にやァ全躰お前が吉田屋ィいきなすつたもんだからわつちも腹の立

まゝにあの様な事をもしたのさ今夜だとつてもふちつと早く來なさればお前の方ィ出るけれどもおそく來なすつたが不肖さそれも外の客衆ならどふともするけれども夕部もけへした客だからどふも仕かたがごぜんせん【山】色客だろう【色】ナニサもふいつそすかねへ酒ばつかり呑んで子ついぞもふホ、、、く【山】つるぞどうした【色】ナニサくつるぞナニサ咄なんざあした事ァこぜんせん【山】嘘ばつかり【色】嘘じやァごぜんせん【山】武士か町人か【色】ナニサ折介だんのサ【山】手前が居ざあやかましくいおふぜへ【色】ナァニ醉て寐ているからよふごぜんす□□□□□▫□□【山】ヲ、□□□□□□□【色】もしへ此中お頼ん申た事ハどふしておくんなセんすへ【山】随分のミ込で居るけれどもどふもまだちつと工面が悪いよ【色】アノゑんぼうとやられまだかへ【山】ナニゑんぼうたァ何の事たゥ、何か説法か【色】ホ、、、くその説法さまだ濟ねへかへ【山】十三日から初る筈だ【色】それが濟と出來やすかへ【山】ゥ、夫セへすめバどふでもしてやるよ【色】ほんにかへわつちやァ當にして居やすよ【山】随分あてにしや【色】わつちも根津に居たときやァ相應に客もあつたつけが子袈へ來てからァミんな切やしたそれでおめへに斗度〳〵云にくひけれども【山】ナニサおれもなりセへすればどふでもしてやるけれどもどふも思ふ様にやァいかねへて【色】なんでもこうし

て來ておくんなんす物だからわつちも御如在にやァ存やせんから子すへ長く來ておくんなせん
し【山】おらァも、不尊さまかけて替る氣ハねへから手前も替らずに呼んでくれたがるへ【色】
そりやァもふお前セへ來ておくんなんせばどうしてわつちが替るもんでごぜんすなぜか今夜ァ
□□□□□□□□□□□□□▫▫□□□□□□【山】あつちの客が待つて居よふぜ
へ【色】ナニよふごぜんす寐るとたわいハごぜんせん怖そふに□□□▫□□□□□□□□
□□▫□□□□ □□□□□□□□ □□□□□□□ 【山】ア、□□□□□□鰒と同じ事だ【色】おめへ鰒を喰なん
すかへ【山】くハねへじやァさそんな喰ふ物を【色】ヲヤ〳〵ほんにお前方のほうじやァ肴に色
〳〵の諢名が有そふだ子【山】ゥ蛸が天蓋海老が緋の衣鯨が大僧正の【色】ナゼ大僧正とハへ
【山】ハテいはしの事をバ紫といふじやァねへか大そう正でなければむらさきやァ着られね
へからさ【色】ヘェ、成ほどれ鰒の事ハへ【山】ふぐの事ハ素人がてつぽうといふけれども夫
じやァ知れるからせつほうといふのさ【色】フゥそんなら十三日からふぐか初るのかへ【山】
ナニサそりやァほんの説法さ【色】ホ、、〳〵おめへ又いつ來なさるへ【山】廿日過でなかァ
こられめへ【色】ナゼいつも午の日にやァ笠森ィいきなさるじやァごぜんせんか【山】どふも
それでも説ほうでも初ると當分ハ出られねへ【色】そんなら廿日過にきつと來なよそしてわつ

ちやァ又あつちィいつて來やすよ今にお國さんをよこしやせふ〔山〕ナニあの子ハ寐て居よふから可愛そふにもうよこさずともゐへハナ〔色〕そんなら淋しくと寐て居な又追付來るから

とおくの戸のはしごを下りて小袖をたし
おもてのはしごを上りてそつと□□□床へ入

もしへ／＼〔客袖平〕アゥ、、、、／＼〔色〕ちつと目をさましな是さ／＼〔袖平〕ゥ、、、、くあゝ醉た／＼〔色〕よく寐なんすのゥ〔袖〕何時だへ〔色〕モゥ追付夜が明やす〔袖〕そりやァとんだ事たお前またゐへ時分に起して吳さつしやればゐへ〔色〕それでも心持よく寐て居なさるものをわつちやァほんにまんじりともせずにお前の番をしていやした〔袖〕それでもさつき余り喉がかわくから水ゥ呑に起た時ハ居なさらなんだ〔色〕ヘエその時ァ水にいつた時でごぜんせう〔袖〕いゝにやそふじやァごぜんすめへ水がねへから手水鉢の水を呑にいきやしたか小用所の戸ハ明て居た物〔色〕ハテ子そんなら勝手ィ一寸と寄た内でごぜんせうそりやァまあゐへがお前又いつ來なさる〔袖〕コウトけふあすハ出があるしあさつてハ御番あさつて比に來やせう〔色〕そんなら待て居やすよこりやァほんにもふいつも／＼おそう／＼でごぜんすネ、、／＼〔袖〕そんならおいとま申やす〔色〕アイおさらばへ十兵衛どんや歸らつしやるよ 戸の音 ぐわら／＼／＼ 鳥が かあ／＼はやほの／＼と朝霧の嶋かくれゆく船繫松に人麿の社をたづね笠森いなりの兒手柏におせんが面を忍ぶ見はてぬ夢ハ感應寺の見得と

二〇

なりきのふもけふも日暮(ひぐらし)の里(さと)にうかれて又入相(いりあひ)の上野(うへの)の鐘(かね)に花(はな)やちりぬるいろは茶屋(ちや)とし玉簾(たまだれ)の内やゆかしきとあさき夢(ゆめ)、ミしゑひ心地(ごゝち)なるべし

笑止　音羽

三味線の音羽の瀧のミなかミにのぼりつめたる九丁目のはしからはしを見渡せバ青柳櫻木こきまぜて錦にまさる絹か木綿敗【若ィ者十藏】モシむし〳〵【客源六】何屋だ【十藏】若竹でござります【源六】ゑへ女郎衆が有かの【十】マア御ろうじやし揃ておりやす【源】そんなら見よふか見るハほうらくだ【十】へ、、、それお市さミせだよ【子供お市】アィお見立がおぜんすよサァ爰から御ろうじやしどふでおぜんすへ【若竹の女房】どけへお出なすつても同じ事でござりますサァ〳〵お上りなせんし【源】鳴さんがそれほどにいゝなさるから上りやせう【女房】それハもふ有難ふ御坐りますどの女郎衆へ【源】こつちの方から四番めだ【女】アノひかるたばこ盆かへ【源】ウ、あれ〳〵【女】重野しまやよサァお市表ざしきィ入もふしや【市】さあお出なんし【源】どこだ〳〵【市】アィこゝでおぜいす【源】なんだ書たハ〳〵あんどんィ手習をするそふだのコレ茶ァ一盃くりや【市】アィ今に上いす（下へ行）【源】（此間にふところの錢を出しあんどんの下へかくしそしらぬかほをして鼻歌）蟬ィのぬゥけがらァで身ィハこゥこにのふヲ、けの【市】サァお茶ァ上んせう【源】ヲットよくしたコレ女郎衆の名ハ何といふ【市】どの女郎衆へ【源】知れた事おれがやつよ【市】重

野さんといひやす【源】はやく連て來や【市】ヲヤけしからねへ今にお出なせいす　と又下へ行暫くして硯ぶた持て　サァ重野さんよふおぜいすよ【重野】おいでなんし【源】あい【市】サァおあんなんし【源】ウ、つるてくりやヲツトよしくサァ上んしよふ【重】おさワり申やせふ【源】久しいもんだがまづくさ【市】サァお出しなんし【重】つぐめへよ【源】ナゼのミなさらんか【重】アイねつから給んせん【源】どふもおしきせの酒ハいけねへの取にやろうか【重】あがらバお取寄なせんしわつちやァ給ずともよふごぜんす【源】そんならよしやせふわたしもそんなにやァ吞やせん【市】茶びんでもお取よせなんし【源】甘へ物ァ氣がねへ　【市】重野が方をむきてしたを出す【重】目まぜでしかる　【重】サァ手前にさそふ【市】わつちやァいや【重】そんな事が有ものかそんならお前又上んせふ【源】おセへよふか【重】イ、へもふ同し事てごぜんす【源】サァつるでくりやおれより外に吞人ハねへ【重】サァわつちがつるで上んセふお市ゑへから置ていきや【市】アイそんなら置て參りやすよ【重】ウ、よしくサァお出しなセんしく【源】是ハ憚りヲイこぼれるく此盃のやり所にこまつた初會のひとりハさへねへもんだの【重】どふせ又おなじミ程ゑへ事ァごぜんせんのサ【源】いゝにやサひとりで惡いといふ事さおかしくきゝなすツちやァ惡い【重】ナニサお前どふせ名代同前のわたしだものサァ何ぞお取なセんし【源】どふも何も喰そふな物ァねへ【重】海

老れへ【源】どふかくせへよふだなんだか鬼界ヶ島の汁の實を見る樣に鹿角菜ばかり澤山だ【市】鉢ざかな持來ル【源】そりやァなんだ〳〵【市】差身でごせひすおあんなんし【源】まぐろだろういや〳〵いつそ豆にしよふ團子のねへ月見だと思つて【重】コレお市や爰へ耳を出しや【市】エあい【重】よ【市】あい〳〵【源】なんだちつと聞てへの【市】お前のお聞なんす事じやァござんせん と出て行【源】何の事たおれにもちつと聞セなさらんか【重】ヲヤ聞なんセずともゐへ事さ【源】それでも聞ねへじやァどふも氣にかゝるハ【重】そりやァおなしミの事さ 【源】とつんとふりむく わしよふ事なさにいけぬ酒をめつたにのむ【重】へたばこも呑あきはな紙を出し鶴をおる此間しばらくのてれ也【市】膳を持て來てだまつ二源が前へ【重】さあお吸なセんし【源】氣がねへが一ぱい茶づろうか其內着かへて來ねへ【重】アィおそろしく氣がつきねへす市おめしをもつてあげや といひながら下へおりる【源】そんなら茶を持て來てくりや【市】アィ持て來いした【源】氣のつくもんだのサァかけてくりや【市】お吸物をおけへなんし【源】ィ、ニヤもふいや めしすむ【市】お膳をさげいすよ【源】ドレまちや〳〵茶をのんで仕廻ふサァよし〳〵 【市】膳をさげる【十藏】サァあつちィおいでなさりまし【源】どこだの【十】廊下ざしきで御座ります　私が連申て參りませふハィ爰で御座ります【源】こりやァ小便所ィちかくつてきついかすりだまだたばこ盆が來ねへぜへ【十】あい【源】そしてのあすこの行燈のしたに例刻が有よ【十】ェあい と今のざしきよりたばこぼん共外はこびハ.

ィ御きげんよふ【源】有たろうの【十】アィいたゞきました【源】そんなら休なせんし　しばらくすぎて

【重】来りねなんしたか〳〵　といへども【源】少しもたせぶりにねたふりをして言もせざれバ【重】ハそつとはいりあふのけにねて　唄へつらやあきたよヲこの屋の

つとめヱ、、引　とうたひながらまくらもとの火入にてたばこのこしが何思ひけんついとたちいでゝ行【重】ハそらねいりごう〳〵といびきかきしがあやにく目がさへてねられハせずひとりまぢ〳〵たばこばかりのミてまこどくらせどふたゝび来ぬゆへたばこの火きへたるにごうをにやし四ツ折のはん紙を引さききせるのがんくびをつゝミ行燈の火にぼや〳〵ともやし内へひとひき引と脂の来るに又ごうをにやしそのまゝ吸口から壁へはたきつけはらたちまぎれにめツたむせうに手をたゝくやゝしばらくして【重】聞つけて来ル　ヲャそふ〳〵しい何でござんすナ【源】なんだそふ〳〵しいコレ大概床ィ来る時分も有そふな物だモゥ何時だとおもふ【重】まだ四ッ過でござんせふ【源】ツレそういうあんけつだ今八ッゥ打たれな【重】よふござんさあナ八ッが人を取て喰やァしめへし【源】ナニ又荒井のふんまじやァなし人を喰ふのくれねへのといふのじやァうぬが来るが遅へといふ事たわい【重】さつき来たけれともよく寐ておいでなんすから起し申もわるいと思つてあつちィいきやした堪忍なせんし【源】なんだ堪忍しろはくセつかう泣やむねゝさましやァ有めへしそんなあまつたるい事で堪忍する野郎じやァねへわい【重】それでもお前わつちが悪いから誤りやすに堪忍ならざあどふともなセんし【源】とふともしろとつて首を切て灰吹にも成めへし腕をもゐて香の物にもされやァしねへがマァよく考て見やがつたがふへ命から貳番目の錢金を出して　晩買切て置くからたゞそれに夜ひてへほつきあるいて居やァがつてどうともしろたァ何の事た【重】

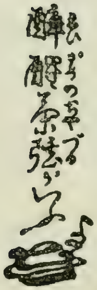
それだからかんになせんしといへバならねへとおつせんすもんだからとふも仕様がごぜんせん【源】なんだか又こいつが禪宗坊主ゥ見るやうにつべこべ〳〵口ごてへをしやあかる力持の女のよふに成ばかり大きいかと思やあ座敷の内から大きなつらァしやかつて胸のわるいたかで今の相場なら壹分に百四十八文込三人といふ女郎衆た余り高くとまる風じやァねへハサ【十】來ル是ハ旦那どふでごぜんす重野さんどふしなせんたへ【重】いゝにやサ宵にの【源】宵にも何にもいらねへおれかいつて聞セふ此ふんばりが今まで何所へかうしやがつてばか〳〵しい賣ねへ駒牽錢を見るやうにふとんのうへにおれひとりおきあがつたがそれにもとん着するやうないやミな事てもねへけれどもたばこの火が消たから手をたゝへたら泥龜だそふでつらァ出しやァがつて眞の振をしてそう〳〵しいのやかましいのとぬかしやァがるからの事さ【十】そりやァ重野さんもよくごぜんせん【重】いゝにやサ宵に來て見たらよく寐入て居なさるに仍て【十】それだとつてもお前モゥ追付七ツでごぜんセふマァ何所へ行て居なせんした【重】ナニサお筆さんの客衆が宵立だからあの子の所へいつてうたゝねをしたらつゐ今まで【十】ソレそれが悪ふごぜんす何處の國に客衆のあるに余所の座敷ィ寐るといふ事が有もんでごぜんすイエもふ兎角此子がワるふ御坐りますから御堪忍なすつて御きげんよくおよりましへ、、、、〳〵ハ、、、

く【源】いゝにくひ事てごぜんすが事とすべによつちやァ此土地をはき地にしてすもふ取草にぺん〳〵草ばつたこうろぎきり〴〵すを鳴せる法もしつて居やす【十】そりやァもふ如才のねへおかたと申事ァ一寸と物をおつせんすのでも知れやすマァ何かなしに今夜の事は私に下さりまし【源】よふごぜんすこんたに昇られてあつく成のじやァねへがわつちだとつても理も非も聞わけねへ一國な野郎でもごぜんせんそれほどにいはつしやるもんだから何も公界だなんにもいはずにおとなしく夜のあけるまで寐ていきやセふ【十】そりやァ有がたふござりますさあ〳〵およりまし重野さんねかし申なせんし【重】さあおよりゐし【源】ァィ寐やせうとつて【十】まだよつ程およられますハィ左様なら【源】これハ大に御苦労でごぜんした【十】ナニお前へ、、、、、、〳〵ハ、、、、、〳〵跡ハ闇ぬけの床入にたがひに無言のしり合せ【重】ハごう〳〵【源】ハあゝ〳〵いびきとあくびのかけ合にやゝ時うつればはや明けわたるしのゝめの空花の雲鐘は目白か護國寺歟うきたつ春の心哉〳〵

跋

行粋の流は同し人にしてしかももとの野夫に有らず土氣のとれたる吸物好梅咲宿の春しごとこそのまゝなるふる衣ふるきをたづねて新五茶のいやみからこもなには江やあしとハ人の云らんも唯吉原のよし〳〵とつのぐむいろはほにこへてみとりの色香深川のふかき淺きハくこ分てしる人ぞしるじやれ仲間ちかゝらん者は目にめじろ遠からんものハ耳に音羽の音に聞遊子方言辰巳の岡高をこのむはなつぱりむしろつまたて望んよりハ火の見はしごをのぼりてこそ他の高慢の鼻柱をしらんかしかし味酒の密をねぶらせて終にうつはきに剝とらるゝハいづくも同じ狂

言綺語さん茶梅茶のかね四ッきりの表茶屋はいり寝て解く文庫結びの黒繻子かひや〳〵さワるも何とやらんさう〳〵敷引茶屋より取よせての飲喰もむねつかゆる心地ぞするをましてや茶漬茶碗にもりたる心太を御夜食と覺たらんも尙おかしからぬかハ



根鷽亭劇日記　全一冊
見物くらあるかれせの坐を見て狂言幕中間幕合の

大平楽巻物　全
まびろうまつぬのそらとみかわらさ見ぐびのあり

道中粋語録　全
これハ深川とひれへてれ合羽井深の地の大家のてんさんを見

愚人男居續傭金　全
當世男大さつがたし大尽男の外小仲町の大一産を見る人

深川新話　全
此ほど大尽の裏やしきのある切ら腹やぐらの此ぐし

深川粋見　全
深川女郎のせちくるのあるものかたり

南客先生文集　全
高瀬の風俗女郎のいきこまつ音の究をさらしくくりが計

世說新語茶　全
深川山下いろはの三の極秘密のあそびをあつめん

甲驛新話　全

みもしらぬ新宿の繁昌はなしにて世界のあそびをしられ

粋町甲閨　全

これも同じく四谷の奥にて四ツ谷とんびもりくろうもおかしき趣を書き

賣花新驛　全

お宿の役の女男人情の内所から実をとらへたるあそびあり

通人挑訶　全

やがてはきらの仲町のそれ相応の山びらきの風俗を書す

遊里怪談　全

吉原深川新富のかりる遊のをかしみを書す

高楊枝　全

ふかならず見る目悔しく思ひつくれおそといふなあそびあり

洒落本類目録

江戸橋四日市

上總屋利兵衛

大通多名於呂志

大通多名於路志序

大哉通也。通哉大也。大と通とは二枚の屏風。雌雄あはせて遊里に行ふ。鈍作何そ大通の蹴轉ばせを知ん。友人大通濃根原を問。愚謂逸知己哉。意氣知己なるかな。確氣の一心野魯麻の雛卵。海男子となりし覇王樹有。日外下の籠祭の夜。諸君さま方藝者衆。多の中に藻麗た事。好た道故端〳〵を。小耳に挿んで質意となし。妄た彌八と万八の。其尾に取附赤恥を。黒〳〵と書集。澁柹を串柹にせん物と。卷てみす帋に包で有。敢ておしむへきにあらずと。小册を與ふ。友人歡で曰。どふせふのふ書林えやッて見いせふと。外題は大通たなおろし。笑の種を卷

んとて。にこ〳〵持て起ッ処を。押て向ふつらえ廻り。

自序をなすこと左のごとし

如[illegible]く

如虎くの

夜なべ述

むだらく

次第

發端

ワキ 長はおりひわ茶のひも銀きせる持
シテ 惣髪なでつけ唐しやうぞく扇子持

猪牙やよつ手とかわれとも。〳〵 おなし穴なる遊ひ哉 詞 是れ意氣の國より出たる通丁と申ものにて候。我よの中のはやり事に心をはこび。普く娼家を巡り馬鹿の道をも修行仕候。此ほとれ丁國の床よし原に候ひしが。かくべつ新らしきことあらまほしく候間。承りおよびたる唐へ渡り。通人とも出會仕。よき趣向をもおもひ付かばやと存候。

道行 ワキ 床よし原をふりすてゝ。〳〵。隅田の川のにごりなく。今戸眞崎よそにのミ。三圍り土手の鳥居迄。實にも粋なるけしきにて。人の心の瓦しと。晝は みゆれと夜な〳〵れ皆地廻りとかわるとや。手拭下駄れ新らしく。ふら〳〵あるくその風情居 候 とれ是やらん。〳〵

ワキ 詞 そつ〳〵まいり候ほとに。是れはや向嶋とかや申候。國分ぱく〳〵にいたさばやと存候。

シテ 詞 のふ〳〵それなる通人へ申へきことの候見申せばそのたけ衣物のことくなる羽織を着給ひ。さながら帯ひろはたけの姿にて。當時のいきちよんおもひ深川の遊ひを。よし原に品川。唐人酒落を一見とは。とんだおあんじにて候もの哉。よく〳〵御心をつけて。御覽候へ。おのそミの唐は則こゝもとにて唐人もやはりそれがしにて 候 ぞや

ワキ 詞 是れけしからぬ事を承り候もの哉。只御こと葉を万八とおもひ候さりながら。御身の名は何と申候ぞ

シテ 詞 唐人と申うへかられ。權兵衛八兵衛に

てすむべきか。その名も陳芬漢歸來ワキそも日の本の地に住て。唐と嘘つくそのいわれハ詞花火のからか雞卵のからか。たゝしハ我をぬけがらとおもひ。南無からたんのうにし給ふか、シテ詞いや〳〵夫ハ悪すいなり。山川萬里をへだつれど。人の心のおなしき事シテ詞唐も倭國も。ワキ詞四國も。シテ詞佐渡も。地上みんな天地一枚の。〳〵。日月ハ是同じ。一處の船のうき世なれ。何國のうらの角からすみ。洒落も穴も居ながらに。はかる人こそほんとうの。大通人とあおぐなり。わざ〳〵行て見る事ハよし丁にするが丁か傳馬丁本丁の事也。おせわとおもひ給ハずとも。よく〳〵耳に入レ給へと。陳芬漢ハそのまゝに。あたりの茶やへ腰をかけ行衛もしれて見へにけり〳〵シテまちうたひ後シテと云所ハすぐにおはなしにしやしやうワキ左やう〳〵是からハやつぱり例の通りサ今までの事ハ發たんかゝさん　扨時に通人。唐へ行とハそりや。おまへほんかいなア。アイ何でも行かゝつたから行かにやァすまやしねい。ア、わかひ〳〵。若イがやうなおたふくに。唐へゆかふなどゝハ。どの三德から出た事だへ。ヤイ〳〵通丁なんじその心ざし有ル事なっ我通りきをもつてよく知り。此處にまちうけ。留ルとは虚當すいりやうで留ルのだっ唐へ渡るハなんでも。大の點ちがい。ぐつと蒔直して出たまへの。むかしかぶ。むかしもさる茶めし有。豆腐の太子のでんがく。傀儡傳と云男。日本の洒落を試んと。

三兩一分をぐいがりして。路銀と溫め船に乘り。長崎迄ハ來りしに。かの倡家でおごりかけ。みんな舐て仕廻たゆへ。江戸へ出よふにや銀ハなし。唐へ飛ぶにやァはねハなし。川留メでハなふて。唐留メに成り。科のない俊寛と來て。足ずりの替り石摺をこしらへ。やすく賣ッてくらす内。海の岸へすゞみに出かけた時。釣をして居タ翁と心やすく成ッて。おとし咄や口合を。一ッ二ッ互に國のおもしろいはやり事を聞問してハ。唐でハ詩がきつい流行やふ。私が友達の季白と云フ男ハ。一斗酒を飲ンで。百篇の詩を作るなどゝ。唐みへを云。日本じやァマァ何がはやりますと。翁もこゝぞと。哥がぶら〳〵流行ます。人ばかり讀でもない。蛙鶯その外。猫も杓子も。哥で暮し。夫斗か。東埔瓜。甘薯なんぞか。笛をふいてはやすやら。挑灯がものを云。うつし繪がはたらく。四國の猿が。讀うりに出ルやら。とんだ賑やかなことたと云へバ。どふらくも肝を潰し。そんならどふぞマァ。哥を一首たのミの。腹つゞミ。イヤ〳〵先ッ詩から先へ聞ゥかるかやおミなべしと。口合のしたから

錢代脫レ衣否拘レ貸

半分策レ駕願ニ美艷ニ

ト云ければ。面黑く〳〵日本の哥も只こふ云とこさト

苔衣黄なる博多の帶をして
　きぬ〳〵に野夫下鄙をする哉

トよめバ。扨〳〵その身ハいやしき釣人で。こんないきな哥をよむとハ。どふりでこわ茶がとふさらさと。譽るうち。彼傀儡傳もろこしへ。一時に吹返して。四五日頭痛をわづらハれした所。朝鮮の弘慶子が藥で。なおつたとさ。跡で聞ケバ。扨〳〵日本ハ大通國。おれが長崎で無錢に成ッたを。能呑込風を起して一時に、路銀入らずにかへしてくれたハ。去りとハ情の有ル國だんのふと。感じ入つたとサ。又彼翁ハ住吉大明神の末社とやら。太鼓打とやらだそふさ。こふ云事も有事だから。妄ッたに唐へ行ッても。今でハ傀儡のよふな通も居ず。とんだ惡洒落ニでも出會。譯もきかずやりばなしに。昔の意趣がへしでもされたら。大の屈たく共上。怪我でもしてハきつい損。こゝをおもつてわたしが留ルのだ。なんと無理かへ。成ほどどふでも先生だ。故事を引ての御異見。有難〳〵ヱ、所で御對面いたし。ぶなんそく才で暮そふと云もの。迚ものお世話次手に。彼大通の近道手ばやい所を御講釋が。承りたいサア〳〵。ねがい〳〵ねがいものハ新造禿。コレハ〳〵いたミ入ッたおことば。下官など大通の道そんしたなどゝハ。いかな〳〵。當時。表子買仕打恰好。さま〴〵小本に出板の事故。どなたもよく御そんしで。

さりとハ御功しや。洒落たくさんな世界。角ドのとれたること。髪の有坊主も同前トハ申セ〻弘法にも筆のあやまりで〻。少しづ〻ハ落こぼれも見へますから、悪洒落達も出來たがりますテサ。御評判のよしあしハ後篇の事。先ッ一ト通り御耳へ入れやしやうか。エヘン〳〵まづみへでも四重でもござりやせんか。私も若イ時ハ一ッて十五匁の帋たばこ入一本で一貫する松魚は〻。あんまりめづらしくもおもひやしなんだ。そして何ンでも闇雲洒落にしやれのめし。新五左どのや。野夫太郎さんが嘲してもすりやァ。不二山を詠て反魂丹を丸める心もちでごぜいした。扨表子買も人の氣〻。おとなしくするものと、侠を好人と。色身で遊ぶと。さわいでばかりたわいもなく。うかれる客人と。夫〳〵に變りハ有レど。道行の所で行付。先ハ皆ンな粋不粋ハねいとの御神詫。したがその行ク道にも近道、廻り道の不同が有ッて。損徳二ッの境有馬山。もちろん女郎買の道ハふんだん金を蒔繪にして。下卑なく大まかに遊ぶものとの夢想なれども。こりやァ云ハずともしれし御事。女郎の氣取リ次第て金のあんより入らぬ様に。内幕で馴染ことも出來やす。コリヤァかの通の仕事サ。マァ〳〵ちよつとした投入の處は。初會の女郎で閨まちの時。少シばかりのおそいを氣をもミ。狸寐と出かけ。またぬ風で御出なさる事ハ。決して御無用とんと孫子の代迄させぬ事サ。女郎買に行キながら。こねいとて直に寐入様ナ情な

し。付合しらずでハ埒が明キやせん。女郎が來て主ァ寐さしつたそふだと。立ッて行時コレくと呼れもしめい。また初くわるから待くたびれるほどの事なら。とんとうらなどに行事ァねいから。むり寐入もりきミもなし。ぐい寐のずい起。奇麗に歸る事サ。夫も女郎を寐ごかしなどハおよしなせい。何ンでも空寐入で閨へ來るを待かけとハ。氣のしれたしやれ。マァこんなこゝろへちがいから。諸事不洒落と名が付やす。又とても三會や四會でうまい所は出來やせんのさ。その出來るのハよく／＼むかふからのほつて來てか。但し大極の通でなければハねいとおほしめせ。万事情の達ッた事をしちァいゝ事ァなしサ。こりやァ女郎買の道ばかりでなし。常の付合にも有る事。うつくしいばかりで實情がねいと。居風呂桶へ金ばくをしたやうなもの。とかく化粧のない實付合ハ唐でも倭國でも味ミが有ッて變りやせん。先ッ大通の根元ハ是から生れやすよしかへ。我身をつめつて。人のいたさをしれとハ通のこと葉。野夫／＼と口きたなくおろし。跡のつゞかねいミへなど云事ハ。通人のせざる所。どんな通達でも二日でも　はじめハ皆ンな野夫。生れながら通人ハ千人に一人も有るか無シ。通ハ通でとおり。野夫は野夫でもてる事サ。筋のいゝ野夫ハ悪洒落さんよりかわいゝトサ當世こと葉はやり着もの。中すり大キく髮ハ少し。まミへ細しの水茶やしやれハ。少しばかりけいこすると。取りたての信濃どの

も出來やす。もてた〳〵とはなしをすりやァ。ふられた數取りとさとられるにこゝろつかす。形りの洒落に屈たくして。心の通は闇の礫。人のまね斗してくらさずと。てん〴〵の思ひ付で。ぶしやれでねい衣類も有。似合ぬ人も有又出來ねいものも有ルに。いきちよん姿でなくつちやァ通でねいと心得るハ。本の蝙蝠眼といふものサ。こんなのぢやァまた〴〵大通の道へハよつぽと遠い〳〵。抑通と云事ハ身六藝に通ずるもの。七十二人との御觸より。大通のことば流行出し。通の字の付たもの並大躰の事かいなァ。中〳〵小サな事ぢやァございせん。随分大キな用に立ねいければ大通とハいゝやせん。先ッその印ハ。通し馬でも通し駕でも心やすくハねい事サ。通夜をするハ大願有ル人。燈にあり通し。神通といィ天眼通と云。錢に通寶の銘有レハ。三十三間堂に通し矢の高名有。街にも通リ丁ハ人のしる所。大門通りもその名ハ廣し。うら店でも通りぬけハむつかしい。謡に通小町有レバみのうらに通ふ神。座敷に見通し。法印に見通し。足をはこぶを通行と云。仙人に通力。千兩金を取ルものハ大通辞なり。通俗ものハよく分り。通用散有レバ。通和散あり。是等の通の字でよく〳〵御考へ手前から通などゝハ。おもハぬ事〳〵。人が付た通の字でなければ。交りなしの通とハ云ハぬ。人をおろしぶち格子。穴を云たかるお通人ハ女郎かいに行く時も。いろ〳〵工夫して公事訴訟に出る氣に成ッ

て。氣もミ入道でいやがられる。大の野夫頭。かわいがらりやうとおぼしめさすと。にくかられんよふにするがかんじん。通のまなこ爰を。よく／＼修行して大の情しり。大通人となりやす。とれ云へ。やつかれなど講しやくれ高慢でも何んとしてもて株と おぼし めしてはきつい間違

そんな世界れついそねれ事サ。アヽ

喉がかわひて來た

ますお茶でも給べャ

しやふ

大通多名於路志　大尾

跋

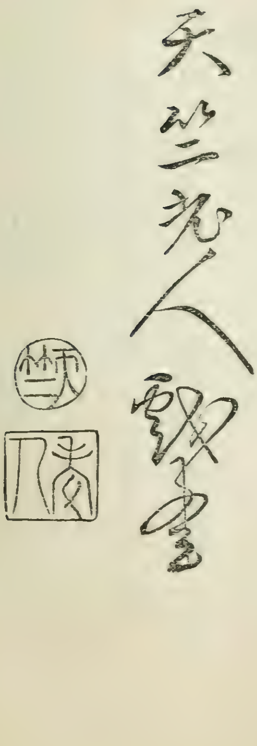
傳曰、士は賢不肖となく大門に入て洒落られ、女中ハ美惡となく、洗湯え行も駒下駄を躡。誰か云、異娼家驚動なくんバ、大青樓俳優徒錢たらよかろふと、巻舌ハ俠者の門口、秀句は套語の飛石なり、河豚の勢鮟鱇を茶になす、其茶店娘妓女を徒足にすることく、舐が如く精神を脫焉がごとしとは、夫諸之をいふか、男女各洒落を異にし、童子格子の汗を流し、瓢納の嘆息、嗚呼隨意ならぬこそ浮氣なれと云爾

古今菓要物

序

やまと歌はたけき心をも和らげ鬼神をも感せしむ男女の中をも和らくるは歌也されば犢鼻褌もてゝらといへば歌にもよまれ下紐といへば雲の上人の口号ともなりなんかしものは言様言品にて仇し仇浪寄ては返る波淺妻船の淺ましやといへばさも麗しく聞ゆとなん取もなをさず今の世に船饅頭ともて囃す此道の蒼妓肥滿〳〵の阿千代てふもの新飛てふ白拍子にまみへて生活の不祥を説破り浮世の卞和が替玉となりて女閭の寓居に目下見し兩尾三舍の荒唐を口かたましくも言たるを慣熟の奴が供待の聲高に語りしを予物蔭より立聞しか言葉のはなはひくしといへ

ども見識れ水道尻の火の見より高く彼の泥郎が得難にしたる跖婦傳の趣にもおさ〳〵劣るまじと筆にまかせてかいつけ太平樂卷物と号す希は四方の君子鼻の孔の行届ざる所は瘡深ひ奴が脫瀉たる事も多からんと万事茶にして見給へかしと云爾



峯周画

名物の饅頭ハ皆様御存のぼちや〳〵。
川端の苫船ハ普賢菩薩の御縁起。
柳腰の取形ハ江都妓女のしやな〳〵。
縮緬の二布ハ尻喰觀音の御戸帳。

太平樂卷物

阿千代之傳

泯江の源は觴を浮ぶべし。楚に入に及んでは。舟船にあらずんば渡るべからずと。毛唐人の陳奮漢を。三十一文字にやはらぐれば。〽よし野川その水上をたづぬれば苔の岩間の雫なりけり」。此歌の心をやはらくれば。水のながれと人の身は。よるべ定めぬ川竹の。あるが中にも取分て。浮ふししげき浮れ舟。苫もる名代隠れなき。ほちや／＼の阿千代といふ。船饅頭の品者あり。おちよだァなァこうよつていきねェなァこうとよびかける。鼻聲もどふやらあぢに可愛らしく。これに打込折介は。心の竹光うち割て。うつゝをぶんぬきまことをつくし。そゝり手合の俠客は。手ぬぐひのあいそめてより。日和下駄の鼻を落そふとまゝよてんぽのかわ財布。そこをはらつて通ひつめ。永久ばしのこまよせにて。磨墨のまつくろに成て。いきつきあらき戰ひに。われぞ先陣われ一陣と。梶原が逆櫓にひとしく。舟軍のかけ引にて。喧嘩口論たへざれば。所の番人さし置がたく。六尺棒にておつ拂ふ。是辻ばんから棒が出たと。童謡にいふ所なり。ころし

も三伏の夏の夜なりしが。お江戸にその名立花の。新飛といふ藝者あり。客人は四季庵から仲町へはしけて仕舞。相仕の小まきと舟にてもどる其折から。「新飛」ナント小まきさんこの比名代のおちよとやらいふ船まんぢうを。はなしの種に船へ呼んでなぶつて見よふじやァあるまいかどいへバ「小まき」ホンニこれはいゝ所だねェと廻しにたのめば。心得てたれだ〳〵と聞うちに。おちよが舟にたづねあたり。酒のあいてに此船へと。のりうつらせて見た所が。むきみしぼりのもめんゆかたに。黒もめんの手拭を。はしと〳〵でむすび合せ。帯と見せるは仕似のいでたち。やき付のかんざしで頭をかきながら。おくめんなく座になをれバ「新飛」取あへず。おちよさんとはおまへの事かへ。佛千人神千人世間をちつとも廣くするは。わたしらがつとめのならひ。これをゑんに心やすくしてくださんせながふいへバどふやら圓子らしいが。あつたら器量をもちながら。さりとはいやしいおまへの商賣。とてもつとめを仕なさるなら。せめて女閭の河岸へなりとも。出なさつたがよかろふではあるまいか。おしたてならみめかたち。あつぱれお職といつても。たれか點の打人もあるまい。もしまた藝者になる氣なら。わたしが妹分にしてひき廻して上やんせう。ちつとはなへ聲のぬける所は。新内のふし落に。うつて付でござんせう。すべてわたしらが商賣は。うじなくて玉のこしとやら。身はいやしふて

も。能衆のまへなどへ出られて。面白い事やおかしい事を見るばかりはつとめの一德。又さもしい事ながらうまいものは年中くひあき。これもみんな藝のおかげ。ナント今から船まんぢうをやめにして。藝者をして見る氣はないかへと。むだ半分にいゝければ「ちよ」くつ〳〵とふき出し。ホンニ夏の虫がこふりをわらふとはおまへがたの事じやわいな。ふなまんぢう〳〵とおしさげていはんすけれど。ふなまんぢうの尊ひ事。あらましつまんではなしやしよふ。こうがくのために聞ておきねヱなア。かふ唐の詩經といふ本に。漢に遊女ありといふ事がある。漢とはひろい川の事。遊女といふはうかれめの事。川中のうかれ女なら。船まんぢうではあるまいか。さうすりやァわしらが商賣は。人のおしへのもとゝする。五經のなかにも出てゐるぞへ。また朗詠にも秋水未遊女の珮を鳴さずと。四角な字で書てあれば。きつとしたけいづじやァあるめへか。貞家卿うかれめに寄する御うたにも。「〽心かよふゆきゝのふねのながめまでさしてかばかりものはおもはじ」。これ川なかにふねをうかべて客をまつ風情をよめり。すべて遊女といふ文字を。うかれめとよみ。うき川竹のながれといゝ。越後の國ではうきみといひ。又ひや水となづくるは。ひつふかひといふ事なり。大坂の新まちでは。太夫に付を引舟といゝ。はじめて客にあひそめるを。水あげとしやうくわんし。はじめて勤めにいづる者を。新艘となづくる

ハ。あらたにつくりし舟によそへて。のり初らるゝといふ事也。なじミをふかき淺きといひ。ゐつゞけをうつをながすといゝ。心がハりを水くさいといふ。なんでも女郎の身のうへハ。たいてい水によそへてあれハ。ナント遊女のはじまりハ。船まんぢうであるめへか。そのかミハあさづま船といゝたりしを。まんぢうぶねとなづくる事。つく〴〵とかんがふるに。むかし西行法師にまミへ給ふ。江口の君。三十二相のすがたをげんじ。普賢ぼさつとあらハれ給ひ。めされたる御ふねハ白き象となりたるよし。象ハもとよりまんぢうを。すくものゆへうかれめののる舟をまんぢうぶねとぞなづけけん。また一切を三十二銅にきわめしハ。三十二相のゐんをとりしものならん。なんじややらおまへがたハ。いつざとじやのくるわじやのといわんすが。これもとうろうの時分か。にわかの時。おきやくのともでゆかんして。おもてむきばかり見さんすゆへ。温和らしう思ハんしよふが。ないしやうへまハつて見ると。精靈さまのもりもの同前。内と外とハ大ちがひでごさんすぞへ。わたしもかへ玉になつて。まる三年あづけられてゐるうちに。とつくりと見て知ておりやす。むかしから替らぬものハ。引四ッに大あんどんもめんかぶろのとりなりハ。菱川がむかしゑのぬけ出たるかとうたがハれ。正月の伊達ぞめハ。一蝶が名所遊女を眼前に見るがごとし。つるべそばハほそきをきらハず。やまやがとうふハ白き

をいとはず。竹むらがまきせんべいはあたりのかたきをしやうし。なかの街のこぶまきはごたへのせざるを感ず。かんろばいは下戸くらふて舌うちし。そでのむめは臍潰腹してケツプくす。八さくのしろ小そでは。時ならぬに何の雪ぞ。七月のとうろうはやみなるに何の月ぞ。うちへむけてのまつかざり。あらごものざうにもち。庭の焚火に草市小そで。春のさくらは秋のにはかとかわれども。かはらぬものは。家々の。かくしき。どふしよふはま屋におざんす。松かわ屋にいんすりんすのことばのはしに。むかしの風がのこつてはあるけれど。かわりはてたは娼妓衆の躰たらく。いにしへは十八樓の揚屋より。名ざしの女郎の名をしるし。おくに御法度の客に御座なく候といふ文言をしたゝめるを。あげやさしがミと名付たりとぞ。かゝる蕩々たる花街の粉頭が。相手かまはずつとめの外のたのしミと。人めをしのぶ間夫くるひ。それもむかしの高尾にしまだ。あげまきに助六。小むらさきに權八ともいふやうな。末の世までもうたはれるやうな事はなく。たゞわけもなくちわるも有。又近ころのはやりもの。こゝかしこで見た人や。つき合にくる客人のあたゝからしう見へるあいてに。惚身でかける色じかけ。どふぞ一度なり共つれもふして來てくれんなんしと。みあがりの二三度もはりこめば。こけはむしやうにうれしがり。あしが付たがさいご。ぬしにやァなにもかくしいせんと。うちかぶとを見せか

けて。白化の金太夜ごき。下でもぬしに目をつけて。外の客人のじやまになるゆへ。にかいをとめると申いすから。なんぞ主の仕てくんなんした分にして。こしらへて見せいせんではならぬやうになりいした。じつにぬしのほかはつとめる事がしみ〳〵いやでおざんすから。ねつから客樂ははなれて仕舞。どふもしよふもおざんせんが。半金くらゐはいなかの客人にどふとも仕てもらいゝすから。どふぞ寝道具をしておくんなんしと。のつぴきさせずくゝり付ればい。身あがりだけの事はうまる。すつはり寝道具のできた時分。もらふあてがまちがひしたと。もらつたかねはあたゝまり。どうも顔が合されいせん。さう〳〵如在でない事は。これでゆるしてくんなんしと。ゆびのさきを少しそぐか。かみの毛の中でもすかしてやれば。童子格子かたんのふすると。むねのそろばんのけたを合せてはぢきこみ。爪のながさこゝろのうちのさもしき事。口にてはいわれもせず。さりながらそれも道理。入江町に居さんした。お跡はンが。臣市傳竹塚三浦屋の高尾はンに。いわんした通り。けいせいのものとては。錢が一文やうじが一本さらになし。みな客人のふところをあてにするきやうがい。どうしてこれが正じきに情をたつてくらさるへき。心は山うりどふぜんに。どうがなしてくゝり付ねば。たちまち借金のふちにしづみて。てん〳〵舞のをどりの拍子。これを來て見よ。かしへさげられ。またはまた女護のしまの惣雪

隱かとあやしまるゝ。ふしミのつぼねへおろされ。よるひるわかちぬてつぼふぜめのくるし
み。晝三ッのつけまハしのと。くらゐが付て全盛するほど。座敷代が月に嵩まい。しんざうま
でにつかハせるみすのかミから。おはぐろ代。茶屋の付金買ぐらひ。さま〴〵のもの入がおふ
く成。ものいりの多いにしたがつて。軍用金におわれて來て。おつつめハ手くだへ落。かふす
れバ客がせきこむ。どふいゝかけれバのぼせて來ると。あけてもくれてもきやうげんのすぢを
かんがへ。正月の元日からしハすの卅日まで。こゝをしきつてかふせめてと。ゆらの介が夜う
ちまへといふ氣になつてくらす事ゆへ。なか〳〵ゆうな事や。なさけらしい事にとんぢやくし
てハゐられぬはづ。こけをどしのかうやうや。哥書のことバをひねくるを。やさしい事と見給
ふな。有ていのところを申さふなら古人の句にいへるごとく。へにしき着てたゝみのうへのこじ
きかな。」これいまの世のけいせいの身のうへなり。さてわたしらがつとめのいきかた。こゝろ
いきのいさぎよきをはなそふから聞なんし。江口の君のながれハたへず三十二鋼のすがたを顯
じて。此かしはたのこまよせを。まがきとも格子とも。おもつて居れバ。いろざとのミせつき
も。さまでかくべつの事ともおもハず。內をバ船でのり出す時。冬ならバたどん二ッにかた炭
一升あさくさ紙の四ッきりを。おやかたから請とれバ。小づかひに追れる氣くろうなく。二階

の小用所ハくるわバかりとじまんらしくいふけれど。それハおきやくの小べん所。わしらが船のちやうほうハ。あれ見なさへとまのわきの四かくに明たところから。おいどを川へつき出して。しやツ〳〵とはじく氣さんじ。ゆく水のながれはたへず。あとハきれいなうしほをくんでてうづ水にも事かゝず。またあんどんのないうろ〳〵船や。一ぜん二六の舟そバが。まいよこゝをうりあるけバ。むかふの人をよばずして。ゐながら万事の用がたる。三十二文ときまりハあれども。五十六拾ないしハ百。なげ出して行客があれバ。上臈ハわしがほまちにて。かひぐらひの仕拂。明るひるまへかんぢやうすれバ。ものまへのくろうもなし。おせきさんの身のうへも。わしらがつとめもどふぜんにて。おもてを見るむだがなければ。もん日もの日のとんぢやくなし。錢がほしひともおもはねバ。客衆をたらすいつわりなく。ちよんの間の事なれバ。いろ男じやとてうれしくもなし。ぶ男じやとていやでもなし。心にまかせてふるといふわがまゝなし。わづか三十二文でなさけをうれば。くぜつをじぶくる野暮もなし。いやなれバ來ず。客にうそなければ。こつちに手くだもなし。いつはらざるよりまことなるはなく。まことなるより正直なるはなし。サァこれでも船まんぢうがいやしいかへ。またこれからはおめへがたのたなおろしじや。まづおとごさんのさしてゐさんす。ふたくべつこういおかたかぐしに。しのぎの

笄。まへかんざしの銀匁から。やすつもりに見たをして。十八九兩が物ハある。やなぎちやのどんすのをびに。ちりめんひとへのぶつかさね。ゑぞにしきのどんぶりぐるめ。これも十兩からがものハしつかり。サアそのかねの出どころをたづぬれバ。おめへがたの晝夜のつとめが。ふたりしばつて三歩づゝ。たゞきわけにしたところが。一歩貳朱にしかならねへぞへ。月三十日うりつめて。あぶミふんばり十兩あまり。そのうちを。百助がくこのゑぶらに。下村のぶたい香。あぶらもとゆひかミゆひ代。たなちんから飯米から。とゝさまかゝ㒵。まハしの仕着セ。内を出る時うちかける。火うちかまにひうちいし。こつぽり下駄によせ緒のうらつけ。諸しきくるめて勘定した。引のこり。おめへひとりの身じんまくにもたりよふかへ。そふしてミれば定式のほかにもらふ客が。たんとなくては一日もくらされやうか。また金をくれるだんなじやとて。むしやうにくれるものでもなし。そこがかのころぶとやら。けつまづくとやら。たゞハ起ぬつかミ金山寢すにとるくすりとはほつてもゆかず。うへバばかりハ娘の命でも。御本地ハ正はちまん貴女からつりをとるハおめへがたの身のうへじやぞへ。惣じてせけんのことワざに。どじやうの事をおどり子といふハ。汁がおもじやと云事なれど。いま時のおどり子に。汁氣が有たらそれこそほんに二ッとない鼻ッかけじや。またいゝ衆の前へ出るのを。見へらしういわ

んすが。とりもなをさず猫ころや。ねこの子を。おひざのもとへ引付て。なぶりものになさるとおなじ事。夫をよい子のふりをして。ひつかけるはなの高ぢやうし。五分なかのいたじめじゆばんで。座いとのミをきゆつ〳〵といわせ。きく岡がつぎさミせんに。千枚ばりのつらのかわ。さりとればちあたりのさいじりハ。ろくでもないこゑじまん。春ハさくらのむかふじま。きやくのはをりをひつかけて。おき手ぬぐひのはなうたに。すそハばら〳〵ばらをの草履。けまハしのうらもよふ。もれ出るあさぎのちりめんハ。しりくらひくわんおんの御戸帳が。はをりのかんばんと思われて。このもしげハミぢんもなし。夏ハすゞみのやかたぶねに。二度の月見をくゝりつけ。冬ハ雪見の二けんぢや屋。醉潰どのゝつぐ酒を。新川のまへだれどふぜんに。酒ひたしに成た着かへのひきへうけこぼして。ざつぶりいはせ。平氣でそでゞぬぐつて見せるハ。かハりの小そでをしてやらふと。りづめでいわせる下こゝろ。ある時ハまたざしきもなく。ねッからひまなじぶんにハ。御きけんうかゞひとこしらへて。おとくいがたへおして參上。御しうぎなしのたゝまりハ。打ッちやッてもおかれやるまじと。舌なめすりのあつかましさ。またちつともひけそふなむすこと見れバ。あしだをはいたなまゑひのごとく。ころぶよふてころばぬよふに。おもしろおかしくだましかけ。モシわつちが内へ來なさへと。めりやすの

けいこハおもてむき。仕だし茶屋へいゝ付て。くひたいものをとりよせて。あとの拂ハむすこのふところ。まだその上に小釣ハミんな手前へかきこミ。また用をいゝ付るのをはなにかけて。茶屋のおちやッにめしの菜をねたつてやる。さす手ひく手がみんなよくづら。その内にもふちつといゝ鳥がかゝると。ときのむすこをとりまへて。はるさらゆ屋へゆく道でおまへの來なさるのを。近所のわかい衆がいろ〳〵にどくづきやす。あれではけん〳〵わでもしかけやしよふから。これからハこつそりとやねぶねで出やしよふと。あがにもてなし。むすこが足があがつたあとへ。引づりこミこんどのおきやくハからあたまから。惚身で仕かけ。おやぢハ用事とおもてへはづせバ。おふくろハねんぶつ講。ついそのうちに。ちよく〳〵けまちよけのこんたんで。たゝミがへをもねだり出し。竹がふしがすかしまどのくろ塀とかわれバ。そのあと變じておちまのくり石。すミにちよつこりほてい竹。ひかり手合がもつて來た。不動様の御ゐん日にかつた鉢うへ。やくしさまの御ゐん日かつたせきだいなど。むかふの方へづらりとならべ。たけすのゐんにぎぼうしゆのやきもの。はんどうはんぞうみゝだらい。樂屋きやうだいがりつぼにでき。手まへ雪隠のふしんもすめバ一夜けんぎやう半日こしき。だん〳〵ゐよふに實が入て。とりつけひつつけねだりごとも。かほにしるけがあるうちばかり。目元にしハよるちりめんの。

三十ふりそでになつてくると。仕おくりきやくもはなれて仕舞。又さま〴〵な男をくつたけれ。一通りなれはいやになり。あにぶんとやらこぶんとやら。どふやらこふやら亭主にしても。ほころび一ツぬはれねば。こそくりものにも人だのみ。ぬかみそへ手を入るゝがいや。めしをたくも手おもいと。けんどんそばではらをつくろひ。さいはいつでも取つけの。ひしほうりがもつてくる。座ぜんまめやなづけて仕まふ。當座のがれのじだらく世帯。まんまと身のうへもちくづして。末はでいしのながれの身。よく〳〵うんにかなふたところがよび出し茶屋のむすめとばけ。又はそこゝの水茶屋くらいで。まづしひくらしをするもあり。おめへがたもそのとふり。いつまでわかい身ではなし。いまからそろ〳〵身のおさまりをふんべつして。おきなさるのがよささうなものではないかへ。そふいふもおめへがたが。うそにもわつちがためをおもつてしんせつにいつてくださんした。御禮ながらのあてこすり。良藥は苦ひとやらむしにさはらばゆるさんせ。またおめへがたが高尾さんくらゐな人で。わつちがおせきさんほどなきりやうのものはなら。まだいふ事もあろふけれど。なにをいつてもよまぬどしかゝぬどし。こんやはとまりの客もあるはづ。モウおいとま申やすと。おのれが舟へのりうつり。ふなばたをたゝいていわく。大川の水すめらばかみをあらふべし。にごらば脚布をあらふべし。よしか〳〵の

りなんしと。はなごゑでうたふてさる。あとにふたりは顔見合せ。なんだかねつからわからねへの。アヽヽヽヽヽ

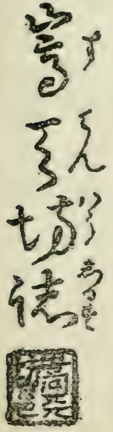
畢

後序

傾城傾國は。唐人の付たる名にして。白拍子ながれの女は。我朝のやはらぎなるべし。昔より品類あまた。かぞふるにいとまなからん。國々の名目。當世の洒落抦扚。干瓢白人。巾着のたぐひ。大むね一種より出て。位階の高下は。金銀の相當る成べし。たつとからずして。勅撰にゆるされ。貴人のかたはらに侍るゆへにや。ちと子細過て。おほくはふるこに落たり。爰に天竺老人のいへるごとく。遊君有て。終に人の魂をとらかすいきはりも見へず。まして歌よむほどの戀にてもなし。たゞ物くひ月落鳥啼の吟も。此君にあはぬうらみをのべ。江口の泊に

宿かさぬきこもなく成て。今はたゞの所には成ぬ。伊勢路の彩色ハあかめがちにて。大津草津は少しうすかるべし。冬枯のまばら成る比は。いつとなくよハり果て鼻の下の煤氣もさむく。木綿所の小車の音も。さびしくくれて。水風呂のほかげに足袋さすわざも侘し。片田舎は法度きびしく表向はつとめせず。されどあハれなるかたにハ。心ひかるゝならひ。夜更てあるじしづまりぬればぬけいで。しのびやかに書院床の小障子あけて。神のいがきもはゞかりなくて。大股に打越。終に一夜の枕をならぶ。出替りは年の暮を定め。給分の加増は赤まへだれをこぎる。物皆終あれバ古莚も鳶には成かゝり。此ものゝ

行衛何にかならん。むかしは普賢ぼさつにも成たる先例もあれど。今は少しの違ひありて。果は駕籠かきの妻に成。疲子産捨生涯を終る。未來とても覺束なし。八万地獄有れば。素人の地ごく有をきくも。たゞ一生の福をいのる。諺にいへる。運は天にあり。牡丹餅は棚にあり。まんぢうハ船に有といふ。



驛舍三更

序

紀南子驛舍三友を著して雛妓に見せびらかす雛妓是を引たくりて突飛して迯る書肆またうしろから抱付て奪ふ剞劂氏これを側より彫刻さゐ序をかけと予を來てせがむ其聲耳邊の虻のことしさゐ書ましよと起直りて筆をハ採ハとつたれどもどう蕉葉に堪ずしてぼく〳〵睡ればつめつたりたゝいたりしてやたらとせむるなんの如才が御座らうとちよ〳〵らしつかり半分ほど序す

例埜　外題子

驛舍三友

二

發端

秩都紀南子著

つら〳〵此里の來由を尋るに野邊ハ果なき武藏あぶミ露ふミわけて絶間なく甲斐路に通ふ旅人の道の小休晝休さしもあやしの草のまろ家やう〳〵三四軒ありしによつて四ッ家の里とハ名づけしとぞ或時里人ぶら〳〵と川へせんたくに行けるかあまりのろついて日が暮たりふしぎやな水底より光りを放てる一物有こは〳〵よつて能見れハ是こそ夜光の玉なんめれさてこそ玉をころばし〳〵くらき闇路を苦もなく歸り朝夕玉をなでさすれバふしぎや此玉自然にうごき一人の美女と化し往來の旅人をとゞむ人〳〵これを聞傳へミな此美女を戀したふされバ世上にかうやうの女をさして玉といへり所ハ武藏の多摩郡川は則玉川といふむかし天人此所に分別もなく天くだりてこの川水の淸きにめでとある汀に玉子をうめりこれ玉川にて光りし玉也人間是を拾いし後玉子の光り一向見えずさらに行衛もしれざれハなふかなしや其玉子行衛いづことしれざれハ飛行の道も何かせんと月宮殿の白衣をとりだし人をたのんでぶちころし簫ひちりきも賣はらひやけをおこして此世界へ七寶充滿の寶をふらす是むだ遣ひの濫觴也七月八月と月かさなりしきりに天を戀しう思ひ天の羽衣とり出さんとむなさん用をしてミれバ借りたる金ハ一由旬その

利ハまた半山旬月宮殿のかの白衣ハもはや出すべき工面もなくたゞぼうぜんとあきれしが今ハ仕樣もあらざればむざんや羽衣ながれにけりもはや此上是非もなく里人を頼みつゝわれとわが身をうりしろなし十万年の年季をいれて姿ハかはる河竹や此羽衣のながれしより流の身とハ名づけゝる彼天人よりかひもとめし簫ひちりきをとり出して里人是を吹ければ其音をしたひてあまたの天人吹度毎にあまくだれば段／＼是をとめ置て軒をならべし旅籠屋へ手ン／＼わかちてかゝへけるさてこそ宿ハ異香くんじ群集をなしてゐひとう／＼おれもゆかうわれもゆかうと下界の大通大ぞうまでみな／＼天女の手管にかゝる名づけて有頂天道といふ

出立

里ヲかァよヲ〻引「無有」ヲ、イ雷尾じやァねへか「雷尾」コレハ無有先生に露時雨子「無」ヘテ珍らしひ對面じやよなふ「雷」その對面がきついことと「無」さもそう／＼シテ何所へ「雷」何所と定るあて所もなしさ「無」黒仕立に米屋かぶり闇の夜の目印にやァゐへかどうも人がわるひぞ「雷」みかけハわるくつても人ハすとんだゐへものよ茶屋に下りとつちやァけちりんほどもなしか下らふといつても茶屋ハ下ヶすかしらきてうめんなんときれいなこつちやァ

ねへか【無】おきやァがれ【雷】シテぬしたちやァどういふぶらつきだ【露】けふ花の會で無有さんに御目にかゝりましたをさいはいどちぞへといふ謀叛で御ざりやす【雷】そりやァとんだこつたサラハ一所に【無】木幡の里に馬ゝあれども【露】君を思へばかちはだし【雷】イヨちく類めサア是から大灘だ【無】これ息子おれがゆく方を通らつセヘ【露】南無さん【無】こりやこそな物もいはれねへ【雷】ソレ又駕よヤッサコレハ【無】エヽぞんざへな野郎だぞ【雷】くそわらぃじてかけやァかるから【露】はねがいつそかゝりやした【無】イヤモウちつとだぞ

（後より二人づれほうかふりにて）わたしがようなおたふくにほれたおまへの氣かしれぬ【松】八やゆんべゝよくぬけたな【八】馬鹿なつらじやァねへかまめいりのねへ念佛講をミるやうないつまで咄していられるもんだゆんびやァ追分の市がとけへいつてのそれから千田屋のばいたァ思ひいれいぢめてやつたよきかつセヘねりま大根をミるやうな兩の腕にゑしれねへ戒名を十七八ほつていやァがるからおれがからミぬひてやつたらせつながつてミんなもう死んで今生キて居るナァ御ぜんセねへとぬかしたわなそこでおれが此ごろほりたてのあらぼとけを二三人見出してむてへにいびつたらおれが名をもほらうとぬかした【松】おそろしい〳〵【八】そこでおれがすとんだ思ひ付をして來たよ【松】そりやァおもしれへどうじぶくつたのだ【八】きかつせへ夜着とぢ針を十

四五本引くゝつてむしやり〳〵とつつつつひたらきい〳〵ぬかしたハナ八といふ字をふんまたがつたやうにはつて墨をいれやうといやァがるからおらァ死人めらと一所にあつかハれちやァてへきだから光明丹をいれて逆修にしようといつたよ【松】ゑへ〳〵【八】そこでごてれつめがぬかしやァがるにやァわつちか腕だとつてらんとう場じやァ御ざんせねへとなきつつらをしてほつきやァがるからどしやうぼねをのしかゝつて三ツどやして灰ふきから大蛇の出るやうな一ぱいをならべぬひて來たよそれでもあいつが背中もごうせいかたい背中だ今にこぶしがいたくつてならねへ【松】はて馬鹿な　といふ詞よりそろり〳〵と　【武左ヱ門】新五左ヱ門殿以之外の廣衢で御座る【新五左ヱ門】イヤ累年降霜の節ハケ様で御座る殊更貴所には御老足と申旁以少ツヽおひろいなさい【武左】モノ公には是までいづくへおこしなさるゝな【新五左】イヤ玉城と申倡家で明石と申めしもりをへ、、、、、、【武左】イカニモ〳〵兼〳〵かれが芳名聞及ました就中かのうかれ女大酒をいたし氣儘氣隨諺に申ス一國とやら一城とやらいたすげに御ざる【新五左】イヤ左程不遜にも御ざらぬ兎にかく金銀を塵芥のごとくまきますればつんどようなびきます武左殿ハいづかたへお越なさるゝ【武左】拙者儀なきの國やにて何の染之助とか申妓をもとめました一座に上諸白のじやすいのとあだ名の御ざる傾城が出ました拙者も此間ハ名酒になぞらへ

ました本を熟覽いたして頗博物の君子に成ました【露】とんだへんちきだね【無】インニナあんな石こつぱを贄ころばしにしたやうなやつらがよくされるものよ第一爲になるか又勤よしかロちやうれんハ言次第かすることさへして仕廻へバ九ツまへにもうかへるハさとんだ女郎ハうれしがるの【雷】なりといひ詞といひあれをよくする女郎ハイヤモウ一ト口もくへねへぞあんなのがふられざァ今度の世にやァのろまに生れるがかすりたコレ息子ぬしもまだ身なりが野夫だよ先その大たぶさをずつとすくなくあぶらべつたりもざつと付て本田くずしにいはつせへまづかう心得たがゑへ月代ざつと髭ていねへ毓念入レのざつとゆひといふ所だ【雷】なんでも惣躰いきにして一ト言いふもむだ矢なし穴いゝのすごひ所を見せつけさつせへ【無】しかしまだ〳〵よつぽと修行しねへけりやァいかぬよ是からおれがそろ〳〵と仕立ようおしい事だ色男の埋木花をさかせて大通の仲ヶ間入をさせてへと身ハ似た山の高ツばり火のミやびらを後にミなし大道かゞやく茶屋の行燈風にかほるハとめ奇楠にあらで風鈴蕎麥のけふりばかり〳〵

茶屋

【三人】おかさんどうて御ざへすといひながら小はるやへ上ル【若者善二】是ハ〳〵御揃なすつて【女房】どつ

ち風が吹やしたかホンニきつひもので御さりやす「善」どなたも御きげんよふ「女」ソレおミや御茶ヲホンニタアも善二とお噂を申やした「無」そりやァ有かてへしかしろくな噂じやァあんめへ「娘おミや」とんだまはり氣でおぜんすね「雷」時におミぼうちつとミねへうちとんだ美しく成たの「善」おめへさんが御出なんしたらおめにかけやうとつてむくの葉で此頃まい日ミがいてゝ御ざりやす「おミ」おいて下さへよ「雷」おミぼうまづちよつとこゝへきや「おミ」アイおめへさんがたァなぜ久しく御出なんセんへ「無」イヤ女郎買もとんときへぬからそれともおミぼうでも「おミ」ほんにかへ「雷」イヤソレデモまだ眞の事ハ知めへ□□□□□□□□□□□□□□□「おみ」いやでおざんすよ「雷」ナニいやであらうよそりやァ眞い事をしらねへからだ「無」コレ雷尾子あんまりつか〳〵物をいはつしやんなおミがよこつぼうでわらつてゐるぜへ「善」おめへさん今時の娘にやァそんな野夫ハ御ざりやセんモウ此頃とんだひ色おとこが「おミ」なんのこつたおんなじやうに「無」ハテナ油斷のならぬこつたの（此所へ亭主かへる）「亭主」是ハいらつしやいました「露」ホヽウ御亭主御歸りか「雷」婆婆已來だの「亭」ホンニ左樣で御ざりやすきついおミかぎり被成やう「無」いや久しいこと病氣ト云てへか何ンともねへ「亭」大かた北國か品川しかし霜がれには遠方ハ御無用で御ざりますまして露時雨さ

んなどハお宿て大ていお楽じ被成やしよう【無】イヤモウ品川も此節ハさへぬよ、【雷】とかく夏のこつた（此所へ盃出ル）【女】サアまづ一ッ上りませもしあげなさへ【亭】サア上りまし【露】是ハ御馳走【無】時に御亭主久しふりた【亭】たべませう【無】（盃臺へほつちり壹分）【亭】ハイこれハ有がたふ扨これを恐れながら（と雷へさす）【亭】おゝさへ〳〵【亭】イヤモウ晝からのミつゞけ腹わたの糟漬で御ざりまます【雷】そこへ希代の妙薬【亭】是ハ〳〵これでハまた一盃給られます【露】そんならも一ッ飲つせへ（と花をやる）【亭】さても兩手に旨ひもの此やうな御酒ハいくらもたべられます【無】イヤこいつハ虫がゐへ【露】サア善公にもちとさそふ【善】有がたふ御ざりまする時にお聞なさるましとんだ事が御ざりまます【露】ナンダ〳〵【善】イヱ安〳〵ハおはなし申されませぬ【女】ナニ善二ハ此頃夢中さ【無】ハテいやなことの熱病でハねへか（此所へいきな小もんになゝこのうらゑりなんきんのはをり五丁組類ちかひのはかた帶ひたいくつきりとぬき中月代の當世おとこ）アイおばさん【女】五丁さんかおはいりなされませ【五丁】イヤ八百さんハどうだい居續もほうづか有もんだ今夜ハぜつぴ歸るようにいつてくんねへ【女】ナニサさつきもそう申やしたがおかへりなんせん【五】ハテこまつたもんだイヤわつちがいかざあ歸るめへいつて引立て來やふ【女】またミいらりとりにおなりなせんしよう【五】何サそこらァぬからねへ例の辯口で敲廻す又内藏さんにも用が有しマァいつてきやせう（と出てゆく）【無】ハテゐへきミだ【雷】そしてこ

よひハ【女】玉城さ【雷】インニャあいつハ御めんだ【女】さうおつしやらずにいらつしやいまし外へ御出なせんしたがしれると【善】ソリヤァ難波さんの角が十五六本もはへやす【雷】イヤもうあきた【女】おめへさんも情なしだそさやうなら升坂か吉本を聞てござへ【善】かしこまりました　しばらく有て【善】升坂ハおさし吉本に春風さん織井ゐさわら木さんハどうでござりやしよう【雷】よかろう【善】さようならバ直にお出被成ましと立出ル【女】サァいらつしやいませ【無】行べし〳〵　ト三人打つれ出ル【女】左様なら御きげんよう

二階

【善】アイ次兵衛どん【若者次兵へ】アイ二階へ【三人】打つれて登るはしこの衣紋坂右か左かイヤまづこれへとずつと通す【無】何ぜん公こゝハだが部屋だ【善】春風ゐの御坐敷でございます【無】何かいきなこつたのシテ床にかけたる一軸ハ【露】周齋が赤壁の景だ【無】活花ハ梅に寒菊かんしんなことだその外和漢の茶器品ゝ湖月に古今萬葉集【露】いづれ風雅の佳人と見へた【雷】ナニサこいつもおへない茶人だらふ　此所へ子共茶持来る【無】ソリヤコツくすぶつた茶わんが出た【善】また無有ゐのわる口がはじまつた　ほどなく盃臺その外いろ〳〵三人の相かた出ル例之通さかつきすむ【無】コレ雪姫でも

彈正でも茶を一ッもつてこひ【子供】ヲャけしからねへ【善】サァもし御めしかへなされませ
三人の女郎行【雷】無有さん御らうじたかきつい粟嶋だ子【無】いづれもいかぬこと【雷】しかし露時雨子のハ美事なことだよときにぜん公なんざァつとくへるものをほしい是こんなものハ皆無喰へねへの【善】かしこまりやした ほどなくみな〳〵いできたる【無】何さんはゞかりながら 盃を〳〵さす【春】あげんしよう【無】まづ〳〵 春かつちりといはせて盃をさはら木へさす【無】これハどうだきついもんだ初會とハいひながら人によることだぐつと崩して呑氣ハ内藤宿か〳〵【春】イ、エたべんせん【雷】ナニぬしたちの身のうへで【さ】アイたべるときハたべへす【雷】よし〳〵おきらいなすつたのさうきらわれちやァたゝねへと無上にやミとのむ【織】小聲にて さはら木さんタアも又さんがきなんすとつて玉川屋まで來なんしたが升坂へいきんしたとき【春】あんまり又さんもつまりんせんよ【無】ナニヲはなすのだちつと聞てへな【春】何きゝなんすこつちやァ御ぜんしねへ【無】色おとこのはなしか【織】マァそんなものでおざんす【雷】コイツハやけるハい【露】もしさミしいがだれぞ呼やしようか【善】下に文五郎としげ太夫がおります【雷】ソレハエ、ミんな呼でこい ほどなくけいしや〳〵【藝者】これハ〳〵無有さに雷尾さィャ露時雨さまづハ御安泰の御やうだい恐悅至極にそっん。じ。たっ。て。まァつります【文五郎】まァつります〳〵と何を釣のだ【定七】鯛をサ

「しげ太夫」ゑびすじやァあんめへし「雷」ミんな久しぶりだ「無」早速ながら「しげ」たべませうその内たぬき殿やらつしやい「文」こいつハいゝぞ「篆藏」一日先生彈給へ「定」どつちの日でへ「篆」どつちのこつちのと一ッ外ァねへじやねへか「文」コイッハゑへ口だその序にひかつせへ〳〵うれしやさらバ舞んとて「しげ」モシ北國ハナ「無」聞てくりやれ此中も本所の仙葉がとこて難波丁の五柳に逢た所が今から藏前の山魚が所へ河東ぶしの稽古にいくと云からおれもちつと蘭洲が會の事で用も有し又家櫻をとつてこやうとおもつてそれから行たがさいごの助サァはなさばこそ三ッ日三夜ぶちながしの大手こずりさしかし遊びハ名にしあふよしわらのことだよ「しげ」そりやァとんだことで御ざりますその内にハ金龍山の織殿などゝいふ洒落が御ざりましたらう「無」ヲ、おとゝひだつけが柳ばして駒と濱虎か二人つれで通たから何所へ志して行のだと聞たりや織殿へゆくといふからおれも一所にゆかうとミなとやから猪牙にのり汐先にくつと會所までから一がいにいつたが何が織殿でいけぬ藝者を二三人よんでのんだが「しげ」いけぬ藝者とハ似たことも有ものね「無」これハ御めんあやまつたイヤモウしんにさへなんだよ白駒ハ酒をやめるし濱虎ハ茶斗いつてのますかどうもおもしろくなかつたかいゝ所へこゝの舞曲が來て居たよ何か俵屋の春日野に帶をねだられたとやらいつて珠城が女房と

來ていたから呼かけたりやァこれはいゝ所で逢たさて〳〵お久しい結城座で矢口の後日をした時逢た儘たどつてそれから大のさ【しげ】そりやァてうどいゝ所で御ざりました矢口の作は平木辨内どのとやらの作だと申ますがとんだ智恵者さうで御ざりますね【無】あいつは遠國へ智恵の買出しに歩行はな此中もおらんだのゑれきてるとやらいふ物をこしらへておれが膳から火をとつた一度膳から火をとつておくとのぼせがぐつと下つてどんな女郎にもあつく成氣遣ひがねへほんに辨内でおもひ出した稻野や林右ヱ門はこつちにゐるかの【しげ】ナニカ伊豆へゆかうとやらいふことで御ざりました【無】あたけ丸じやァあんめへしもうゐへかけんにすればゐへ今月なかば時分に升やへゆくやくそくをしたがと何から何までしりつらのぼんとはなせし鐵砲は時候はづれの空だめ也【露】そつちでばかりは、さずとこつちでもちつとはなしやしよう【雷】いやもうそんな噺は流して少長の身が見てへ【しげ】中〳〵おなぐさミに【しげの新】ナニいやらしい年寄のくせに【しげ】ナニ年寄だそれでも夕アかはいひとつて□□□じやァねへか【新】ヲ、むしのいゝ【しげ】それもう色目さ【新】すかねへなふ【文】とつけへこうしよう【子供】ヲヤ夜とりのまねをしねへもんでおざんすよ【しげ】しつたかよう（此時へぜん出ル）【無】ナニむすこ酒はいかず【善】御膳を上りまし【定】お二人ゐながらちつと【雷】【無】イヤ酒をの

んでハとんと一粒もいかぬ事「文」味噌汁ハちと上るがよう御ざります「無」そんなら是で飲
つセヘといろ〳〵とりくらふ文公氣ハねへか「文」よふござりませうトくふ「新」よふなにかをくひなんすぞ
「文」しれた事さ先當時くはぬ物ハ四ッ足で駕舁と炬燵やくら「無」なりくたもので首つくゝ
り「しげ」魚類で木魚と土左ヱ門「文」マァざつとあんなものだ「雷」まだ〳〵もちるいてく
へねへのハ痃氣もちとはいとりもち「文」アイその外なんでも下さります「新」ナニはからし
い「文」さて此口序に此所へ出ますがそれ坂東に名も高き市川流のつらねことサァ彈て下さへ
東西〳〵夫史記の本記に曰舜の側に象排す象ハ是獣にあらず「無」コイツハかてへぞ
「雷」かてへハゐへがやつはり狸だ「文」ヘイ邪魔が入た折角□□□□たものを「しげ」癲
病にならふぞ「文」さァまァよふ引「熊」どうした〳〵時にもふ何時であらふ「新」もふ引ヶ
過でおざんす「しげ」いづれも退散ハ「一等」よふ御ざりましよう「雷」しばらく〳〵「露」
マァみんな一杯づゝ「善」イエもふよう御ざりましようわたくしもももふおいとまこれから又總
州へ參ります「無」それハ御苦勞「善」明朝ハ何時におむかひに「無」例刻〳〵「一等」さや
うなら御きげんよう「春」モシどなたもおやすみなんし「無」ソリャそろ〳〵追出すハ「雷」
ソ子エニ寐たがらねへもんだ夜ハまだながいよシテ身が女房共ハどけへいつた「露」ナニカ女

郎衆が居つかねへ【無】居りつけねへからさ【新】よふ口をきゝねんすぞ【無】その筈さ山下に三年【雷】八幡山に四年【新】さう見へやす【春】サァむだをやめにしておやすみなんし【新共】サァおいでなんし（と二人をむりに引立ゆく）【春】サァおやすミなんし【露】まだ早からう【春】なにはやくれおざんせんと立切障子□□□□□のうちへぞ

□の内

翠帳紅閨に枕ならべし千とせの夢とりの八こゑも寐耳に水水さす人も朝にれ水飴となり夕にれやミ雲となるはしをれあすもながしにすや〳〵と只一睡のゐよう榮花またたまられた物でれなし【春】もし〳〵ちつと起なんしあんまり寢なんすと□□□□□□【露】イヤ□□□□ことれ御めんだ【春】そんなら目を覺しなんしサァ烟草をのミなんし【露】モウいやだ【春】ア、にくい【露】あい□□〳〵〳〵いやもうじやうけつこなし【春】そんならいつきなんすへ【露】二三日中に【春】いゝへ口をきめて御出なんし【露】そんならあさつて【春】しまつてゐいすよ【露】承知〳〵【春】そして獨おいでなんし【露】なぜ【春】なぜでもさほんにさつきもいゝした通初會からとんだやつだとおさげすミもなんしようか夜ごとにかはる川竹の【露】（小こゑにて）

つらい勤のその中に【春】ぬしのやうなきやく人にハ勤のやうにもおもやしいせぬホンニ不へながくおかよひなんしておくんなんしどうした緣かしりいせんがぬしにちよつとおめにかゝりいしてより【露】ア、忝なら茶に淡雪だ【春】なんのことでおざんす人にばかり氣をもませシテきなんすことハいやかへ【露】いやでハねへ【春】すりやきなんすか【露】これがこねへでいらりようかい【春】ねつからうれしいねそんなに茶ばかりいゝなんししかし勤のうき身なればさだめてはかないやつだらうと思ひなんすも無理じやァおざんせんがうたがひなんすもことによりいす勤の身にあらうことかはづかしい事をしいしたぬしかさういふお心ならあれまでことをわけハしいせぬ今更つもりなんすほどもおはずかしい【露】サァむつかしくなつてきたッソシテ何がはづかしい【春】マァよく積てもミなんし初會からあられもないことを申いして親にさへかくすことをミんないはしてそのうへでなんぼわたしがいやだとてそりやあんまりで御ざんしようい やならいやと假名でいひなんしいやともあうともいゝきりなんし聞てわたしも了簡しゐす【露】ちよ〳〵らにもせよ茶にもせよおれがまよひの心からハまんざら嘘ともおもはれずァ、かつたじけない【春】ヲ、うれしい□□□□□□□□□□ホンニ命もおし鳥の□□□□□思ひ羽ハ繻子と純子の妹脊山□□□□ロ□□がものを言なら

ハさうといはまし岩はしの□□□□□□□□□□常盤の松の村時雨後よりはるゝ冬の夜ハ明が
たちかくや成ぬらん

きぬ〳〵

寒閨に獨ふして婦なしとハこれなんめりと獨ぶつ〳〵やけを起し聲はり上ヶてさまよ引〳〵といへととうしたといふ人もなくいねんとすれと相手なければ烟草とあくびのかはる〳〵どつちをきいてもごう〳〵ちの聲ばかり折節廊下に足音あれバわが傾ならず□□□□□□聞さへうしと夜着引かぶれと寐られもせずらうかいやミをミるやうにふとんのうへに寐たり起たり手をたゝいてもあいともいはずわが身をして大通と胸にあまんの我慢高慢ぐつとミおろす心から猶さら腹も立たり居たりあたりさはりもあらけなく【無】コレ雷尾や□□□□□□□□□□□□おききつせへ【雷】是ハめいわくおらが傾などハ今がたやう〳〵來て先あの通り【無】ハテナ新宿ももうさへぬはへ〳〵まづ惣躰がいけぞんざへだ【雷】若いものといふやつか股引の尻をまくつて案内なしに人の坐敷へのめり込ムし【無】マァ吉原なとにとんとねへ点だばいたといへば鷺の泥鯲ふむやうな足つきで廊下中そゝりやァがるそのくセ眞なつらァしてびんしやんし

やァかるほんに孫子の代までも遺言にしてよこさう所じやァねへ【さ】ぬし達ハ何をおつせへすへ【無】なんでもねへが今夜ハとんだおもしろい遊びをしやした【さ】それハようおざんすわたしやァ積がおこりいしてぬしたちにおかまひ申しんせん【無】はてな人の積なら三年もこてへるね（此所へおり井來る）【織】かへりなんすにハはやうおさんすマァちつとおやすみなんし【無】お志ハありかたいお志を無にするじやァねへか此間にゆるりとまいつてやすミやせう【雷】ほんにミんなかよくするもんだ【織】何ゝのこつておざんすマァおいでなんし【無】よしてくれへミとふもねへ手めへがたがつらァミるとくつとむねくそた【さ】あんまり一國だね【無】もちろんのことこれからァいゝてへ事をのたゝり出すのだまあこゝらへきてまはされるやうなとんちきじやァねへこゝらでいふハ馬の耳を澁團扇であふくよふなもんだが後學のためにちつたあァ聞ておくがゑへ【雷】無有やいふハむだゝハなぜんてへ通なものと物をいふすべをしらねへからおつかながつてよつつかねへのだ【無】そのくせ高へつらァするけれどしやつ面へ三ゝ間階子をかけてもはじまるめへ【雷】しかしこゝらでこそたくさんさうにいへ本所の方へでもくら替をするとたいてへうれしがるこつちやァねへ【さ】なぜへ【雷】水場じやァ手めへちかつらァのき場にしておくとな助舟がなくてもまづあんどたハ【無】ほんに此内へきていろ

〳〵なばけ物をミるぞ【雷】コリヤァふくろうにけへどりをさせて此女郎共と一所に兩國へミセものに出したらはやらうぞ【無】イヤとてもこゝらで小言をいふもあんまりじやけとだ氣はづかしいさらは息子をおこして歸りませふ（此所へ小はるやおむかひ）【雷】何ぜん公かおそかつた〳〵露時雨子支度ハ【露】もうよう御ぜへやす【春】そんならかならず待ていゝすよ【露】アイ此間に【春】どなたもおちかいうちに【雷】ハイ正月の十ヲ斗有時ふとさんじやして又おせわに成やしようとふられた脊中に膓いせハふミとゞろかす階子もばた〳〵ミセのくゞりもぐわら〳〵〳〵月落烏鳴わたりて天龍寺の鐘の聲ゴヲン

變通輕井茶話

變通輕井茶話序

學者の足下。藩中の貴殿。俠者のおミさん。通のぬし。身何れもきさまはきさまなり。その返報に不侫といひ。身どもといひ。おれがといひ。わつちといふ。いづれも拙者ハ拙者なり。べい〳〵詞がやむべいなら借りても三百つん出すべいとハ古よりの諺なり。夫レ輕井澤の地たるや。川柳傳にあられたる。一方の色里也。今雪國の肌を探り。飯櫃の底をはたき。大通變じて變通にいたる。淺黄の裏の裏のうら。紺の布子に白あがり五所紋あり〳〵と。かきしるしたる此一卷。あまねく世上にうり詞としてその買ことばをまつれたそ。山の手の馬鹿人なり

姨捨山人書

輕井茶話 道中粹語錄

始めて旅を信濃路や〳〵東へかへる道急ぐ馬追分も過來つゝ暫しとゝめて打替る沓懸の宿あとになし泊り近づく足元ハ何所ともなしに輕井澤旅籠屋ちかく成りにけり【馬士】旦那何屋へをろしやすへ【旅人嘉兵衛】綾色もめんに黒羅紗の約束した半合羽を着てぱつち尻はしをり也着物ハ合羽で見へねども衣りの所より唐ざんとめの綿入と見へ下着ハつむぎのかハりじまじゆばんの衣りは黒紗綾と見ゆ蓼肌かけたる細身の脇差一本さしもちろん三度笠をかむる 何屋でもよいワいな【馬士】後の方へ向ひ大キな聲して お供さんどうしやうね【供伊介】黒きもめん合羽を着布目がへしの股引をはきて下に大しまのゆかた上にハ青梅じまの袷と布子を重ね着してしんちうの太刀拵を一本さしこれも三度笠をかむる なァんだ〳〵 といそゑでおひつく【馬】今夜ァ何屋にしやうといふ事さ【伊助】旦那ハもちろんおらも木曾路ははじめてだ何處でもよささうな内ィ付てくんねへ【馬】女のゐへうちにしよふね【嘉兵衛】ゥヽおやまのうつくしい所がよいわい【馬】そんなら津川屋にしやせう○所〳〵のはたごやよりこゑかけてお泊りかへ〳〵とよふ【馬】津川屋だ〳〵ェヽ畜生めモゥちつとあるきやァがれめんよう姉を見ると足が遅へおれに似たさうだ と笑ひながらいそいで行べ程なく津川の前へつく【馬】サァお泊りだよ【津川の女さき】江戸者と見へて詞もかハらす おはやうお着なさりましたそれ與八どんお湯ゥ取らつせへ【與八】あい とゆをくんで來りおいて行【さき】サァまあおミ足を【嘉】イャワしはよいわ

春章画

いな〔さ〕そんならお前サァ〔伊〕アイさうして置てくんな〔さ〕ドレもゝ引を解て上やせう
か〔伊〕いゝにへよし〳〵〔馬〕旦那なんとゑへ内でごぜんせうが〔伊〕とんだ事た〔さ〕馬
士どん茶でも進ぜうか〔馬〕いゝにハモウ呑ずとこんたのその一言でそこいら中がしめつて來
るハナ〔さ〕ヘヱ久しいものさ〔馬〕久しい物じやァねへほんの事さァイお供さん小付が四つ
よしかへ〔伊〕ウ、よし〳〵大に太儀だつた（酒手を出してやる）〔馬〕アイ是ハ御きんとうでござりやすそ
んなら御きげんようおさきどん御馳走さつせへよへヱいめへましい見レば見るほどゑへけつだ
（と尻をたゝく）〔さ〕アレサよさつせへなそんなら休まつせへ〔馬〕アイどう〳〵ヱ、此くたばりめが又
尿をこきやァがるか（唄）女郎をかう氣で一番勝負の長がからゝ半と出てごう腹まぎれかゝが面ァ
見りや目玉が丸くやつと夜明のぴんぞろが出たしよんがへ（引うたひながら行）〔伊〕どふぞこぼしてく
んなよ〔さ〕アイさうしてお置なさりまし〔伊〕おらが旦那ァ何所だ〔さ〕アイ奥の八疊ィ夫
おつれ申さつせへよ〔子供初〕サァこつちらへきさつしやりまし〔嘉〕（おくざしきより良ただして）ヲ、爰じや
ハいの〔伊〕此荷物共ゥ〔初〕そりやァ打遣て置つしやりまし今に私どもが持ていきますべへ
〔伊〕そんなら頼んますよ（とざしきへ行）き麗な内でごぜんすね〔嘉〕ウ、ゑへ内じやお山を呼うかい
な〔伊〕アイ咄しの種にようごぜんせう今に大かたよべといひやせう（その内あんのごとく）〔さ〕もしへ女

郎衆ゥ出し申ませうかね【嘉】ゥヽおらァ女郎衆よりこなさんがよびたいワいナ【さ】それハもう有がたうござります本んにお前がたハお江戸ハ何處でござります【嘉】あてヽ見な【さ】下町かへ【伊】きついもの〳〵あたり〳〵【さ】下町ときけバお懐しうござります【嘉】よう知てじやの【さ】私も久しくお江戸に居りましたがちつとした事で今こんな所ィ来てをります【伊】色事出入だの【さ】何にお前【嘉】インヤさうじやァらう〳〵【さ】マア夫ハらそれにしてお聞なさりましそして女郎衆ハとしま衆かへ【伊】もちろん〳〵【嘉】イヤわしは新造がいゝぜや【さ】アイそんならとしま衆としんざう衆にいたしませう　と勝手へ入此所に【初】干物かむしりざかなとこうし持きたる【嘉】此肴を見や【伊】とんだ事ぶゑんの干ものだの【初】いんねぶゑんじやァござりましねへあじの干物でござりますよ【嘉伊】ハヽヽ〳〵【さ】先に立て　さあ〳〵お出なさりまし【二人】ある一人ハ【苅藻】年二十四五と見へ黒もめん紋付の布子もゝ色ちりめんうらふき二寸ばかり出したる衣着て花色太織のはゞのせまき帯をしめきせるを手に持ながら來る下着ハ三つ四つ着たやうに見ゆれども皆襟ばかりとぢ付たものにてこうな下ハわた入一ツなり是此所ゝ風俗とぞう　一人【浮艸】年十六身花色もめん惣もやうにあかねうらの綿入扇屋ぞめのもめん帯を尻こけにして是又ゑりハ四つ五つ着たやうに見へざしきへこは〳〵出て片ひざ立てすへる【さ】さかづきとりあげ　アイ憚ながら　と清兵衛へさす【嘉】あい　のんでおく【さ】こゝろえてうきくさが前へ【うき】ヤレワしにかへ逢つたんべへによ【さ】こゝろへてうきくさが前へ【うき】ヤレワしにかへ逢つたんべへによ【さ】わらひながら　イヘお前でござります【うき】どなたもお早うござります　とあいさつしてのミ　さあ　あげますべへ【伊】わつちかへ　のんで　あい　あげんしよう　とかるくへむきにさす

【かる】ひとつへせへますべへかの【伊】（をかしさこらへて）へせへッこなしさ【かる】そんだら（とうけてのむ此盃せひ）（加兵衛にさす筈の事なれども所がらこて其様なきまつた事もなければ）【さ】（こゝろえて）お盃ハわたしがお預り申ませう（とゞさめる）【伊】なんぞ肴アねへかね【さ】お前がた御酒ゥ上りますかへ【伊】旦那ァ無地だがわつちやァ呑やす【さ】そんなら何ぞあげたらよかろうが爰らには何もお肴が、玉子ハへ【伊】其卵よかろう〳〵【さ】左様なら今に（といひすて勝手へ入）【嘉】サァお前がたちつと咄しでもしなさらんかい【かる】はじめてといふ物ナあじなァもんでこれぞといつて語るべき事もおざんねへものさそれにハァお前がたの様な江戸衆にやァ何をいつてもワらわれべへと思つて語るべへと思ふ事もかたられねへちやあノウうきさん【うき】さうだァ〳〵それにハァわし共がやうに年のすけねへ者ァ猶さら笑われべへとおもつて口さァきかれねへ何だか怖いと思ふせへかげへにさぶいようだァ【伊】ナニ江戸者だとつて何もそんなにこはがりなさる事ァねへハナ【嘉】さむいのハ窓の明て居るせへだたてよう（と立て窓をさす）【かる】窓たァあんの事だかおもやァさまの事だもし【うき】何をいふにもでかく達へ申すよんべもお客がてうちんがめつからねへとつてさがさつしやるから何だと思つたら火袋の事さ【さ】（猪を二膳持て來ル）あいお吸物が出來ました【伊】是はおせ話〳〵サァ旦那【嘉】（ふたを取て）これハ變のコレ見や（とわんの内を見せる）【伊】あれが爰の卵か江戸じやあぼた餅といふぜへ【さ】ホヽ〳〵

あなたァ御酒をあがらんさうだからそれで【伊】そんならゐへ（トこれもふたをとつて）ウ、是ハ正眞のたま
ごだ【かる】なにハァ玉子に精進なァござらねへ皆なまぐさへもし【伊】いゝにやよし〳〵
【嘉】コレ此箸を見や【伊】なんでも今夜ァへんちきさ【うき】ヲヤ寒竹の事をお江戸じやァ
へんちくといふげだの【初】お客さんがた湯ゥあびさつしやりませんか【さ】ほんに今の内風
呂へおはゐりなさりましな【伊】あい旦那サァ【嘉】そんならさうしようかいの【初】サァ來
さつしやりまし（ト先へ立てば【嘉】も立て行）【うき】（もついて行）【伊】サァ一盃呑なさらんか【さ】いゝへマァ后にい
たゞきませう【伊】後といはずと呑なせへナ【かる】ナニよさつしやりましまだいそがしかん
べへ【さ】アイ又今におまんまを出しますからいそがしうござります【伊】そんなら行てきな
【さ】はい左様なら水いらずに御咄しなさりまし（ト立て勝手へ行）【伊】お前のミなさらんか【かる】い
ゝへサちつとでものむとハァ面が猿のように成申よ【伊】それでも今夜ァさむいからよかろう
【かる】何ハァさぶい折に呑と一倍さぶくなり申スよ【伊】さむかァもつとこつちィ寄なせへ
【かる】最前からさうハおもひますがわしらが様な者ァさぞいやだんべへと思つて遠慮のヲし
ます【伊】ナニいやな事があるもんだすつと爰へよりな【かる】そんだらゆるさつしやりまし
どうでハァお江戸サの女郎衆のやうに何もおもしれへ事ァおざんねへが共代にやァ□□見さつ

しやりまし天竺までも□□□□見せますへへ「伊」（笑ひながら）夫は何よりさ（かれこれはなしのうちに）「嘉」（湯より上りきたる）サァ伊スはいらんかい「伊」エあい「かる」サァいきますべへうきさんハどうしました「加」今そこい（といふ所へ）「うき」（ちやをくんで）サァ茶ァ進ぜませう「加」あい「かる」そんだらサァ「伊」いかう〱（と立て行「かる」も一所ニ）「うき」コレかるさん浴衣ゥバ竿サァイかけておゐたによ「かる」おい〱「加」湯へはゐつたさかゐいかう腹がへつたようじや「うき」今におめしが出ますべへマァ酒でも呑つしやりませんか「加」わしハ酒は根から呑やせんお前のミなさらんかい「うき」ワしものミましねへ「嘉」そんなら是がよかろたべなさい（ぼたもちたやる）「うき」是ァはあ好だもしアゼ喰つしやりませんか「加」わしハモゥいやじやハいナくハんせ〱「うき」そんだら（と手づかミにしてくふ）「加」ほんにお前ハゐふらう好なさうでうまさうなくひやうじやわいの「うき」げへに好だァもし「加」大概いくつほど給なさる「うき」何さお江戸衆なんだァ信濃者とつて大喰するやうにいはつしやりますけれども私どもハそんだァじやァござりましねへ此位のぼたもちだら十七八もくへば澤山だもし「さ」あいおまんまをヲヤもうお一人のお客わへ「うき」今湯サァいかつしやりました「さ」そんならマァお隣ィ出さうかね「うき」いん子ハァさつきからげへにひだるいといはつしやるからマァ爰へ出しなさろ「加」ほんに先ィ給いせう「さ」左様ならさうなさりましお一人ハ又

お跡でも と膳をすえる 何もござりませんᇹ【加】是れお世話〳〵【さ】お前お頼んまうしますよ【うき】あい【さ】又おとなりへ出さねへけりやァ成やせん【うき】お隣れ誰だァもし【さ】田毎さんの彌五さんでござんす【うき】フゥ彌五左ヱ門さんが来さつたか夫ァハァ田毎さんナァうれしかんべへ【さ】この頃じやァ追分の松屋とやらィいきなさるとサ【うき】さうだァとよ何でもハァ男といふ者ァまづいもんだァよ【さ】夫ならお頼ん申やすよ と立て行 【うき】それでもハァめしびつが【さ】おはちハ今によこしやす 其内に 【初】アイめしびつ と持来り置て行 【うき】サァ替さつしやりまし【加】アイそんならコレサかるく盛てくんな【うき】アゼひだるいといはつしやりましたじやァおざんねへか【加】まだ食やすがそんなに盛付ちやァくひにくいわいな【うき】どうでもお江戸衆だあナわし共が方なんどじやァ絶食だァといふ病人が此位にもつたのヲ三盃斗アヽひますよサァお汁のゥ進ぜませう【加】そんなら憚ながら【うき】アニはゞかりあぜハァなんぼかき立味噌だァとつて千葉斗じやァ悪かんべへ上汁のヲも入ますべへ【加】おかしながら どうでもよいわいな と膳へ【伊】湯より上り来ル【かる】もきたる 【うき】、しかお客がひだるいといはつしやりますから先サはじめましたよ【伊】よし〳〵【うき】お前チの膳もさういふべへナ【伊】アイさう云てくんな【かる】手拭ひれどうさつしやりました【伊】ほんに置てきた一寸と取て来てくんな【かる】ヤレはあいく

ぢもねへ事だァ（と取に行）「伊」なんぞくへる物がごぜんすかね「加」いゝにやモウやつぱり夕の通りじやれいナ「伊」そいつァいけねへ子（「初」膳を持「うき」ハ汁をもち来ル）「うき」サァお前もくれつしやりましァゼ刈もさんわへ「伊」ィヘ今一寸と手ぬぐひをとりに「かる」是だんべへの「伊」ゥ、それ〳〵「かる」うきさん大におセ話よ「うき」何ハァせわな事もおざんねへあつちにもお客が有からお崎どんがいそがしかんべへと思つて「かる」ほんに彌五さんもききさつたとの「うき」さうだァとさ「初」ァィお食を替さつしやりまし「伊」ゥ、さあ「かる」ァゼついて居ずともゑへぞい「初」そんだらお頼ん申ますべへ「うき」めしびつゥバそこィ打置たがゑへ「初」湯ゥ持てきますべへ（と立て行）「かる」何ぞ替さつしやりまし「伊」いゝにへモウ且那なんと木曾路はむごい子「加」とんとさかなのない所じやのよう何所でも出すもんじやがァノうづわとやらもないかいな「かる」ァィうづわも少へげだで高遠の御殿様が此前も廿兩とやらで買つしやりましけ「伊」（わらひながら）ハテ高い物だの「うき」ほんにわしも一度鳴所を聞ましづけがきつくれい〳〵と鳴ましたつけ（めしすミ膳とれる）「さ」おくたびれなさりましたらうお床にいたしませうサァお前がたも着けへてお出なせんし「かる」そんだらサァうきさん「うき」あい（二人とも着替ニ行）「加」こなさんの物云斗りれかわいらしいわいナ「さ」ほんに初でれ嘸をかしうござりませう子「伊」ィャもうとん

だ變よ【さ】さうでござりませう私共がきゝ馴て居てさへをかしい事がござります【伊】時ニ旅籠代ハ【さ】アイ明日でもようござります【伊】そんなら〳〵あすの朝一所に勘定しやう【さ】（床を取て）あいだを仕切らずハわるうござりませうネ【加】ウヽまんさらではいならんじやナ【さ】左様なら斯いたしませう（屛風を横にして仕切る）【伊】屛風の氣取ハどうでござんす【加】とんと佗た物じやナ【さ】ハイ御きげんよう【伊】そんならあすハ七半立だよ【さ】アイかしこまりました【加】おさらば〳〵【伊】今夜ァゐへ江戸ミやげでござんすぜへ【加】ほんにはなしの種じやナ【伊】うづわの間ちがひなんぞれきつい事子【加】イヤもうやう〳〵こたえて笑れなんだわい／そしてマァあのわしが女郎がぼた餅を十七八くふといふたわいナ【伊】ほんにかへハヽヽヽ〳〵（かる うき）（一所ニ來ル）【かる】サァお前がたそべらつしやりましな【加】サァ寐よう〳〵【うき】夫だらわしハ先ヘサねますよ（と床へ入ル）【かる】おめへもそべらつしやりましな【伊】アイ今に寐やすがあすの朝まごつかねへやうに何かをちつと取あつめて置てねやす【かる】そんだらわしハその內お客の連衆がきてござるから一寸といつてきたくござりますが夫ともハァ悪くおもハつしやるべへだらいきまするめへ【伊】ナニサよし〳〵いつてきな〳〵【かる】そんだらいつて來ますよ（と出て行）【加】廻しといふ所かいの【伊】そんなこつたさうさ【うき】まあしたァ何の事だへ【加】回

しとハ何さァノ何さ摺木の事さ【うき】その摺木がどうしたもし【加】いゝへナ土産に買た摺木をよう仕廻てくれといふ事いの【うき】ァゼお江戸にやァおざんねへか【加】江戸にも有はあるけれど名物じやから土産にするじやわいナ【うき】何所サァの名物だァへ【加】ァノ何さ東海道の薩陀峠の名物さそれじやさかゐ碓井峠の孫杓子さつた峠の孫すりこ木といふわいの【うき】はてなもしァノ孫杓子ァ疱瘡の呪ひに成げだの【加】ゥ、孫摺木ハ痲疹のまじなひサ。ほんに疱瘡といへばお前のつむりハとんと疱瘡疾のやうじやわい【うき】あぜへ【加】櫛もかうがいもミな赤いさかひにさ【うき】よくあんでもいろ〳〵の事べへいはつしやる憎らしいのづくもかへらぬところ也【加】ヲ、痛いわいの【伊】なんだかもてるといふもんじやァねへ子【うき】聞つしやりましさま〳〵の事べへいつてなぶりやる事よ【加】ナニなぶるのじやないわいコレ伊スはやう仕回て寐やいの【伊】あいもうふせりますおらが女郎衆ァどうしたか知らん【うき】今に來さりませう【伊】□□□□□□□□【加】かるもさんとやらハ客衆でもあるかいナ【うき】どうかしりましねへァゼあの人にかまハす□□□【加】お前も□な【うき】ワしやァハァ□□じやァおざんねへコレ見ささつしやりまし□□□□□□お江戸の女郎衆ァなじミにならねへけ

りやァ□□□□□□□□□□□わしらァハァ三味のゥかゝる事もならず江戸ぶしナァ知らず何も面白へ事ァおさんねへ□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□【加】□□□□□□□□【うき】□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□【加】□□□□□□□【うき】□□□□□□□□□□□□□□□□□□【かる】來ルうきさん〳〵ャレハァ寐たさうだァわしがお客さん寐さつしやりましたか【伊】今まで起て待たがあんまりお前の來様が遅へからねやした【かる】そりやァ

だもし□□□□□□□□今夜ァでかくさむい晩げだ□□□□□□□□□□□□□□□□□【伊】□□□□□□□□□【かる】あぜかハァワしやァ冬になるとかゝとサ口があきますよ□□□□□□□□□□□□□□□□【伊】ナニ能のさコレあつちの女郎衆ァ□□□□□□□□□□□□□□□□□【かる】そりやァハァ安い事だァけれども何とか思はつしやるべへと思つて扣へて居ました□□□□□□つしやりまし【伊】ほんにぬしやァ幾つだ【かる】わしかへ今年取て二十五だもし【伊】夫にやァ若へようだ【かる】ァニはあ若へ事ァおざんねへよ【伊】やつはりこつち生レか【かる】餘ほど阻て居申よ【伊】どこだ【かる】諏訪世郷でござりますよワしもハァこんなァ所へ來る筈じやァござんねへがとつさ

まがどうらくで江戸サいつて行衛が知れましねへそれからハァかつさまとワしがすべへ事がねへからァこけへきましたア不便だあとおもつてくれさつしやりまし【伊】そして其をやら殿ァ江戸に居るのか【かる】さうだといひますよどうぞハァお江戸サァ下つて尋ね度思ひますけれどもすべへやうも御坐りましねへ【伊】江戸は何所だの【かる】あんでもあま酒のヲ見るやうな名だつけもし【伊】どうもそれじやァしれねへ斯と隠なれバゥ、何か麹町か【かる】ャレそのかうじ町よ【伊】糀町といつても廣い事たからしれねへ【かる】そりやァはあ仕方もおざんねへからマァこつちィ寄□□□つしやりましうきさんなんだァモゥ夜中だァもし【伊】いゝにや今まで咄しごゑがしたつけ大かた□□□□□【かる】例刻たァ何の事だへ【伊】例こくとハ例刻の事さ【かる】ゥ、何だかへゑ比須包の兄弟ぶんの事だんべへ【伊】マァそんな事たさうさサァむだァやめて□□□□又あすがはやいから【かる】アゼはあ今から□かしはしましねへいやじやァあんべへけれどもきいぜんからの約束だァから天竺まで□□ねへけりやァ心がすまねへもし【伊】□□□□□□□□□□□□□□□□□□【かる】何はあ外にお客ァござんねへお江戸サのやうに八重賣とやらァしましねへ【伊】そんならよしさ此
□□□□□□□【かる】□□□□□□□□□□□□□□□

はないき より□□□□ばかりにて□□□□へなし 咄ー

【隣座敷客弥五左衛門】茶色木綿紋付のたけみじかき行子袴ハ百徳のごとく三ヘ二ッからす裏ハ萌黄しと見へ茶色木綿に上の方ハ中形の小もん見へるを一ッ共二着ハとつて有とへ何かしらず白もめんに黒きぬのゑり袖口かけたるじゆばんあらはにうこん木綿のふんどしも少し出しかけ床のうへに大あぐらかいて居ながらかたにていセじまの袖しきたる行子に黒ぬめの細く光る色の丸くけ帯を背中へむけてすハりゐる．是さ／＼こつちやとうむきなさろ【相方田毎】是あね まてす よさつしやりましなそんだァきげんじやァおざんねへ【彌五左】マァちよつとさ是／＼【田毎】ヤァはあよさつしやりましよ【彌】少しはら立こゑニて ゥ、扨はァおれがいやになつただァなそんだらどうすべへおつふられた所に居べへ箸もねへ と立て帯をさうにする【田】その帯をとらへて エ、もう何の事だもし【彌】あんの事じやァねへこつちよゥむきなさろといつてもやあだ／＼といふじやァねへか【田】サァ夫もワしがあんまり小腹がつつ立たからの事だァもしァゼはあそんだら追分の松屋サいかつしやりました【彌】そりやァはあおらが悪るでも有べへがガラさそれたァからの事だァふそれもはァ友達だらべ断ものんべへけれども名主殿の猶子の言れる事だからやあだどもいはれねへから二三度ァいつたァけれ共何にお身分に見替べへ【田】そんだらさつきのふみさァあぜ見せさつしやりましねへ【彌】おらも見せべへと思つたァけれどもさつきやァはあ張合に成つたァからの事よ何もむづかしい事ァねへけれどもでかく文者だァよ【田】どれ見せさつしやりまし【彌】ソレ見なさろ とこくら筒のはゝ紙入より出す【田】とつてひらき こりやァはあわしがにやァ讀づれへよんできけさつしやりまし【彌】そんだらおれが と讀て よむ ○こうびんにまか

せ一筆申入らく過しよべハ久〱物かたりのふ申たあだはあ・其のちハそなたの事べい・思ひくらし・手のものもからら・うちやるやうだつちう・よんへもきやるべいと申事たゆへ・よふとへまちもふけのし申たゆへけさあはああさま山ののふびんのとるやうにむねか・がた〱つんもへ申こつたつちう・たゞはあはやくてへめんのしたくがんのふかけてまち申らく

【田】成ほどハァおもしろ〱書たァな返す書のゥ讀つしやりまし【彌】ァニ是ァはあ讀にやァ及ばねェ言傳だァよ【田】ドレ名サ見せさつしやりまし【彌】名ァ見すとよかんべェ【田】いんにや〱何でも見せなさろ【彌】そんだら見なさろ【田】これであんだもし【彌】千年だァよ

【田】ヤレハァ可愛らしい名だァなみさァ上手なり惚さつしやる筈だモシ。それだァとつてもこなたとわしが中ァきのふやけふの事じやァござんねへハサ互に根性骨ノゥ打明て女房にすべへ成べへとつてやれハァ御勿躰無天照皇太神宮たいゥはじめ神た達を證文ニも書入た中じやァおざんねへか今と成てこなたの氣が替ればワしハハァ何としますべへ余りと云ァむごつちねへ人だァよく【彌】ヤレ何でもそんなに氣ヶもむ事ァねへおれだァとつても申合のゥしたもんだ物ヲ如何様の事が有たとつても替るべへにァ思はねへよヤレハあ泣事ァねへハよ【田】なき事ニてそんだらどの様ナァ事があんべへとも替つて呉ますなよ【彌】何ハァ齒栁杓のゥ手にとらねへ

法もあれかはる事じやァねへよ【田】ほんだかへそんだら私ァ何も云べへ事ァござんねへどうしたもんだァかハァ此様にでかく可愛く成たと云も約束事だんべへよ夕もお江戸衆ゥお客に取たら床花だァとつて大錢のゥ一本くれさつしやつたから何でも今夜ァ仕𢌞て居て呼にやるべへと思つた所ィ來さつたもし【彌】そんだら夕のお客にやァげへによく□□たァと見へたァな【田】ァゼさうじやァおざんねへマァよく積つても見さつしやりましこなゐと申かわしのゥしてからァはあどんな美人男でも目ゥ付さァおざんねへ只ハァ明ても暮てもこなゐの心がかはるべへとおもつて苦になり申よ【彌】おらァはあ替る事じやァねへからお身ゐ替らねへやうにして㒵さつせへ【田】そりやァはあ氣遣ひさつしやりますな【彌】□□□□□□□□□□か

□【田】□□□□□□□□□【彌】□□□□□□□□□□□□□□□□思ひだした約束のふんどしゥあしたでもよこすべへ【田】まだ遲くつてもゐへが色ァあんだァへ【彌】強がよかんべへと思つて手織の木綿のゥ上紺に染させたァよ【田】そりやハァ四五年わこてへべへ【彌】あぜだかハァ今夜ァげへに□□□□□□【田】□□□□□□□□□□□□【彌】ゥ、□か【田】□□□□□□□□□□□□□□□□□【田】□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□【彌】□□□□□□□□□【田】□□□□□□□□□□□□□□【彌】ゥ、そ

れがよかんべへ【田】モゥ今度から追分ィハいかつしやりますかなよ【彌】アニハアいぐ事じやアねへよモゥなん時だァかとなりじやァ起たァげだ【田】隣ァ旅人衆がからつおきたんべへまだでかく早へ□□入しますべへ【彌】そんだらちつとの内□□□かゐ【田】ワしが能時分におこしますべへ【隣・かる】何も落しやァさつしやりましねへか【伊】いゝにへよし〳〵【嘉】ワしが柄袋ハそこかいナ【伊】いゝにへ爰にやァごぜんセんどうして又なくなりやした【嘉】いやァノさいぜん小刀をつかふた時に取たさかゐ【伊】そんならごぜんせうよく御覧じやし【嘉】ヲヽあつたわいナ【うき】ワしやァ又何の事だと思つたら脇指の革頭巾の事だァね【さ】來はいお荷物ハこんな付ましたよ【伊】アィお世話〳〵【嘉】何でも夕からこんなこなさんのお世話じやの【さ】ナニお前【伊】サァ参りやせうァ、大きにおせわに成やした【かるうき】に一同そんだらきげんよく立つしやりまし【嘉】アィおさらば〳〵【さ】どなたも又お上りもなせんすなら必おたづねなすつてくださりまし【伊】そりやァもう如在ハなしさミな〳〵表へ出れば【語も】ゑはじめこゑ〳〵に左様なら御きげんようお静にめしまし【嘉】アィ湯治にでも上つたら又よりやせうハィ【さ】ハィあなたお笠を○あいと手に取菅笠の白きを見れば夜ぞ明にけり東雲の心うきたつ街の音夢に見てさへよいといふその春駒に乗初の仕合よしや木曾始商ひはじめ筆はじめ笑ひはじめにな

れかしとはじめて馬鹿を又つくす盡せぬ春のお目出たに愚作は堪忍信濃新板〳〵

里于鄰通詩選

北郭先生訂定

里隣通選

中之街

兀山房梓行

通志選序

大堤春水滿。相映送春衣。日暮逢公子。不知何處歸とハ。南郭先生のしやれ。闇の夜ハよし原ばかり月夜かなとハ。寶晋主人のしやれ。兎角浮世ハしやれのこと。しやれて〳〵しやれぬいて。しやれた處が雨落のきしやごのごとく。瓦の如し。それしやれのことたるや。通なり。通といつは。遊里に有て風流なるをいふ。予人のしやれを聞はつりて。一小册をあらワす。通としやれと相並ぶ。しやれが通歟通がしやれ歟。いつまでいつても同じことなり。則題して。通志選と呼ぶ。天實生洒落不盡後之君子乃茲集以盡通志而通志盡于此

世滿里南鐐撰

通志選目錄

發端之章　一
大堤之章　二
登樓之章　三

通志選

發端

世満里南鐐編選

大道直如髪なる通町のほとりに清助といへるものあり十有五にして學にこゝろざしある人に問ふていわく何が謂に亡八と書哉ある人答ていわくはて知れたこと孝弟忠信禮義廉恥の八ツをも忘るゝゆへ亡八とかくと聞たがさいごのすけ朝に通となつて夕に死とも可也とこゝろえ十有八九に及んでハ第一家業に疎く誹諧の評ものにハ孕句をもつてなき髭をなで活花の會にハ繼上下をいため付杵屋が門に入てハさいじりへ定紋を蒔繪し盆景の稽古にハ須磨明石を丸のミにしたるこゝろになりちくらを背てハ義之徴明の再來と自稱し其外何によらず二十日鼠の米櫃をかぢりちらしたるかごとく挽臼ほどにもいかねどもくらからぬ藝者とおもひ虚言と味噌とハ胸に封じこめ我こそ大通の色男とうなづき猪牙に銀きせるをくわへ四ッ手に鮫ざやの小尻をあらワし親に家屋敷をうらせて菰までにハ至らねど毛せんはたび／＼かふり終に居候の身となり薬研堀に行四郎が妻の兄寸伯老が家を主としよごれたれどもうづあられの長羽織さめたれど

もとびいろ純子の帯をしめ兩國の茶みせに腰をかけおきやうほう久しい子と茶をのミながら往來の女の良をなかめ居る所へ油町の大和屋の手代喜兵衞といふもの丶通るをちらと見付て大喜大喜と呼ければ【喜兵衞】へハァ是は清助樣此間はすきとお目に懸りませぬ【清介】へコレサア／＼それしやァかたいはなマア／＼久しぶりだ一ふく呑ミさ／＼【喜】アイと腰を懸れば清助は喜七を無たいにすゝめこみサア／＼すい行／＼とふたりづれ清助がからミへに喜七ぶりちぎ先ッ船宿からと相談きわまりいそぎしが【清】へおれが心安ィ船宿があるコリヤァおれが大ィの恩を懸て置たとちよつとにもみそをいゝ三河屋の見せをのぞけば後家が聲をかけ清考さんおめづらしい御出だ子マァおあがりなんしあなたよふ御出なんした【喜】へアイ【清】へかゝさんこの男はおれが兄弟ぶんだからたのむによ【後家】へアイおはつにお目に懸りやした是からおたのミ申んす【喜】へアイおせわになりやしやう【下女よし】へアイお茶ァ上りんし【清】へムゥおよしどふだ此ごろはきつく尻が大キく成つたと一トッたゝく【よし】へエ、モおよしなんし【後家】へアリャァワたしに似てさ【よし】へアノ清考さんの久しい物さ【清】へコレかゝさんけふはとんとあそぶ氣じやァねへがの此男に道で逢ッての一ッはい呑ンでからのおもひつきだがけふは茶やをやめの奢なしのすい行のすい歸りといふしやれだかおらァ大ゥみせはあふかたふさがりだか

らいつそ出しやれと出よふとおもふかなんとどこぞいゝ内が有ふかの【後家】ヘアイいくらもござりやす【清】そんならとこかよかろらふの【後】柏屋になさりまし【清】ヘワるし〳〵【後】ヘなぜへ【清】ヘワつちやァあそこの花の井を買やした【後】ヘさようなら京町のふびやになさりませぬか【清】ヘム、そやりァよしサノ〳〵モウいきやしやうがミんながいなゐ子【後】ヘアイけふハ久助ハやどへ参ります藤兵衛ハかけをとりに参りましたが何さワたしがおともいたしやしよふおよしや藤兵衛が歸たら早くよこしてくりやよけしてこゝをあけやんな【よし】ヘアイ とはきものをなをし おゆるりとお遊なんし

土手のゆきゝ附見立

松ハ常盤に日本堤の往來に挑灯ハ星のごとく貴賤のへだてなく行通ふ中に清孝大喜後家もろとも土手へさしかゝれハ後よりモシ旦那そこハぬかりますもそつと右へおよりなされましといふをふり返りて見れバ是も堀の挑燈を先へ立て三人連の客壹人ハ花色ちりめんの小袖に紅粉かばのうら紺ちりめんの羽織に緋ぢりめんの筒うらが四五寸下まで見へる様に仕立四ッめ結の一ッ紋壹人ハ黑綸子の小袖に淺黃むく黑たんごに玉虫裏の裕羽織又壹人ハちと輕ィと見へて上田八

丈の格子嶋の羽織にちゝふ絹の目引小紋の小袖いかにもしかつへらしい聲て〽（こんちりめん 石部金太夫）〽イヤ武左どのモシ貴公とハ久〻での御參會でござる度々御文通に預りましても彼是と勤仕に暇のない拙者が儀でござれハとんと御出會相成かたく委き御紙面に貴簡さへつと〳〵に相ならぬ譯故心外にうち過ましてござる今晩の御同道此金太夫に置ましてハ千万大慶至極に存まする（黒ちりめん 形井武左衛門）〽ハヽア石部氏の仰の通り自分儀も殿の御目がねを以て當役儀を仰蒙りまして此かた一向に寸ン暇を得ませぬ故に誠にお物遠に罷リ有ましたが今日ハ久〻にて御門出ッ致ましたも貴公の御誘引なし下されたればこそ存よらず能イ鬱散を仕るたん過分至極に存まするなんと新五左せまじき物ハミやつかへとハ能ふいふた物じやの（上田八丈の羽織 吉野新九左ヱ門）左様でござります甚以私儀も御用多に罷有まして片ン時も役所をはなれませぬ所に御兩所様の思召をもちまして今晩の御供此新五左衛門いかばかりか忝ィ仕合にそんし奉ります【武左ヱ門】是さ新五左ヱ門共様におりめ高でハわるいぞや屋敷はやしき又こふ悪所へ同道するからハ今宵一夜ハとんと格式にかまわずすつとやわらいだがよいぞやナントさがミやそふでハないか【船宿の男】なる程左様でござりますイヤモおまへさまのやうなすいなお方にあなたのようにおかたくなさつてハおあそびになりませぬ【武左】〽ヲヽサそふしやティ【男】〽ちとおくだけなされませ【金太夫】〽成程武左殿

の仰らるゝのが御尤じや【男】〽イャちとおまちなされましらうそくのしんを切ませう【金】〽そりやけしたハ【男】〽イャ是ハ私一生の無調法【新左】〽サァ〱早ふともをせい〱【武左】闇夜燈火なふしてハ歩行成りかたしじや（船宿ハ番屋へ立出火をとほす）此うちに彼二人ハ行過て【清】〽是ゝ大喜今の三人ハとんだやつらしやァ子ェか【喜】〽アイサ【清】〽此しやれた世の中にもあんなこけどもが有ノゥかゝさん【後】〽ホンニ子【喜】〽しかしどれも人からの業でござりました【清】〽ナァニサどこへ行ッても女郎にかわひがられぬやつらさト噂のうちに土手も半過になれバ田町の方から【新交】〽是賤鳥やあんまり急きやんなサァこけが女郎買に行やうにそんなにせくなァ【賤鳥】〽なんた新交今夜ハなんぞといふとあちな事斗ッりいふハいあんまりいやミからミをいふ子ィ【交】〽ハテおのしやァあぢにぢくねた事をいふなおらァそんな氣しやァいわねェハイ云にくる事ッたがおれも新交と云ッちやァ石原から中の郷きってつらを見しられた男だァ【鳥】〽なんだェあんまりミそをひる子ェおのしがそうならナおれも相應にナ水がミの銀ぎせるでな賤鳥サン〱とナ立られてナ来たもんだァ【交】〽コレおのしがそんなしやくぼくを云のもナおらァがつてんたァノ此中かねつき堂のおはなが帯をおのしがかりてな吉田町の伊勢屋でナ縄目にあわせた事をおれがちよつと口を出した事を今に氣に持て居るか

らそれで此頃ハ何ンぞといふとあぢにひねくるのだァ【鳥】へハテ色〻なごたくを引すり出スハイそれじやァなんの事ハねヱおれにさうさせるのだァコレそんなしつけいを云ハふよりやァなおのしちつとたしなミやれヨ【交】へなんだおれにたしなめとハなんの事ッたァおら何もたしなむおぼへハねヱハイ【鳥】へヱイコレおれがしるめいと思ふかヱイあんまりりつぱな口をきくねヱ夫あの跡月ナおのしも鐘下のお市にかんざしをやつたがあれもきゝやァ割下水のはた元に勤て居ルおハしが二三年跡から心がけて濟〻とこしらへたかんざしだけなそれにマァかあいそうに一年にたつた三分貮朱の給金で勤るやつの物を色をしかけてかんざしをあやなすといふ事がある物かホンニおのしも引事にかけちやァこうしやなもんだァ【交】へ是ヱヽあんまりそんなたあことを抜かすねヱ云ハせて置ケバとほうもねヱあごのたゝきやうだァなんにせい是しやァすまねヱぞ【鳥】へすまざァとふするイヤどうするのだヱヽ（ト云ときはるか跡から）△是ヱヽ【万八】へふたァりなからマァまてヱヽと聲をかけれバ【二人】へそふいふなァ万八しやァねヱけヱ【万】へムヽヨといひながら息を切て欠來り是ナァおのしたちやァなんの事ッたおとなしくもねヱマァ〳〵何ンでもそれじやァ濟ねヱからなんでもおれ次第にしやれ能イよやうに譯を付やうマァ角トの酒屋まで來やれとむりにふたりを引つれて跡へ歸る所を朧月夜にすかして見れバ

三人ながら仲藏が定九郎といふかたちなり【清】〽大喜あれ見やれ色〱なやつがあるもんだノ【喜】〽アイサ【後】〽ホンニ人からのわるいねヱ△扨又大音寺前のほうからすミる茶色の様な聲で長うた〽かさをさそなら春日山是も神のちかひとていとしとのごと合相傘のしつほりと田中の方から【彥】〽五郎じやァねヱけい【五郎】〽彥かヱ【彥】〽ムゥわりよゥさつきからたづねたァ【五郎】〽なせヨ【彥】〽今夜そゝりに行てな仕廻にャ伏見丁へ上るへいとおもつてよ【五】〽ムッそりやァいきたな【彥】〽ム、ヨ【五】〽ヤちらくるいめ【彥】〽きまりであろふが【五】〽きつとだ〱【彥】わりやァ今迄とこに居たヱヨ【五】〽おらァな入谷の十がとこでナ能ばくちができるときいたから此中こしらへた大嶋の半てんをナ釜鳴屋へくらわしてナ壹ッ本かりてな道のわるひにャゑつちらおつちら行やいなやなァ二三番でナみんなはたきおとされてナヒイに成てけゑつたハィ【彥】〽ヤそいつァいけねいナ【五】〽ムゥヨきいてくれろへまだあらナその上にナ今朝貳百で買た日和下駄のナ歯をふんげいたハィ【彥】〽イヤそいつァいけねヱナ【五】〽ムゥヨ【彥】〽それから見ちやァおらァよつほどりくつが能ワィ【五】〽どうしたヱ【彥】〽となりうらでナ七八百もふけたからナ直に山谷の小張屋でナおごつてきたワィ【五】〽そりやァおつだなしたがあそかあよせバ能ハい【彥】〽なぜ【五】〽ハテ酒がいけすかつきが

わるしかそうていあだらけねヱハイそれよりやァ佐野屋へいけバ能いまつ酒がよしかとうふが大きいワイヱ、是あふねヱワイそれミろころんだハ【彦】へヱ、いめゑましいはなをゝふミ切たァホンニはつつけと云道たァ【清】へイヤ今夜ハいろ〳〵なやつらに出あふ晩だ【喜】へホンニきゝていい事をきゝやす子是より衣紋坂へさしかゝり清助白ィ手ねぐいを出して前がゝりにかふれバ【喜】へモシ清考さんそれハどふしたおしやれでござります【清】へイヤサ是から先ハ通る程の者がみんなおれを知ッてゐるからゆだんがならぬ夫レに五十軒からぶつたつて中の町ハ兩かわそのうへ第一にするがやのかゝァしうが見付ても大の惡也大かなやの女郎も中の町へ出て居よふもしれずほんにうつかりとあるかれるもんじやァねヱ【喜】へ如何さまおまへゐの事なればそうも有そうな物さ【後】へホンニおまへゐンのやうにしやうのわるいお方もござんすめい【清】へヲフト聲高しモゥお屋敷前に成やしたと清助小聲に成て大門へ入リ是ゞ大喜今大門に居た禿はおれをおれを見付ハせなんだか【喜】へイ、ヱ【清】へ扨もあぶなかつた【後】へモシ清幸さん今大門に立て居なんした新造さんがおまへさんをじろ〳〵見てわらひなんしたにヱトのせかけられ【清】へそれには大ィの譯有リさァリヤァ去年おれが五六度買たやつが出した新造さとうそとみそとの中の町から京町へ入リ海老屋の見世をさし覗けは中座もま

だ半分の餘もならんで居れば清助そゞろになりこけか十九文見世を見物するやうにきよろ〳〵と見廻し【清】〽コレかゝさんあんまりどつとしたのも見へねヱノ【後】〽何さよふこざんすにへ【清】〽是大喜どれにしやる【喜】〽アイとれも〳〵美しい揃へで目うつりがいたします【清】〽何さといつもあんまり氣の有のハ見へねヱ【　】〽モシヱそうおつしやるけれと子此くらゐ揃た内がそんなに有ルものじやァござんせんにヱ【清】〽それもそうけいサア大喜早くきめやれ【喜】〽アイマァおまへどれになされます【清】〽コレかゝさんアノみを書てゐるやつがどうかよさそうたがどふもつらがミへねヱ【女郎住の江】〽千とりやァ【禿】〽アイヨ【住の江】〽めしつぶを持てきやァ【千鳥】〽アイヨ【住】〽そしてノウ二かいへいつてノ清花さんの客衆にノ封じ紙を二三めいちらつてきてくりやァト顔を上る【清】〽ヨツトよし〳〵きれい〳〵こいつハすごいかゝさんおらあれにしやう【後】〽アイさあおまへさんハヱ【喜】〽アイワたしのハおまへ能イやうにたのミます【後】〽イヱサそうおつしやらずとお見立なんし【喜】〽アイ【後】〽モシヱ今こつちらを向イて何か云なんしたのハヱ【清】〽それよりやァアノかんざしであたまをかいて居るのが能からう【後】〽アノお子かへ【喜】〽アイあれに致しやせう【清】〽サア〳〵それてきまり〳〵【後】〽サアそんならおはいりなされましト先へ立てモシ

若ィ衆へお客人ンがござんすョ【若者源兵衛】へエ、ィ御上りなされまし【清】へサア若ィ衆コレ腰の物をたのむよ小柄は中橋〳〵といわれぬ先に階子をあがりサアどこだノ

廓中の諸譯

若ィ者座敷へ入サア是へお這入なされませトあんどうをかきたてる【後】へモシ若ィ衆へ今云たおふたり人を間違れぬようにおたのミ申やす【若者】へアィ【清】へこりやア能座敷だノあそばふなら諸事表座敷の事ッた【喜】へアィサ【清】へ掛物ハなんだ休山か布袋だなんだアノ花の生ようのぶきようさ水ぎわが第一わるいおらが生るとまだよつほどおつがあるテ【通し禿】へアィお茶ァ上りんし【清】へエ、コレわりやアいつ江戸へ来た國ニヤどこだ伊豆か遠州か【禿】へエ、モすかねェノウトいふうち若ィ者多葉粉盆一ッ持て出て【若者】へアィちとこちらへおよりなされませ【清】へヲットのミ込〳〵是で調度女郎衆の居り所がきまるといふ時盃臺持て出る【清】へヤ是リヤアとんだ美しいノ【喜】へいかさま子【千鳥】へおかミんすョウ【清】へしたがモウこれめしくさくなつたおいらんのむなさきへつかへる時分だ【千鳥】へすかねェノウ【後】へ又清幸さん穴をおつしやります【清】へ今夜おれが□□□をしてや

らうぞ【若者】〽ヱおまへ氣ぬかつた事をおつしやります□□□モゥとふに私がいたして置ました【千鳥】〽しつたかョゥトせなかを一ッたゝいて行【ミな〳〵】〽ハ、、、、、こいつァ能〳〵トミな〳〵わらふうち女郎二人來る　（清幸が相方ハすミの江表座しき也大喜が相方ハらうか座敷にて松風禿ハ遣ハず）　【若者】〽サァこつちへおいでなさりまし【女郎二人】〽アイトたんすのそばへ居る　（トすハ座敷ハしんくしんとなる）　若ィ者盃をはじめハイあなたへ御上申ますと清幸へさす【清】〽マァ〳〵大喜【喜】〽イヤ先上りまし【清】〽そんならおさきと一ッ呑ミ住の江が方をしり目て見なから臺の上へをく【若ィ者】モシとなたへ【後】〽アイあなたサ【若ィ者】〽ハイト住の江が前へ出スすミの江ちやうしの口でこつちりとして臺の上にをく若ィ者大喜がかたへ出す【喜】〽ちとおあげ申やしやう【住の江】〽マァおとり上なんし【喜】半分受る【清】〽ハテひとつのミやれナァ【喜】〽アイト盃松風がかたへ遣ル松かぜ少し請て【松かせ】〽モシおかさん上んしようゥ【後】〽アイちとおさわり申やしよう【松風】〽アイおあいをおたのミ申んす【清】〽ちと見申んしようか【松】わつちやァ呑んせん【清】〽初會にやァとこの女郎衆もそうした物さと盃をとる若ィものゆるりとお上りなされませ　〽モシかミさんおたのミ申ますト立て行ク【清】〽こりやァねつからひやだ【後】〽そんならちとおかけなされまし【清】〽ヲイト火鉢へ懸る大喜鼻がミにてあふく　（此所にて吸物出る盃しハら）

廻(くろ)らうか方へイこりやァどなたもようお出なされましたと 船宿の若イ者藤兵衛 〽ちやうちんけして座敷へ入【後】けふはおそかつたの【藤】〽アイやう〳〵今歸りやした【淸】〽とうた藤兵へきついもつたいだの【藤】〽イエサけふはモウほう〴〵あるいてげつくりくたびれやしたしかし歸て聞(よけ)ばおまへがお出ときゝやしたから茶づけを一ッはい立ながらかつこんでじきに參りやした【淸】〽ソリヤァ御苦勞(くらう)〳〵【後】〽ほんにあの大文字屋のみはとゞけやつたか【藤】〽アイ【後】〽そして下谷のはちつともきたか【藤】〽アイイエサるすたからお歸りまでまてと男衆かいひやしたから待ッておりましたれはやう〳〵五時分になつて歸らしつて子とふで二三日のうちにおれがいくから今夜はマア歸れとつて子ほんに三文にもならすに歸りました【淸】〽そりやァきつく茶になつたノ【藤】〽ヤモ一言もごさりませぬ【後】〽コレ藤兵衛やおらモウいくにヨ【藤】〽アイ【後】〽モシおふたりなゆるりとおあそひなんしァイ女郎さんがたおいとま申んすヨ【二人】〽アイ【後】〽コレ藤兵衛やおむかいは何、かきゝ申てきやト後家ちやうちん付てかへる【淸】〽是さ大喜そんなに火をあふきやんなァ女郎衆の髮へ灰がかゝるはナァ【喜】〽アイ是はそゝうをいたしました【淸】〽そしてマア炭かたんといろうと思つて女郎衆の顏が青さめて來たはナァ【住】〽エ、氣が違つたそうた【藤】〽淸幸さん又きつい穴サ【淸】〽よしか【藤】〽ア

ィよしさ【清】〽サァそんなら一ッいきやしやう【二人】〽アィ【三人】〽シャン〳〵【清】〽し
かしこんなに穴斗ッリいふと女郎衆のしうちがわるくなるもんた【藤】〽モシそれも穴かへ【清】
よしさ【喜】〽よしさ（是より ちくち）【藤】〽よしさ【清】〽よしさか茶をたて【藤】〽をたて【清】
〽をたて【藤】〽をたてがなかし【清】〽なかし【藤】〽なかし【清】〽なかし組かしら【　】
〽かしら【清】〽かしら【藤】〽かしらかくし【清】〽かくし【藤】〽かくし【清】〽かくし
にようらい【藤】〽にようらい【清】〽にようらい【藤】〽にようらいのわたし【清】〽ワたし【藤】
〽わたし【清】〽ワたしけない【三人】〽ハ、、、、、【清】〽けないとハ大のさし合【藤】
〽ヨットそのけないて一ッ上りませ【清】〽何さおれ斗ッり呑れなアサア〳〵大喜一ッ〳〵【喜】
〽アィとひとつ呑てさす【清】〽ちよつと揚屋町【藤】〽アィそんならちよびとおあいをおた
のミサ【住】〽アィぬしのおあいならひとつのミんしよゥとちやうと呑【清】〽イヤちつとや
けるハィ【松】〽モシエおめへよりやァわつちか子やけんすよゥ【禿共】〽アィおめしようう上
りんしと（たん〲ならへる）【藤】〽サァ〳〵お膳か出やしたちとお上りなさりまし【喜】〽モシ清幸さん
お上りなさんし【清】〽何さゝめしハ内（シャア）でもくうハナァ諸事のミ事さく〳〵【藤】〽そんならお
ひらでもお肴に上りんし【清】〽さらハひらをくわんとてトしやれながら明て見てなんだ此切身

ハ鯖じァねェかイヤコリヤアスコ来たハイヤモ甚く〳〵ざし〳〵長いものにしいたけとハきつい病人イヤおらをハ痲疹(はしか)でもしたと思ふそうた（此間女郎ハふたり向合てゆうへのきやくのはなししてゐる）へ禿衆おちやァもつてきてもらおふぞへ【清】へサアく大喜此ひら皿(さら)で廻すぞ【喜】へイエく それハ大の悪(アク)でござります【清】へ何さ一盃ヅヽぐい呑さく〳〵といきもせずにぐいと呑んで大喜へさす（大喜ハしやう事なしに受る禿八分めほどつく）へコレちどりや此平ァそつちへ下ケやとなげる（若イものきたり）【若】へモシちとあちらへお出なされませ【佳】へモシエわつちが助て上んしようと佳の江すつと呑んで【佳】へコレちどりや此平ァそつちへ下ケやとなげる

【清】へおつとのミ込〳〵と両人立ば【[illegible]】へアイおたばこ入ハわたくしが持て参りますと藤兵衛つゝいて廊下座敷の中程松風が部屋へとろ〳〵と入モシ清幸さん今のうち【清】へなんだれいこくか呑込〳〵【喜】へマアこゝから遣しませう【清】へ何サおれが方からやるハなァと（ないもいたあるやうにいへは）へ大喜藤兵衛に一角わたせば【藤】へ行燈のきわてあらためそんならわたくしハおいとまにいたしませうお迎(むかい)ハ何時へ【清】へハテじッサノウ大喜【喜】へアイ【藤】へそんならゆるりとおあそびなされませとちやうちん付て階子(はしご)をおりる【清】へナント大喜此たんすも中ハからであらふノ【喜】へそうかチ【清】へ此ふとんは大ぶすへ(エ)くさくなつた【喜】へアイそれでも夜着ハ能イ物のはてゞござります【清】へ何さおらが仲間の市にせり物に出ると八十

四五ぐらひに外ふめねヱきさまなどの見せへ持て行と四百こミの三分ぐらゐ外付ヶれせまい【喜】へァイマァそのくらゐな事でこさりませう【ちとり來ッ】もしへあつちへおいてなんし【喜】へサァそんなら清幸さんお出がよふござりませう【清】へマァ〳〵爰て一盃やつつけふ【ちとり】へイ、ヱマァあつちへきて上りんしよふト手をとり大喜も一所に表座敷へ行キ仕の江が□麻へハル千どりれたんすから何やら出して出て行【清】へコレ大喜ャおらがやつれ餘ッ程きん〳〵物だの【喜】へァイサ美しいものでござります【清】へ何ッ夫よりマァ此夜具を見やれ仲間市へ出しても百四五十匁斗ッが物れ有こん地の錦にそして緋ぢりめんの三ッ【喜】へもしへもん所れ三ッ柏でござります【清】へャそりやァおれと同し紋だなんときついか〳〵【喜】へャモすごい事さ【喜】へ此茶だんすの中れどうだハ、ァ一ッれさぜん豆一ッは梅ぼしの煑たのだ是さ此ように酒しほだくさんに煑るから此あまつたるさ【喜】へモシ〳〵それれきつい惡でござります【清】へしかし此たばこぼんれ安ィコレ〳〵下の引出しにれミす紙の袋りが少しこりやァなんだハ、、、引ッへがしが四五まい有こちらの引だしれなんだハァ金龍丸だ【喜】へモシ今に來やせうにヱ【清】へ扨とちがひ棚はどうたハァ淺草のくわんおんのミゑいと三河じまの不動が有ルこつちられなんだハ、、、、改名が張ッて有【千とり來ッ】へモシヱ何を

しなんすへと云すてゝ火入を持てゆく【清】サァ大喜一ッ盃呑ふ【喜】へイヤわたくしハモウ御めんなされませ【清】へハテつき合だ一はいのミやれとつべたいやつを茶わんへうけて喰ちらしの硯ぶたを引よせ殘りししゝたけや梨子の小口切をつまミかゝる所へふたりともに來りまたおやすミなんせんかと屏風の際にすわる【松】へヨウ酒をのミなんす子【清】へアイ諸事酒の事さ【松】へモシあつちへお出なんしと大喜をつゝけハ【清】へそんなに早く□□がらねいもんたョ大喜もつとあそびやれなァ【松】へイ、ヱぬしのおじやまになりんすこつちへおいでなんしと大喜を引ッ立モシ住の江るンおやすみなんしモシヱゆるりおしけりなんしと大喜と一所に部屋へゆく大喜□□入レハ【松】夜着をかけてやり床の上へ直りてモシヱあの清幸さんとやら ハ能ク酒をのミなんす子引そしてマァ能クしやれなんすね引トたばこすい付て出しぬしもちつとおしやれなんし是やそこを通るのハはる野じやァ子ヱかへアィ是やァたのミてェ事があるよゥへなんでありんすヱとしやうじを明るへあのノ能子だからの茶を一ッへい持て來てくりやァへアイへそしてまだ用があると立てはる野が耳へ口を付てァノ、源兵衛にのそつとノ云ッてくりへ何をヱへアノさつきにノたのんで置ィたじやぜんまめをノはやくこしらへてノかミさんの目にかゝら子ヱよふにしてノそつとよこしてくりやといつてそつとそふ云ッてくりやヨウ

【禿】ァイト行掖松風ハ立てたんすから□□を出して又床へ上りたはこを吸付て出しそのきせるにて松風も一ッふくすい□□のうちへ入る時春野茶を持てくる茶わんをとり【松】へのミなんせんか【キ】へァイト大喜一口のめバ松風□□□□□モシエぬしやァとこてごさんすへ【キ】わたしやァいなかさ【松】へ何いなかだへ【キ】へァイ【松】へエ、にくいノウトロのはたを□□□□【キ】へアイタ、、松風□□□□□今夜は大ふさむうごさんす□□□早明かたのかねのおとにくや烏かかあ〱

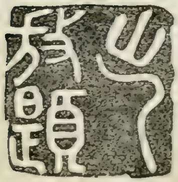
通志選終

望鶴風謠

序

大悟者南无彌陀之先生博識之强長也一揮毫欲拔擢於題目髭二揮聿要斥非不淨說法之聲色類肖狂奴話三四謗書苛々然而搖於外物之細僅也傍闒之則不容陶氣不凘辛勞頗似隣疝氣病頭痛也越而里雀面謁言不遁引理當表和臯睦嫋而裏些詰屈迫附若釜熱油雖怖烹之實以卓犖而不拘之說客也悟公亦曉阿郎忽崛起許諾趣段猶三舛鳴神路考立入可謂大締人物迄兩傑矣噫咨寓言含實者乃噓戲作信而孤匪獺之嚙鬪耳細贏之爲賭財亦日前也里雀者何人乎丁子屋比那都流之表德云爾

風來散人



里靏風語

淺艸のほとりなる閑素幽捿の聖大悟和尙念佛の片手間に庭前を眺て岸淸うして龜出て曙け松暗うして鶴飛歸ると高吟に靜座をたのしまるゝ所へ歲の比十八九と見えてはでやかなる美女ひとりとめ木の薫さつとかうばしく紅の浪うち寄るやうな褄ふミしたき外八もんしにゆりかけて和尙の前にのつしりと居直りけれバ後に十二三ばかりのおなご中ふさの大廣袖にはさみ帶しやんと利口けなるがあゆミふりまで同し樣に付添ひかしこまるを和尙つく〴〵ミられ扨〳〵あでやかなる女姓ハかたち髮のかゝり嬋娟たるありさま沈魚落鴈のおもひ誠に當世の小町とも云そうな生れつき殊にふたりの女の童色界の三尊か摩耶夫人の再來ならんと合掌して　ちるれハかの女少しうち咲ワたしは御見知も御さんすまいくるハの雛鶴と申んす者ちと御咄かありんしてまいりんしたと云に和尙うなつかれ是ハはしめてあいました聞およふ花街のつとめうき川竹のやるせない身のうへいとゝ罪ふかい女子のまして多くの人をまよハせたる懺悔またハ後生菩提の爲我ハか血脉を受にワせたものであらうきとく〳〵と物貰ふたより嬉しそうにサァと口なめつ

りをして南無歸依佛としやにかまへらるれハひな鶴顔そむけィ、へそんなこつちやありんせんとひんとして客の金くれた時いやミ云たをよそ見したやうにとつてもつかねハ和尙きよつとしサァ是は是ハ何か魔か入かゝつたそうおれも數年の行者何のそのやるものしやないと皺たらけな臍下はつて祐天のかさねにむかはれたやうに息をつめていらるゝに雛鶴莞爾笑ひとつと前おまへの法の兄御萬隨意院良石さんか松葉屋の瀨川さんに出會んして池水を夜な〳〵人は來て汲と月も曇らす水もよとますと云しやんしたれハ瀨川さんか身の上に夜な〳〵客ハ替れとも月もよとますやゝもやとらすと答へさんして色ゝ問答かありんしてから夢にたにはなのくるハをしらすして唯いたつらに老にける哉とよまんしていかふさとらしやんした事かありんすさそかし御存てありんせうおまへも世の中の事よふ知て居さんすけれとまた靑い御方なまさとりか笑止さほんのいき佛にならんすやうにふかう世話にしてあげたさひまかいてまいりんしたと云に和尙所化の時分から喰物もくわす爪に灯をとほすやうにして書物見た御影に大寺ふまへ今は隱遁して念佛一三昧に多年の功積りてもはや善導大師そこのけ三尊の彌陀の一組や二組は淸涕の中からも出さるゝやうに思ハるゝ氣からむつとして齒齗はかりな口を書習ひのへの字のやうに澁面つくりなま悟とは不屆なやつサァ何か法にたかつた事かあるとせかるゝにまつ氣をしつめてき

かんせもつとも佛さんの教に違ふ事ハありせんぬか佛さんと云も元はお人人は皆あめつちの氣をうけて生るゝゆへ小天地とて二儀陰陽の外ハないけにありんすその陰陽の交りを捨てむりやりにかたまつて居さんすか間違ひ梵網經のをしえハ花のまハりに垣結たやうな物で狼籍のないやうにとあふれぬまでのおきて邪婬とはよこしま斗の事てかたらひの道をたち切たるてはないげにありんす婬欲即是道とて人は元より生ある物このまよひないはありんせぬちかひ比も見さしやんせぼんさんがむりな色さんしたとてさらしものがありんしたあの通りきつとならぬ事せぬことゝ掟が強いゆへの事戒といふ物かあるゆへ破戒といふ科人もありならぬ事して見たいは人情禪宗の門に石碑立て葷酒を禁じておかんすれハさかつきてハならぬゆへおめしの椀へ湯桶から唐茶うけて引かけさんすゆへ惡い生酔も出來病いにあたりもしんすやうなもの放生會とて小鳥放して功徳しやと立てあるゆへこゝろよう野山にあそんでいる物を籠にとり入くるしませて買人待て直賣せんとたくハへて置もその人の科てはなしそんな事がなけりやくるしませる人もないはづそんな方便說になつんて本ンのさとらんせぬ故の事虛無寂滅のおしへハ身の上の縄はりまこと寂滅爲樂なら煩らハん時藥のまんせすたのしミにおもハんす極樂へ早ういなんすかよし人參に高金出し鍼よ灸よと養生さんすハやつはり苦の娑婆火宅の內か能と見えんす石上樹

下のすまひに襲僧衣着てはお披かんすれ仕合のわるいせうことなし金襴の袈裟か掛たい乗物で七五三ふませたいと願われんす出世念も談義説法にいろ／＼な軍ばなしして役者のこわ色つかふていき込かよいのしうたんか能のと評判取ておゝきんばゝきん達にどうらうたせ鬮出して佛さんの押賣さんすも元は寺建立の爲となりよりこれの門が大きいこゝの須彌檀が能光ると人にごけらかして尊い寺は門からとたとへのふしに仕たいばかり他宗はどうじや悪魔じやの外道じやのとあられもない悪口云て數万の人に瞋恚たきつけさんすもよそはさなわるいこれが能といはせたさとかく我田へ水を引くめん又隠遁して金貸て高利取て樂／＼とゑようか仕たいとおもわれんす人欲もまたべしてもない事世話にして書物作りむかしの名高いお人達を爰がわるいどこがとうしたといきさゝかな事誹りまわしかまひにもならぬ事骨おつていきさんすも博學な御方じやあんな人はもふないとうやまわれんとおもわれんすもとりも直さす慾心やつはりまよひそれも是も皆玉に似た瓦金に似た眞鍮むかしも今も云て見ればおつればおなじ谷川の水かけ論はつきぬ事をどふじやこふしやといきせはらんすれとなりの事やつかむやうな物で畢竟むねがせまいからの事善悪不二邪正一如と一呑に粽な事云ておかんした釋迦さんはぬけめのない大の先生その釋迦さんの御秘蔵やしつたら女さんの事はいわひでも御存そのほかむかしの名僧釋の淨識さんは

かミさん持んして御子達までありんしたけれど法力に違ひハありんせぬ深草の玄誓さんや親鸞上人さんたち皆色しのぬしさんたち今の世にも破戒じやの墮落じやのとそしる人のないは大キな御手からさとつたハみなあんなものおまへも今名高いお方名利貪欲を止て天地自然の道にたちもどらしやんすやうにワたしがいらぬ事ながら仕こんであげんせうと顔に似合ぬ古文眞寶に甘艸を加味してむつくりといけんするに和尚横手を打扨も／＼そなたは高い見識なる程おれもそんなヿしらぬでもおじやらぬがむかしの名智しう女ほん肉食をせられしも德あるゆへわれらがやうな者是をせば鵜のまねにて烏羽の黑き衣もきられまいと卑下せらるゝにイヽヘ今の名高い御方ハおまへひとり誰がこんなこと聞分やしやッ花街の習ひ色を表に立て色氣もなう色のない内に色のあるのが誠の色業平さん見るやうなとのごでもうつくしいのになづミはせずおりあくたのやうに金遣ふお人もいきがワるけりや明た目で見もせぬが里の習ひいやミと高まんとをさらりとぬけてやハらかてすんとしてことわけ知たお方にうら茶屋でやりくりして眞實に逢かたのしミこちからつとめ出して逢とげるお人のかたへかならず身ぬけして行でもなしつらい勤のうさはらしとハ其日／＼をおもしろうをくるばつかりまたしんから野ぼな御方と見れハ猶いとしく一座のさハり云そこなひまで引とつて恥かゝせぬやうに繕ふて上んすが本ンのまこと久し

う馴染たお人ハ元より二三度あふた客衆でもワけもなくて外の女郎衆にあハんすりや待うけて髪をきりぼんさんなれバ眉毛おとして曲輪中の人にわらハせその上ハふり返りて見もせすわけすべさへよふ立ハ一間のうちて二人や三人の女郎衆にあハんしたとて不義とも放埒とも云ものはありんせぬ是がくるわのならハし着して着せす流不流のさかひはゞ高いこゝろもち爰はおまへ早う通しんす筈それで若いおさんたちの内〳〵て人のかミさんや箱入の娘子さんたちにうき身やつして疵が付たの捨つたのとむつかしい事出來ぬやうに花街を立ておかんすからハやつはり此世の極樂淨土皆一度づゝはまらしやんしてにくいかあゆいのわけをおぼえさんすからハ佛さんのおしえもをなし事遠い未來の車大進に座臥の事ハ云んすけれど近い花街の三蒲團に定佛のわけハ夢ていさんすが笑しさ燈臺もとくらし本ゝにおかしうありんすなる程〳〵古きことはに佳肴も食せざれハその味ひを知らすと佛法と茅屋の雨は出て聞けじやおれも若ひ時はそんな事もちとハやつたが年が寄ておのづと清僧のやうに成たハ元氣のをとろへそふくハしく聞てハまた初めねばならぬ先問うおれが云事答へて見よと山内の法問日に鐘聞たやうに叉手してじつしりと落つき

それがしあたまハ兀面は皺いはゆるかうち法印に似たり汝が客といはゝいかん雛鶴答へて

花ならぬ梢もゆかし榊ばの
しげりあれなん影とたのまゞ
また問すミのおれか木のはしとゆふべきかたち是にても客といはんや
なよ竹のすへともいはし岩根なる
まつのときれもをなじミどりぞ
それがしが岩ぐミのやうな身を汝が花の姿に添ぶしせゞうかるべきや
さゆる夜もよそはさしもぞ水鳥の
あら磯浪にうきねしのびて
それがしがごとき金なきもののいかん
こかね花咲みちのくもなどかえん
心くもらぬ月のミやこに
それかしいたつて酒を嫌ふ汝も飲まじきや
さかづきになどやれくまん竹のはの
露だにいとふ袖としりなゞ

それかし小唄浄瑠利三味線物まね等の藝なし是にておもしろかるべしや

松風も鳥の色音も何かせん
しづけきやどの夜半の手枕

人皆いへり藝いふとはいかん

はかなしや葎の宿もてりまさる
玉しく庭と人にかたりて

かく問に應じてつらねければ和尚ほや〳〵と微笑して

美婦〻〻　來告北州
巉岩摧裂　涓觀清流
已去瓦閣　且臻玉樓
形分天地　氣滿春秋
自然情理　鴛鴦入眸
如意寶樹　依君相求
無量壽海　依君得捜

一一交態　忽滅百憂
百憂既盡　千心大休
對君晤談　萬物悠々
有無渺茫　身如輕舟

とうたれければ雛鶴よろこびて

雪解やおもえハ元の水車

和尚また輿に乘して

轉丸寢未見眞實　野父哉四十餘年
土平土平潺湲勢　風落沙落月夜顚
短刀是醫者眞似　道理甕瓜唐紫幹
解釋替貌爲動作　頓兮茶釜化藥罐

此狂作を詠してうかれらるれハア、いかふきうくつにありんしたとするくとよりて何か壹貫貳百匁ばかりある輕い身を和尚の膝にもたれかゝり人のをもひハ今更にふかうなるほど初心らしと小聲にうたふもかはゆらし翡翠の色のつやゝかなる鬢に一貝三匁五分の百助か名題の銀出

し梅花のかほりひた〱とにほひ込むに和尚も煩惱卽菩提心とどふやらあぢな氣になられ暮の餅の三月比かひたやうな顏にしほの目してはれやれよいこゝろもち前度七間町よし町てたけの延た野郎あけて目ましの竹の子喰たよりハ百はいのやハらかさ上品蓮臺てあそんだとて皆變生男子の角つき合是が本〻の大極上黒品の卷頭外面如菩薩内心もやつはり如菩薩しやと何にかゝつてもはかいきしてついらちのあくのハ才子の德□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□ひなつるついと飛退近いうちくるハへ御さんせかならすまつそへと小つま揃へてふりむきもせす立て行うしろ姿和尚も手のもの鳶にさらハれたやうに口あいてうつかり見送りてもきとうな歸りやう能〻おもへハ普賢菩薩我道心をこゝろ見んとかりに女と化し來現ありし物ならん今ころは大かた白象と共に白雲に打のり西の空に行給ふならんと障子のすきより覗ひて見らるれハ鏡蒲團かさね敷たるおろせ駕に打乘り遣りて若いものうちつれて北の里へサツサ〱

香港油通污

序

天高きを知らで。天狗は鼻を自慢し。乳母は居風呂桶の牛房にはぢて。大地の廣き噂をしらず。知るもしらぬも大門の。關の戸かたき下紐を。常盤のまつのいろに引かれて。いらざる天窓は本田わら。やぼ小路は無ひ處と。うらしろのせめ道具に。悪方みやげのうひろうの小粒をはづゝ。はづゝ切たる勢ひには。だひ／＼とつさんかやかゝさんの言叓などわ。中／＼ぼんのくぼを素通りにして。親の譲り葉の身上を。一うちぽんと才藏が。鞁をやらかす時は。田鼠化してうづらと成。雀海中へ入ッて蛤と成り。野暮てん變じて大通と成。大佬の額たわらの。

さんたわらのと。柏莚(はくゑん)もどきに御車口(おしやべり)被成(なさ)る事。疑(うたが)ひは
ござらぬと。まづ是までれ御人よせ。いよ〳〵前坐(せんざ)を。
おはなし申ましやふ。

于時
安永十
かのとのうしの青陽

南陀伽紫蘭戯作

舌講油通汚

コレハ〳〵何れも様。能ふこそ毎晩の御出情。扨今晩申まする所ハ。昨夜の申かけ。客人甚せきが原ニて。てきの小ゆびを切したがへ。マツこなたの心中ニハ。七両おどしのよろひを流し。丸角ニて拵へたる。かぶと頭巾をゐくびに着なし。赤銅鍔に金ふくりんかけたるお太刀をはき。名のつて出たるハ。しほやのこんのう。借金あまた引具してドウ〳〵と一ッ時に聲を上ゲ。洒落ころばす事日本堤も崩るが如し。シタガかよふに申も久しい物。八文字屋ニも艸さうしニも有ルやつなれバ。ぐつと氣をかへて。御はなし申ませふ。時に近年の艸そうしをごろうしませ。誠にハヤ御子さまがたも。大通におなりなされてござる。サテこの通の意味合を。とつくりと、かんがゑまする所に。おの〳〵がたハいかゞ思し召ます。もつとも春ごとに。通のみちをおしへます書もあまた出ます、又艸そうしニも畫がござれバ。其かたち歩行やう。水髪の棹ほんだがく屋いてうの。紙帳のどんてうのといろ〳〵に書付て。御されバ。中〳〵此ほうしきがやう〳〵と。鐘四ッをまつて。人の壹ッ分といふこゝろに似た所が。青樓の傾城を買ひ。けこ

ろを買へバ。八文の湯錢をかするごときの貧學て。申た所がお聞なひはづなれど。せつかくの御出で御ざれバ。だまつてもおられず。ほんの一ッ遍上人。はなの下のくうでんこんりう。且ハ本屋に茶代のうハ汁を吸ハせんため。時にマッ拙者がそんじまする通の意ハ。短ひ着ものを着ましても。洒落を申さひても額をぬきませいでも。さやうな事に構ひませず。したが。春町坊こだく山むだあん寺ニていかん通。説法いたされた時も。ケ様申てでござつたが大通出入なとゝ申書を見ますれバ。褒德か大分書てござります。右の通たちも。其群でハ。天にも地ニも無ひやうにおぼへて。ミづからおれハ大通だの。通りものだのといわれますが。ワたくしハ一圓のミ込ませぬ。何といづれも様。いかゞに思し召されますか。通ッ者な事も通な事もけつして無ひかとぞんじます。しかしかやうに申ますると。大の不通とやらのやうでござるから。當時の通にお成りなされるやうに。ちよびとつまミなに。おはなし申ましやふ。サテいきと申まする事には。いろ／＼手れん手くだのけうげんのすじのと申て。むつかしひ事で御座ります。時々に流行いたしますることばが第一。次にあたまのこしらへ様。是も品／＼ござれども。大ていハ髪の毛ガ額を二分程ぬき上ヶ。じゆバんの半ゑりをまとひ付て。茶の袖口に只紋を付ヶまして。帯ハとび色なゝ子親和おり。大名すじ又ハ黒茶丸などしつかりいたして。上品

でござります。懐ハかますに小菊をはさミ。おのしのハ拾匁で出來たか。おれがのはあの屋で壹分だよなどゝ。壹匁なりとも人聞を高く云ひ。りやうり茶屋遊山所は。升屋樽三ぶからおして廻り。鴛鴦見の枯野見のとワびた事をうれしがり。又さやうかとおもへバ。可利の心懸が第一でござります。サテ女郎買ハ中におよバず。是も色仕かけと申て。とかく引ミんたんのにんちくりん。かり着の袂ちはやふると。かへるといなや油じミた緋かのこ化して。一トばんこの元手となります。なんでもものごと直に致すハ。不通の至り。團子と申て人をまるめころバし互に顔を見合ると。出ても能さそふな手を寐て下へゆづります。是等のかけ引。三ン一ンかつはらひ。一六かた目おろしハ年ン中用ひてござります。大門から水戸尻まで。茶屋ハのこらずしたつたふう。中ニも根もと屋尾張屋小田原屋の類。又ハふし見町かつさやの類。是も下リが多く成るとかハりますれど大ていハその心がけ。あまり正直に拂ふハ大ぞうの至り。御拂ひの砌ハ少しヅゝのこして置れませふ。とかく吉原さかい町の附合を。のめくりあるかねバ。通家とハ申されませぬ。せうかと申せバ。五字の點者とばかりおぼしめしてハ。甚以て氣やぼでやくにたちませぬ。おどり子などもこと〳〵く手なつけ。名をみんな申さず。しんとみをしんとト呼び。おなをおなと斗かしら字を一字ツゝ申ます。すべて此むれを者ととなへます。者のほ

都

うでハむさし屋をうれしがりますが。そこを大こく屋と出ねバ。通りものではござりませぬ。一日大こく屋で。ぐひ呑のすへふろを立テさせ。ぐつと湯這入の夕陽から者をかへし。いやとよ。せんどうどの。我か九重の都にはと。まつやをよびの。定やくまを引つれ。中の野で茶づり。今夜は氣をてんじの。惣新造買といふすじだが。まつ葉屋といふ句を直しの新町へ行き。二の町をすこかするおもいれも。ありやなしやとすミだ川を。蘭洲にうたハせふかなぞと。おつしやらねバ。大てい通家の意味とやらでハ。ござりませぬ。少しも眼つらをしつた人が來ると。付合とやら申て。先の坐しきへ行そのあハかたニ近付に成り。新ぞうのひとりもぜひ揚ねばならぬ所を茶にして。又こつちへも定めし入らせられるで有ろふなどゝいつて歸り。我が鹽屋をいふ爲に連をとんだほめころバしの大ころばし。あすもぶんながしのふんまハしのと道具立をならべたつておしやれなされねバ大通付合ハ出來ませぬ。ハテ能く申事なれど若內ハ二度とござりませぬ。いとけなふして。學ばされバ。老て知る道理かこさらぬ。すれハ子息たる時節に。どうらくを致さねバ。年がよつて。又我子のどらをいたす時に。思ひやりがごさりませぬ。迚もおやじさまやおじさまの。おつしやる叓は。くたらぬはじまり。おふくろさまをぐつとおくるめなされまして。随分と小袖はな紙ふくろ。きせるの類ひハなりたけこしらへまた他所ハ

かりちらしても。女郎のぎりハよくおつくろひ被成まし。顔ミせまへのまくも積ものもじよさいなく。おせハをおやきなされて。是ハ其場で。こまの一二三まいツヽも。おとり上ヶなされバ。隨分出來まする。誰ぞ會をたのミますならそれ〳〵にワり附。すりものをもつとも。茶屋をもつともなさつて遣ハさるが。よろしふござります。はいかいハ江戸かたしかし發句も附合も。あまり御出精被成ませずと。よろしふござります。執筆のしくぢりや。幇頭もち點者があまた通仲ヶ間にござれバ。代句ハじゆうでござります。評ものならバ入レ句で賞くが隨分上〻。句はにぶしとも。表徳さへ出せバすミます。高麗屋すミ蔵。河内屋半次。あふぎや太郎兵衛方におるて。晴雨ともに會興行と申する物に。御名がなければ。契情のまへにも。御立チ被レ成ませぬ。花も茶も少〻被成ば相すミます。盆石などハ子共らしひなどヽ。おさミしなされるも能し。河東ぶしハうならねバ。すミません。ひとり丸寐の油壺とハ口舌のいヽぐさにもなります。唐詩選ハもちろん。花ハさかりに月はくまなくなどヽ。つれ〳〵なども洒落なさひ。本所のやしきを賣ッてハ。蛇が蚊を呑んだやうにおぼへねバ。やくにたちませぬ。それ〳〵のはやりものも隨ぶん人より先へお買なさい。とかく金銀はわきものと心得。湯水のやうにおもひ。しかしそふかとおもへバ。とんだこすいこに。あたじけなく人をふミちらし。てう〳〵しく。

あいさつ致などが。專一てござります。まだ段〻とござりますれど。まづ一ッぷくいたしまして。後坐をおはなし申ませふ。

時に一寸申上ます。是れあふミやの花あふミと申契情の書ました。扇でござりますが。是をくじで各〻樣方へさし上ヶませうから一ッぽんツヽお買なさつて。下さりまし。くじ壹ッぽんを。八文ツヽと致しませふ。サアとやかふいふ内。たちまち賣れました。ヲット内のだんな。此くじをどなたにでも。一ッぽんおぬかせ申てくんな。サテひらひて見ました所が。との字でごさい。との字れどなただな。しかも床かけのとの字さ。ハ、アきつゐうかしを見るやうだね。サア扇をさし上ヶませふ。

扨是から後坐をおはなし申上ます。前ヶ坐に申ましたる。通の意味合。いつれも樣れいかゞおぼしめします。當時の大通〳〵と申まするれ。ミなアノ通り。さすれバ通ッ者れよろしく無ひかと存られます。マツひとつとして。取り得がこさりませぬ。又外にとりゑが無と申ても。せめて傾城の方でもうれしかれバ。能ふござりますけれど是迚も。やはりおとなしひ人の方へおちが參ッます。して見れバ。ほんの當時のぞめきと申物。第一身ぶん不相應な衣るいを着しまして。大せつな家業をよそにいたし。遊びに實を入れ。内れほんの家來まかせ。旦那樣がそう

致さるれバ。番とうはじめ奉公人。女ぼうハそうおうにかけまでも買かけるか。存じもよらぬ廻りの髪ゆひなどゝ。城木屋のおつかぶせをやらかすと。ざんじに身上がらんひ山さくら。世間といふせけんハ。不沙汰だらけ。あけくのはてにハ。旦那寺までふミのめすから。おのづと大せつな位牌處も。年ッ季月季が來てもあつひ茶の事ハおけ。ひやつこひ水を一ッはい。手むける事もゑならぬ。元ハといへバ旦那殿の心ひとつ。から。おこつた事でござれバ。爰の所をよく考へなされて。扨次にしうきく。花。茶河東ふし。是らハ通家のほうでハ。知らねバならぬやうに申ますが、夫も家業のよせいがござらバ。随分おこゝろがけなさるがよろしふ御座りますれと。せうばいをさし置て致と申ハ。眞ッの不通かとそんじます。殊更素人で藝の余りきてうめんなハ。藝しやじミてわるふござります。素人げいハやはり。不器やうながほんの叓ハテ能ひ藝ハそれ〳〵のけい者がこされハ。そのげいを業にいたす者を。よんで聞ますするが眞ッの大通。夫になんぞ。げい者に味噌を付させたのを。白まんらしく申などハ甚以て野卑でござりまする。藝が身を助けるほどの不仕合。いつでも大通のしまひが。随分能ひぶんで執筆か。はやし叮へでもはいればまだしもゑならぬのたいこなどに成るを見ましては。氣のどくな物でござる。又義太夫やぶんごをうれしかるものハ。何か人でも無ひやうに申ますが。是らがいちゑんワか

りませぬ。勘三ひゐきも羽左衛門ひゐきも有るでこそもつた物いかに河東ふしが能ひと申た迚。米のめしては有るまいし。朝も晝もばんも肴を喰つてごろうじろどうぞさら／＼と香の物で。茶つけがくひたひぞと。おつしやるれひつじやう。其うちにも好キな菜なら。ハテいく度もこしらへて喰ふが能ふござります。がいかに我が好だ迚。きらゐな人にむりに喰へといふハ。やづぱり不通のいたりでござりまする。義太夫の好な人に逢たら梅川忠兵衛も。八重太夫がやうに語つてへ。聞キ事でござりますと。相應にてうしの合ふのが大通とこそ申せ。なんぼ遊ひがおもしろひ迚。半月と居續をしてごろうじろ。寐る時を寐なひで。時分はづれな食事をして。酒びたりになつて居るから。腹れぐや／＼して。日の目をみると頭痛がしたり。是が何ンのたのしみな事もなんにもござりませぬ。たまさか。家業のよせいを。行でこそおもしろくたのしミにもなれ。もはや遊びに行も。人にかくさぬやうになつてれ。落城まのあたりと。おぼしめせ。かやうに申たら。通家のおかたは。なんぼうぬがいきせいはつても。かにれかうらに似せて穴だ。ゐつゞけをした事も無くつて。此まへ大かつさやの時分に。去ル人が半年居たなどゝ。おつしやりませふが。此おかたも時ミれのびをしながら。どこぞおもしろひ所へ行たひといわれました。人を馬鹿に致した。おもしろひ随一の吉原に居ながら。さやう申れ能ミ／＼。居

續の長じけハゆかぬものと見へます。去ルによつて此人も。日くれかたの懸仕をミるやうに。たちまちミしやく〳〵と仕まハれました。が。通リもの附合ハ。ミなこのくらゐなもの。あつたら干鰯問屋のかふを人手にわたし。藏やども止め。質兩がへの居やしきまで。里人にうるなどゝ申すやうな事が。なんと大通でござろふか。こゐらを不通と申さねバ。世の中に不通の根がたへます。在原の業平の歌に。

吉ハらにたへて不通のなかりせば
君かこゝろはのどけからまし

しかれバ。かやうな不通のともがらも無けれバ。またけいせいの爲に。わるひ事も御座りませふ。かむしやうに時を聞て。せハしなく遊ぶを大藏のやうに申ますれど。それハせわしひから。一ばい遊びもおもしろく。内のしゆびもあしからぬやうにいたすなれバ。是等ハ至極の大通家でござります。とかく近年の通達は。ぶんながすと申事を。致されます。よつて此叓を。大通時計不遊と。髭の意休も申されました時にお聞なさひ。此間もワたくしのぞんじた里人でござるが。とかく客人の事を。ワからぬ〳〵と申てだが。もつともせわしなく遊ぶ客をハ。是もワかる人とおぼへております。しかし里人は。あまり客人の事を。さやう申すもまた出來ませぬ

事でハござりますまひか。どうせワかる人は。あまり金にはなりませぬ。ハテワからぬうちこそ。金銭をむだにも遣へ。わかれバあそびにかぎりがござります。すれバあとで引かけられても。居宅の家質迄ハよほどうるおうと申もの。たとへいかやうな事が有らふと。客人のまへで外の客人をそしるは第一りよぐわい。吉原者なら吉原者のやうに。どろ田を棒な事ばかり。中ているが能さそふなもの。それでもうぬが心には。ふんどしをしめておつたが能ふござります。また去ル人の申されたには。女郎買のおもしろミは。初會に有リなじむにしたがひ。次第〳〵におもしろミは。ぬけるものといわれましたが。なるほど是も一理ござります。ハテ初會と申せば。此方でも女郎の氣しつが知れませぬ又女郎もそのごとく。能さそうな客と見れバ。又もや來るやうにいたす。手くだに大ぶんおかしく。樂しミもある事。もはや馴染に至りてハ。しミたる身の上をあかし。互に泣たり笑ッたり。いたすハ。なるほどこう味の有るやうな物なれど。能ふかんがへて見ますれバ。何ン、たわいの無ひ叓。かやうに申せバ戀の情にハうすかるべけれど。眞ン實にほれられたより。つとめにほれられたほうが。けつくおもしろく。ハテしんじつにほれられたとて。女房にしやうでは有るまひし。よるべ定めぬ川竹の流れの身なれバ。何に舟が着かふも知れず。さすれバ共一夜の情さへ深ければ。おなじ事。それ共女房になさるお

もいれなら御かつ手次第。サテ客と半可と。吉ハら好と。色きやくと。ござつて。まづ我身で我身を。やぼと思ふ者ハ一人もなく。ミな通りものゝ心地でござる。千差萬別一がひの論にはまいりませぬ。またいづれ。おれハ平氣で遊ぶのなんの と申てミ。我買ます女郎に一人として。ほれずに通ふ者はござりませぬ。ハテ惚れずに行くやつハあたまでねぶ一ッてふ。そういふ田分ヶも又ござらねバ。そんな人にはとんとおかまひなされな。サテ只の客と申まするハ。諸事 のごと大やうに。けいせいの仕かたを。さしてこまかにかまハず。一ト月に二度か三度くらゐ参りまして。先になしミの客が來ているときも 名代をすなをに取り。又ハ紋日も大ていは仕廻ものまへに不さたをせず。死ぬの生るのとさハぎもせず。さしたるこんたんもなく。只りちぎ一ッぺんにあそぶといへども。度かさなるに至りてハ。實の色客に至ルべし。また通り者風に。しやれちらし。くらまへ小田原町ハもちろん。江戸八百八丁は。ミな近付がほに。けいせいをも相應に買こなすを。半可と申ます。是が前座ニ申た。大通の群でござります。時に吉原好と申ハ。くるわの酒をこのミ。月に五六度も參り。出入のあんまなどを引つれ。茶屋へ參るとそのまゝ。大あぐらになりて。又ハ女に湯をくませ。せんそくつかふそばから。女房が盃をもつて出ます。吸ものゝ出るをまちかね。有合の肴で酒をはじめ。あいかたのけいせひ。

ひまな新造を有りたけ引つれ。ゐん〳〵に腰などかけ。酒のすむまで傾城も一通りに。およしなんし。ぬしハ大ぶすぎんしたなどゝ。しんぞう禿ハさし心得。よねんもなく。伊勢おんどをうたふております。せなかの紋所ハ肩先へ廻り。しんぞう共ハ。ゐんりよもなくつかミちらして。引立れバ。地しんのいけ取を見ましたやうに。はきものを片ちんばに引かけ。若ひものが。てうちんとぼすをじれッたがり。女郎屋のはしごをばたくさとふミちらし。坐しきへ行やいなや。醤油しみたかづのこにつけとうがらしで。やたらに呑む内。あいかたハ外のざしきへ遊びに行又ハ。連の客の來ましたる所へ。まいつて。腹さん〳〵遊びちらし。能ひじぶんにやつと手まへのざしきへもどりまして、はや徃生（わうじやう）いたしておる客のはなの穴へ小よりなど入ましたり。つめり。かれ是いたして。なぶるうちに。膳など出ますれバ。又外へ參ッて夜食などくひ。酒などのミましておる内に。床も納りますれども。めつたで女郎ハまいりませず。やう〳〵と夜ふけて參り。前後もしらず。大いびきの中へこつそりとはいり。せなか合に一寐入致す内に。はや茶屋舟やどの。むかいがくれバ。目を覺し。帶など〆まして。はおりを着るまで。しらぬ顔にしたくを致させ。やう〳〵とまだはやうおざんすと。義理一ッぺんにとめるあいさつ。そのうへむかふ節句のやくそくまでとくしんして歸るなど。誠にはや。是が女郎にかまいませ

す。吉原すきと申ものでござります。又しんの色客と申まするハ。貧福によりませず。きりやう風俗によりませず。たがいに如在なくおもひましたる心より。なしミに至りますれバ。起請ほりものゆび切。髮切など。一がいにうわ氣とも申されませぬ。すべてけいせいハ。晝夜萬人をあいてといたし。いき人大通ハめしの上の蠅のごとく心得。色どる客ハなをはられたを見さがされます。爰にひとりの色客有りて。まことをつくす時ハ万人のはだをふるゝと申ても。中／＼心のミだるゝ事にござらず。下より呼びに参るせつなど。酒がすぎてたわいがないと。いやヨの又中の町へいきなんしたなどゝ。うちなぐりにいたしまして。ほうばいの心安く致すをりんきいたし。しれらく見されバ口みなど遣し。客帳まで見せちらし。衣るい金銀の相談。此雨ざしも扇にしんすと。三兩二分かゝりんす。枝にしんすと。壹兩二分ヅヽに。きわまつておりんすなどゝ申シたり。外の客の切れ引に至るまて。殘る所なくはなし合ますを眞ンの色客と申ます。又傾城の心を見分ると申事ハ。めつたにはまいりませぬ。ハテ同しうちのほうばい。遣り人の目にさへ見せぬ色事を。なんぞたまさか参る客の目にミせて。つまる物でござりませふか。マツいろ事を致す女郎ハ。茶屋の男。内のこしもとなどゝ。やつびし耳こすりをいたし。或ハ用ノ無におもてへ出たがりまして。ミせにおつてもまがきに人足しげくいたせバ。

きよろつき。また二階に居ましても外に唄のこゑでもいたすと。にハかに思ひ出したように。坐鋪を立ッ事など。度〻ござりまして。とかくうら茶屋はいりをいたすやつに。ゆだんがなりませぬ。又ふると申ても。むかしハあんどうの置やうニて。しらせましたるなぞと申はなしもござれど。當時ハそんな事も無ければ。随分とこつちも。目はしをきゝまして。こゑつはふるわへと思ふ　らバ。さつぱりと手を付ヶずに御出なさひ。なまなか手を付ますから。ふられたになります。さやう致さねバ。どつちからふりました。分かりませぬ。そふいふ女郎ハ。五七度も行キ。先キからきげんを取だんに成ましたらバ。さつぱり切みを遣して。行かぬが能ひと申せど。それまでにも及ませぬ。初會に手を付ヶずハ。ハテそれ切に致して。外へ行くが上〻吉。人の能く申句でござるが。〽傾城に惚られたのがうんのつき。しかれバ茶にほれられたほうが。大じやうぶ。サテ色客に至りましても。金にほれました客でも。三ッふとんの上へ。さんごじゆの賣ものを見ましたやうに。すハり。きやつめが参りまして。屏風のはしを持。ぐつと引よせ。今夜ハいつそさむふおざんすねへといわれた所ハ。なるほど日本國が一ト所へよるやうだと。枕そうしにも見へましたが。さうさう。むりとは存しませぬ。拙者なども。無金の一箱や二箱ハ遣りたい心地。扨是からハ合方と。互に名のり合まして。一戴に及ふ所でござります

が。まづこの所は。明ばんはなし申上ヶましやう と机を一ツ扇ではちり

記原情語

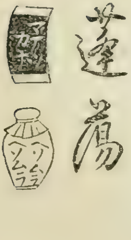
序

予が朋。淺艸の行過なる者。ひと日小册を懐にして來り。櫻木にのぼせ世に久しからしめんとす。その趣は當時流行の品に。杜撰なる記原を探りて。見る人にひまをつゐやさせんとなり。爰に於て。紙つゐふなる趣を。其はじめに筆をつゐやして。まあつかな講釋だと。書そへてあたふ

于時安永十うしの初春

森山艸津の間の宿

臍村の通人忍堂のあるじ



記原情語

彼の兼好が書しごとくに下戸ならぬこそ男ハよけれと玉の盃にそこなし上戸のをとこあり酉の年の生れにて名をも吐鷄幸次郎と言て生れハ京都の洛中にて爪に火ともす油小路志輪井喜右エ門と云ものゝ子也此幸二郎若年の比より出口の柳にまねかれて島原へ通ひ身ハほうらつになりうかれ〳〵て夜晝のわかちもない金遣ひ捨たるあげくにハ親の耳にも入相のかねのばちがあたり邊りへ賴で佗言しても合點せぬ親の枕見て參れとて追出されいまハ何とせん方もなみだに袖をしぼりつゝすへの松山わん久ぬ身のうへのごとくにて行べきかたもしら波の四文錢一本ほどを力にて東路さしてドリけり人の身の幸ハ實いり豆に花の御江戸の惠にて少しのしるべより相應の方へ聟入してしばし霜星をおくりけるが段〻と仕合能仕出したる身上を倅ニゆづり其身ハいんきよして今でハ樂に日ぐらし邊に艸庵をしつらい庵号を通庵と付我も改名して洛中の生れの洛と其身の水生の水とを合せて洛水と付旭に富士山を見夕アに筑波山の月をながめ春ハ名高き花所夏ハ青葉に暑を忘れ秋ハ三河島の田に照月ハ越路の田毎とうたがハれ冬ハ枯野も雪

の口も居ながらしるき名所の徳外に類も嵐山嵯峨や小倉の奥とハいへどこゝらハ何とて及んと獨り髭なでゝ住けりけふも又誰か來ぬらんと心まちに下人に庭の掃除をいゝ付床の懸物かけ直し花も生かへ爐に炭をつげバたぎれる釜の音友まつ虫のその折節表のしをり戸打たゝきおとのふ聲に内よりも主の洛水どなたでござるおはいりなされといへバ左様なら御免下されと戸を押明て内にいる年比廿七八なる男せひも高くもちあげたる本田あたまひたいもびんより五分程ぬきあげさげに骨の折る黒仕立やらくろう仕立やらにて片手にて少し前を持上出たる足も細身のをたち横から見ても建からみても通仕立なる男山八幡黒の足袋ぬけめなき物ハ遊びときんとう二ッ鼻緒のうら付はいて私ハ淺草邊の者でござりますが貴公様の御高名を承りおよび候故はる〳〵と參上仕ました些おめに懸りお噺し申とう存伺公いたしました何卒おしる人になり下されませといへバ主是ハ〳〵能こそお出先おあかりなされませと四疊半へ伴ひ茶煙草盆などいだせハ彼男いやおかまひなされますな私ハ淺艸邊に住居いたす行過と申者でござります私生得遊所が好ゆへあまねく契情を買歩き吉原ハ申におよばず東西南北のをか場所四十九ヶ所其外地獄に至まで一見せぬといふ事なく穴の穴迄しらさる事なし跡之近隣友多くある中にあつはれ通の名をあげ十八大通の其一人と呼るれども未貴公に對面せず承れバ貴公ハいにしへ京都にて大

四

李繫船公

通とよばれ給ひ今また江都の遊里に委能㕝の起りを知り給ひしと聞願ハくハその義を承んと存参りましたといへハ洛水是ハ〳〵ようこそお出何か拙者が名を御聞及びなされ御出とハ近頃忝しなるほど私ハ京都の生れ氏神ハ岩本の社にて業平の守り給ふゆへか女郎好にて嶋原はじめ祇園町宮川町縄手西石垣東石垣蚤虱の辻有合町其外洛中洛外大津伏見の墨染大坂のすミ〳〵迄買盡し身の行すへハしらぬひの親に勘當うけ此吾妻に下り色〳〵とかんなんし漸〻と世帯持少し金ができると焼木杭に火の付安い所の切見世から買始をか場所殘りなく札打納北國五町に入ひたり晝夜いたれども別に替る事なし定て貴公にも御覧なされたでござりませうが前〻より大通聖人達作り置たる小冊數多能遊所の穴を記せりこれに依て今さら論ずるに及ずされどもいまだ云出さぬ事あり萬事始万の物の其をこり名付し分を知ざる物多し是をしらざれば万事の通と稱じ難し貴公の聞たしと云給ふハ此義でござるかといへバ行過成ほどさやう今世〻北州に限らずをかば所の穴迄こと〴〵く記しヽ小本多くあり誠に孫呉が秘書且遊女の起りハ吉原大全といふ書に委し是をそらんじて能覺たれど其外何に寄らず其物の始其名附し元を知らず我此故に來りたり何とぞ此義御噺下さるべしと玄徳が臥龍が元に來りしごとくに言ければ落水御尤なる仰隨分御はなし申ませふとしかつべらしく居直り此江戸の遊所の始ハ貴公の仰のごとく吉原大

全に委あれバ是ハ申ますまい先人ハ髪形と申せハ髪から申ませう當世專らはやる本田と申ハかたじけなくも□□□□の帝□□□□御いミ名譽田の皇子と申奉る外の□□と事替り常にミごしをはけ永々して丸くまげ給ひけり譽田の皇子始て結給ひしよりほんだと名付く共後建久の比秩父の重忠が家臣次郎近常といふ者專らゆひけるゆへに本田の次郎といふ有時重忠馬上にて近常に用事有て呼けるが近常があたま餘りニげうさんなる故今からハかくゆふべしと馬上より近常がまげを直し鞍のまへにて直したるふうをくらまへ本田と云なり扨またはげたるあたまに靑たいをぬる事ハいにしへより有事にて候白樂天我朝に來りしときせいたいをぬりたるものと白粉を付る男をさみしたる詩にいわく靑苔塗ニ月代ニ禿覆レ恥白粉塗レ顏野暮顯レ恥と作れり黒油にて白髪を染るハ篠原合戰のとき永井の實盛はじむる梟俗ぶくろとうに用る漢東島ハいろ〳〵あれども小松の三位重盛好で織せしハ小松かんとう賴朝のこのミたるハ鎌倉かんとう童子格子の漢東ハ酒天どうじの好ミ也帶の博多嶋ハ夷國の博多國又ハ我朝の豐前の國より出たるといへども左にあらず松井源水是をすきてしめける故はかたといふなり虎珀ハ信長の好ミゆへに織田虎珀といふ也物草太郎のしめたる帶をどんすと云也又猫ぢやらし帶ハ女三のミやより言出す羽をりハ曾我の十郎介成好色ものなるにより賴朝公御前に召れ廓の穴を聞召たる折から祐成短きは

をりを着し出たるに頼朝公見給ひてへんなる服裁へんぷくかなとの給ひしよりへんぷくと書る文字ハ蝙蝠とよむゆへにこうもり羽織と名付たり加賀紋を付るハ三浦の平六より起る則きむらごう紋ハ丸のうちに三ッ引なり上の一すじ黄色に染中の筋ハ紫に染下の筋ハ紅に染なり其三すじを合て黄紫紅といふ是紋所に色いれ染るの最初なり八丈の小袖ハ昔城木屋のお駒といふ娘に手代丈八といふ者兼て心をかけて居けるが有時おこまおもハず丈八に黄なる小袖をやりけるに丈八思ひものゝ小袖を貰ひしとひつくり返りて悦けり則丈八をひつくり返して讀ば八丈とよむゆへに名とセり委ハ戀娘といふ書に見へたりすべて當世ちみなるなりをするをこうとうといふハ新田義貞の奥方勾當の内侍より始る扨亦ふんどしを下帯といふハ舜蓮法師云始る則三ヶ月をしん〴〵して水をあび拜をしける時の歌に

下帯の結ぶ氷に手をかけて
空にしらるゝ弓張の月

と讀置けりいやまたちと是から氣をかへて浮世ことを申ませふ先〻狂言の最初をいはゞ東山殿の侍に名古屋三ざへもんと云もの浪人なして出雲の國へ行お國といへる巫と色ごとして後に京の北野におゐて初て狂言といふことを仕出す淨瑠理は信長の妻小野のお通淨るり御前の事を

作りそめしより名とすかるわざハ高倉の宮御むほんのとき宇治川の合戰にて筒井の乘明と一來と二人して初たり浮世物まねハ孟掌君函谷關を通りける折鷄のまねをせしよりはしまれりけん酒始りハ其古へ□□□□東夷を征伐のときゑびすら尊に酒をすゝめ始て尊によく打かち給ひ艸をなぐごとくなげ給ひしより世に□□□□□□云傳ふまた天竺にては北辰菩薩はじめ給ひはなはだつよかりしゆへに妙見ぼさつと申奉る是けんの元本なり時にまた遊女の濫觴ハ平家西海のはてにてほろびし後そのつまども長門あたりに集りて始しといへど左に非ず其古へ肥後國飽田郡白川の邊ハ府中にて淫肆もありて檜垣稲荷などといへる遊女住けり是ぞ遊女のはじめなるべしおどり子の元祖ハ天の□□□の神子中興ハ島の千載若前舞始承久三年と和漢合運に見へたり又徒然艸にハ磯禪師と有めかけの最初ハほとけ御前岐王岐女かこひものハ賴朝卿より始まる無住法師の沙石集に故鎌倉の右大將家都よりあやめといへるはした物の美人なりけるを召下しかくし置けると有り人の女房をつれて逃るハ業平よりはじまる委しくハ伊勢物語にあり見給ふべし後家世帶のはじめハ□□□□居候ハ義經奥州の秀衡が館にてはじむ後家の色事ハ忝なくも□□□□□□□□と弓削の道鏡なり後に顯て道鏡ハ下野の藥師といふ所へ流されしと鴨の長明が方丈の記に有り間夫のはじまりハ左大臣時平なり二十六歳のとき叔父の大納言國經が

女房二十斗になるに通じ或夜ぬすミ出せりと小世繼十訓抄に見へたりかの女房ハ在原のなり平の子中納言棟梁が娘なり又まおとこげんくわハ團七と一寸德兵へ扨傾城或ハ地ものゝ物を引ハ小野賴風よりしはじめ來る靑柳硯といふ書に楊枝差と豆巾着捧にゝふつたといへり勘當を請るも此賴風が始けり其外勘當請たる人多い中にも戌年にかんどう請たをわん久と云段ミなりさがるを藤屋伊左ヱ門といふ也といへバ行過へヱそれでよめました葛西太郎といふ故にこいを賣ますといわれて洛水へらず口なるほどこいをとるゆへに孫四郎とも申ますしかしこういふむさしやな噺ハ外へハ御沙汰なしと二人大きに笑けり行過云よう扨も／＼驚入たる御物かたり古事にハ委き御事哉誠に萬通とも云つべしと一禮して歸らんとする折から門の戸遠慮もなくがたぴしと明うちへ案内もなしにはいる人あり二人驚て是を見れバ月代を一寸程延し色ハ少し黑ざやの帶をはらがひにしてぶう／＼いへる商賣といわねど形にさらしの手拭を首に卷舌の男中へわしや此近所の氣强五郎といふ者だが今爰を通りかゝつておめへたちのはなし聲を聞付て內會だと思つて立とまつて能きけバ何だかちんふんかんを言て通人だの龍じんだのと塩をいはつしやるがなんぼこなさんが十八大通でも十八檀林でもわしらがするばくちの始ハしらつしやるめへと上り口へ腰をかけ直もなきどうらく者と見るより洛水是ハ珍らしきお客かな先ミお上りなされ

成程ばく道の始その根元隨分お噺申ませふといへバ行過もまたすれり是ハ面白き御尋私も次手に承らん先生申貴公ならでハ外に此講釋存たものハござるまいとのぼせ懸られ洛水ハ口のすくなるほど云た跡なれと茶をものまずに抑ばくちの濫觴を尋るにちよぼ一也ちよぼ一ハむかしより有事なり則ちよぼ一のさいの目ハ廿一あり又昔と書る文字も廿一と書ゆへに其名とする也長半といへるハ熊坂の長半仕はじめしゆへ也こまハ唐より來るゆへにこまもろこしといふ也おゝめこめハ長半場の戰の上にて魏の曹操と燕人張飛是を始張飛ハ大の眼曹操ハちゐさき目故ニ兩ほうを合て大目小目と名付たり今專世に時行めくりハ天性といふ物より出て元ハ上方のもの也それを東にて作り直せりしあく七鳴といふ書の四の口に須藤吾がいわく天性の盆屋をしてもとるとハめくりのてらをするといふ事也且又かるたを作れる人ハ坂の上の田村麻呂が父從三位左京太夫兼右衞士督苅田麻呂也かる田まろ作るゆへかるたといふ金吾ハ與右エ門か女房かさねか兄金五郎はしめし也なんこハ天竺にて釋尊大破と法聞の時大破手に小とりをにぎり此小鳥死たるか生たるかと言しを見て羅漢達工夫して初けり是兼康が壁にれい／＼たり其南天竺の南字と小鳥の小字と合て南小と名付けり子どもきしやごにてするどう黒めつかちハ山本勘介仕出したり又勝もまけもセぬをぢになるといふハ古よりいふ事と見へて古今著聞集に梓弓の懸

矢をなして元〻になりたるを持といへり尤歌合のつがひをとらさるをも持といへり扨質を置事梅が枝より始或ハ二條院讃岐も置る事有とミへて

我袖ハしちやの藏におきの石の
　人こそ知らねうけるまもなし

と讀置れたり大分まけてあとへも先へも行ぬといふハ佐野の渡りの雪の日に最明寺の時頼言出す也とたて板に水もたまらず言けり二人は始終鼎いきもせず閑居たりけるが行過が曰ァヽ貴公のごとく万事に通じたる者またと二人なし博學多才にしてかくのごとくに引籠り居給ふハをしき物なり誠に錦を着て夜行が如しといへバかの氣強五郎が曰なる程そうさ延の出る時錢持ざるがごとくおしきものをこういふ所に住せて置ナァわしハもちつと次手ニ聞てへ事がありやすなんと常中まけねへしほうハ有やすめへかの此頃ハまけてまけてどふもなりやせんわしがやうに因果なものハござりやせん一年ぢう勝といふ事かなく負て斗いつまんか直るやらと身の上をくやミたてしほ〳〵と鬼神に横道泪ぐめバ洛水是ハしたり噺があぢになつて來たが仕合が悪いとて悔むハぐちなり世ハ流れ渡りといゝます昔より段〻とためし有それ先越後の韓信ハ千人のまたをくゞり六孫王經基ハ米をふミながら書物をよミ大閤ハすぐなる針にて釣をたれて天下の

主となり或ハ佐藤兵衛則清といふ北面の侍最明法師となりて不二山を詠めて名をのこしひげの利久ハ吉原にて茶をたてまつた俵藤太秀吉卿ハ百足を射たる其禮に龍宮にて珊瑚珠のありかを敎へられそのさんこじゆをとつてにいらとなる又天竺靈鷲山の角力のとき鬪をとりたる釋迦如來雲右衛門が其子に阿耨多羅酒呑童子といふもの丹波の國にて高く打栗を賣し事あり是皆世のならひ七轉八起仕合ワるきとてなげき給ふなしかしなろう事なら其商賣ハやめ給へとハ云物のきをいハかゝる靜謐御代の道具なりと只今卽席に狂歌を一首仕たり兩人御聞なされ下されい

【二人】何となされました承りたふござりますといへば

納れる世にハきをひも有るがよし

太平樂をうとふ役人

といたしました聞て兩人横手を打ても面白し／＼と譽る內に早くも近所のしのきがつき立る八相ハ諸行無常にほめそやし木立に歸る夕烏と諸ともに黑仕立なる行過も立かへれべきおいらも亭主もあいさつをいんぎん豆な口哉と谷中の方へ出て行

傾城罵兒之規矩

自序

夫傾城の文字たるや。往昔は。都て美女の稱号たりしに。いつの頃より歟。傾城といえバ。妓婦にのミかぎり。剰へ近世は。傾とばかり晒落て。さへ。通ずるやうには成れり。今此書ハ。右になぞらへ。娼婦の事を表とすれども。頗諸客の意味をもまじへたり。是城を傾くるものも。かたふけらるゝものも。傾城の文字を出ざるにあらずや。又傳え聞く無間の鐘ハ。その價。三百兩とかや。此異見の鐘は。迚もそれにはおよバねど。せめてハ紙代の。三百の料にもなれかしと。斯ハ題するものならし

安永十丑の
彌生

堪忍庵
呉綾軒誌

目次

發端
大盡制不勉
貪公停間夫
不許多酒呑
處々禁廓變
閨中戒多情
客妓之雜話

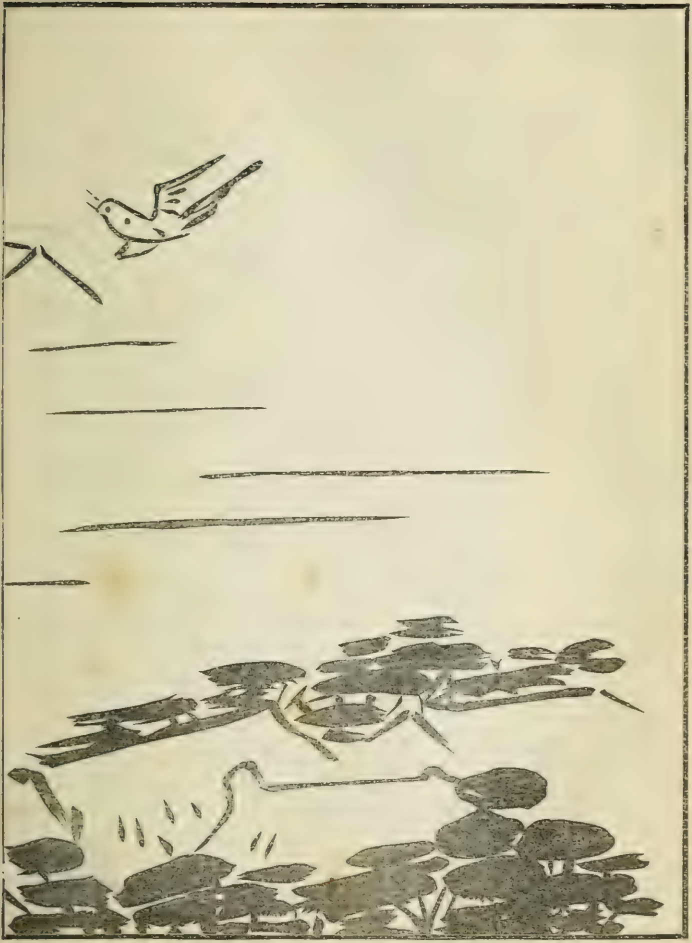
目錄終

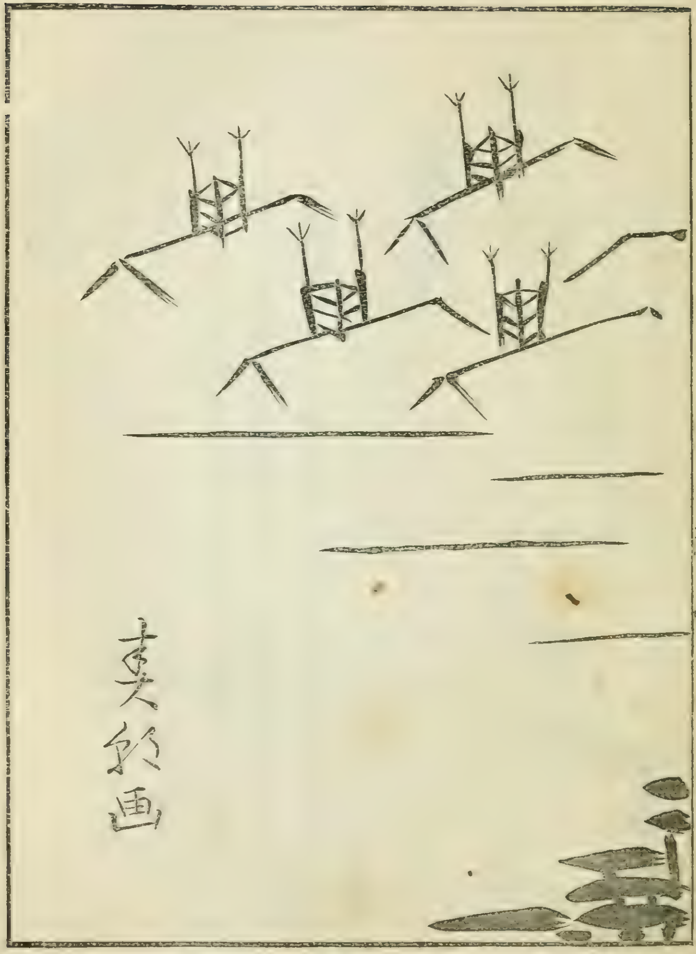
傾城異見之規矩

發端

諫鼓苔深鳥不驚どは。めでたき御代の例なれ共。亦そのうへをも越つべしとは。今この時ぞかし。東都の繁榮は。申すもおろか也。なかんづく北吉。南品。東深。西四の遊郭ハ勿論。其外岡場所。夷狄の地と名づくる娼家。軒をつらね。月〳〵に増長し。日〻に倍し。はんじやう斜ならず。つら〳〵おもふに。かの家毎に居る所の。娼婦ハ何ものぞや。是ミな主おやのために身を贖ふ。たま〳〵人にかどわされ。またハその身の不埒にて。此苦界にしづむも有りといへども。多くハ忠心孝子なり。日夜かの廓に遊ばん人此所をよくおしはかりて。たとへ金銀の山をなすとも我まゝ非道をおこなわず。憐ふかき時ハ眞の大通にも至らん歟。まつた娼婦の身もちハなをさらなり。其身不幸にして一ッたん苦界にしづミ。一ッ頭の朱唇万客□といへどもなんぞ心まで穢さんや此所をよく〳〵分別して。こゝろざしを全ふせば。氏なくてたまの輿。おもはぬ出世もする物也よつてその六規を左にしるす

按スルニ。今迄勸通懲野之書。數多有リトイヱトモ。娼婦ノ心得ヲ書タルハ余リ不レ見故ニ今爰ニ記ス素娼婦ニ異見スルハ諸客自ラ其意ヲ悟レトノ誨ナルカ





大盡制二不勉一

むかしより。全盛の娼婦も金持の大盡に馴染は。もしやゐりもとにつく歟と。いやしめられんとおもふにや多くは爲になる客に不勉する事あり。是大なる間違也。もつとも金をたくさんに遣ふものハ。我まゝをいふゆへ。おのづといやらしき事もある物なれども。爰がかの苦界なれバ。少しの事ハかんにんして。隨分大せつにつとめ。第一亡八のため次にハ身の爲。もん日もの日に俄にうろたへぬが肝要なるべし。其うへにて間夫ハ我がはたらき次第隨分となるべき事也

貧公停二間夫一

間夫ハ大切の事也。此間夫に色〳〵有り。まづハいきぢのはりのと心得て客ならば隨分貧公。又ハ地まわりなぞの。兎角逢にくきものを好く変すべて女郎のたらひ也。是もいちやうには云がたけれども。多くハ名聞にかゝわり大盡をはつき出し。かの色客に逢ふを手がらとおもふ。これまた大きなる心得ちがひ也。たとへ一ッたんハ。たがひに心を盡して逢ふといへ共

おやかた遣りてにせかるゝ眼のまへ也。口おしき事ならずや。まへにもいふ通り薄命にして身をしづむとも心まではけがさぬやうに心得　多くの客の内にて。なじミかさなりしうへにて。ミめ形のよしあしにかゝわらず。たのもしき人を見かけ誠をあかし身のうへを頼まば。などか末とげぬ事有るまじ。是ぞつとめの中の操ともいふべき也

不レ許ニ多酒呑一

娼婦の酒を呑まぬは興すくなき故。のまねばすまず。されども多くのむは。かへってあしゝ。酒に酔へばおのづから。不勉になるもの也。二ッどりならば。坐の興は少しうすくとも。のまぬ方がましならん歟。もつとも酒をこのむ客も有れど。大かたが。おたいこにて。旦那のつとめ歟又はおのれが。よたんぼうの懦弱なしか。何れにしても。情なしと知るべし其子細はいかやうなる大通人も。又今初に來たる客も。此里へ來るからは。閨中の樂しミが第一也　坐の興にのミ乘してあとの事をおもわぬは情の薄きにあらずや。殊に女の酒に醉て猥りなるは。深くなじミし上にても。あいそうの盡る㕝も有るなれば愼しむべきことなり

所々禁二廓變一

廓替の事是大きなる愧也　壹ヶ所にても。多く渡り歩行しほと人から鄙しく。足輕中間さへ。渡りものといへバ。人からあしく契情のくらがへハ右の渡りものにおなじ。其證謗には。岡場所でさへ子がいゟ育られミせへ出。永く其家に勤る者はおやかたの氣性幷ニ家風をよくのミ込如才なく勉る故。自然とおとなしく一ト度くらがへせしものハ。癖になり。行く先〴〵にて亡八を蔑にし又ハ其家のおとなしき女郎も。是か爲にそゝのかさるゝ事あり。油斷すへからず。

閨中戒多情

閨中の祕傳ハ。おの〳〵覺悟の事なれバ今さらいふにおよバすといへども。是第一の事也　貞女ハ二夫にふれすとあれどかゝるつとめの身ニてハその事なりかたし。去いども心底にこゝろへへき事也。勿論しやうるりほんなどに有るごとく。間夫に心中たて。肌身ハ汚さし。おびも解かじなどゝいわば。今時金遣ふて來るきやくは有るまじ。是ハ唯。床にいたつて。まことの

情を。うつすとうつさぬに有り。もつともなじみのかさなりし上は心の寛みにて。おのづと少しの違も有るべけれど、まつずいぶんとおのれをつゝしみ。我おもふ人をまちて。眞の情をもつてまじれる時ハ。是貞女ならずや

客妓雜話

右此條々つねに心に懸るべしと契情にも傳へ置たきもの也　左すれバ。浮氣なる相對死等は有るましきか。客もその心にて。よく／＼推察してあそぶ時ハ。これ誠に。推ハ粹也當時の大通也。其中より互の實もあらわれ。いつか夫婦と現じ。燈籠見にくる事も有らむ。それこそハ。兩親斗の得心にて、氣こゝろもしらぬ夫婦よりハ。むつましかるべし。たとへゑんうすく。末とげぬまでも。勤の中の誠にて。まじれり。互にちからを合せバ。此上のたのしみあらじ。又客により名じむにしたがひ。余の客をせくもの有り。これ大きなる心得ちがひ也。迚も大海を手で禦くやうな物なれバ。およれぬ事としるべし。何と歟いひし本にも有る通り。内に居るおやかたはうばいの。目にさへかけぬ色事を。たま／＼行ものに。しらせやうはづがなしと有り。まつそのごとく。どれが色客やら。てん／＼の己惚で。しれぬでもつたもの也。又千ンに

ひとつ。義理に引かされ。客の壹人も切れる時ハ。其女郎のため大にあし〵。是我相かたに離義をさする也。是らがかのゆびを切らせ。入墨をさせる類なるべし。我おもふ者を支離にするハ。詮なき事とや云ん。左ほど疑ハしくは。勤をさせぬがよし。夫がならずハ。行かぬがましならん歟。たがひに一ッ心の眞をもつてまじハる時ハ。なんぞせうこにおよハんや。そのわけハ。いかほど疑がわしき迚。わが女ぼうにゆび切れ。髪きれともいわれまじ。けつく其女ぼうに。うしろくらき事もま〵有り。とかく色道ハ。かんにんを第一にして。少し疑しき事有りとも。こなたさへまことを盡さバ。おのづと先の志もしる〵もの也。爰にひとつのはなし有り。或客ひとりの傾城になじミ。しバらく心をつくしてかよへども。さしたるおもしろミもなく。くらせしに。此ほど打つゞき折あしく。ひとりねがちなれども。さのミうらむけしきもなく通ひしが。或夜また候ひとりねの淋しさあまり寐られぬま〵に。いろ〳〵とおもひワび。述懐むねにやたへかねけん。枕もとなる硯引よせて

七重八重はらハ立ども山ふきの
色ひとつたになきぞかなしき

と書すて置しに。やがて女郎來り此哥を見て。いとおしとや思ひけん。夫ゟ外ならず。深き中

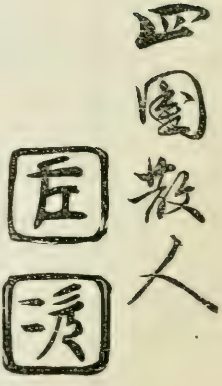
となりしと也。是まつたくむだ書なれバ。野鄙なることばなれども古哥のこゝろをよくいひかなへし故。女郎も共心になづミしものならん。いづれ艶しき事也さハいへりんきもうたがひも眞より出るもの故。少しハ有りたきものなれど。あまりふかきハ愛相の盡るたねぞかし又或妓婦の句に

　君ハいま今戸のあたり郭公

是ハきぬ〳〵に大門より歸るさほとゝぎすの聲を聞てよめるよしまことに殊勝なることの葉きやくをしたふの心さし深き事言外にあふれたり。あわれ此客後に此句を聞かば。是が爲に城をかたふけん事おしむにたらじと。感するに絶たり。但しかの女郎左ほどには思ハざれ共。ほとゝぎすの聲。聞へし故、風與此句うかみしや共心はしらね共又おもわすは詠まじ。よしそれはとも有れ。眞ンの誠をしらんにハ、時と折とをかんがへ。以レ心傳レ心ば。たとへ遊女たりともなどか心の底も知らざらむ哉。穴加志古

跋

爰に我朋。呉綾なる者有り。如何なるものといふに。生得優長放蕩にして物にかまわず或ハ人。これに無實をもつてなじるといへともその非を咎めす。唯かんにん〳〵と對ふ。よつて世話に堪忍五兩といふ事の有れバ。則表徳として。五兩〳〵と呼しに五兩の文字つたなくしておのづから呉綾と改めぬ。然るに今この小册を編て予に跋を乞ふ此書亦かんにんを第一とせりこれ寔に異見三兩。かんにん呉綾ともいわん歟。且軒の字をくわへしは御料簡といふ意にや。是を見給ふ人かれが名にめでて。あしき所も唯呉綾軒〳〵と笑つて跋す



無通雙紙（むつうそうし）

近刻

公大無多言

序

人モ爲知唐通ノ詩ニ曰遺却して珊瑚のむちを白馬おごつていかんせん夫レ北國の貸し編笠光次に換る此時世ア、おそろしやとかたことましりもむべなるかな公附合の大通人たいこまつしやの入リ込を通と心得こけふかふして鳥といわるゝをしらす知らす知られぬ世の中の女郎買のこわゐけん一寸とちりばめ木の芽の笑にも

ならむかし

丑の春

行成山房大公人述

公大無多言

東橋の川むかふに一ッの庵をむすび竹のしおり戸ほそ〲と玄くわともなにともつかずいり口に鬼ざらさの長のれんざしきのまんなかに一ッの爐をきりしんちうのくさりでなにともわからぬどごんをつりにわのけしきハ槇のたぐゐをうへ軒に呂いろのきんかんばん親和流にて大通人講談并傾城買秘事一子相傳と筆太にしるし宿札は吾妻庵通霄として一文もなけれど大キな事をいゝちらし變人達待乳山（年のころ三十ぐらゐずゐぶん如才のなさそうなかほつきつむぎ小もんに三所もん黒はおりに大めうじまのおびまけのあたり少し匹豆本田にゆひ門口にたちとまりゑりつくろふ二すつと這入）【豆本】東庵とハこゝでござへやすか（ていしゆつうらゐ懸り人平樂とふたりおくよりたち出言葉を揃へ）なんだへ【豆本】御免なセェわつちやァおめへかたをきゝおよんでめェりやしたみんなともだちへはなしたらおめへのかどぐちまてきてもはいりにくがつてかいりやした【つう】【へい】わらゐながら そのはづ〲マァゆつくりとおたばこ（この内つうらゐへうす茶をたてワたす豆本田はめつたやたらにたべしまゐたばこをのむつうらい平樂なにかミゝこすりしてむかふへ直り）【つう】扨御光來のおもむきハ【まめ】アイベつのこつてもごぜェゐしねェわたしが事さずゐぶんなにかにつけていき身をしやすがどこらがしたらねェそうでついにいままで女郎とちよんきまりのことがごセェやしねェそしてとこでも

わつちをバいきだといゝやすがいく所てなせかのミこミやセんかミの風や骸のふりをなおしやしたがこのとしになつてこんなことをいふもあんまりちゑのねェよふでごぜェやすがそうたいこんなこうしやくなさるときゝやしたからめェりやしたおせわながらくわしくおはなしをきゝやしてェとかくいまはやるつうにならねェけれやァものゝいてェかいゝかしれやしねェそのつうの事もついでにおたのんもふします「つう」コリャァもつともしかしおめェの身のうへはよつぽどむづかしゐまんざらのふつうならおらがりうぎのかうしやくをはやくうけとるけれどなまじかした地があるからむつかしゐ見た所がおめへもよほどなねんらいと見へるがいまもつて女郎の二人と三人ふちころすすべのしれ子ェハぜんていかミやきものゝあんべいジャねェマァ何よりかより第一がむねからしてなほさねェけりやァしんの女郎買にはなられねェもちろんいふくかミかたちにもよるがソリャァむね三寸のうちさへ粋になりやァしぜんとそれにしゆんじていくものだそれいへバにしきてこつぱをつゝんだよふなものだなりかたちはわるくてももめんで夜光の玉ぐらいなものザけセふばかりりつはでいきにしたつたとて女郎のほれるもんじやアねェおいらがりうぎの女郎かいになるとうけ合て女郎の三人や四人ハきつとほれやすたとへほれたッとてかならず女郎をだましてかねをかりたりたおしたりまたハきものをかりたりする

勝川春朗画

ハわたしどもがりうにハねヱ子夫もぜんせいなやつをだましてわるぶち殺にするよふになれバあつはれなこつたがそれほどなきりやうにハなられぬものさいわねヱことァわるゐからいつておくヨおめへのしやうばいハどうぐ屋と見へるなりハずゐぶんそれていゝはおりもいゝがおびかわるゐ大名じまハ御免ンだやつだやつぱりむじものがいゝそしてふところもそのよふに大きいのはわるゐ何のやくにもたゝねヱものを入ていまはみんながふところさへ大キくすりやァいゝとこゝろへてしん代ありたけくわるちうするがとんだわるひマァだん〳〵御はなし申そうコレ平樂ちつとかわつてはなしてしんじや【平樂】（せきばらいしながらもつたいらしくひげたでゝなぐさミごゝろに成て笑ながら座に着）扨わたしがかわつてはなしやしふサテ一と通りきゐてハむつかしいやうだがきゝこむとこゝろやすゐだん〳〵きくところがおめへはぜんたいかほにハ似子ヱうち氣な生れだそれだから女郎がおもふ様にならねヱ夫誰でもあるこつた初くわゐなぞにいつたときァ手めへのあいかたの女郎をバわれとハいわれずおめへともいふもどうやらおかしいゐんぎんにいふもわふへいにゆふもしにくゐものだその中を取てこのくらゐでよかろうと手めへのりやうけんでとり扱がよしそのりやうけんができねヱもんだッリャきふにはできねヱかふをつもりなセヱそのかうを積んでもかげんが出來子ヱならさつはりと女郎買やめてしまふがいゝいままでの洒落本にこんなことも書てあ

るからその様にこまかにいふにハおよばねヱたいがひ一と通りで行わたるやうにはなしやす
すいふおりからおゐこへ一人の侍西こく方の生れと見へこくろ紗綾の小袖もん所大キく紺こはくのはおりにかいきうら大小りつぱにあんないする【侍】チト御めんなりませつうらい様といふ
ハこゝ元で御座るか【つう】さやふ／＼おはいりなさりやせ【侍】しからバするさんいたしま
せふ【つう】こつちへ御いてなせヱそこァ板の間でござヱす【ブケ】さよふならバといゝながらにじりよりかた手
ついている【豆】侍を見てわらひながらわが身ハよつ程いきに見へこめつたに見へをしながら平らくと耳すりをしてなにかおかしそうにそつといふ【同】モシいかねヱものたねヱあゝいふ人
なぞをなんといつたものだやらしかしいゝ鳥がかゝつたとうれしがるもなァうれしかるだろうね
ヱ【平】にがわらゐをしてさよふ／＼【つう】なんぞおぼしめしでもあつて御出なされましたかマァとの
やうな事【侍】イヤべつでもないおれどもか事を相部やのわかひものがこふ／＼な見せが出た
がめつらしいわしにも行て見んかといゝます今朝とふこよふとおもふたれどちりと用がござつて
それゆへおそふなりましたわしどもが小きんじよでとうじんの口まねをする人を通し／＼といゝま
すがとうしよにもあまたつうじがござると見へましたさだめてとうちの通人ハおもしろゐこと
なるへいコレモおぼへたしかつハおりふしゆふいんされて里なぞへ参ても見ましたが遠國もの
ゆへか何ともすめませんおもしろくすめるよふにあそびよふがうけ給りたい【平】マァ／＼ぐつ
とくつろぎの大あくらでおつしやヱ／＼いまおつしやつたてうのあそびがすめねヱとおつしや

るがどふすめねェな【侍】サアすめねェといふハしんぞう子どもや女郎どもがわしが事をわりくでもいふのかあそこではクツ〳〵こゝではクツ〳〵よりあふとわらいますがいさゐがねからしれませんたゞしかほにゐん國ものハなんぞしるしでもござるかきゝたふござる【つう】コリヤア御尤くわしくものごとわかるやうに御咄申ませふマツそふべつ女郎を買にどふぞほれられよふと口へこそだされねェこゝろでおもつてござるからどこともなしに見へがつくこれが第一わるいマアよくかんがへてごろふじろ一ねん中に何人ともしれぬきやくをとりてその内で此人ハとおもハるゝはまれなもの見へもひやうたんもいらねェなんでもその當座〳〵を買ているがよふござへす紋日物日の前になつていくいかねェハツリヤアあそびといふものだおめへのふところにさうだんしなさるがェ、それだれやらが句にけいせいにまことゐるのがうんのつきこふハいへども實あつてうんがつきるか又まことのあるやふに買こなされねェものさ万一まことがあつたればとて御ゆだんハなされぬがェ、御はらを御立なさるなおめへがたにほれる女郎ハねェもいだどふかかふいふとおめへにいけんをいふやふでわるいがほしくハおかいなさェおつくしなさェといゝそふなものがこう申ハきのどくにおもふから【侍】ェ、なる程忝そんならわしどもなぞにハ女郎かよくおもひませんかハテゼひもなゐそんならァノ江戸の通人にはなられませぬか

【つう】その通人と申ハ（と平楽にとふ）【へい】つうじとハソレ大通を聞ての事サ【つう】ヱ、そのことかそんならてめヱかわつて御はなし申しやレ【へい】そんならちつとかわらふか（といゝながらさむらいのむかふへまわりつうらいハろにかけたる茶たのとあとへさがる）【へい】サテおめへハ通のことをきゝなさりたがるがおめへの御國ちかくのとう人のつうじとハ大きにちがひこれハへん人のつうといふて字で申さば大ィに通ずると書ます何によらずものごとに通になれべきゝがよゐといふこと通になれば人たいからちがひそふたいものにかまわず大やうに人のなんぎになる時ハわが身をぬひでもなんぎをたすけそうすればとて大キなかほもセず人を引たてゝやるがマァ通のさいしよでござヱす【侍】ヘヱはていかふむつかしいものでござるそして何をよとくにいたしますナ【つう】マァだん／＼御聞なさヱそふなつてきたときハマァ鳥渡そこへでるにもこせつかぬよふに家内のやうすはこゝろでしつてかほへ見セず部屋子ハいく人でも目をかけてやるがふだんのけふがいそれゆへこの通といふことは上から下さつた名でなしてめへでつゐた名でもなしたがいふとなく木場の親仁を親玉／＼といふ様なもので大かた居候なんぞかいゝだしたものさ【侍】ハテナァそれは一ッ興その通ハたいぶわしらがしつた通とハそうゐしますいかにも面白そふなけうがいナントさむらゐでもそれになられますか【つう】するぶんそれになられやすが通になるにハよほどもとでがいりやす

マァならふとおもへどそれ御屋しきでもおめへの下役中間小ものその外出入のあきん人の類にめをかけて旦なかやう〳〵なことでこざりますから御無心なんぞといふときはこゝろ安くくれいちうにあり合さバ金にしろ銀にしろかしてやり又持合なきときは小そであるひは大小のたぐゐをかしてまにあわせる又侍輩中のつき合にもその通りなんでもはなれ切たことをしてお見せなさいそうするとゐて株がつゞかねェものでつゐにはすかんぴん偶太郎になるものだそこをおつをよくなりをくずさずつき合も上手をつかいサテ此上手といふものが生れ付て出來ねェものさかやうに申は申すものゝ同じくはつうのまねは御無用そうなつてごろうじろふたんくろうがイヤモたへるもんじやァござェせんゐそこからは名びろめのすりものイヤ一世一代の追ぜんいと色〳〵なことを持てきてこれを一〳〵とりさバきしにやァならねェゐて武士町人によらず通な人のきやふがじうゝやましいよふにおもへどもいかんものゝ初リサそれでもたつておぼへてエとおぼしめさばおしへてあげやふが扶持ちぎやうをなげ出しても大事ねェといふ一札をとつてからおしへませふがそれでも御しうしんかへ【侍】イエ〳〵モウそうきいてはのぞみござらん扨〳〵だん〳〵いさゐうけ給りおどろき入ました扨通になるとちぎやうをなげますかナ【へい】ナアミんなかけるといふてはござへせんが十ゥか九ッ迄あやういものさ【侍】ノゥおそろしやも

たいながやちぎやうあつての通の道女郎買も旦那の影ひとつとヵノ通とやらになつて浪人のいたしたら世上でもつぱら申す居候とやらになりませふモウ／＼ふつ／＼このみちハやめませふ此上ハおとなしくつてと女郎のかいよふひとへにたのミます「つう」どうでござェす御がてんがめへりやしたか女郎ばかりのことハずんとこゝろやするものだたゞまちおぼへるおめェがたハ人がいゝからなんでもしいゝふでおめへがたのよふな人ハ女郎をつらまへてむり酒をのませたりやゝともすれバ内ゞのものにふたゝり茶屋ふなやどにめいわくさせどふもならねェものだマァ一寸言事もむねであらためて口をきゝなせェそふするとおくゆかしくむだかなくつていゝそふものことを氣を付れハのぞミの通りあそごハも一やすッシテそうたい武士が町人のまねをするがわるいにたやァま侍はあるがにたやァま町人といふはつるにきかねェおゝかた川柳が句に人は武士なぜけいせゐにいやがられたぞといふ句でもきゝはつゝての事だろうがあんまりあさはか武士も武士木でつくつた木武士でも女郎をしめるハむね三寸附燒刄ではとんといかねェ「侍」なる程さやうふてそんなたぐるかありたがりますヱヘ、、、、トわらいながら扨／＼長座いたしましたまことに御かげを以あかるミへでたこゝろ持是といふも貴君子たちの御影また不承知仕ヶ事あらバうけ給りに參上仕ろうものハ聞ておこふものだト口うちでいゝながらたつしからバ御いとま申ませふ扨／＼かたじけない

〔つう〕〔へい〕コレハ〳〵おそうそふ（おもてへいでさむきときなれど大あせをふきながらゑりをかきつくろいたもとうかにてかへる）〔つう〕サツ京さんたいくつだろう見じた通りの人が来て大きに手間を取たナニさつきていげいきるたがおめへのおもひ入がいゝ時におゐらがりうぎになるとまことの大通人にならァそのかわりにりうぎてきんぜいかあるマァ第一がばくちだまんぎらするなでハねェ人のめにたゝねェやふになぐさミにするハェ、第二か人の息子をだまし春ハ花見夏はふね秋ハ紅葉冬ハ雪見なぞとそんなことから足をつけてつまる所ハ一わりの歩合を取てめん〳〵のかぎやうにしたがるがいくらもあらァこいつが大キなつうのつらよごしぜにかねを持ているものにハたいこもちを見るやうにしばるやすまふで出合と三年もなじんだちんころとやらいま〳〵しるよくマァかんがへて見ねェむすこかぶといふものハおれもむすこであつたがいかねェものよ銀のきセるでふかして大キなかほをしてもなるしやうハらんちきだそこをつとめるハこゝろねェといふものだまた江戸かたぎをだして壹歩や貳歩ハやるけれどしめェハどこからでるものだおやのものハ子のものとぶしあんをだされェけれやァならねェ小息子と三ぼれいの内證と一ッ荷にするとてんびんもおれかねるこつちァねェそれをそゝなかすハ大法度第三が手代だこりやァむすこよりちつとゆるやかな所がある息子かぶは若旦那〳〵といはるゝゆへそのやうにこみづハねェ手めへからゐを付てかいものかいがきても旦

那だから賣ぬなぞと先祖のわらぢでしだしたことハうちわすれさんさがりているが手代ハそれにひきかへてうりかいのやりとり二一天作ぱちノヽとそろばんの玉で工面ができるがそれだとつて進め込でハわるゐむすこハしくじりハ二度でも三度でも手が入足がいりついすむもんだが手代はとり直しがねェからしくぢつてしまへハ羅字のすげかへよくつてそばきりうりそのつミがどこへゆくもんだ第四か酒是ものむなでハねェすきならのむがいゝが酒をのむと氣がふとくなるのイヤかわるなんぞとてめへでにりやうけんを付る 尤氣ちがひ水とゐふうハあるけれどきをしつかりとしてのむがいゝさるによつて貴人のめェでのんであばれたもいハねェ皆わがまゝイヤしゆらんでござるなんぞとそそうをしてから酒のうへかんにんさつせェとあやまりまわるイヤわきめで見るとおかしくつてならねェ第五かたはこだてこれものむなじやァねェどふやらこふいふと下手たんぎを見るやうだがァ、かたくハねェいまハなんだかめつたむせうにひじをはつてきせるをかまへてのむを見へにするがァ、やに下りにしてのまずともよささふなもんだ又きせるハ銀でその身の分げんにおうじて大きくもちいさくもこしらへたがェ、とんとなりときせるがつりあわねェマァおめへなざァこふとふにするが大通といふものだよひたひを大キくしていきなつらをしたとて通とはいわねェたとへ 盃 のさはきやせじがわるしひたひがちい

さくてもまつすぐにとおりを行おほれの通ョそれをいまハわるくかんがへて始終ハ辨魚鬼洞を見るよふにいきをしねヱけりやァならねヱなんぞといふがおやの手にあるうちハそこからもこゝからも誰様ン〳〵といつてつとめコリヤァコレ親のひかりといふものだうちをはなれてミなヱ大キなひたるだといふものばかりとんだまづいせかひじやァねヱがおいらがきのもめるといつちやァねヱが大かいを手でふせぐよふにはじまらねヱ事だァ、口がかいだるくなつた平樂ちとかわらねヱか【へい】おつとのミこミ山屋がとうふかわつて出た豆男業平が平をとり平樂といふやつかいもの是からかわつて巾さふならサテおめへの人相だつら〳〵ろくをかんがへ見るに農夫の相まさにあらわれ音聲を發するに 唇 にあたる是通國の生れにあらず扨はそなたハ狐でハない豆本田さんコリヤァおどけおめへハ通國生れでハあるめヱ【豆】つがもねヱ見通〳〵【へい】きついものかときにどこだへ【豆】景清か生國【へい】ムゥそんならやぼな國でもねヱよく屋敷奉公人の出る國しかし景清ハねヱぜヱコリヤァおめへのこつちやァねヱが夫たこくからよく江戸へきてまだ水道の水しミきらねヱうちにしやれたがるものがおゝいこのやからのしやれをくじらじやれといふョゆづむしくさい所からへあがつてもおいらがやふなものによなれていると江戸生れよりかへつていきになるものだとかく人にハしたふがヱ、こふいやァかう

まんらしいが先生なぞやおいらがヨゥひつこんで居てもくわるでもあるとそこからもこゝからもやれこれ／＼といつてくらこりやァむかしまゐたひかりといふもの此中も河東がくわるにおれにきてくれろおめへがきてくれねェけりやァたてがねェよふだといつてよこしたおれをバ親だとおもふそふサまだ／＼こんな事じやァねェがまんのやうておかしい是といふもかねのつかいやうが上手たからサ下手につかふと金がいつてこけだい何だのとわらハれるやつがおゝいヨ【まめ】コレ／＼モウよふござぜェすばか／＼しいさつきからだまつてきいていれば人をおやにした手めェのかうまんや人の事ばかりおもしろくもねェそんなこたァきゝにやァこねェどふぞものゝきまりをきかふとおもへばこそこふやつてくらァコレきゝねェむかしハなんでもいまじやァじまんじやァねェがかミのゆひぶしからかゝとのさきまでいきになつていらァおそらく江戸におれをしらねェとうぐ屋ハねェだれにでもきゐて見ねェすきやかしのふじみやでもしろうとじやァ釘山のいんきよ段ミいやァ長ィことよつぽどひろゐおれだけれどいのふへおちねェことがあるからきゝにきたがおれをバェ、なぐさミものにするのだ【つう】イヤそりやァわるゐりやうけんきくことをきゐておかねェけりやァこうがくにならねェ【まめ】おきやァおれこうがくもほうがくもいるものかモウ何もきかぬともいゝハイあんまり人を馬鹿にした（といゝながらかたひざ立てかほをすりだしてきてろではねふ）

きをわたるほどたいく【へい】コレ豆さんコリヤアどふしてござヱすそうときむねをいわねヱもんだためをおもへばこそこうもいへ【まあ】しらねヱいま〳〵しるとんだところに引かゝつて屋敷へ持てゆく道具がおそくなつたいまヱましいといふなぶらすつたおもしとしておへる【つう】ハテきのみしかいあれじやア眞人間にやアならねヱ【へい】まだしゆぎやうがたらねヱかわいゝことだ是についてもおいらが身のうへわじまんじやねヱがさとつたものだあんな人を見るとふびんでならねヱ【つう】ソリヤアそふとだいぶはらが減たぜ居候ハどこへいつた【へい】ウ、田原町へつかいにやつた【つう】誰が所へ【へい】情羅が所へきのふの挿ぎりをよこした入物を持セてやつた【つう】ニ、そんなら用があつたもの【へい】なんだ【つう】ウ、ニヤアノ　さへぎぬが所からみがきている一所にやろふとおもつて【へい】まあよらねヱソリヤどふもげせねヱ情維がむすこや手代じやアあんめヱしだりきにやつてもよささふなものだ先生を頼ねヱせかいだものふそはさへぎぬがみじやァねヱ【つう】それでもあれが手だ【へい】イヤあれが手でもその中にわいわくがあるこうなつたからはなさふ此中いつかだつけが去ル屋敷の家老がさそふからおもしろくもねヱが行たそのときかろうにさへ衣をかわせたとんだおかしいきのどくなことがあつたはなせば長いがおれがはたらいてやつたから侍がうれしがつておれをぺ女郎かいの氏神のやうにおもつていたそ

のとき買ふとおもふ女郎ハなし新もあんまりちへがなし鍬吉や長五郎を相手に酒をのんでいたらヵノ新めがなんだかおれがうしろにたつたりさかづきをひつたくつたりうるさくつてならなんだから大キにしかつたら奴しハあんまり情ねヱとなきやァがつたツレひさしるあと勘三の狂言にかうらゐ屋が源五兵衛半四郎がしんぞうでつけつまわしつしたことがあつたとんとァ、いふものヨ【つう】かわいやぬしにほれるしんぞうも天めいのつきたのた【へい】むだハ御めんおれかおもふにあヱつらを相手にしたときハミなのまへのおもわくがあるからあつちへにげこつちへにげしたらかへる時とごつるておれを大キにくるついた【つう】ぬしをくるついたらしんぞうがはがこぼれたろふ【へい】なんとでもいゝ　おれが爰にゐるといふことをきゐてそのみはおれが所へかのしんめがよこしたろふなにもなぐさミひらいて見よふどこにあるへ【つう】こゝにあると（はながミ入の間から出してやるへいらくひらき見れハやつぱりさへぎぬがせいらへよこせしふミなりへいらくきのどくにおもふ）【つう】どふだなにとかいてある【へい】めんぼくもねヱやつぱり眞のみだにおつ付新めが文をばよこすぜヱ（とまけおしミをいふつうらゐわらいながら）【つう】ソリヤァ大かたゆめであらふ（居候かへる其うへだの小紋あかじミひどんすのふるき帯中さがやきひよりげたにきふろしき手に持）【居】けヱりやした【へい】どふだなんといつた【居】たゞおゐてゆけと【つう】ァ、てめへゆくなら用があつた情羅ハうちか【居】イ、ヱるすさ【つう】ヨク出あるく男だコレ平樂ほんにはらが減たセゐらが所から

きたばそでもけでよふ【へい】よかろふ〳〵おいらがおくにゐるうちぬし爰に居てきやくがきたらうそふおふにおいてつなしやれ　ト（いろをおく書きとふづくへになほりもつたいらしく何かむたおきをしこ居る所へ黒羽二重の小そで袴きれぐん内じまのあわせはおり小びたいたわきがミし大たぶさたおすこかし一とぶはつぎたる）【むす】御願ミ申ませふ（候いさいさなしにしやれる）【居】どなたかしらねヱおすつとこつちへ入ざけ〳〵【むす】さよふならバ（と内へはいりいんぎんに）わたくしハ下まちへんからまいりました御かんばんによりうけ給りたいことがござりまする【居】ヱ、何か〳〵【むす】イヤべつの義でもござりませぬがわたくしをやともとのめしつかいどもがきやぼじや〳〵と申てわらゐますことの外ざんねんに存どふいたしたらやぼがなをらふかとしる人にはなしたれバソリヤアするぶん人につき合をひろくするがいゝと申ますわたくしがおやじハ人すき合が大きらゐでやどもとなぞておまへがたのやうな風の人が見へますと大きに腹たちあんな人につき合なと申て私をしかりそれにじハんじて月待日待節句なぞもさミしくけがな三味せんのさの字もござりませぬ去年のさいれいにもわき〳〵ハ夜ミやでひるたりかたつたりいたセ共やともとでハかうしやくをさせますくらゐのことそれをやぶつていたしてはおやへふかうにあたります【居】モシ〳〵もふよふござへす一こきゝやしたナニおめヱハだいぶおやかう〳〵なこととんだわるゐぞへきゐた所がおめヱい御爺さんハむかしづくりのへんくつものたいてゐな人じやァねヱおめヱハかたい生れだか

ら正直にうけていなさるいまどきそんなむすこが有もんかおめェはそれでとふすと大キな病がでるびやうしんになつてくをかけるもどらをしてくをかけるもおんなじこつたなんとおもひなする【むすこ】さるによつておまへゑまいつたどふぞやぼといふながすゝぎたい私が身分によるよふに【居】そふいふ思召ならでんじゆいたさふぐつとあくら〳〵マァたばこのみよふからはなさふサァわたしがする通りにしなドレ〳〵おめェのきセるづゝをミセなナンダ兩がへ屋のもうセんを見るやうだたはこいれはなんだあさぎもふるかこれも御免ンだなにかのことはかきつけてあげやうマァ一ふくあがれコレおいらがたはこをのむ所をミなコレこうきセるをもつてひじをはりアレ口のあんばいソレけむのふきやふ六ケしいよふだがなれるとちきにおぼへるまづおらがりうぎじやァあさ四ツじぶんにおきてすぐにゆへ行かミをいわセてめしをくふかミゆひハ目に壹歩ッ、で留ておきな【むす】そのやうにちんをおゝくだしてどのやうにいわせるのだェ【居】日がミサ〳〵それもあさゆふてばんがたそゝけるとまたいわセるひたゐはそれではすまぬぐつととうけんにぬきあげるどこへでるにもくろがもをつれねェ【むすこ】くろがもをつれたらとがめられはしねヱかへ【居】どいつがとがめるものだいまはねこもしやくしもつれらアナ【むすこ】それでも人がわらゐはしませんか【居】わらわふがとんぼうがへりをしよふ

が通になつてそのやうないさゝかなことをかまふものかッシテ内へ居候を置て日をかけてやりねエそふすると何屋のたれさんとなるとはいかいしハ不及申江戸節やその外のじんじやぶつかくミんなが知て宮崎大通にならァ【むすこ】それハはやおもしろかろふけれどおやじががてんハいたしやすまい【居】ばかをいゝなさんなおやじがやかましくハかんどふうけたがゐゝやぼらしゐこの道にはまつてかんどふをこハがつてたまるものかおめェなんぞばゐがあるか【むすこ】げゐといつてつゞミをちつと【居】小桶のしりかそしてなんだ【むす】イェその外ハ少しものよミをしやした【居】ソリヤァおたのもしゐがくもんをなさつたといゝなさりやアッレ大がくのうちに一人短禮者一國起亂といふことがある【むす】アイさよふ【居】ソコタァわしらが方でいへバおめェなぞのことさそれ通になつてとをさハくと一人たんれゐしたによつて一國亂ちきさわぐ一國とは北國のことおなじかねでもたんれんしてつかへバこけにおもハれねェそれをいつたものだ【むす】ハテねェソンナラ心爰不有見不見聞不聞喰不知其塩梅といふことハへ【居】ソリヤァしれたことこゝろこゝにあらざれバといふは女郎がざしきへでゝつんとしてゐるしよしんな心からこわゐ〳〵でこゝろこゝにあらざれバッレそばにゐる相形のかほが見れども見へす□やがらふかへよんでなゐセふのこゝろづけをしなセェといへど

もむねとき／＼てきけども不聞ッレだん／＼ざしきへせめ道ぐハ出るくるものハ目のまへにい
つくらもならんでゐてもふところであれにいくらこれにハとたな卸ろしをするやふなけちなこ
んじやうの人ハッレ喰へども其塩梅をしらず孔子もやほでハねェあつちにも青楼といふ所があ
つていきをするからじよさいがあるものか【むすこ】さて／＼くわしくよく御存じモゥたゞい
ままでの氣をさつはり入かへ大きに自堕楽になりませふ と大きによろこびにわかにきな身をせんとうれしがる【小僧】さいぜんからゑんがわにこ
しかけねむりあきのびをしながら 若旦那さまモゥ御帰りなさりませんかおそくなりましたら大旦那がまたこゞとを
おつしやりませふ【むすこ】ナンダおやしがこゞとうむつかしいおやじなぞハながしサ とおふしやれかし
ろけ【居】よう／＼きついものの／＼それてハものになるわェその氣でとうしたいまたにあすきなせ
エ【むすこ】そんならそふじやしやうおさらべ といゝたから表へいでかミの風をなでゝゑりたつくろい身をして見ながら塞る【へい】おくよりいでゝ【つう】こゞとをいふ
【つう】コレてめェとんだめつほうかいなことをいゝちらしてかわゐそうにはこ入むすこをた
エなしにしたきのどくだからでられもセずおくできるていたわるいことだおいらハどうらくを
ハすゝめねェてめへのハ不埒興指南所と札をださねェけりやァならねェあんなことばかりいつ
ているとこゝをべばけものやしきのやうに人がおもふモゥけうこうてめへをべ見せへハおかね
エ といふ所へ【男】通雷さまは御やどでござりますか【居】アイ【男】へエ、さよふならべわたく

しれ下總(しもふさ)やからさんじました【つう】エ、茶(ちや)のことかおれにきてくれろといふことか【男】さよふでござります今晩(こんばん)【つう】ヨシ〳〵おれ付のかふハアモウ七ッだそふだ　川むかうでごん〳〵夕〳〵礼記くからすがカア〳〵

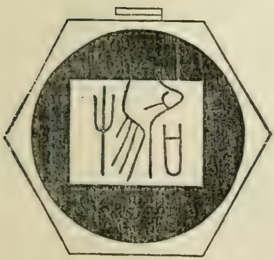
忠安意題

自序

高天原仁神留坐須。其神さまも譯知の娼之一夜の契には。鮓醴も喰て來た。通も不通もおしなへて。雲と成り雨となる傾城買の魂膽れ。先達數万の書に綴り。仙波が牛に汗すれバ所詮いふても口眞似と取つても付かぬ仙臺訛。赤腹たれぬの万八なく。豊後のモサを取ッて退。唯一神道交りなし。混源地色の味事を浮氣の中へ持込こしが少新しひ今年の趣向。眞女意題と號せしれ。謌の心の替名にて。只讀聲を假るのこなり何を申も作者の新米。三本たらぬ毫にてやたらむしやうに引かきたれれ。究らぬ處も多かるべし。そこが作りの卵割と。眼腐祭の業を涌さ

ず。科なき本屋に見料を。波羅意玉意。喜餘目出玉。カラ〱

時に安永丑の初春鯰のかす禰宜天笠老人。字ハ森羅萬像とて。智恵ハもとより梨打ゑぼし。何にも白張引かけて分らぬことを木綿たすき書して否がる書林にあたふ



陸野奥右衛門國詞

㋑主（いし） 江戸にて。ぬし。きさまなとゝ云に同。 いつくしねへ。 うつくしい事 伊勢屋しつぺい 酒をほむるに云。酒屋の名也。 いきび。 しりの事。 いす 詞のすへに付。「いし。「もし。「ゑす。「ちや。いづれもすへにくわし。

㋩ばかたれ。 馬鹿の事 又。馬鹿たり奴。又。ばァかァ。 いづれも人をのゝしるなり。

㋥にぐむ ゑのぐニてぬる事 にんがう 人形の事

㋬べすむ。 かほを。しかめる事。 へゝ。又へゝこ。門口口王 べろ。 舌也

㋣とゝろなし。 心なし。分別なしの事。 とかう。 いやもうといふきゝ也 どゝ 爺

㋠ちくと。 ちつと。すこしといふ事。

㋦ぬうだり〳〵 のさり〳〵なり

㋳おかなひ おつかない。おやつかなといふにひとし おかなく。 とんだつがもないといふ事。

㋻わこ 男の。子 わらし。 子どもの事

㋕がゝ。 嚊の事 がァさま。 かゝ々といふ事 かけて。 やりかけてといふ事

(よ)よ。し。やれ　よしやれと。結ていふを。切ツていふ。「そ。り。や「こ。り。や。「あ。り。や。など同し。此國のならひ也

(た)旅(たび)ざとうのつゝ立かへりィ見るやうだ。　ひつくりかへる事また身のかるひをほめるなり　ごんぼう　おやかためとじめの事

(つ)つけへねへ　とんじやくないといふ所へも違ないといふ所へもいふ

(ね)ねへな。　なにさ。いやさ。いんにや。

(な)なには。　なに何さ　腦(たつき)　あたま　。腦がやめる、　づつうのする也　ぶなく　ものゝ音のする事なるといふ事也

(く)くらわれ　玉茎□□

(や)やめる　せつない事　やんだ　否也　やんだら　いやなら也

(ま)まかく　眞赤く也又生かいへまつかい也

(け)けね　家内也

(ふ)ぶくめん　不工面。くめんのわるい事

(て)てつへん袋(ぶくろ)　末に出　出來る、　出あるく事　出る、　ものゝ出來る事　てぶ。　今日といふ事

(あ)あらく　すさまじくといふ事

(さ)さみい。　三弦　肴町(さかなまち)のおてう。　女をほめる時いふ末にくわし　さかる、　にぎやかなる事

(き)きこ〳〵。　びく〳〵する事。すべて此國の人物の音をいふ事いたつて下手也末にくわし

ⓛしゞこ　めし喰ふ事　玉茎しめすける。　しめこむといふ事未にくわし　しこる。　かたくなる事　ⓗひぶくろ、　未にくわし　兵糧(ひやうろう)をしめづける。

此外に方言(はうげん)多けれども。此書にあづからざる事ハ。もらし侍る。

眞女意題

神ハ人の敬ふに依ッて威をまし。人ハ神の冥慮によつて。幸有りと菊月の御祭禮の貴賤群集。かまくら時代のミご艸履より。三まひ裏付の今の世にいたるまで。蹴上ヶの塵に交給ふ。和光の影ハ神鏡の。形を天の月日に表し。神樂の太鼓ハ神馬の勇ミ。豆ハ女中のはな緒ずれ。さねかづらやらぎん出しやら。ぬらりくらりの花の露。大こうあんがびん付ヶに。一トきハ目立ッ御ゑいどう。衣裳ごのミのひな形ハ。若まつが能からふか。香煎かとうせふと。物ずきしたる出たちハ。嘸やおやごの肩の張。片うで脱だる舛屋がかんばん。いつわりなしハ見世物の。丹波の國の猫むすめ。タツタ木戸錢八文とは。ニヤンと。安ひで御ざりましよ。サア先の方お替りと。ごつたにまぜる覗からくり。わづか二間の箱の内。唐土。おらんだ。忠臣くら。梅幸が似顔ハ。高麗屋と一ッにして。本屋の店にならへられしハ。嘸心外にや有るべきと。當推量の光り手あい。そゝり小唄の鼻をはぢくハ。おミやげに持能ひのじや。生姜の匂ひと知られたり折しも角の煮賣やた。ほろ醉きげんの國侍。仙臺紬の綿入羽おりに。十六うちの長紐を。片

ひざに結び下ヶ。花色太織に淺黄うら。あさ様ざうりを引かけて大小を貫拔ざし。お高祖頭巾をのつけにかぶり鳥居の方へのさり〳〵歩行後ろけんぼう小もんの袷羽おりに。合羽色のばら緒ひも。岸縞の小袖さつぱりと帶ハ黒なゝこの大名しま本多くづしの意氣なる男【忠七】モシ奥右衛門様とちらへ御出なさります。【奥】コ・レ・ヤ忠ひぢ。どこさいきやる。今日や非番でいす故。參詣に出來申た。【忠】コレハいゝとこでお目に掛りました。ソンナラ御一ッ所に參ンじませふ。【奥】旅や道づれ世や情。ソンダラ同士にまかるへし と。くんじゆの中をおし分〳〵神前にもなれバ相手チヨン〳〵中音にへこんしやう〳〵の紋おとなへふし拜ミ〳〵 主も。拜ミ。やつたか【忠】ハイもふ拜ミました と。つれ立つてそこらをぶら〳〵 何ンとごろうじまし能く御宮が建ますね。【ヲク】あらくゐい普請もし と。咄ながら吹矢の前へ行かれしんそこおもしろそふに 兎角〳〵。おかなくゐい仕掛もし。ア・リ・ヤ眞赤く塗だ人形か舌を出した と。見とれてよねんなし 【忠】モウいゝかげんになさりまし。ちつと烟艸に致しませふ と。そこらを見て コリヤァどこもおさかんた。透た所へめへりましやう。【ヲク】ナニバお國の釋迦堂さ見るやうに。おかなくさかるちや と。あるく内に土弓の音 アノきりん〳〵。どんがり〳〵と鳴ハなにもし。【忠】アリヤァ土弓さ。【ヲ】ナニ穀弓もし。【忠】イヱ揚弓さ。程なくやしろのかたへなるきれいなる茶見世へ 【女】おかけなさへしアイお茶。【忠】お茶も當仕めへだす【女】ホヽ、つい云付たがくせになつてさ。【忠】ホンニおめへハ中洲あたりで見たやう

九

此だ・か【女】アィ夏中は幾田屋におりやした・【ヲ】然らハ主達や・知り人いしと・茶ワんとり上ケ湯や・おかなひ埃もし【忠】ソリヤァおめへ香煎さ・爰とあたかァ・茶のかわりにミんな是でごぜへす・またつんとして・いゝやつさ【ヲ】どふやら粉薬いミるやうだ【女】うさァねへ・引手岩者喜介【喜】モシ旦那高松屋へお出なさりまし・子供衆も揃ッております・【忠】原板蔵の下ケ多はこし脂を下ヶめにしてどふしやうか・【喜】マァごろうじてお氣に入らざァ・どちらへなりと御出なさりまし・此ごろ氷川から來た・いゝ中としま衆がござります・【ヲ】女郎と聞てほいやり忠公主やひまでゐすか・【忠】ワたしやァ・おめへ㒵ンへの勤だといやァ・いつ迄でも能ふござりますが・あなたハどふてこさります・【ヲ】翌迄ハ非番もし【喜】ソンナァすぐに御出なさりまし・この節で御ざりますから・おそひといゝのハふさがります・【女】お出なさるならはゐへがいゝのさ・【忠】夫だがいまつからァ半ン端だす・モゥ何ン時だェ・【女】アィ此通りさと・かけあんとうへひだともす【ヲ】何ても角ても・つけへねへ行・やれ〳〵と大せつ込ミ忠七四文銭をさら〳〵【忠】大きにお世話・【女】おゆるりとおしげりねんし・少しはかり歩とおもへハ高松やの門口【喜】くゞりをぬつとおよしどんお客が有るよ・サァおヒりなさりまし・モシ旦那・おこしのもの・【ヲ】ソ・リ・ヤふちかた棒・【喜】お小柄がござりませぬと・かとなへ渡せバ大小へもはき物へも番附の札を付る上はたらき・およし【よし】サァ二階へお出なさりやし・見通しに致しやしやう・ヲ

ヤくれへ行燈(あんどん)だ　と。かんざしにてかき立ろ。小ぢよく片手にさしたばこぼん。片〳〵にへしゆんけいぬりの丸ぼんに青きりのちやわんすわう色のどく　【ヲ】コ。リ。ヤ女中。その
すだれへまくりやれ【忠】爰のすだれハ上ヶつこなしさ。マア下にお出なせへし【よ】おめへ
⿱𠂊巳がた女郎衆ハ。【忠】いきな中としまを二ァ人さ。【よ】ソンナァうつくしいのを見立ッて
來やしよふ。【忠】コゥまちな。たしか氷川(ひかは)とやらから來た子が有じやァねへか。【よ】ソリ
ヤァおかの⿱𠂊巳ンさ【忠】夫をおれに出してくんな。【よ】しかも今出し申ス内さ。【忠】有が
てへ　と。およしハ下へ行程なく酒さかな持てくる　【よ】サアお上りなさへし。【ヲ】マッのミ。やれ。【よ】ソンナァお
憚ながら　と。てうしてかつちり。　ハイお上ヶ申やす。【ヲ】只ハァおかなくつぎやれ　と。一口呑て。頭をひつしやん　伊勢や新
平(へい)つけへねへ。コ。レ。ヤ生一ッほんもし。　と。こくうにした打この間少し酒もり忠七ハ下戸也　【よ】サアおいでなさへし。
と。女郎お大。とび色つむぎにくろしゆす帶。本田あけの切まへかミ銀むねをちよつとさし。かんざしで頭をかきながらびたり〳〵同しくおかの花色ちりめんに金なしもおろの帶髮ハさつとたばねた斗。氣しよくでも惡ひか面やせたれ共にくからぬ顏ぞく忠七と顏を見合びつくりし
た躰ニてざしきへ直る忠七もきものつぶれた顏付にておよしにそつと　【忠】アノ二ばん目がかのか【よ】しれしさ。【忠】ソンナァよし
と。あんどのやうす　【ヲ】忠公さしやれ。【忠】マァお順(じゆん)さ　と奥右衛門お大へさす　【大】ちよつとのむふり【忠】ヲットよし【よ】モ
シおかの⿱𠂊巳ン【かの】おりよげへながらお近付のため。【ヲ】君のお盃(さかつき)い戴(いたゞく)も他生の緣も
し。【大】ヲヤげんさんヲを見るやうな事をいひねんす。【よ】ホンニ夫で思ひ出した。雲海(うんけへ)
さんハどふなせへしたね。【か】今夜來なさるとつて。おいらさんが心まちさ。とやこふいふ内勝出る　【よ】

おめへさんかためしけへやし。二人の女郎立　サァお上ッなさへし。コレ金治どん。おめしばちよふ持て來な。忠七おかのかざしきのけぶりどうやらわけか有りそふ也　〔忠〕おめへハ御酒のうへだから飯ハあがつれめへ〔ヲ〕子ェナ酒へ呑んだれバ迚。兵糧しめつけるにや。つけへねへ事いし。ムヽ、あらくいゝ汁た。コ。レ。ヤ。姫のりもし。〔忠〕ナニ肴のつミ入さ。平のはつ茸がつかもなくありがてへ〔よ〕おけへなすつてたッやし。〔忠〕モゥそふハ喰やせん。ソレナァぐつと茶づりやしやふ。〔よ〕あなたお茶わへ。〔ヲ〕から飯いモゥ四五盃しめづけて。そふた上で。さつかけべいチャ。たらふく飯を喰のめしぜんを下ろ。間もなく二人の女郎下ニハ古き小袖を着。平くけをちよつとむすひ。はじめの上着をはおつてくる　〔忠〕サァもつとこつちへ寄なさへ。思ひなしか。でへふ淋しいやうだチ。〔大〕此ごろきつゐもんさ。おもてはつかし賑でごぜへす。〔忠〕どふても霜がれになるからさ。ソリヤァそふと。アノはま松町の女郎の行燈ハ。ごふてきに奇れいでごせへすね。〔ヲ〕イヤソ。レ。ヤ。見ぬ事いし。只たくさんに有ッたのは。わくにはつた火袋もし。〔かの〕ヲヤひふくろたァ何ンのこつたェ。〔ヲ〕ハテおつべし行燈の事もし　〔大〕ソリヤァマアとんな物だへ　と二人ながら笑　〔忠〕アリヤァてうちんのお國ことばさ。〔ヲ〕物の名も所によりてかわる也。お江戸のちよぢん國のひぶくろ。イヤ忠公。アノ鳥居のまへにならべて有るちつこひ箱ハ何ンでごいす。〔忠〕アリヤァ搏風とつて。爰の名物さ。〔ヲ〕おれやナニ小

人嶋のおかわだんべいとおもつた　と咄の内となり二かいてげいしやのこゑ　「大」アリヤァたしか乙吉㒵ンの聲だよ。へ天
が下戀と情ハうらおもて。ほれて見さんせいとしけれともかとこさる「ヲ」つく〴〵聞入　何のハァ
かたかんべいチャ。ほれた中だらじだらくだんべひ。「三人」うさァねへ　と笑ふ内二女來る　「よ」サァ
ちつとあちらへおいでなさへし「忠」サァ奥右ヱ門様ン　とつれ立床へ行中ろうかにあんとうを置き床を二間に分てとる　コリヤァしんに
有がてへ。割床といふやつァどふもきざな物ンだよ「よ」そりァ又通さ。「忠」置ァがれ「よ」
モシ例こくを「忠」ぐつと今夜ァぶんながした「ヲ」おれが錢も遣るべいチャい、、らもし
「よ」宵とまりで一ッふんさ「ヲ」ソ。リ。ヤ。取リやれ　とらへぎらしや二全入裏のはながミ袋よりなげ出ス　「忠」ソレよしか
と南鐐二まひ「よ」アイおゆるりとお休なさへし。と下へおりる女郎來る　「大」「か」モシお休なさへし。「忠」モウお
よりやし「ヲ」寐ろなら寐るへし　とこんでの床へはいる　「大」おめへの羽おりやァ何だェ「ヲ」是もしかコ。
レ。ヤ。かな山の霜ふりつむぎです　といひながらとびさやの帶を前へ廻しよこにころり大きせるをとりあげ　「大」ヲヤどふせふ煙艸がねへ。
「ヲ」おれが多はこさ飲なさひ「大」コリヤァとんだ色のくろひたはこだね「ヲ」ソレヤおいの
河原もし。「大」ナンダさいの河原だェ「ヲ」ねへナ。おいの河原といふ所の烟艸でゑす「大」
ヲヤいとこのかハらが聞てあきれる。ソシテどふやらきつそふだね「ヲ」ナニハヽヽつこひ事い
し「大」ホンニ人にやァ添て見ろだ。見かけによらねへ。やァらかな多葉こだね。ドレおめへ

のきせるを見せねへ。ヲヤとんだいゝかる張ッたの。コリヤァ水にうきやすか【ヲ】あづらへて拵たから。御當地などに有るよりや。かるひ事もし。ぞよう風が吹て來ると。空中へ上るでゑす。【大】ヲヤとんだむだァいひねんす（と云ながら□□□□□□□□）【ヲ】爰の家内におうろしゆや。いくたりごいす。【大】わつちまあし十七人さ。モシおめへがたのお國にも女郎屋が有るかへ【ヲ】お國の肴町に茶屋か有るが。又お長といふが。おかなく。いつくしないじや。あかねうらの七寸ふきィ着かけて。ナニハ朱ぬりの駒下駄ァはいてありく。いきび風だ。天人の影向もし【大】いきび風たァ何ンの事ッたェ【ヲ】ハテ臀尻風の事いし。【大】ヲヤついぞぬへ。ソシテおめへの來なんす時分はやつた唄でも有つたかへ。【チ】おれや先月のはづか頃に。お國よ出來たが。其時分はやつた唄や。兎角すべきやうもなく。能ゝ書た文句もし【大】どふぞうたつて聞かしねへ。【ヲ】（どう聲たはなへぬいて）ヘ爺と嬶とがァむしで。夜になァると。ぬうだり〱。□□□□チヤァくつちやく〱【大】おかのさん聞ねへ。とんだ唄たの。ヲヤおめへがたァもふ寐たか。【ヲ】（聲たひきくして）コ。リ。ヤちくとこつちさ。よりなさひ。くらわれや。おかなくしこつた。【大】ソリヤァ何ンのかへ名だへ【ヲ】（□□□□□□□）これや此事もし【大】ヲヤ馬鹿らしひ何ンの事ッたな。【ヲ】サァ□□□□□□【大】□□□□。サァ□□（□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□）

□□□□□□□□【か】ほんに縁といふもなァあぢな物ッだね【忠】おれも顔を見合た時やァ夢のやうな心持だつた• ホンニ氷川から來た子と名ざしよふしたも• 大かた虫のしらせだろう【か】ヱ、もふじれッてへ• いゝてへ事ァいくらも有るが• あんまり嬉しくつて• ひッとつも出ねへ• ワたしもおめへの顔をミると• つもる事をはなしたかつたが• およしどんのめへも有り• お大なンれ口わる也• しらぬふりようして• 居やした• 私も親たちに別れてから• 四ッ谷の兄さんの所へ行て居やしたが• おやしきィ奉公に出すとつて• ちやんと氷川へ賣ッてから• 欠落して仕めへなさる• ほんに憂ひ事もつれへ事も誰にこふと相だんする人ァなし• 噓かァしらんけれどおめへの云ひなすッた事が• 身にしミて忘れられねへから• いづれちよつとなりと逢てへとおもつて• みづけへを頼んで• おめへの所を尋たが• 神田にそんな紙屋ァねへとつて• 三度ながら只けへる• なつかしるとじれつてへで• とう〳〵氣病にやミ出して• 客衆のほうへねつから勤めすくらげへして• こけへ來やした• ホンニどふした廻り合で• フット今夜逢ッたやら• ワたしれまだ夢のよふな• 心もちだよ• 此はなしのやうすをミろにおさな名しミの地色と見へたり【忠】おれも神田の親方が田舍へ引ッ込しつてから• 川越へ戻らふかたァ思つたが• 迚もの事なら江戸で拵で見やうとおもつて• 方〳〵と聞立たが• 芝口の鼻紙袋屋へ口入する人が有つて• すミ込ッて居る内に• どふやらこふ

ら。烟艸入がたちやァ。ぬいならう。貞躰にして居りやァ親方の氣に入ッて始終ハ養子にするとつて。子も同前にして下さる。何やかやで工面もよし。アノ連立ッて來た客人も出入屋しきの御家中さおめへの事も一ッたん女ぼうにしやうと。生血までしぼり合ッた中だから。末〻砂にかふり付ても。夫婦にならふと思ふから。川越へ便の度に。伊介とんの所迄。みを賴んで遣ッたが。屆かねへもどうり。ホンニとんだ身の上になつたの。成るほど人の行衞と水の流りやァしれねへもんた【か】夫でさつはり譯が知れた。シタガ別てから丸三年になる內。何ンぞ意氣な事も出來たろうし。噫ワたしに逢なすつたが。うるさくつて成めへの【忠】ソリヤァそつちの事さ見さんに賣れたのか。色男と缺落したのか。地めへ稼で續けて遣るも。いけへ事有る点さ。【か】なきこゑニて おめへそんなむげへ事をいひなさる。是見なおめへの手でほつて有る此忠の字が證據だァな【忠】ナゼ【か】なぜとつておめへ。色事をするくれへて。此ほり物を消さずにおく物か。おめへを人にして見な。死ね死ふといふくれへでこんなほり物をうつちやつて置なさるか。又そんなに根ぶかひ事てもなかァ。誰がすいけうに身をうるもんかな。いかにした手なもんだとつて。あんまりな事を云なさる【忠】ソンナァ夫でよしさ。何もなく事ハねへハナ。意氣な事ても出來たろうの。逢たかうるさからふのと。心もねへ事をいわれたから。

おうねへそつちの心に。引くらべての事たろふと。邪推(じやすい)の廻ッたも。いやミをいつたも。平ッたくいつて見りやァ。うそッこなしにほれたからの事さ。〔か〕ソンナァ是から今のやうな事。いゝなさらねへな。〔忠〕モウたげへも何ンにもしねへよ。〔か〕やつて置ひたきしやうが有かへ。〔忠〕夫がなくつてどふするもんだ。（とふところより。ぶつ込のヤウな紙袋を出し）ソレ何もすれすにちやんとしている（となげ出スきしやうと一ツ所にりしの女ふミ）〔か〕コリヤァなんだエ。〔忠〕ソレかそりやァ内の娘御の付ヶみさ。〔か〕ドレ見せなさへ（と。やつきとして引たくり）それミな。口ぎれいな事をいゝなすッて。是だものを〔忠〕マァ何ンだろふと読(よん)て見たり。〔か〕読(よま)ねへでどうするもんた みへあまり〱つれなき御心ゆへ御氣にいらぬ身をはかへりミずおよバぬ御うらみ申あけ〱〔忠〕夫てでへげへしれたもんた。モウ読(よま)ずと置たかいゝ〔か〕シテ器量(きりやう)へどん。なだへ〔忠〕つかもなくかあるらしい。ほつとりとしたふり袖さ。〔か〕ナゼ夫にかまひなさらん。〔忠〕ハテ十八のとしから。云かわした。命かけての女が有から〔か〕ソリヤァどこに〔忠〕ツイ爰(こゝ)にさ（□□□□□□）〔か〕ナニうそや（□□□□□。□□□□□□□□□□□□□□□□□時の鐘かこん〱）〔大〕モウ八ッになるそふだおかの白〱〔か〕なんだナ。〔大〕ちよつと下へ行ッて来よふか（と云ながらたはこぼんの引出しより名の書付た小サな木札を出ス）〔ヲ〕（起きかへり）其札や何ンていす。〔大〕何ンでもさ（と上ぞうりはたく〱）〔か〕じきに行て来るから。□□□□□□

□□□□ と是ハ木札をもつて下へ行是ハねずに勤るといふ所をかくさまに見せるが也此事近ころへやミたるよしなれど忠七おかのがうま事へ月に村雲花に風ちよびとさく者のやきもち也 【か】 ちつきに二かいへ戻りしやうじひつしやり申□□□□□□□ もふよつほどさむくなつたよ。ちよつと下へ行て來ても。□□□□□□□□□□□□□。【忠】ドレ【か】ソレミな【忠】ホンニ□□□□□□□□□【か】□□□□□□□□□□□【忠】ソンナァ□□□□□□【か】久しぶりだの 此あと□□□□□□□□□□同ふ部やに八坊主客うん海女郎おいらがこゑとして【市】コレ□□□□【雲】ム、なんだ。おらァねぶつてへ。【い】ソレデモ□□□□。【雲】ヱ、そんなに出家をいぢめるな。【い】何ンだ出家だヱ。ほんにおめへもむしがいゝぞ【雲】ソリヤァなぜ【い】なぜとつて。肴ァ喰たり女郎を買ッたり。只の衆よりやァおしがつゑゝ【雲】置きやァかれ。いわしやくひたし女郎とァ寐たしたァむかしの事よ。いまの世界て女郎を買ハねへハ。十六羅漢とおや玉ばつかりだ。【い】そりやァそふと。此ころハナゼ來なさらなんだ【雲】ヘテ錢か皆無だからさ。つり鐘ャァ。大きくつても南鐐の替りにやァならずか。世間の醫者が上手だか。業道めらァくたばらず。ひやうし木で擲出す方外工面しかたに雲の室。最明寺もときを遣ッたのさ【市】ナニうそや。ねんぶつに出るものが。夕アのくれかた日和下駄て。門ン前ンのほうへ行ものか。おゝかたどこぞの圍ひものと色事でも出來たろう【雲】また見通しから覗たな。色事しやァ無かつたが。俊丁ぼうがれこさで。鼈汁を拵へたから。そりよヲ

喰に行たのよ【市】ヲヤ氣味のわりひ。おめへすつぽんを喰なさるか【雲】ウ、サ橋池のすつほんハミんな腹へ葬ア。またおこしや落雁で。そだつからしやうしん物も同前さ。【市】ヲャ憎らしひ口だの。ソシテその圍ひ者ヲ俊了さんとやら斗か【雲】斗りかたア。【市】ハテおめへ方の圍者ァ。二三人てもやうしやァねへか。【雲】こゐつァきつい。とうしてそりようしつて居る。【市】どうしてでもさ。おふかたおめへも組合だろう。【雲】いんにや。おりやァ仲ヶ間はつれさ。【市】イャさつからとんとワすれて居た。おめへやくそくの寐どうぐハどうしてくんなさる。【雲】夫も此ごろいふ通り。廿日過に法事も有りゃ。手に入るむじんもあるから。半金ぐれへハどうともしやう【市】まちがつちやァならねへよ。【雲】ハテうたげへの深ひ。夫じやァ成佛ァならねへよ【市】エ、おめへも久しいもんだ。モウ□□□□□ねへか。【雲】用がすんだらモウ□□□□。夫しやァ手めへ牛になるぞへ。はらッこなしに。□□□□□□□【市】エ、おめへも付けがあれへぞ □□□□□□□□奥右エ門へのつたりそつたりお大が來るをまちかね【ヲ】歌へ岩のはざまの鹿子めや。生れおちると頭ふる キツザコ〳〵ャ ピツピコ〳〵ャ と壹人うたふている所へかた手に火入をもち【大】へ義理一ッぺんのあだ付きハ。けつく心のもめるたね。 と小こゑに新内ぶしたかたりながら障子をさらり まだおめへ寐なさらねへか。世によろしい化ものなら足をあらつて寢る時分だァな【ヲ】何ハァ夜のふけるや。何時でもつけへね

へ事もし。夜番に當ッたばんげハ拍子木ィぼんがり〳〵鳴らして。おやしきィよつぱらありく事もし「大」ソンナァおめへ折介かへ「ヲ」ナニおれが名やおく右ヱ門もし「大」ヱ、モ中間かといふ事さ「ヲ」身がお役目や足軽てゐす。マタ主が顏を詠てや眼をつぶして。ねまられべいか。命たくりの君なめ「大」よく人を嘲しねへす。吸付て上ふか「ヲ」マッねまりなさいコ・リ・ヤ・いしに少とむしんが有「大」何ンだへ「ヲ」いきびィたくらせやれ「大」何ンとへ「ヲ」□□□□□□この無心もし「大」ヱ、おもひ付でもねへ。そのくれへなら。あすこの□□□茶屋へ行なんしな「ヲ」いしもとゝろなしィ語りやれ。若衆やいしたがより南鐐一ッ片高ふごひす「大」ヲャきたねへ事をいひねんす。ソシテかげまもちけへこらァ貳朱たかな。いきたかァ今でも行な。夕アろくに寐ねへから。ねむつたくてならねへハな「ヲ」コ・リ・ヤ・いしがそだに□□□を向てや。おかなく不工面てゐす。コ・レ・ヤ・こぢきなさい。主やそれへふるといふでいすか□□□□□□「大」ヱ、よく人をいぢめねんす。□□□□□□□□□□□□□□□□□。マタ翌が有るもんだァな「ヲ」ウンダラ□□□□□□。マタそふた顏付やおかなく惡りくねへじや。「大」わるくつても能くつてもいゝのさ「ヲ」そたに腹を立てやるな。いきびのむしんを否たらよすべし。モチット□□□□□□□□□□□□「□」

□□□□□□□□□【ヲ】□□□□ □□□□□□□□□【大】□□□□□□□□□□□□□□・□□□
□□□□□□□□・何の角のといわずと□□□□□□□（と眥もかぎもなきあしらい也此所のならひとて／羽音羽たゝきおびたゝしくコツケツコウ〳〵）
【か】アレ雞がなくハな【忠】ハテ鳴たとつてどふするもんだ。居所さへ知れて居りやア・マタいつでも逢れらアさ【か】ソリヤアそふだけれど・夜の明るがしミ〳〵いやだ【忠】おれだとつてうれしかアねへのさ【か】ナニ内へけへつて娘ごに逢ふとおもつて【忠】またしやうこりもなくそんな事を。此口が有ルからやかましひ・【か】□□□□□□【忠】知た事さ。□□□□□□□□（□・□□□□□□□□・□□□□□□□□／□□□□□□□□□おく右エ門ハミれんなしに）【ヲ】コ・リ・ヤ忠公モウ東か眞赤(まか)くなッた。起やれ〳〵（と高呼ヘり□□□□□□□□／□□□□□□□□）【忠】モウおけへりなさりますか。（小こゑになりて）いめへましいけへらざアなるめへ・【か】ドウソ今夜來てくんな・私か方で仕廻ッて居るよ【忠】さつからしつアかくして居たが・みゝを付た娘といつしよにするとつて内證に・相だんか有る・なんにせい・今夜來て・相對(あいたい)つくで了簡(りやうけん)しやうハサ【か】了簡とつてどふしなさる【忠】ハテ生て添ふか死ンでそふか・はなれねへ了簡をさ。【か】夫ほどにおもつてくんなさるか【忠】ハテしれた事さ(こと)（くらむせうにあ／りたい事はり也）【ヲ】ア・リ・ヤ・雞(とり)がきつかう〳〵と鳴くハ・サアいくへハ【大】むかしやア輪(ワ)逢(あけへ)〳〵と鳴たそふさ・（忠七ハ羽おりを着ながら廊下へ出るかのハし／ほ〳〵と付て出る□□□□□□□□□）【忠】モシお大さんとやら夕アハとんと

噺にもめへりやせん。是からァ又お心安く。〔大〕お頼ん申やす（はしことん／＼若ひもの）〔喜〕ハイおこしのもの。おはき物ハ。どふてござります。〔忠〕艸りやァあなた裏付ハわッちャ〔ヲ〕コ。リ。ヤ。若へふと寐間に有るてつぺん袋をとつて來てくんさい。〔大〕何をへ〔ヲ〕てつへん袋もし〔大〕何ンだかむちやだす（といひながらはしごを上り笑ひながらばた／＼）何だと思ッたら頭巾の事さ〔ヲ〕コレ。ヤ。お世話〔大〕お慮けへ申やした〔か〕（小こへニそつと）かならず晩によ〔忠〕ム、承知さ〔喜〕よふ御出なさりました

くゞり戸のぐわら／＼も。戸ざゝぬ御代の。御いさほし。神樂の太鼓のどろつくに。八聲の鷄の東天紅。誠や諫鼓苔深ふして。とりおどろかぬ君が代の。めでたき春の御笑艸と。かひつくるものならし。

後編　娼之意知　追而出來

當世繁榮通寶

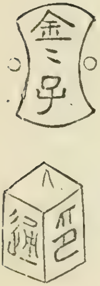
當世繁榮通寶

序

四海波錢しづかにて國もおさまる時の相場小判六十日出たくもかきつらねたる一卷ハ古借錢の隨德寺にハあらで隨羅齊の新作なり心こまかに是をこれハ佐度の金山こゝにある金の花のお江戸の風俗則繁榮通寶と題して借し本の見料をすゝむる事とハなりぬ

丑のはつ春

金ゝ子

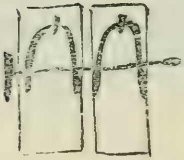


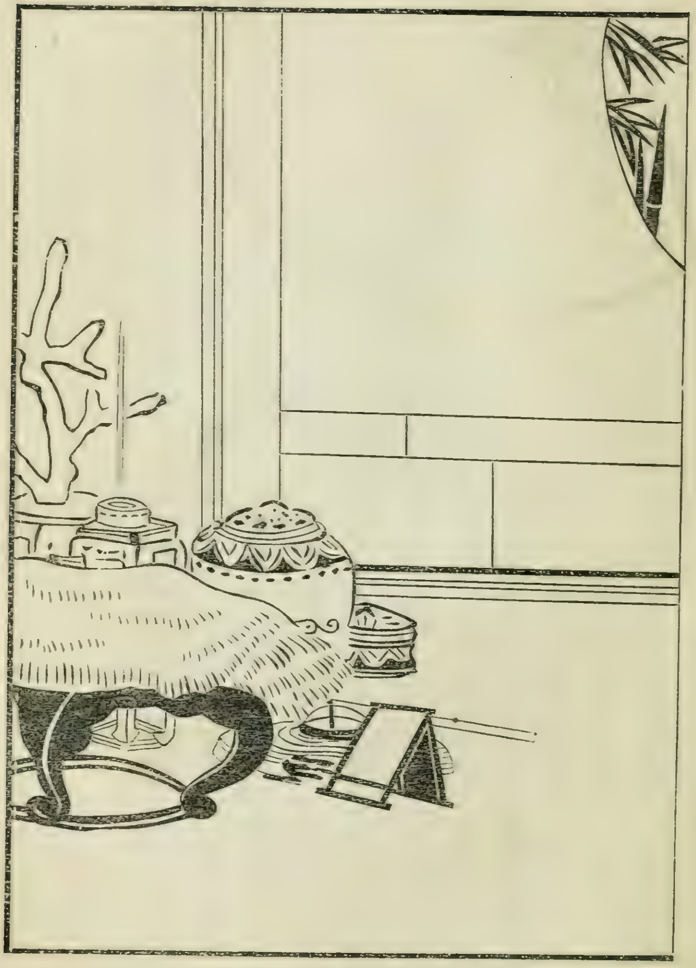
自序

昔粂の仙人山へ柴かりにゆかれしにせんたくする女のしりのしろきを見て天上のどぶ板をふゝはづしまつさかさまに落られしより通をうしなひ給ふとやそれより星霜おしうつりして花のお江戸の小田原丁や藏前邊にすめる人のゝ此通の味をしれりこれ大通にあらすや當世通のふへたる事東茄子のことくさつまいもの如し神に神通あり佛に圓通あり人に大通あり愚暮に不通の異名あれハ一ッとして通にもれたるなし予猥りに商通人となりて繁榮通寶をあらハす事我友盲先生の話なり口ハ禍の門なれども鼻ハわざわいの屋根となつて大通の誹謗をおほハば五日の

風十日の雨太平の代の幸也是ぞ實に盲先生蛇(へび)におちず見る人茶ニし玉へと言㒵安永十丑の小便なかき初春盲先生の門人笛吹あんま御先まつくらに筆を採る

手引漢
随羅齊





五

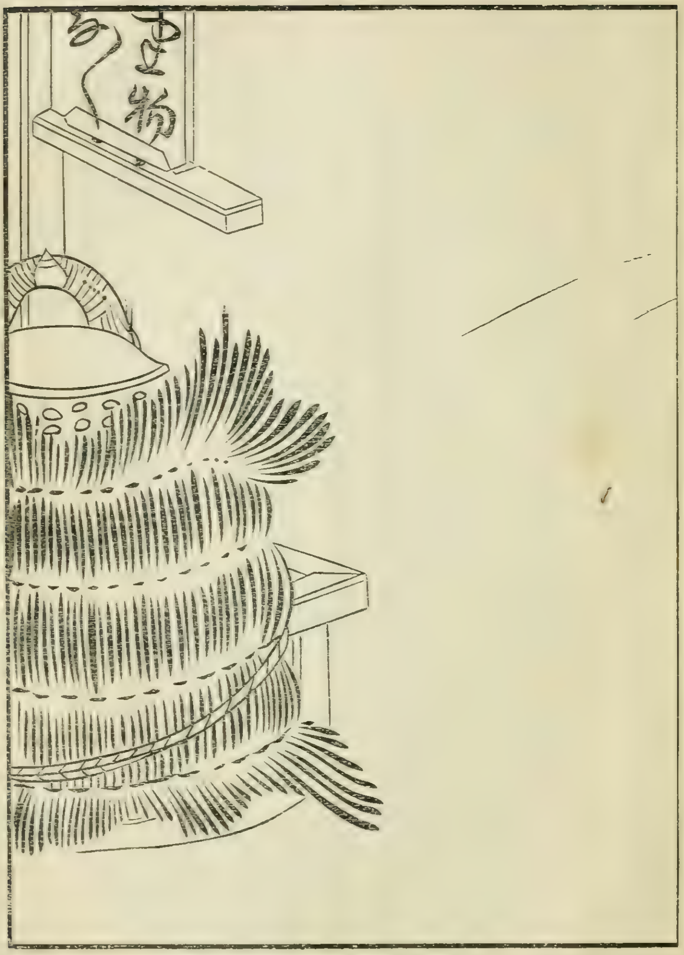
當世繁榮通寶

古人謂聖賢の御代には甘露降り麟鳳來儀して太平の祥瑞をあらわし當世通人の市中に滿るは實に太平のいさほしならんか諫鼓苔深して鷄おどろかす戸さゞぬ御代のためしには行人道をゆづりちまたにすてたるをひろわず商家軒をならへて繁榮す唐土堯舜の代和朝延喜の政代はともかくも見ぬ事はしれず眼前の太平國家靜謐にして五こく能みのり風雨時をたがへず万物おこなわれ草木枝をならさぬ[illegible]代なれやあいに相生の松こそめでたかりけりうとふおりからそとより入きたるはわか友盲先生なり一前已以來めつらしきたいめんまつもつてたかいの無事をよろこび一ト間に請ふじて麁茶を饗じよもすがらの物がたりさて／＼光陰如矢いつしか卄年の雪霜を經その間いんしん不通にくらせし事をさいわいなるかな再先生に逢て平生ののぞみ足りぬかわくは珍話もあらんにはなし給へ先生がいわく夫人かゝる逢かたき大平の御代にうまれて國恩をかふむる事中ても猶あまりあり世人かならず等閑におもふへからずやゝもすればそれをわすれて世間をうらミおらがおやぢの代には相應に下人をも召仕し身なれどもだん／＼世上が不景氣

からせにかねももふからず物事がむかしとは大ちがいむかしはまづ鮟鱇一ぱいを代金七十五兩に賣しためしありいくら拵でも壹升はいるふくろには壹升外ニよけいもなければこのすへとても能事はあるまいなどとたわけをいゝ手前が不拵はたなへあげなんのいらざるむかしよばり世のたとへにもいふごとく精出に追付びんほうなし時節がわるいの世かわるくて身過が出來ぬのとは不屆千万なり大平の御代にうまれ合何ひとつふじゆふならずあくまでくらひ衣類はあたゝかに着しなからおこりのうへにおこりをかさねる故口過ができぬなりミなそれ／＼の分限をしりおのれがかぎやうを元とせばかゝる御代のありがたさに何んぞ渡世のかたからんやそのうへ壹升はいるふくろには壹升といへどあふとあわざるはときなりきのふまで辻かごをかつぎて渡世せしものも仕合よく大金をもふくれば家持になりしためしありまた夕アまで長者とよばれし人もおちふるれば人の下にひざをかゝむも世のせいすいなればぜひもなし金持成はとて地よりわくにもあらず木になるにもあらず賣さかつて入れは賣さかつていつるいにしへようたからは壹人のたからニあらず天下の人のたからなり金持はかねもちほとのくろふありひんせんなればとてうらやむへからずわずか壹分か貳分の事にて身をすつるも金なりかゝる得がたきものなればこそたからなり何んぞ石瓦におなじからんやむかし鮟鱇を七十五兩に賣しためしあれは近代初鰹を

七兩貳分に買し者ありこゝをもつて見るときハ何んぞむかしに異ならんやまつ御代のありがたさハこれをもつてミるべし士農工商の四民晝は遊樂にとミ夜ハ寐上にまくらをたかふし鎧甲やりなぎなたハ五月のかざりものとおほへ定もんの旗ハのほりとこゝろゑきんふくりんのくらおいた馬ハ青馬とへんじてもふせんの上へのぼり天正むそうにしやうぶをあらそひそれ天正ハ天地の利をごやうしまつ持たる札はこれ則天なりめくるハ地也合てとるハ陰陽和合黑札にまくハこんとんいまたわからざるかたちなり二人でうつのハ夫婦にたとへ手に持ッてめくるハ國をわかつ三人にうつのハ天地人の三才なり七まいツヽまくは七ようはぐん場札六まいハ六氣をわかつはじめてん石ハ高きにありばんことなりて座中の目じるしとすこれ北極星なり相手のてん石はわりかへしの中に入りてミへすこれ南極星なりかつたるまへにハ恭石の須彌山あり金札の日輪あり白石の月輪あり石の白黑は晝夜にたとへ四人は東西南北五人は則木火土金水の五行なり一より十二まてハこれ月のかすなり鬼を添るハ壬也かく天地の利にかないたれハとてミなあてじまいなりミたりにうつべからすむかしよりいまにいたるまでかわらぬものハ金也戰國のときハ軍用と稱じ治世の節ハ賄用となづけ空腹ときにまづいものなしかしてさへあれハ高利をいとわすかりるときの地藏顏歸時の閻魔がほこわいかほりや正月より十二月までミなそれ〳〵の業あり

まつ百姓のこゝろづかいハはしめたがやしうへてから收納までの入川糞だの田のくさとりのとするほとのことハせねバならす折角丹誠して作りても萬一水旱のうれいあれハ種籾夫喰の根元をうしのふさりながら近年ハ大ぶん田舍か横着になり地頭へ年貢を納るときハ風か吹て損毛いたしたのいやうへつけにミづがなくて不作つかまつりたりと針ほとな事を棒にいゝなして始終ハ年貢をまけてもらいそのうへ百姓不相應なおごりをきわめ仲間の出合に座席をあらそひ土民と呼るゝをいやがりて帶刀をのぞむやからまゝあり百姓ハ百性ほどなくわあり外をのぞむへからす別して御江戸のありがたさハ一ッとして不足なく諸こくよりつミおくる代呂物ハ元朝より大三十日まで引切なくしかれども賣方が澤山故一向に間に不合やゝもすれバ舟切だのもの切だのとことハりをいゝそのほか大阪の革足袋うりするがの茶し上州のたばこうりこれらの品はけつく御當地より高じきなれどつミおくりさへすれハのこらすはけ歸國ニハ手ぶらでもどり代金ハかけにならす世のありがたさハ奚也相應に居付の見世もあれど邪魔にもならずァ、廣大なるかな大海ちりをゑらますとハこれをいふならんか日本はしの肴市にハ魚の山をなし往來のきせん雪のふるがごとし寸地をもつて千金にかへるはんゑひ新川を呑ほす上戸あれハもちやをたをす下戸あり上野飛鳥山のさくらハよしのにひとしく麓にちる花をゆきとうたがい染井のつゝじハ淺草



の梅づけにいろをうばわれ萩寺の秋にはミやきのゝさかりをうつしらかんじに螺堂たかく百ばんの札所をひらいて順禮ゑんろほこふの足をやすめまつ余國にないものが時鐘の出來合江戸むらさき屋形舟と芝ゑびよし原のはりつよき雨ごく中洲のすゝミは三國一なりまたよこくでかたつて不出來物が河東ぶしきゝ取答問にやらかすにもなつむきはかたられずそのうへ商人はいろ〱のくふうをこしらへ錢をもふくる種なればさま〱に身を替しあるいは坊主のすかたになりまたは日傘にふくさを下げつぼを荷ひかねをたゝいてうたをうたひすミからすミまでおたすけだんのふとは水入のいらぬ事とかくうきよに不通はなしふうりんがなれはそばをよひ正月やといへはぞうにとこゝろへ何事もぬけめのないおもひつき星まつりの大かぐらは半日にあるきあた事とおもひながらも金銀のほしさにまつる人はうんつく世上一とふの大通まい和桟て唐さんの席をつとめきりなから廿四文を三茶とあざむくにたり小口をきけは賣家の世わをやき買者のよろこび賣主の身に取りてはきのどく千万よろこひうれいのあいたにかねをもふけ麴やの升取りには豆藏も横手を打芋を買ふには手前升鍋には左りの手に塩をにぎりうなぎをくへは串を數へ妙か不妙かしらねともミつからよかん平といゝむきみを買ば水をしほり車は三寸のくさびをもつて千里を行人は三寸の舌を以初のぼりのおもひつき願人坊主はかんまへに水行をしま

いどふりで按摩が笛を吹ながいものあらいおき金平牛房のきりうりあり團子の四ッざしも四銅錢から工風し出し狀書ならいふでのせりふハそバからきいてもはからしくはなし龜のせりうりハ泥龜一の功德うりかいてがなければ邪見がしれ年季野郎が長うたで天秤ぼうか上へそりくわい中紐のしだしにハ世上のしらミをミなごろしはこべしほはのくすりハ同じかんばんをこしらへ万人の眼をまきらしそのほかによりのかんばん擧て數へかたしむかし周の世に蛙戰て北狄おこり一寸のむしに五分のたましいとは願人坊主のふる言は松井や井上が劍術ハ牛若もはだしでにけ我がこうしやくハいつまできいてもちやだいハ八もん雛助があふきのしよさにハ鶴吉も爪をくハへ女大夫の上るりもこじきぶしとて一りうありどしやうけし之介が辯舌ハかなへに油をわかし素人に能書あれバ非人ニものふ書ありすなをもつて向へ書よこにかきたてにかくけさほど上けましたはんじものハといへば源八坊主のにせありにせのないのハ長太郎坊主といせ太神宮へあげますで御ざります日のみへぬのハやミのよ同前月夜からすのまねことは善哉／＼われハこれ御そんじのふんまのかういんすりこぎてつぼうまめをもつて福ハ內鬼ハ外ヶ濱までおいやり箱根からこなたにハ不通とばけものハないばづしかれともこのころきけハばけものあり別して出火のよハ多く出るとの評判のたハらはけものについてはなしあり先日目黑へさんけいせ

しに所ハ行人坂のあたりにて隱居とハミへずいしやにもあらずよく／＼ミれハ出家なりころもハ黑ちりめんのはおりに着かへ我がめには見へねとも人にハそれとミへぼふに飯盛に手をひかれはなのしたに二本ほふよたれをながし行有樣はいやはやきのどくせんばんしかしながらいまどきの坊主にゆたんハならずむかし知識のほまれ日玄肪僧正も□□□の后□□□□と間男して威をふるひ山しなてらの道きやうハ女帝□□□□に愛せられ雲居寺の淨藏貴所ハ平の中興がむすめをしめ東光寺の善裕ハ□□□□のきさき染殿と不儀あり志賀寺の朝歡上人ハ六條の□□□にうきなをなかし天王寺の別當道命はいつミしきぶと密契すいつれも世に貴僧高僧のほまれありし坊主達なり此外のあく僧ハあけて員數へからずまよいやすきハ戀の道なりさてまた今の人ハあじな氣になりひとのするほとな事ハしてミたがりはおりの長きがはやれバさつそくそれにうつりまづものことがこれにしゆんじ通人の坊主たらんにおゐてハそれにするや大通には氣がたらず不通といへハはらをたてげいじやの名をハぢんこうきでおぼへまた賴といへともかへつてけいじやのおさきになり三味せんハはこより不出たま／＼ひくにもかきつばたかきまよでしまい道成寺やしうじやくハおくびにもせず大酒をすれハころびたがり內までおくるハ客がこけ立られてくらすおやふんあれハこうばしてすきるおふくろありみゝかきが壹文はりかねが試

尺て三文の身上も相應にミせをはり女はうちのふして玉のこしとハたとへのごとく身ひんせんよりいてゝ高位貴人のまへにめしいだされ身にハ美服をまといはるハ花の元に夕陽をかなしミ夏は凉所にあつさをおほへず秋ハ紅葉に時雨をまち冬は深室にさむき事をわすれちうや酒ゑんの座きやふをましそのうへ人のしらざるたのしミをきわめ然而父母兄弟を安樂にやしのふ事あつぱれ女壹人なりさて近來の人すこし事になれ意氣な形りをすれハ大通とおもへどもなか／＼半通にもゆかず夫まことの大通といつぱ第一ものことおふやうにして人を茶にせず万事にわたり諸事に通達し共うへ諸げいハ一ッとして不得と言ことなく遊樓に通行するに機をミて變におふず又人中にまじわる事角のふして文廻しのことし大通の文字ハおふいにかよふとよめばかならずしも通ふものと心得風雨雪霜をいとわずやりかふれとも事ともせずむせうにかよふハ血莊(けつそう)のいたす所後日家内に火のふるをしらすさりながらかよハざれハ共道をわきまへずこの道においては高ィひくいの差別なくすいはすいだけおもしろがりこけハこけほどうれしがるよしハらの事ハいふもさらなり岡場所の遊婦雲のことくつばなのごとしはし／＼といへハことの外あしく思へどもよしハらに美婦あればおかばしよにも姝女ありそのうへ古酒と新酒ほどにうまミ。かわらず貳朱ハ一片たけの代呂物があれハこそついぞうれあまりしことをきかず世に女のすく

なかりせハ人のあらそひおこらんこと必定なりまた人間の身にとりてハ衣食住の三ッより大切なるハなしかゝる大平の御代なれバこそこれをわすれ亂世の時ハ兄弟わかれておの〳〵敵國につかへせんじやうに勝負をあらそひおやハがんぜんに子をうたれ子ハ目の下におやをうしなひきくにさへおそろしくさなから修羅のくるしミその時節なんぞ前後を辨へんやそのころうまるゝ人ハ是悲ハなしまして大平の御代にうまるゝ事ありがたきしたいなり國恩の高き事須彌山のことし深き事蒼海の如く巾てもなをあまりありおそるへしつゝしむべしとやミくもに咄す中八ッのかねにおどろきまづこんばんハこれまて餘ハ期後偏之時と言ゝ

通仁枕言叢

通仁枕言葉自序

僞の。文字を分れバ。人の爲。是。傾城のいろはにして。親の爲。夫の爲。身をたち賣りの。西瓜同士も。義理に詰れば緣をきり。夜每ハ昔。時每に。替る木まくら薄蒲團。客を欺して金を取る。是も勤の操なり。其懸らるゝを知りながら昇るといふも人の爲。左すれバ遊びも善の端。此發端を尋るに。かの遊卜が大會と。內を僞り出て來るも。金を遣へバ人の爲。芭蕉の翁の發句にも。華の會。鐘ハ上野歟。淺艸歟。七ツ開ケバ。花を揚。歸る支度も一ト趣向。吉原雀ハねぐらに入る。櫓仲町。裾土橋。大通不通。家暮のろま。屋舖衆息子集りて。こなそれ〳〵

の。樂しこを。回らぬ筆にて著わせども。一ッも實の事でなし。本屋の爲に述たれバ。やつぱり是も人の爲。惡ひ所は穴賢。

安永兩手の年　東都蓬萊山人歸橋

めでたき春　戲誌

【一擧】りやんさん。花も。生る内ハくるしひが。コゥ出來そろつた所ハ。奇れい事たねへ。【二指】そふさ。しれつたくなると。出來ねェねへ。公の水仙ハ能く入ッた。しかし三もとの花が。多すぎる。莟はかりにしねへ。はかまも三もとなから。出したがいゝ。まだ冬至めへだによ【擧】わつちもそふハ思つたけれど。先生が來てから。相談しよふとおもひやす。床の脇の仙人笠也荷ハ。上の一輪が能くうけて居るから。引ッはりが有ッていゝねへ。【三爪】へ。ふすべ諸のそうりをならして二人ながら早かつたの【二人】三さんおそかつたねへ。ゆうさんハどうでござへす。【爪】一ッ所にそこまで。來たけれと。柳ばしの中むら屋まで行やしたわつちハ今朝生てけへりやした。梅のすゑゝをたづねたけれど。ねへからかんせへに。おどり猿によびと白玉椿さ。見物の有る大會にころぶといふ句も。若ひ中の事さ。すむゆうなんざァ。此ごろ案して。今朝來て生やした。向ふのぼくの南天に。かん菊のねじめ。能く出來たねへ。わつちか歸る時分にも。まだいぢつて居たッけが。ぜんてへ福耳といふやつが。生ヶにくひやつだ。花〆が下へ落て。ならねへものさ。【一指】きつひもんたねへ。しかし。ぼくの南天には。ァ、實ハ付かねへもんだが【爪】なあゝに。木ぶりのいゝぼくへ。穴をもんで實をさしたのさ。こふいふ惡句は。先生へハおんミつだによ【擧】せんど江戸はしの三河屋で。源明が會を見やしたが。大き

な砂鉢に。かきつばたを能生ヶやしたが。花と花との間を明て。三所ほどさ。あれもする亊かねへ。【爪】ずいぶん一ッ系なぞが會でも魚道といつて。間を透かす亊も有りさ。元祖根がしまらねへからのこぢつけさ。杜若と菊と水仙を。とり廻していぶれべ。外の花は出來るものさ。此夏杜若一ッ色の會に。十合が四季を生分たが。冬にはこつたそふさ。其會の。二日ほどめへに。花溜へ入れて置て。二番咲と。すこし柴の先の枯たを。生ヶやした。こゐらは。せへりよくといふもんさ。むかしも利休が馬たらひ＝櫻を一ッほん出して。生ろと有つた時。はさミもくばりもねへ所を。さすがは利休で。櫻を手に持ち。元から半分ほど水のうへにこひて。その枝をたらひのふちへ立かけ。水へうつるかけと散ッたけいきを見せたといふこつた。こふいふ事が氣性の第一さ。【指】外の流じやァ。こゞませて生けるが。うつとしひよふだねへ。【爪】是も理のねへ事でもねへのさ。ソレ軒下に虎耳艸を釣して置て見ねへ。ミんな外へ向やす。生花も共ごとく。出生を元とする物故。床のうしろは壁か板で。正面から陽氣をうけるから。しぜんとこのやうに上をうけて。まへかゝりに生ヶるもつともな事さ　とはなして居る所へ四開へ舟宿よりかへる　【四開】ミんなはやかつたねへ。此大ぜいの連中がそこや爰にかたまつた所は。白魚のねはんをミるやうた子。【擧】來るともふむだをいふ。しやれどうしのあぶらげでも喰つたそふだ。今まで何を

して居た。又氣の有るのか【開】おとゝひも行やしたが。ちつと。どろんこ。よたんぼうでワからねへ事が有やしたから。今日は晝夜を廻して。むけへに來るはづてござへすから。來たら待たせて置けといつて來やした。【指】けふの南天ハ妙だね。御出情が見へやす。誰やらに見せてへのう。【開】花會に花の評をするは。いやの番頭が。じやうるりの功者をいふよふで。やぼらしいこんな事ハ。流しもちで。世事のうわさに致しやしやふ。【爪】さつそくながらおなんハどうした。引こんだそふだの。【開】吉原に居た時分から。平藏とあやしふござへしたを。尾花屋へ來る赤德に出てから。色客のよふに。屋ぐら下の湯なぞへ。來るといひやしたが。ゐんといふ物はかわつたもんで。小田原の又といふ者に。五月の十日に。笹屋でふひと出て。六月のまつりにも德がしまつて。江戸へ見物に來やしたが。德が歸ると又を引込んで。二人しての竹わりかんろうとうさ。【爪】佐名太夫がいざこざハどふなつたの。【開】せんど檜物丁と（兼太夫居所也）山の伊勢屋で。中直りがごせへした。それに付て。佐名太が三弦彈の市澤が。猪牙の。けんくわの咄しを。お聞なせへしたか。【三人】いんにや。【開】いつかの日だつけか。堀江町の吉川から。多葉粉屋のてゐゝが。福もとの内へ。おやえがつらを見に行やした所が。その日どこやらの隱居が。松介や藤藏を連て來て。何が藝者の五六めへも呼んで。錢を遣ふ。内中

のものハ。ぢう箱のこわめしを明けたよふに。逆さに成ッてさわぎやす。所へ。はぐり錢のおれたやうな。けちな客たからふてうし燒が三文ぐらひに。とりあつかわれたから。けへろうといふ。しやうべゑづくて。おふでや佐名太夫が。とめたけれど聞かねへで。一人がいふにハいめへましひ。是から佐名太や市澤をつれて。土手側へ行ふといふ。佐名太も名のある者だから。土地の客人を。余所へ連出したやうでも。氣のどくとおもつたか。ありがたふハござりますが。六本木の方の御屋しきへ。おやくそくでまゐりますから。參られません。市澤ばかり。おつれなさりませと。はねたれバ。そんなら市はかりこひと。客貳人に市澤と。猪牙に乘つて出やした。段〻川へ出ると一人がいふには。手めへがよつぼと內の娘がいゝの、おし物がいゝのと。引ずり込んで。せがき札の殘を見るやうに。あしくするも程が有。どいつも〳〵。不斷役者と附合ふから。南京人が長十郎の聲色でも遣ふやうに。一ッもワからぬ事斗いふ。イヤなじミだのさしミだのと。まぐろによつて寐て居るのが。あすこへ行よりましだろうと。向ふになつていつたれバ。壹人の男もむつとして。あしくされたとおもふのハ。うぬがやぼからおこつた事よ。心安ひが過ての事だ。高へ所へ氣が附けバ。ちつとも腹ハ立たねへ物さと。あつちこつちへ云ひやつて。仕めへにやァつかミ合。市澤ハ初手から氣の毒がつて。いろ〳〵といつた

けれど。聞かねへとおもひなせへ。だん〳〵それがこうじてくると。市澤ハ泣ごゑに成ッてとめるほど。つよく成ると。さすがハ吉川の源ほど有ッて。云ひやうがいゝのさ。市さん氣つかひしなさんな。此早ひ汐にコゥそう〳〵しくつてハ。今に舟ハひつくりかへりやすが。おめへ斗ハどうしても。こうしやァしねへといふを聞くと。二人のてゑゝハ。けんくわもやめてしづまつたも。大笑ひしやァねへか ミナ〳〵わらふ 【擧】檜もの町か此ころ。座しき見臺を貰ッたそふだが見なせへしたか【開】見やした。一ッてへが。極のなし地に。菊壽を青貝と金銀とで高蒔繪にして。ソレあの。座がねが金のむく。銀と赤銅で張ッたのさ。七拾兩ほども。懸ッたそふさ。小松川に見せたれバ 文字がいん居所 おれも若へ時からお大名へも出たがコゥいふけつこふな見臺ハミた事も無ひといつたそふさ。遣り人ハ飯田町の方だそふさ【爪】そんならよの字かの とはなしをしている所へ中むらやより 【舟頭吉】ハふさんハ爰でござりますか【開】だれだ吉か。どうした來たか【吉】イヽヱあつちから急に。御みが參りました【開】使ハまつているか【吉】置て歸りました【開】よし〳〵。うけ取た せんどうハかへる 【二人】何かいつて來た【開】女房の所から何の事だか〳〵 とかんがへふうを切り見ながら顏のいろがかわる 【指】何ンぞふさぐ事でも出來たか【開】がつてんが行やせん。【爪】ひとりしてじれる事ハねへ。ドレそのふみを見せねへ 二人もそばからのぞく きうにたの字がわづらふから。くる事ハ無用

だと書て有る。なるほど合点がいかねへ。今朝(けさ)しは留のよしやかう。歸る所を見たか。中氣した大こくをミるやうに。あぶれゝといつて。げんきよく。けへつた。それに見ねへ。くる事ハ無用だと。いふ事が。十一迄書て有る。たとへ病氣にしても。ちよつとハ來ひと、いつてよこしそふな物だに。【開】ちつとハあたりも御座りやす。尾花屋の内へ、去年のゐべすかうからくる。節木(ふしき)の平助といふやつが。錢を遣ふから。おゝかたこいつが仕めへと。へんげへたもしれやせん。それにおかねまでがくるになつて。しやうちしそふもねへもんだが【指】そふいふあたりが有なら。違(ちげ)へハ無へ。おしかけていつて。ぬしが切れるか。平介を切さするか。それから先ハ手が有ふ。【開】なるほどそふしやせふ。おめへなんぞも御出なせへし。【三人】どふせふか【爪】ナアニあの子斗遣るがいゝ。わつちらハ辨てんの、ニヤアへでも行ふそふしざア。後へんの案じか有るめへ。是よりまた〳〵わかれてかへる。それゟ四開ハ出むらやへ行。舟にのり石場の前を通り来りしてんのまへを通り。梅もとへ行かずに。外のうちへ行かんと。しらぬふりにて山もとの内へ行あがる。舟中のいきまあれども。通俗の小冊にくわしければ略す

山もとの座鋪

【娘まき】能ふ御出なせへした。どなたでおなじミでも御ぜへすかへ。どふか見巾たやうだ。

【四開】見巾も梅ぼうしもねへ客さ。久しく來ねへから。どの子がいゝかしらねへ（と居ぬ女事淨口ざと聖にやる）おミを歟。おしげにしやう【まさ】おミをさんハ上方へ行やした。おしげさんも引込やした。誰が有るか。聞に遣ッて見やせふ【開】そふしねへ。（娘は勝手へ行。女すいもの并肴持てくる）【女】壹ッお吸なせへし。だれぞ藝者衆を聞に遣ろうかねへ【開】（己も知つた者ハわるしと）仲太夫ハ。【女】南さいぎ町へ引ッ越しやした。【開】和藏ハ。【女】四月死やした。【開】辰ハどふした。【女】土ばしへ行て。女ぼうもちさ。どふも合点がめへりやせん。ミんな今居ねへもの斗。口を切ッなさるが。どふかワけの有りそふなことじやァねへか（此じやアねへかといふ事も今の通言）【開】そんなら近へ頃出る。幸吉とやらを聞てくんねへ。【女】能く近ィ頃出る者を。しつて居なせへすねへ（と。ことばを殘して行）【まさ】いゝ所がごぜへす。お梅さんに。おいまさんに。おミなさんに。おことさんに。おこよさんに。おらゑさんどの子ども衆も。美しふごせへす【開】（多く口を切れどもミなちかづき也おたよが口をきらぬをあやしく思ひ）美しひ。とまり木の高へ子は。なじまれねへ。このころミた。何とかいつたつけ。（とかんがへて）それさ。たしかおたきとやらだ。【まさ】そんな子はねへのうお吉どん【女】そふさ。だれだのふ【開】子とも屋の名ハ。丸ひろ屋とやらさ【まさ】ヱ、そんなら丸ひら屋の。おたよさんでごせへせふ。【開】その事さ【まさ】有るなら口をきりそふなもんだが。お吉どん聞て來ねへ（女ハきゝに行藝者幸吉來）【幸吉】能

ふ御出なさりました【まさ】正月屋を聞てへねへ。またいつものきまじめか【幸吉】度々遣ふで古しにかぶれそふだ【開】此さんは來るか【まさ】けふもおいちさんは。山しろ屋へ行て（といふ所へ女は見ばんだかへる）【女】おまさん。わりひねへ【まさ】どふだねへか【女】いくよしの内に出て居なさる とき【まさ】あとを付たか【女】尾花屋から付て居やす【まさ】誰に聞た 物兵衛どんか【女】五郎さんにさ（と聞より。四開は思ふにちがひなく。しかしいくよしのうちに出ているは。おたよが鏡になる。くぼ井といふ客人ならんとおもひその上。くぼ井とは近付なればゞ。いくよしへ行。久保井に逢。おたよを返ろとも。きれさせるとさせんと。色々工夫たゞする。）【まさ】どふなさりやす。【開】（へ飛立ツ心を落付て）だれぞこまかひ所をひとり呼んでくんねへ（女は聞に行）

幾よし屋の坐鋪

（久保井におたよ。梅田におかね。ふたにおその藝者佐名木たう。仙丁。金。はおん。大吉。勘介）【娘うた】久保井さん。大きい物ではじめやしやうか。【久保井】何でもはじめたがいゝ。【仙丁】おうたさん大き過るよ【うた】いらぬお世話さ【久】コレおまつぼう。けさぞうり取を仕めへによこしたが。よかつたか【娘まつ】それで大にあの子と二人で氣をもみやした【久】ナゼ【まつ】ぜんてへおたよさんは梅もとのお客の仕廻で。江戸へ迎に行なさる所へ。あなたのほうから。お人が参りやしたから。梅もとのおかねさんに。

おいよさんがどふも先をへんげへてくんなせへと。頼ミなせへしたけれど（いくよしの女ぼうおいよハ梅もとの女ぼうおかねが姉也）出來にくうごせへしたを市さんに（此市といふハ梅もとの亭主也）色〻云やしたれバ。おらがお客ハ度々くるから。今日ばかりハ遣ろふと。あつちの客人のほうハ。おたよさんを病氣のぶんにしやした。のふおたよさん（とかほを見る）〇（おたよハけふの仕まひへんがへの事。たらぬと梅元ニて色〻いひけれども。むりやりに病氣と。おかねが方な。云ッて遣りけれバ。ぜひなくいくよしの忙しきへハ。出けれども。心おもしろくもなく。何やらかんがへて。杉ばしの先をかんでいる）【久】どふぞしたか【たよ】しやくだそふで。づつうがしやす【久】何しやくで頭痛がするとんだ。錢が無くッて。くるしひのか。頭痛もしやくもやめにして。ひしやくで無間がましだろふ【た】かわつた事を云ひなさる。こふいふはかねへ顏でも。玉の帳を見なせへし。日に四ッ五ッは。あきないやす。錢や金にかぶり付く。あんまり淋しひ心もねへのさ。今日梅もとの客人を。病氣といつてへんげへたも。おめへに出るが。嬉しさにさ（とおかしく笑ひながら）【久】だまりやァがれ。此あまハ、うぬが勝手のいゝ時ハ。お客のほうを貰たの。あすの仕めへをへんげへたの。辨慶から暑寒を遣ふ。切ッても切れねへあまじやァねへか【梅田】久保井さん。いゝにしねへナ。おたよさんも。だまんねへ。おもふ中の小いさかひハ。鳥のそらねかいつわりか【其木】そのいつわりかが、まだわりい。小いさかひを立退ても。（宵宮太夫を諷せて）わたしが姿見に立てバ。かり鶯に日を送り【藝者大せい】ありがたし／＼【久】佐名ぼう彈かずに。一段語らね

へか【佐名太夫】川そひの善知鳥かね【大せい】秋の七ばけがいゝによ。佐名太夫ハ一段かたる。此間酒事有。ほどなくかたり仕廻【其】コレ仙丁。深川拜見といふはんを拵へよふとおもふ。仲町ハてゐげへしれましやう【其】てめへにそうだんしよふ。まづ子とも衆でも。美しひ所が。お今。お梅。おたよさん。手の有る所が。上かたのおいち。おミな。おらへ。おこと。おこよ。一ト通りの所が。おその。おかね。おいく。おつる。おまち。おくめ。おぬい。いまの。お百。おしげ。新ぞう衆て。おミき。小とめ。羽おりで美しひのが。おとめ、おちか。おいち。歯を染たのが。甚介。義太夫のおいよ。としまの春治。此土地でハ。此三人より外ハ。歯を染た者ハねへ。じやァねへか。いきな所ハ。大吉、八十吉。かね吉。ぶんごで佐名太夫。義太夫で八重太夫聲色で長次。仙丁。龜。幸吉。されぎで三吉。加兵衛、伊八。仙吉。まづあらまし。人の知ッた所ハ。こんな物さ。くわしくハ内に書付て置た【仙丁】きつゐもんさ。私どもも。高へ中だね【梅田】月見に九が所で有ッた茶番をお聞なせへしたか【久】【其】いんにや【梅】中尾が出て。娘道成寺をする。やくそくの所へ。千鯉が來て。どふぞ道成寺の住寺を。させてくれろといゝやす。ミんながいふにやァ。手めへの茶ばんハ。聞た事もねへといへバ。ちつとしこうもごぜへすから。どふぞといふによつて。其番組にして。段ゝ初手から。茶番がすんで。今の道成寺ハ。夜の九

ッ過にも成ッて。ぼんのぼたいの。まり唄もすミ。鐘へ入るとそれいつもの通り。二人のほうすがさわぐ。おくから千鯉が。住持で。衣を着て出て。むかしまなごの庄司といふ者。壹人の娘をもちなぞとお定り通りいふ内に。勝手から町人が壹人出て。千鯉が袖を引き。何やら呼くと。千鯉がこまつて。やかましひ。爰でいつてハ。外聞が悪ひ。とふでもあとでして遣ろふと。いつてかたりをして居ると。又袖を引て。それでも九ッ迄のおやくそくで御ざりますから。おきめなさつて下さりませと。うるさくさゝやく千鯉ハこまる。見物のほうでハ。アノ男ハなんだといふと。誰が云出したか。堺町の中村屋から。それ料て借りたァノ衣を。九ッで時が切れるから。せつきに來たのだと。こそ／＼笑ふとミんなが。其氣になつて。こいつハ大ワらひだなどゝ。見て居ると。千鯉ハせつながつて。色ミといつても聞かずにせつく。見物ハおかしがる者も有り又氣のどくがる者も有り。千里ハ胸にすへかね。腹を立ッて。此男のやうな。けちな。大勢居る中ではぢをかゝせた。二度と何ンでもかりハしねへ。衣も何も持ツていきやァがれと。衣をぬひでさん／＼に引さきなげちらして逃込だ。衣ハ殘らずくろちりめんの頭巾さ【大勢】かんしん／＼。見物の氣を取たが妙だぞ（とミな／＼はある中にましあで）【仙丁】面白ひやうだがぜんてへ茶ばんとハなんだねへ【梅田】しらねへか。氣のとくだ噺して聞かそふ。能ッく聞ヶ

（とゑこんたつくり）そも／＼茶ばんのはじまりハ。筆のじくを能くとをし。少しの葉に茶をさして。くだんの竹の先へ眼り口を付てふく時ハふしぎの名玉顕れて。あたかもびいどろのごとく也。唐土にてハ。しんのうこうあん。我朝にてハ南郭仙人。是を茶ばんのはじまり也。（みな／＼どつとかへして笑ふ）○（又何事有ッて）（茶わんになりおたよおかへさず）【たに】つぎはさみなのめねへにいよ【娘ほの】いつも呑ながら【たに】はいふハのおやせんれ【八に】【哥】ナニ呑めねへといふ事が有るもんだ（とひよに手をおきへなちや／＼つぐ）【たに】呑もしねへ物を（と云ながらいきもつかずに）（のミちやわんをはして）のどがかわくから。もふ一ッぺへ【哥】無ぶ遊ッたそふだ。よしねへ【たに】いゝハな（とまたミミ）エ、じれつてへどふしやうのふ（と茶わんを手でつへうちつけわたさと。く[illegible]）【久】何がどふした此女ハ（といわんとする口をまたおさへ）【其】爰でいつてハ。まけだのかゝハり何の事ッたな【久】いふじやァねへがりけへなとこゝのだ。昔吉原遊女に。何とやらが。客を送ッて大門な帰り。またた新春の。明さむく。帰りし客の内の首尾。いかゝとあんし居たりしに。折ふしほとゝぎすの初音を聞て。君ハいま今戸のあたり時鳥。まことにそふも有りそふなもんだ。深川のやつらハ。客をたよんだりかしまで送り。もやひをとつて。おし出すと。おさらばよ。お近い内に。おばさんにも、よく云ッてくんねへ。吉どんあしたよ。などゝ云捨て茶屋へ帰ると。おき番のあんかをかりて（置あんかといふハ少さき箱に入し火ばち也。俗呼んで逆ばんと云。家の風義ニて男女のおき番あり。またおとこ斗の家も有り）裾でてんでに引ッつゝミ。今夜

の客(きやく)ハついぞねへ。りやんでもまだ喰ふ。つらをした。揃ひも揃ッた取ッたりだ。（此とつたりといふ事ハ。人形也）（客のやくざ人形に。手の無といふ事也）あたごになるが。いやさにの。鐵棒(かなぼう)がら〱おさらバとさ。お客じやァねへ飛(ひ)脚(きやく)だねへ（と此あたごといふ事ハ二切ニて廿四匁に成ルといふ事也一きりを薬師と云。三切りを大師と云もとなふてう也）ひとりがいへバ。モウどこいらへ行ッたろふ。石場のあたり新地のはなか。七ッのそこりで。通るめへなどゝ。客の居る内へごう〱。枕の朽(くる)るほど。どぶさつて。歸ると起てくぜり出し。もし時鳥の鳴く時ハ。こけハ今。淵(よ)の有あたり。時鳥。いかにそだちがいやしひ迚。コウ手には迄逢ふ物か。（とおたよが方をしり目にかけていふ。おたよハむつとし）【た】とんだおめへハ御(ご)はつめへだ育(そだち)の鹽(しほ)だちのと。奥(おく)の女中の孕(はらん)だやうに。おろせバしやれごとおもひなさろふが。こふいふ勤(つとめ)をするからハ。むかしの高尾(たかを)小紫(こむらさき)。百に四へいの夜鷹(よたか)でも道(みち)に違ッた事ハなしさ。あんまりあきれて。おか椎實(いのみ)が一ト袋(ふくろ)。直ハしらねへが。買に遣ろふ。ごた所がかんばんさ【甚助】ちつと古ひが彈(ひき)やしやう。大吉さん能しか（二人して調子を合て）〽蛙(かはづ)なく野中のしミづ清けれバ。田毎(たごと)の月は。うれ氣じやと。明(あけ)くれ思ふてくらするヱ〱〽早乙女の菅笠(すげがさ)しろき一もんじ。女心のくよ〱と。明暮思ふてくらすヱ、ヨ〽卯の華の垣根にしげる雑(ささ)ひにこがれて鳴くやほとゝぎす。明くれ【久】モウあとは知れた物た、やつぱり古ひが。むねへほむらが聞てへの（大吉と二人してかたる）【松】おたよさん【た】なんだ【松】ちよつと來ねへ【た】呼出すも古イ

所さ（と出るお松ハ小こゑにて）【松】梅もとから。堀江町の客人が來たから一寸かしてくれろとさ。床へ廻らねへうち。いつて來ねへな。そしておめへは云過るによ。よしねへな。【たに】あとの所をかつてんかへ【松】承知木かちく。まくを通して置ふれな（おたよハ梅もとへ行。四開ハ山本を出。もへ立心をおししづめ。何しらぬ顏付にて挨よしへ才）【開】久保井さんはモウ來なすつたか【ほの】アイ見通しにおいでなさりますどなたでござります【開】ゆうでござへすと。いつてくんねへ（と頰とつれだちすぐに見通へ行）【ほ】久保井さんどなたか【久】だれだ（と顏を見て）コレハどふでござへす。おめづらしいマア爰へ居んねへ【開】けふはおめへがたのお揃と聞やしたから。おあとをしとふてさ（と四開へ。おたよが居ぬ故。かくれしかもし間逢にて。ほんの病氣かと。あたりを氣を付る）【佐名】【仙丁】ほうさん御きげんよふ。おめつらしふござります。【久】コレ　おほのぼう。だれぞ美しいのを壹人【ほ】だれが能かろふねヱ。【開】インニヱよしねへ。羽おりでも呼びやしやう。そしてぬしのおくがたはヱ、【久】至つての麁物さ。今めへりやす。おめへ頭きんを取らねへか。あつかろふ。【開】ちつと勝手に逢にくる者が在るから。おつ付ヶ取やす。（かくておたよへ。四開か來りし事へ。夢にもしらす。梅もと方かへりつゝ）通しへ來りしに誰やら頭巾をかぶりし人。能く見れバゆふが顏に似たるやうニて。合点行かぬ顏にて。心をつける【た】おほのさん。いつそ酔たよ。【久】たの字爰へ來や。是が私妻でござりやす。【開】ドレお内儀にお近づきに成やしやふ。（と頭巾をとつて）何ンに酔なすつた。うそいにござりにか（おたよハはつとゑとひこひたいをさへ一ト口の返事も無くうつふく）なるほど美しいもんだ。どこの女郎

衆。女郎衆と云ッたら。しかられよふ。子供衆だねへ。（藝者へこなく〳〵四開がおたよを呼ぶ事を。しつて居る故。いかゞたらんと。氣のどくかり。物をもいわす）おめへハとうかしなすつたじやァねへか。（といつてもあいさつなし）なぜ返事をしねへ。（といわれおたよハ）【た】是にハワけが有りさ。マァこつちへ來なせゑし（と廊下へよび出し）さぞ腹が立やしよふが。段〳〵長ひわけの有る㕝でごぜへす。マァ下に居なせへし【開】おれがうつな事も有ふかと。わきの内から手を廻して聞ヶバ。爰の内に出て居ると。見番で口をきつた。病氣といつてかつくなら。見番や廻しにも。通して置たら能かろふに。コゥいふあさはかな書よふでハ。コンナ淋しひやろふでも九軒の茶屋じやァ相應に。人にも顔をしられて居る。さゞゐ堂へ上ッたやうに。廻すもほどが有るもんだ。爲になるから錢づらで。ゑり元へ付たのかよしにしろおきにしろ。由良之助が枕紙じやァあるめへし。いまさら手めへに突出されるも。くやしいとハおもわねへが。中町へ來ル客人ハ。ゆふにたの字ハほれて居るの。きのふも湯屋でこふいつたのと。是からしてか氣に入らねへ。家暮な事をいふよふだが。てめへがさして居る度に。尺の伸た名代ハ一度も呼だ㕝ハねへ。【た】だん〳〵云なさる所ハ。一ッもむりじやァごぜへせんが。ワたしがいふ㕝をも。お聞なせへし。けふおめへのしめへの所へ久保井さんが久しぶりで來なさるから。おかねさんにそふいつて。おめへのほうをへんげへてくれろと。おいよさんが頼こなすつたけれどもそふ

れなりやせんといひ切ッたを。おかねさんがしやうちして。手紙を書て遣んなせへした【開】どういへれこふいふと。おかねでもぬかミそでも。手めへが一ッとつこひと鳴田の元結を引ッぢめれバ。一も二もねへりくつだのに。あんまりしがねへ。しらを切る。【た】なるほどわつちが。出めへとさへいへバ濟(すむ)けれど。せん。おめへが出しなすつた。晦日迄に。兩手ほども無ければならねへと。アノ狂言も有るからね。けふの仕めへも幸ひに。出たのハ悪くもござへすめへが。コゥいふりくつになるかられ。久保井さんとけふ切れて。おめへの顔さへ立たなら。マァいひぶんハこせへすめへ。【開】久保井が方をきれるに切れて。おれが顔ハ立ッやうだが。頼んだ物をもこしらへずに。やつはり切れろといふ心か。【た】久保井さんを切れた迚。出來ねへ叓もござへせん。もしもくめんのわりひ時やァ、もふ一年もねんをいれて。十めへぐらひハ、いつでも出來やす。こふいふ所でおめへをつぶす。女とおもひなせへすが。ワたしハくやしふこせへすハな(となミだぐむ)【開】そんならどふともしたがいゝ。おれハ久保井にモゥ逢れねへ。四方八方いゝやうに。あすこへ行たが【た】おつつけ隣(となり)へ行からね、かならずまつて居なせへし。(四開ハ梅元へ行おたよハ大勢居こ見送しへ來り久保井か側へより)久保井さん。改ていわずとも。さつきからのいざこざを。てへげへ承知でござへせう。どう引をもおめへに。出にくひわけがござへして。けふから。だ

れでもおよびなせへし。ちつともゑんりよハごぜへせん。と聞より久保井へごうをにやしあんたきわめ【久】しなによつたら切れもしやうが。切れぬ時にハ。又とうする。【た】ナンノ切れるの切れねへのと。おばゝが酢だまをかむよふに。理屈もいりやせん。一座の大ぜいへあきれはて娘へをはニて氣のどくがり【哥】おたよさんどふした。氣が違ッたか。そんな一ッ國が有ルもんか。あきれて舌が廻らねへ。吉兵衛さんを呼に遣るよ。どふでもそれじやァ濟ねへよ【た】ナンノすむのすまねへのと。大屋さんに頼まれて。非戸げへにやァ出めへし。うつちやつて置ねへな。【久】へおんくわに多葉こを吸付て 腹のやてへの雜もつを五ぞうへおちつけ能く聞ヶよおれにてへしてハ。どふもそふいふ事ハ。いわれねへはづだが。塩屋のやうでも。うそでねへ。暮のしかけに正月の。仕めへも人方多くさせ。節句〳〵ハじやうせきで。二季のすもふに二度の月。春顏見世の兩芝居。山ひらきからぼたんのさかり。一年置の祭の棧敷。山王の祭禮には。艛で見せた。一石橋。時ゝ替るまへだれも結までうぬが物好かせ。二人の廻しの心附ヶ。外屋の普請能く出來た。ゑびすの宮へ行てへの。又かゝさんと連立ッて。目ぐろの不動鬼子母神。その日に乘つたかごの代。よく〳〵の時でも有るか。此しゝぎハ石井屋へ遣ッても。壹分より外かしやせん。あつちの帶を引出すに。わづか二分ほとたりやせん。とうぞ跡をと云のこして。夜着で半分かくれる顏。こけが承知で二兩も遣れハ。舌を出

すのも知ッてハ居れど。われがからだのうごく度。外の客にハけちりんでも。まけた㚑のねへ男だ（とうぬぼれと一ッこをしつかりはんぶんに。いざこざをいひちらす）○（扨歸橋へ心願の事有つて。八まんの社だんに通夜しけるに夜ハほの〴〵と明けれバ。ねふらぬ歩へさめにけり）【歸橋】歸（けへ）ッてにばなで。茶づりましよとお定りのからすがカア〳〵。雛ハあすこでコッケッコウ

突當富魂短

東西南北突當富魂短

序

月落烏ないて霜雪天にみつとは慶子が道成寺道成寺の住僧前のわんぱく大廓大盡和田の原八十嶋かけてこぎ出すと先たつものゝ金なれば鐘もしゆもくの當りがらあたるもふしぎあたらぬふしぎと云は此頃世上一統の札員七千五百枚三匁で金百兩とは海老で鯛とか帶で松魚を喰つたかと中〻たとへる事も有まいと寄合ての小田原咄し若も是が當たらかふ云身形でいきななりでこふ云氣取のこく取めと當たらぬさきの杖の工風を安に西奴なる人契情のこんたんになぞらえとんたんまんたんのきてんにばんた

ん大通の仕こなしを集め金百疋であたい千金の一の富とぐつともてたるいきさつから第二の富の裏約束三の富の床花迄東西南北の遊里にたとへしは中〳〵およぶ所にあらずと松の位の大夫を見てかな岡もときに筆を捨る

安永辛丑春陽

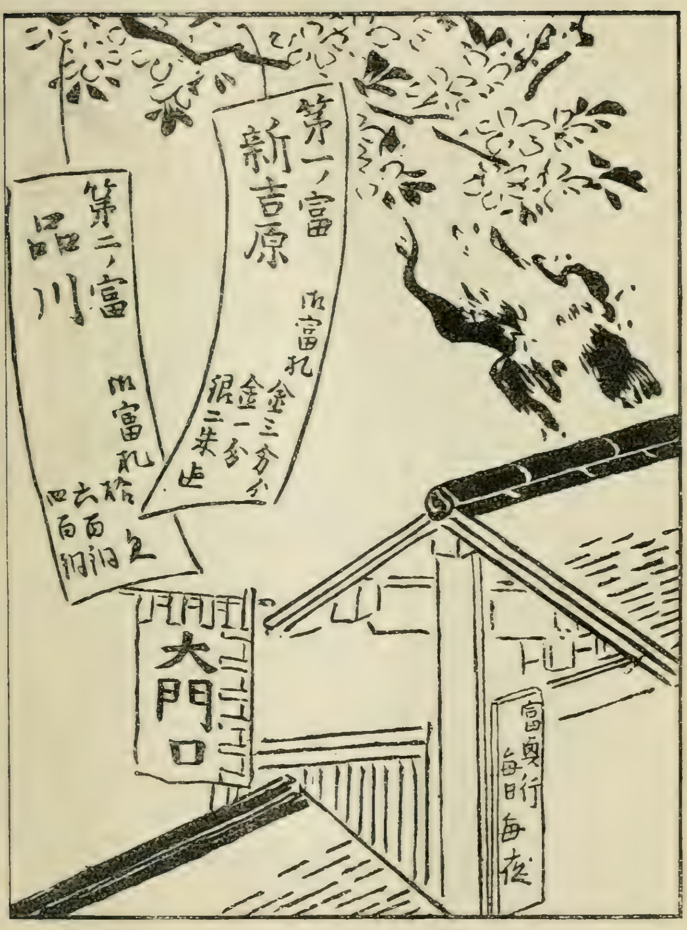
南陀伽紫蘭

見一無しやう

さつきふに記ス

吉原の遊び

【第一】よしはらの春の夕暮來て見れバ入相の鐘より花ぞ咲けりといふにいハれぬ仲の町の夕げしき花の顔ばせたんくわの口びる美服をつくしらんじやの香ほりふん〳〵たりまことに天人のよふごうもかくやとうたがわる去ル兩替屋の白鼠頭も白キ親父殿が老後のおもひ出と初て吉原へ來られしが爰にもひいな店があるかといハれしももつともなるべしさて女郎の眞の客といふハなじみかさなりて床の内のこんたんより大の極りとなりさて月ごとの紋日物日は外の客へ賣付て諸事物入のなきよふに工風をしおもわぬふいの床花ハぬしの方から仕舞金をよこしなんしたとやり手若ィ者の手前をつくろひ内證へもためになるきやくのやうにいひふらしおりにふれてハ仲の町の夕ぐれ茶屋の二かいのちよんの間にてすいがへし内へハしげ〳〵よびもせぬよふに心を付ヶもしあいそうもつきやうかとはらのたつのもくるしひもしらさぬよふにじやうをたて年〻をつとめた其上でふうふにならんをたのしみに夜毎にかわる枕のしんぼうこれらハ女郎の眞の客一チの富のあたりハこんな事なるべし父上への客といふも随分こゝろのじやうをうつし名代の夜も座敷をあけぬ手くだをめぐらし紋日物日を御きげんよくおうけなさるゝよふに


第一ノ富
新吉原
富札
第二ノ富
品川
富札
大門口
富興行毎日毎夜

第三ノ富
新宿
此富札
第四ノ富
深川
此富札
第五ノ富
悟開五拾番の突當

取あつかひたいこまつしや茶屋指宿へもそれ〳〵に心を付まことにくがいほどかなしきものハなし近頃さる何屋の女郎左右の小指をきりいつれの客へおくりしか程なく夜具の敷キぞめ又來る春にしんぞうをいだせしよしこれらハうわべの客拾番目の節のあたりこんな事なるべし取ても何の足にもならずさて初會なぞハ客の方に氣味合ィ有ルべし先ッ口から出るしやれ言葉をつゝしみかりにも女郎の穴いわす諸事おふよふにつれ行し茶屋船宿にもものかづなく女郎も氣のつまらぬよふに落しはなしなぞして座敷の内に心を付さすれば女郎もこゝろわろきものにもなければ引ヶ四ッも打ちとあちらへと若者が床を納むれバ茶屋指宿ハ明朝おむかいにと座敷をたち【茶や】おいらんおやすミなされませ【女郎】あにさんおさらばへと女郎ハしんぞうをよひひまなざしきへ入ル客ハ床へいりすこしよこなぞになり筐にからまりもすそへまりがと松の内かぶろ來りてばからしひ何かいひなんすおいらんが今御出なんすからたばこでもあがりなんしと二ッ三ッはなしの所へ廊下ばた〳〵にて入來り【女郎】モゥお休ミなんしたかといふかぶろたばこを付ヶてだす【女郎】ふた口ほど引キもふいつてねや【禿】アィそんならお休なんしとつぎの間へたつ【女郎】今夜はきつうさむうありんす□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□となり座敷の三味せんも花位の事なるべしさてこちらのきやくは初會なれど

も女郎の仕うちハ一チの富の袖のあたりこんな事なるべし

品川の遊び

【第二】しゆんせう一刻あたい千金と南州のにぎわひ西に御殿山の花ざかり東にまん〳〵たる海上を見はらし帆かけ船の風景に一酒の興をもよふし美なる女郎をあつめさいつおさへつお手もとと女郎も座敷のとりまハし呑ものまぬも其夜のこんたんのはじまりなるべしさて女郎にまことあればきやくにも誠あるか三嶋こよミのみの數あいし其夜ハはなしもなくあハぬ其夜のはなしたらけをみにかきたとひ手鍋をさげてもと髮きりゆび切ッ入レぼくろも人目にたゝぬゆびのまた人のはなしはうわのそらに聞なし廊下の音にハきゝ耳たてちよつと見せまでかけ出たり紋日物日ハ風を引キわれハつゝむとおもへどもほにあらわれしかぜひもなくはをり男に氣を付られついにハ女郎もくらがへの身となれバ客もだいのもふせんとなつてもすへハかわらぬとたがひに思ひおもわるゝなぞこれらハ貳の富のあたりこんな事なるべし又女郎も初會にてもどふぞあのきやくをと思ふきやく樂ハあしとをく思ハぬきやくのしげ〳〵と高繩よりも十八町いきをきつて客の力さん御出なさつたと女郎へしらせ若ィものハ客人をつれ見とをしへ行ク【客】

ふけうの顔色にて今夜ハさしてゐるかといふ【若者】アイおわるくござりますといふ所へ名代のしんぞうきたりてあねさんがおつしやりやすよふ御出なさんしたわたくしもちよつと參りたふ思ひやすがとふも座敷があけにくいゆへのちほど御目にかゝりやせうとおつしやりやすといへば【客】どふでもかつてにしたがェァとむせうにさしきをにらミまわしなんだか今夜ハおもしろくねェそれげい者の四五人もよんでこいとしんぞうのむだもかまわず茶屋へいゝ付ヶそれからせかいが酒となり梅や三ナ九で／＼と見せも引ヶれバサア御休ミ遊とげい者も茶屋も早〻にしてかへる客ハ廻り座敷のはださむくねァられもせぬ□□□女郎ハなしみなればしやう事なしにモゥねなんしたかと床のわきにすわる【客】ものもいわずさらバかゑらんと帶なぞをしめなをせバ【女郎】しらぬ顔におさだまりのたばこを呑ながらモゥ影見せも引ヶやしたから居てもよくばこんやハ居なんしわつちもさき御出なんした時ちよつともまいろうとおもひやしたが山の客衆で一座も大勢どふも座敷があけにくいゆへしんぞう衆へさふ申て上ヶやしたわるく思ひなんすなといへバ【客】だいのあつくなつてなんだ山のいもめらばかりがだいじかおいらも貴ゐにあわんとよふ／＼今夜參りしにちよつとも座敷へ顔もおだしなされず今じぶん御出被遊なんのおもしろくもなんともねァはやく歸りねァと門がしまれバはいられぬとたつたり居たりひ

とり狂言女郎はなんにもいわずそんならかつてにしなんしとしやうじひつしやり又おくふかく入にけりこれらハなんでも一ばんと思ひつめたるたのしみ花にもならず歸りしハこんな事なるべし又女郎はあじな所におもしろき心もあるものかさる何屋の女郎大の極りの色容あり此色男の御面相をたづぬるに顔ハゆつを割らずに其儘手あしハ山のこけ猿といふやうな此男に女郎は何屋の何某なり友ほうばいげいしやまでもどふもわからぬ色事とうハさのミ云しがこゝろやすきげいしや此女郎の座敷へ出しかよきおりからありしゆへモシおまへハとんだおもひ付の色事をなさりやす女郎かいの川どめあるまいしあんな男と色事とハねつからわかりやせんとげいしやもしんになつてきけバ「女郎」モシ鯛やひらめハ毎日たべあきていやすからくさやのひものにちやづけめしといふところもたまさかハさつはりとしてようござりやすといへバげいしやも手をうつて誠に女郎衆の心いきかうありたきものとかんしんせしよしかういふ女郎にあたるハ二の富のあたりなれどもおしいかなたまさかハさつはりとしてよいとあれば二の富の袖のあたりこんな事なるべし

新宿の遊び

【第三】春のはじめの春駒なんぞゆめに見てさへよいとや申實西州のにぎわひ外面ハ春ごまのいなゝき伊達をならべし大木戸からヤッサコリャサの駕のこゑ八王寺の大じんハ松の内を仕舞われとをし馬の初ッのり西の國で百万石も町人も金を遣わん捨所なり所かハれバ品かわるとやら吉原のおいらん新宿のあねさんと言葉かわれどけいせいの氣どりさしてかハる事なし女郎ハうり物なれどもどなたへも此とをりといふにハあらず其客により上中下三段の氣味合あるべし最初なじミうすき内ハさしてかわりし仕うちなきものなれどもちよとせし事よりおもしみがつきのちにハげいしやもじやまになりさむい共夜はほたて貝のたのしみ紋日物日のあらひ髮せつないはなしも打あけてたがいに心のかぎりなくつのがはへたりはやしたりかのかんしやくのおこるのもふかいゐにしならんこれらハ三の富のあたりこんな事成へし又うわ氣の客なぞハ女郎も手くだのしよき物かまづ初會にても氣をかねるせわもなくなじミかさなりてハなを／＼友ほうばいのよふに心やすくたま／＼客もしんのはなしをすれバ何かいゝなんすと茶とやらにしてしまい客も共氣に遊びにきて氣をつめるハ大のそんなりとむしやうやたらにしやれのめせば女郎もなァるほどゝてうしをあハせよくもせずわるくもせずむしやうにむだをかきちらしおくりしみは枕紙の用にたちくるならバきなんしいやならバよしにしなんしと氣さんじなる遊びこ

れらハ花の袖のあたりこんな事なるべしさて女郎ハ客に買れ客ハ女郎にかわるゝ心もちにてむりなるせりふ付ヶをいわず諸事の遊ひに氣取ッあるべしさすれバ女郎も夜毎にかわる初會の客人より氣にいらぬハりやうけんしてなじミがましとおもふものなれバさしてあしくも取あつかわぬことなりあるいハ松の内月見五節句うつりがへ心あての客人ハ居候となり青梅の客衆ハ來月でなければ御出なさりませぬと茶屋もきのどくそうないゝわけどうせうのふでもはじまらねば本の女郎の最明寺先へも跡へもしよふのなき事けいせいの身にまゝある事なれどもこふいふ時ハ客も七難そくめつと面工をしあすの節句の間をあわすなぞ女郎もまことにぬしはじつのある客衆と心におもへばだん／＼のりの來る物にてのちにハ遊びもおもしろくなる事これらハ三ノ富の袖のあたりこんな事なるべし

深川の遊び

【第四】春は花見し富ヶ岡深川八幡山の境内左右に二軒茶屋のむま事あり門前にハいきなる茶屋ののきをならべ惠方参りの駒下駄ハぜいしやとも見へ娘とも女郎なりける形すがたいかなる仙人もつうをうしない塩賣になられしも尤なるべしさて女郎の仕うち客の取ッまハし諸事言葉

づかひもとうせいいきなるはやり事をもちゆる事此里の風儀（ふうぎ）にして他國にはなき事なりまつ初會の客なぞはそれ〳〵の名ざしにて女郎をよび茶屋の娘は座敷をつとめさて女郎きたりすいた客とおもへはさかづきはそこ〳〵にして仕かけすがたをねまきに着かへつぎの間のこたつにもあたらず座敷へ來り客のきせるてたばこをのミげいしや衆をよびなさるなら女げいしやはよしねァおとこげいしやにしなさいとそれも太夫の名ざしはせずよひにやり又さかづきがまはれはおきさんおまへ一ッのミなさつたらわつちもこれであをいつきりのミやんしよと酒も一トしほおもしろく客もなんだかおもしろくコレおきぼうあしたはミんなと淺草の浮瀨で一ッのミやしようといへば【女郎】わつちはいやおまへばかり御出なさりやし此ごろ丁の女郎衆か浮瀨でのミなつたとおまへもそれであがりやしそして花さまとかいふ女郎衆か貝の紀（き）ろくとやらを書（かき）なさつたと壹枚守（まもり）にもらつて御いでとよつほと酒もまはつてきマァちつと御やすミと娘女が座敷をかたつくればバ女郎はすぐに□へまはりばんきせるのすい付ヶたばこ夜着の袖から紋付キの□を出しおまへはどふか見たよふだたしか此中山の松本に江戸けいしやをつれて來ておくの座敷にさわいで居なさつたはおまへにちがいはごさんすまいとはなしの出來るてうしになりひよくれんりはさしむかいの事あるへし娘來りて□□□そとからモシとふいたしやしようといへば【客】むかひな

ら直してやれ【女郎】今夜はかへさぬとたかいによつほどのりが付キたん〳〵なじみかさなりて三日あれねれ船宿までむかいに來自ばらをきつてみやげをもちあしたれお宿と芝居へいきやすから何やまで來なんしと□□□□□□□□□□□□これらは四の富のあたりこんな事成ルへし又此里の女郎ほどいそがしきはなしけふは何屋の晝じまいと身ごしらへなぞする内もはや朝參りの歸りかけちよつと一ト切リぬすみに出晝じまい宿きたりごふく屋の出ばんなれば口くれかぎりに早〳〵かへりそれからよいとまりの茶屋へ行けべよひ立の客衆がどふぞおまへをよびたいといゝなさるから客衆の來る迄さかづきばかりも座敷へと茶屋の娘や舟宿にたのまれしやう事なしに出ル事毎ばんの事なればなか〳〵はやる女郎なぞは色事のひまはなきよふなれどもずいぶんこんたんのある事なりまづ一とをりの客はむしやうにさわくをだいやとすれべ女郎も共氣にけいしやあいてにちんふんかんのうわさはなし□へまはれば天井いたのふしをながめ仁王門を見るよふに紙をかんでてんじやうへふき付ケあれ付キやしたわたしがねがひはかないやすとしつかい客をバおさきにしていろ男の辻うらサア山へいきやせうと娘女を引キつれ二軒茶屋でおごらせこれからわつちもおくつていきやしようとかへらふともいわぬ客をおうじやうづくめに家根ふにのせ舟宿のさん橋からわつちはすぐに歸りやすと娘女をあいてにねころんでの芝

居ばなし舟頭どん一トツのまつしやい道で四ッをきくやうにしづかにたのミやすと客をべさう〳〵おい出して歸りハや、どふりの氣になつてお遊びなさるゝなぞこれらハ何のあたりと名の付よふもなけれど花の袖の孫そでのあたりこんな事なるべし

悟開き し五拾目の突留

【第五】春夏秋冬萬木千草も一時に花さけりと女郎かいほどおもしろき事實此上やあるべきと四季折〳〵の大紋日もけだいなく仕舞わるれハ金銀の山を持テ正月ハ廓上下で地主どのもつ いにハ紙子仕立の身となるも皆此道よりはじまれる事なりあるいハ女郎の身あがりにて金銀を遣ハせすすへハふうふになりとげても大かたハわが親よりゆづられし家屋しきをうしない女郎もつまらぬ身となれバくるをも夜ぬけにし一生日かげものにて裏家すミの身となるものせけんにまゝ有ならいなればよく〳〵かんがへたまふべし又すいといふものハ女郎のかいよふ當世のいきなふうぞくしやれ言葉なぞいふものをいふにハあらずいづれ女郎かいハ金銀を湯水のごとく遣ハねバおもしろくなきものとおもひ今迄つくせしゑようゑいぐわハ夢の夜のたのしミとあきらめ黑仕立も伊勢嶋にもめんうらとへんじ小ぎくのかミもちりがミにて間に合せ朝夕そろばん

を手にはなさづ帳面をバむねの内にたゝミ誤而改ルニ勿レ憚と我一しんよりさとりをひらきずいぶん家業をたいせつに元日なれバ來る大晦日の事に工夫をめぐらし諸事お情におこたる事なきうへハ子孫はんじやうたがひあるべからず是誠に五十番目の惣くわんぢく大通大醉人とハこんな事なるべしと初春の御祝儀と目度そんじらく〳〵と

作者

西奴戯作

にゃんのまだ

序

やるぞ白帋文と讀。お手が鳴るなら銚子とさとれとは。ずつとむかしの事にて當世ハ按摩ハヒイと吹き。夜鷹蕎麥ハ。チリヽン〳〵とならし。人を呼ぶに。手を叩かずに疊をたゝく國有り。其往古。此玉より。一角せんにんと云もの。替玉といふ名玉をもち來る。此國の明徳は第一美女是をもつ時は。たちまち悪女となる事。神變ふしぎの名玉也。此仙人流布する國を号してヲカバ國と云爰にニヤン國といふ有り。五洲に別れり。鰹ぶし洲。六軒洲。土手側洲。ゴン洲と有り。中に都なる一目洲のあらましを。明ちかき夜の茶におかされて。寐もやらず。

にやんの事だ　二

硯(すゞり)の海に筆をひたして。紙のついゑをいとひて。反故(はうご)のうらへ書しを。我朋(わがとも)來りて。くりかへし。て是はニヤンノコトダ。ニヤンダカ分(わか)らぬ。ニヤンノおもしろくも。ニヤントモなひといふをすぐに。ニヤンノコトダと。題すると云ゝ

うしのとし
あつき日

止動堂
馬呑述

にやんの事だ

夏の夜は。まだ宵やミもいつしかに。はつかあまりのほしの火の。それかあらぬか兩國の。ともし照そふ賑(にぎハ)ひハ。實(げに)豐國のしるしかやさんげ〳〵のこゑ天にひゞき。あわ雪〳〵の聲耳をつらぬき玉屋がポンも南京操(なんきんあやつり)の忠臣くらのてつほう場へてうど合ひしもおかし。下戸ハいくよ餅を天下一と讃(たゝ)れハ上戸ハうろ〳〵船の上もうろ白(はく)。燗酒(かんざけ)でんがくの美味(びミ)を尊とむたまご〳〵の聲長くよび。水ハひやつこひ氷水とさもいさぎよく呼ぶ西瓜ハほんなれ瓜ハ本用てさとらせ。四ッ目屋ハあんどうを墨(すミ)にかくし。水茶屋の行燈(あんどう)ハ晝のくをもつてさいしく。何れ繁榮(はんゑい)いふへくもなし。むさし下總の境なる長橋(きやう)。瀨田にもやわかおとらじと。いわん方なき風景の棟をならへし御舟藏きわに見へたる橋の名ハ。一ッ目とこそ知られたり。橋きわへやねふねさひしく付く【涼風】としのころ三十ばかり。い實そめのゆかたにもへきはかたの帶。銀くさりのたばこ入くろのろのはおりをたゝミ。手にもち。片手ニてすそをまくり。ひぢりめんのふんどし。見せたそうに出ル【むすこ】まだ十八九と見へ髮もずいぶんにうわにひたいもぬかすびんまつすぐにかき。越後の白立しまのかたびら。是も黒ろのはおりニてわきざしりつはに。足袋ハ白のつゝ長なり【傳六(でんろく)】是ハかミと見へ。大名しまのゆかた。とゞ色しゆすの帶。はおりハなしと見へ。三人連ニて舟を出る。【次郎八(せんとう)】舟をまつて居やしやうかねェ。【傳】だんなふねハとういたしませう【涼】ナニけへさつせェ【傳】

コレ舟しう御大義〳〵ィ、とさ。かへらつせェよ。〔次郎〕アィだんな御きげんよふ。〔涼〕てェぎ〳〵。コレ幸ぼう今夜ハちつとおそくつても內ハいゝかの〔幸二郎〕ヘィずいぶんよふ△⧄。〔涼〕花火がおそいといわつしやい。きさまハマァ。おら今きさまを連て。どけへ行ともふ。〔幸〕へ、ン〔涼〕あてゝ見な〔傳〕ナニとうから御そんしのゐんまさ。〔幸〕大かたうなぎといふ所で△ませう〔涼〕ナニうなぎなんざァ。ねんきやろうが盆と正月の宿入の時くふもんた。マァおれか行く所へあいんて見さつしやい。貴さまが好な。長うたや。ちりからの下方より又おもしろひ。ひよッと喰らひこんだらたまるめェ。やしをや。おふくろのいけんでも。とまるめへ今ッから。おれが仕こんだら。あつばれ大通になろうといろ／＼高まんだいふうち三しう屋のまへに來る傳六ハ先へかけぬけ〔傳〕たんなか お出なさつたよ。〔三州屋下女さえ〕ヲヤ傳さん〔傳〕ナゼおやだ子だものを。〔涼〕色男ちよつと爰へおより。〔幸〕ェ、爰かへとはいる〔三しうや女房〕涼風さん今晩ハてへぶはやう△⧄ねさつきおはまさんがおつしやるにやァなにか御用で。四ッ過においでなさり⧅やうにおつしやりンしたァノお子も七ッ過から來てまつておいでなさりましたが。今しがたおまんまに。おかへりなさりました。〔涼〕ホンニづつうハよふ△⧅か〔女ほう〕ヘィ有がたう△⧅ちつとよふ△⧅とそんし⧅とまたくれかたから惡ふ△⧅〔涼〕夜の仕事をチット

おたしなミ【女ほう】ソリヤァモウ十ねんほど。あとの事で△⧄【三人】サア〳〵と二かいへ上る【さえ】おもてへ幸次郎にむかひモシあなたおこしのものを気を付られ【幸】アイとぬいてさへにわたす【凉】どこだ〳〵。是ハとんだまごつきだ【さ】お客で△⧄から六畳へ御出なさりませ【凉】とんだあつかろうぜェ【さ】ナニとんだ凉しふ△⧄あなたが御出なされ⧄とつて風までがまつておりました【凉】ソリヤありがてへハとすわるとたばこ盆出ル【幸】此あつちらにおたびといふ女郎屋が△⧄ねいつか角力の時めへりやしたがきたねへ所で△⧄アリヤァ南鐐かねェ【凉】ナニ四六さノウ傳こう【傳】そのやうな事ならいつても御たづね候へ我らあすこ通さ。四六とも四六とも大四六さ【幸】ナゼ四六といふね【傳】ハテ晝間が四百夜が六百で四六さナントきつるか〳〵【幸】なるほどそれでしれました此うちさへさかづき硯ふたてうし吸ものどんぶり大ひら鉢さかないろ〳〵出す【傳】コレおさえぼう地色のうがり神めとしゃたたゝく【さ】あんまりたゝきなせへすな。本ンなれじやァ有るめへしといひながら凉風がたばこ入をとつて番きせるへつぎそうにして銀のくさりを見てほしく成るみをふくミ【さ】モシ凉風さんこのくさりをおくんなんしョあんまりむしがいゝとうぬもよく心と思ひしが舌ヲ出ス凉もいわぬ内ニ先からいふ故せう事なしニ【凉】ム、やろう【さ】ほんにかへ。モシ此子くさりハほんの銀かへ【凉】ぶしつけな人のものを。ほんのさ遣るが何ンにするよ【さ】ほんにおくんなんし。かんざしにしやす【凉】たばこ入にこまる【さ】紙に包ておきなんし【凉】女郎衆でハ有るめへし【さ】是ハきつるあなねうさァねへ【傳】サア〳〵

一ッ呑のすくねと出やうか【さ】モシ涼風さんアノお連さんハどなたに致しましやうね【涼】中どしまさ／＼コレ傳こうアノ先月から出る御しゆでんを見たかとんだ物だのアレを買ハつしやい【傳】ごしゆわかりやす一トロめいりやしやう【涼】ハァなんとかいつたッけノゥ【さ】何かへおふさゐッかへアノ子を傳さんにかへ。およしなんし。ひよつとしれるとまた是／＼で。どうもなりますまい。とあたまへゆびを二本あてゝ角のきどり【涼】フゥ夫ハとんだ事だのふ【さ】なんでもお花さんが傳なら命でもさ【傳】エヽなんのアノすべたが寐ると土左衛門のやうだ。【幸】モシさつきの柳橋の土左ハよつほどいゝにほひで△ましたね といふ時涼風が相かたおはま有の小もんのゆかたに袖口をもへぎのたいはく二こひよくござのやうに千鳥かけにかゞりとび色の紋びろうとの帯ニて洗髪をわらニて結て来る【はま】傳さんきのふハよくいつて来るとつてうそをつきなすつたのふ。みを書てまつて居やした【傳】そんならそふいゝなされバいゝに。おらァ又。只の事たとおもつた【は】今朝喜平どんがぬしの所へ行くから。やりやした。おかたじけよ と幸にむかひ ぬしハよふおいてなんした。おさえどんぬしのハだれだへ【さ】まだしれやせんとなたにしやしよふね。といひながら下へおりながら／＼縁札をもつてくるいろ／＼酒事有り【さ】傳さん此うちで御目きゝをと出す【傳】フゥンこいつハぬしにハ若すぎる。是もいけずァ、どれにしやうな【幸】氣の毒そふなかほ付にてまじになり 何ンでもよふ△▢【傳】コレ／＼お梅さんがよかろう／＼【さ】アィあの子がよう△ませうそんなら と二階から大きな聲で 喜八どんお梅さ

んをかつて來さつしやいよ とがらく札を下へほうりなげる【喜八】アイ引【は】傳さんけさも湯でいつそおはなさんが。ぬしの事で。ごしんをもんでいなさつたッけよ【凉】ヤハアそれどつからもこッからも。チツトあやかりてへの。【は】その盃ハどうしたのだェわつちがとり上ヶやしよふ。なんだかいつそ。くろうになる事が有るから。じれつてへ。此すいものわんの。ふたでのまふ。傳さん。おりよげへといふ所と 二三盃のむへのちにむしんをいふ心いきと見へたりおそるべしくあとを幸へさす【は】あげんしやふ凉風さん。ぬしれよく。それ吉藏さんに似て居なんすね。【凉】ム、お安さんの色か【は】アイまた此ごろ。かぶつたとさ、それでお安さんが。日にハ幾たびうらやさんさうらやましひのふ。と紙をむしやうにかミ天井へふきつける【お梅】半げんぶくきれいにそら色ちりめんのひとへもの大名しまのおびお定りの通りかべきわに居うすくらき方へかほをむける【凉】お梅さんちよつとあげ巾やしやう【さ】多葉粉をすひつけて。サア。此内幸次郎と盃事すむお梅へしじうまじで居る【さ】お梅さんめしかへてお出 おむめハ下へ行めしたくひ。小べんなぞする。二かいも此うちめしすむ。おはまへなじミ故二かいニてくふ【さ】傳さんお花さんが。今に來なさるとさ。おとなしくしてまつて御出。清水で晝から買こみで。もう客人ハ。けへッたそうだが。つれ衆があとで酒がながくつて。とうも逃にくひとさ。さつき清水から。お吉どんが來て。そういつてくれろとさ【は】そうだろうよ。大かたお國さんの客の。しんかうさんか來たろう。いちど一座に出たが。モウくむりな酒とつちやァ。ねェよ。あの子もはやく來たかろうけれとそこがあけにくかろう。今に

明きやしやうから。しんぼうしなんしよ。色男にハマァ何がなる【涼】ホンニ此色男を寐したひもんだ【さ】ソンナラもうお床に致しませふ【傳】是からハひとりぼつちだ とあ。くぜ なんまミだぶ〳〵【さ】ヤレ〳〵後しやうねがひだね【傳】後生よりやァどじやうで一ッぺへ呑てへ【さ】サア〳〵ミなさんおやすミなんし

口上

扨是迄ハいつものむだをならへましたで△▨只今迄所〻岡場所にいたる迄ことゞ〵く本に△▨れど。ニヤンの事ハ△ませぬ故一寸御覽にいれ▨る近年芝居も役者方。見物が御功者。しやれ本も書人より見人か上手ニて。草双紙も桃太郎より大通と子供衆も今から御けいこなされたら。後にハあつはれ親の家をもつぶし。叅まじくと末たのもしく存▨る。此本の趣御覽のうへにて。床の内三人の仕うちを。御工夫なされませ。かんじんの所いかゞ△ませうや。御すいもじと

ねかひ上ヶら〳〵

めてたくかしく

跋

大通。一寸之間ニ遊バス。儉約何ンゾ。通人ンノ心ヲ知ランヤ。青樓トテモ怖ルベカラズ。猫トテモアナトルベカラズ。猫化シテ内儀ト成。客化シテ毛氈ト成トハ。名言ナラズヤ。戯言ヲ書タル小冊ヲ。書林來ツテ。是ヲ櫻木ニチリハメント言フ。予アマリ古キユヘアタヘジト言。書林サニアラズ。當時大通ノ世ノ中。松魚モ初鰹ト言ヘバ其味美ナリ。蕎麥モ。新蕎麥ト言ニハシカズ。春ゴトニ。新版カハリマシタ。道中双六福神双六トヨベバ。調ル人有リ。コレモ新版トイフヲチカラニ世ニ弘メントイフ。予成ホドソレモソウカト與ヘヌ

にやんの事だ

于時

天明元丑初夏

止動堂散人

後篇　近刻

戀津者能比（こひつハいひ）　全

にやんの事だ

三部假名語

自序

世の諺に三ン人寄れは文珠の智恵とぬれ事師の名人を三ン人寄せたは作者の智恵爰を路考が三ン人前獨の知恵に唐土天竺文珠の淨土も大評判其評判の驥尾に付き智恵の嚢を叩見れどももとより仕込ぬ智恵なれば出ぬもことわりさ□□てもおもひ付たが一生の智恵と所まだらに書付ればあやしうも小册となりしを智恵なしの書林にあたふるのミ

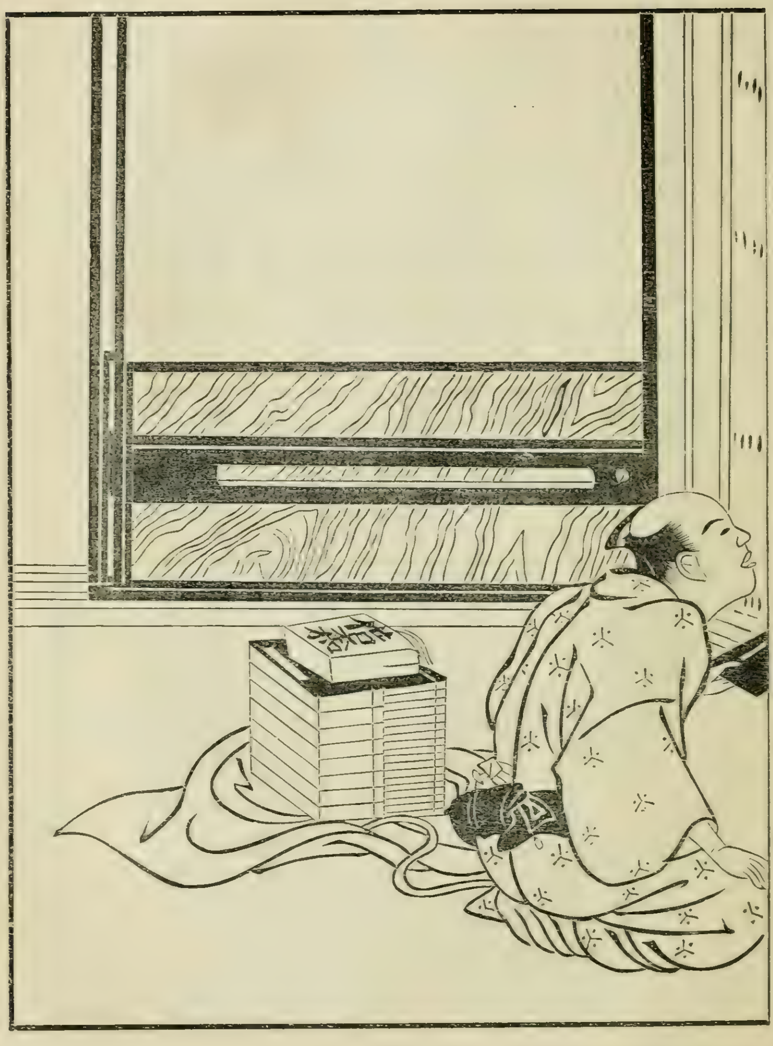
閣連坊誌

そらあきらけく

風待月

三都假名話

東西〳〵古めかしけれど一寸申上ます扨御當地芝居の儀も三ヶ芝居ともはる狂言も近日よりとちらしまで賣歩行中村座ハ三升が工藤こちらでハ高麗やがするのと御見物のこゝろハ見ぬさきの評言とり〴〵なりしが正月八日夜にはからずも兩芝居ハ勿論操座ともに祝融神のいかりに破る時節到來とハいゝながら座元頭取共より諸見物様方のおちからおとしャレ濱村屋ハどこにかり宅したの成田やハ殘りしのととり〳〵の評判是でハ芝居も今年中にハ建まいと芝のはてから神田の邊までいたいけの御方迄がまゝごとの噂ばなしにもありしに御當地の難有さハあんじるより建がはやいとやらモウ肥前座ハ柱立棟木ヲ車で引立るとソリヤ何日からはじめるといふ間もなく中の座にて　揃ひのはつぴにて毎日〳〵と引材木サア　操兩座共夜を日についでカチ〳〵ゴリ〳〵と引キ切やら茶や〳〵の普請やら追つゞいて中村座にてもどふづきがはじまつたハけふハうしがなん本來たハとうれいあれバ悅び來たるとかや江戸中こぞつての大評判もふちらしが出たハ番付を賣て來たといふ是ハいづれ様方承知之助の所也扨市村座ハしづまりかへりしありさまはじめハ



いろ〳〵の噂もありどふゆこふとおもひの外むかしの普請に見増程の出來狂言ハなんであらふとおもひしに御祝儀の曾我に三日替りの櫻田がこんたんほんにやれ出ぬうちハどふいこふやらとおもひのほか四月廿五日初日にて大評判近年にない大當りサア此月中ハ棧敷ハとれぬハの四ッから過ハ這られぬと明がらすと一ッ所に切落のガア〳〵けふハおなつ清十郎じやあすハおはん長右衛門じやと其一チ座三日のうちにもひいきの評判がつひて來ると道具立の唐紙までが氣に入り一チ日も休日なしに土用へかけて六月三日首尾克舞納め致されしハ大手柄〳〵座元頭取ハ勿論おもだちし役者ハ鼻の先がグヒン〳〵と動きませふ誠ニ大器ハおそくなるとやらの金言か委き事ハ追〳〵の評判記にゆづりまして一寸三日替りの所を評いたしませふ扨どれをこふこれをとふと申様もなし第一目前の當りが誠にきつすいの大手柄なり發端櫻田の方寸より出し事なれバ先ッ第一ニお手柄〳〵扨路考丈のお骨折三役とも心入の替りしハ急度御工夫ありし事と見へます先ッおなつの妓風どふも〳〵所作の氣持ハおどろき入りました狂人の時ハ轉動の目遣ひといゝ心持正氣付キしよりのとりなり眞の藝〳〵おはなの嫁風外ニハないと申ますとりわけ此友丈との出合にちらばいし餅を拾るゝ氣持きつとこゝろ入レの所請取ましたおはんの娘風ハ是また仕手ハなし長右ヱ門に名殘をおしミ書置をのこし長右ヱ門様とのせりふで見物がおしいものじ

やころすかと眞におもひます狂言綺語とハ申ながら其儘むかしのおはんもあんな娘かとおもふやうに見へるのがしん底から藝の移りし證據也承れハ此人ハ畫も御上達のよし近來元矢倉先生の筆法御執心のよし粗拜見いたし驚き入りました万事一チ藝より發ルと御心掛ゆへ何もかも出來ませふ是からが太切の所勝ッて兜のとやら兵術ニも業より心術とやら此上隨分〳〵御心掛の氣持肝要〳〵まづ第一が器用はだ〳〵の路考大明神とも譽そふなもの一ッ躰此人を楯にせし狂言ゆへ先へ出しました次第不同ハ御めん〳〵扨錦孝丈此度ハお骨折〳〵大や太郎兵衛も船頭次郎八もお持前の得手もの能いぞ〳〵見物が難有がりますとりわけ長右ヱ門ハ急度請取ました【わる口】なんだかしらぬが儒佛神の三幅對に三升が中ニて孔子も時にあわずと秀靏が右リ弘法も筆の誤リ左リハ高麗やが繪にて凡夫盛んに神たゝりなしといふを書たを見たまだこゝろが【頭取】夫レハともあれ中〳〵こんどの長右ヱ門など一チ厘も云ぶんハござりませぬ此上急度いたしましたおこゝろ入レの藝を侍ます〳〵扨是業丈八百や半兵衛此友丈との御出會面白ィ事〳〵道外の所作ハ御手の物〳〵おはん母の愁歎ハ急度請取ました【わる口】おはんが母にハ少〳〵作りがふけ過たじやないか【頭取】何にもいたせ所作にかゝつてハ當時小手きゝ大和屋の若旦那扨新車丈の清十郎棧敷から天人が切落しへおちます清十郎方第一躰の嘉十郎が出來の親玉じやと

聲がかゝります引競役廻りのお仕合八百屋物のせりふハ櫻田の述のよしるゝと申ます扨此友丈毎度／＼御出情の仕打兎角此人外事ニかゝわらず家業第一との心掛故や追日仕打を見あげますおちよが親病中の氣持八百や後家との實ト惡幸之進ト幸左ヱ門トの實敵心持表裏勘十郎の仕立取廻し此度ハ路考丈ニ續きて大骨折其功顯れ急度請取ました或説に此人ニ扇面を賴しに發句不存と書れしよし虚説ニもせよ氣質の所舞臺同樣の心持家業第一の氣しやう面白ィ／＼と悦びます「おミつ」お門どん是業さへ聞ぺるゝハテ能がげんにしておきな「おこう」おミつどん長右ヱ門を聞なさつたか高麗やのけてハ外にやないよ「ミつ」ヱ、聞たくもねへ是業をのけちやァ外に役者ハ「幸」ないといふのかへソリヤァあんまり一ッ國だひいきでなカァねへでゐへが上手な役者をわるいといつちやァそりやァおめへでもあるめへ「もん」上手といふハ新車がことヤァどこがわるい言て見な「ミつ」ヲヤおもんどんあんまりばか／＼しいわつちらァ是業さへよけりやァ新車でも錦考でも外のやつらにやァかまァしねへ「幸」おめへに言やしねへうつちやつておきねへ「もん」新車をわるいといやァだれでもおれが相手だによ「幸」そりやァおめへばかりじやァねへすいたと思ふ錦孝をくさゝれちやァだまつて居そふな女じやァねへと互に

あらそい聲高になればお局の部やへ聞へけるやら上ハぞうりをかた／＼はき一ッさんにかけて來る「岩瀬」コレ／＼けしからねへなんのこつた爰をばどこだとお

もわつしやる大聲で役者の噺しだまつて聞て居ればほうづもない先ッ第一今度の狂言趣向がどふも呑込ぬいたづら事を三日替り若ィ女や娘子どもに不儀しろとおしへぬばかりそふなふてさへしかねぬ風俗おいらが若ィ時分とハ女の氣質も雲泥のちがひたゞ藝者や遊女の眞似をしたがりこなた衆をはじめとしてじミな風ハ人一ッもない遊女ハ遊女おどり子ハおどり子と其風のあるもの今でハ地ものが女郎か女郎が地ものかどふも作ッがわからない女ハ氏のふて玉の輿お夏やおはんが眞似をすると末にハとんだ事になることゝらあたりで芝居の咄などすると其分ンでハ濟さぬとかミ付られ三ン人ハはなしのひるにしほもなくしよげになつたる折から奥家老佐根森通太夫しづ〳〵と立出コレハ〳〵岩瀬どの先刻からの一チ部始終のこらずあれにて承る女中衆のみだり千萬役者ばなし急度おしかりなされシタガ承れバ狂言の趣向に不儀いたづらをすゝめるなどゝ仰らるゝがお年ばいと云おはつめいなれどもさすがハ婦人ン勸善懲惡の所にお氣が付かぬ當世の人の風俗中〳〵堅ィ事でハ參らぬテヤ芝居〳〵と仰らるれども狂言の趣向ハ忠孝の道を柱とし仁義釋教戀無常に言葉の花を咲せ老若男女に能く近くわかるやうに作る然レとも芝居の作者が人のおしへに狂言ハ作らねども義理が惡けれバ見ン物人が請とらずお夏お千代おはん此三ン人の內にてもおなつハ藝子なり遊びもの也されバ淨瑠璃の文句にも座敷ばかりを言た

てゝ勤るはずの藝子の身情しらずをたてにしてほんにかたいが手がらぞと思ふて居たる其内にふつと見初し四ッ紅葉とかたれバ中〳〵今時の藝者とハ硝子とこんにやく玉程のちがいなり今の藝者の風を見るに哥三味線ハわきにして小金の有そうな客を見立どふやらいやミな見振ッをして焼鼠のわなにかけ押さへてしめる分別ばかり無字と言名ハ名乗レども元來白地ハ賣ッ人もなし夫ともつとも此夏ハよしの丸さへちよんの間の一ト切賣ッをする世の中たとへ寐やうがおきやうがこつちにとんとかまわぬ事此手合ィと一ト口に言ハるゝやうなおなつじやなし貞女の操ハ一ト幕でさらりと譯がわかり申スお千代ハ是とハ事替り急度した夫トもあり親ミ達の差圖にてと上瑠理にもかたれバ死べきはずハなけれども姑の悪と半兵衛が實に命を糸瓜ともおもはぬ所が貞女なり浮世の女に此狂言粉にしてなりとも呑せたし中から下の女房ハ世帯を廻すがやくなれどもそれハ夫トにぶちあづけあたま髮に半日かゝり跡ハうハきの色ばなし若ィ男を呼び集メとふ〳〵夫トを茶にしてのけ扨當世の時行といへバ人より先へこしらへるそれも若いハまだしもなれども年に不足も中むらの秀の字迄を紋に付ヶ或ハ扇子楊枝さしへ役者に頼んで發句を書セあるとあらゆるほうらつを見て居る鼻毛ハ三千丈李白ニあらで氣はつかしいかの風來先生がとんだ噂の評のごとく首筋元トの墨打ハ夢さんぼう氣が付ヵぬか一トとセ牧月が前句の集

に密夫をせぬを女房恩にかけとハさりとハ能ィ思ひつき此位の女房ならバ先ッ今時の貞女なり
扨其外ハ女房旦那下女侍女も壹ッ穴密夫ばかりを主あしらいて下はれての挨拶ハ夫トの鼻毛を見ぬいたけいりやくミぢんも違ひハあるまいかと巨燵へ這入ッて・トロ淨瑠璃語るもどふやら齒がゆひせんぎおはんハやう〳〵十四の年西も東もまだ知らぬ綿の稽古や手習を師匠様のおつしやるにハ女子といふハ一ッ生に夫トといふハ只ひとりふたりとはだをふれるのハ女でないとおしへられ親にも持べき長右ェ門を一ッ生の男と思ひおさなごゝろに貞女の道感ずるも猶あまりありこれらを不儀の中だちと言ハゞ此後貞心を立る女ハ壹リ人も有まじとハ大星がきんげん也今の娘ハ十一二になるとはや氣位ィばかり高くなり衣類の物好キ櫛笄帶はきものにいたるまで只當世のいきをしたがり寄れバさわれバ男の噂ホンニ白石噺じやないがどふぞわたしハたれさんと女夫になつてどふしてと有ルとあらゆるいやミばかり百人一首よりも西川が三ン冊ものを嬉しがり哥がるたよりも何やら覺へらるゝとハさりとハ氣のどく千萬なり奥勤メする女中ハ猶更折節芝居見物して氣をはらすのが上分別それも餘りかうじて來ると役者の最屓にけんくわをおこし跡で面目しだいもなく半季に出るもたわけなり酒落を言ともほどがある女の拳酒茶わん酒こはだの鮓も唐菓子もたいがいにしておくがよし銀の喜世るハ細キをいとわずひわ茶も親

和も大明筋も少しの間にあきが來ル七寶つなぎも外つなぎもむかしにました事ハなし女ハ三ン界に家なしとて何國へ緣を結ぶやら姑がわるいとてお千代がやうに死ぬ氣もあるまい平日のこゝろがけ氣を付ヶ給へと通太夫が眞顏になればお局はじめあまたの女中一チ言もなく閉口すさすがお家の佐根森やとかんぜぬものこそなかりける

天明元年辛丑六月中旬

江戸橋四日市廣小路

書肆　竹川治助

無佗物語

自序

風冷やかにして更行秋をさとり虫の音かれ〳〵にして哀を知る神樂の音を聞てハ神世をしのひ佛書をひらいてハ釋迦如來の噂を言々儒書を見てハ漢土を恨ミ細見をこてハ浮ハ氣となる按摩の聲の一調子高きハ引ヶ過かと氣とり馬の嘶を聞てハ新宿かと行すきふうりんのねをきゝては蕎麥かと先走御月𠮷と言へハ泥龜かうなづき挑灯といへハ釣かねかうなり下駄と言へハ燒味噌とさとるさきをくゞる其早き事光陰尻ㇼをまくッて迯足疾鬼三里の灸をすへ韋駄天ハ本足の馬に乘といへとも追付事あたハざるほとさきをくゞるを大通といふへんちきは先を潜り過て

極月の中はセを賣り松の内に雛を商ひみ月に門松と行過る故何のお茶とふにもならす予また此書をあむ是も何の御茶とふにもならす元よりむだなれハこの書の題号にこまつてむた物語としるすもおかし

天明元初鴈の頃

雲楽山人撰

無陀もの語

通ふ人は唐人也唐さらさを着し唐桟の袴続て唐切レを尊ミ食ものはけんちいん四人詰重角を寄りひだるひ時は唐茄子をくらひ唐眞鍮の薬鑵額ひハ唐犬にして唐鳥を好ミ或は唐様わからぬ詩作唐墨を以て唐帋をつゐやし唐机に寄懸り孔雀の尾を喫で唐木仕立の洒落木を讀ミたゐくつして眠りを催しとろ〳〵とまどろめば友達來ていわくけふ秋草庵といふ所におもしろき出會ありと誘ふ元よりひまなればさらば行ふと夕月ならぬ弓張月やわた黒の裏附を掃庭の切戸に明ヶ暮かわらぬ友水入らずの塩屋噺し舌も足も草臥てむかふを見れハ風雅なる庵りあり内にはさま〳〵の人集れる其粧ひ鼠木戸のなき切落しのごとし友達の案内にまかせやふ〳〵座舗のすみに居る込合事紅葉山の烏のことし其中より黒き衣を着たる僧立出て山伏に向ふていわく汝かたちは僧を眞似るといへとも腰のものを横たへ武士かとおもへハ經文を唱へあたまにはときんを戴き羽ねのなき天狗かと見れば鼻ひきく神道を行ふかと思へば佛道を雜手に水晶の珠數をつまぐりなからねぎをしてやり中にも安珍なぞといへる山伏は清姫をたぶらかすかゝる不埒の身を持ッ

て人を僞り錢を取る事は何の謂ぞや山伏眼をむき出して曰なんじ人を正さんより我罪を糺せ僧笑ていわく忝くも佛法は釋迦如來御身を碎き釋迦娑婆往來八千度草木國土悉皆成佛と說示し三國に渡りし佛法の廣き事汝いまだ知らずや山伏のいわく釋迦の佛法を弘め給ふ事ハ三ッ子も知る所也なんぞ汝に學ぶべきや今佛法盛んなりといへとも寺は死人のはきだめ所也坊主ハ死人の番人にて地獄極樂を說くにおよばす當時武家にても出家を尊敬する事坊主を尊むに非らず祖を祀る事父母在すがごとくすと有れハ先祖の骸を預置く人なれハ麁畧なき爲金銀を送り亭寧に饗す是を坊主ハ己か智識なる故とむしやうに高くとまり坊主天窓のヤニ下り鮮き口を以て經文を唱へ大こくを布袋となして取揚婆々を雇ひ布施物はかご代に飛び法事料は床花となり是何を以て亡者を弔ふや坊主答て曰法事料を以て床花とする人にものを施す也苦界の女郎を喜ばしむるは何よりのくどくならすや施物を駕籠代とすれハかごかき寒夜のつらきを凌き此錢を以て酒を呑殘れるを以て妻子を養ふ是又後生ならすや山伏の曰大黑を置く事ハいかん僧答へていわくそれあぶ蚊に至るまで陰陽交合の道を知らさるへきや釋迦如來も人間の子也既に天竺の婆羅門僧正ハ行基菩薩と契りを成すワれ大こくを布袋にセしが何の誤りぞ山伏また曰ふ小姓を置て痔持にして苦るしませ或は舞臺子芳町湯嶋平川花房町の若衆を買てたのしむも佛道に叶へるや書經にハ顚

童を近づくる事なかれと有る僧のいわく男色を好事は唐土にてハ周の穆王は慈童を愛し彌子瑕賢孟東野が類ひ亦日本にてハ弘法大師渡天砌流酒川の河上にて文珠と契りをこめ給ふ事は諸人知る所也我〱か男色を好事ハ釋迦如來へ對してもなんの憚る事かあらん遲刻よりいろ〱ワれに難題を言懸んと欲すれ共なんじごときに劣るべき僧に非らず重て無下なる論をして恥を掻んより口を結んで座をたてと怒れば山伏赤面して退る傍らに歳の頃三十斗成る男の色あた黒毛貫の跡も薄く濃くほんだ天窓に大ふところ羽織の紐もかゝとでふまへる男進ミ出で僧に円ふていわく坊主さんとんだならべなさるのちよときいた所は通ふらしいが願人坊主が長羽織を着たやうに衣のゆきが長ひとつて當世てもあるめへなんぼ口ヲ叩ても壹文も出る躰じやァねへてへげへにおきなセへおめへわつちを覺へていなさろふおめへセんど吹降の晩にいりや通りで提灯を吹消されてまごつゐて居なさるからワたしも通り懸つたがふセふだから若坊さん何所へ徃なさるといつたれバ地獄で佛といふ聲をしてわつちやァ大雲寺前までいきてへが俄に闇く成て方角がしれねへどふぞおしへてくれろとたのミなさるから土手引出したが何と坊さんおめへは亡者に夫西方は十万億土とやら云て引導をわたして遣りなさるがさりとは心もとなへ不斷歩行道でさへ提灯が消るとまごつきながら死だ人に道を敎て遣るとハあきれが股引で禮に來るおめ

へも死だ者を救ふといつても便ぎのねへおもしろくねへ商賣だ夫より其天窓を川ひて醫者に成て生て居る人を殺すほふが道が近ひ傷寒論でも少と見て古法家と洒落なせへ石膏が芒消の類ひで不生に下して能くいゝとしつかりとしめる殺た所が藥禮は取る損のねへあきねへだなんでも當時時花ものは醫者と豐後節だ其袈裟とやら仁王の指の輪を見るやうな丸ひ鐵ものもやめて長羽織と洒落なせへぼふず顏をしかめていわく汝不禮とや云ん我に寺をひらゐて醫者になれとは過言なり己は何所の馬の骨かしれぬ身分にて我と言葉をかわす事穢らわしや似田山笑て曰馬の骨とはなんの事だ壹合八文で賣る八百屋の安葛だとおもやァおるかうぬがさきから有難がる釋迦如來が第一おれが氣にくわねへあいつが噓つきの根元だねへもしねへ地獄極樂の繪圖を畫て婆ミァめらをだます本にあれが狂言を書くといふものだにうその尻が割ると法便だの小便だのといゝてへまゝの事をぬかしおる釋迦の弟子の達摩大師こいつも大たわけ座禪をする迚うぬが尻の腐れるもしらねへ大べらぼうと得手もの〻惡躰の卷物に坊主少しひるんで見へける處に年頃なる醫者ずつと出て申けるは最前より御兩所の爭ひを聞く所人の生死にとんじやくなく藥禮をさへ取れば能とあれども夫は木藥屋のする處也醫術れかたじけなくも神農より傳へて世々に名人あり末世といへども醫術盛んなるか故に病人百人のうちに死するものは壹人か貳人是爭れ

ぬ所也纔三ッの指を以て三部の脈を論んじ病の虚實を知る藥にて義中する故に其やまひを治後制家も古法家も爰におゐて二ッ無しと語れハ末坐より占者出で曰貴殿の言葉のことくにいけば醫者は頼母敷ものなれども貴殿の匕先にて死するもの我算ふるに少しならずなま兵法大怪我の元とは是なるべし汝書もひらけずして讀るふふをして脈を取り外邪くらゐは知ると雖病の虚實を知ら不藥をあとふ病家にても數日用ひて其詮なければ轉藥す是を先から斷れたとはおもわずをのれが方から斷たとへに語り醫者同士の義並んで居ながら隣の醫者の殺した事ハ觸歩行我ころした事ハおくびにも出さず隣の醫者また是顯す職敵にて互ひに恥の搔くらをするも元己が心邪なるがゆへ也醫書に曰醫は仁術也故に後醫ハ先醫を嘲り先醫は後醫を恨事勿れと有る然るに人を誅て先百に一ッの我手柄は神農の再來のよふに人にかわつて諸人を欺く傳へ聞く扁鵲が曰病の根を斷んと欲セば其人を燒殺すべしといへり中〳〵汝ごときの匕先にてやまひを治すべきや盲醫者の分として假初ならぬ人の一命を預て是を殺して藥禮を取らんより追剝と成て人を殺し金銀をむさぼつて渡世とセば神農の御名を穢ざるゆへに其罪輕かるべし儒書に聚斂の臣有んより寧盜臣有れとも見へたり醫者怒ていわく身の上知らずの陰陽師とは汝が事成べし何の學才もなくして纔ー貳もんの錢を取て天地乾坤の事を斗り卜筮は人の迷ひをはらさん爲なるに

人まどわし嘘八百の出ほふだひ是を錢を出て占て貰ふたわけあげてかぞへかたし中にハ山伏貧乏な神職など馴やつてあの神道者に加持祈禱を賴めと家職は置て山事に耽り金銀をむさぼるはいかんときめ居れハ座敷の角より古き裏附上下の皺をのし〳〵立出るは神職也いかに醫師汝卜筮を笑ひ　剰　神道を一ッ穴の狐にて山に懸り人を欺き金銀をもふくるとはいかに夫日本は神國也神は正直を元とす哥にも心だに實の道に叶ひなば祈らずとも神や守らんと有り人を欺ひてハ三文の初尾もとらす神ハ非禮を請給わず汝等が賤きすろに引競べ恐れある神職を嘲り冥利しらすなんじらが最初よりあらそふ儒醫佛亦は易の卜筮是皆漢と天竺より渡りたるもの也汝等釋迦神農の敎を商て鼻の下を養ふも悉く太神の御影なり其神の祭りもなく惡摩を退んが爲の加持祈禱を物取りとはいかに角いふハ我ならず正直正路の我が頭に太神宿らせ給ふと知らざるやと油汗をたらしてぞきめたりけるこなたの襖の陰より容顏美麗の女郎出ル其粧ひ素人とも見へず又中三にも非らず貳朱位の女郎しとやかに座して神職に向て曰久しふおめにかゝりいセんがおかわりなんす事もおぜいセんかへといわれて神職久方のごげんとやらいつてぢやらける女郎又いわくぬしやァセうじきだといゝなんすがわつちにやァ能く嘘をつきなんしたね日外數刋をしてくんなんセうといゝなんしたがなぜしてくんなんセんへ其後はみの返事もしなんセんがあ

れでも正直かへェ、すかねへといへば神職答へて曰是嘘をつくにあらず耳にもろ〳〵の無心を聞て心にもろ〳〵の無心をきかずといへば儒者是を聞て笑て曰こぢつけの答へ腹筋を寄る汝頭に太神宿らせ給ふとの高慢己が鼻の高間ヶ原より□□□□□□□□彼の逆鉾を以て□□□うなばらを探るとは勿躰なし漢土天竺より渡る儒佛醫の三ッをさみすといへとも此三道ハ今日本の寶器也一ッとして捨かたし神職の曰天下を治むるに何ぞ儒を用ん神武天皇より仁王十六代應神天王の御宇迄儒書渡らずといへ共天下既に治る聖人を去る事遠からずといへ共政事乱る事有り禹王の後十七主にして桀王出て政事を亂し成湯の後三十主にして紂王出て政事を亂す周の代三十七代治りたるに似たれ共覇王こも〳〵おこつて威を爭ふ孔子出たれ共用る者なく終に六國の大亂有り然ば聖賢の書も役にたゝず醫道と雖漢土より醫術わたらざる以前日本の人短命にも非ず武内大臣は仁王十二代景行天王より同十六代仁德天王まで六代の内政事を預り三百十六歳にして薨ず爰を以て見れば醫術もいらず佛道も元より死ば佛と人はいふ也法事も供養もいつた事に非らず一休の哥にワがからだやくな埋るな野に捨ろ痩たる犬の腹を肥せよとあれば儒醫佛の三ッなくてもいさゝか事のかける事なし儒者のいわくかゝる無益の寺に何とて世ゝの將軍寺領を給り無益な醫者に祿を給り儒道を用ひ給ふ事はいかん似田山是を聞ひて曰いら

ねへものにむゑきな金を遣て置のが日本の見得だ女郎買に行のに油虫を連たり稽者を呼だりするよふなものをかみやげひしやがねへとつて女郎買が出來ねへといふ割でもねへが有ても邪魔にもならねへ大通先生何とわつちがいふ理窟は通ふな所しやァねへかへ大通先生笑て曰汝も通の氣で居るか答て曰ァィおそらく金を遣わねへで女郎に能おもわれ穴のあなまで知て居るものを外に通があらふとも思ひやセん先生が曰汝ごときの麁通人世にげぢ〳〵のごとく徘徊するといへ共みな似田山にして女郎買に非らず何が故に客となり女郎となる其元も知らずして女郎にかわれ女郎を引抑女郎は客に金銀を貰て新造衛女に仕着をなす客は無益の金銀をつかひ捨て壽命を延る揚るも引も入た事に非らす穴を知るを通と心得下卑をいふを栖落と覺て大平の卷物を並べる大通は穴を知ておどかす似田山はしらぬ穴を知た顏然共盲千人の世の中なれば小紋仕立の長羽織四文錢で懷をふくらし袋に這入たやうなる小袖を着すれバ夫も通人是も通人成程形は似たるといへども人參と干大根のことし病人に大釜て煎て呑セても鄲に耳こすり何のへんてつもなしごまどふらんの麁通人は四六の女郎を買て鼻の落るを通ふが鼻に顯たとのうぬぼれ蓼喰ふ虫もすき〳〵とはいふながら親よりさづけし女房を飽はて生根もしらぬうんとりと千歳のかたらゐをなして父母の恩を忘るそこに御座る儒者殿もこの似田山にひとし日本に生ながら

我國を嘲て夢にも見ぬ毛唐人の國を稱し君子國に生れたる忝事を忘れ口には仁義禮智信の五常を說といへ共こゝろに一ッも行なわず先仁の事ハ論ずるに恐れあり義といへば張肘にしてしやちこばる事と心得禮は二季に弟子の方より取る謝禮を宛に酒食を奢り智は骨折ずにして金をもふける事とこゝろへ信は嘘八百を並べ眞なものは面斗り佞奸色能專らとして身きたなくすれハ聖人の草履取りとまがふかと心得汙穢き着物着て貴人の前て不禮といふ事を知らずまたしも通人の成そこなひめらは我あしきを表に顯す故其罪輕るし儒者ハ口に善の說ながら其道を行なハさるハおゝむの如し夫ども馬鹿なければ利口なし天は東南に盈て西北に不足有り爰を以て世界に餘れる不足有り小の月のたらざるハ閏月のあまれるを以て年をあやまたず足らざるを笑ふ事なかれ鯨も肴白魚もさかなと大目に見て向後何もあらそふ事を止めて似田山は大通となり坊主は釋迦と云れ儒者ハ孔子かとおもわれ醫者は神農と疑れ占者は淸明が樣に成給へ神佛儒醫の四道皆善を善として惡をにくみ理に二ッなき事を辨へて人を誹らす侮らす水魚の交りをなし給へと語と見れば夢覺て元の唐机にかしこまる

無陀もの語大尾

市谷田町三丁目
若劦屋藤兵衛

大槻正二
高木好次
山本鍊藏
渡邊幸
秋元千重子
吉田折子

校

昭和五年十月三十日印刷
昭和五年十一月一日發行

洒落本大系第四卷

非賣品

著作權所有

編纂者　高木好次

編纂者　山本練藏

編纂者　渡邊幸

發行者　林平次郎
東京市日本橋區吳服橋二丁目五番地

印刷者　本間十三郎
東京市牛込區辨天町一五七番地

發行所
東京日本橋區吳服橋
振替東京二二三七一
六合館

印刷所　清揚社

京傳筆

ゆめみしは花の
さくらに深山めくらし
一ふれなと
是人

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02995 1670